

ウルトラマンX
くしよん

これ

ベンジャー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新世代ヒーローズクロスシリーズ第二弾。

深海棲艦、突如として出現した人類の敵。

しかし今では深海棲艦のその殆どが殲滅され、残りは僅か。

だが、そんな時深海棲艦に代わる新たな敵……「ウルトラフレア」によって蘇った「怪獣たち」が出現した。

そして艦娘たちと共に戦う「光の巨人」も……。

艦これとウルトラマンXのクロスオーバーで戦姫絶唱シンフォギアGingaの後継的作品です。

また、軍とかそういうのには自分は詳しくないのでおかしなところもあるかもしれ
ません。

簡単無料ホームページとpixivにも投稿しています。

若干のキャラ崩壊も含みます。

目次

第1部

| | |
|--------------------|-----|
| 第1話 『未知の超人』 | 1 |
| 第2話 『恐れを乗り越える者』 | 39 |
| 第3話 『差し延べるための手』 | 92 |
| 第3・5話 『番外編』 | 160 |
| 第4話 『無力な自分』 | 172 |
| 第5話 『戦姫と銀河』 | 198 |
| 第6話 『星人&艦娘による物件探し』 | 253 |
| 第7話 『父が起こす聖夜』 | 293 |

| | |
|-----------|-----|
| 第8話 『弄ぶ命』 | 357 |
|-----------|-----|

| | |
|-----------------|--|
| 第9話 『響—デユナミスト—』 | |
|-----------------|--|

400

| | |
|------------------|--|
| 第10話 『絶望—デイスペア—』 | |
|------------------|--|

438

| | |
|-------------------|--|
| 第11話 『信頼—ヴェールヌイ—』 | |
|-------------------|--|

478

| | |
|-----------|-----|
| 第12話 『悪夢』 | 542 |
|-----------|-----|

| | |
|----------------|-----|
| 第13話 『エックス、消滅』 | 586 |
|----------------|-----|

| | |
|-------------|-----|
| 第14話 『新たな力』 | 620 |
|-------------|-----|

第2部

| | |
|-----------------|-----|
| 第15話 『人間怪獣侵略作戦』 | 671 |
|-----------------|-----|

第16話 『艦娘、遭難!? 前編』

719

第17話 『艦娘、遭難!? 後編』

759

第18話 『宇宙からの監視者』

811

第19話 『虚無』 ————— 849

最終話 『未来へのユナイト』 ————— 888

劇場版

パート1 『地獄の復活』 ————— 934

パート2 『蘇れ! ウルトラマン』

987

パート3 『夜の空、繋がる光』

第1部

第1話 『未知の超人』

「深海棲艦」……突如として深海より現れた謎の存在。

その正体は謎に包まれており、様々な説があるがその正体は全くの不明である。

分かることと言えば深海棲艦は人類に敵対する意思を持っていること、また深海棲艦には通常兵器が一切通用しないということ。

そして……深海棲艦を唯一、倒せるのは「軍艦」の力を持ち、この世界に生み出された少女たち……「艦娘」だけである。

しかしこれから語られるのは艦娘と深海棲艦の争いの物語ではない。

これは地球に突如として出現した光の巨人と……艦娘が共に地球に迫り来る幾つもの脅威に立ち向かう物語である……。

*

宇宙……太陽系にて。

そこでは赤い発光体と黒い発光体が激しいぶつかり合いを繰り返しており、太陽の近くにまでくると赤い発光体が勢いをつけて黒い発光体に突撃。

突撃を受けた黒い発光体はそのまま太陽の中へと放り込まれ、太陽が突然爆発したのだ。

この爆発で起こった炎は放っておけば赤い発光体の後ろにある地球にも降り注いでしまい、地球は大惨事となってしまいうだろう。

すると赤い発光体は太陽で起こった爆発の炎を地球に届かせまいとまるで地球を庇うように炎をどうにか受け止めようとしたのだ。

赤い発光体はどうか炎を食い止めることに成功したのだが……赤い発光体は徐々に光の粒子となって消滅してしまい、さらには……。

発光体の中から現れた赤と銀色の巨人がその炎に巻き込まれ、光の粒子となって消滅してしまうのだった。

『ユナイト……』

「ユナイト」……巨人は消滅する瞬間、そんなことを呟いていた。

また、その光の粒子は……地球へと向かって降り注ぐようにどこかへと消えて行き、これが後に「ウルトラフレア」と呼ばれ、世界中に散らばっていた怪獣のソフビ人形の

ような姿をした謎のオーパーツ、「スパークドールズ」が実体化し、「怪獣」と呼ばれる巨大な生物達が出現し始めた事件の始まりでもあった。

*

太陽の爆発が起こり5年後……艦娘達の母港本拠地にして、対深海棲艦の最前線でもある場所……「鎮守府」

最近では深海棲艦の数はかなり減って来ており、深海棲艦の全滅の日もそう遠くはなかった。

しかし、ここの提督である青年「西崎 夜空（にしぎき よぞら）」はそのことに関してどうも浮かない顔をしていた。

「どうしたんだい提督？ 浮かない顔して？」

そう問いかけてきたのは黒いセーラー服を着たセミロングの黒髪を後ろで一つ三つ編みにし、先っぽを赤いリボンで括った少女……夜空の秘書艦でもある「白露型駆逐艦 2番艦 時雨 改二」である。

「ああ、いや、最近出撃が少ないなって思ってたな。元々、この辺りは敵さんが少ないから他の鎮守府と比べると出撃数はかなり少ないが……最近はもっと少ないなって」

「まあ、深海棲艦ももう残り少ないみたいだからね。元から出撃が少ないこの辺りの海域にはもう深海棲艦はいないのかもしれないね」

「最も出撃が少ない上に遠征や護衛任務を主にやってたせいでウチは駆逐艦しか所持できなかつたがな」

夜空の言う通り、実はこの鎮守府……敵と戦うよりも護衛任務や遠征任務などを主に受ける場所だった為、上からの命令もありコスト削減ということでの鎮守府は駆逐艦の所持しか許して貰えなかつたのである。

おかげで強い敵が出て来た時は本当に焦ったものではあるが……。

「まあ、確かに苦しい時もあつたけど……それでも誰一人欠けることなく今までやって来れたのは提督の指揮のおかげだよ？」

時雨は笑顔でそう言うのと夜空は少し照れ臭そうに顔を窓の方へと向ける。

「照れるからやめろ」

照れ臭そうに喋る夜空に時雨はクスクスと笑顔を浮かべるが、話を戻し、なぜ先ほど夜空は浮かかない顔をしていたのかと問いかけた。

「ああ、さつき……時雨も言ったように敵さんは全滅しかけてる。だけど、俺は最近思うんだよ。あいつ等と分かり合えなかつたのかって」

「分かり合う？」

「深海棲艦は艦娘とも非常によく似た存在だ。一部の説では昔沈んだ艦、もしくはは艦娘の成れの果てだつて聞いている。そう考えると……あいつ等とも分かり合えたんじゃないかなつて。勿論、こんな考えが甘いのは分かつてる。でも実現ができるのなら、実現したい理想だと思うだろ？」

時雨は真面目に黙り込んで静かに夜空の話を聞いていた。
すると時雨は夜空に微笑みを向ける。

「提督は優しいんだね」

「そんなことはない」

「そんな謙虚することないのに」

「お前にも同じこと言つてやる」

そんな風に軽口を言い合う夜空と時雨、すると時雨は偶然執務室の机の上に置いてあつた怪獣のソフビ人形の存在に気がついた。

それを見た時、時雨は世界中で発見されているという謎のオーパーツ、スパークドールズであることにすぐに気付く、なぜ夜空がそれを持っているのか首を傾げた。

すると時雨の視線に夜空は気付く、夜空はそのスパークドールズを手にとって時雨にそれを見せる。

「そう言えば、時雨にまともに見せるのは初めてか。こいつの名前は『古代怪獣 ゴモ

「ラ」。俺の、まあ友達……かな？」

「友達？」

「ああ」

なんでも夜空が言うには今までここで働く一人の研究員に研究のため長らくずっと預けていたらしいのだが一通り研究が済んだため返ってきてくれたのだという。

「そう言えば、怪獣の出現も最近はないよね」

「怪獣の出現率は低いからな。去年なんて一体も出現しなかったし」

5年前、太陽の爆発「ウルトラフレア」により、スパークドールズは「宇宙怪獣ベムラー」を始めとして怪獣に実体化し、深海棲艦すら超える脅威となった。

と言っても怪獣の出現率は極めて低く、艦娘や自衛隊……さらには地球人に友好的な一部の「宇宙人」が協力し、彼等の活躍により今まで出現した怪獣はなんとか倒してきていたのだ。

「ゴモラは俺の父さんが残して行ってくれたものなんだよ……」

「残して行っちゃって、どういうこと？ まさか提督のお父さんは……」

「いや、分からない。5年前、ウルトラフレアが起こった時、俺の父さんはある研究所に残っていた母さんを助けるために俺を外に研究所に入っちゃったんだ。でもその直後、父さんと母さんは研究所ごと突然消えた」

「消えた……?」

夜空は無言で頷き、ゴモラをじつと見つめる。

「建物と一緒に、粒子みたいになって……空に消えたんだ……」

「……」

時雨はこれは聞かない方が良かったかなと不安になり、気まずそうにするが……そんな時雨の様子に気づいたのか夜空は時雨の頭部に軽めのチョップを叩き込んだ。

「話を振ったのは俺なんだし、お前が気にすることなんてないよ。父さんや母さんも絶対生きてるって信じてるし」

そう言いながら笑顔を見せる夜空に対し、時雨も自然と彼に微笑み返したのだった。

*

一方、鎮守府の隅っこにある1つの建物、研究室としても使っているその場所では……。

「やあ、プロフェッサー。私が頼んでいた物は完成してるかな?」

「おお、響ちゃん待っていたよ！ 勿論、君が頼んでいたものはちゃんと完成しているともー！」

そこにいたのはこの鎮守府の戦力不足を補う為にここで働くことになったという「戦国 リョーガ」という科学者であり、彼の元にやってきたのは「暁型2番艦 駆逐艦 響」と響と同じく「暁型1番艦 駆逐艦 暁」である。

「響、リョーガさんに一体なに作って貰ったの?」

「ああ、リョーガさんに頼んで新装備の開発をね」

それを聞いて暁は「えっ? 開発なら妖精さんに頼めば作ってくれるんじゃないの……?」と首を傾げたが……なんでも今回できた新装備は妖精さんでは恐らく作れないだろうということから彼に開発を頼んだというのだ。

「見て驚くといいよ、姉さん。 その新装備というのが……これだ!!」

響は自信満々に艦娘が戦闘態勢に入る為の装備……「艤装」と呼ばれるものを瞬時に装着し、さらにリョーガから投げ渡された新装備を響は早速装備する。

「どうだい姉さん? 似合ってる?」

「いや……似合ってるって言うか……」

響が装備した新装備……それは……。

「どう見ても鍋じゃないのそれえ!」

そう、響が装着した新装備、それはどう見ても「鍋」であり響は鍋を頭に被ってさらには鍋の蓋を右手に持ち、キリツとした表情を暁に見せていた。

「姉さん、鍋の力を侮っちゃ行けないよ。鍋の蓋は時に盾となり、投げれば武器にもなる。頭に被ってる鍋も頭を守る上に予備にもなるし」

「言ってる意味が分かんないんだけど!? つていうか鍋が武器になる訳ないでしょ!」

「いや、それが実際なるんだよこれが。材料としてボーキサイトとアダマンチウ……特殊な金属の隕石ぶち込んだからね」

それを聞いた暁は「はあ!」と驚きの声をあげる。

「今アダマン○ウムつて言いかけた!? つていうかボーキサイト使ったつて2人ともちゃんと司令官に許可取ったの!」

「無論……取ってない!!」

「なんでアンタそんな誇らしげなの!? つていうかアダマン○ウムどこから持ってきたのよ!」

「そもそもボーキサイトなんて若干余り気味だったんだ。ちよつとくらい使ってもバレやしないさ!」

リョーガが余裕満々でそんな態度を取っていると彼の背後から「ほう?」という声が聞こえ、その声を聞いた瞬間リョーガは「ビクウ!」と震えダラダラと冷や汗を流し始

める。

リヨーガは恐る恐る後ろを振り返るとそこには……。

「提督に黙って勝手にボーキサイトを使うとは……」

「お前、ちゃんと覚悟はできているんだろうな?」

そこにはこの鎮守府の憲兵をしている青年「昌義(まさよし) タカト」と「睦月型9番艦 駆逐艦 菊月」が鬼の形相でリヨーガを睨みつけており、リヨーガはタカトと菊月の姿を見るや否や全力疾走で逃げ出した。

「逃がすかあ!!」

が……すぐにタカトと菊月に取っ捕まり、タカトがリヨーガを羽交い締めにし、そこにすかさず菊月のドロップキックがリヨーガの腹部に叩き込まれたのだ。

「ぐばああああ!!」

「貴様あ!! 毎度毎度資材を下らん研究に使いおつてえ!!」

「ちゃんと研究しているのなら俺は文句は言わん!! だが、お前の場合いらぬ物を作り過ぎてるのが問題なんだ!!」

「この前のなんて酷かったぞ!! なんだあの『スカート捲りマシーン』は?」

「いやちよつと待って! あれは偶然そうなっただけの失敗作な上にあれを動かしたのは私ではなっ!」

しかし、リヨーガの言い分を菊月もタカトもさらさら聞く気はなく、2人は「問答無用!!」とリヨーガに制裁を加えるのだった。

「えっ? このあいだのスカート捲りマシーンってリヨーガさんがコントロールしてたんじゃないの? じゃあ誰が……」

「姉さん、この鎮守府にあんなことする人って言ったらあの人しかないんじゃないかな?」

暁と響がそんな会話をしていると丁度背後から誰かが現れ、その人物は響と暁の姿を確認すると2人に向かって勢い良く突撃、そのことに丁度暁が気付き、彼女は「きゃあ!?!」と悲鳴をあげるが……。

「ふっおおっ?」

響が投げた鍋の蓋がその人物に直撃し、その人物は地面へと倒れこみ、鍋の蓋は響の手元に戻ってきて彼女はそれを見事にキヤッチ。

ちなみに響は一切後ろを振り向いてすらいらないという抜群のコントロール力を見せた。

「ひ、響! 今の凄かったわね! ま、まあ別に助けて貰わなくてもレディの私なら一人でなんとかできたけど……」

「そうかい、それは余計なことをしたね」

「でも、響、今のなんかアレっぽかった！ あのものとかアメリカつていう……そう！
カーオール・アメリカみたい!!」

「姉さん、それ洒落にならない奴。 キャプオン・アメリカね」

暁は「ま、まあちよつと間違えちやっただけよ」と名前を間違えてしまったことに少し恥ずかしそうにそっぽを向く。

「でもちよつとカツコ良かったわ」

「これから私のことは『キャプテン・ヴェールヌイ』とでも呼んでくれ」

「いや呼ばないし。 そもそもアンタまだヴェールヌイじゃないし」

するとリョーガの制裁を完了したタカトと菊月が先ほどの人物の元へと向かい、タカトは氣を失っている先ほどの人物の頬を叩いてなんとか起き上がらせる。

「うーん？ あれ？ 私はなにを？」

「何時もの癖が出ただけだ。 撃沈感謝する、キャプテン・ヴェールヌイ」

「リョーガと違ってこいつは逃げ足が速いからな。 礼を言うぞ、キャプテン・ヴェールヌイ」

「いや2人ともキャプテン・ヴェールヌイって呼ぶの?! ノリ良いわね!」

菊月とタカトは先ほどの人物の両腕をガッチリと掴み上げてそのままどこかへと引きずって行き、タカトと菊月はその人物に引きずりながらガミガミと説教をするのだつ

た。

「全く、『海原副司令』、アンタはこの副指令……提督代理でもあるんだからちゃんと仕事しろ!!」

「仕事なら終わらせてますよ!! だから暁ちゃんと響ちゃんに抱きついてスキンシップを……」

「いきなり抱きつこうとするな。それよりこの前のスカート捲りマシン使ったの副司令だったのか? 同じ女のスカートの中など見てなにが楽しいんだか……」

「はっ? スカートの中身なんざどーでもいいんですよお! 私は単にスカート捲られて恥ずかしがる艦娘たちの顔がみたかっただけなんで!! 菊月ちゃんも可愛かったですよ、ごちそうさまです」

「よし、一発殴るかこいつ」と菊月は額に青筋を浮かび上がらせて握り拳を見せるがこちらの鎮守府の副司令……「海原(うみはら) 奈々(なな)」はするりと両腕の拘束を抜出して駆け出し、颯爽と彼女はタカトと菊月から逃げ出したのだ。

「幾ら菊月ちゃんでも殴られるのはちよつと勘弁ですね!!」

「おいコラ逃げるなあ!!」

とまあ、こんな感じで菊月と奈々の鬼ごっこが開始された訳だが……タカトは奈々の追跡は菊月に任せ、自分は提督の夜空にリョーガがまた資材を勝手に使ったことを報告

するため携帯端末「ジオデバイザー」を取り出し夜空に報告。

連絡を受けた夜空は即座にリョーガの元に訪れることになったのだが……。

「資材を使うのはいいんだけど、できれば報告してくれよりョーガさん」

とこんな感じで特に怒ることはなく、次からちゃんと資材を使う時はちゃんと報告してくれと頼むのだった。

「いやあ、すまないねえ。」

使う場合は色々と書類に書かないといけないから少し面倒

で」

「それでも勝手に使われるのは困るよ」

夜空と時雨に言われて「分かったよ……。」とリョーガは次からはちゃんと許可を取ると約束し、そんな3人の様子を見ていたタカトは「もう少し怒ってくれても良かったんだぞ2人とも？」と言うが……。

「いや、俺も時雨もリョーガさんの発明品って面白いものが多いからあんまり怒れなくて」

「彼の性格のおかげでここの鎮守府結構賑やかになってる訳だしね？」

それを聞いて「全く……。」と頭を抱えるが、提督と秘書艦である夜空と時雨がそういうのであれば今回はこれで今回の件は勘弁してやろうとタカトは思うのだった。

「それよりもリョーガさん、頼んでおいた『サイバー怪獣計画』の方はどうなってますか

？」

「サイバー怪獣計画」、それは時折出現する怪獣、又は深海棲艦に対抗するため……スパークドールズを解析しデータ化することで人工怪獣……「サイバー怪獣」を生み出すプロジェクト。

ちなみにこの計画の発案者はリョーガであり、軍の研究施設や一部の鎮守府で様々な科学者がサイバー怪獣の実験を行っているのだが……未だにサイバー怪獣の実体化は成功した試しはない。

そしてこの鎮守府もまたサイバー怪獣計画が進められており、夜空が持っていたゴモラのスパークドールズもこの研究のためにリョーガに預けていたのだ。

「まあ、やはりサイバー怪獣の実体化は非常に難しいね。まっ、私的にはその方がかなり燃える訳だが」

「そうか……なるべく、早く完成してくれればいいんだけど……」

深海棲艦はもう殆ど生き残ってはいない、しかし……数が減っていると言っても強い敵が生き残っていない訳ではないのだ。

さらに、いずれは自分達が……いや、自分の部下の艦娘たちが怪獣と戦わなければいけない日が来るかもしれない、そう考えると夜空は不安で不安で仕方がなかった。

そんな夜空の様子に気づいたのか、時雨がポンつと夜空の肩に手を乗せる。

「大丈夫だよ、提督。今までだってずっと僕たちは生き残って来れたんだ。だから、例え怪獣と戦うことになったとしても、絶対に誰も欠けずにここに帰ってくる」

「時雨……」

「うん、だから僕たちを信じて？ 僕たちも提督を信じてるからさ」

夜空は一度安堵するようにため息を吐くと時雨に「ありがとう」とお礼を言い、時雨に対して「どう致しまして」と頷いたのだった。

*

とある海域にて……そこでは6人の艦娘……「暁型3番艦 駆逐艦 雷」と「暁型4番艦 駆逐艦 電」、「睦月型1番艦 駆逐艦 睦月」、「朝潮型1番艦 駆逐艦 朝潮」と「朝潮型1番艦 駆逐艦 荒潮」、「白露型4番艦 駆逐艦 夕立改二」がある調査のため海の上を走っていた。

ちなみに彼女達が夜空のところの鎮守府の所属である。

「さて、この辺りですね」

旗艦である朝潮が全員に一時停止するように指示し、他のメンバーは言われた通りその場に立ち止まる。

「それじゃ任務の確認です。提督からのお話ではこの辺りを通る船などが突然爆発するなどという事件が立て続けに起こっています。なぜ爆発などが起こるのか原因は不明、調査によると船は何者かの攻撃を受けた可能性があります」

「深海棲艦の仕業でしょうか……？」

「分かりませんが生存者の話によれば深海棲艦ではなく、巨大な『角』のようなものを見たという話がありますね」

電の疑問に朝潮がそう答えるが……「巨大な角のようなもの」だけでは相手が何者なのかがか全く分からない。

「まあ、なんでもいっぽい！ 深海棲艦が相手なら久しぶりに大暴れできるっぽい！」
「そうね、最近身体が鈍って仕方がないからこころいらいで艤装がぶつ壊れるくらいまで暴れたいわね」

うずうずした様子の夕立と微笑んでいるが言ってることは物騒な荒潮だが、朝潮が「コラー」と夕立と荒潮を怒鳴る。

「提督はもしも敵がいた場合、一時撤退するように命令されています！　今回は調査が主な任務なんですから！」

実はこの夕立、夜空の鎮守府に所属する艦娘の中でも特に戦闘狂であり、戦闘力もあの鎮守府の艦娘の中でも特に高いのである。

そのため雷は「どうしても戦闘になつたら頼りにするわね！」なんてことを言っていたり。

「んっ……っ？」

すると睦月がなにかを感じたのか、彼女は自分の足下をじつと見つめる。

「どうかしたの睦月？」

「なんか……熱くなあい？」

「えっ……っ？」

朝潮たちは睦月の同じように自分の足下を見てみるとだんだん海から湯気が上がり、やがて「ぶくぶく」と泡を立て始める。

「なんで海の中で湯気が出てるにゃー？」

「温泉でも出たんじゃなくしら？」

「そんな訳ないでしょ!?　ねえ朝潮!!　すぐにここから離れた方がいいじゃないかしら!?」

「そうですね、嫌な予感がします!」

朝潮は雷たちを引き連れてその場から一度離れようと海の上を走り出し……やがて泡が立っていない場所まで来ると先程自分達がいた場所の辺りを振り返ってジツと見つめる。

「……からでも確認できますね、まだ泡が……」

すると次の瞬間、海の中から巨大な火球のようなものが飛び出し、やがてそれは重力に従って下へと落下、少し巨大な波を巻き起こした。

「い、今のにやしい!」

「睦月ちゃんもしかして『今のなに?』って言いたいのですか?」

「もしかして今のあれが船にぶつかって……確かに今までの船には炎上した形跡がありましたね。しかも丸焦げ。ほぼあれが原因で間違いないでしょう」

「でもあれは一体なんなのですか?」と電が不安そうな表情を見せながら朝潮に問いかけるが、当然、現状ではあれが何なのか全く分からない。

兎に角、朝潮は一度夜空に報告するため通信を行おうとしたが……その時。

「朝潮ちゃん見るのです!!」

電の声を聞いて朝潮が電の指差し方向を見ると先ほどとは比べ物にならないくらい泡が吹き出し、そして……海から恐竜にも似た巨大怪獣「熔鉄怪獣 デマーガ」が出

*

鎮守府、デマーガの出現の報告を受けた夜空はすぐに艦娘たちをかき集め、外にある広場へと全員を集め、怪獣出現の報告を艦娘達に夜空は伝える。

「先ほど、朝潮達から怪獣が出現、この鎮守府の近くにある街に向かって来ているという報告を受けた」

それを聞いた艦娘達は怪獣が出現したという言葉聞いてざわめき始める。

「最も確実ではないがこの街に来る可能性は高い。そこでお前達には2チームに分かれて貰い民間人を避難させるチーム、怪獣の足止めを行うチームに分ける。避難を完了させたら怪獣の足止めをしているチームと合流しろ。ただし全員無理はするな、不味いと思った時はすぐに撤退しろ！」

「つ、遂に怪獣が……」

不安そうな表情を浮かべる暁、そんな暁の様子に気づいた響が彼女を後ろから抱きしめる。

「きゃっ！ 響……っ？」

「安心しなよ、姉さん。　姉さんも、雷も、電も……鎮守府のみんなも私がまとめて守つてあげるからさ」

「で、でも……ここに居るのはみんな駆逐艦で艦娘の中でも特に弱……」

「知ったことじゃないね、そんなこと。　守るものは守る。　襲いかかってくるものがないんであるうが。　私は自分の姉妹を、仲間を守り抜くよ必ず。　だから……安心して？」

そんな風に自信満々に言い切る響に、暁は呆れたようにため息を吐き出す。

「ありがとう響。　全く、その自信はどこから来るのかしら……」

「この鍋からさ」

「なんか台無し!？」

という風に親指で頭で被ってる鍋を指差し「ドヤア!」という効果音が聞こえてきそうなくらいにドヤ顔を決める響だった。

尚、朝潮たちは戻ってきたところで夜空は艦娘たちのチーム分けを行い民間人を避難させるチームは睦月、如月、文月、皐月、電、雷、村雨となり、怪獣の足止めを行うチームは朝潮、荒潮、満潮、時雨、夕立、暁、響、菊月となった。

「お前から怪獣の相手を志願した訳だが……暁、大丈夫か?　さつき結構怖がつてたろ」
「フン!　怪獣なんて怖くないわよ!　それに響が……響が私たちを絶対を守るって言

うのなら私が響を守ってあげるんだから！」

「おっ？　なんか今の暁レディっぽかったぞ？」

「なっ、私は何時だってレディよ！」

ぶんすかと怒る暁の頭を夜空は撫でるのだが……暁は「撫でるなー！」と頬を膨らませて夜空の腕を振り払いそそくさと「出撃の準備してくるわ！」と言いながら逃げるようにその場を去るのだった。

「さて、それじゃ俺も出撃の用意するかな……」

「えっ？　提督、出撃って……」

「時雨、今回は何時もの相手と違うんだ。俺も現場に行つて怪獣の動きを見てお前達

に指示を送る必要がある」

「で、でも危険だよそんなの危険だよ提督!!」

「危険なのはお前達も一緒だ！　いや、俺よりも危険な場所に……ずっとそうだ……俺は、安全なところから何時も指示しか出してやれない。できることなら、俺もお前達と戦いたいのに……」

夜空は顔を俯かせてその拳を強く握りしめ、そんな夜空の手をそつと時雨は握りしめる。

「その気持ちだけで十分だよ、提督が僕たちのことを凄く大切にしてくれて……それだ

けで僕たちは戦い抜ける」

夜空は時雨の方を見ると彼女は夜空を安心させるように笑顔を自分へと向けていてくれた。

「よっし、艦隊……『X i o』!! 出撃する!!」

*

数十分後……怪獣、デマーガが予想した通りの場所に上陸、デマーガが街に上陸した直後……攻撃隊である朝潮たちはすぐさま戦闘態勢へと入る。

「あらく、やつぱり大きいわねえ」

「フン、あんなのデカいのよ!!」

荒潮とそんな会話を行うのは「朝潮型3番艦 駆逐艦 満潮」である。

「総員!! 怪獣……デマーガに攻撃開始!!」

「なるべく離れた位置で奴の足元、又は目を狙え!!」

時雨と菊月の指示に従い、艦娘達は装着された主砲を構えて一斉に砲弾をデマーガの足下と目を主に狙って攻撃を開始。

満潮の言うとおり、相手が巨大なため撃ち漏らしも特になくデマーガはただただ相手

の攻撃を受けるだけだったのだが……デマーガは幾ら攻撃を受けても平然としており、デマーガは立ち止まることなく真つすぐと進行する。

「奴め、私たちを無視するか!」

菊月は全く自分達のことなど意に返さないデマーガに少し苛立ったが……そのときデマーガの身体の所々が赤く発光をし始め、デマーガの身体から幾つもの火炎弾が飛び出してきたのだ。

火炎弾は街のあちこちへと降り注いでビルなどを破壊し、火炎弾は朝潮達の元に降り注いできたのだ。

『きゃあああ!!?!』

『時雨! みんな……大丈夫か!』

時雨たちのいる場所から離れたビルの屋上でデマーガの様子を伺っていた夜空が時雨たちの悲鳴を聞いて慌てて通信を入れ、夜空の通信に対し時雨は「なんとか全員無事だよ」という報告を行う。

『そうか、良かった。ジオバイザーでデマーガのことを解析したが奴の弱点はあの頭部にある黄色い角だ! そこを狙え!!』

「了解!! みんな! 聞いたね? デマーガの角を狙うよ!!」

時雨の言葉に全員が頷き、主砲を構えて一斉にデマーガの角に目掛けて攻撃を開始、

しかし角に攻撃を受けてもデマーガを止めることは出来ず、むしろ逆に弱点を攻撃されたためかデマーガは艦娘たちの方へと振り返り、彼女達を睨みつける。

「グルルルルル……」

「まずい……みんな逃げて!!」

デマーガは時雨たちに口から赤色の熔鉄光線を発射、直撃こそ受けなかったものの爆発に巻き込まれて何名かは吹き飛ばされてしまう。

「くっ……なんて破壊力だ……」

「これが……怪獣……」

先ほどの攻撃で背中を強く打ち付けた菊月と朝潮、2人は背中を抑えながらもなんとか立ち上がるが……そこに時雨が駆けつける。

「2人とも大丈夫!？」

「ああ、まだやれるさ」

「ええ……っつて時雨!?! あなた腕……!」

朝潮は時雨の右腕から大量の血が流れていることに気付き、朝潮はすぐに夜空に連絡を入れて時雨を撤退させようとするが……時雨が慌ててそれを止める。

「僕は平気だよ、まだ戦える! だから提督に連絡しないで……っう……」

「なにを言っているそんな傷で! 痛がつてるじゃないか! これ以上戦うのは危険だ

！」

菊月と朝潮は時雨に構わず夜空に連絡を入れ、連絡を受けた夜空はすぐに時雨に撤退するように命令し、時雨は渋々撤退することになったのだった。

「さて……どうする朝潮？」

「兎に角、あの角に集中攻撃しましょう！」

一方……夜空と……副司令である奈々がいるビルの上では彼はまだ応援がまだ来ないのかと焦り始めていた。

「クソ、応援はまだ来ないのか？」

「それなんですがね、司令官……どうやら現在世界各地で複数の怪獣たちが出現しているそうなんです」

「はあ!? なんだそれ!? どういうことだ!?!」

「その原因は不明ですが今現在確認されている怪獣はアボラス、バニラ、ペギラ、ペスター、マグラーといった怪獣たち……」

つまり、応援が来ないのは他の場所に現れた怪獣たちを相手にしているため、ここに来る余裕がないということである。

その時だ、耳のインカムから突然「うわああああ!!?!」という時雨の声が聞こえ、夜空は慌てて時雨に通信を行う。

「時雨！ おい時雨!!」 奈々、時雨を俺は迎えに行つてくる。 そのあいだ指揮を任せ
る!!」

「了解！ お気をつけて!!」

夜空は急いで時雨を探すためにその場を飛び出し……一方の時雨はというと……。

「いたた……くつ、ちよつとしくじつちやつたかな？」

崩れた建物の瓦礫の一部が時雨の足を挟み込んで彼女を動けなくしており、そんな彼女の元に1人の少女が駆け寄る。

実はこの少女……先ほど建物の崩壊に巻き込まれそうになったところを時雨に助け出されたのだ。

その際に時雨は足を挟んでしまい、今のこの現状に至るといふ訳である。

「お、お姉ちゃん大丈夫……?」

「うん、僕は大丈夫だよ。 それより君は早く逃げて!」

「で、でも……」

「心配しないで、僕は艦娘だからこれくらい平気さ」

時雨は少女の頭を優しく撫でた後、時雨はデマーガがこちらに向かつて来ていることに気づくとすぐに強めの口調で「早く逃げて!!」と言い放ち、少女は言われた通りすぐにそこから逃げ出した。

時雨は突然夜空に止まってくれるように頼み、彼女は夜空の腕から降りるとなぜか来た道を足を引きずりながらも引き返し始める。

「おい時雨!?!」

夜空は慌てて時雨の後を追いかけてしようとするが……その時、持っていたジオデバイザーから突然振動音が鳴り、何事かと思いい夜空は慌ててジオデバイザーを取り出す。

『ユナイト……ユナイト……』

「はあ!?! つてそんなことより時雨!!」

夜空は時雨の名前を叫ぶが……その直後、時雨に向かってデマーガの光線が彼女に向かって放たれ……夜空は必死にその手を伸ばす。

「時雨ええええええええええええ!!!!」

「えっ……なっ!?!」

その瞬間、夜空の持っていたジオデバイザーの色が金色へと変化し、そこから強い光が放たれ、光は夜空の身体を包み込む。

そして時雨は……自分に迫り来る光線を見てギョツと目を瞑り、やがて爆発する音が自分の耳に入った。

だが、特になにかが自分に降り注いだような感覚はなく、彼女はそつとその目を開けると目に飛び込んで来たのは巨大な光だった。

やがて光が収まるとそこに立っていたのは巨人……赤と銀色の、メカニカルな外見をした1人の巨人だったのだ。

巨人……「ウルトラマンエックス」は立ち上がるとデマーガへと振り返る。

『夜空……君と私はユナイトした！心を1つに合わさ「デメえ!!」えっ?』

エックスの中にいる夜空は話しかけられた声には気づかず、時雨を攻撃してきたことに対してデマーガに怒りをぶつける。

「よくも時雨を!!」

『ちよっ、待つ……! 話を聞け……!』

しかし、夜空は全く話を聞かず、エックスはファイティングポーズを取りながらデマーガに向かって駆け出し、ジャンプして勢いをつけデマーガの顔面を殴りつける。

「光の……巨人……?」

時雨はエックスの姿を見てそう呟き、エックスの姿を見た他の艦娘たちは突如現れた巨人に戸惑い、朝潮や菊月に巨人も攻撃するべきかどうかを尋ねていた。

「怪獣と、戦ってる……」

「まだ敵なのか味方なのか分かりませんね……少し様子を見ましょう」

エックスはデマーガの腹部に蹴りを叩き込むがデマーガも負けじと頭突きをエックスの胸部に喰らわせ、怯んだところにデマーガは光線をエックスに撃ち込み、直撃を受

けたエックスはビルを巻き込んで地面へと倒れ込む。
『ウア!?』

デマーガはさらに追い打ちとばかりに光線をエックスに撃ち込もうとするがデマーガの頭が突然爆発、誰かがデマーガを攻撃したのだ。

「時雨……い、あいつ、無茶しやがって!」

それは時雨であり、先ほど取り外した艦装の主砲を両手に持って砲弾をデマーガに撃ち込んだのだ。

「朝潮、菊月、彼は味方だ。 僕を守ってくれたんだ!」

『確かなのか?』

「うん」

『分かった! 総員、あの巨人を援護しろ!!』

菊月の言葉に従い、艦娘たちは一斉にエックスを援護するため、デマーガに攻撃を繰り出し始める。

『デアッ!!』

立ち上がったエックスはデマーガに向かって腹部に蹴りを叩き込み、両肩を掴んだ後さらに膝蹴りを叩き込んだ。

しかしデマーガは暴れてエックスを振り払い、光線をエックスへと放ち、エックスは

両腕を交差してなんとかデマーガの光線を耐え切る。

だがその直後にデマーガの強烈な体当たりが繰り出されてエックスは吹き飛ばされ、倒れ込んでしまう。

『みんな聞こえますか？ 全員、怪獣の立っている地面を攻撃してください』

「はっ？ そんなところ攻撃したってあいつにダメージなんて……」

奈々からの突然の指示に暁が不満げに言うが……そんな暁に対し菊月が「兎に角言われた通りにしよう」と彼女に対して言ったため、暁は頷き、艦娘たちは奈々の指示通りデマーガが立っている地面に向かって砲弾を何発も撃ち込んで行く。

「グル……？」

デマーガも彼女達になにをやっているのか分からず首を傾げるが……その直後、地面が崩れてデマーガの膝から下が地面に埋まり、それによってデマーガはバランスを崩して倒れ込んでしまう。

実はデマーガが立っていた場所の下は地下のある空洞であり、そこにデマーガの体重と艦娘たちによる攻撃によって地面が崩れ、見事に地面に穴が開きデマーガがバランスを崩して倒れさせるといのが奈々の狙いだったのだ。

『今です!! 響、荒潮、夕立!!』

挿入歌「ウルトラマンX」

奈々の声に従い、響、夕立、荒潮がデマーガに向かって駆け出し、空高くジャンプして飛び立つ。

「さあ、レッツパーリー♪」

荒潮がそう言うと同時に夕立は両手と口に加えている魚雷を纏めて、荒潮は腕に装着された主砲で砲撃を、響は持っていた鍋の蓋をデマーガの角に目掛けて一斉に放つ。

「っほいいいいいいいい!!!」

「あああ!!!」

「ウラァー!!!」

夕立、荒潮の攻撃が角に直撃し、2人の攻撃によって角にヒビが入り、そこに響の放った鍋の蓋がヒビの入った角を切り裂いてデマーガの角が完全に破壊され、角を破壊されたデマーガは悲鳴をあげる。

「ギシャアアアアア!!!」

『オイ、なんだあの3人の掛け声……っっていうか鍋凄いな!』

「今だ!!」

『少しは会話してくれないか?!』

デマーガはなんとか崩れた穴から抜け出し、激情して響達に攻撃しようとするがエックスは駆け出してデマーガに掴み掛かり、膝蹴りを2発叩き込んだ後、デマーガの頭部

ザナディウム光線は見事デマーガに直撃し、デマーガは火花を散らしながら倒れ爆発を起こした。

エックスは怪獣を倒したことを確認するとエックスは空に向かって飛び立ち、空に消えて行くのだった。

*

「提督……どこに、いるの……？」

エックスが飛び去った後、時雨は自分の傷など顧みず必死に夜空の姿を探していた。

もし、彼にもしものことがあつたら……それは自分のせいなのかもしれない、自分があの時夜空の言葉を聞かなかつたから……。

「提督……」

今にも彼女は泣き出してしまいそうだったが……。

「呼んだ？」

「っ！ 提督!!」

後ろから聞こえてきた声に時雨は慌てて振り返るとそこには夜空の無事な姿があり、彼女は必死に駆け寄ろうとするが足の痛みでせいで転んでしまいそうになり、それを夜空が慌てて受け止める。

「はあ、またか」

「……ごめんね、提督……。無事でよかった」

「それは俺の台詞だよ。全く」

夜空は時雨を抱きかかえて歩き始めるが……抱きかかえられた時雨は「はい」と言っている物を夜空に渡した。

それは、夜空が「友達」だと言っていたゴモラのスパークドールズであり、時雨は先ほどこれを取りに行ったのだと夜空は気づいた。

「大事な友達なんですよ？ ダメじゃないか、ちゃんと持つてないと」

「……ごめん、あと……ありがとうな。時雨」

「うん」

それから時雨と夜空はエックスのことについて話すこととなり、時雨は「なんだったんだらうねあの巨人？」と夜空に話しかけると彼は「分からない」と答えるしかなかった。

「あの巨人のデータは一切なし、ただ分かるのはあの巨人は怪獣をスパークドールズに

する力を持ってららしい。さっきデマーガのスパークドールズを回収した。全く
未知の超人だよ。つまり、彼の名は……『ウルトラマンエックス』

第2話 『恐れを乗り越える者』

エックスの力を借りてどうにか倒した夜空たちは一度鎮守府へと戻り、夜空は大破、中破した艦娘たち以外の艦娘を今、他の怪獣たちの対処に当たっている場所に徴力ながらも応援に行かせるかどうかを考えていたのだが……。

「提督、それが先ほど新たな情報が入ったのですが……」

「んっ？ どうした？」

「他の場所に現れた怪獣たち、その怪獣たちと……新たに巨人、提督はウルトラマンと呼びましたね。そのウルトラマンが2人も現れました。エックスとの特徴など一致する部分も多いため、恐らくは彼の仲間かなにかかと」

奈々からそれを聞いて夜空は目を見開き、驚いた。

驚くのも当然だろう、なにせまさか、エックス以外にもウルトラマンがいるとは思わなかったからだ。

夜空はその新たに現れたという2人のウルトラマンについて詳しいことを話すように奈々に言い、奈々が言うにはそのウルトラマンはエックスと同じように怪獣と現在、戦闘を繰り広げており、自体は沈静化しつつあるとのことだった。

「見た目の特徴はエックスとウルトラマンと同じく赤と銀、身体所々には青いクリスタルのようなものがあるとか。もう1人は黒と赤のウルトラマンで身体所々に『V』というマークがあるそうです」

しかも既に報告にあつたペギラ、マグラーはそのウルトラマンと艦娘たちによつて倒されたらしく、現在は残りの怪獣たちと戦闘中とのことだった。

しかも状況はこちらが優勢とのことである。

「つまり、応援はいらないってことか……」

「そうなりますね」

それを聞いて夜空はこれ以上、まだその2人のウルトラマンが何者なのか分からないとはいえもう彼女達を出撃させる必要がないと思うと彼はホツと胸を撫で下ろすのだった。

夜空はそれを待機している艦娘たちに伝えると奈々に言い残して執務室を出て行くのだった。

執務室を出て行つた夜空は艦娘たちの元に行く前に人気のない場所へと向かい金色になつたジオデバイザー……「エクスデバイザー」を取り出すと彼はエクスデバイザー……の中にある「ウルトラマンエックス」へと話しかけたのだ。

「なあ、2人のウルトラマンってお前の知り合いか？」

『いや、クリスタルがついてるウルトラマンやVのマークのウルトラマンなんて知らないぞ?』

夜空は目を細めて「本当に知らないのか?」と尋ねるがやはりエックスは「分からない」としか答えなかった。

どうやら本当に分からないらしい。

だが、それ以上に気になるのはなぜ、自分がエックスと一体化してしまったのかということである。

あの時は時雨を殺そうとしたデマーガに怒って頭に血が上ってしまったこと、時雨を運んだりなどをしてエックスとまともに話すことができなかったので夜空は改めて、エックスがなぜ自分と一体化したのかを尋ねた。

『昔は自力で実態化できたんだが、実は5年前、君たちが言うウルトラフレア……あれに巻き込まれてしまい私はデータ生命体となってしまう肉体を失ってしまった。しかし、怪獣と戦う君たちを見つけてね。なんとか助けられないかと必死になった結果……こうなってしまうという訳だ。まあ、元から君の発する周波数に引き寄せられていたしね』

「ふむ……少し分かり辛いこともあるが、アンタのおかげで時雨を助けられたってことだな。ありがとう」

『お礼を言う必要なんてないさ。彼女を助けたのは君も同じなのだから』
エックスにそう言われて夜空は「そっか」と呟くのだった。

*

一方、別の場所では……「青色発泡怪獣 アボラス」と「赤色火焰怪獣 バニラ」を相手に、身体に青いクリスタルがある赤と銀の巨人「ウルトラマンギンガ」が2体の怪

獣を相手に戦っていた。

バナラは口から強力な火炎をギンガに放つがギンガは手を前方に出して変身時の銀河状のエフェクトに似たバリアを展開し「ギンガハイパーバリアー」で攻撃を防ぎ、そのまま押し返して炎はバナラとアボラスに直撃する。

『ショウラ!!』

ギンガはアボラスに向かって駆け出し、対するアボラスは口から泡状の溶解液を吐いてギンガを溶かそうとするがギンガはジャンプしてそれを回避し、アボラスの顔面に跳び蹴りを叩き込む。

蹴りを喰らったアボラスは蹴り飛ばされ、バナラは背後からギンガに掴み掛かるがギンガはすぐにバナラを振り払って回し蹴りを喰らわせた後、顔面を掴んでから強烈なチョップを頭部に叩き込んだ。

そしてギンガはアボラスの方へと振り返り、アボラスはギンガに殴り掛かろうと向かって来るがギンガはジャンプしてアボラスの頭上を飛び越え、背後からアボラスに掴み掛かるとギンガはアボラスを持ち上げてバナラに向けて投げつける。

互いに激突しあつたアボラスとバナラは地面へと倒れ込み、2体はそのまま仲間割れをして喧嘩をし始めてしまう。

『行くぜ、ギンガストリウムだ!!』

するとギンガの身体が赤い光を放ち、ギンガは強化形態……「ウルトラマンギンガストリウム」へと変わる。

『ギンガに力を！ ギンガストリウム!!』

『デアッ!!』

ギンガは喧嘩をしているバナラとアボラスに向かって駆け出し、バナラを蹴り飛ばすとアボラスの方へと顔を向け、アボラスの腹部に拳を何発も叩き込む。

「グギヤア!？」

さらにギンガはアボラスに膝蹴りを叩き込み、アボラスはフラついてそのまま地面に倒れ込んだ。

「グガア!？」

そこにバナラの火炎放射がギンガに放たれるがギンガはすぐにそこを離れて攻撃を回避し、一気にバナラに詰め寄り、バナラの顔面に拳を叩き込んだ後、バナラの腕を掴んでアボラスの元まで投げ飛ばす。

『これで決める!』

『ウルトラマンの力よ！ スペシウム光線!』

そしてギンガは腕を十字へと組んで放つ必殺光線……「スペシウム光線」をアボラスとバナラへと放ち、スペシウム光線はバナラとアボラスを貫くと2体は火花を散らして

爆発した。

『シユア!!』

「ぐ、グギャアアアアアアア!!?!?!?!」

さらにギンガとは別のもう一人のウルトラマンが戦っている場所では……。

ヒトデのような怪獣「油獣ペスター」と身体にVの字のマークがある、黒と赤のウルトラマン……。「ウルトラマンビクトリー」が対峙していた。

『ツェア!!』

ビクトリーはペスターの放った炎を避けてペスターに向かって駆け出し、ペスターの顔面に拳を叩き込む。

「キシヤア!?!」

ペスターが怯んだところにすかさずビクトリーは回し蹴りの要領で足のVクリスタルから放つV字型の光弾「ビクトリウムスラッシュ」を放ってペスターに喰らわせる。

『ビクトリウムスラッシュ!!』

ペスターは負けじと突進を仕掛けてくるが……。

『ウルトランス! EXレッドキング・ナックル!』

ビクトリーの右腕が「EXレッドキング」という怪獣と同じ右腕……。「EXレッドキング・ナックル」へと変化し、ビクトリーは突進して来たペスターをナックルで殴りつ

け、殴り飛ばされたペスターは地面に激突。

なんとか立ち上がったペスターは口から火炎を放つがビクトリーはナックルで地面を殴り、地面がマグマを吹かせる「フレイムロード」で攻撃を相殺する。

そしてビクトリーは右腕を元に戻すとビクトリーは1つのフルートのようなアイテム「ナイトティンバー」を出現させ、それを掴み取るとそれを口元にあて音色を奏でる。

そして変形させ剣……ソードモードにしてそれを掲げるとビクトリーの姿が青くなつた「ウルトラマンビクトリーナイト」へと変わる。

『放てー！ 聖なる力ー！』

『ツェア!!』

姿が変わつたビクトリーに少し驚いた様子を見せるペスターだったが、ペスターはすぐに炎を放つてビクトリーに攻撃を仕掛けるが……ビクトリーはナイトティンバーで炎を切り裂き、ペスターに向かって駆け出し、横一閃にナイトティンバーを振るってペスターを斬りつける。

『キシヤアア!!?』

さらにビクトリーはペスターに蹴りを一発入れた後、ナイトティンバーを下から上へと振るいペスターを斬りつけ、ペスターは空中へと放り飛ばされる。

『ワン！ ナイトビクトリウムフラッシュユー!』

『デユア!!』

ビクトリーは空中へと飛び立ち、ナイトティンバーのポンプアクション1回で発動させ、ナイトティンバー ソードモードで回転切りを繰り出す「ナイトビクトリウムフラッシュ」をペスターに繰り出し……切り裂かれたペスターは火花を散らして爆発した。

『ナイトビクトリウムフラッシュ!!』

「キシヤアアアアアアアアアア
!!!!!!」

*

怪獣騒動からそれからしばらくして……。

彼女は、眠った時によく見る夢があった。

どうして……自分はあの時、生き残ってしまったんだろう。

仲間を守ることができず、最後は自分も海の底へと沈んで行った……そんな悔しい気持ちだが、ずっとずっと……彼女の心の中に残っていた……。

そして最後には、今の大切な仲間も、大切な人も守れずに……みんなみんな自分だけを残していなくなっていく。

自分だけが生き残ってしまうという恐怖……そんな悪夢を、彼女……「時雨」はここ毎晩見続けていた。

「っ！ はあ、はあ……」

自分の部屋のベッドで寝ていた時雨は飛び起きて辺りを見渡し、同じ部屋に住んでいて隣のベッドでスヤスヤ眠る夕立の姿を見ると彼女は夕立に優しく微笑み、彼女の元へと近寄ってそっと彼女の頭を撫でるのだった。

「もう、あんなのは嫌だよ……」

*

一連の怪獣騒動から数週間後、夜空とリョーガは「サイバー怪獣計画」の実験を行うため護衛の艦娘を何人か引き連れてとある山奥へと訪れていた。

ちなみに、サイバー怪獣計画の進行はウチが特に速いということの上層部から「健啖宇宙人 ファントム星人 グルマン」という地球人に有効な科学者宇宙人が配属になることが決定しており、今回はグルマンとリョーガが協力してサイバー怪獣計画の実験を行うことになった。

「やあやあ、久しぶりだね。 大食い博士、相変わらず元気そうだね？」

「フン、貴様も相変わらず好き勝手やっておるのだろう。変人プロフェッサーめ」

また、どうやらリョーガとグルマンは昔からの知り合いらしく、2人はお互いに軽口を叩き合うが……特に仲が悪い訳ではなく、リョーガ曰くグルマンは「悪友」らしい。

「さて、それじゃ早速サイバーゴモラ実体化計画を始めるとするか。まあ、成功する可能性は低いかな」

尚、実験は夜空がサイバー怪獣を実体化させるのに必要なヘルメットを装着し、それを使ってサイバー怪獣を実体化させるというものだった。

そして夜空はリョーガに渡されたヘルメットを被ってエクステバイザーを取り出し、機械的な外見をしたゴモラ……「サイバーゴモラ」のカードをエクステバイザーに装填する。

『サイバーゴモラ、ロードします』

「頼むぞ、ゴモラ」

すると用意された装置から青い光の粒子が放出され……その粒子がだんだんとサイバーゴモラの姿へと実体化していく。

これを見て夜空は「成功か!？」と期待をするが……結局、最終的には実体化までには至らずにサイバーゴモラは消滅してしまった。

尚、この実験でサイバーゴモラが実体化かできたのは65%ほどが限界であり、実体

化にはまだまだ改良が必要とのことだった。

「ふーんむ、やはりダメかあ」

「上手く脳波が同調すれば成功するんだがなあ……」

「だが人間の単細胞の探求結果値は変わらないからな」

グルマンとリヨーガはお互いに腕を組んで後一步というところなのにそれをどうするべきかと悩んだが……そこでリヨーガが「ポン」と手を叩くと彼はグルマンの肩を叩く。

「そう言えばウルトラマンエックスはサイバー怪獣と同じように肉体をデータに置き換えているらしい」

「はっ!? なんてお前がそんなこと分かるんだ!?!」

「まあ、私が調べた結果さ!」

リヨーガは少し自慢げにグルマンに話すが……グルマンにとっては「それがどうした」という話だった。

なにせ、エックスにそれができたからといって人間にできないのでは意味がないからだ。

それを指摘されて口ごもるリヨーガだが、だがやはりこれがサイバー怪獣実体化のヒントになる可能性が高いことに変わりはない。

一方で夜空はサイバーゴモラの実体化が失敗してしまったことに少しガツカリした様子だったが……護衛として来ていた「白露型3番艦 駆逐艦 村雨」が彼の元に駆けつけ励ましの言葉をかける。

「まあまあ、そんな落ち込まないの提督！ まだ始まったばかりなんだから幾らでもチャンスはあるわ？」

「村雨……そうだな、まだこれからだよな」

村雨に励まされて夜空は少し元気を取り戻し、取りあえず今回の実験はここまでにして材料を片付け鎮守府に戻る準備に入るのであった。

（でも、やっぱりあいつ等を守るためには早くサイバー怪獣の実体化を成功させたいな……）

*

その頃、時雨、満潮、夕立……そして「睦月型2番艦 駆逐艦 如月」はというと……他の鎮守府の艦娘たちと演習……模擬戦を行うこととなり、相手はこちらが艦娘の中でも弱い部類に入る駆逐艦のみということで相手は戦艦1人、軽巡洋艦1人とのことである。

やがて今回、旗艦を勤める時雨が今回の対戦相手の姿を確認すると時雨は一同に一時停止の合図を行い、それと同時に相手側も時雨たちのすぐ近くにまでやって来ると時雨と満潮は相手の姿を見て「あっ」と声をあげる。

その時雨たちの演習する対戦相手は「扶桑型2番艦 戦艦 山城改二」と「天龍型1番艦 軽巡洋艦 天龍」であり、時雨は薄らと笑みを浮かべて「やあ、山城、久しぶりだね」と声をかけた。

「ええ久しぶりね、時雨、満潮も。 ああ、演習相手ってアンタたちだったのね」

「そうみたいだね」

「昔話もしたいところだけど先ずは演習よ。 手加減しないから覚悟しなさい」

とこんな感じで山城はやる気満々なのだが即座に天龍「いや、手加減しろよ」とツツコまれた。

まあ、それはそうだろう、幾ら相手の方が頭数が多いとはこっちは戦艦……しかも艦娘の強化形態である改二状態、普通は山城たちが手加減しないとイケないのだが……山城はまるで天龍の言葉を聞いてなかった。

「夜戦なら駆逐艦にも部があるんだがなあ」

「別に暴れられるなら昼だろうが夜だろうがなんでもいいっばい!!」

天龍の言葉に夕立がそう返し、どうやら彼女は暴れたくて仕方がないと言った感じでさつきからウズウズしていた。

「夕立もそろそろ我慢できなくなってきたみたいだから演習始めようか?」

「そうね、それじゃ……始めましょう!」

時雨のチームと山城のチーム、両チームが一度互いに距離を取った後、演習を開始し……山城と天龍は早速砲撃を開始し、時雨たちを攻撃し始める。

「おっと、それじゃ夕立と僕は切り込みをかけるから他のメンバーは援護をお願い!!」

いくよ、夕立!!」

「任せるっばい!!」

時雨と夕立は山城と天龍の砲撃を避けながら相手へと接近し、時雨は両手に持ってい

る主砲を構えるが……砲撃をすることはなく背中の装備と主砲が繋がってる部分を分離させてしまう。

「はあ?」

それを見て山城は一体時雨はなにをしているのだと首を傾げた。

なにせ、時雨の主砲は背中の装備と繋がって始めて砲撃できるのでからなぜワザワザ武器を捨てるような真似をしたのか……山城はそれが全く理解できなかった。

すると、時雨はなんと主砲を逆さまに持つて山城へと一気に接近し、彼女は跳び上がった逆さまに持った主砲をトンファーのようにして山城に殴り掛かってきたのだ。

「いや主砲の使い方おかしいわよ時雨!!?」

山城はツツコミを入れつつどうにか時雨の攻撃を回避し、主砲を時雨に向けるが……時雨はそれよりも早く山城に跳び蹴りを放って来た。

「わっ!!」

慌てて両腕を交差してガードして攻撃を防ぐ山城だが……時雨の予想外の行動にツツコまずにはいられなかった。

「ちよつと待ちなさいよ時雨!!? なんで接近戦!!? 砲撃しなさいよ!!?」

「なに言ってるんだい山城? 遠距離戦なんてくそくらえだよ」

「それが艦娘の言う台詞!!?」

一方で夕立はというと天龍に向かって殴り掛かっており、天龍も接近戦に持ち込んで来た夕立に驚きを隠せなかった。

なにより驚いたのは……夕立の右手に持つ主砲の1つが……両端に斧みたいな物が飛び出して変形し、主砲というか全く違う武器になっていることだった。

「いやそれもはや主砲じゃなくね!? つーかもはや艦娘の武器じゃねえよそれ!」

「いや刀持つてる人に言われたくないっぽい。 そんなことより暴れまくるっぽい!!」
無論、夕立の武器をこんなものにしたのはリョー……。

「響に改造してもらったっぽい」

ではなく響だった。

夕立は天龍に急接近して跳び蹴りを繰り返して、天龍はそれを回避し、一度夕立から離れて距離をとる。

「まあいいさ、俺も遠距離よりも接近戦の方が好きだしなあ!」

そう言つて不適な笑みを天龍は浮かべ、自分の腰にある刀を手に取るとそれを構え、天龍は夕立に向かって行き刀を振るう。

夕立はそれを斧で受け止めるが……流石に力比べとなると天龍に少し非があつたらしく夕立は押し返されてしまう。

だが夕立は腰にある魚雷を天龍に向けて発射……魚雷の数は8本……流石にこの数

を回避できるのは不可能かと思われたが……天龍は波の動きなどを計算し、全て回避してしまう。

「あれを全部回避したっばい!？」

「オラア!!」

そのまま天龍は刀で夕立に斬り掛かるが夕立は主砲（という名の斧）で攻撃を受け止める。

「お前、おもしろえじゃねえかよ!」

「夕立も久しぶりに素敵なパーティーできて嬉しいっばい!!」

「ああ、こんなに楽しいと思っちゃまうよなア! 死ぬまで戦わせろってよお!」

ちなみに、満潮と如月はというと……。

「どうしよう、入っていけない……!」

完全に蚊帳の外だった。

「つていうか天龍さんと夕立の対決する構図……なんかどつかで見たことあるわね」

「それにしても夕立ちちゃんも時雨ちゃんも艦娘なのに接近戦好きねえ。白露型ってみんなそうなのかしら?」

「いや少なくとも村雨は普通だった筈……つていうか響はなに作ってんの!？」

*

その頃、鎮守府では……鎮守府へと戻って来たリョーガはグルマンと一緒に自分が使っているラボへと向かい、そこでグルマンは本部からリョーガに渡すように言われて

いた「青銅鏡」を彼へと渡していた。

青銅鏡を渡されたリョーガは眉を寄せてこの青銅鏡が一体なんなんだと首を傾げたが、なんでもグルマンが言うにはこの青銅鏡は本部の近くの工事現場から発掘された青銅鏡は4世紀頃のもので、謎の古代国家「ツクヨ」のものであるらしく、本部はこの「ツクヨ」について一番詳しいのはリョーガだということに彼にこの青銅鏡を研究して欲しいというものだった。

「確かに私は興味本位でツクヨについて色々調べてる時があつたが……まさか本部からこんなオカルトチックな物を渡されるとはね」

「だが私がこの青銅鏡を調べたところこの青銅鏡からはなにかしらのエネルギーが溢れていることが判明している。つまり、これが危険なものかどうかを調べて欲しいというのが本部の命令だろう」

「成る程、もし危険物ならここにいとると他の者に迷惑をかけてしまうかもしれない、少し遠いがこの鎮守府から少し離れたところにも私の研究ラボあるからそこでこれを調べよう」

リョーガの提案にグルマンは頷き、2人は夜空にその研究ラボに行くことを伝えた後、2人は車に乗ってその研究ラボへと向かうのだった。

一方……鎮守府の休憩所ではリョーガ達とその「ツクヨ」について研究するというこ

とを知った艦娘たちがそのツクヨについての話をしているところだった。

「それでツクヨってなんなの？」

「そうねえ、昔図書室でなにかの本で読んだことがあったわねえ」

暁の問いかけに村雨がそう答え、村雨が言うにはツクヨとは「ツクヨの兵士」と呼ばれる昔の兵士のことを指し、なんでもツクヨの兵士は敵の兵をことごとく打ち倒し留まることが知らないという……歴史上で最も強かったと言われる兵士たちのことだというのだ。

「それって滅茶苦茶強かったってことだよね!?　なんでそんなに強かったのかなあ? やっぱり筋トレ頑張ったから?」

「睦月型5番艦　駆逐艦　皐月」が村雨にずいっと詰め寄ってそう問いかけるが村雨はそんな皐月に戸惑いつつも話の続きをみんなへと聞かせる。

「うーん、まあ、身体は鍛えていたけど読んだ本にはこう書かれていたわね」

なんでも、ツクヨの兵士には「モズイ」と呼ばれる守り神がついていたらしく、モズイは「モズイの泉」と呼ばれる美しい湖の底に住んでいると言われており、戦士たちは戦いに行く前にその湖に1人1つずつ必ず石を投げ入れていたそう。

それを聞いて雷が「石ころ投げただけで戦いに勝ってきたの?」と首を傾げて疑問に思ったことを口にする。村雨は「本で書かれていた内容では確かそうだった筈よ」と答

えるのだった。

「多分、その石には兵士達の勝利への願いが込められていたんじゃないかしらあ？ モズイはきつとその願いを聞き届けてくれたんじゃない？」

「そんな守り神が僕たちにもついていてくれたらもう少しは戦いも楽にはなるんだろうけどなあ……」

皐月がそんなことを呟いていると背後から菊月のチョップが彼女の頭部に叩き込まれ、皐月は「いたっ!？」と叫びながら「なにするんだよう」と涙目を浮かべて菊月の方へと振り返る。

「そんな胡散臭い守り神など私たちにはいらん。そもそも私たちは戦うために生まれてきたのだからな、楽だとか下らんことを考えるな」

「例えじゃんか菊月。僕の妹なのになんて頭が固いんだよ」

皐月の言葉に対し菊月は「そんなの知らん」と答え、そんな無愛想な妹に頬を膨らませてぶーたれる皐月だった。

「それでそれで？ お話はそれで終わりなの？」

そこで奈々に後ろから抱きつかれている「睦月型7番艦 駆逐艦 文月」が村雨にこれでもうツクヨの兵士の話は終わりなのかと尋ねると村雨は首を横に振る。

「ええ、それがこれが意外な結末でねえ、なぜかモズイをツクヨの兵士は『錦田小十郎景

竜』つて人物に頼んで凍った泉に閉じ込めて封印、その後ツクヨの兵士たちもどこかへと忽然と消え去ったんですって」

「ええー？　なんでなんで!?　なんで自分達の守り神にそんな酷いことしちやったのお？」

「ああもう!!　文月ちゃんのあまつたるい声がマジやべーです!!　文月ちゃんマジ天使!!」

「副司令はそのまま黙っててください。そうねえ、それがそのことについてがまた謎のままなのよねえ。それで今回のリョーガさん達なら研究でそのことについてなにか分かるんじゃないかって本部から渡されたらしいのよ」

*

その頃……グルマンとリョーガは青銅鏡に記されていた古代文字の解析に成功しており、2人はその解析に成功したところだった。

「いやあ、流石私だね。 古代文字解析一晩で終わってしまったよ」

「なにを言っておるか！ 一晩で終わったのは私がいたからだろう。 自画自賛も大概にしろ」

「自信家と言って欲しいものだねグルマン博士」

グルマンとリョーガはお互いにそんな風に悪態をつきながら睨み合うが……今は喧嘩している場合ではないと思い、2人はすぐに作業へと取りかかった。

リョーガは青銅鏡の方はグルマンに任せ、彼は古代文字の方を読み上げることに。

その古代文字には「これに触れるな。我等ここにモズイを封じる。一度モズイを解き放てば……」とそこまで読み上げたところで突然グルマンの持っている青銅鏡から

野獣の雄叫びのような声が聞こえ、グルマンはその声に驚いてうっかりと青銅鏡をその場に落としそうになってしまう。

「うわっ！ おまつ!?!」

なんとかりヨーガが青銅鏡をキャッチすることができたのだが……その青銅鏡を見てみると……青銅鏡には満月が映っており、リヨーガが慌てて古代文字の続きを読み始める。

「おいリヨーガ、この鏡……」

「ああ、ちよつと待つてくれ!! これは……そうか、氷の泉というのはこの青銅鏡のことだったのか!」

「なに? あのモズイを封印したという……」

グルマンとリヨーガは2人であるの青銅鏡をじつと見つめ……この青銅鏡がもしも本当に伝承にあつた氷の泉なら……この中にモズイがいるということになる。

「この古代文字の文章通りなら……まずい!! 鎮守府が危ない!!」

すると……突然ラボの電気が消えて辺りが暗くなり、青銅鏡がカタカタと音を鳴らしながら独りでに動き始める。

そして……青銅鏡が机の上から落ちて床に落下すると青銅鏡が割れ、そこから黒い煙のようなものと共に「妖獣 モズイ」が姿を現したのだ。

「グルマン!! すぐに逃げるぞ! このことを鎮守府のみんなに知らせなければ!」

「説明は逃げながらだな!」

モズイが完全に外に出て来る前にリョーガとグルマンはすぐさまその場から走って逃げ出し……2人は外の車に乗り込むとすぐに鎮守府に向かって出発した。

しかし、グルマンは古代文を讀めていないためなにが起こっているのか半場理解できておらず、分かることと言えればあのモズイが守り神なんていう生易しいものじゃないということだけだった。

そのため、グルマンは鎮守府のみんなが危ないとは一体どういうことなのかと彼はリョーガへと尋ねた。

「ああ、奴は守り神なんかじゃない」

リョーガとグルマンが解析した古代文字、その続きはこう書かれていた。

「モズイは戦士の恐れを喰らう、ツクヨの兵士は心の奥の恐れを石にして捨てた。無敵の兵士になるために。モズイは兵士の恐れを喰らう魔物」……つまり、艦娘たちは現代における兵士であり、モズイはその恐れを喰らおうとあのラボの1番近くにある鎮守府を狙う筈だとリョーガは考えたのだ。

そのため彼は鎮守府が危ないとこのことを早く鎮守府に伝えようとしているのだ。

「携帯はどうした!?!」

「使い物にならない、恐らくさつき電気が落ちた時……モズイの影響かクソ!!」
さらにその古代文字の続きとして「モズイは一度蘇ったが最後、巨大な魔物となって
ツクヨの泉から現れる。そこに月が映る時」と書かれていた。

*

そして鎮守府ではというと……既に深夜の1時、艦娘たちも既に寝静まったところである。

しかし……。

「うう、なんでトイレが廊下の外にあるのよお」

トイレに行く為に起き上がった暁が少し怯えた様子で廊下を歩いており、薄暗い廊下はまさに夜の学校の廊下と同じくらいに不気味。

そのため暁は怖がった様子でトイレのある方向へと進んで行く。

「べ、別にお化けなんて怖くないわよ。 なんとって私は一人前のレディなんだから……」

とこんな感じで自分に言い聞かせながらとぼとぼと歩いて行く暁。

そんな時、暁の肩を誰かがポンつと手を置き、それに暁は「きやあああああああああ!!!」と大きな悲鳴をあげてしまった。

「うわわ!! お、落ち着いて暁! 僕だよ!」

「び、びっくりした〜」

「あ、あれ? 臯月と文月……?」

暁の肩に手を置いたのは臯月であり、暁は自分の肩に手を置いた犯人が臯月であることが分かると彼女は腕を組んで「ま、まあ分かってたけどね!」と誤摩化す。

最も皐月には「トイレに行くのが怖くて僕が肩に手を置いたらお化けだと思って悲鳴をあげたんだろうな」と思っていたがこれを口にするその後々面倒になりそうなので黙っておくことにした。

「暁もトイレに行くの？」

「ええ、文月も？」

「うん、夜の廊下は怖いから皐月お姉ちゃんについて行ってもらったの」

それを聞いて暁は内心ほつと胸を撫で下ろし、皐月はそんな暁が面白おかしいのか必死に笑を堪えていた。

（さて、それじゃさつきとトイレいこうか。そう言えば確かトイレ行くには食堂を通過しないといけなかったっけ？ ついでにこっそりウオツカ取ってこよう）

そんなことを考えながら皐月は暁と文月を連れてトイレへと向かい、2人が帰ってきた後、3人はそれぞれの部屋に戻ろうと歩き始めようとしたその時……。

皐月たちの前をなにか……黒い影のようなものが横切った。

「ひっ!?! い、今のなに……!?!」

ビクツと震えて暁と文月は皐月の後ろに隠れ、皐月は「なんで僕の後ろに隠れるの!?!」と驚く。

「さ、皐月おねえちゃん、今の……なに?」

「さあ、僕も分からないけど……これじゃ進めないなあ……」

そんな時、皐月たちの後ろから「どうしたの?」という声が聞こえ、その声を聞いた瞬間、暁、文月、皐月は「ひぎやあああああああああ!!!」と大きな悲鳴をあげてしまった。

「うわわ!!」 お、驚かないで! 僕だよ! 時雨と夕立!」

そう、彼女達に声をかけたのは時雨と夕立であり、2人の姿を見た暁たちはほつと胸を撫で下ろした。

「ふ、ふえ……? 時雨と、夕立……?」

時雨は涙目の暁を安心させるように彼女の頭を撫で、「こんな時間になにしてるっばい?」と夕立が尋ねると暁達は先ほど自分達が目にしたものこのことを話し始める。

「へえ、そんなことが。でも、寝惚けてたとかそんなことはない?」

「う、うーん? でも寝惚けてたとしたら3人同じ物を見るなんて変じゃないかしら?」
暁の言うとおり、寝惚けていたとしても3人も同じ物を同じように見るなんて普通では有り得ないだろう。

ということとはつまり、何かがいたということになる。

「んっ? 夕立!!」

「時雨ちゃん!!」

その時、時雨は背後からなにかが夕立に向かって迫って来ていることに気付き、時雨は夕立を突き飛ばして彼女を庇った。

そしてその正体は鏡から出て来たあの怪物……モズイであり、モズイは時雨の腕を掴み上げて彼女の動きを封じる。

『腹ガ、減ツタ。 オマエノ……恐レヲ、食ワセロ』

「な、なに……!?!」

『オマエノ、恐レハ、ナンダア……?』

「ッ……」

それを聞いた瞬間、時雨にはかつての……まだ「艦」だった頃のある記憶が脳裏に過つたのだが……その直後……。

「時雨ちゃんを離すっばい!!」

夕立がすぐさま時雨を助け出す為にモズイに攻撃を仕掛けるが、モズイは時雨を放り投げてどこかへと走って逃げて行き、投げられた時雨は壁にぶつかってしまった。

「うあつ……!?!」

「時雨ちゃん!!」

すぐに夕立たちは時雨の元へと駆け寄る。

「僕は……いいから、あいつを、追いかけて」

「分かったっばい、暁、皐月、文月！ 時雨ちゃんをよろしくね！」

夕立は時雨のことを暁たちに任せて自分は瞬時に艤装を呼び出して装着してモズイを追いかけて走り出し、やがては外へと出てしまうのだが……結局モズイは見失ってしまふのだった。

「くっ、逃がしちゃったっばい？」

夕立は悔しそうにそう呟いた直後である。

ゆつくりと……モズイが彼女の背後から忍び寄り、そして一気に夕立へとモズイは飛び掛かってきたのだ。

『オマエノ、恐レヲ喰ワセロオ!!』

だが……。

「っばい!!」

『グガアア!!?』

夕立は回し蹴りで飛び掛かって来たモズイを撃退し、そのまま地面へと倒れ込んだモズイに追い打ちをかけようとモズイに向かって駆け出すが……。

「っ！ な、なに……っ？」

突然身体が動かなくなつたことに夕立、実はモズイは相手の恐怖心を強制的に引き出す能力があり、その能力を使って夕立の動きを封じたのだ。

夕立の動きを封じたモズイは勝ち誇ったように不気味な笑い声をあげ……夕立へと近づいて来るが……。

「っばい!!」

『グガア!!?』

あつさりと動かれて顔面に一発強烈なパンチを叩き込まれて吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばされたモズイは一体なにが起きたのか理解できず、もう1度夕立の恐怖心を強制的に引き出そうとするが……。

動きを封じることが一切出来ず、夕立の跳び蹴りがモズイへと叩き込まれるのだった。

確かに、夕立は一瞬ではあるがモズイの力によって動きは封じられた。

しかし、今の夕立の感情で勝っているのは恐怖心などではなく……自分を庇い、そして自分の姉である時雨を傷つけたモズイに対する「怒り」が恐怖心を上回っていたのだ。

「よくも時雨ちゃんをおおおお!!!!」

夕立はモズイの頭を鷲掴みにして地面へと叩き伏せ、モズイの後頭部を掴むとそのまま彼女はモズイを引きずって駆け出し始める。

『グアア!!? ガアア!!?』

「こんなもので済むと思うなっばい!!」

夕立は一度立ち止まるとモズイを無理矢理立ち上がらせ、モズイに何度も何度も拳を何発も叩き込んだ後、主砲の両端から斧を出現させ、それでモズイの身体を斬りつける。
『ぐ……グオ……』

「これでトドメよー！」

夕立がトドメをさそうと主砲を構えるが……その時、突然モズイの身体が黒い煙のようなものへと変化し、近くにあった窓の中へと逃げ込んでしまったのだ。

「なっ!?! 窓の中に……!?!」

その後、モズイが特に現れることはなく、夕立はすぐにこのことを夜空へと連絡し、その後帰ってきたリョーガとグルマンからも詳しい話を聞くことになったのだ。

*

翌日、夜空、奈々、リヨーガ、グルマンは4人で集まってモズイに対する対策を考えるため、会議室に全員で集まることとなった。

そして4人が会議室の扉の前にまでやってきて夜空がドアノブに手をかけようとした時である。

『トラン○フォーム!!』

「「「はっ?」」」

いきなり会議室の扉が外れて変形し始め、見た目がなぜか「ガ○ダムエ○シア」そっくりの等身大ロボットに変形したのだ。

「「「……」」」

『さあ、どうぞお通りくださいませ!!』

しかも喋った……見た目がエ○シアなのに杉○智○ボイスで。

これを見て夜空はジツとリヨーガの方へと振り返るが……リヨーガは首を横にブンブンと振って「これ作ったの自分じゃないよ」と伝えるが……珍しくリヨーガも驚いている様子なので本当にこれを作ったのはリヨーガではないのだろうかと一応は納得した。

「やあ、司令官たち。遅かったね」

会議室の中には時雨の調子が悪いということとで今日は秘書官代理をしている響が既におり、夜空たちは戸惑いつつもそれぞれの席へと座る。

「えっと、響……あのドアはいつたい……？」

「ああ、あれかい？ 以前から密かに作っていた警備ロボットだよ。昨日の事件を聞いて急いで作ったんだ。完成間近だったこともあつてすぐに完成したよ」

それを聞いて夜空はそう言えば以前響が資料を使いたいと言つてなにかを作っている様子だったのを思い出したが……聞きたいのはそれだけではない。

なぜ響がそんな技術を持っているのかということである。

「そんなのリョーガさんから習つたに決まつてるじゃないか」

「オイ」

夜空はリョーガの方へと視線を向けるが当の本人は知らんふりである。

「ちなみになんて見た目がエ○シア？ 後声もなんであの人なんだ？」

「私が好きなロボットと声優だからに決まつてるじゃないか!!」

「お、おう……」

それから会議が始まることとなつたのだが……正直、さっきのエ○シアモドキのロボットがお茶を運んで来たりするせいでそっちの方が気になつてしまつたりとかした

が。

兎に角、夜空たちはロボットの方をどうにか気にしないで会議を進め、先ずリョーガとグルマンがモズイについての説明を行った。

「先ず、昨日鎮守府内に出現したモズイだが……話を聞いた限りではどうやらまだ完全に復活していないようだ」

「奴が完全に復活するにはモズイの泉に月が映らなければならない」

リョーガとグルマンの話を聞き、奈々は「そのモズイの泉というのは？」と尋ねると……なんと、そのモズイの泉と呼ばれる場所……。

それはこの鎮守府の目の前にある海の中だというのだ。

「ツクヨの泉は既に深海の底だ」

「しかし、ツクヨの兵士はあの鏡のことを氷の泉と呼んでいた。つまり、物を映すものなら……なんでもいいのだよ」

つまり、今夜の満月が出た時……モズイは自分達の目の前に出現するということ。

夜空はこれをどう迎え撃てばいいのか……恐れを喰らうモズイに艦娘をぶつけるのは相当危険なのではないかと不安になるが……。

「司令官、見くびって貰っては困るね」

「響……？」

「司令官は私たち艦娘を恐れを食べるモズイにぶつけるべきではないと考えているようだが……私は、いや……私たち艦娘は生憎、奴に食べさせるものなんてなに一つ持ち合わせていないよ」

やけに自信満々な様子で語る響に夜空は「どうして言い切れるんだ？」と問いかけると……。

「そんなの決まってるじゃないか。私たちが持っている恐れ……恐怖っていうのは……」

*

その頃、時雨はとうとうと……彼女は床に座り込んで顔を俯かせており、表情もあんまり元気とは言い辛いものだった。

そんな時だ、コンコンつという扉の音が聞こえ、時雨は「どうぞ」と言うとう扉を開いて入って来たのは夜空だった。

「提督……」

「時雨、なにがあつた？ モズイになにをされたんだ？」

それを聞かれて口ごもる時雨、そんな彼女の様子を見て夜空は「話したくないなら、無理に話さなくていい」と言うが……時雨は首を横に振り「話すよ」と言ってくれた。

「モズイに睨まれた時、思い、出したんだ……『西村艦隊』のこと」

「西村艦隊、確か……お前がまだ艦だった頃に編成された……」

時雨は無言で頷き、彼女はその西村艦隊に所属していた時の記憶……スリガオ海峡海戦での戦い。

この戦いでは西村艦隊では時雨と最上型重巡洋艦の最上のみを残して全滅してしまつた時の記憶。

最終的に自分だけが無傷で無事で済んだこと……そして、なによりも仲間達の間まで

生きることができなかつたという記憶が昨夜モズイに睨まれた際に時雨の脳裏にフラッシュバックしてしまい、今に至るのだという。

「……僕は、怖いんだよ。自分が死ぬのがじやない。もしもまた仲間が目の前で死

んだら……また自分だけが生き残ってしまったら。僕は、それが怖くてたまらない」

「成る程、お前が恐れるのは……自分だけが生き残ってしまうっていう恐怖」

肩を震わせる時雨、そんな彼女を落ち着かせるように、夜空はそつと時雨の頭を優しく撫でる。

「俺もそうだ。俺が1番恐れてるのはお前達を誰か1人でも失うこと。なによりも

俺はそれが怖いんだ。だから気持ちは少しは分かる。けどな、お前の持つてるその

恐れは……決して怯えなくていいものなんだ」

夜空からそう言葉をかけられて時雨は「えっ？」と首を傾げる。

「その恐ろしいって気持ちは、決してモズイなんか食っていいもんじやない。その

恐ろしさは……二度と悲劇を繰り返させないための……仲間を守ろうとする意思。

その恐ろしいという気持ちはお前の強さなんだ」

「恐ろしさは……強さ……」

「ああ！ って言っても……これは響の受け売りのようなもんなんだけどな」

そう言いながら苦笑する夜空に時雨は「えっ？ どういうこと？」と尋ねるが……夜

空はそれについてはなにも答えなかった。

それは夜空曰く「お前はその答えは知ってるから」というらしい。

「それよりも、今回の作戦だが……時雨、出れそうか？」

夜空にそう聞かれて時雨は一度顔を俯かせるが……彼女は先ほどの夜空の言葉を思い出し、不適な笑みを浮かべて顔をあげて立ち上がった。

「了解、駆逐艦……時雨！ 出るよ！」

*

そして夕方頃、鎮守府の中央広場……そこは丁度モズイが出現すると予想されている

場所で、海を直接見渡すことができるその広場に艦娘たちが集められていた。

そしてこれから夜空から今回のモズイ殲滅作戦についての説明が行われることになった。

「モズイが出現した直後に、全員モズイに向けて集中攻撃を開始！ 月が隠れるまでなんとか粘って足止めしろ!! モズイは月が隠れると弱体化して海の中に逃げ込むだろうがその前になんとしても仕留めるんだ！」

『了解!!』

夜空の指示に従って艦娘たちはそれぞれの場所に配置、そして……空に満月が浮かび、水面へと月が映ると……海の中から飛び出して来るように巨大化したモズイが出現した。

『グアアアアアアオ!!!』

「総員、攻撃開始イ!!!」

菊月の合図で全員が攻撃を開始、モズイに集中砲火を浴びせる。

しかし、モズイは集中砲火を浴びているにも関わらず鎮守府の広場へと足を踏み入れ、鎮守府の侵入を許してしまった。

「くっ、これ以上進ませる訳には……!! 全員、モズイの足を狙ってください!!」

朝潮の指示によって艦娘達はモズイの足に向かって集中砲火を行い、僅かながらにフ

ラつくモズイだが……モズイは口から大量の「石」を電、皐月、睦月、雷のいる方向へと吐き出し、電達は慌ててその場から離れてモズイの攻撃をなんとか回避する。

「はわわわ!!」

「うつわあ!!? なんだよアレ!? 石ころ!?!」

「もしかしてあれが……ツクヨの兵士が捨てたつていう、恐れ……」

時雨はモズイが吐き出した石を見つめながらそう呟き、彼女は自分の胸に手を当てて拳をギュッと握りしめると主砲を構えて砲弾をモズイの目に向けて発射する。

「本当は遠距離戦ってあんまり好きじゃないんだけど……相手が相手だからね!」

時雨はモズイの目を集中的に狙って攻撃を行い、やがて砲弾はモズイの右目に直撃。

右目の直撃を受けたモズイは右目を抑えてもがき苦しむ。

『グギヤアアアアアアア!!』

右目を潰されたモズイは怒り狂い、相手の恐怖心を強制的に引き出して殆どの艦娘たちの動きを封じ込めてしまう。

「な、なに!?!」

「動けない……」

そして動きを封じた艦娘たちの恐れを喰らおうと手を伸ばすモズイ。

『夜空!! ユナイトだ!!』

「ああ、行くぞエックス!!」

夜空はエクステバイザーを取り出し、部のボタンを押し側面のパーツをX字に展開したXモードに変形させるとエックスのスパークドールズが出現し、リードさせた後、夜空はエクステバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエックスとユナイトします』

「エックスーーーーー!!!」

そして夜空の身体がX字の光へと包まれ、そこから夜空が変身した「ウルトラマンエックス」が飛び出した。

『デイ!! ヤァー!!』

『エックス、ユナイテッド』

エックスは現れると同時に艦娘たちに手が届く前にモズイに掴み掛かって持ち上げ、エックスは鎮守府の外側にある森の方へと大きくモズイを投げ飛ばした。

『シユア!!』

エックスも大ジャンプして鎮守府の外側にある森の方へと降り立ち、ファイティングポーズを取って構える。

『グルラアアアアアア!!!』

『シエア!』

エックスはモズイへと向かって駆け出し、モズイの横腹に蹴りを叩き込もうとするが、モズイはそれを左腕で受け流し、右拳でエックスを殴りつける。

よろめくエックスに対してモズイは口から大量の石を吐き出して攻撃を行うが……エックスは壁状に展開するバリア「Xバリアウォール」でモズイの攻撃を防ぎ切る。

『デアッ!』

そのままエックスは空中へと跳び上がって跳び蹴りをモズイへと喰らわせ、蹴り飛ばされたモズイは大地を転がって倒れこむ。

倒れ込んだモズイをエックスは掴み掛かろうとするが……モズイは身体を黒い煙へと変化させ、エックスはモズイを見失ってしまう。

『あいつ、どこにいったんだ?』

「気をつけろ、エックス!」

すると黒い影となったモズイはエックスに体当たりを繰り返し出し、エックスは身体から火花を散らしてその場に膝を突いてしまう。

『ガアッ!?!』

膝を突いたエックスの前に再び姿を現すモズイ、モズイはエックスの首を両手で締め上げて持ち上げる。

『グウウ!!?』

「なんて怪力だよ、振りほどけない！」

「エックス!!」

そんな時、駆けつけた艦娘たちが一斉にエックスを援護するため、モズイに攻撃を開始。

大したダメージを与えないとできないとはいえモズイにとってはその攻撃はかなり鬱陶しいものでついエックスから手を離してしまい、エックスはモズイの腹部に拳を一発叩き込んだ後、すぐさまモズイから離れて距離を取るのだった。

「エックスは助け出せたけど……ダメだ、僕たちの攻撃じゃ大したダメージが与えられない」

時雨は自分達の攻撃がモズイに対して効果がないことを嘆くが……そんな時、空に浮かぶ月が……雲に隠れ、月から力を得ているモズイはたちまち弱体化。

苦しみだして膝を突き、時雨達は今がチャンスだと感じたのだが……。

『グルラアアアアアアアア!!』

両腕から赤い光線のようなものを空に向かってモズイは放ち、なんとその光線は雲をかき消してしまったのだ。

「なっ、そんな……!?!」

「どうやらあいつは弱点を克服してるみたいだね」

響の言うとおりに、このモズイは既に自身の弱点を克服しており、モズイはすぐさま立ち上がって再び黒い煙となって姿を消してしまった。

「時雨！」

「えっ？」

『今度こそ、才前ノ恐れヲ食ウ!!』

時雨の背後から小さくなった黒い煙のモズイが彼女に襲いかかって来るが時雨はなんとかそれを避ける。

しかし、モズイの相手の動きを封じる技で時雨は動きを封じられてしまい、今度こそ時雨の恐れを喰らおうと彼女へと素早く近づいて来るが……。

「悪いけど……」

今度は時雨がそれをあつさり打ち破り、彼女は主砲をトンファーのように持つて構え、近づいてきたモズイを殴り飛ばした。

「君に食べさせるものなんてなにもないよ」

『ガア!!』

黒い煙のような姿から等身大の姿へと実体化したモズイに向けて時雨は遠慮なく主砲でモズイを殴りつけ、さらには回し蹴りでモズイを蹴り飛ばした。

「僕の、この恐れは……二度と悲劇を繰り返さないため。僕たちにとって恐れは……」

必死に大切なものを守ろうとする意思。この恐れは強さ、そしてなによりも……恐れは……僕たちが戦う理由だ!! だから、この感情を、気持ちをお前に食わせる訳にはいかない!!」

時雨は響の方へと振り返り、「だよね? 響?」と声をかけると響は笑みを浮かべて「ああ」と強く頷いた。

『グルア……』

モズイは予想外の出来事に驚きを隠せなかったがモズイは再び巨大化し、また黒い煙となつてエックスに何度も体当たりを繰り返し始める。

『ウオツ!』

「エックス!」

するとその時、時雨の持っていたジオデバイザーにグルマンからの通信が入り、彼女は慌ててジオデバイザーを取り出す。

『時雨、エックスとサイバー怪獣を合体させるんだ!』

「えっ……? そんなことができるの?」

『試してみる価値はある!』

念のために全員に持たされていたサイバー怪獣のカード、時雨はサイバーゴモラのカードを夜空から渡されており、彼女はジオデバイザーにカードをセットしてそのデー

タをエックスへと転送する。

「お願い、受け取ってエックス!!」

すると……エックスの中にいる夜空が持つエックスデバイザーにサイバーゴモラのカードが転送され、夜空はそのカードを手取る。

「エックス、お前サイバー怪獣のカードも受信できるのか!？」

『はあ!? ちょっと待て! なんだそのカード!?!』

「確かに、エックスと一緒に使えるのかも! 行くぞ、エックス!」

『だからなにを……』

夜空はエックスに聞くよりも前にエックスデバイザーにカードを装填を完了させる。

『サイバーゴモラ、ロードします』

するとサイバーゴモラの腕を模した両盾にはGの文字があらわれ、両肩のアーマーがサイバーゴモラの角を模した形状になっている鎧……「ゴモラアーマー」をエックスは身に纏った。

『サイバー ゴモラアーマー、アクティブ!』

ゴモラアーマーを纏ったエックスにモズイは少し驚いた様子を見せるが……構わずモズイは黒い煙となってエックスに攻撃を繰り返すが……。

全ての攻撃をゴモラアーマーが弾き返し、さらにモズイは弾き飛ばされてそのまま実

体に戻りながら吹き飛ばされる。

『グアアアアア!!!』

負けじとモズイはエックスに駆け出して襲いかかって来るが両腕の爪を構えてエックスはすれ違いざまにモズイを斬りつけ、さらに大きく振りかぶって右手の爪でモズイを斬りつける。

『シユア!!』

身体中から火花を散らしてフラつくモズイ、モズイは口から石を吐き出して攻撃するがエックスは両腕の爪からバリアを発生させて攻撃を防ぐ。

『いいな、これ！ 気に入った！ ちょっと重いけどな』

「ああ、一気に行くぞエックス！」

『おうー!』

エックスはモズイに向かって駆け出し、勢いをつけて爪でモズイを殴りつけ……勝ち目がもうないと悟ったモズイはあの海の中へと逃げ込もうとするが……エックスはそれを逃がさない。

『ウオオオオオオオ……ハアアアアアア!!!!!!』

「ゴモラ振動波!!」

エックスは両腕から放つ青い光線「ゴモラ振動波」をモズイに向かって放ち、ゴモラ

振動波を受けたモズイは粉々に碎けて爆発した。

エックスはゴモラーマーを解除すると時雨たちの方へと顔を向け、彼女達にサムズアップするのだった。

それに対して時雨たちもエックスに向かってサムズアップし、エックスは空へと飛び去った。

*

戦いを終えた後、夜空はエックスの姿から元の姿に戻り、鎮守府の人気のない場所へと降り立った。

『しかし、あのモズイっていうのはなんだったんだろうな？　スパークドールズにならなかったぞ』

「少なくとも……邪悪な存在、なのは変わりないだろう。奴は恐れを喰らう……ってことは恐れを喰らわれた戦士は人間らしいという感情を失って行った。ツクヨの兵士はそのことに気づいてモズイを鏡の中に封じ込めたんだろうな」

『成る程……』

夜空は「さて、後始末が大変だ」と少し落ち込んだ様子でトボトボと歩き始めようとした時。

「そういうことですか……」

「えっ？」

夜空の後ろから声が聞こえて振り返るとそこには……奈々が立っていたのだ。

「あなたがウルトラマンエックスだったんですね、提督……」

第3話 『差し延べるための手』

ある雨の降る日のこと……そこは森で囲まれた海辺。

そこには大雨ということもあって人も誰一人としていなかった。

そう、「人」はいなかった。

その海辺にいたのは人ではなく……「深海棲艦」の一人、「駆逐棲姫」が脇腹や口から青い血を流し、肩で息をして今にも彼女は死んでもおかしくはないほどの重傷だったのだ。

ちなみに、彼女は艦装を装備した際は足がなくなるのだが……今は艦装を解除しているためか両足がちゃんと生えていた。

「はあ……はあ……ふぎ、けるな……。この私が……デカいだけの生物に……ぐう……」

どうやら棲姫のこの傷はデカイ生物……つまり、「怪獣」にやられたらしく、彼女がなぜこんなところにいるのか、それはどこか身を隠して傷を癒せる場所はないかと思ったからである。

しかし、中々休めそうな場所が見つからず、もう既に足下もフラつく上に目眩までし

てきていたのだが……そんな彼女の追い打ちをかけるかの如く……上空から火の玉のようなものが棲姫のいるすぐ近くに落下してきたのだ。

「つ……!!? な……なんだ……。こんな時に……」

そして……その火の玉から出て来たのは昆虫にも似た外見の怪獣……「宇宙恐竜ゼットン」が火の玉の中から出現したのだ。

「ゼットン……」

棲姫はまた自分の目の前に怪獣が現れたことに驚き、もしもゼットンが自分の方に気づけば攻撃してくるかもしれないと考えて彼女はすぐにゼットンに気づかれないようにこっそりを身を隠そうとしたのだが……。

「フィロロロロ」

既にゼットンにはバレていたらしく、ゼットンは棲姫の方へと顔を見下ろすとゼットンは顔から一兆度の火球を棲姫に向かって放ってきたのだ。

「つ!!?」

目を瞑り、流石にこれはどうとう自分も死んだ……そう思った棲姫だったが何時まで立っても身体にこれ以上の痛みを受けたような感覚はなく……そつと目を開けてみると……。

自分の目の前に……自分を庇うように、そこには光の剣を構える赤い巨人が立ってい

たのだ……自分を守るように……。

その巨人はどことなくウルトラマンエックスとも似ているようにも見えた。

しかしその巨人はエックスではない。

「無限の、輪……?」

その巨人からは無限の輪を思わせる光が溢れ、やがてその光はすぐに消えたが、棲姫はそれを見てこう呟いた。

「メビウスの……輪、ウルトラマン……メビウス?」

そう、その巨人の名は……「ウルトラマンメビウス」

戦闘BGM「メビウス!」

メビウスは棲姫の方へと少しだけ顔を振り向かせるとメビウスは棲姫を安心させるかのように頷く。

『セアツ!!』

メビウスは左腕の「メビウスブレス」から出した光の剣「メビュームブレード」を構え、ゼットンへと向かって駆け出し、対するゼットンは一兆度の火球をメビウスに向かって放つがメビウスはメビュームブレードでゼットンの火球を切り裂きながら突き進む。

『シユア!!』

ゼットンに一気に接近したメビウスはメビウムブレードでゼットンに斬り掛かるがゼットンはそれをことごとく回避し、後ろ回し蹴りをメビウスに喰らわせる。

ゼットンの攻撃を受けてたじろくメビウス、その隙をゼットンは見逃さずドロップキックをメビウスへと繰り出す。メビウスはメビウムブレードをしまい、両腕を交差してメビウスは攻撃を防ぐ。

しかし、メビウスは大きく吹き飛ばされて地面を転がるが……すぐに反撃するためメビウスブレスに右手を添え、右手を前に突き出して放つ光刃「メビウムスラッシュ」を放ち、ゼットンは周囲にバリアを張る。「ゼットンシャッター」で攻撃を防いだが……メビウスはそのまま高くジャンプし、相手の頭上目掛けて蹴りを叩き込む「流星キック」をゼットンの唯一バリアの張られていない頭部に叩き込んだ。

「ゼッ………トン!？」

『シユア!』

メビウスは怯んだゼットンに向かって勢いをつけて拳をゼットンの胸部に叩き込み、ゼットンも負けじとメビウスに右腕を振るって殴り掛かるがメビウスはゼットンの右腕を掴んで巴投げを繰り出す。

投げ飛ばされたゼットンは地面に倒れ込んだがすぐに起き上がり、テレポーターションを使って一度メビウスの目の前から姿を消す。

『っ!?!』

メビウスはゼットンが消えたことに驚くが……メビウスは空中へと突然飛行し、棲姫はメビウスは逃げ出したのかと思っただが……。

メビウスが空中に去った直後、ゼットンは再び姿を見せ、火球をメビウスに向かって放つがメビウスはそれを避ける。

これはゼットンが飛行できないということを実いたメビウスの作戦であり、幾らテレポートが使えろといってもそれは地上だけの話。

つまり、空中から地上を見ればゼットンがどこに現れるのかが地上にいる時よりも見つけ易くなる、そのためメビウスは空中へと飛んだのだ。

ゼットンを見つけるとメビウスは素早くメビウムスラッシュを放つがゼットンは再びゼットンシヤッターで攻撃を防ぐ。

だがその直後、メビウスの飛び蹴りがゼットンのバリアに炸裂し、ゼットンはバリアを維持してメビウスの攻撃を防ぐが……。

『シューアアアア!!』

メビウスは炎の模様を纏った「バーニングブレイブ」となるとメビウスはそのままきりもみ回転し、炎を巻き起こす「メビウスピンキック」を炸裂。

そしてゼットンのバリアはその技によって碎かれ、メビウスの蹴りがゼットンに直撃

した。

「ゼツ……トン!？」

メビウスはこのまま一気にトドメを刺そうとするが……突然、メビウスの背中に青い光線のようなものが直撃した。

『ウアア!!?』

メビウスは膝を突きつつも慌てて後ろに振り返るとそこには海から出現した「巨大魚怪獣 ゾアムルチ」が出現したのだ。

ゾアムルチの出現に驚くメビウスだったが、そこにさらにゼットンから放たれた火球がメビウスの背中に直撃し、メビウスはその場に倒れ込んでしまう。

『グアツ……!?!』

倒れ込んだメビウスに向かってゾアムルチは容赦なく蹴りを叩き込み、メビウスは地面を転がる。

さらにゼットンが倒れているメビウスに掴み掛かって彼を無理矢理起き上がらせるとメビウスの腹部に膝蹴りを叩き込み、メビウスは悲痛な声をあげながら後退する。

そしてメビウスが怯んだところにゾアムルチが突進を繰り返してメビウスを突き飛ばしてしまう。

『グッ……ウウ……!?!』

メビウスはフラつきながらもなんとか立ち上がってゼットンとゾアムルチに挑もうとするが……その時、突然ゼットンとゾアムルチの動きがピタリと止まったのだ。

『…………』

「先ほど助けて貰った礼だ。借りは……返させてもらおう！」

メビウスは声がした方へと顔を向けるとそこには棲姫が青く光る右手をゼットンとゾアムルチに向けており、ゼットンとゾアムルチは棲姫の力によって動きを封じられたのだ。

「グアアアアアアアアアアア!!!?」

「ゼツ…………トン…………!!?!」

突然の出来事にゼットンとゾアムルチは対応することができず、そのまま2体の怪獣は地面の中へと徐々に沈んでいき、棲姫はゾアムルチとゼットンを封印してしまったのだ。

「ぐっ、がはあ?!」

しかし、ゼットンとゾアムルチを2体同時に封印するほどの力を使った棲姫は自分の力の殆どを使い果たしてしまい、彼女は一気に身体から力が抜け、その場へと倒れ込んでしまったのだ。

『はあ、はあ…………』

メビウスは肩で息をしながらも棲姫の元へと寄り、そつと彼女に右手を向け……そこから光の粒子を棲姫へと放つ。

するとメビウスの放った光の粒子を浴びた棲姫の傷はどんどん回復していき、やがて……彼女は気を失ったままであったものの傷の方は完全に回復し、メビウスは「よし」とでも言うように頷くと彼はその場から薄らと消え去るのだった。

「お姉ちゃん！ こつちなのです!!」

「ちよつと雷！ 怪獣の反応が消えたからつてもうちよつと慎重に……!」

そこにやってきたのは夜空のところの鎮守府に所属している駆逐艦の雷と電。

この2人は遠征任務の帰りの途中であり、偶然この辺りで怪獣の出現をキャッチ、この辺りはあまり人が住んでいないところではあったが相手がどんな怪獣かを見る必要があると判断し、偵察に来ていたのだ。

「でも、なんで急に怪獣の反応がロストしたのかしら……う？」

「雷お姉ちゃん！ あそこに人が倒れてるのです!」

電が砂浜で棲姫が倒れているのを発見し、2人は急いで棲姫の元へと駆け寄る。

どうやら今のいる場所からでは棲姫の姿は雨が降つてすることもあつてよく見えなかつたらしい。

そして2人が駆け寄った直後、彼女たちはそこで倒れていたのがようやく自分達が戦

う相手である深海棲艦であるということが分かり、雷は腕に装着されている主砲を驚きつつも棲姫へと向ける。

「深海棲艦!?　なんでこんなところに!?　しかも駆逐棲姫!?」

駆逐棲姫は深海棲艦の中でも強敵に数えられる1人であり、艦種は駆逐艦であるにも関わらずその戦闘力は凄まじく……まさに「お前のような駆逐艦がいるか」とでも言いたくなるような強さを持っている。

そのため、雷は今の内に倒しておくべきかと思つたのだが……電が慌ててそれを止めた。

「だ、ダメなのですお姉ちゃん!!」

「電……」

「怪我は、見当たらないみたいですけど……でも、とても苦しそうにしているのです! 幾ら敵だからって……そんな相手に、攻撃しちやダメなのです!!」

「電、でも……」

雷は困り果てたような顔を浮かべるが、電は気絶している棲姫の前に手を広げて彼女を庇うように立ち、そんな電の様子を見て雷はため息を吐いた。

「もう、しょうがないわね」

「雷お姉ちゃん……!」

「でも、この子が起き上がって攻撃の意思があれば全速力で逃げるわよ？」
「はいなのです！」

*

それから2週間後、モズイの騒動があつた翌日のことである。

執務室では夜空が奈々の前で正座しており、彼女は夜空に向かってジツと彼を見下ろしていた。

『なあ、夜空……私のこの位置だとちよつと彼女のスカートの中見えるんだが？ 教えて方がいいか？ あと青か……』

「お前はなにしてんだ」

ちなみに夜空がエクステバイザーをつけてるのは腰の右横……そして奈々はスカート、地味にその中が見える。

するとそんなエックスの発言を聞いて「イラッ」とした奈々は夜空からエクステバイザーを取り上げると机の上に素早く俯かせて置いた。

『うわあああああ!!? な、なんだ!!? なんだ!!? 夜空!! 急に周りが真っ暗になった!! 助けてくれ夜空!!』

奈々が素早く置いてしまったためか、なにが起きたのかエックスは理解できなかつたらしく、彼女はそんな風に慌てるエックスを軽く無視して腕を組んで再び夜空の方へと視線を向ける。

恐らくは、自分がエックスとユナイトし、怪獣と戦っていたことについて追求するのだろうかと考えていたのだが……。

「……暁ちゃんとお風呂入りたい」

「おいコラ」

と思つたら全く関係ない上に奈々の趣味全開の話だった。

「いやあ、だつて普段からレディーレディーつて言つてる暁ちゃんは色んなところがどのくらい成長してるのかなーつと思ひまして」

「お前……。それより俺とエックスの話は聞かなくていいのか!」

夜空がそう尋ねると奈々はなぜか満面の笑みで「あつ、大体の事情は察してるんでもうその辺どーでもいいです」なんて言い出す始末。

「『どーでもいいの!?!』」

流石にこれには夜空もエックスもビックリ、絶対に自分達のことについて追求されるかと思つたものだから当然だろう。

しかし奈々はそんなこと気にする様子すら見せず、むしろ今は暁と一緒に風呂入ることしか頭にない。

「暁ちゃんと一緒に風呂入る以外に重要なことがあるとでも!?!」

「あるだろ! 十分に!?!」

すると、突然奈々は「ふう」と一度ため息をつくとき最初のときのような真面目な表情となり、夜空はやつとまともなことを言うのかと思つたが……。

「でも、暁ちゃんと一緒に風呂入るなら響ちゃん、雷ちゃん、電ちゃんとも入りたいで

すね」

「ちよつとタカトさんと菊月呼んでくる」

「すみませんタカトさん呼ぶのだけは……それだけは勘弁してください。逆に菊月ちゃんはバッチコイ!!」

「いい加減女といえども殴りたくなつてくるが……」まっ、冗談はこのくらいにして」と言つてようやく気持ち切り替えたらしい。

最もその後「第六の子とお風呂入りたくはありますが」と付け加えていたりしたが。「提督、それとエックス、私は先ほども言つた通り……大体事情は察してます。あなたがなぜ、私たちにこの事を隠しているのか」

『まだ暗いぞ?!』なあ、夜空! これもしかして故障なのか!? なら早く直してくれ!』
「勿論、私はこの事を口外するつもりはありません。この事を打ち明かす時はあなた次第だと思いますから」

『なあ、無視しないでくれよ。こつちは本気でデバイスが故障してないか不安なんだぞ』

「いい加減うるさいです」

『アツハイ、スイマセン』

それから奈々は「私もその辺りのフォローはなるべくします」と言つて執務室を出よ

うとしたのだが……その途中、夜空に呼び止められた。

「その、ありがとな」

「いいんですよ、あなたのことは前提督から頼まれてますから」

奈々はほんの少し笑みを浮かべて執務室を出て行くのだった。

彼女が部屋から出たのを確認すると夜空はエクステバイザーを手に取り、周りが見えるようになった。エックスはホッとするのだった。

「お前、少しビビりすぎじゃないのか？」

『精密機械なんだぞ、幾ら私でも急に目の前が真っ暗になったら故障かと思つて不安になつてしまう』

そこでエックスは「ところで、先ほど彼女が言つていた前提督とは誰なんだ？」と話題を変え、夜空はエックスにそう聞かれて少し口籠った。

『なにか、聞いてはいけないことだったか？』

エックスが不安そうに夜空に問いかけるが彼は首を横に振る。

「まあ、俺がこの鎮守府に着任する前にいた提督だな」

夜空が語るには昔は自分とは違う、別の人物がこの鎮守府に着任していたらしいのだが……一つ、問題を起こしてしまい、提督をやめることになったのだという。

その後、その前提督と入れ替わるように夜空は鎮守府に着任したのだが……その前提

督とは夜空とも面識があり、とても複雑な気持ちだったというのだ。

今ではどこでなにをしているのか分からず、行方も掴めないというのだ。

「あの人がいれば奈々の暴走も止められるのに……」

『えっ、あの暴走を止められるのか?』

*

翌日、夜空が鎮守府内で使用している私室……。

夜空は未だに夢の中、目覚ましがなったというのに時計を止めた後、またついついうっかり眠ってしまったのだ。

そんな時、部屋の扉がガラつと空き、雷と時雨が一緒に入つて来た。

「しつれいかーん!! あっさですよー♪」

雷は元気いっぱい夜空に向かつてダイブし、雷が乗つかつて来たため夜空は「うぐお!」と小さな悲鳴をあげ、そこでようやく目を覚ましたのだ。

「ほら、提督? もう朝だよ」

「全くもう、お寝坊さんなんだから司令官は! ほら、寝癖直してあげるからジツとしててね!」

「僕は提督の朝食を作るから、その間に布団とか片付けておいて。提督はすぐに着替

えてね」

「じゃあ先ず着替えるから一度出て行つてくれないか?」

まだウトウトしている夜空だが、時雨と雷は夜空の言葉に頷いて一度外に出て行き、夜空はすぐに着替えを済ませて2人を呼び戻す。

「つてあら? 布団片付けちゃったのね」

「あつ、提督、服の襟曲がつてるよ?」

時雨はそつと手を伸ばして夜空の制服の襟を直し、時雨と雷は早速夜空の朝食の調理を開始。

夜空も可能な限り時雨と雷の調理の手伝いを行った。

朝食ができあがり、3人でそれを済ませると3人はそれぞれ仕事の準備を終わらせて雷は暁たちのところへ、夜空と時雨は執務室に向かうことになった。

「それじゃ私は先に行くわね！」

「ああ」

「いつてらっしやい」

すぐに準備を終わらせた雷は2人よりも先に部屋を出て行き、少しした後、夜空と時雨も執務室に向かおうとする。

「はい、提督鞆だよ」

「ああ、ありがとう」

するとこのやり取りを行って夜空はフツと思った……「なんか旦那を見送る嫁さんみたいだな」つと……そんなことを思ったら急に気恥ずかしくなり、ともに時雨の顔が見れなかった。

「ねえ、提督？」

「えっ？ あっ？」

「いつてらっしやいのキスしてあげようか？」

「フアッ!？」

まさかの発言に夜空と、声こそ出さなかったものの驚くエックス……だが、時雨はす

ぐに「冗談だよ」と夜空に言い、彼女は夜空の腕を引っ張って司令室へと向かうのだった。

「まったく、からかうなよ……」

「あつ、そうだ。今日は書類の方を片付けたらリヨーガさん達が開発した新システムのテストを行うことになったから提督もそれに立ち合ってね?」

「テスト? なんのテストだ?」

「うん、なんでもサイバー怪獣の力を艦娘に宿す実験……らしいよ?」

それから……一通り書類整理を終わらせ、夜空と時雨は実験を行う場所へと向かった。

そこでは夕立、荒潮、朝潮はグルマンとリヨーガの新たに開発した艦娘の新システムを試す為に鎮守府の目の前にある海の上に立っていた。

近くにはリヨーガ、グルマン、夜空、時雨、タカトの5人が3人の様子を伺っている。

今回の実験……それはジオデバイザーと艦娘の艦装システムをリンクさせ、サイバー怪獣の力の一部を艦娘が使うというものだった。

これはリヨーガが前回、サイバー怪獣の力を身に纏ったエックスの姿を見て思いついた実験であり、リヨーガとグルマンはある装置を使って夕立たちが新たな力を使うための相手を用意した。

そのある相手とは……「サーベル暴君 マグマ星人」「触覚宇宙人バット星人」「悪質宇宙人メフィラス星人」の実体を持ったホログラムである。

ちなみに、バット星人は見た目が初代、メフィラス星人は2代目だった。

「それにしてもあれだねえ、今回グルマン博士はあんまり活躍できてない感じがするね？」

リョーガはニヤニヤとした笑みをグルマンに向ける。

実際、この実験の発案者はリョーガであり、実体を持ったホログラムなんてものを呼び出せる装置を作ったのもリョーガであるため、彼の言うとおり今回はグルマンはあまり活躍していなかった。

「フン！ そもそもエックスとサイバー怪獣を合体させることに気づいたのは私だぞ！ 私がこの事に気づかなければどうなっていたことか」

「言ってくれるねえ」

リョーガとグルマンはお互いに睨み合うが……「いいからさっさと始めろ」とタカトに注意されて2人は未だに睨み合いながらもホログラムを呼び出した装置を使い、マグマ、バット、メフィラスを自動で動かせる。

「言っておくが3人とも、そいつ等はホログラムと言っても戦闘力は本物と同等だ。

油断しないように」

リョーガは通信で朝潮たちにそのことを伝え、旗艦の朝潮は「了解！」と頷くと3人は戦闘を開始。

「来ます!!」

「ここは私に任せて朝潮ちゃん♪ さて、それじゃ早速使わせてもらおうわね〜」

荒潮は早速ジオデバイザーにサイバー怪獣のカードを装填する。

『サイバーキングバモス、ロードします』

「変貌怪獣 キングバモス」のサイバー怪獣のカードをジオデバイザーにロードさせると荒潮にキングバモスの能力が宿り、主砲から砲口から光の爪が伸び、さらに荒潮の左手は電撃を纏う。

「サイバー怪獣の力が使えるのは一分間のみだ。それを気をつけてくれたまえ」

「りようか〜い」

間延びした声で人懐っこそうな笑みを浮かべる荒潮だが……マグマ星人が腕に装備したサーベルは光線を放った直後、人懐っこそうな笑みから荒潮は獲物を狩るような目つきとなり、彼女は空中へと跳び上がって主砲に生えた爪を構え、目にも止まらぬ速さでマグマ星人の攻撃を避けながら接近。

マグマは荒潮がこちらに向かって来ている彼女に対し、サーベルを振るって荒潮を叩き伏せようとしたが……荒潮は素早く繰り出した電撃を纏った手刀で……サーベルを

マグマごと切り裂いたのだ。

「っ……!!？」

「あらあゝ？ この程度？」

のんびりした口調、しかも笑顔なのだが……目が笑っていない、しかもちよつと血走ってるくらいである。

「てんで期待外れね♪」

そう言うと同時に荒潮の強烈な蹴りがマグマの腹部へと叩き込まれ、そのままマグマの頭を鷲掴みにすると彼女はグイッと引つ張つてマグマの顔面に膝蹴りを叩き込んだ後、爪でマグマを何回も何回も引つ掻きまくつてダメージを与え……トドメとばかりに電撃を纏った手刀を炸裂した。

そして、荒潮の攻撃に耐えきれなくなったマグマは火花を散らして爆発した。

「あらあら、綺麗な火花ねえ」

そんなことを呟く荒潮の表情は相変わらずの笑顔、しかし……その目はまるでゴミを見るかのような目をしており、そんな荒潮を見て夜空たちは……。

「「「ええええええええええ!!!!」」」

タカト、夜空、グルマンが声を揃えてそう叫ぶが……時雨とリョーガは「えっ、別に普通じゃない？」と首を傾げていた。

「むしろ荒潮はアレが普通だけど？」

「どこがだア!!? 何時ものほほんとした雰囲気だっただろう!!?」

実を言うくと、荒潮の戦闘を夜空、タカト、グルマンが実際にまともに見るのは始めてであり、3人が驚くのも無理はなかった。

一方で朝潮は「サイバーブラックキング」のサイバークカードをジオデバイザーに装填し、朝潮はその身に「用心棒怪獣 ブラックキング」の能力を宿す。

『サイバーブラックキング、ロードします』

朝潮は腕に装着されている主砲から砲弾をメフィラスやバットに向かって発射し、2体は朝潮の攻撃を余裕で回避するが……。

「っばおおおおおい!!!」

夕立の膝蹴りがメフィラスの顔面に炸裂し、メフィラスの頭を鷲掴みにすると彼女はそのまま空中に投げ飛ばす。

一方でバットは剣を手に持って朝潮へと向かっていき、剣を振るって彼女へと斬り掛かるのだが……。

朝潮はなんと、バットが振るった剣を腕で防ぎ、バットの持っていた剣はそのまま折られてしまった。

「凄いですね、ブラックキングの力!!」

実際、ある世界では精神が不安定だったとはいえウルトラマンの攻撃をことごとく防いだことのあるブラックキングなのだ。

その防御力を身に宿した朝潮にただの剣如きが通じる筈もないだろう……。

そのまま朝潮はバットに向かってラリアットを決め、倒れ込んだところで朝潮はバットの足を掴んでスイングした後、投げ飛ばす。

投げ飛ばされたバットは水面を転がりながら倒れ込み、ヨロヨロと立ち上がってなんとか反撃しようとする。

「これでトドメです!! ブラックヘルマグマ!!」

だがそれよりも早く朝潮は主砲を構えてトリガーを引くと砲口からマグマ光線「ブラックヘルマグマ」を放ち、ブラックヘルマグマはバットをあっさり飲み込み、バットは悲鳴をあげながら爆発した。

「やりました! 提督!! 見ていただけました!? これが、朝潮型駆逐艦の力なんです!」

「いやそれはブラックキングのちかr……うぐお!」

リョーガがなにかを言いかけたがタカトとグルマンがリョーガを両サイドから殴つたため最後まで言い切ることができなかった。

「朝潮はまだマシな部類なのかもしれないが……お前等揃いも揃って接近戦好きだな」

タカトが苦笑い気味に時雨にそう言うとき、時雨は薄らと笑みを浮かべ……。

「そりゃ、大体の深海棲艦や他の艦娘は普通は接近戦は苦手だからね。僕たちの鎮守府は艦娘が駆逐艦しかいないんだから……」

時雨が言うには殆どの深海棲艦などが接近戦が苦手であるため、時雨たちは接近戦闘ができる訓練をずっと行っていたのだ。

接近戦が得意となれば接近戦が苦手とされる相手に優位に立ち回れるためである。

勿論、だからと言って艦娘本来の戦い方を忘れていい訳ではないため、一応は遠距離戦の訓練もしっかりと行っている。

「僕たち駆逐艦は弱い部類に含まれるからそういった工夫をしないといけないんだ。

みんな大好きな提督の気持ちに應えるためにも……ねっ？」

時雨が笑みを浮かべて夜空の方に振り返ると、夜空は少し気恥ずかしくなったのか、彼はそっぽを向いてしまった。

「アレ？ 提督照れてるの？」

「うるさい」

時雨はそんな夜空の様子にニヤニヤと笑い、夜空の表情を何度も伺おうとするがその度に夜空は時雨から顔を背けて表情を見られないようにする。

「「イチヤつくな」」

また……夕立はというと彼女も早速サイバー怪獣のカードをジオバイザーに装填し、「サイバーガルベロス」の力をその身に宿す。

『サイバーガルベロス、ロードします』

「フィンディッシュタイプビースト ガルベロス」の能力を持った夕立はなんと主砲を……メフィラスに向かって投げつけた。

「投げたア!？」

無論、主砲を投げつけた程度で怯むメフィラスではない。

メフィラスは余裕でそれを腕で弾き飛ばし、メフィラスは右腕を夕立に向けてそこから青い光線を夕立に放つが……光線は夕立はすり抜けてしまう。

そこにいたのは夕立ではなく、ガルベロスの能力を使用して作った彼女の幻覚だったのだ。

「ソロモンの悪夢……見せたげる!!」

そして本物の夕立はメフィラスの背後に回り込んでおり、ガルベロスの力で鋭く伸びた爪でメフィラスの背中を切り裂いた。

『キアアアアアアアア!!』

切り裂かれたダメージで叫び声をあげ、メフィラスは火花を散らして爆発した。

「しゅ……瞬殺……」

「怪獣の力を使つてるとはいえ、お前等ホントに駆逐艦か」

タカトと夜空があまりにも（味方が）一方的過ぎる戦いに戦慄し、2人は「こいつ等ホントに駆逐艦か」と言いたくなる戦い方だった。

いや、朝潮はまだマシな方なのだが……なんというかも……荒潮と夕立が酷かった、色んな意味で。

「まあまあ！ 兎にも角にも実験は大成功！ 早速実用化をしましょう。実用化の準備で次第、他鎮守府にもデータを送らないとね、怪獣が現れた時に対処するために」

リョーガの言葉に夜空は頷き、「早速取りかかってくれ」と彼に頼んだ後、夜空は時雨と一緒に司令室に戻るのだった。

「ああ、ちよつと待ってくれ時雨」

「はい？ なんですかグルマン博士」

いきなりグルマンに呼び止められると時雨は彼から1枚のサイバーカードを手渡される。

「それはサイバー怪獣のカードではないし、君たちが使つても特に意味はないカードだが……そのカードはエックス専用のカードだ。念のためにこれは君に渡しておく」

「このカード……これって……」

時雨はそのカードを見てかなり驚いた様子を見せるが……彼女は頷き、「分かりました」と答えた後、夜空と一緒に今度こそ執務室に戻るのだった。

『「司令官／提督!! 文化祭がしたい!! (でござーやす!!)」』

司令室に戻るや否や……そんなことをいきなり響が前回制作した警備ロボット「ドアダム」と、響が「夕立に着せたい」と言つてワイル○タイガーのスーツを着込んだ夕立頭に鍋を被つた響、なぜかネコミミとメイド服を手に持った奈々がそんなことを夜空に向かつて言い出したのだ。

「……なにこのカオスな光景」

ちなみに夕立が着ているスーツはクソスーツの方ではないのであしからず。

「んっ? 文化祭つて……急にどうしたんだいみんな?」

「いえ、文化祭を開くことで街の人達と艦娘の交流などして頂こうと思ひましてね。

ほら、やはり艦娘……彼女達のことを悪く言う連中も多い。そういった悪いイメージを色んな人達に持たさないためにも……こういった文化祭という場が必要なのではないかと思ひまして……」

そこまで言いかけたところで夜空は「でっ? 本音は?」と尋ねると奈々はその手に持つているネコミミとメイド服を夜空に見せつけるように持ち……。

「第六駆逐隊のネコミミメイドカフェとかスゲーやりたいです」

「はい却下」

奈々の本音を聞いて即座に却下する夜空、それに対して当然奈々は「ええく!!」と不満そうな声をあげる。

「文化祭って言っても金だつてかかるんだぞ? 屋台だつてここにいる人数じゃそんなに出せないだろう」

「心配しなくてもその辺はちゃんと考えてるさ。私の知り合いに是非とも手伝わせてくれという人達がいるからね」

響がそう言いながらサムズアップし、夜空は「響の知り合い」と聞いて少し不安な気持ちになり、その知り合いとは誰なのかと聞いてみたのだが……響は「それは後のお楽しみ」と言つてハブらかした。

「ちなみに私が文化祭をしたいのは他の鎮守府をそういうのをやろうとしてるつていうのを聞いたからだよ。確かウチよりも戦鬪が全くない鎮守府だったね」

「ああ、あそこか……俺も行ったことあるな。確か鈴谷とか熊野とかいるところだったか。まあ、なんにしてもだ……金がかかる以上、そういったことは……」

すると時雨が夜空の服の袖をクイッと引っ張り、夜空は時雨の方へと「んっ?」と顔を振り向かせる。

「提督……僕も、文化祭やつて、みたいかな? ダメ……かな?」

不安な表情を浮かべつつも上目遣いで夜空を見つめる時雨に夜空は……。

*

「よーっしお前等!! 文化祭やるぞお!!」

滅茶苦茶やる気になりました。

「提督さんって時雨ちゃんには甘いよね」

「この鎮守府に着任する前からの付き合いだもんね。」

「できてるにゃ?」

「っていうかそのスイーツ何時ま

ワイル○タイガーの夕立と睦月がそんな会話をしており、2人の会話が偶然耳に入った電はどこかしゅんつとした暗い表情となった。

「電? どうかしたの?」

「い、いえ! なんでもないのです暁お姉ちゃん!」

実を言うと電はこの鎮守府の前提督の秘書官であり、先ほどの2人の会話で夜空と時雨がこの鎮守府に着任した頃のことを思い出したのだ。

(前の、司令官さんは……今、どこでなにをしているのでしょうか……?)

電がそんなことを考えている時、マイクを持った響が食堂に集められたメンバー全員に挨拶をした。

「さて、では文化祭ではそれぞれの班に分かれてそれぞれ自分達がやりたいことをやって貰うよ。ちなみに班分けと班の名前は私が勝手に決めた」

そう言って響は壁にその文化祭の班のチームが書かれた名簿を張りつけ……班分けはこうなっていた。

アベ○ジャーズ組 夜空 時雨 グルマン

イ○ベーターズ 暁 響 電 雷

サ○ダーボルツ 睦月 如月 皋月 村雨

デイフエ○ダーズ 菊月 タカト リョーガ

ニューウオ〇アーズ 文月 朝潮 奈々

「パクってんじゃないわよ名前をお!？」

明らかにどこかで聞いたことのある名前ばかりなのを曉は響にツツコむが……響は「文句は受け付けなないよ」と言つてチームの名前を変えるつもりはさらさらなかった。

その頃……この鎮守府から少し離れた森の中、そこでは一人の青年が森の中からジツと夜空たちの鎮守府を見つめていた。

「文化祭……かつ」

『文化祭……確か、色んなお店を出してみんなで楽しむお祭りなんですよね！でも、盗み聞きはよくないです!』

「聞きたくて聞いたんじゃないよ！君と同化してまだ間もないから……力のコントロールが上手くできなくて……」

一人しかいない筈なのに明らかに誰かと会話を行っている……もしここに彼以外に人がいれば確実に不振に思われる光景である。

『でも、そんなに気になるのなら会いに行けばいいじゃないですか！あなたの仲間達に』

「いや、それはできない……昔の、僕のせいで彼女たちを傷つけたんだ。そのせいであの娘たちは僕のせいで……また仲間や姉妹を失ったかもしれないんだ……」

『それでも、やっぱり会いに行くべきです。あなたが行ったその行動……僕は間違いだとは思いません!』

青年に向かって来るその声に対し、青年は特になにも答えようとはせず……そんな時、鎮守府の出入り口の辺りで電がコソコソと周りをキョロキョロしているのが見えた青年はなぜそんなに不振な行動をとっているのかと疑問に思い、首を傾げる。

「なにしてるの電?」

「ひゃい!?!」

鎮守府から出ようとしていた電は突然背後から声をかけられて慌てて振り返るとそこには暁と響が立っており、電は冷や汗をかきながら慌てふためく。

「出かけるの? それなら私もついて行くわ! 1人じゃ危ないもの」

「え、えーつとそれは……えつと……」

「ついて来られると困るのです!」と思いつながら必死に誤摩化そうとするが……慌てるばかりで中々言葉が浮かんで来ず、焦っている……。

「もう、ダメじゃない電!」

そこに雷が駆けつけ、雷は暁と響に「文化祭の買い出しに行くだけよ」と言い、暁は「それなら自分達も……」と言うのだが雷は首を横に振る。

「暁姉と響姉は鎮守府での文化祭の作業をお願いするわ! 買い出しは私と電でなんと

かするから！」

「そう？ まあ、雷がついてるなら心配いらなかもね。　じゃあ行つてらつしやい！」

変な人には気をつけてね！」

「暁姉じゃないんだから大丈夫よ」

雷が余裕の態度で暁にそう答えると暁は「どういう意味!？」とぶんすかと怒り、電はそんな風に喧嘩する2人を慌てて止める。

「はわわ！　2人とも喧嘩はダメなのです！」

「まっ、兎に角行くわよ電！」

雷は電の手を引いて鎮守府を出て街へと向かつて歩き出し、暁と響はそんな2人を手を振って見送るのだが……どうにも、響は浮かない顔をしていた。

「どうかしたの響？　さつきから喋らないけど……」

「いや、2人ともどうも様子がおかしい気がするね……」

「えっ？」

*

同じ頃、司令室にて……別鎮守府府の提督の男性……「遠藤 壮一（えんどう そういち）」とその秘書官「大鳳型一 番艦 装甲空母 大鳳」が訪れていた。

「それで？ アンタがウチみたいなのザコ鎮守府に何のようだ？」

実を言うと、夜空はこの壮一という人物が大嫌いである。

なぜなら壮一はこの鎮守府……駆逐艦しかいない鎮守府ということ自分で分達のことを格下に見ている節があり、実際にここの鎮守府のことを「ザコ鎮守府」と夜空の目の前で言ったことがあるのだ。

「まあ、そうかつかするなよ。今回はお前に頼みがあつてここに来たんだ」

「頼み？」

「お前のところのエースの夕立、さらに戦闘になると頼もしいと聞く時雨を是非とも俺

の鎮守府に迎え入れたい」

壮一の言う頼みとは要するに「お前のところの優秀な艦娘を寄越せ」というものであり、それを聞いた時雨や夜空は口をポカンつと開け……壮一の勝手な申し出に呆れ果てていた。

「聞いた話によればこの2人は戦艦にも引けを取らないくらいに頼もしい駆逐艦だと聞く。そんな彼女達はこーんな下らない鎮守府に置いておくのは実に勿体ないし……お前が持つにはまさに宝の持ち腐れだ」

「俺なら彼女達を上手く使える」と自信満々に言い放ち、時雨、夕立の引き渡しを要求するが……当然、夜空はこれを断る。

「いいか西崎？ これは彼女達のためでもあるんだ。彼女達のような人材はその人材にあつた鎮守府に行くべきなんだよ。時雨、君もそう思うだろ？」

「残念ですけど……僕も夕立も、ここが気に入ってるんです。お引き取り願います」

時雨も壮一の元に行くつもりなどさらさらなく、夜空はドアダムに壮一を摘み出すように頼む。

『かしくまりいいいいイイイ!!』

ドアダムは言われた通り壮一に掴み掛かつて彼を追い出そうとし、壮一は必死に抵抗するが抵抗空しくズルズルと引きずられて行ってしまふ。

「お、おいなんだこいつ!? 西崎!! 絶対にお前のところの艦娘をウチに引っこ抜いてやるからな!!」

そんな捨て台詞を吐きながら連れて行かれた壮一に、秘書官である大鳳は呆れたような表情を浮かべており、彼女は夜空たちに対して頭を下げた。

「申しわけ有りません、ウチのバk……提督がご迷惑を」

「今自分の提督のことバカって言おうとした?」

「根は悪い人ではないのですが……ちよつと強引なところがあります。もしかしたら時雨さんたちを無理矢理連れて行くという強硬手段に出る可能性もありますので……お気をつけて。私もしつかりとそんなことがないように見張るつもりですが」

少しやつれた様子の大鳳を見ると……夜空と時雨はあの提督の秘書官をやつてる大鳳は大変そうだなと思わずにはいられなかった。

*

数日前、メビウスがゾアムルチとゼットンを相手に戦った海辺にて……。

その海辺の近くにあった洞窟、その中には棲姫が岩にもたれて倒れ込んでいた。

「チツ、まだ回復しないか……」

メビウスによって傷を治してもらい、一命を取り留めた棲姫だったが……それでも怪獣にやられた時のダメージがまだ残っていたため、海に帰るには体力が持ちそうになかったためにこの洞窟の中で身を隠し、身体を休めていたのだ。

「おい!! こつち来てみろよ!! 深海棲艦がいるぜ!!」

そんな時、不良学生と思しき人物が棲姫を見つけ、不良が仲間の不良を2人呼ぶと当然不良たちは驚きの声をあげ、棲姫は舌打ちしてすぐにここから逃げ出そうと立ち上が

るが……。

「っ！」

上手く力が入らず、彼女はその場に座り込んでしまう。

「なんだ？ こいつ弱ってんのか？」

「丁度いい、こいつを叩き潰せば……俺たちヒーローになれるぜ!!」

リーダー格の不良がそう言い放つと不良たちは邪悪な笑みを浮かべて棲姫へと踏み寄り、すかさず彼女の腹部へと強烈な蹴りを叩き込んだのだ。

「がはっ!」

さらに不良の1人が少し大きめの木の棒を発見してそれを拾い上げると棲姫の頭上目掛けてそれを振り下ろし、頭を叩かれる。

「ぐっ……!?!」

彼女は不良達に殺意を込めた視線を送るが……逆にそれは不良たちを煽ることになってしまった。

「なんだその目はこの化け物があ!!」

再び棲姫の腹部に蹴りを叩き込み、苦痛の声をあげる棲姫だったが……そんな時、電と雷がそこに駆けつけたのだ。

「あなた達なにしてるんですか!?!」

「や、やめてください!!」

雷と電が棲姫を庇うように不良たちの前に立ち、それを見てリーダーが「化け物退治の邪魔をすんな!!」と怒鳴るが……。

「この娘は……化け物なんかじゃ、ないのです!!」

「はあ? なに言つて……んっ? もしかして、お前等艦娘か?」

リーダーにそう言い当てられてギクリとする電と雷、するとリーダーは相手を見下すような視線を2人に送る。

「なんだよ、艦娘の癖にそんな化け物庇うのか!? ああ、そうか……お前等も化け物だもんなあ! そりゃ同じ化け物同士、庇い合うのも当然かあ」

「ちよつと!! さつきから聞いてれば化け物化け物つて失礼じゃない!!」

「黙つてろよ化け物!!」

「ちよつ、髪引つ張らないで痛い!?!」

リーダーは反発した雷の髪を引つ張り、他の不良2人もリーダーの命令で電を取り押さえようと迫るが……突然、リーダーの腕を誰かが掴み上げ、リーダーの腹部にその人物に蹴りを叩き込むとリーダーは大きく吹き飛ばされ……そのまま彼は海の中へと「ドボン!」と叩き込まれた。

「な、なんだテメーは!?!」

「なんだはこつちだよ。その娘たちに、手を出すな」

その人物は鎮守府を見つめていたあの青年であり、青年は殴り掛かって来た不良の1人の攻撃をあつさりとかわし、拳一発をその不良に叩き込むと不良は鼻から鼻血を出して気絶した。

「この野郎!!」

最後に残った不良が青年に背後から拳を振るつたが彼はしやがみ込んでそれを回避し、背後へと回り込むと不良の膝の後ろを蹴つて不良のバランスを崩し、膝を突いたところから青年の手刀が不良の首筋に当てられ、不良はそのまま気を失って倒れこむ。

「はあ………ついで来て正解だった」

「あ、あなた………」

「えっ? えっ? まさか………そう、なのですか………?」

雷と電は青年の姿を見て目を見開いて驚いた様子を見せ………やがて、2人は目尻に涙を浮かべると………。

「し、しれいk『ウラアアアアアアアア!!!!』」

いきなり現れた響の飛び蹴りが青年に炸裂し、青年は「ぐはああああ!!?」という悲鳴をあげながら吹き飛ばされた。

「地獄からの使者!! 駆逐艦 響!!」

「てつててれー♪ って言ってる場合じゃない！」

そこに現れたのは暁と響、2人とも様子がおかしいと思った雷と電について来たのだ。

「大丈夫だったかい2人とも？ 遠くから今にも2人を誘拐しそうなロリコンっぽい奴

を見かけたから撲滅しといたよ」

「いや、撲滅つて……相手をよく見なさいよ響姉!!」

「えっ?」

響は雷に言われて先ほど自分が蹴り飛ばした青年の方へと顔を向けると彼女は青年の姿を見て雷や電と同じように驚いた表情を見せた。

「えっ? 電……雷、あれつて……」

「そうよ……あの人は……」

「司令官さーん!!」

電が駆け出して誰よりも先に起き上がったあの青年の元へと駆け出して行くと彼女は青年へと抱きつき、青年は見事に電をキャッチした。

「おっと、えつと……その、久しぶり……だね? 電」

「うええええん! 司令官ずつと会いたかったのですよお! 今までどこに行つてた

のですか~!」

電は泣きじやくりながら青年にがっちり抱きつき、青年は困り顔を浮かべつつも電の頭を優しく撫でる。

「それで……司令官……。 いや、今は『風上 光（かざかみ ひかり）』さんと呼ばばいいのかな？ どうしてこんなところに？」

そう、彼こそが今現在、響達のいる鎮守府の……夜空の前任者である前提督の「風上 光」である。

「響も……久しぶりだね。 まあ、ちよつと……そこにいる娘に用があつてね」

光は視線を棲姫の方へと顔を向けるとそれに釣られて暁たちも一斉に棲姫の方へと顔を向け、彼女の姿を見て暁がハツとしたような顔を浮かべ、彼女は雷に掴み掛かって一体これはどういうことなのかの説明を求めた。

「雷！ あなた、深海棲艦を匿つてたの!？」

「えつと……それは……」

どう説明すればいいのか思い悩む雷だが……そこに電が暁と雷の間に割り込むように入ってくる。

「暁お姉ちゃん！ 雷お姉ちゃんを怒らないでほしいのです！ 雷お姉ちゃんはただ、電の我俣を聞いてくれただけで……」

「見たところ、その深海棲艦は随分弱つてるらしい。 電のことだ、大方……そんな彼

女を電は助けたいと思つたんだらう？」

響が自分の大体の予想を言うど電は静かに頷き、彼女は棲姫へと駆け寄る。

「…………お姉ちゃんたち…………どうか、お願いです！ この事は、誰にも言わないでほしいのです！ こんなに弱つてるのに…………」

「…………お前、なぜそこまで私を…………。 敵なんだぞ、私はお前達の!! お前等の仲間だつて沈めたこともある！ それなのになぜ私を助けようとする!？」

棲姫は分からなかった、なぜ彼女達の仲間を奪つたこともある自分を…………電は必死に救おうとするのか、それが全く理解できず、彼女は怒鳴るように電にそのことについて問いかけた。

「確かに、そうなのかもしれない。でも…………敵だからつて苦しんでる人を放つておこなんで、できないのです」

電はどこことなく悲しげな表情を浮かべ、そんな彼女の表情を見た棲姫は彼女が本気でそう言っているのだと分かった。

そして…………電は暁たちに「この事は誰にも言わないでください!!」と頭を下げた頼むのだが…………。

「…………無理よ」

暁の返答は…………「無理」というものだった。

これを聞いて電や雷はシヨックを受けるが……次に暁から出た言葉は……。

「弱ってる娘を放っておくなんて……無理に決まってるじゃない！」

「えっ？」

暁の言葉に雷と電はキョトンつとし、暁は「響もそれでいいわね？」と響に問いかけると彼女は無言で頷き、サムズアップして見せる。

「なんとたつて私、お姉さんなんだし、妹たちが助けたい人なら可能な限りお手伝いするわ！ 司令官も、いいでしょ！」

「えっ？ あ、うん……でも……」

「えっへん！」と胸を張る暁、しかし……そんな彼女達を見て光は不安を抱かずにはいられなかった。

「本当にそれでいいのか」つと……棲姫に対してそんな風に手を差し伸べても、もしも……彼女に裏切られたらどうするのだという不安が彼の中には会った。

そんな時、光だけに再びあの声が聞こえて来る。

『いい娘たちですね、あなたの仲間は』

『いや、僕はもう……彼女達の仲間じゃない』

『またそんなこと言つて……』

兎に角、先ずは人に見られた以上、棲姫を別の場所へと映す必要があるため、一同は

ここから一刻も早く離れるべきだと考え、場所を移そうとしたその時である。「動かないでください」

ボウガンを構えた大鳳とその提督の壮一……そして彼が引き連れた艦娘たち……天龍と……「金剛型3番艦 戦艦 榛名」の4人が、光達の前に現れたのだ。

「さて、最近はあるの鎮守府の電と雷が不審な行動を取っていると聞いていたが……まさかこんな秘密を隠していたとはな」

壮一は棲姫に見下したような視線を送っていると……その隣に光が立っていることに気付き、壮一は光を強く睨みつける。

「成る程……そういうことか。流石はアンタの元部下だな。こういうバカなことするのと一緒にとは！ お前達はまだ懲りないらしい」

棲姫や榛名、天龍は壮一の言っている意味が理解できず、首を傾げると壮一はニヤリと口元に笑みを浮かべ、一体なんの話をしているのか、彼は彼女等に向かつて語り始めた。

「そう、お前もかつて……電と同じように怪我をした深海棲艦を自分の部下に黙って匿まい、そして裏切られた!!」

「えっ!?! ということはあの人……」

榛名の言葉に壮一は頷き、話の続きを彼女達に聞かせる。

「それからその深海棲艦はこいつのいた鎮守府を襲撃し、艦娘も大したことがなかったとはいえ、怪我人を多数出した！そしてあいつの元部下が今、同じ過ちを繰り返そうとしている」

壮一はどこから取り出したカメラで光達と棲姫と一緒にいるところを写真に収めると壮一は大鳳たちに棲姫を攻撃をするように指示を出す。

「同じ過ちが繰り返される前に、そいつを始末しろお!!」

天龍、榛名、大鳳は壮一の命令に「了解」と答えると棲姫に攻撃を仕掛けようとするが……瞬時に電が艦装を出現させて装着し、主砲を構える。

「そこを退いてください。数ではそちらが勝つてるとはいえ、駆逐艦では私たちに勝つことなど……」

「いえ、退きません!! この娘は……絶対に守るのです!!」

「電の言うとおり!! ここでこの娘を見捨てるようじゃ、レディの名がすたるつてもものよー!」

電に続き暁、響、雷が艦装を取り出して棲姫を庇うように立ち、その光景を見て壮一たちにも……光にも、どうしてそこまでして棲姫を庇うのか、全く理解できなかった。

「みんな、あんなことがあったのに……どうしてそこまでその娘を?」

「信じる心を、失いたくないから……なのです。司令官だって……そうでしょう?」

「つ……」

電にそう言われてなにも言えない光、そんな時、あの声がまた光に語りかけて来た。

『……優しさを失わないでくれ。弱い者をいたわり、互いに助け合い、どここの国の人達とも仲良くなるうとする気持ちを忘れないでくれ。例えその気持ちが何十回、何百回裏切られようとも……』

「えっ?」

『僕の、兄さんの言葉です! 光さん、あなたにも……かつてはあつたんじやないんですか? そんな気持ち』

その声の主の言葉を受け、光は顔を俯かせる。

一方で壮一は中々棲姫の前を退かない電たちに苛立ち、自分が持つ拳銃を取り出して電たちへと向ける。

「おい!! ガキになに銃を向けてんだよ!」

天龍が流石に電たちに銃を向けるのはどうかと思い、早くしまおうように言うのだが……壮一は銃をしまう気配はない。

「さっさと退け! さもなくばお前達も撃つぞ」

「退きません」

「このまま反逆罪としてお前たちをこのまま消してもいいんだぞ?」

「いいねそれ、私の本のタイトルにしよう。『コード〇アス 反逆の響』っていうタイトルで」

「それパクリ!?」と暁がツツコミを響に入れる。

「チツ、仕方が無い。構うことはない、そいつ等をさっさと押し退かして駆逐棲姫を始末しろ!」

「仕方がありません……こうなったら力づくでそこを退いてもらいます」

大鳳が壮一の指示を受けてボウガンを構え……ボウガンから幾つもの艦隊機を3機射出し、艦載機は電たちは棲姫を守る為に艦載機を撃ち落とそうと主砲を構えるが……。

すかさず天龍と榛名が素早く電たちに接近し、彼女たちの腕を掴み上げて動きを封じてしまう。

「なっ! 離してよ!!」

「……悪いな」

「大丈夫です、彼女は捕虜として連れて行くだけですから」

「オイコラ大鳳、俺は奴を倒せと命じたんだ。捕虜なんかにするつもりはないぞ」

「ですが、彼女を尋問すれば敵の情報を掴める可能性が……」

しかし、大鳳の提案は壮一は「そんなものはいらん!!」と却下し、兎に角棲姫の始末

を優先しようとする。

「ただでさえ最近は怪獣の出現率があがっているんだ。深海棲艦はもう絶滅寸前、少しでも今の内に敵を減らすんだ!!」

壮一の言葉に大鳳は不満そうな表情を見せ、彼女は止むなく艦載機で棲姫を攻撃させようとしたその時……。

「夕立、あの艦載機の翼をへし折って来い」

「っばい!!」

そこに突然現れた夕立が跳び上がって斧に変形させた主砲で3機の艦載機の翼を素早く切り裂いて撃墜し、彼女は斧を天龍に向ける。

「また会ったっばい? 天龍さん……その手を離すっばい」

「お前……」

さらに、現れたのは夕立だけではなく……夜空と奈々……そして彼の鎮守府に所属する艦娘全員だった。

「き、貴様あ……! 俺の邪魔をするのか!」

「まつ、そうなるかね」

夜空たちは電たちの元に駆け寄り、電は「どうして……」と首を傾げて尋ねると……

夜空曰く「最初から全部知ってた」かららしい。

なんでも、最近の雷と電の様子がおかしいことには夜空も感付いたらしく、もしかすれば壮一がこの事を探る可能性があるかもしれないと考え、彼は今……ここに仲間達と共に駆けつけたのだ。

「はあ、まさか光までいるとは……随分とお久しぶりですね」
「奈々……」

光は奈々の顔を見て少し気まずそうにするが……奈々は「まつ、話は後回しでいいです」と言つて壮一のたちの方へと彼女は振り返る。

「どいつもこいつも俺の邪魔をしやがって!! そんなにその化け物を庇いたいのか!」
昔あんなことがあったのに!!」

「でも、同じことが起こるとは限らない」

満潮がそう呟くと他の者達も彼女に同意するように頷き、夜空のところの艦娘たちは全員、棲姫を守る姿勢を見せていた。

「俺の部下が、俺の仲間が、俺たちの家族が守りたいって言ってるんだ。その家族が守りたいものを、俺たちも守る!」

その光景を見た光は、薄らと口元に笑みを浮かべて彼女達と同じように、棲姫を守るように壮一たちの前に立ち塞がったのだ。

「お帰りなさい、光提督」

如月が光の姿を見てそう言うのと他の艦娘たちも同じように「お帰りなさい」と光に伝え、光は彼女達に対して力強く頷いた。

「どうして、そんなに私を……」

棲姫は電や暁たちだけでなく、他の者達も彼女を守ろうとすることに驚きを隠せなかった。

「どう、して……そこまでして……私を？」

「だって……もう、電たちとは……あなたは友達なのです！　友達の友達は友達、だからみんなも、あなたを守ろうとするのですよ！」

「私が……お前達の友達？」

電は満面の笑顔で「はいなのです！」と頷き、彼女を手を差し伸べ、棲姫は戸惑いつつもその手を掴もうと手を伸ばすのだが……そんな時。

「っ!？」

「……えっ?」

棲姫の背後から誰かが……彼女を撃ち抜いたのだ。

「あっ……」

そして……棲姫は電の手を掴むことができず、彼女はお腹から血を大量に流しその場に倒れ込んだ。

「そ……んな……。 棲姫……ちゃん？」

この突然の出来事にはこの場にいた全員が……壮一すら驚愕した。

「棲姫ちゃん……！ 棲姫ちゃん……！」

電は必死に棲姫に向かって呼びかけるが……棲姫は電の手を強く掴む。

「あり……が、とう……」

それだけを言うとうと棲姫は静かに目を閉じ、彼女は息を静かに引き取った。

「そん……な、嘘……ですよね、棲姫ちゃん……。 う……うう……うわあああああ

あああああ!!!」

電は大声をあげながら泣き叫び、夜空たちは一体誰が彼女を殺したのか辺りを見渡すが……周りにはそれらしき人物が誰もいなかった。

その時である、突然地響きが鳴り……地面から棲姫に封印されていたゼットンとゾアムルチが復活したのだ。

ゼットンとゾアムルチが復活すると同時に、雨が突然降り始める。

「なんで……こんな時に怪獣が現れる！」

「棲姫ちゃんが……封印していたのです。 あの怪獣たちを……」

それを聞いた壮一は「なに？」と首を傾げ……そこで彼は理解した。

自分がやろうとしたことは、あの怪獣たちを復活させることを意味していたのだと

……。

そう考えると壮一はぞつとした、自分があの怪獣たちを呼び起こしたかもしれないと考えると……。

「だが、どちらにせよあの怪獣たちを呼び出したようなものかもしれない。大鳳、榛名、

天龍！ あの怪獣共を倒せ!!」

「お前達も頼む、あの怪獣たちを街には絶対に行かせるな!!」

『了解!!』

壮一と夜空の指示で彼女達は一齐にゼットンとゾアムルチの元へと向かい、攻撃を始める。

しかし、棲姫に抱きついて泣きじやくる電と……それを心配そうに見守る暁、響、雷はそこを動かそうとはしなかった。

その事については夜空もとやかく言うつもりはなく、今はそつとしておこうと思うのだった。

一方、ゼットンとゾアムルチを相手に戦う艦娘たちは……。

「こんな奴ら！ サイバー怪獣の力で一気に決めてやる！」

臯月はサイバーカードを取り出して使用しようとするが菊月が慌ててそれを止める。

「いや待て！ サイバー怪獣の力は一分しか持たないんだぞ、もつと慎重に使え！」

「で、でも怪獣が今回は2体もいるんだよ!？」

そんな時、菊月と皐月に向かってゼットンが火球を放ち……ゼットンの攻撃に気づいた2人は慌てて回避しようとするが……このままでは間に合わない。

『サイバーガルラ、ロードします』

そんな時、菊月と皐月の前に睦月が現れ、「サイバーガルラ」のカードをジオデバイザーに呼び込ませて「超古代怪獣 ガルラ」の力をその身に宿し、周囲にバリアを発生させてゼットンの火球を防ぐ。

「2人とも大丈夫!？」

「うん、助かったよ睦月姉さん」

「よし、満潮! 如月、お前達はサイバーカードを使用して奴を攻撃してくれ!」

菊月の指示に「了解!」と2人は答え、如月と満潮はサイバーカードをジオデバイザーに装填する。

『サイバーグビラ、ロードします』

『サイバーサラマンドラ、ロードします』

「深海怪獣 グビラ」の力を満潮に、「再生怪獣 サラマンドラ」の力が如月に宿り、満潮が手に持つ主砲がドリルへと変わり、満潮はドリルを前に突き出すとそこから強力な光線が放たれてゾアムルチに直撃する。

「これでも喰らってなさい!!」

「グアアアア!!」

さらにそこに榛名の放った砲弾がゼットンの足に直撃し、流石に戦艦クラスの攻撃は多少は効いたらしく、ゼットンは足下をフラつかせる。

フラついたところで如月が主砲から放った火炎がゼットンに襲いかかるが……ゼットンは鬱陶しそうにするだけでまるで効果がなかった。

「ゼツ……トン！」

ゼットンは彼女達に向けて火球を向けて何発も発射し、先ほどの攻撃で怒ったゾアムルチも口から光線を吐き出して彼女達を攻撃する。

しかし、睦月がガラルの力でバリアを可能な限り巨大化させて張り巡らせ、必死に彼女達を守るが……間もなく1分の時間制限を切ってしまう。

「う、ううううう……もう、時間が……!」

そんな苦戦する彼女達の様子を見て、夜空は「ここは任せる」と奈々に頼んだ後、彼女は領き、夜空はどこかへと駆け出して行く。

「彼は一体どこへ!」

「彼女達を助ける……ですよ」

「えっ?」

そして夜空は人気の無い場所へと行くとエクステバイザーを取り出す。

「行くぞエックス、ユナイトだ！」

『よしー！』

エクステバイザーの上部ボタンを押し、側面のパーツをX字に展開したXモードに変形させるとエックスのスパークドールズが出現し、リードさせた後、夜空はエクステバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエックスとユナイトします』

「エックスーーーーー!!!」

すると夜空は光に包まれ、その光は「ウルトラマンエックス」となるとエックスは地上へと降り立った。

『エックス、ユナイトッド』

『シャア!!』

エックスはゼットンとゾアムルチに向かって光エネルギーを矢じり型にして放つ「Xスラッシュ」をゼットンとゾアムルチに向かって放ち、直撃を受けた2体は睦月の攻撃をやめてエックスに敵意を向ける。

『シユアー!』

エックスは駆け出してゼットンに蹴りを繰り返すがゼットンはそれを受け流して

エックスの胸部にチョップを叩き込み、さらに横からゾアムルチの尻尾攻撃が繰り出されてエックスは吹き飛ばされてしまう。

『ウアツ!?!』

ゾアムルチは光線を放ってエックスを攻撃するがエックスはそれをどうにか避けてジャンプしてゾアムルチに跳び蹴りを喰らわせる。

「ギシャアア!!?!」

その直後に背後からゼットンに背中を殴りつけられ、膝を突くエックス。

そのままゼットンは後ろからエックスの首を締め上げる。

『グアツ……!!?!』

しかしゼットンの腹部に肘打ちを叩き込んで怯んだところでどうにかゼットンの高速から抜け出し、体制を立て直すとエックスは再びゼットンに向かって駆け出して行く。

『デアツ!』

エックスはゼットンに掴み掛かるとエックスはゼットンの肩にチョップを叩き込むがゼットンはエックスを振り払って彼を殴りつけ、さらには体当たりをしてエックスを突き飛ばす。

『グウ!?!』

「エックスス！ 一気に決めるぞ！」

『分かった！』

両腕を胸の前でX字にクロスさせて発射する「ザナデイウム光線」をゼットンに向かって放つが……。

『「ザナデイウム光線!!」』

「行けない!!」

それを見た光がそう叫ぶが時既に遅し……ゼットンはエックスの光線を吸収し、それを波状光線としてエックスに撃ち返して来たのだ。

『「なに!?!」』

エックスは慌てて壁状に展開する「Xバリアウォール」でゼットンの攻撃を防ぐが……すぐに碎かれてしまい波状光線をエックスは受けて吹き飛ばされてしまう。

『「ウアアアアア!!」』

それを見ていた光はこのままではまずいと感じ、どこかに行こうとするが……それよりも先に光は電たちの方へと駆け寄る。

「電……」

「司令官……さん」

「悲しい気持ちは分かる。 だけど……今は大変なことになってる」

未だに涙を流し続ける電にそう語りかける光。

「みんなが、戦ってるんだ」

「……」

電は涙を拭って頷き、暁たちも彼女に対して頷くと彼女達は仲間達の元へと駆け出して行った。

それを見届けた光もまた、どこかへと駆け出して行き……突然の行動に奈々は「光！どこへ!？」と言うが光には奈々の声が届かなかった。

そして光は夜空と同じように人気のない場所に行くと彼は左腕を構え、そこに赤いブレス……「メビウスブレス」が出現する。

「メビウス!!」

そして右手でメビウスブレスのクリスタルサークルを回転させてそれを掲げると光は「ウルトラマンメビウス」へと変身したのだ。

「あれは……」

「新しい……ウルトラマン?」

朝潮と満潮がメビウスを見てそう呟き、メビウスはゾアムルチに駆け出して後ろからゾアムルチに掴み掛かる。

「ギシャアアア!!」

ゾアムルチはメビウスをどうにか振り払って腕を振り上げメビウスを殴りつけようとするがメビウスはゾアムルチの腕を掴んで背負い投げを繰り出す。

『セアツ!』

そのままゾアムルチに追い打ちをかけようとするメビウスだったが……後ろからゼットンがメビウスに掴み掛かって無理矢理自分の方へと振り返らせるとゼットンはチョップをメビウスの胸部に叩き込む。

『グウ!?!』

『シユア!!』

だがその直後にエックスの跳び蹴りがゼットンに繰り出されるのだが……ゼットンはそれを受け流して近距離からの火球をエックスに撃ち込む。

『グアツ!?!』

さらにゾアムルチの光線がメビウスに、ゼットンの火球がエックスに放たれ……2人は2体の攻撃の直撃を受けてその場に膝を突いてしまう。

「大丈夫? 電?」

一方で雷は電が戦闘に参加できるのか大丈夫かと心配していたが……彼女は涙を拭き去る。

「大丈夫なのです! エックスさんもあのウルトラマンさんも、助けて見せるのです!

電の本気を見るのです！」

電がそう叫ぶと同時に……降っていた雨が止み、太陽の光が差し込む。

「よし、サイバーカードを使ってウルトラマンを援護よ！」

その電の表情には力強さが籠っており、暁、響、雷、電が並び立つと4人はジオデバイザーにそれぞれのサイバーカードを装填する。

「さあ、第六駆逐隊の力見せつけてやるわよ！」

「「おー!!」」

戦闘BGM「バトル・フィールド」

『サイバーモモザゴン、ロードします』

響は「くいしんぼう怪獣 モモザゴン」の力をその身に宿し、主砲から怪音波をゾアムルチに向かって放つ。

「グアアアア!!」

その怪音波にゾアムルチは耳を塞いでもがき、その隙に今度は暁がサイバーカードをジオデバイザーに装填する。

『サイバーザラガス、ロードします』

「つてえー!!」

「変身怪獣 ザラガス」の力を宿した暁は主砲から砲弾をゾアムルチに向かって発射し、

それがゾアムルチの目の前で目の前が光り輝いたかと思うとゾアムルチはその光に目をやられて視界を防がれ……地面を倒れ込んでしまう。

「ギシャアア……」

ゾアムルチは目が見えなくなり、隙だらけとなってしまう。

『サイバーネロンガ、ロードします』

『サイバーエレキング、ロードします』

雷は「透明怪獣ネロンガ」、電は「宇宙怪獣エレキング」のカードをロードさせる。

さらにそこに時雨、夕立も加わってサイバーカードをジオデバイザーに装填。

『サイバーガルベロス、ロードします』

『サイバーゴモラ、ロードします』

ガルベロスの力とゴモラの力を夕立と時雨は宿し、4人は主砲を構えて一斉にゾアムルチに向かってそれぞれの攻撃を発射する。

「ゴモラ振動波!!」

「ガルベロス火炎弾!!」

「ネロンガ電撃光線!!」

「エレキング電撃波!!」 なのです!」

時雨、夕立、雷、電の攻撃が一斉にゾアムルチに放たれ……直撃を受けたゾアムルチ

は悲鳴をあげて爆発した。

「グアアアアアアアアアアアア!!!!」

「…………ごめん、なさい…………なのです」

ゾアムルチを倒した電は、そう静かに呟いた。

「エックス!! こっちは片付いたよ! それと、このカードを!!」

時雨がエックスにそう伝えると彼女はジオバイザーを使ってエックスにあの時、グルマンから渡されたカードを送信して送り、夜空は時雨から渡されたカードを受け取る。

「これは…………サイバー怪獣じゃない?」

『成る程な、君たちの絆という訳か』

「よし、行くぞエックス!」

『おう!』

夜空は迷う事無く時雨から渡されたカードをエクスバイザーに装填させる。

『駆逐艦 時雨 ロードします』

するとエックスはメインカラーは黒で他のモンスアーマーと同様に胴体の中央部分にはX字の文字が刻まれており、その手には時雨が持つ2つの主砲が握られる。

また肩部はゴモラーマーよりも鋭利に尖ったデザインをしており、太もも部分には

時雨の艀装と同じ魚雷を撃ち込む為の装備もある鎧……。

『駆逐艦 時雨アーマー アクティブ!』

エックスは時雨の力を宿した鎧……。「時雨アーマー」をその身に纏ったのだ。

挿入歌 「ウルトラマンX」

同時にメビウスも炎の紋章を纏った「バーニングブレイブ」へとパワーアップする。

エックスは主砲を反対に持ってトンファーのように手に持ち、ゼットンに向かって駆け出して主砲でゼットンに殴り掛かり、ゼットンは両腕で交差して攻撃を防ぐが結局はゼットンは殴り飛ばされてしまい、ゼットンは地面を転がる。

「ゼッ……トン」

ゼットンは火球をエックスに向かって放つがエックスは主砲を元の状態ですてて砲弾を放ち、ゼットンの火球を相殺する。

『セアッ!』

さらにそこにメビウスの跳び蹴りが炸裂し、倒れ込んだゼットンの足下を掴んでスイングし、ゼットンを空中へと投げ飛ばす。

『デアッ!』

エックスは再び主砲を反対に持ち、跳び上がってゼットンよりも高く空中へと飛ぶとそのまま急降下しながらゼットンを殴りつけ……ゼットンは地面へとたたき落される。

『シヤア!!』

挿入歌「ウルトラマンメビウス」

しかしそれでも尚ゼットンには立ち上がり、火球をメビウスとエックスに向かって放つが2人はそれを避け……メビウスはゼットンに向かってジャンプして勢いをつけた拳をゼットンの顔面に叩き込む。

『シユア!!』

メビウスはゼットンの胸部に何発も拳を叩き込んだ後、ゼットンに回し蹴りを喰らわせる。

『アア!』

ゼットンはどうか反撃しようと火球を撃とうとするが……それよりも先にエックスに顔を主砲で撃たれ、ゼットンの顔が焼け焦げてしまう。

「フィロロロロ!?!」

メビウスとエックスは並び立ち、メビウスはメビウスブレスから発生した炎のエネルギーを胸の部分に集中させて、巨大な火球を敵に放つ「メビュームバースト」を繰り出す。

「バーストデストロイヤー!!」

エックスは主砲にエネルギーをチャージさせ……それをゼットンに向けて発射する

「バーストデストロイヤー」を発射し、ゼットンが……2人の技を同時に防ぎ切ることとはできず、ゼットンはバリアを砕かれて2人の攻撃を受け……火花を散らして倒れ爆発した。

「ゼッ……トン」

メビウスとエックスはゼットンを倒し、2人は互いに顔を見合わせて互いに頷き合うのだった。

*

「君が、ウルトラマンエックスだったのか……」

「そういうあなたは……あのウルトラマンだったんですね」

その後、2人は変身を解いて元の姿に戻ると光はメビウスブレスを出現させてそれを夜空に見せる。

「彼の名は、ウルトラマンメビウス。彼はある者を追ってこことは違う世界から来たらしいんだ」

「ある、者……?」

夜空の言葉に光は静かに頷く。

*

その後……電は棲姫の墓を建てた。

彼女はそのお墓にしばらく手を合わせた後、電は立ち上がり「じゃあ、また来ますね」とそれだけを言っつてその場を立ち去るのだった。

第3・5話 『番外編』

小ネタその1 提督が鎮守府に着任しました。

「さて、今日からここで艦娘たちの提督をすることになるのか……」

「しかも私は副司令つと……とところで光？ 最初は初期艦を決めないといけないのですが……誰にします？」

初期艦とは提督が鎮守府に着任した際に決めなければいけない艦娘のことであり、初期艦は吹雪、叢雲、五月雨、電、漣の5人の中から1人選び、無条件で着任する艦娘たちのことである。

「可愛い女の子が5人もいるのに1人しか選べないなんて……上層部脅して全員無理矢理着任させましょうか」

「やったら怒るよ？ それは流石に……」

「はい。でつ？ 光は誰を初期艦に選ぶんですか？」

取りあえず、自分と相性のいい艦娘を選ぶべきだと光は考え……取りあえず、知り合いかから勧められた「電」という艦娘を初期艦にしようと考え、光は彼女を選んだ。

「でつ？ 電を選んだはいいけどこの後どうすればいいの？」

「先ずは工廠に行くらしいですね。しばらく待ってれば電ちゃんも建造が完了するそうですね。」

「初期艦は資材無しで建造されるんだね。」

取りあえず、電と会えるのを楽しみにしつつ2人は工廠に向かって1分ほど待った後、建造を完了電が出て来た。

「電です、どうかよろしくお願いします。」

「かわいいいいいいいいいいい!!!」

「はにゃー……!!!」

挨拶をしている途中で、電は奈々に抱きつかれて頬ずりをしまくる。

その際、興奮する奈々の吐息が電の耳に辺り、電は顔を赤らめて恥ずかしそうにする。

「ひゃ、ひゃあ……////あ、あのう、息が……////」

「いやあ!! やっぱり実際に会ってみるとガチで可愛いですねえ! 電ちゃん後で一緒にお風呂入りましょう!! そして今夜は一緒に寝ましょうねえ。いやあー、どうせなら全員が良かったですけど電ちゃんだけでも私の心は満たされますねー」

「奈々、彼女……凄く困ってるから早く離してあげて」

呆れたような視線を向けつつ光は電を離すように奈々に言い、奈々は不満そうな表情を浮かべつつ渋々彼女を離すのだった。

*

小ネタその2 建造

「それでは司令官さん、先ずは建造を……」

「できないよ？ 建造するための資材がないもの」

「えっ!？」

そもそも自分達の担当する海域は敵が殆ど出ない、そのためしばらくの間は建造も無しで書類仕事などを主にこなしていかなないというのだ。

もう少しすれば資材が送られて来るといのだが……資材が送られるのは恐らくは

2か月も先とのことだった。

「そう……なの、ですか……」

それを聞いて電はしゅんつと少し悲しそうな表情を浮かべるが……すぐに彼女はハツとなつて笑顔を浮かべて「それでは早速お仕事のお手伝いするのです！」と言い出すが……光と奈々は顔を見合わせ……。

「いや、仕事は僕で一人でもいいよ。電は奈々と一緒に街にでも出かけて遊んで来るといい。まだ子供なんだからね」

「で、でも……！　せめて司令官さんのお仕事くらいは手伝いたいです」

「うーん……じゃあやつぱり奈々と遊んできて。子供は遊ぶのが仕事なもの」

光は奈々に「それじゃ電をよろしくね」と頼むと彼女はビシつと敬礼して「了解！」と返事をした後、電と手を繋いで街の方へと歩いて行くのだった。

ただ……やはり電は戸惑いがちであったが……。

「つしゃあ!!　電ちゃんとデートお!!　テンションあがってきたあああああああ

!!!」

「程々にね。度が過ぎたらお説教だから」

「は、はい……」

その後、光は奈々と電を見送った後、「さてと……」と呟いた後、彼はその場を歩き去

るのだった。

*

「ただいま。 いやあ、電ちゃん楽しかったですか？」

「はい!! 映画とか面白かったのです! エイジ・オブ・ウル○ロン! 次のアン○マンも楽しみなのです!」

「そんな会話をしながら奈々と電が鎮守府に帰還し、執務室に入るとそこには……。」

「「「お帰り」」」

彼女の姉たちである暁、響、雷……そして司令官の光が2人を出迎えたのだ。

「ウエイ!」

あれ……資材がないから確か建造できないって言ってなかった……なんてことを思う奈々と電は思い、そんな彼女達の考えを察したのか光がぐすりと笑みを浮かべながらなぜ、暁たちがここにいるのかを語った。

「やつぱり……僕と奈々がいると言つても何時も電に構つてられないと思つてね。だから寂しい想いをさせないために……無理矢理遠征に行つて資材調達してきた」

「無理矢理調達してきた!? 遠征行くにしてもそれをするためには出現率は少ないといえ深海棲艦を倒す必要があつた筈ですよ!? その辺はどうしたのですか!」

「いやあ、まあ……倒しきれはしなかつたけどね。ボートに乗つて取りあえず全員追いつて道を無理矢理こじ開けて取つて来たんだよ……」

「アンタにもんだよ……」とこの場に全員が光の発言に驚き、そう思わずにはいられなかつた。

ただ、電は自分のために仲間を……しかも自分の大切な姉妹に会わせてくれた光に感謝せずにはいられなかつた。

そして電は暁、響、雷の方へと視線を向かせると……艦娘として生まれ変わり、また自分の大好きな姉妹に会えたことが嬉しく、ついつい泣き出してしまった。

「ちよつ、電なんで泣くの!？」

「うえ……だつて……お姉ちゃんたちに会えたのが嬉しくて……ひつく」

「ま、全くもう! 電つたら泣き虫なんだから。そんなんじや一人前のレディーにはなれないわよ?」

「そういう姉さんも涙目だよ」

雷、電、暁、響の順に4人はそんな会話を繰り返り広げ、光と奈々はそんな彼女達を微笑ましく見守るのだった。

「でつ? 司令官つて結局何者なんだい?」

「ああ、実は僕は昔雷に打たれてね……。その際スピー〇フォースというものにアクセスできるようになって超高速で動けるように……」

「今の世の中だとありそうだから変な嘘言うのやめてくださいよ光」

冗談を言う光にすかさず奈々がツツコミを入れ、光は一度咳払いした後、ちゃんと自分が何者であるかを響たちへと改めて説明する。

「要するに超人血清を射たれて僕はスーパーソル……」

「だから嘘を言わないでくださいよ!!」

「まあ、取りあえず……飯食つて映画見て寝た結果だつて思つておいて」

光は笑顔でそう言うが……当然、響たちは「いやそんな説明で納得できるか」と思う

のだった。

小ネタその3 壮一の鎮守府。

「あー、クソツ!! イライラする!! 西崎の野郎……いつか絶対夕立と時雨を俺のところに着任させてやるからな!」

「荒れてますねえ、提督」

「まあ、色々と思い通りにならなくて苛立ってるんでしよう」

大鳳と榛名が苛立った様子の壮一を見ながら2人はそんな会話をしており、榛名はそんなに夕立と時雨が欲しいのかと疑問に思い首を傾げる。

「そりやそうですよ。ああ見えても提督、一刻も早く私たちを戦いから解放させようと必死なんですから」

「えっ?」

「優秀な艦娘が欲しいのも、敵を倒すことに拘りすぎるのも……全てそのためなんです」
大鳳の言うように壮一は艦娘のことを普通の人間の女性となにも変わらな思っており、彼は敵を倒すことに拘るのも彼女達に早く戦わなくていい日を訪れさせるためだったのだ。

「でも、どうしてそんなに……」

「……流石にこれは、私の口から語れません……」

「なにか、あつたんですか……?」

榛名は不安そうな表情を浮かべながら大鳳にそう尋ねると大鳳は静かに頷き、榛名はそれを知ると「なら、それ以上のことは聞きません」と言つてそれ以上の模索はしなかつた。

ただ……大鳳は壮一の口から既になんでそんなに自分達艦娘のことを想つてくれるのか聞かされたことがあつた。

それはまだ自分が提督になる前のことだ……。

彼はかつて深海棲艦に襲われ、その際に艦娘に命を救われたことがあつた。

その時、自分の命を救つてくれた艦娘に……一目惚れしたのだ。

しかし、それは同時に深海棲艦への憎しみも生んだ。

その彼が一目惚れした艦娘は倒されたと思われた敵の最後の一撃により殺害されたのだ……。

つまり、彼はその艦娘に一目惚れしたと同時に、その惚れた相手を……殺されてしまった。

それ以降彼は少々強引で深海棲艦をなによりも憎む性格になったのだ。

*

小ネタその4 電が街で出会ったのは……？

光に言われて街に向かった奈々と電。

2人は街を歩き、色んなお店を見ながら歩いていた。

だが、角を曲がった際に誰かをぶつかってしまい、電とそのぶつかってしまった人物はお互いに尻餅をついてしまう。

「ふぎや!?!」

「ああ、電ちゃん大丈夫ですか?!」

「切ちゃん、大丈夫?」

電は奈々の差し延べた手を掴んで起き上がり、自分と同じように尻餅をついた金髪のシヨートカットの少女も小柄なツインテールの少女が差し延べた手を掴んで立ち上がる。

「ありがとうございます奈々さん」

「調、ありがとうデース」

すると電は慌ててぶつかってしまった相手に「ごめんなさいなのです!!」と頭を下げて謝る。

「いえいえ、こちらこそデース」

「んっ……? なんだから2人とも語尾が似てるね」

「調」と呼ばれた人物にそう指摘されると「切ちゃん」と呼ばれた人物と電は互いに目を見合わせる。

「デース……」

「なのです……」

「デース!! ○(≡▽≡)○」

「なのですー!! ○(≡▽≡)○」

「デエー……ス!! ○(≡▽≡)○」

「なのですー……!! ○(≡▽≡)○」

「どうやら2人とも波長があつたらしい。」

「はっ、よく見たら2人とも美少女……!」

「こんなに可愛い子と出会えるとは超ラッ

「キィー!!」

第4話 『無力な自分』

『シユア!!』

今、ユナイトした夜空とエックスは街に出現した身体が金属で胸にはウルトラマンのカラータイマーのようなものがあった怪獣……「金属生命体アルギュロス」と戦闘を繰り広げていた。

アルギュロスは拳を振りかざしてエックスに攻撃を仕掛けるがエックスはそれをしやがみ込んで回避し、一気に跳び上がるようにアルギュロスにアツパーカットを決める。

エックスの攻撃を喰らったアルギュロスはよろめき、その隙を見逃さずエックスはアルギュロスに掴み掛かる。

しかし、アルギュロスはエックスを振り払って左腕を刀に変形させ、その刀でエックスを斬りつける。

『ウアッ!?!』

斬りつけられたエックスは身体から火花を散らして膝を突き、膝を突いたところでアルギュロスの容赦のない蹴りがエックスへと叩き込まれる。

さらにアルギュロスは右腕をキャノン砲へと変化させて狙いをエックスに定めると……口元を「ニヤリ」と笑みを浮かべ、砲弾をエックス目掛けて放った。

『ッ!?!』

「そうはさせるか!!」

『サイバーゴモラ、ロードします』

しかし、エックスはギリギリのところまで「ゴモラアーマー」を装着したため、アルギュロスの砲撃を受けはしたがほぼノーダメージで済み、エックスは立ち上がってアルギュロスに向かい駆け出す。

『フッ』

だが、アルギュロスは自身の肉体を変化させ……肉体を変化させたアルギュロスは身体の数々に黒いラインがあり、目が紫色の「ニセウルトラマンエックス・ゴモラアーマー」へと変化したのだ。

『なに!?!』

「こいつ、相手の姿をコピーできるのか!?!」

アルギュロスがエックスの姿をコピーして夜空とエックスは驚き、その際に動きを止めてしまいニセエックスはその隙を逃がさず、エックスの方へと向かって跳び上がった爪を振り下ろし、エックスを斬りつける。

『シユア!?!』

「こいつ、ゴモラのパワーまで……!」

ニセエックスはたじろくエックスに追撃しようとするがゴモラアーマーの爪でエックスを斬りつけようとするがエックスは自分の持つ爪を腕を立てて盾のように扱って攻撃を防御する。

ニセエックスはそのチャンスに逃さず、相手に反撃を許さぬよう爪で何度も何度もエックスに攻撃し、対するエックスは防戦一方だった。

「あんまり調子に乗るなよ、偽者野郎!」

どうにか一瞬の間を見つけて出してバックステップで後ろに下がり、エックスはそこから跳び上がってニセエックスの頭上を飛び越え、背後に回り込むと振り返り様に爪でニセエックスの背中を斬りつける。

『グウウ、ハアア!!』

ニセエックスはヤケクソ気味に右腕の爪で殴り掛かろうとするがエックスはそれを左手で受け流して右腕の爪でニセエックスを殴りつける。

『グオ……!?!』

そこから……エックスとニセエックスは互角の勝負を繰り広げ、この他にも時雨アーマーや新たなエレキングアーマー、ベムスターアーマーなどを装着して戦うが……

中々決着をつけることができなかった。

だが、途中……鎮守府の艦娘たちが駆けつけ、満潮、村雨がサイバーカードを使用してエックスを援護してくれたのだ。

『サイバーベロクロン、ロードします』

『サイバーグビラ、ロードします』

「主砲もミサイルもあるんだよ！　なんてね♪」

「行けえ!!」

村雨は「ミサイル超獣ベロクロン」を、満潮は「深海怪獣グビラ」のカードをジオデバイザーに装填してその力を身に纏い、村雨は主砲から放たれた砲弾がミサイルに変わり、ニセエックスに直撃。

『グオオオ!?』

「化けるならもう少し上手く化けなさい、黒いラインと目の色で丸分かりなのよ！

このヘタクソ！」

満潮はドリルに変形した主砲を構え、それを前に突き出すとドリル状の光線が放たれそれがニセエックスの右目を潰す。

『ウアアアアアアアア!!』

『「今だ！　ザナディウム光線!!」』

通常形態に戻ったエックスはカラータイマーが黄色に輝き、腕を交差させて放つ「ザナデイウム光線」をニセエックスに向かって発射し、光線はニセエックスのカラータイマーに直撃して粉々に砕け散るとニセエックスは悲鳴に似た声を上げながら爆発した。

『グアアアアアアアアアアア!!!』

エックスは空へと飛び立ってどこかへと去り、怪獣の撃退に成功した艦娘たちもそのことに喜びながら自分達の鎮守府へと戻っていくのだった。

「……」

しかし、そんな中満潮だけがどこか不満そうな表情を浮かべており、村雨はそんな満潮に気づいて首を傾げるのだった。

「満潮ちゃん……?」

一体どうしたのだろうかと村雨は思い、満潮に「どうかしたの?」と話しかけるが……満潮は黙ったまま。

一瞬無視されたのかと思ったが満潮は話しかけられて無視するような娘ではないと思ひ、今度は少し大きめの声で「満潮ちゃん!!」と呼ぶと満潮はハツとなって村雨の方へと振り返る。

「えっ? あ……なに?」

「なにはこっちの台詞よ、どうしたの? ポーっとして」

「……別に、なんでもないわ」

満潮から顔を背けてどこか不機嫌そうにしつつも彼女も鎮守府に戻る為に歩き出し、村雨はそんな満潮の様子を見てどこかおかしいと思うのだった。

一方その頃……とある場所では……薄暗い場所に1人の人影があり、その人物はその場所で1人不気味な笑いを声をあげていた。

『フツハツハツハ！ バカめ、アルギュロスは所詮貴様の戦闘データを頂くための囮に過ぎんだ……！ 金属生命体ならば姿を真似るだけで相手の技、戦い方を全てコピーできるからなあ』

その人物の目の前には先ほどエックスの攻撃を受けて飛び散ったアルギュロスの破片のすべてが集められており、それを見ながらその人物は再び笑い声をあげるのだった。

『しかしまあ、駆逐凄姫を殺して奴が封印していたゼットンとゾアムルチがウルトラマンを倒してしまえば良かったのだが……やはり自分でやるしかないようだな』

*

鎮守府の執務室にて……。

「はっ？ 怪獣のSDが見つからない？」

「うん、あの怪獣……レジストコード、金属生命体アルギュロス。この怪獣の身体
SDと思われるものが現場から一つも発見されてないんだって後処理班が」

執務室では夜空が時雨からそんな報告を受け、夜空は腕を組んで「本当に怪獣の破片
が見つからなかったのか？」と尋ねると時雨は首を縦に振った。

「誰かが持ち去った……？ いや、だとしてもこんな短時間で破片を回収できるやつ
なんているのか？」

「分からないけど……取りあえず引き続き警戒はしといた方がいいと思う」

時雨の言葉に夜空は頷く……しかし、こういった不安要素があると響たちが今準備し
ている文化祭がちゃんとできるのかどうか不安になってくる。

最初こそ、響たちが文化祭をしたいと言って来た時は反対したが……楽しそうに文化
祭の準備をしている彼女達を見て今では文化祭をやることを認めて良かったと……夜
空はそう思ったのだ。

だからこそ、彼女達が楽しみにしている文化祭が台無しになるようなことはしたくなかった。

「取りあえず、この件に関しての調査は進めてくれ。まあ、特になにもなければいいんだが……」

「了解だよ、提督」

夜空に敬礼した後、時雨は部屋を出て行くこうとするが……その際時雨の足下がフラつき、床に倒れそうになるが……。

そこに夜空が慌てて彼女を腕で支え、しっかりと立たせると彼は心配げな表情を浮かべて時雨に「大丈夫か？」と尋ねるのだった。

「う、うん……平気だよ提督。ごめんね？　なんかちよつとフラついちゃって」

「……お前、眠いんだろ？」

「えっ、別に……そんなことは」

「無理するな、昨日は徹夜させてしまったし……今日も朝早かったんだから今からもうゆっくり寝ろ」

夜空は時雨に微笑みかけてもう今からゆっくり休んでくれと頼むのだが……時雨は「でもまだ秘書艦の仕事があるし」と言つて断ろうとするが夜空に「そんな状態じゃ仕事できないだろ」と時雨は言われてしまう。

「それが原因で怪我でもしたら大変だ。今日の秘書艦は村雨にでも変わって貰うよ。調査の件も奈々に任せよう。どうせ今頃『仕事早く終わったから艦娘たちを愛で行こう!』とか言ってるだろうし、なによりお前等の健康を守るのも俺の仕事だ」
夜空は時雨の頭を優しく撫で、撫でられた時雨は嬉しそうな顔を浮かべて「分かったよ」と言つて自分の部屋へと戻つて行くのだった。

「さてと……それじゃ村雨は……」

「ハイハイイ! 村雨、ただいま参上!! 屋根裏から!!」

「どっから出て来てんだ!!?」

忍者みたいに屋根の板を取り払つて屋根裏から顔だけを出す村雨の登場に夜空は驚き、村雨はスタツと屋根裏から降り立つとピシツと夜空に向かって敬礼する。

「話は聞かせて貰つたわ! 今日是一日秘書艦代理をすればいいのね?」

「ああ、頼む」

「ところで提督、少しお聞きしたいことがあるんですが?」

「んっ?」

なぜかニヤニヤとした表情を見せる村雨、そんな彼女の様子に夜空はなにか嫌な予感を感じるのだった。

「時雨ちゃんとの『ケツコンカッコカリ』っていつするんですか? 今の時雨ちゃんの

レベルならケツコンできるはずですけど？ 指輪も提督の机の中にありますよね！」

「なんでお前がそのこと知ってたんだ」

ちなみに……「ケツコンカツコカリ」とは別に本当に結婚をする訳ではなく、一般的には自分のパートナーとも言える艦娘に指輪を渡すことでその艦娘を通常よりもさらに強化させることができる。

しかし、殆どの提督はそのパートナーの艦娘と「結婚を前提に付き合いたい」「愛の告白」という意味でこの指輪をパートナーの艦娘に渡す場合が多いため、村雨はきつと夜空も同じように指輪を渡すとしたらやはりそういう意味で時雨に渡すのだろうと考えていたのだ。

実際、夜空と時雨は前に所属していた鎮守府の頃からの付き合いであり、2人のやり取りは時折恋人のようにも見える……村雨がそういう風にケツコンのことを考えるのは当然だろう。

「それでやっぱり時雨ちゃんに渡すんですね！ やっぱり提督って時雨ちゃんのと好きなんですよ!？」

「いいから、早く仕事してくれ」

「あー、もう、話を逸らさないでくださいよ〜」

このとき、少しだけ村雨を呼んだことに夜空は後悔した……別に恥ずかしくて話を逸

らそうとしたわけではない、ただ分からなかったのだ……自分は時雨のことをどう想っているのかということに。

だが、今はそんなことを考えている場合ではない、早く仕事を終わらせようと思い椅子に座って最初に書類仕事を進めようと思うのだった。

「あつ、そうだ。提督にーっお願いしたいことがあるんですけど……」

「お願いしたいこと？」

それは満潮のことであり、村雨が言うには最近彼女はなにかと一人で文化祭の準備もそっちのけで自主練をしているらしく、リョーガが設計したホログラム実体化装置を悪い不利な状況を自ら作り出してサイバーカードも使用せずボロボロになるまで戦ったりと……少々無茶をすることが多いというのだ。

そんな彼女の様子に村雨は心配であんまり無茶をしないようにと満潮の姉である朝潮と共に説得しようとしたのだが……無茶をやめる様子はなく、それで村雨は夜空にも後で満潮にあんまり無茶をしないように説得を頼んだのだ。

「まあ、満潮が最近無茶してるようなのは知ってたけど……言っても全然聞いてくれないんだよなあ」

「そうなんですか？ うーん、どうにかして無理やり休ませないと……」

「私にいい考えがあるよ！」

夜空と村雨、2人で腕を組んで「うーん」と悩んでいると先ほどの村雨と同じように天井から忍者のように顔をだけを出した響が現れ、スタツと天井裏から素早く降りてくる。

「お前らなんで毎回天井裏から出てくるの!? っていうかどうなってるんだこの天井裏!!」

「なんかリョーガさんが『最近響ちゃんかフリーダムっぷりが目立ってきてるなあ、だはまだフリーダムっぷりは私の方が上だ!! 負けるわけにはいかん!』とか言ってるでこの建物を忍者屋敷に改造してたからね」

「なにをどうでもいいことで張り合ってるんだあの人はあ!!?」

というかりョーガは自分のやることなすことの殆どがフリーダムなのを自覚してるのかと夜空は思ったが……村雨曰く「あの人は自分が変人であること自覚してますよ」とのこと。

自覚している分余計にタチが悪い気がするのだが……。

*

一方、今現在噂になっているリヨーガと満潮はというと……。

「満潮ちゃん、そろそろやめた方がいいと思うんだがねえ私は」

リヨーガは実体化ホログラムを使ってダダ、レギュラン星人、ウルフガスといった人間大の星人、怪獣を呼び出してダダとレギュラン星人に肩と足を揉ませ、ウルフガスにニユースを持ってこさせて滅茶苦茶こき使っていた。

尚、この様子を見ていたタカトは「ホログラムとはいえなんか可哀想だな……」と呟いていたとか。

「はあ、はあ……まだ……まだいけるわ!!」

一方で満潮はというと実体を持ったホログラムの怪獣……「フィンディッシュタイプ

ビースト「ガルベロス」「合体獣サソリガドラス」「超古代怪獣ファイヤーゴルザ」「超古代竜メルバ」の4体を相手に戦闘を繰り返していったのだ。

最も大きさは装置で調整できるらしく怪獣たちは人間大の大きさに設定されているが……その力は本物と同様であり、どう見てもどう考えても満潮に勝ち目があるとは思えなかった。

ただしハンデとして怪獣たちは光線技などの使用を封じ、格闘戦のみと設定されているが……それでもさすがにこの怪獣たちを相手にするのは満潮1人では無謀過ぎるというものだ。

無論、ちゃんと相手が死んだり大怪我などしないようには設定してある。

「おい、リョーガ……いくらなんでもこれは……」

どう考えても一方的すぎるだろ……とタカトはリョーガに言うのだがリョーガは困った表情を浮かべて「私に言われても困るよ」としか言えなかった。

実際にこの怪獣たちを選んだのは満潮であり、リョーガも「せめて1体くらいにしたら方がい」と言ったのが彼女はそれを全く聞き入れず、「止めたら魚雷撃ち込むわよ」と半ば脅されたため、リョーガは止めることができなかったのだ。

しかも満潮はサイバードすら使う素振りすら見せず、一体なにをやっているんだとタカトは本気で彼女のことを心配したのだが……やはり一向に満潮は戦闘をやめる

つもりはない。

そして満潮はというと主砲から砲弾を発射しながらガルベロス、サソリガドラスに接近するが2体は平然と満潮の攻撃を受け止め、メルバは飛行して空中から満潮に右腕の鎌で満潮に斬りかかる。

だが、どうにかファイブキングの攻撃を避けた満潮だが今度はゴルザの突進を受けて吹き飛ばされてしまう。

「くああ!？」

「流石にこれはもうまずいな。魚雷ぶち込まれるのは嫌だけだど強制終了だー!」

既にボロボロの状態だというのに尚も戦い続けようとする満潮、それを見ていたリョーガはさすがにもう限界だろうと思いつきにシステムを強制終了させて怪獣たちを消し去った。

イズマエルの拘束から解放された満潮は海面の上で膝を突き、「はあ……はあ……」と苦しそうに息をあげるのだった。

その後戦闘をやめて戻ってきた満潮はリョーガをキツと睨み付けて彼に掴み掛り、「どうしてあそこで怪獣たちを消したのよ!？」と怒鳴りあげてきた。

「仕方がないだろ、流石にもう限界だ。入渠してくるといい!」

「ふざけないで! まだ……まだやれるわ!!」

その様子を見ていたタカトが「なぜそこまでして無茶をするんだ？」と問いかけようとしたその時……。

「輝ける日の下も、漆黒の夜の闇も我が瞳、悪を逃がさじ……闇の力を崇める者よ。

畏れよ、我が光、駆逐艦 響の光を！ なんて新しい名乗りを考えて見たんだけどどうかな？」

そんな時、響がどつかで聞いたことある台詞と共に満潮とリョーガの間に割ってパバーンつと登場し、少し離れた場所では村雨と夜空は苦笑していた。

「響、なにしに來たのよ？ アンタも私を止めに来たの？ しかも提督や村雨まで連れて……言つとくけど私はまだ自主練するわよ。 てか名乗り長い」

「満潮、自主練するのはいいんだがな……なにもあんな無茶をする必要はないだろ？ それにほら、みんな文化祭楽しみにしてるわけだしお前も一緒に準備してこいよ」

夜空は笑みを浮かべて満潮の頭にポンつと手を置いてそう言うが……満潮は不愉快そうな表情を浮かべて夜空の手を押し退ける。

「提督はさ……なんでサイバー怪獣計画が成功して欲しいの？」

「なんでつて……そんなの、お前等が戦わなくて済むようにしたいからに決まってるだろ」

「っ……………」

夜空のその言葉を聞くや否や満潮はどこか怒りに満ちた顔を浮かべてどこかに立ち去ろうとするが……響に腕を掴まれて立ち去ることができなかった。

満潮は「離しなさいよ!!」と響に言うが……その直後……。

「秘儀! 無言の腹パン!!」

「うぐお?」

満潮の腹部に拳を叩き込んで無理やり彼女を気絶させた後、満潮を右の肩に担ぎ上げる。

「いや待て響いいいいいい!!!? もしかしてお前が言ってた考えってコレか!? しかも

無言じゃないし!!」

「コレだ」

響は空いている方の左手で握りこぶしを作ってドヤ顔を決め、「それじゃ満潮も寝たから（強制）部屋まで運んでくるねー」と言って彼女を部屋へと運んでいくのだった。

*

その後、響に気絶させられた満潮は深夜の2時にようやく目を覚まし、彼女は一体なにが起こったのかを思い出した後、自分に腹パンを繰り出した響に絶対復讐してやろうと誓うのだった。

だが、そんなことは今はどうでもいい、満潮が今気になるのは夜空の言った「お前たちが戦わなくて済むようにしたいから」という言葉だった。

「それじゃ、私たちは何のために……」

満潮は……恐れていたのだ、自分たちがもう戦いで必要とされなくなることに。

もしもサイバー怪獣計画が成功すれば艦娘よりも強力な戦力ができあがる……それに先ほどの夜空の言葉、それはつまり、満潮にとっては「もう艦娘は必要ない」という風に聞こえてしまったのだ。

実際、サイバー怪獣の力は借りた力の一部だけでもかなり強力だ。

それが完全に実体化することができればエックスの援護すら自分たちは必要なくなるのではないか、自分たちよりもよっぽど強く頼りになる兵器が完成するのではないかと不安だったのだ。

（私は、兵器として生み出されたのに……それなのに……また、『なにも』できないなんて嫌だ……）

その言葉は彼女がまだ艦だったころ……第八駆逐隊を編成していた姉妹「朝潮」「大潮」「荒潮」は彼女が1942年10月〜1943年11月まで約1年横須賀で入渠しているうちに全て戦没した。

それから1人生き残った彼女は1人色々な駆逐隊を渡り歩くことになったのだが……その後も様々な過酷で悲惨な運命を彼女は目の当たりにし、そして仲間を救うことができなかった無念がずっと彼女の今のトラウマとなっていたのだ。

だからこそ、彼女は今よりもずっと強くあろうとしているのだ……「必要されない」と

いうことは「なにもできない」のと一緒だから……。

「もつと……強くないと」

しかし時間はもう深夜の2時過ぎだ、流石にもう寝た方がいいだろうと思つた満潮はそのまま枕に顔を埋めて静かに寝息を立てるのだった。

「後、副司令……私の布団の中に勝手に入つてくんのやめてもらえるかしら？ 蹴るわよ？」

「うつはあ！ 満潮ちゃんみたいなたに冷たい視線を送られるのも案外悪くないですねえ！ えへへへ！ つていうかむしろ蹴つてください!! 満潮ちゃんの生足で!!」

「ざつざと出ろ!!」

結局満潮に蹴つ飛ばされて部屋から追い出された奈々は蹴られたお尻をさすりながら目尻に涙を浮かべながら「ホントに蹴つ飛ばして追い出さなくても……」とため息を吐くのだった。

「まあ、生足で蹴つ飛ばされたのは良かったんですけどね！ あつ、別に私？とかじゃないですからね！ ただ可愛い女の子に触られたいだけですから!!」

誰に向かって言つてるんだ、誰に……。

「しつかしまあ、提督の言つてることの意味を満潮ちゃんは理解していなかったみたいで……」

奈々は困り顔でどうしたものかと腕を組みながらそのままどこかへと歩いていくのだった。

「よっし、じゃあ次は相部屋になつてる睦月ちゃんと如月ちゃんを襲……添い寝をしに行きましよう！」

ちなみにその後、睦月と如月の部屋の中に入ろうとした直後、菊月に頭を鷲掴みにされて床に叩き付けられ、顔が床に埋まった奈々はそのまま朝まで放置されるのだった。

しかし、こうして奈々がふざけまくっている間にも……街では奇妙な現象が起こつていた。

「赤い雨」が降るといふ……不思議な現象が……。

*

翌日、街の方では赤い雨が降ったという報告を受けて調査のため満潮と村雨、リヨーガがこの赤い雨について調べていた。

「ねえ、満潮？ 昨日あんなにボロボロになるまで自主練してたのに無理にこの調査に来ることはなかったんじゃない？」

「心配してくれるのは有り難いけど、別に平気よ。これくらい」

最も鎮守府に帰ったら帰ったで満潮はまた無茶な自主練をしてしまう可能性があるものでどっちにしても満潮は身体を休めてはくれはしないだろう。

その後、リヨーガが赤い雨でできた水たまりを採取して解析した結果、特にこれといった異常は検知されなかったらしい。

「特に人体などに悪影響が出たりすることはないから問題ないみたいだ」

リヨーガはそう言って村雨と満潮に説明したが、しかし人体に影響がないとはいえないにかしらのアクシデントは既に起こっているかもしれないと判断し、リヨーガ達は念のためにもう少しだけ、どこか他に異常がないかを調査するのだった。

「なにもないんなら早く帰って自分を鍛えたいんだけど……」

「言っておくが一日は帰れないよ、明日の朝まで1日中なか事件が起きないかどうか交代制で街をパトロールするんだ」

リョーガのその話に満潮だけではなく村雨も「ええく!？」と言った声をあげてかなり癒そうな表情を浮かべた。

「文句を言わないでくれたまえ! 私だつてなあ! 今プレイ中のギャルゲー我慢してるんだよ!」

「そんなもんでもいいわよ!」

逆ギレしてくるリョーガにすかさずツツコミを入れる満潮。

それから……3人は1人2時間ずつ街をパトロールすることとなったのだが……特になにも事件が起きる事は無くやがて外は真つ暗になつてもそれは続いた……。

「結局なんにも起きないし……はあ、これこのまま何も起こらなかつたら朝まで続くのよね……? なんてめんどくさい……」

満潮は不満を口にするが……そんな時、突然頬にピトツと冷たい感触が伝わり、満潮は「きゃあああああ!？」という悲鳴をあげて慌てて後ろを振り返るとそこには缶ジュースを手持ってペロツと舌を出し、悪戯つ子のような笑みを浮かべる村雨がいた。

「もう、ビツクリするじゃないの!?! なにすんのよ!?!」

「アハハ……、ちよつと驚かそうと思つて? はい、ジュース」

村雨は手に持っていたジュースを満潮に渡し、彼女はぶつきらぼうな感じで「ありがとう」とお礼を述べた後、そのジュースを受け取つて2人でジュースを飲みながら歩き

始める。

「ところでどう？ なにか異常はあった？」

「異常があるならとつくに連絡入れてるわよ」

そんな時だった、道を歩く2人の目の前を……なにかが高速で横切ったのだ。

人間や車などではない……なにか異様な「なにか」が2人の目の前を……それを見た満潮と村雨は急いでリョーガに連絡を入れようとするが2人は背後から何者かの気配を感じて慌ててその場から飛び退くように離れると先ほどまでいたその場所に光弾のようなものが直撃して爆発した。

すぐさま満潮と村雨は艦装を展開して主砲を背後にいた人物へと向ける。

『ほう、中々の反応速度ではないか』

そこにいたのは「幻覚宇宙人 メトロン星人」であり、村雨はメトロンを睨み付けながら「私たちになにか御用かしら？」と尋ねるとメトロンは不気味に笑い始める。

「なにがおかしいのよ!」

『いや、別に……ただ君たちにはウルトラマンを倒すためのお手伝いを少しして欲しいと思ってね。この星を侵略するにはどうしても彼等の存在が邪魔なのだ』

メトロンの話を聞いて村雨と満潮は「一体こいつはなにを言っているんだ？」と心の中で疑問に思った。

当然だろう、ウルトラマンを倒す手伝いを自分たちにして欲しいなど……そんなこと自分たちがする筈がないのだから。

「そんなこと、私たちがする訳ないでしょ!」

「それに私たちが今すぐアンタを倒せば地球侵略はすぐに阻止できるわ!」

『君たちが艦娘かい？ 確かに地球人が作ったにしては君たちは大した兵器だが……メトロンの科学ほどではない。怖いのはウルトラマンだけだ。それに君たちの意思など関係なくウルトラマン打倒は手伝ってもらおう』

するとメトロンの右手を村雨と満潮の方へとかざすとそこから怪音波のようなものが放たれ、それを聞いた満潮たちはその怪音波に耐え切れず耳を塞ぎ、もがき苦しむ。

「うわあああ!?! なんなのよこれ……!?!」

「頭が割れるように……痛い……!」

やがて村雨と満潮は気を失ってその場へと倒れこんでしまい、メトロンは「他愛もない」と笑い声をあげた後、彼は「これでいいのだろうか?」と他に周りに誰もいないのも関わらず誰かにそう尋ねたのだ。

するとメトロンの目の前に突然ヒビのような亀裂が走り……それがガラスのように割れると中から赤い身体、右腕が鎌となつている異形な姿の怪人がそこに姿を現したのだ。

『約束通り、お前の言う通りにした。ウルトラマンを倒した暁にはこの地球を私の物にしたいのだな?』 『ヤプール』よ……』

『ああ、勿論だとも。我々の目的は全てのウルトラマンの殲滅、復讐なのだからな……』

そこにいたのはメビウスが追いかけていた人物……、幾度もウルトラマンに倒されても何度でもウルトラマンに復讐するために復活する悪魔……「異次元超人 巨大ヤプール」だった。

『1人は超獣の素材にでもしてやろう……。 もう1人は……フッフ……!』
ヤプールは倒れている満潮と村雨の2人を見つめて不気味な笑い声をあげ、そしてそれを見ていたメトロンはというと……。

(なんか倒れてる女性を今にも襲いそうな変質者に見える……)
とかヤプールに対して物凄く失礼なことを考えていた。

第5話 『戦姫と銀河』

「う……………んっ?」

その後、満潮が目を覚ました時、彼女は鎮守府の医務室で寝かされていた。

「満潮! 良かった、目を覚ましたんだな……………」

満潮は自分の隣を見るとそこには夜空がこちらを心配そうに見つめており、満潮は起き上がる。

「あれ……………? 私、どうしたんだっけ……………。そうだ! 確か宇宙人が現れて……………提督! 村雨はどこ!?! 彼女は無事なの!?!」

満潮はメトロン星人に襲われたことを思い出して夜空に掴み掛り、自分と一緒にいた村雨はどうしたのかと慌てて尋ねるが夜空は先ずは満潮に落ち着くように言うが……………
「こんな時に落ち着いてられないわよ!」と怒鳴って立ち上がるうとする。

しかし、そんな時医務室に元気な姿の村雨が入ってきたのだ。

「村雨! 無事だったのね……………」

「無事もなにも、特になにも異常なんてなかったじゃない!」

「……………えっ?」

村雨の言葉に満潮は首を傾げた。

確かに、あの時自分たちはメトロン星人に襲われたはず……それは夢などではなく現実
実に起こったことに間違いはない。

なのになぜ村雨は「なにも異常がなかった」なんて言ったのか、満潮には全く分から
なかった。

「なに言ってるのよ？ 私たち宇宙人に襲われたじゃないの！ 間違いはない、記憶が
ハッキリしてるわ！」

「でもリヨーガさんも特に異常はないって言ってたし……ほら、満潮はここ最近頑張
りすぎてたからきつと疲れておかしな夢でも見たのよ」

村雨は笑みを浮かべてそう語るが……ではどうして自分はベッドの上にいるのかと
尋ねると村雨は「道端で倒れてたのを自分が発見した」と答えたのだ。

リヨーガが診断したところ、道端で倒れていた原因は「疲労」としてわかり出ており、改
めて村雨は「特に異常はなかった」と満潮に断言した。

しかし、やはり満潮はどうにも腑に落ちなかった。

アレは夢などではない、現実を起こったことなのだ……ハッキリと覚えていた。

それなのに村雨は「なにもなかった」と語っている……もしかすれば昨日の宇宙人が
村雨に化けているのかもしれないと思った満潮は村雨をジッと睨み付けるように見つ

める。

「もう、そんなにジツと見つめてどうかしたの？」

「いえ……なんでもないわ」

兎に角、この村雨が本当に村雨なのかどうかの確信はないが念のために警戒はしておこうと思うのだった。

(でも、一応提督には……いえ、とりあえず今は黙っておきましょう。信じてもらえないかもしれないし)

「……」

一方で夜空は村雨と満潮のやり取りをただ見守っているだけで特になにも言うことはなかった。

*

じゃないですか!」と最もなことを言う。

「まさかこいつ等と呼ぶとはな……。朝潮、響の言う通りこいつ等は悪い奴ではないぞ」

「えっ!? 菊月もこの3人と知り合いなんですか!」

「あたしも知ってるよ。菊月の言う通りいい人たちなんだよ」

菊月の隣で「はいい!」と元気に手を挙げる文月、朝潮はハルキたちを見つめ……。確かに菊月と文月の言う通りあまり悪さなどをしそうな雰囲気がないなと思ひ、なによりも菊月が言っているのだから本当に悪い宇宙人ではないのだろうと思ひ、どうにか朝潮は納得してくれるのだった。

「まあ、確かに……。害はなさそうですね」

「朝潮や菊月がそう言うのならそれで間違いなさそうですね」

「その通りだよ雷、あともう1人……。文化祭を盛り上げるために怪獣の彫刻を作ってくれる人が来てくれるらしいんだ。既に何体かは作って前日に彫刻を持ってきてくれるらしい」

響が言うにはなんでもその彫刻家は以前、艦娘に命を救われたらしく……。艦娘のことが世間に良い存在だと知らせるためにも」ということで無償でその怪獣の彫刻を作ってくれるそうなのだ。

それを聞いた雷たちは「へー」と関心の声をあげ、文化祭の日がますます楽しみになってくる艦娘たち……しかし、開催日はまだ決定していなかった。

なぜなら夜空がまだ開催日を発表していなかったからだ。

それは前回、光に教えられたメビウスが追っていた敵の脅威……その正体はメビウスもまだ分からないらしく、夜空はもしもその敵が文化祭当日の日に現れでもしたらと危惧して文化祭の開催日を未だに決定せず先伸ばししていた。

「それにしても提督はいつになったら文化祭の開催日を決定してくれるのかしらねえ」
如月がそんな疑問を口にし、他の艦娘たちも同じく中々文化祭の開催日を決めない夜空に疑問をそれぞれ口にする。

なぜ、夜空は文化祭の開催日を決めていないのか……それは勿論メビウスと光から聞いた「脅威」を警戒したからだった。

もしも文化祭当日にその「脅威」がなんらかのリアクションを起こした場合、会場に訪れた一般人に被害が及ぶかもしれないと思っただからだ。

さらにどうして彼女達にその脅威のことを話さないのか……それは文化祭を楽しみにしている彼女達を不安にさせたくなかったためである。

しかし流石に我慢の限界が来たのか……暁が「いい加減決めるように提督に頼んでみるわ!」と言い出して夜空を探しにどこかに行こうとするが……奈々に首根っこを掴ま

れて引き止められた。

「なにするのよ副司令！」

「予定については後で私から聞いておきますから……暁ちゃんたちはパフォーマンスの練習をしていてください」

奈々は笑みを浮かべて暁の頭を撫で回し、撫でられている暁は「むう〜」つと頬を膨らませて奈々の手を払い退かせようとする。

「もう、頭をナデナデしないでよ！」

「断る!! 暁ちゃんって無性に撫でたくなるんですよね〜♪」

「もおー!! だから撫でるなあー!!」

一方、満潮はというと……珍しく文化祭の準備の手伝いを行っていた。

といってもそれはあくまで村雨の監視のためであるが。

(最も、私の勘違いであってくれればいいんだけど……)

危険をなるべく回避するためとはいえやはり仲間を疑うというのは心が痛むものだ。しかし村雨がああ宇宙人が化けた偽物である可能性が捨てきれない以上は止むを得なかった。

とは言っても現時点まで村雨に特におかしなところはないのだが。

そんな彼女の様子に気づいたのか、時雨が満潮の方へと駆け寄り様子のおかしい彼女

に対して「大丈夫？」と声をかけてきた。

「えっ？ あ、うん……平気よ」

「本当に？ その割にはなんだか様子がおかしいよ？」

「ホントに……なんでもないから」

本当ならすぐにも村雨が偽物の可能性があると言いたかったが……証拠がない以上彼女にそんなことが言える筈がなかった、下手をすれば自分の方が怪しまれてしまい、仲間からの信用を失ってしまうかもしれない。

だからこそ、満潮は慎重になるしかなかった。

だが……そんな時のことだ。

『貴様はまだ、なにもできはしない』

「……えっ？」

突然聞こえてきた不気味な声……満潮はその声の主を探そうと辺りをキョロキョロするが声の主はどこにも見当たらなかった。

『貴様は……貴様等艦娘は愚かな存在だ。 使命を終えた艦の魂を再び現世に不完全

な人間に近い存在として生み出す……そのうえ貴様等は『トラウマ』という最大の弱点を持つて生き返ったのだから限りなく……下手をすれば人間以上に不完全な存在だ』

その声の主は……自分が怪しんでいた人物、村雨から発せられているものだった。

しかしその声は自分以外には聞こえていない様子がなく、また村雨も口を一切動かしていなかった。

最も、満潮以外の人物から見れば村雨は普通に楽しそうにほかの娘たちと話しながら文化祭の準備をしているようにしか見えていないのだが。

「やつぱり……!」

『いや、ここはどつちもどつちと言うべきか? 人間は貴様のような『役立たず』も蘇らせるのだからとんだお笑い種だろう』

「っ! お前え!! さっきから好き放題言ってんじやないわよ!!」

満潮は自分の気に行っていることを口にする村雨(の姿をしたなにか)に掴み掛り、怒鳴りあげるが……そんな満潮を時雨たちは慌てて止めに入る。

「な、なにするのよ満潮!」

村雨は掴み掛ってきた満潮に驚きの表情を見せるが……その表情が見えているのは満潮以外の人たちだけ……満潮には今の村雨はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべているように見えていたのだ。

「離しなさいよ! みんなこいつの声が聞こえないの!? こいつは村雨なんかじゃない!! 偽物よ!」

「落ち着いて満潮!? どうしたんだい一体!」

『残念だが本物だ。 最も、身体は村雨とかいう女の身体を使わせてもらっているがな』

「っ!? こいつ……!」

『おっと、これ以上騒げば立場的に怪しくなるのはお前の方なのぞ?』

「村雨を返せ!!」と叫びたくなつた満潮だったが……今の村雨の言う通り、このまま村雨に怒鳴りつけても村雨にとり憑いている人物が本性を現さない限り……偽物だという証拠が掴めない限り、誰も自分の言うことを信じてはくれないだろう……。

だが一人だけ、完全に信じてはくれなくても「少し」だけなら信じてくれるかもしれない人がいることを思い出し、満潮は一度落ち着いて「ごめん、ちよつと疲れてるみたい」とだけ言い残してその場を去って行くのだった。

「大丈夫かな、満潮……」

「ええ、きつと少し休めばすぐに良くなるわよ」

満潮のことを心配する時雨に対してそう語る村雨だが……彼女にとり憑いている人物……「ヤプール」はというと……。

『ふっはっはっは! そうだ、貴様にはこの娘を救うことなどできはしない。私に對して怒るがいい! その無力な自分に、誰にも信じてもらえないことに絶望しろ! それが我等ヤプールの力となる! そして最後は絶望の淵に立った貴様を超獣へと改

造してくれよう！ 貴様のような負の感情を持った奴ならばさぞかし強力な超獣を生み出せるだろう！ 艦娘を素材とした超獣というのも実に興味深いなあ！ あっはっはっは！』

ヤプールは勝ち誇ったように笑い声をあげ、強力な超獣を作るために満潮が村雨を救うことができない自分に絶望し、そして一人孤立していく時を気長に待つのだった。

ちなみに、強力な超獣を作るのならば「戦艦の方がいいのではないか？」という疑問もあるかもしれないだろうがヤプールのエネルギーの源は怒り、憎しみ、悲しみ……そして絶望といった「マイナスエネルギー」からきている。

つまり超獣の素材となる者の負の感情が強ければ強いほど強力な超獣へとなる可能性が高いのだ。

他の理由としては恐らく一番精神的にもろいであろう駆逐艦にターゲットを絞ったのだろう。

*

「はあ……村雨が宇宙人にとり憑かれてる？」

「そうよ！ やっぱり昨日のは夢じゃなかった！ あの宇宙人がきつと村雨を……」

一方で満潮は夜空に村雨のことを話しており、夜空ならば自分の言うことを少しくらいなら信じてくれるかもしれないと思い、彼にこのことを話したのだ。

「……見た感じいつもの村雨と特に変わりはないように見えるが……まあ、わかったよ。警戒はしておこう、仲間を警戒しろというのもおかしいものだが」

「それは……私だって……でも……！」

「ああ、取りあえず満潮、今日は休め。お前の言うことがもしも本当だとすればそい

つと戦うことになるかもしれない。そうなった時にいつでも対応できるよう今は身体をしつかり休ませろ」

夜空にそう言われて満潮は少々不満そうな表情を浮かべるが夜空の言うことも最もであるため、満潮は身体を休めるために執務室を出て自分の部屋へと向かうのだった。

それから一週間が過ぎ、文化祭の準備もかなりできてきた。

ただ一週間が過ぎても未だに村雨にとり憑いている者が未だになにも仕掛けてくる様子もなく、怪獣が出現することもなくただただ平凡な日々が過ぎていくだけだった。

「それにしても凄いですね、相方さん、一週間で怪獣の彫刻を作ってしまうなんて」

朝潮が以前響が言っていた怪獣の彫刻を一つ作ってくれた人物「相方さがた 一朗いちろう」という男性に彫刻を見ながらそう言うと言おうと相方は少し照れくさそうにして「いやみんなが手伝ってくれたおかげですよ」と謙虚気味に言葉を返すのだった。

「でも本当にただでこんなもの作ってもらってしまっても良かったんでしょるか……」

「構いません、あの時助けて頂いた艦娘のためにも少しでもあなたたちのお役に立てるのなら」

相方は笑みを浮かべてそう語り、そんな風に優しい笑みを浮かべる相方に釣られるように朝潮も自然と笑みを浮かべるのだった。

ただ、そんな時のことである。

朝潮の目に顔を俯かせたままとほとほと歩いている満潮の姿が映り、朝潮は一言相方に言ってから満潮の元へと駆け寄る。

「満潮！」

「……朝潮姉……」

満潮に駆け寄った朝潮は「まだ調子が悪いの？」と心配そうに尋ね、満潮は首を横に振って「なんでもないわ」と無理に笑顔を作り誤魔化そうとするのだが……朝潮には満潮が無理に笑っていることはなんとなく分かった。

無理に笑顔を作っているせいで余計に朝潮は満潮の言葉が心配になり、こうなった無理やりにもなにかあったのか聞き出そうと考え彼女は満潮の肩をガツチリと掴みあげ。

「満潮！ やっぱりなにかあったんでしょ！ 最近は無理な訓練はしてないみたいだけどそれでもやっぱり元気がないのは分かるわ。私で良ければ相談に乗るし……」

「……ありがと、でも大丈夫……だから」

満潮は朝潮の腕を払いのけて再びトボトボとした様子で歩き始め、朝潮はそんな彼女を心配そうに見つめていることしかできなかつた。

そして満潮はどうか村雨の中にいる「誰か」をなんとかして退治する方法を考えて

いた。

どうすれば村雨を救うことができるのか、せめてみんなが自分の言うことを全部信じてくれればいいのだが……そうするには証拠が全くない。

やはり、自分にはなにもできないのか……また何もできはしないのかと彼女は大いに悩んだ。

そんな風に悩んでいるときだった……頭の中に村雨にとり憑いている者と同じ「声」が響いたのが……「我々の役になら立てるぞ」という声が……。

次の瞬間、満潮の意識はブラックアウトした。

*

数分後、突然鎮守府の警報が鳴り響き……鎮守府にいた全員が一体何かと驚いた。

「も〜う〜！ うるさい〜！ なんなのお？」

文月が耳を塞ぎながら五月蠅く鳴り響く警報に文句を言うが彼女のすぐ傍にいた如月と菊月は落ち着いた様子で互いに顔を見合わせる。

「火事……とかじゃ、ないわよね？」

「煙も見えないしな。 なにか嫌な予感がする」

実際、その菊月の予感は当たっていた。

なぜなら……リョーガが作ったあの実体化ホログラムシステムがなぜか暴走を始め、その中に入っているデータの怪獣たちが一斉に出現し鎮守府内で暴れだしたからだ。

と言ってもその怪獣たちの殆どが人間大になっているので若干着ぐるみっぽく見える上になりにシユールだった……。

「おいリョーガ!! 一体どうなっている!？」

「誰かが私の作った実体化ホログラムにウイルスを流し込んだんだ！ 私の発明品に

ウイルスを流し込める奴がいるなんて……どうにかして装置を停止させないと」

実体化した怪獣たちから逃げながらリョーガとグルマンの2人はそんな会話を繰り返していたが……途中、目の前に「地底怪獣テレスドン」と「地底怪獣デットン」が2体が目の前に出現し、2体はグルマンとリョーガを見るや否や雄たけびをあげながら襲い掛かってきた。

「おい!! なんでテレスドンが昼に活動できるんだ!?!」

「そんなの本物じゃないからに決まってるだろ!?!」

グルマンとリョーガはそんな風に喧嘩しながらすぐさま逃げ出すがテレスドンは口から吐く強力な溶岩熱線を発射し2人に向かって行くが……。

『サイバーガルベロス、ロードします』

『サイバーレッドキング、ロードします』

そこに丁度現れたのはガルベロスの力を宿した夕立とレッドキングの力を宿した皐月の2人、夕立は鋭く伸びた爪でテレスドンの炎を切り裂き、皐月は素早くテレスドンとデットンに向かって行くと2体を素早くレッドキングのパワーで殴り飛ばした。

「ギシャアアアア!!」

「2人とも大丈夫っぽい!?!」

「あ、ああ……しかし、こんなことになるとは……少々あの装置を改善する必要がある

そうだ。こうなったのは私の責任だ……」

リョーガは自分があの装置を作ってしまったために起きてしまった事故に強い責任を感じ、暗い表情を見せるがそんな彼にグルマンが肩をぽんっと乗せる。

「反省するのは後だ。兎に角今はあの装置を破壊でもして怪獣たちの出現を止めるんだ」

「そうだな、夕立、皐月、2人もついてきてくれ！」

夕立と皐月は頷き、4人は急いで装置のある場所へと向かって走り出す。

その途中、ギジエラ、レギュラン星人、ワイール星人、ヘイレンといったホログラムが実体化した怪獣や宇宙人に邪魔されたが夕立と皐月のおかげでどうにか乗り切り……やっと装置のある場所まで辿り着いたのだが……そこには既に夜空、時雨、朝潮、響、電といったメンバーが到着していたのだが……その装置の傍にいた人物を見てリョーガ達は目を見開いた。

「満潮……?」

そう、そこにいたのは満潮だったのだ。

「どう? 少しは楽しんでくれたかしら?」

「満潮……これは全部あなたが!」

「そうよ朝潮姉……全部私の作業」

薄っすらと邪悪な笑みを浮かべてこの状況を作り出したのは自分だと語る満潮、それを聞いて朝潮たちはまさか満潮が自分たちを裏切ったのかと思つたが……実際はそうではなかった。

今の彼女は満潮であつて満潮ではない、つまり……実は満潮にも村雨と同じようにヤプールの分身が彼女の身体に憑依していたのだ。

ではなぜ村雨と同じように最初から洗脳しなかつたのか。

それは始めに満潮に村雨を救うことはできず、自分の無力さを噛み締めさせ、そして自分たちヤプールに対する怒りを湧きあがらせ……何もできないという絶望を与えるため。

そして彼女自身が怪獣実体化ホログラムにウィルス「電子生命体クリシスゴースト」を使い怪獣達を呼び出して鎮守府を破壊させ、仲間からの信頼を失わせる……もしくは満潮に化けた偽物だと彼女の仲間たちに思いこませ……ヤプールは最終的に彼女を孤立させようという考えだった。

ちなみに、満潮の意識はしつかりと奥深い場所に閉じ込めて残しており、今のこの状況を意識の深いところにいる満潮にヤプールは見せつけていた。

『ちが……う、私じゃない……！ 私、私は……ここに……！』

深い意識の中、満潮はなにもできない無力さを噛み締めその瞳から涙がポロポロと零

れ落ちた。

「満潮……なんでこんなこと！」

「彼女は満潮じゃないわ、朝潮」

そんな時、艦装を装着した村雨が駆けつけて主砲を躊躇なく満潮に向けたのだ。

「……一週間、ずっと彼女の様子がおかしかったのは気づいていたでしょ？ 本物の

満潮がこんなことする筈ないもの……」

「村雨……でも……」

もしも……もしもここで村雨の言う通り満潮が偽物だとみんなが信じ、武器を彼女に向けたとしたらその時彼女は……。

するとその時、今まで黙り込んでいた夜空が口を開き「満潮」と彼女の名を呼んだのだ。

「偽物な訳がないだろ」

夜空のその言葉に村雨と満潮は「はっ？」と首を傾げた。

「偽物が……あんなに必死な様子で俺に村雨のことを話すか？ 仲間を疑わざる得ない自分が悔しいって顔ができると思うか？ そんな奴が……偽物な訳あるか！」

「で、でも提督！ もしかしたらこの満潮はさつきまでいた満潮とは違うかも！ 数分前に異星人とかに入れ替わったとか……本物ならこんなことしないでしょ!？」

「いや、少なくとも嘘を言っているのは……お前だ、村雨」

夜空は村雨を指差し、村雨は驚きの表情を見せつつも冷静さを保ち「なにを根拠に……」と問いかけると夜空は「少し前に言ったことを思い返してみろ」と答えたのだ。

村雨は首を傾げ夜空がなにを言っているか分からないといった表情を浮かべ、それを見た夜空はため息を吐いて答えを言つてやったのだ。

「分からないなら教えてやる。『ここ一週間、ずっと彼女の様子がおかしかったのは気づいていたでしょ?』」

この言葉、この「一週間」という部分……つまり村雨はメトロンに襲われ、ベッドで満潮が起き上がった時から村雨は彼女を疑つていたということになるし、「先ほど入れ替わった」というのは矛盾が出てくる。

さらに言えば逆に村雨が身体を乗つ取られていたとすれば満潮が最初に村雨に掴み掛つた時や最近元気がなかったこと、今までのことにすべて辻褃が合うのだ。

「だから間違いなく、そこにいる満潮は本物だ」

「ほ、本物ならなんでこんなことを……」

「さあな、差し詰め誰かに身体を乗つ取られてるんだろ、お前と同じように」

夜空は村雨を睨み付けながら指差すと時雨たちは一斉に主砲を村雨と満潮に向け、そして彼女たちは一斉に満潮と村雨……否、ヤプールに対して……。

『仲間をさっさと返せ』

そう言い放ったのだ。

「満潮、俺はあの時『お前等が戦わなくて済むように』って言ったのを覚えてるか？

本当なら自分でこの言葉の意味を気づいて欲しかったが……言おう。俺がサイバー怪獣計画を成功させたいのは俺はお前達を、兵器なんかじゃない……何時の日かお前たちが『普通の女の子』として過ごせる日を1日でも早く来させたいからだ」

「普通の女の子？ バカか、私は兵器として……」

「お前には言っていない!! 黙ってる!!」

夜空が満潮にとり憑いているヤプールに対して怒鳴りあげ、一方で暗い意識の奥からこの光景を見ていた満潮はというと……彼女は夜空の言葉を聞き「そんな風に考えていてくれたのか」と思い、満潮は顔を俯かせた。

「満潮、お前は無力なんかじゃない。いや、無力な奴なんてどこにもいないんだ。

艦娘は……お前は……お前たちは兵器なんかじゃない、人間だ。満潮!! いつまでチンタラしてんだ、さっさとそいつを追い出してしまえ!! 人間の底力を……お前の力を見せつけてやれ!!」

夜空が満潮に対してそう言い放つと……満潮はフンと鼻で笑い飛ばす。

（バカが、そんな言葉だけでこのヤプールの呪縛から解放されると……『そうよね』

……なに?)

『ウルトラマンやサイバー怪獣の力を見て、彼等に頼らず自分がもつと頑張らないといけないって焦ってたんだ……私。提督がそういう人だったの、忘れてたわ。さつさと私の身体から出ていきなさい!!』

『貴様のようなガキが俺を振り払おうだと?! 笑わせる!!』

『だったら見せつけてやるわよ! 私のを!! 『人間』の力をオ……舐めんじやないわよおおおおおおおおおおお!!!!』

すると満潮は突然夜空たちの目の前で胸を押さえて苦しみます。

「うおおおおおおおおおお!!!!」

『な、なんだとお!!?』

やがて満潮の身体から赤黒いオーラのようなものが溢れ出し、赤黒いオーラが全て抜け切ると満潮は倒れこみそうになるがそれを慌てて時雨たちが支える。

「お帰り、満潮」

「ただいま、みんな……。さて、後は……。」

時雨と満潮が互いに笑みを浮かべあった後、彼女たちは一斉に村雨の方へと視線を向ける。

「おのれ……まあいい!! どの道貴様等の鎮守府は怪獣達によってもはや壊滅状態!!」

一気に畳みかけてくれるわ!!」

遂に本性を現したヤプール、すると村雨は両腕を交差すると彼女の身体が赤く光りだし……。「一角超獣バキシム」へと変化し巨大化したのだ。

「ギシャアアアア!!」

「バキシム……そうか! 村雨にとり憑いていたもの……このやり口、それは異次元人ヤプールだったのか!」

グルマンがバキシムを見てそう驚いて口にし、次の瞬間グルマン達の目の前の空間にヒビが入って割れるとそこから巨大ヤプールが姿を現した。

『その通り! ここでは貴様等は超獣バキシムに罫り殺されるのだ!!』

「あつ……玄田○章さん!」

「えっ!? 初代コ○ボイの!」

「違うよ! バツ○マンだよ!」

「はっ? ターミ○ターだろ」

「違いますよ、ゴ○サキですよ!」

上から響、暁、時雨、夜空、朝潮がそんなことを言い争い、それを聞いたヤプールはワナワナと肩を震わせ……。「違うわ!!」と夜空たちに対し怒鳴りあげた。

『誰がだあ!!? 俺はコ○ボイでもバツ○マンでもターミ○ターでもゴ○サキでもな

い!! 俺の名はヤプールだああああああ!!」

兎に角、ヤプールはバキシムに鎮守府を完全に破壊するように指示し、バキシムは両手から放つ火炎放射で鎮守府を燃やし尽くそうとするが……当然、そんなことさせまいと時雨たちが全力で阻止する。

「朝潮は提督やリョーガさん、グルマンさんを安全なところへ!!」

「はい!!」

『サイバーゴモラ、ロードします』

『サイバーモモザゴン、ロードします』

時雨と響がサイバーカードをジオバイザーに装填し時雨の両手に持つ主砲がサイバーゴモラの爪に変化し、響は主砲から怪音波をバキシムに放ち、怪音波を喰らったバキシムは思わず耳を塞いでしまい……そこにすかさず時雨のゴモラ振動波がバキシムに向かって放たれる。

「村雨!! いい加減に目を覚ましてよ!! ゴモラ振動波!!」

ゴモラ振動波は見事バキシムに直撃……しかし、怪音波こそ効き目があったもののバキシムには大したダメージはなくバキシムは耳障りな音を放つ響を踏みつぶそうとバキシムは足を振りあげる。

「くっ!」

慌てて暁たちが響に対し「逃げて!!」と叫び、暁たちは急いでサイバーカードを使用しようとするが……明らかに間に合わない……このままでは潰される、そう思った時だ。

バキシムの元に赤い球体が激突し、バキシムはそのまま鎮守府の外まで放り出され……赤い球体は一瞬眩く輝くと球体は「ウルトラマンエックス」へと姿を変えたのだ。

『エックス、ユナイテッド』

ちなみに……夜空たちを連れて一緒に逃げていた朝潮はというといきなりいなくなった夜空に驚いて慌てて彼を探し回っているのだった。

『シユア!!』

エックスはバキシムに向かって駆け出していき、バキシムに掴み掛るとエックスはそのままバキシムを後方へと鎮守府から遠ざけようと引き離そうとするが……中々バキシムは後方へと下がる気配がなく、バキシムは自分に掴み掛っているエックスを殴りつけて自分から引き離す。

『グウ!!?』

「クアアアアアアア!!」

殴られたエックスよろめき、その隙をバキシムは逃がさずエックスに体当たりを喰らわせ……さらに火炎放射を両手から放つがエックスは右手にエネルギーを集め、X字を

描くように繰り出すチョップ「?クロスチョップ」で火炎を切り裂く。

『?クロスチョップ!!』

「キシヤア!?!」

『シユア!!』

エックスはそのままバキシムに向かって突っ込み、勢いよく拳をバキシムの顔面へと叩き込み、バキシムは地面に倒れこむ。

『このまま一気に決め込みたいところだが……』

「ああ、村雨をどうやって救い出すか……」

バキシムと戦いながらも村雨を救う方法を必死に考えるが……考えてる間にもどんどんエックスが地球上で活動可能な時間が縮まって行く……一体どうすればいいのか悩むエックスと夜空だったが……そんな時だ。

突然、バキシムに異変が起こったのだ。

『超獣バキシムよ!! お前の新たな力を見せてやれい!!』

ヤプールのその指示に答えるかのようにバキシムは「ジャアアアアウ!!」という咆哮をあげるとバキシムの背中に村雨と同じ艦装のような物が装着され、さらにバキシムの右腕には主砲が装備され……バキシムは村雨の力を宿した「一角超獣バキシムデストロイヤー」へと変化したのだ。

『これが艦娘を取り込んで強化した超獣だ!! さあ、バキシムデストロイヤーよ!!』

エックスを倒せ!!』

バキシムはヤプールの命令に従い右腕の主砲から砲弾を発射しながらエックスに向かって歩いてくる。

『グウウウ!!?』

エックスは両腕を交差してバキシムの攻撃をどうにか耐えるが……気づけばいつの間にかバキシムが目の前にまで迫って来ており、バキシムは近距離からの火炎放射と砲弾を同時発射……エックスは直撃を受けて火花を散らしながら吹き飛んだ。

『ジュアア!!?』

吹き飛ばされたエックスは倒れこみ、カラータイマーも既に点滅を始めており、それを見たヤプールはさらに追い打ちをかけようと空間にヒビを入れ……それが割れるとそこから金色のロボット……「異次元超人エースキラ」が現れたのだ。

『こんな時に限って新手だど!』

挿入BGM「エースのピンチBGM」

エースキラはジャンプしてからの跳び蹴りをエックスへと繰り出し、エックスはどうにかそれを避けるが背中にバキシムの放った魚雷が直撃し、エックスは悲痛な声をあげながらその場に膝を突く。

その隙にエースキラールはエックスの首を絞めあげてエックスの脇腹に蹴りを叩き込んだ後、エースキラールはエックスを投げ飛ばす。

『グウ!?!』

『エースキラール!! ウルトラ兄弟の光線技で苦しめてやれい!!』

ヤプールの指示にエースキラールは頷き、両腕を十字に組んで放つ「スペシウム光線」をエックスに向かって発射し、エックスはどうか飛び退くようにしてそれを回避しエースキラールに向かって駆け出して行くが……エースキラールは額のビームランプから放つ「エメリウム光線」をエックスの足元に放つ。

『っ!?!』

立ち止まったところにすかさずバキシムの放った砲弾と幾つもの魚雷が飛んできて直撃、エックスはダメージを受けてその場に膝を突く。

「こうなったらサイバーカードであのロボットだけでも!」

夜空はサイバーカードを取り出してエクステバイザーに装填し、エックスは「ゴモラアーマー」をその身に纏う。

『サイバーゴモラアーマー アクティブ!』

『ならばエースキラールよ! お前の新たな力を見せてやれい!! サイバーゴモラアーマー! アクティブ!』

『なに!?!』

ヤプールのがそう叫ぶと同時にエースキラの身体にもエックスと同じゴモラアーマーが装着され、それを見てエックスと夜空は驚きの声をあげる。

『こいつはもはやエースキラではない、アルギュロスによって得たデータにより作った……『エックスキラ』だ!』

エースキラ改めエックスキラはエックスへと駆け出して行き、ゴモラアーマーの爪で攻撃を仕掛けてくるがエックスもゴモラアーマーの爪でエックスキラに攻撃し、2人の爪は激しく激突して火花を散らす。

『エックスキラ!! ゴモラ振動波だ!!』

エックスキラはヤプールの指示に従ってエックスに掴み掛り、エックスも負けじとエックスキラを掴み、お互いに必殺技である「ゴモラ振動波」を繰り出すが……2人ともその衝撃によって大きく吹き飛ばされ、地面に激突してしまう。

しかし地面に倒れこんだ瞬間を狙いバキシムが魚雷や砲弾をエックスに撃ち込んでエックスを立たせまいとし、そしてエックスキラが先に起き上がる。

『サイバーエレキングアーマー! アクティブ!』

さらにエックスキラはエレキングアーマーを纏い、右腕のアームから電気の鞭を出し、それによってエックスを拘束して電流を流し込む。

『グアアアア!!?』

電撃を流し込んだ後、エックスキラーは拘束とアーマーを解き、地面へと倒れこんだエックスにトドメを刺そうと? 87 光線を放つ体制に入る。

『ぐっ、まづいぞ、夜空!』

*

その頃、鎮守府で暴れる怪獣達はというと……当然それは時雨たちが対処しており、リョーガやグルマンもまた別のところであろうにかして怪獣実体化ホログラムのシステムを奪還できないかと必死に模索しているのだった。

「ダメだ、これじゃキリがない。 やっぱりあの装置を破壊しないと……」
「でもそれには怪獣たちが邪魔っばい！」

時雨と夕立はどうにかしてあの装置を破壊しようとするのだが……それをしようとするときにあの装置が怪獣達を呼び出し守りを固めてしまったため、まるで近づることができなかつたのだ。

そんな時のことだ、時雨と夕立の目に実体化怪獣たち……ファイヤーゴルザ、メルバに追い回されている相方の姿が目に入ったのだ。

「相方さん!!」

すぐさま時雨と夕立はゴルザとメルバを蹴り飛ばして相方を救出し、相方は真っ青な顔で助かったことに安どしてほっと胸を撫で下ろしたのだった。

「ありがとうございます、時雨さん、夕立さん」

「相方さんも早く逃げてください!!」

時雨に言われて相方は慌ててその場から逃げだし、時雨と夕立はゴルザとメルバを睨み付け戦闘態勢に入るのだが……そんな時、突然時雨と夕立の足元が爆発し、2人は軽

く吹き飛ばされてしまう。

「な、なに!？」

ゴルザとメルバは攻撃の素振りすら見せていない、ならば一体どこから攻撃されたのか時雨と夕立は辺りをキョロキョロと見回すとそこには……先ほど逃げた筈の相方が不敵な笑みを浮かべて立っていたのだ。

「相方さん!? どうして……」

「私は相方などではない……」

相方は腕につけているブレスレットを掲げると再び夕立と時雨の足元が爆発し、2人はどうにかそれを飛び退いて夕立は相方を敵と完全に判断し、主砲を構えて砲弾を発射するが……砲弾は相方の目の前で止まり、それが爆発してしまった。

「あなたは人間じゃないみたいですね……」

時雨がそう言うのと相方は「その通りだ!!」と答え、相方の姿が変わり……「銀星人宇宙仮面」へと姿を変え、さらに空間を割って人間大のメトロン星人、「異次元人マザロン人」「変身怪人アンチラ星人」の3人が新たに姿を現した。

「お前達に勝ち目はない!! エースキラーとバキシムの相手で手一杯! このまま一気にこの鎮守府を壊滅させてくれる!! 出でよ、超獣ブラックサタンよ!!」

宇宙仮面はブレスレットを掲げると相方……宇宙仮面が作った怪獣……否、「超獣」の

彫刻の目が輝き……彫刻は1つ目の黒い超獣……「暗黒超獣ブラックサタン」へと姿を変えて巨大化したのだ。

「グアアアアアアアアン!!」

「あの彫刻が……まさか!」

実は、ヤプールは既に「もしも自分が村雨や満潮に憑依していることがバレたら」ということをあらかじめ想定しており、もしもバレた場合はエースキラーたちがエックスを引き付けている間にブラックサタンを動き出させその際に鎮守府を破壊しようとして企んでいたのだ。

『宇宙仮面、君は一刻も早くこの場から離れろ。君が死ねばブラックサタンは動かなくなるのだからね』

『……は我々に任せなさい!』

「ならばそうさせて貰おう」

メトロン星人とマザロン人の言葉に従って宇宙仮面は次元の狭間に消え去ろうとするが……メトロン達の話聞いていた時雨たちはすぐに宇宙仮面を捕まえようと駆け出す。メトロン星人が両腕から放つショック光線「メトロン光線」を放ち、時雨と夕立は慌ててそれを回避する。

「待て!!」

それでも追いかけてよとする時雨だったが……ブラックサタンが目から破壊光線を発射し、時雨と夕立は爆発に巻き込まれて煙で姿が見えなくなってしまった。

「うわああああああ!!?!」

「では私は安全なところで見物させて貰おう」

そう言つて宇宙仮面が次元の狭間を開こうとした瞬間である。

その時、煙の中から「拳」が飛び出して来て宇宙仮面の顔面を思いつきり殴りつけ、宇宙仮面は盛大に吹き飛ばされたのだ。

「ぐうおおおおわああああああ!!!」

殴り飛ばされた宇宙仮面は地面に激突し、メトロン達は何事かと思つたが……気づいた時にはメトロンは背中を何者かに斬りつけられ……マザロン人とアンチラ星人は銃弾のようなものを身体中に浴びてメトロン達は火花を散らして吹き飛ばされた。

「予想よりもとんでもないことになってやがんなあ」

「ああ、だがここから巻き返すぞ!」

時雨たちの目の前に現れたのは3人の少女たち……1人は両手にボウガンのようなものを手に持ち、赤いアーマーのようなものを纏った銀髪の少女「雪音 クリス」、もう1人は刀を手に持ち、青いアーマーのようなものを纏った青髪の少女「風鳴 翼」……
そして……。

「敵が凄く多いけど……でも、こんなの平気、へっちゃら！ 応援に来ました、S. O. N. G. の立花 響！ たいま到着しました！」

グツと拳を握りしめて笑顔を時雨たちに見せる茶髪の少女……オレンジのアーマーのようなものを纏った「立花 響」がそこへ駆けつけたのだ。

すると響（艦これじゃない方）は「歌」を口ずさみながらメトロン達に向かって行く。「ブラックサタン!! 奴を返り討ちに……!」

宇宙仮面はブラックサタンに命令しようとするがブラックサタンは突然どこからか放たれた光線のようなものが直撃して空中へと放り出されるようにして吹き飛ばされる。

「ギシャアア!!?!」

『アユア!!』

そこに駆けつけた1人の黒い巨人が空中に打ち上げられたブラックサタンを蹴りつけて鎮守府の外まで追い出し、ブラックサタンは光線を放とうとしていたエースキラに激突し、2体共々倒れこんだのだ。

『ツエア!』

そこに現れたのは「ウルトラマンビクトリー」……さらにビクトリーの隣に赤き巨人「ウルトラマンギンガ」が降り立ったのだ。

『シユア!』

『ウルトラマンギンガにビクトリーだど?!』

ギンガとビクトリーの登場にヤプールは慌てる様子を見せ、ギンガは倒れこんでいるエックスに手を差し伸べる。

『っ、あなた達は………』

『大丈夫か? 俺はウルトラマンギンガ! メビウスからの要請で、応援に来た! ア
ンタ等のことはメビウスや光って人からある程度聞かされてる。一緒に戦おうぜ、
エックス! 夜空!』

『っ、はい!!』

エックスは戸惑いつつも自分に向かって語りかけるギンガの手を掴んで立ち上がり、
3人のウルトラマンは並び立つ。

「ウルトラマン!!」

その時だ、突然満潮の声が聞こえエックス達は声のした方へと顔を向けるとそこには
満潮がこちらに向かって叫んでいたのだ。

「村雨は……私が助ける!! だから、手を貸して!!」

満潮の言葉にエックス、ギンガ、ビクトリーはそれぞれ領き3人はそれぞれのファイ
ティングポーズを取ってバキシム、ブラックサタン、エックスキラードへと向かって駆け

出す。

挿入歌「ウルトラマンX」

それに対して空間を割って巨大ヤプールも参戦し、ヤプールは「そうはさせるか!! 一気に根絶やしにしてくれる!!」と叫んでエックスキラ、ブラックサタン、バキシムと共にウルトラマン達に挑む。

『デアッ!』

ギンガは腕の鎌で斬りかかってきたヤプールの腕を掴んで背負い投げを繰り返し、倒れこんだヤプールの胸部に拳を叩き込む。

『ぐお!? 小癩な!』

しかしヤプールは腕の鎌から光刃を放ってギンガに攻撃し、肩に直撃してギンガは後ろの方へと後退する。

『ウルトランス! ガギ! クローウィップ!』

ビクトリーの右腕は「バリヤー怪獣ガギ」の右腕に変化し、腕の触手を使ってブラックサタンの首を絞めつけて投げ飛ばす。

投げ飛ばされたブラックサタンは地面に倒れこんだがすぐに起き上がり、目から破壊光線を放つがビクトリーは触手を引っ込めてガギの爪で光線を切り裂く。

『ツェア!』

エックスはバキシムの腹部を蹴りつけ、殴り掛かってきたエックスキラの攻撃を受け流すと同時に腹部に蹴りを叩き込む。

エックスキラが怯んだ隙を狙いエックスは飛び上がった炎を身に纏い、X字状に体を広げて炎を放つ「アタッカーX」をエックスキラに繰り出し、エックスキラは火花を散らして地面へと倒れる。

『アタッカー……X!!』

その間にエックスはバキシムを押しえつけ、エックスは満潮に向かって頷くと満潮もエックスに対して頷く。

「……ごめんね、あなた達のことを悪く言ったようなこと言って……。でも、お願い

！今は私の友達を救うために力を貸して!!」

満潮がそう言い放つと同時に彼女はジオデバイザーにカードを装填する。

『サイバーフェミゴンフレイム、ロードします』

「人魂怪獣 フェミゴンフレイム」の能力を宿した満潮は主砲をバキシムに向かって構え……砲弾を発射し、それが直撃すると今までエックスを振り払おうと暴れていたバキシムが突然ピタリと動きを止める。

すると満潮の目の前に空間に亀裂が入って割れるとその中には気を失っている村雨の姿があり、満潮は必死に彼女に向かって手を伸ばす。

「村雨……… 私のでいで、こんなことになってごめん、だから私があなたを救う!!
だから………お願い!! 戻って来て!!」

「………満………潮………ちゃん?」

すると満潮の呼びかけに答えるかのように村雨は目を覚まし、村雨もそつと満潮に向かつて手を伸ばした。

そして満潮が伸ばした村雨の腕を掴むとそのまま彼女は村雨を引っ張りだし、それと同時に空間が閉じてバキシムも元の姿へと戻る。

『シユア!!』

エックスは村雨の救出に成功したことを確認するとエックスはバキシムに回し蹴りを喰らわせ、腕をX字に組んで放つ光線……「ザナデイウム光線」を発射し……直撃を受けたバキシムは火花を散らして爆発した。

『「ザナデイウム光線!!」』

「ギシャアアアアアア?」

*

一方……鎮守府の方はというと……。

挿入歌「RADIAN T FORCE」

響シンフォギア、翼、クリスの3人は「歌」を口ずさみながら戦闘を繰り広げており……それを見ていた時雨たちはというと……。

「う、歌いながら戦ってる……」

まあ、言いたいことは分かるが……彼女等が纏っているアーマー……「シンフォギア」は「歌う」ことで力を発揮するシステムなので特に問題はない。

メトロンはメトロン光線を響に向かって放つが響はそれを避けて腕部ユニットを開

き、さらに足武ユニットのパワージャキで加速して一気にメトロンに接近して強力なパンチをメトロンの顔面に叩き込んだ。

『ぐはあああ!!?』

しかし、背後から空中からメルバが響に向かって襲い掛かるが……鍋の蓋が飛んできてメルバは撃墜された。

「おつ、誰か分からないけどありがと!」

「どういたしまして、私は響だよ」

「おお、私の同じ名前なの!? 奇遇だね」

そこに現れたのは響（艦）であり、勿論鍋装備である。

「そのようだね、でも同じ名前ってややこしいから……私のことは『ヴェールヌイ』とでも呼んでくれ。私のもう1つの名前だ」

「なんかよくわかんないけど分かったよヴェールヌイちゃん!」

そこに今度はファイヤーゴルザが地中から現れて額から放つ「超音波光線」を放とうとするが……それよりも先に響改め……ヴェールヌイがゴルザに向かって駆け出しながら主砲から砲弾を発射し、ゴルザの顔面に直撃。

「グアアア!!?」

ゴルザは爆風で起こった煙を振り払うようにして首をぶんぶん振るうが次の瞬間に

は響の拳がゴルザの顎に直撃し……ゴルザは大きく吹き飛ばされた。

『おのれ……！ なっ!?!』

メトロン星人は悔しそうにそう呟くが……気づけばいつの間にか暁、電、雷に囲まれており……暁たちの一斉に放たれた砲弾をメトロンは喰らいまくり、耐え切れなくなつたメトロンは倒れて爆発した。

『ぐあああああ!!?!』

「レディーを舐めないでよねー」

またマザロン人は発射される破壊光線「マグマレーザー光線」をクリスと時雨、夕立に向かって発射するがクリスはボウガン型の武器……アームドギアからエネルギーの矢を幾つも放つて光線を相殺し、その間に夕立がマザロン人に向かって駆け出すが……。

そこにマザロン人を庇うように「暗黒星人 ババルウ星人」が現れて腕のカッターで夕立に斬りかかるが夕立は飛び上がってババルウを踏み台にし、かかと落としをマザロン人に叩き込んだ。

「っほい!!」

『ぐおっ!?!』

クリスはアームドギアをスナイパーライフルに変形させ……それを逆手に持つ、また

時雨も主砲を逆手に持って構え……それを見たマザロン人は首を傾げる。

『遠距離武器をそんな風に持つとは……それでどうやって私に攻撃するつもりだ?』

マザロン人がそう問いかけるとクリスはマザロン人、時雨はババルウに向かって行き

……。

「殴るんだよ!!」

『なあ?』

クリスはスナイパーライフルを打撃武器として敵に叩き込む「RED HOT BLAZE」を繰り出し、時雨も主砲でババルウの腹部を殴りつけて吹き飛ばした。

「いつ誰が銃はぶっぱすだけのものだったって決めたよ?」

「同感です、誰が遠距離武器で接近戦しないなんて決めたのか……」

また翼は菊月と朝潮と共に宇宙仮面とアンチラ星人と戦っていた。

『お前は早く逃げろ!!』

アンチラ星人は実体化怪獣……レッドキングとチャンドラーを使って翼たちと戦闘を繰り広げ、宇宙仮面は素早くこの場から逃れようとするが……宇宙仮面の陰に翼の放った小刀が突き刺さり「影縫い」を発動し、宇宙仮面は動きを完全に封じられた。

「う、動けない……!」

『なに?!』

「お喋りをしている暇があるのか……?」

いつの間にか菊月が目の前にアンチラ星人に迫っており、アンチラ星人は菊月の繰り出した膝蹴りを胸部に叩き込まれる。

『ぐうう!!?』

レッドキングはそのパワーを活かして翼に殴り掛かるが翼はしやがみ込んで刀のアームドギアを巨大化させ……その刀でレッドキングを斬りつける。

『ギシャアア!!?』

また朝潮も空中を飛行するチャンドラーを主砲で撃ち落とす、落下してきたところをサイバーブラックキングの力で強化した拳でチャンドラーの身体を貫き、チャンドラーは爆発する。

「2人とも!! 一気にトドメと行くぞ!!」

「了解!!」

翼の言葉に朝潮と菊月が答え、3人は並び立つと朝潮と菊月は砲弾を、翼は刀を振るって放つエネルギー刃「蒼ノ一線」を繰り出し……3人の技がアンチラ星人、宇宙仮面、レッドキング、チャンドラーに直撃して4体は爆発して消滅した。

『ぐあああああああ!!!』

*

『ギンガに力を！ ギンガストリウム！』

『放て！ 聖なる力！』

同じころ、ギンガはストリウムプレスを使い「ギンガストリウム」へ、ビクトリーはナイティンバーを使い「ビクトリーナイト」へと強化変身する。

『駆逐艦 時雨アーマー アクティブ！』

またエックスも時雨アーマーを身に纏う。

挿入歌「ウルトラマンビクトリーの歌」

『ツェア！』

ビクトリーはナイトティンバー・ソードモードを構えてブラックサタンの放った光線を切り裂き、ブラックサタンに向かって駆け出しすれ違いざまにナイトティンバーで斬りつける。

『ギシヤア!?』

『デュア!!』

ブラックサタンは負けじとビクトリーに両手からミサイルを発射するがビクトリーは全てナイトティンバーで切り裂く。

『これで決める!』

『スリー! ナイトビクトリウムシユート!』

『ナイトビクトリウムシユート!!』

ナイトティンバーのポンプアクション3回で発動させ、立てたナイトティンバーに左腕を当てて十字を組み、刀身から青色破壊光線を放つ「ナイトビクトリウムシユート」をビクトリーはブラックサタンに向かって発射し……直撃を受けたブラックサタンは火花を散らして爆発した。

『グアアア!!』

挿入歌「ウルトラマンギンガの歌」

ギンガはヤプールの胸部部に向かって何度も拳を叩き込み……さらに飛び上がったからの膝蹴りをヤプールに叩き込む。

『シヨウラ!!』

さらにギンガはヤプールの足を蹴りつけ……バランスをヤプールはバランスを崩す

が鎌から光刃を放つ。

ギンガはそれをどうにかバク転して回避し、ギンガはストリウムプレスを回転させる。

『ウルトラマンエースの力よ!』

『メタリウム光線!!』

ギンガは腕をL字に組んで放つウルトラマンエースと同じ必殺光線「メタリウム光線」を発射し……ヤプールは直撃を受ける。

『ぐうおおおおお!!?!』 おのれウルトラマン共お!! この恨みは必ず……ぐああああああああ!!』

一方でエックスキラーは両手が人間と同じような手の形に変化し、エックスと同様に時雨アーマーを身に着ける。

エックスキラーとエックスは主砲を互いに向けて砲弾を放つ撃ち合いとなり……ほぼ互角の勝負を繰り広げるが……。

「エックス!! このカードを使って!!」

満潮から一枚のカードが転送され、夜空はそれを受け取ると早速エクスデバイザーに装填する。

「ありがとな、満潮!」

『サイバーグビラ、ロードします!』
挿入歌「海色」

するとエックスに新たなアーマー……胸部はグビラの顔を模し、右腕にドリルが装着された「グビラアーマー」が装着される。

『サイバーグビラアーマー、アクティブ!』

しかし新しい姿になったと言えどエックスのすべてをコピーしたエックスキラードも新たにグビラアーマーを装着することが可能であり、エックスキラードはグビラアーマーを身に纏う。

『シエア!!』

エックスは右腕のドリルを回転させてエックスキラードに殴り掛かるが同様にエックスキラードもドリルを回転させて2人のドリルがぶつかり合う。

「満潮の心を利用し……あいつの心の傷を抉り、俺の仲間を危険に晒したお前らを俺は許さん!! 負けてたまるかああああああああ!!!!」

『デアアアアアア!!』

するとエックスは力任せにドリルを押し出していき……エックスキラードのドリルが砕けてエックスのドリルはそのままエックスキラードに直撃し……エックスキラードのグビラアーマーは砕け散る。

『シユア!!』

さらに何回もドリルでエックスはエックスキラを殴りつけ、最後にエックスはドリルを巨大化させ……その巨大化させたドリルでエックスキラを貫く「グビラドリルブレイク」を炸裂した。

「グビラア!! ドリルウ!! ブレエエエエエエイク!!」

グビラドリルブレイクを喰らったエックスキラは身体を貫かれ、火花を散らして爆発四散した。

『いや、待て夜空。 技名に色々ツッコみたいぞ』

また鎮守府では……時雨たちはまだ装置を破壊していないにも関わらず怪獣達が次々に消滅し、一体何事かと時雨たちは思ったが……すると……。

『セアッ』

あの装置から突然光の粒子が溢れ出し、人間大の「ウルトラマンメビウス」が現れたのだ。

メビウスには自身をデータ化し、こういったバーチャル空間での戦闘も可能な能力を持っている。

つまり、メビウスは今回その能力を使ってクリシスゴーストをたった今倒してきたところだったのだ。

*

その後、満潮は村雨は無事鎮守府へと帰ってきたのだが……満潮は浮かない顔をしていた。

「村雨、ごめん……。」

アンタの言うことちゃんと聞いてればこんなことならなかつ

たのかもしれない……」

「ううん、満潮ちゃんのせいじゃないわよ、むしろ満潮ちゃんのおかげで私は助かったんだし、ありがとうね♪」

村雨はにっこりと笑顔を浮かべて満潮に言うのだが……それでも満潮は俯いた顔をしたままだった。

「ほらー！ いつまでも落ち込まないの！ 笑顔よ笑顔♪」

すると村雨は満潮の頬をムギューっと引つ張り、それをされた満潮は「なにすんのよ!!」と怒鳴った後、そっぽを向いてしまった。

だが数秒して……。

「ぷっ」

2人はなんとなく、なにかおかしいような気がして笑い始めたのだ。

「あはははは!!」

「ありがとうね、村雨」

「こっちこそ、ありがとう満潮ちゃん」

*

「俺の名前は来元コウマ！ アンタが、エックスの……」

「西崎 夜空だ。 そういうアンタはあの赤いウルトラマン……」
「ああ、ギンガだ！」

その頃、夜空は……ギンガに変身していた青年「来元らいもと コウマ」と対面して

おり、互いに自己紹介をしていた。

「それにしても、酷い有様だな」

「ああ……」

コウマと夜空は怪獣たちによって破壊された無残になった鎮守府を見てそう呟き、夜空はこれで完全に時雨たちが楽しみにしていた文化祭は潰れてしまったと思ったのだが……。

「俺に任せてくれ」

「えっ?」

突然「自分に任せてくれ」と言い出したコウマに驚く夜空だったが……コウマは変身アイテムである「ギンガスパーク」と青いウルトラマンのスパークドールズを取り出す。

『ウルトラマンのスパークドールズ!』

『ウルトラライブ! ウルトラマンコスモス!』

するとコウマの身体が青い光に包まれ、コウマは青き慈愛の戦士「ウルトラマンコスモス・ルナモード」に変身したのだ。

「ほかのウルトラマンにも変身できるのか!？」

コスモスは破壊された建物等を一瞬で修復する光線「ミラクル・リアライズ」を鎮守府の建物に放ち……鎮守府の建物は一気に修復され……全て元通りとなったのだ。

『なんという技だ……』

「ああ、すごいな」

エックスと夜空はそんな会話をしている間にコウマはいつの間にか変身を解いて戻ってきており、コウマは夜空に向かってサムズアップした。

「これで、あいつ等が楽しみにしてる文化祭が開けるな！」

「っ、ありがとう……！」

夜空は自然と笑みを浮かべてコウマにお礼を述べ、対するコウマも「おう！」と元氣よく答える。

「アンタもアンタの戦いを頑張ってくれ！ 俺たちもこの地球を絶対に守り抜くから

よ!!」

「もちろんだ」

そう言う間、夜空とコウマは互いに熱い握手を交わしたのだった。

第6話 『星人&艦娘による物件探し』

「宇宙海人バルキー星人」「異次元宇宙人イカルス星人」「暗殺宇宙人ナツクル星人グレイ」……かつて全ての命の時間を止めることを目的とした「闇の支配者 ダークルギエル」のエージェントとして暗躍し、ウルトラマンギンガとその仲間である「歌」を胸に秘めた少女たちと戦った3人の宇宙人たち……。

彼等は最終的にスパークドールズへと戻り、ギンガによって宇宙に帰る筈だった……しかし……。

なぜかバルキーたちはスパークドールズから本来の姿に実体化し、そしてギンガはそのことに気づかず3人は地球に置き去りにされてしまったのだ。

最初こそ実体を取り戻した3人は自分たちの邪魔をしてきたギンガの仲間たちとギンガと同化していた「青年」に復讐しようと考えたのだが……すぐに新たなウルトラマン、「エックス」が出現したうえにそれと同じ時期に新しく「ビクトリー」というウルトラマンまで現れ、さらにはギンガも帰ってきた上にメビウスまでやってきたため、バルキーたちは「こりゃ勝てないわ」と判断して復讐を諦め……地球で平和に暮らすことにしたのだった。

そう……地球で暮らすことに……地球の公園で段ボールで組み立てた家を住まいにして暮らすことに。

「なんでだあああああああああ!!!」

そう盛大に叫んだのはバルキー、そんなバルキーの大声に反応してグレイとイカルスが慌てて段ボールハウスから何事かと思いい出てきた。

「どうしたのよバルキーちゃん朝からそんな大声出して！　びつくりするじゃない！」

「いやいやいや!!　おかしいだろうがよおこれ!!　なんでミー達宇宙人がホームレスになつてんだア!?　聞いたことねえよ！　地球でホームレスになる宇宙人なんてえ!!」
そこでイカルスが目を擦りながら「そんなこと言つたつてしようがないじゃないカ」とバルキーの肩をポンポンつと叩く。

「吾輩たち自分の星に帰るにしてもその方法なんて全く分からんですし」

「だからと言ってギンガに頼るのもねえ？」

ギンガが地球に戻ってきているのならば彼に頼んで自分たちを元の星に帰してくれよう頼んでみるのも一つの手ではあるが……だからと言って敵であったギンガに頼むのも癪な上に果たして自分たちの言うことを信じてくれないかもしれないかもしれないため、彼らはギンガに頼ろうとしはしなかつたのである。

だからと言ってこのままずっとホームレス生活というのも辛い、せめてどこか住める場所を手に入れられないかと思っていたそのときである。

「お困りみたいだね!!」

「んあ!?! 誰だ!?!」

バルキーたちが声がした方を振り返るとそこにいたのは……。

「鍋響だ」

「いや、だから誰だよ!?!」

そこには滑り台の上から鍋を頭に被った響がバルキーたちにサムズアップをしている姿があつた。

「トウア!!」

響は滑り台がジャンプして着地しようとしたのだが……着地した直後に足首を「クギツ」とやっつけてしまい響はあまりの痛さに「うぐあああああああ!?!」と悲鳴を上げて足を抱えてその場を駆けまわり……その一部始終を見ていたバルキー達はなんとも言えぬ感じでその光景を眺めているのだった。

「無視しよう」

「そうね」

バルキーの提案にグレイもイカルスも納得してそそくさとテントの中に戻ろうとす

るのだが響は「ちよつと待つてよ!」と必死に彼らを呼び止める。

響にそう言われてバルキー達は怪訝そうにしながらも「なんだよ?」と尋ねると響はジオデバイザーを取り出して誰かに連絡した後、彼女はしばらく待つていてくれとバルキー達に頼んだ後、少しして文月と菊月、暁が現場へと到着した。

「お前達かつ、最近この公園に泊まり込んでる宇宙人というのは。子供たちが怖くて公園で遊べないって保護者から苦情が出ている」

「はあ!?　なんだよそれ!?　じゃあミー達にここを出て行けつてののか!」

「そーよ、私たちここを追い出されたら済む場所が無くなるのよ!」

「そうじゃなイカ!　それにそっちこそ子供のくせにえらそーな態度じゃなイカ!」

当然、菊月からそんな言葉を聞けばバルキー達が反発するのも無理はなく、菊月もこうなることは予想していたが取りあえずは自分たちが鎮守府に所属する艦娘であることを彼らに説明することにしたのだが……説明をしたら「怪獣退治や侵略者退治なども今のところは専門にしてる」ということもあり、バルキー達は「まさか自分たちを抹殺しに来たのか!」と3人は警戒し始めてしまい、余計にややこしい事態になってしまうのだった。

「話を聞かない人達だね」

「困ったね」

響と文月がやれやれといった様子でどうするべきかと悩んでいるとバルキー達は「やられる前にやってやる!!」と言いだしてバルキーはバルキーリングを取り出し、グレイやイカルスもやる気満々の戦闘態勢に入ってしまうのだが……。

「だから……!!」

しかし、菊月は素早くバルキーの懐に潜り込んでバルキーリングを奪いあげると同時にバルキーの腹部に膝蹴りを叩き込み……。

「話を聞けと……!!」

続いて菊月はグレイに掴み掛って巴投げを繰り出し、グレイを遠くへと投げ飛ばし……。

「言ってるでしょおー!!」

と最後は暁がイカルスの後頭部とを掴んで地面へと顔面を叩き付けるのだった。

「ええ!? そこ姉さんがやるの!?!」

「話が進まな過ぎてグダグダしてるからいても経ってもいられなくて……後はこのあいだ自分の身を守るようにって光さんに習った護身術試してみたくて。これが出来たら『レディーっぽさ増すよ』と言われたものだから!」

「……姉さん、光さんだから良かったようなものその内悪い男に騙されないか心配だよ」

響は頭を抱えて「はあ」とため息を吐くが暁は胸を張って「私はそんなに騙されやさないわよ!」となぜか自慢げに話す……やっぱり説得力がないため響は文月に「どうすれば姉さんがもつとしっかりしてくれるだろう」なんてことを本人がいる目の前で始める。

「だって姉さんチヨロインだし……」

「あー、確かに暁はチヨロそうだよね〜」

「誰がチヨロいよ!?! 文月まで!」

そんなやり取りを見ていた菊月はというと……「暁はチヨロそうだからきつと光さんは護身術教え込んだんだらうなあ」とか思うのだった。

とまあ、そんなことよりも先ずはこの3人の宇宙人についてだ。

取りあえずバルキー達には「もつとちゃんとした部屋紹介してやるから」と言つて納得して貰い、3人はテントを畳んで3人は人間態に変身してから一同は公園を出ていくのだった。

その際、文月が「なんで最初から人間の姿にならなかったの?」と質問されたが、本人たちが曰く「結構疲れるから」らしい。

*

それから曉たちは地球のとある場所に設けられた地球に移住してきた異星人達が隠れ住む地下空間……まあ、早い話が地下に作られた異星人達の『街』へとやってきた。

ここは地球のとある場所に設けられた地球に移住してきた異星人達が隠れ住む地下空間であり、基本的に地球へとやってきた友好的な宇宙人はここで基本的には住むことになっており、また住んでいるのは宇宙人ばかりであるが中にはごく一部の地球人もこの場所に住んでいる。

最もここはあくまでも宇宙人達が地球に住みやすいように用意された場所であり、全ての宇宙人はここに住んでいる訳ではない。

中には普通に地球人のように暮らしている者などもありたりもする。

「それにここはお前たちのように自分たちの星に帰れなくなってしまう場合などの理由でここに住む者もそこそこいるからな」

「君たちをここに案内したのは君たちをここに住まわせるため、私たちの司令官の命令なんだよ」

菊月と響がバルキー達にそう説明すると3人はふんふんと首を頷かせて納得した様子を見せるが、グレイは1つ疑問に思ったことを菊月に尋ねて見た。

「でも幾らホームレスしてる宇宙人だからって艦娘とはいえ女の子4人だけなんてちよつと危なかったんじゃないの？ 一応、私たちこそそこそこ戦える訳だし」

「ああ、それなら心配ない。私たちはそんな簡単にやられるほどヤワではないし……なにより……」

そう言いながら菊月が指差す方向を見るとそこには……サンングラスとマスクと帽子とロングコートを着ていかにも「怪しい」という言葉がピッタリの人物が電柱に身を隠しながらこつそりとこちらを監視していた。

「もつと危ないのがあるからな」

「いや、なによあれ!？」

「ウチの副司令官だよ」

「ええ!? あんなのが!？」

暁曰く「私たちが心配だからついて来たんだって。と言つても本人は隠れてるつもりみたいだけ」とのことだが、イカルスが即座に「むしろ自分が怪しくなってるじゃないか」とツツコミを入れ、暁達も「全くその通りです」と返す言葉もなかった。

「つていうか幾らここが宇宙人ばかりの街だからつて即通報ものでしょあんなの」

「多分、今私たち中心に行動してるから通報しても警察とか来ても無理やり振り払って絶対私たちを見守ることに専念するよ」

奈々の美少女好きには困ったものだ。と菊月は頭を抱えてため息を吐くのだが……取りあえずこれからバルキー達が使う住処を決めるためのプランを建てるため、まずはゆっくりできそうな場所を探そうと考え、休憩も兼ねてどこかで休める場所はないかとキヨロキヨロ辺りを見回していると……。

「怪獣酒場」と書かれている酒場を発見し、丁度いいので昼食も兼ねて菊月達はそこへと向かい店に入るとそこには……。

「店長、ウオッカ一杯ちよーだい♪」

「あのねえ、臆月ちゃん、君ウオッカなんて飲める年齢じゃないでしょ」

「いいんだよ別に、実際僕たち実年齢なんてハッキリしてないんだし一緒だよ一緒！
提督なんてそれをいいことに時雨に手を出そうとしてるし！」

なんて会話を繰り返している臯月と店長のバルタン星人がいた。

「なにしてるんだお前はあ!!」

「へぶ!!?」

すかさず菊月は臯月の後頭部を掴んで机に叩き付け（もちろん手加減はしてる）、臯月は涙目になりながらも「うー」と声を唸らせて菊月を睨み付ける。

「なにすんのさ菊月ー!!?」

「昼間っから酒飲む奴があるかあ!! 後、年齢が分からなくても絵的にアウトだろ!!」

「そんなの知らないよ! いいじゃんか鎮守府じゃ菊月飲ませてくれないんだから

!!」

「せめて後10年くらいは飲むな!! 後、何気に提督の名を汚すようなことを言うな

!! 誤解を生むだろ!」

取りあえず、菊月は臯月を見張りも兼ねて引きずって自分たちと同じ席に向かい、その光景を見ていた響はというと。

「なんかプレッシャーでアル中になったヒーローを思い出した!」

「響っていつもアメコミヒーローのネタ入れるよね。なんでえ〜?」

「前の司令官の影響」

「アンタ他人から影響受けすぎ」

文月の問いに答える響に対し、暁はすかさずツツコミを入れた。

それからバルタンに案内された席に着席すると菊月はぶーたれてる皐月を見て「はあ」と溜め息を吐き、そんな彼女を見て響は皐月の肩にポンつと手を乗せる。

「お互い、苦労する姉を持ったね」

「いや、雷と電から見たらお前も同じだからな？ 後、皐月姉さんは暁ほどチョロイン

じゃない」

「全部聞こえてるわよそこ!?!」

すると文月がバルキーがなにかを抱えていることに気づき、彼女は不思議にそうにそのバルキーを抱えているものを興味深そうに覗き込む。

「ねーねー、バルキーさくん、バルキーさんが抱えてるのなあにいく?」

「んっ? おう、こいつはミーのペットのサメクジラの『ジョリー』って言うんだ!」

バルキーが抱えていたのは「海獣サメクジラ」と呼ばれる怪獣の幼体であり、文月はそんなサメクジラことジョリーを目を輝かせながら見つめ、そんな彼女の様子を見てバルキーは「抱えてみるか?」と問いかけると彼女は満面の笑みを見せて頷いた。

文月はバルキーからジョリーを渡されて抱きかかえ、ジョリーの頭を優しく撫でると

ジヨリーもどこか嬉しそうに鳴き声をあげる。

「かわいい〜」

「ペットと美少女が戯れるのってなんかいいですよね！」

とかいつの間にか奈々がマスクとサングラスと帽子を取った状態で菊月の隣に座って和んでおり、菊月からは「なんで隣にいるんだ、遠くから見守るんじゃないのか」と呆れたような視線を向けられ、それに気づいた奈々は胸を張って言い放つ。

「飽きた!!」

「だと思った」

「っていうか可愛い女の子たちに囲まれたかったんです!! 本当なんです、信じてくださいー!」

「分かった黙れ」

*

その後、酒屋で食事を取りながら色々と話しあつた結果、この街がどういふ街なのかを先ずは見て周り、本人たちが気に入ればここに住めるように不動産屋に行つて物件を紹介して貰うこととなり、一同は色々な場所を見て廻つた後……最終的にバルキー達は「住み心地が良さそう」ということでここに住むことを了承。

今現在はその不動産屋に訪れており、なんでもこの不動産屋は「コイン怪獣カネゴン」が経営しているらしい。

「ところで一つ疑問なんですけど吾輩達お金持つてないんですが」

「まあ、地球に来てそういう人たちのための物件紹介の店ですからね。最初はサーブスしてくれる筈ですよ」

奈々にそう説明されたバルキー達は安心したように胸を撫で下ろし、一同は店の中へと入ると先に説明した通り、カネゴンが出迎えてくれた。

「やーやー、奈々さんお久しぶりですガネ！」

「ええ、お久しぶりです。ところで先ほどの連絡した通り、こちらが……」

「はいはい、話は聞いてるガネ、取りあえず早速物件紹介するんで行きましようガネ
」

カネゴンはそう言つて一同を最初の物件の場所へと案内してくれることになったのだが……なんか胡散臭い、どつかの世界の武器商人してるカネゴンもたまに不良品渡したりする奴とかいるし……とバルキー、イカルス、グレイの3人はほぼ同時に同じことを考えたのだった。

そんな彼等の不安そうな様子に気づいたのか暁が「大丈夫よ」とイカルスの腰をポンと叩く。

「副司令官は女の子大好きで変態臭くて鎮守府でも1・2を争うほどの自由人で変人でそのくせ悪戯好きなどところもあるけど真面目な時は真面目だし、変な人のいる不動産屋なんかに行ったりなんてしないから安心していいわ」

「いやもう安心できる要素殆どないだろうがア!!」

「不安要素しか見当たらないじゃなイカ!!」

自慢げに語る暁だったが、バルキーとイカルスの言う通り全く説得力がない。

するとカネゴンがこちらにやって来てバルキー達に「どんな部屋がいいか希望はあり

そこに奈々がカネゴンの頭を鷲掴みにして頭を地面に叩き付け、顔が地面に減り込んだがカネゴンはすぐに頭を引っこ抜き、拳をコキコキと鳴らしている奈々に「待つて！分かつてる！分かつてるから!!」と必死に命乞いをする。

「アンタ語尾忘れてるわよ」

「ああ、アレキャラ作り。もうめんどくさいから普通に喋る」

「あれキャラ作り!?!」

取りあえず素に戻ったカネゴンは「いや分かつてるよ、ちゃんと案内するから」と言つて一同はカネゴンに案内されるままついて行くことになったのだが……文月、皐月、暁が先ほどのカネゴンの言葉でふと気になったことをカネゴンに尋ねてきた。

「ねーねー、カネゴンさん、さっき言つてた3Pってなあに?」

「あー、将来的に考えても3人には教えといた方がいいかもね。皐月ちゃん、文月

ちゃん、暁ちゃん3Pってのはねえ」

「「お前はなにを教えようとしてんだアアアアアア!!!!」
!!!!」

「ぐばああああ!!!!」

カネゴンが暁達に説明しようとした直後、菊月、奈々、響に後頭部を押さええられて地面に力強く叩きつけられ、カネゴンは今度は身体の上半身くらいが地面に減り込んだ。

「ウチの鎮守府でも特に純粋な3人になに教えようとしてんですかこのエロ怪獣がア

!!

「エロ怪獣なんて言われたの初めてだよ。　　っていうかエロ怪獣はどっちかって言う
と中学生に触○プレイしてた奴でしょ」

「やかましい!!」

「まーまー、そう怒らないで。　　ちゃんとILDK紹介するから」

そう言つて辿り着いた先には……。

「いやあ、ここなんてどうですかねえ?」

犬小屋だった。

「なにがだア!!?」

「なんで犬小屋!?　　私たちどう住めつて言うのよそんなところで3人も!!」

「なんで汚い犬小屋に住まないといけないイカ!!　　吾輩達もILDKよく知らないけどこれじゃないことだけは確かじゃなイカ!!」

当然、バルキー、グレイ、イカルスはカネゴンにツツコミ兼ね文句を言いまくり、カネゴンは怒鳴る3人はなんとか落ち着かせようとするが……響からは「あなたILDK知らないでしょ」と疑いの眼差しを向けられるがカネゴンは断固として「そんなことはない!」と否定。

「これはアレだよ、バルキーさんの抱えてるサメだかクジラだか分からん変な生き物

捨てようと思って」

「余計なお世話だボケエ!! 誰がジョリーを捨てるかア!!」

「いやー、すいません、実は今1LDKが実家に帰ってまして」

「部屋がどこの実家に帰るんだ!!?」

訳の分からないことばかり言うカネゴンにすかさずバルキーと菊月がツツコミを入れ、奈々は「はあ」とため息を吐いて「別に1LDKじゃなくてもいいので3人で住めて安い物件はないんですか?」とカネゴンに尋ねるとカネゴンは……。

「そうですか、もう1LDK戻ってこないかもしれないけどいんですね?」

「だからどんな1LDKだ!? っていうかそれもはや部屋じゃないだろ!! っていうか暁、私にばかりツツコませるな!! お前もたまにはツツコめ!! 私1人じゃ裁き切れん!!」

「菊月がいたら……ツツコミとしての仕事しなくていいかなって。そもそもレディーは本来ツツコミなんてしないのよ!」

「おいふざけるな暁イ!!」

ということとで結局……というよりも当然と言えば当然だが菊月は一発カネゴンを殴った後、カネゴンにもつとマシな別の物件を探すように頼み、カネゴンに案内されるままついて行くところにあつたのは……。

「ああ、皆さん、こちらこの要さ……アパートに住んでるつけもの星人さん」

「つけもの星人!? なんだそのガ○ツに出てきそうな宇宙人! っていうかこれアパートだったのか!?!」

するとカネゴンはつけもの星人に今バルキー達の部屋探しをしている最中であることを話し、つけもの星人はその話を聞いてつけもの星人はバルキー達を見るや否やどこか照れ臭そうな表情を浮かべて彼等に踏み寄ってきた。

(うわっ、なんか来たんじゃないか)

(なんでしよう、なんかこいつ見ると妙にウザく感じる……)

(なんで照れてんだよ、気持ち悪りイよ)

とつけもの星人に対してとても失礼なことを考える3人だが、つけもの星人はそんなことは知る由もなく馴れ馴れしくバルキー達3人に話しかける。

「いやー、実はここアパートなのにつつと僕しか住んでいなくて。なのであなた達が住んでくれるなら僕としても嬉しいなー。なんて」

照れ臭そうに話すつけもの星人、しかしぶつちやけバルキー達は「つけもの星人には悪いがここに住むのはちよつと嫌だなあ」と思わずにはいられなかった。

「アパートなのにつつと1人なんて少し心細かったでしょうね。でもこの人たちがここを気に入ればもうそんな思いしなくて住みますね! 友達にもなれそうですし良

かったです!」

「あつ、いやー、そつすねえ! 自分としても嬉しいですよそれは!」

だが、そんな時、奈々はつけもの星人の腕を掴みあげて空へと放り投げ……どつかから取り出したバズーカでつけもの星人を撃ち落とした。

「ば……バズーカ撃ったあああああああ!!!」

そしてバズーカに撃たれたつけもの星人は地面に落下、つけもの星人は地面に激突し……。「な、なぜ……?」と奈々に問いかけると奈々は……。

「あなたは私なんです」

と意味の分からない回答をしてつけもの星人は地面に倒れこんだ。

「つけもの星人——!!!?」 だ、大丈夫かい!?

すぐさま響がつけもの星人に駆け寄って彼を抱きかかえるとつけもの星人は弱弱しい声で喋り出す。

「お、俺……今回ゲスト宇宙人として活躍したかったのに……」

「えっ? いやあなた本来宇宙人じゃないでしょ」

とここで珍しく暁がツッコミ。

「ああ、活躍すればいいよ!! 存分に活躍すればいい!! だから……だから死なないでくれ!」

涙を流しながら必死に訴える響、しかしその叫びも空しくつけもの星人は安らかに目を閉じた……。

「ただしつけもの……」

すると響はつけもの星人を空中へと投げ飛ばし……。

「お前はダメだツ!!」

「ぎゃあああああ!!!」

そしてジャンプしてからの跳び蹴りをつけもの星人へと思いっきり叩き込み、つけもの星人はそのまま地面「ビターン!!」という大きな音を立てて地面に叩き付けられた。

「あー、スツキリした」

奈々と響が同時にそう言い放つと暁は「なにがしたかったのアンタ等!」と思わずツツコミをしてしまい、菊月と文月は慌ててつけもの星人の元に駆け寄ろうとするが……。

「ああ、そいつこの街で盗みなどを行っていた宇宙人なので手錠かけといてください
ね」

「ええ!? そうだったのか!」

なんでも奈々曰く今日ここに来たのはこのつけもの星人を逮捕するためだったとか……。

兎に角、バルキー達は「やっぱりもう少し普通のところはないか?」とカネゴンに尋ねるとカネゴンは腕を組んで「うーん」と考える仕草を見せる。

「ああ、だったらあなた達にピッタリな物件ありますよ!」

そう言つてカネゴンが案内した先にあつたものは……「ゴキブリホイホイ」だった。

「喧嘩売つてんのかお前はアアアアアアアア!!」

流石にこれにはバルキーも怒鳴りあげてカネゴンを蹴り飛ばし、それにすかさずイカルスとグレイも加わつてカネゴンを蹴りまくる。

「しかもこれ、おま……ゴキブリホイホイなのになんでこんなデカイの!」

そう、そのゴキブリホイホイはただのゴキブリホイホイではなく滅茶苦茶巨大で怪獣一匹は入りそうなくらいの巨大な物だった。

「グウ……グオオ……」

しかも中に「宇宙怪獣ゴキグモン」がその中に捕まっていた。

「オイオイ!! 怪獣一匹マジで捕まつてるだろーがア!!? ミー達をここに本気で住

まわす気だったのかお前はア!!」

「いやいやいや!! 冗談ですつてば!! 分かつてます、分かつてますから! 今度こ

そ、今度こそちゃんとした物件紹介しますから!!」

次に紹介する物件はなんでもカネゴン曰く「今までのお詫びも兼ねて少しオシヤレな

ところを紹介します」とのことで彼について行くことになったのだが……その先にあつたのはどこからどう見ても滅茶苦茶高そうな高級マンションであり、それを見た菊月は「人の話を聞いてたか!!?」とカネゴンに怒鳴るのだが……。

「いや、ちゃんと聞いてましたよ。いつも部屋が一杯に埋まってたんですけどね、つい最近一人部屋を出て行きました。なんでも急用だったらしくて家財とかで部屋もそのまんまなんですよ。そこらへんの処分をしてくれるなら本来3百万のところで3万にまであげようかと思ひまして」

「いや幾らなんでも減りすぎだろ」と菊月や皐月、暁は思ったのだが……そうこうしている内にそのマンションのカネゴンが案内する部屋の前にまで到着し、カネゴンが部屋を開けるとそこには……。

「じゃあ、多少汚れてますけどよろしく願ひしますね?」

そこには、そこら中に血しぶきの跡のようなものが周りに付着し、そして部屋のカーテンにはなぜか「ノボル」と書かれた血文字が……。

「「なにがよろしくウウウウウ!!!」」

これを見た瞬間、バルキー、イカルス、グレイは思いつきりカネゴンの頭を床に叩き付けた。

そしてその現場を見た響と菊月は「暁達に見せたら泣き出しそう」と考え、慌てて暁、

文月、臯月を部屋の外へと出してしばらく待つておくように伝える。

勿論、いきなり放り出された暁は「ぶんすか!」と怒っていたが……あの3人はほぼ間違いなく心臓に悪い。

「おま、これ……どう見ても殺人現場じゃねえか!」

「処分つてなによお!! 犯罪の現場の処分?! 犯罪の片棒を担げつてこと!」

「そんなの冗談じゃないか!」

バルキー、グレイ、イカルスがそれぞれの思ったことを口にし、カネゴンは叩き付けられた頭を手で押さえながら起き上がり、バルキー達に反論の言葉をぶつける。

「やだなあ、お客さん。殺人現場なんてそんなドラマみたいなことあるわけないじゃないですかあ。これはきつとアレですね、ムルチの三枚下しでもしてたんでしよう」

「そつちの方がナツシングだろ!! まだマグロの解体してる方が説得力あるわ!!」

すると奈々がちよんちよんつとカネゴンの肩をつつき、ボソつつと「もしかしてこつて訳あり物件ですか?」と小声で尋ねるとカネゴンは「実は……」と苦笑しながらそう答え、カネゴンが言うにはなんでもこの部屋少女の霊が現れては住人を苦しめ……その苦痛に耐えきれなくなった住人が後を絶たないというのだ。

「まあ、幸い死人は出てませんただの噂ですし問題ないかと」

「問題大ありだろうがああああああ!!?! つーか死人出てるだろ明らかに!!」
カネゴンの話を聞いてすかさずツツコミを入れるバルキー。

「少女の霊……ですか。 よし、ここに住みましよう!!」

「アンタが住むんじゃないでしょ!？」

「あー、もう、いいじゃないですか……もしかしたらその少女の霊というの……私好み
かもしれないじゃないですか!!」

「お前の願望だろうがああああああ!!?!」

奈々に対し、ツツコミを入れるバルキー!!

すると奈々はフツとさつきから菊月がツツコミを入れていないことに気づき、彼女の
姿を探そうとキョロキョロと辺りを見回すと……いつの間にか菊月が自分の腰辺りに
がつつりと抱きついていた。

「……」

しかも心なしか菊月の肩が小刻みに震えている。

「もしかして菊月ちゃん……怖いのか?」

「……」

なにも答えない、ただ震えているだけ……そして響はジオデバイザーでちゃっかり震
える菊月の写真を激写。

また震える菊月を見て奈々はとても満足そうに幸せそうな笑顔を見せていた。するとその時のことだ、突如……この部屋から呻き声のようなものが聞こえ始めたのだ。

『……………け……………』

「んあ？　なんだ？」

『……………て、行け……………！　出て……………行け……………！！』

そこに、突如として白い服を着た頭から血をダラダラと流した少女のような人物が奈々達の目の前に現れると床から無数の青い腕のようなものが生えて奈々達の足などを掴むと腕はどんどんどん彼女たちを床の中へと引きずって行く。

「うわあああ!!?　なんだ!!?」

「オイイイ!!?!　カネゴンマジで幽霊出たじゃねーか!!　どうすんだこれ!?　絶賛ミ-

達床の中に引きずり込まれてんぞ!!?」

「いやいや、幽霊だなんてそんなバカな。あれはきつとアレですよ、ユーリー星人が

操つてるシャドウマンですよ」

「どつちにしても一緒だろうが!!」

兎に角、このままでは床の中に引きずり込まれてこの後どうなるか分かったものじゃない。

それを回避するために響は艷装を展開しようとするが……なぜか艷装の展開ができず、響はそのことに驚きの表情を見せる。

「なっ!!? 艷装が出ない? 菊月、そっちは?」

「ッ!! ッ!!」

響が菊月も艷装は出せないかと尋ねようとしたのだが……奈々に必死に抱きついて滅茶苦茶怯えていた。

「菊月ちゃん……」

奈々は震える菊月を見て彼女はきつと少女の方を睨み付け……そして……。

「私の可愛い菊月ちゃんを怖がらせるなボケええええええええええ!!」

なんと奈々は力づくで無理やり自分を引きずり込もうとしている腕を振り払って菊月を抱きかかえながら脱出し、そのまま血まみれの少女の胸倉を掴み……強烈な頭突きを血まみれの少女に叩き込んだのだ。

「っっ!!?」

それを喰らってただでさえ血が出ている頭からぶしゃつと血がさらに吹き出し、血まみれの少女はフラつきそして奈々の跳び蹴りを腹部に叩き込まれて少女は転倒した。

「ぐはああ!!?」

「あなたのようなエグイ奴は私好みじゃないです!! 期待外れな上に菊月ちゃんや響

ちゃんを危ない目に合わせるなんて絶対許しませんよ!!」

すると響達を引きずり込もうとしていた腕は一斉に消え去り、それと同時に血まみれの少女の姿が変化……そこにいたのは人間大の大きさの1つ目の宇宙人「宇宙悪霊 アクマニヤ星人」だったのだ。

それを見てここがなぜ訳あり物件なのかを奈々や響は同時に理解し、全てはこのアクマニヤ星人の仕業だったということを一併は理解した。

「そうか、こいつのせいでこの部屋に問題があつたんだな!!」

カネゴンはアクマニヤ星人を睨み付け、アクマニヤ星人は悔しそうに床を殴りつける。

「クソ!! 折角今までタダでこの部屋に住めたというのに……!」

「成程ね、アクマニヤ星人か。確かに君ならここを幽霊部屋にすることも可能だろう」

そして響は艦装を展開して主砲をアクマニヤ星人に向けるが、アクマニヤ星人は巨大な目玉のような球体に姿を変えるとそのまま真っすぐこちらに向かって突撃し、響達を突き飛ばして扉を突き破るとそのままアクマニヤ星人はどこかへと逃走していつてしまう。

「えっ? 今なんか通りすぎなかった!」

「姉さん達!! あいつを追いかけるよ!!」

すぐさま響も部屋を出て曉達にそう言うと言いつつと曉達は訳が分からなかったが取りあえず響の言う通りアクマニヤ星人を全員で追いかける。

一方で部屋に残ったメンバーはというと……。

「ほら、菊月ちゃんあれは幽霊じゃなくて宇宙人の仕業だったんですからもう震えなくていいんですよ?」

「……」

奈々は笑みを浮かべて優しく菊月に声をかけ、彼女はそつと顔を俯かせたまま奈々から離れる。

「……なよ」

「えっ?」

「だ、だから……! 言うなよ、私が……その……お化けを怖がってたつて／＼／＼／＼」

顔を俯かせてはいるが恐らく顔を真っ赤にして恥ずかしそうにする菊月、そんな彼女を見て奈々は微笑み、彼女の頭をそつと優しく撫でる。

「誰にも言いませんよ、響ちゃんにもちやんと言っておきますからね」

「あ、ああ、助かる」

*

その後、アクマニア星人は異星人達の『街』を出て地球人達が暮らしている街に出現し、アクマニア星人は本来の姿に戻って巨大化する。

「巨大化した!?!」

「応援を呼ぼう。」

文月と皐月は避難誘導を頼む」

「了解!」

響の指示に従って文月と皐月は避難誘導に向かい、暁と響は巨大化して街で暴れるアクマニヤ星人に対処するため、戦闘を開始する。

響と暁は主砲から砲弾を発射してアクマニヤ星人を攻撃するがアクマニヤ星人には対した効果はなく、ならばと2人はサイバーカードを取り出してジオデバイザーにカードを装填。

『サイバーモモザゴン、ロードします』

『サイバーテレスドン、ロードします』

モモザゴンとテレスドンの力をロードさせた響と暁、響は主砲から怪音波、暁は主砲から溶岩熱線をそれぞれ発射してアクマニヤ星人に攻撃し、直撃を受けたアクマニヤ星人はそれなりのダメージを受けてよろめく。

「よし、もう1度溶岩熱戦発射よ!!」

もう1度暁は溶岩熱線をアクマニヤ星人に向かって放つがアクマニヤ星人は念力のようなものを使って熱線を空中で一時停止させ、それを暁と響に撃ち返したのだ。

「なっ!!」

2人は直撃こそ避けたもののその時に起こった爆発で吹き飛ばされてしまい、暁はすぐさま起き上がって響の駆け寄る。

「響! 大丈夫!」

「ああ、なんとかね」

そんな時のことである、暁のジオデバイザーに突然リヨーガから通信が入る。

「リヨーガさん？ こんな時になんですか!？」

『いやあー、どうもちよつと君たちが苦戦中みただからねえ、応援がつくにもまだ少しかかるし……だから代わりと言ってはなんだけど暇潰しに作った武器をそっちに送ったから』

「武器?」

「姉さん、あれ……」

暁は響が指差す方向……空を見上げるとなんとそこには……巨大ロボットが空中を飛んでいた。

「ええー!? なにあれ?!」

そしてそのロボットは「ズシン!!」という巨大な音を立てて暁達の目の前に降り立ち、響はそのロボットを見て「ハラショー!」と目を輝かせていたが暁は目を丸くして口をパクパクとさせ唾然としていた。

「な、なにこれええええええええええ!!」

『その名も! MG-0005-RX マウンテンガリバー5号……略してMG5!!』

「誰もそんなの聞いてないわよ!!　　っていうかあなた暇な時こんな物作ってたの!」
『趣味は大事だろ』

しかもリョーガはその巨大なロボット……「MG-0005-RX　マウンテンガリバー5号」略してMG5に「暁ちゃん、君が操縦するんだ!」という無茶苦茶な支持を出し、当然暁は「はあ!」と言うのだが……なんでもリョーガ曰く……。

『コックピットが小さくて暁ちゃんくらいのチビスケじゃないと操縦できないんだよ』

「なんでよ!」　もつと大きくしてタカトさん辺りに操縦して貰えば良かったじゃない!!」

『設計ミス♪』

この時、暁は帰ったら絶対リョーガをぶん殴ってやろうと誓う暁だったが……そんなことを考えている間にMG5は暁に光を照射してそれに照らされた暁はそのまま強制的にコックピットに乗り込ませられてしまった。

「ちよっ!?!　ホントに私がやるの!?!」

『大丈夫大丈夫、そこに足と手をかけるレバーみたいなのあるだろ?　それを使って手足を動かせばMG5もそれに合った動きをするから操縦自体は簡単だよ♪』

ちなみにこれを見ていた響は「いいなあ、姉さん」と凄く羨ましそうな目で見ていた

とか。

そしてアクマニヤ星人はMG5の存在に気づくとMG5に向かって突進攻撃を繰り出そうと駆け出し、それをモニター越しに見た暁はリョーガに慌てて「なにか武器ないの!？」と尋ねるとリョーガは……。

『今日は、ない』

「……」

そんなリョーガにイラつとした暁は……。

「グバアア!!？」

この怒りの矛先を突進してきたアクマニヤ星人にリアットでぶつけるのだった。

そのまま地面に倒れこんだアクマニヤ星人にMG5は馬乗りとなり、何度も拳をアクマニヤ星人に叩き込んでボコボコにする。

「もうヤケクソよお!!」

もう暁は半泣きだったがアクマニヤ星人は手も足も出せずにただただボコられ続け、最後にボールの如くMG5にアクマニヤ星人は蹴り飛ばされる。

「レディーの力を舐めないでよね!!」

「レディーって凄いな」

なんてことを響が呟いていると同時に応援に駆けつけた時雨、夕立、朝潮、荒潮が到

着したのだが……時雨達はこの状況は一斉に首を傾げる。

「えっと、これどういう状況？」

時雨が響に尋ねると彼女は一通りのことを説明し、それを聞いた時雨はまたリョーガがおかしなものを作ったのかと呆れたようにため息を吐いた。

「おのれえ!!」

するとアクマニヤ星人は手の平の上に1つのスパークドールズを出現させ、目を赤く発光させてなにかのエネルギーをそのスパークドールズに流し込むとそのスパークドールズが実体化……アンコウにも似た怪獣「超巨大単極子生物 モキアン」がその姿を空中へと現したのだ。

「な、なにあれデカ!? しかもなんか気持ち悪い!」

「やれモキアン!!」

「クオオオオオオオン!!」

アクマニヤ星人の命令に従ってモキアンは4つの触手でMG5を拘束し、電撃を流し込んでMG5は身体中から火花をあげ……さらにアクマニヤ星人が目から弾丸を発射してMG5を攻撃、モキアンはMG5を解放するとMG5はその場に倒れこんでしまう。

「きやあ!」

「姉さん!!」

そしてアクマニヤ星人とモキアンがトドメの攻撃を行おうとしたその時……。

「エックス、ユナイトだ!!」

『よし、行くぞ!!』

丁度現場に来ていた夜空がエクステバイザーをXモードに変形させ、エックスのスパークドールズをリードさせる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

「エックスーーーーー!!!」

『エックス、ユナイトッド』

そして夜空がエクステバイザーを掲げると夜空は光に包まれて「ウルトラマンエックス」へと変身し、姿を現すと同時にアクマニヤ星人に両腕・両足を開きX字の姿勢からエネルギーを集中した右脚で繰り出す飛び蹴り「Xクロスキック」を叩き込んで大地へと降り立つ。

『Xクロスキック!!』

「グオオ!!?」

戦闘BGM「Xの戦い」

「エックス! ありがとう」

暁はエックスにそうお礼を言うとエックスは頷き、エックスはアクマニヤ星人に向かって駆け出して行く。

しかしそれをモキアンが触手でエックスの手足を拘束し、電撃を流し込んでエックスを苦しめる。

『ウオオ!!?』

そしてアクマニヤ星人が目から放つ弾丸とモキアンが放つ火球がエックスに降り注ぎ、エックスは身体中から火花を散らして吹き飛ばされてしまう。

さらにモキアンはエックスを拘束したまま空中に持ちあげてそのまま地面に叩き付ける。

『ジュア!?!』

「総員、あのデカブツの触手を集中攻撃しろ!! エックスを助け出せ!!」

そこに丁度菊月が駆けつけ、菊月の指示を受けた時雨達は頷き、それぞれのサイバークカードを装填する。

『サイバーゴモラ、ロードします』

『サイバールガルベロス、ロードします』

『サイバーブラックキング、ロードします』

『サイバーキングバモス、ロードします』

「つてえー!!」

時雨のその叫び声と共に時雨、夕立、朝潮、荒潮の怪獣の力を宿した光線がモキアンの触手に放たれてモキアンの触手を破壊し、解放されたエックスは地面へと降り立つ。

『サイバーアントラー、ロードします』

「さつきはよくも……!! 喰らえ!!」

そしてジオデバイザーにカードを装填した菊月はアントラーの角を模った光弾をアクマニヤ星人に発射し、それはアクマニヤ星人の角を破壊する。

『シエア!!』

「ウギャアア!!?」

『これで決めるぞ、夜空!!』

「ああ!! 行くぞエックス!!」

そこにすかさずエックスの強烈な蹴りをアクマニヤ星人は顔面に叩き込まれて空の彼方へと吹き飛び、エックスは空中にいるモキアンに視線を映すと両腕を左側へゆつくりと振りかぶり両腕を胸の前でX字にクロスさせて発射する「ザナディウム光線」をモキアンに向かって発射。

『「ザナディウム光線!!」』

「ギシャアアアアア!!」

ザナディウム光線の直撃を受けたモキアンは身体中から火花を散らし目を「×」にし
ながら爆発、スパークドールズへと戻るのだった。

『ジュア!!』

そしてモキアンを倒したエックスは空中へと飛び立ち姿を消した。

その後……バルキー達は無事に自分たちが住める部屋を発見してそこに住むことと
なり、これにて一件落着となるのだった。

ただ、あの一件から菊月が奈々に対して若干意識を持ってしまったとか……。

第7話 『父が起こす聖夜』

ある時、ある場所で1人の少女が薄っすらと目を覚ました。

目を覚ました少女は完全に意識を取り戻したのだが周りは真っ暗でなにも見えず、少女はその場から動こうとしたがなぜかそこから動くことができなかった。

そこで少女は気づいたのだ、彼女は自分が身体に「うねっ……」とした物が身体にへばり付き、壁に張りつけられて身動きを封じられているのだと。

するとやがて暗闇に目が慣れてきた少女は辺りを見回すと……周りににはなにかの液体で固められて自分と同じように壁に張りつけられた人々が何人もいることに気づいたのだ。

しかしその人々は気を失ったかのように虚ろな目をしており、その異様な光景に少女は「ひっ!」と小さな悲鳴をあげるがすぐに冷静さを取り戻し、自分と同じように拘束している人々に語りかけようとするのだがそんな時。

「ギジャアア……!」

「っ!」

なにかの鳴き声のようなものが聞こえた。

しかもその鳴き声は動物にしては妙に不気味で……少女のその表情は恐怖に歪んだものへと徐々に変化していった。

そんな時、少女は自分の足元辺りに小さな……しかし気味の悪い、卵のようなものがあることに気づき、よく見れば他にも卵のようなものが幾つもそこにはあり、中には卵が開いてその中からなにかが飛び出したかのような痕跡があった。

そして……少女の足元にある卵も『ぬちゃっ……』という音を立てながら開いた瞬間、そこから「なにか」が飛び出し……次の瞬間少女はまた気を失ってしまうのだった……。

*

これはまだクリスマスごろの時期だった時の話……。

「提督、メリークリスマス！　なんてね？　えへへ……」

その頃、鎮守府でサンタクロースのような帽子と白い大きな袋を持った時雨がニコつとした笑顔で執務室に現れて夜空にクリスマスプレゼントを渡していた。

「……なあ、時雨、色々言いたいことがあるんだが……」

「んっ？　なにかな？」

「なんでお前サンタの恰好してんの？　って言っても帽子と袋だけだけど」

「副司令がどうしてもやってほしいって言うから……えっと、その……変、かな……？」

時雨は不安げな表情で夜空の顔を覗き込むが……夜空は慌ててフルフルつと首を横に振ってそれを否定し、笑みを浮かべて「いや、可愛いと思う」と言葉を返したのだつた。

「えへへ、ありがとうと提督♪」

どことなく夜空に褒められてどこか照れ臭そうにする時雨だが、夜空はそれよりも時雨が自分に渡してくれたクリスマスプレゼントの方が気になって仕方がなかった。

なぜなら夜空に渡されたプレゼントと言うのが……なにかこう、夕立つほいぬいぐる

みだったからである。

「なにこの夕立っばいぬいぐるみ？」

「可愛いでしょ？　ちなみにお腹を押すと『ばい！』って鳴るよ」

時雨の言う通りに夕立っばいぬいぐるみのお腹を押すと本当に「ばい！」という音声……しかもすっかり夕立ボイスが鳴り、なぜに自分にこれをくれたのかは謎だったが夜空は取りあえず「ありがとう、大事にする」とお礼はしっかりと伝えるのだった。

「さて、それじゃみんなそろそろ寝静まった頃だろうし他の娘達のクリスマスプレゼントを配りに行くね！」

「なんで時雨がサンタ役なんだ？　別に俺とかタカトさんでも良かった気がするけど……」

ちなみに今夜空が挙げた名前の中に奈々とリョーガがいなかったのは当然「なにしでかすか分からないから」である。

それとなぜ時雨がワザワザ、サンタの役をやらなければならないのかというとな奈々に頼まれたかららしく、時雨も「少し楽しそうだから」ということでこれを引き受けたのだ。

「まあ、でも一人でプレゼントを配るのは大変だろ？　俺が手伝うよ」

「えっ？　でも悪いよ！　もう真夜中だし……僕たち駆逐艦は夜には強いから平気だ

けど」

「俺がそうしたいんだよ、いいから手伝わせろ」

ニツと笑みを浮かべながらポンっと時雨の頭に手を置き、少し乱暴気味に彼女の頭を撫でると時雨は少し照れ臭そうにしつつも「ありがとう、提督」とお礼を述べるのだった。

尚、このときの2人のやり取りの様子をこつそりと覗き込んでいた奈々はというと……2人が一緒にプレゼントを配りまわることになったことに安堵したようなため息を吐き、奈々はクスリと小さく笑った。

「私の計画通り！ 全く、無自覚カップルってああいうこと言うんですかねえ。

さつさとケツコンカツコカリくらいはしちやえばいいのに」

奈々は誰にも聞こえないくらいの小さな声でそうボヤいた後、静かにその場を歩き去って行くのだった。

そしてその後、みんなが寝静まったであろう時間に時雨と夜空は先ずは第六駆逐隊の部屋へと入り、彼女たちのプレゼントを枕元に置こうとしたのだが……一つ、夜空は気になったことがあった。

それは「彼女たちはなにが欲しがっているか」ということであり、それを時雨に聞いてみると時雨は「ちゃんと考えてるよ」と答え、時雨が指差す方向を見るとそこには4

人の置手紙のようなものが置いてあった。

「ああ、成程、紙に欲しいものを書いてもらったのか。でもこれ、遠回しにサンタは
いないって言ってるような気が……」

「その辺は大丈夫だよ、そうしないとサンタさんは来てくれないんだって説明して
いたから」

それを聞いて夜空は「ああ、なるほどね」と納得し、2人は早速第六が紙に書いたプ
レゼントの内容を見て見ることに。

最初に見たのは長女の暁、夜空と時雨は暁が書いたプレゼントがなにかを確認すると
そこに書かれていたのは……。

『私と菊月以外のツツコミ役が欲しい』
と書かれていた。

「ごめん無理！ 流石に人は用意できない！」
「いつもツツコミご苦労様!!」

取りあえず暁は代わりに可愛らしいペンギンのぬいぐるみを置いておき、続いて響の
書いた紙を確認してみるとそこには……。

『ターミーター（シ〇ワちゃんのやつ）の設計図』
と書かれていた。

「だから無理!? スカイ〇ット先ず作らないと! 世界滅びかけるけどなー!」

「いや、リョーガさんからターミ〇ーターの設計図だけは貰ってるよ。正確にはそれに似たものだつて言つてたけど」

「ええっ!? あるの!?!」

時雨が言うにはなんでもこのあいだ大破したMG5のパーツを使えば一応の制作は可能らしい。

なんでもMG5、あれは特殊な素材でできているため二度とMG5を作ることができず、修理が不可能……そのため、リョーガが「余ったパーツ捨てるのも勿体ないし、折角だから弟子である響ちゃんにあげよう」ということでリョーガが響またなにか新しい物を作ってくれるのを期待して彼女へのプレゼントになった訳である。

尚、次は雷の番だが……既に嫌な予感がしてならない。

だが見ない訳には行かないという訳で夜空と時雨が雷の書いた紙を確認するとそこには……。

『プラズマキャ〇ン（無論本物）』

と書かれていた。

「なんで!?! なんでプレ〇ターの肩についてるあの武器なの!?! 映画見たからか!?!」

「えっと、提督……これもリョーガさんが既に作ったのが……」

「子供にあげるためのプレゼントだよなこれ!」 聞いたことないんだけどクリスマスプレゼントが本物のプラズマキャオンとか!?」

取りあえず雷にはリョーガ制作のプラズマキャオンを置き……最後に電となった訳であるが……姉妹3人の要望が要望なのでかなり不安になりつつも夜空と時雨は電の紙を見て見るとそこには……。

『怪獣さんやもう数少ない深海凄艦さんと仲良く一緒に世の中を平和に暮らせるために少しでも役に立ちそうなものがあれば、それが欲しいのです。無理は言いません、でも、どうか……よろしくお願いします』

と書かれていた。

「いい娘過ぎだろお!? 姉3人……特に次女と三女あんなお願いしてるのにこの娘だけかなり切実!!」

「ぐすつ……電、いい娘だね……。提督、何時か……実現するといいね、そんな日が……」

電の切実な願いに感動して少しだけ涙を流す時雨、彼女は何時の日か電が望むような世界が来ることをただ静かに願うのだった。

それはもちろん夜空も同じであり、何時の日か……怪獣や、怪獣だけではなく深海凄艦とも共存できる方法がないかと今よりももっと深く探そうと決意するのであった。

第六駆逐隊へのプレゼント配りが終わり、続いて菊月へのプレゼントを配りに行くことになった夜空と時雨。

そして菊月の欲しいものというのが……。

『セクハラしない常にまじめな副指令』

「……俺も欲しいよ」

「多分神様でもそれを叶えるのは無理だと思う」

その次に荒潮。

『血がドバドバ出しても死なないサンドバック』

「怖いよ!? なにそれどんなサンドバック!? 死なないってどういうこと!? 生き物

渡せってこと!?!」

「トマトジュースがドバドバ出るサンドバックならリョーガさんから貰ってるけど」

「どっちにしてもどんなサンドバック!?!」

さらに朝潮。

『司令官がもつと私に命令してくれるような物』

「なんだよそれ分かんねえよ!!? っていうかなんか怖いんだけど!?!」

「こればかりは提督がもう少し朝潮に命令してあげないとね」

そのまた次は臯月。

『ウオツカ』

「だろうな！」

「まあ、ちよつとだけなら……」

そのまたまた次は夕立。

『フリスピー』

「意外と普通！」

「夕立、フリスピーを提督に投げて貰ってそれを自分が取ってくる遊びがしたいって
言ってたなあ、そう言えば」

「犬じゃん!! 犬の遊びじゃん!! それでいいのか夕立!?!」

続いて如月。

『最近胸が窮屈になってきたから可愛らしい新しい新しい下着』

「サンタになにお願いしてんの!?!」

「そつかあ、如月は最近大きくなってきたのか……」

なぜか自分の胸をペタペタと触る時雨だが、その光景を見て夜空は「意外にもその辺
気にしてるんだな」とついつい呟いてしまい、それを聞いた時雨はどこかムツとした表
情を浮かべる。

「そりゃ、気にするよ。」

女の子だし……なにより妹の夕立や村雨、1つ上の白露姉さ

んとかの方が大きいから。 て、提督だってそういう娘の方が好み……でしょ？」
照れくさそうにそう尋ねる時雨、それに対して夜空はどこか困ったような表情を浮かべる。

「俺は女じゃないから分かんないけど……俺は別にそういうのは気にしないけどなあ。 って話脱線してる気がするから早く次に行こう」

「う、うん」

以下割合……。

そして全てのプレゼントを配り終えた時雨と夜空、そのまま時雨は夜空に「それじゃもう寝るね、お休み」と言っただけで自分の部屋へと戻って行くとするのだが……その際、夜空に腕を掴まれて引き止められた。

「えっ、提督……?」

「お前はいいのか?」

「えっ?」

「いや、だって……お前だけ、艦娘の中でプレゼント貰ってないし……」

それに対して時雨は苦笑しつつ「僕は別にいいよ」と言っただけで特にプレゼントはいらないと言うが……どうにも夜空はそれに納得できないらしく「明日予定あるか?」と時雨に尋ねる。

「いや、特にはないけれど……」

「じゃあさ、明日は休みだしクリスマスに何もなくて言うのはやっぱり寂しいから明日お前の行きたいところどこにでも連れて行ってやるよ……」

「提督、それってもしかしてデートのお誘いかい？」

時雨が悪戯つ子のような笑みで夜空に尋ねると彼は「そうかもな」と少しだけ苦笑いしながら答えると、時雨は自然と笑みを浮かべて「いいよ、楽しみにしてるね」とだけ言い残して自分の部屋へと戻って行くのだった。

彼女が出て行った直後、エクステバイザーに宿るエックスが夜空に対して話しかけてきた。

『やはり、みんなが言っているように君は時雨のことが好きなのか？』

「よく、分からない……実際は」

『クリスマスにデートを申し込むなんて惚れてるとしか思えないがな？』

エックスの言葉を聞いて夜空はデート云々よりもなんで宇宙人のエックスがそんなことを知ってるのかとそっちの方が気になった夜空だが……宇宙人もクリスマスを祝ったりするのだろうか？

だが、やはりエックスが言うように夜空はやっぱり自分は時雨に気があるのだろうかと考えるが……やはり時雨に対する気持ちがどうなのかよく分からず、取りあえず今は

*

明日に備えて寝ることにするのだった。

翌日、昨夜は遅かったため昼から2人で出かけることになった夜空と時雨は2人で電車に乗って街の方へと行き、目的の場所に到着するとそこから2人のデートが開始されるのだが……その2人をビルから狙う者が……。

「提督め……昔から時雨とは仲が良かったのは知ってたけど遂に手を出したね。あたしの妹に手を出した罪、その身を持って償って貰おうかな……。江風か菊月、ちよつとアンタ等どつちか土台になってくれない？」

「待たんかいいいいいいいい!!!」

時雨と夜空……というか夜空を狙っていたのは2人が前に努めていた鎮守府の駆逐艦娘の1人、サングラスをかけてスナイパーライフルを構えた「白露型1番艦 白露」であり、そんな白露に対し、同じく2人が前務めていた鎮守府の艦娘である「白露型9番艦 江風」と菊月が即座にツツコミを入れた。

「白露の姉貴なにしてんの!?! 村雨の姉貴から連絡受けて一大事だー! とか騒いで無理やりこんなところ連れて来られたかと思えばなに前提督……しかも時雨姉貴の彼氏抹殺しようとしてんの!?!」

「彼氏じゃないよ!! 前提督は悪い人じゃないのは知ってるけどあたしは前提督をまだ彼氏とは認めないからね!!」

ワーワーと騒ぐ白露を一緒に連れてきていた村雨と「白露型5番艦 春雨」がどどーと一度白露を落ち着かせる。

ちなみに今、この場にいるのは彼女たちの他にはツツコミ役として連れて来られた菊月を始め、現在夜空にいる鎮守府の暁、響、雷、電と夕立……前鎮守府にいた「白露型6番艦 五月雨」と「白露型10番艦 涼風」「白露型7番艦 海風」が来ており……要するにこの場は時雨を除けば白露型大集合な状況にあった。

「江風、あたしは別に前提督を抹殺する気なんてないよ。ただあたしは時雨に手を出したら撃ち殺すっただけ」

「ほぼ一緒だろそれ！ 司令官を殺す気満々じゃないか！」

菊月が即座に白露にツツコミを入れ、江風は海風などにも白露を説得してくれるように彼女の名を呼ぶが……。

「誰が海風ですか。海風13と呼んでください」

そこには白露と同じくサングラスをかけてスナイパーライフルを構える海風がいた。

「……」

もはやなにも言えなくなる江風、それを見て同じく呆れ顔の暁が「なにしてんの？」と尋ねると海風は……。

「私、前提督が去った後に着任しましたから。だからそんなよく分からない男にそ

う簡単に姉を渡すつもりはさらさらありませんので」

「ねえ、菊月、江風、涼風、雷……この人達どうすればいいと思う……?」

あまりにもボケをボケで重ねてくる白露と海風に暁はどこか諦めたような表情を浮かべ、もうどうすればいいのか菊月と江風と涼風と雷に意見を求めるが……その4人もこの状況を一体どうすればいいのか分からず苦笑いする意外になかった。

「えっと、取りあえず白露さんと海風を引き止めた方がいいですよね……?」

「それもそうね、人の恋路を邪魔するなんて全くレディーじゃないもの！ 雷と響も手伝って！」

電の提案で白露と海風をみんなまで止めようと雷と響に呼びかける暁……しかし、雷は「はくい」と答えたのは良かったのだが響に関しては「誰が響だい?」と先ほどの海風と似たような言葉を話した響に対して暁は思わず「んっ?」と冷や汗を流しながら彼女の方へと顔を向けると……。

「シルバーアローと呼んで貰おうか姉さん?」

そこには緑のフードを被って弓矢を構える響の姿があった。

「アンタなにしてんのおおおおお!!?」

当然、そんな恰好の響に暁は即座にツツコミを入れる。

「その恰好なに!? そのフードと弓矢どっから取り出したの!? それとシルバーア

ローってなに!? グリーオーアロー気取り!? しかもシルバー要素アンタの髪の色以外皆無!」

『お前は、街を汚した』

「なにが!? 私別になにもしてないけど!? 後その声どうやって出してんの響!? 完全に吹き替えの人の声じゃない!」

『ボイスチェンジャーを作った。面白そうだからちよつと私も参加してくる』

「またおかしな物を作って……」つと思いつながら頭を抱える暁だったが白露、海風、響のターゲット（時雨と夜空）が移動し始めたため、3人は急いで時雨と夜空の後を尾行し、暁と菊月は「はあ……」と溜め息を吐きながら視線を村雨の方へと向ける。

「あれ? どうかしたの2人とも?」

そもそもこうなってしまった原因は白露にこの事を知らせた村雨だということに全く反省しておらず、悪びれた様子もない村雨……菊月はそんな彼女に対し、「こうなる事は予想できたんじゃないか? 大方?」と尋ねると村雨は特に否定することもなく、「そうね」と相変わらずのニコニコ笑顔で答える。

「なんであんなことになるの分かってて白露さん達を呼んだのです?」

「それはほら……面白そうだからよ!!」

なぜかそこで「ドヤア」という効果音が聞こえて来そうなくらいの勢いのいい返事を

返し、江風が即座に「余計なことしかしてねーよ姉貴!!」とツツコミを入れた。

「と、取りあえず白露お姉ちゃん達を早く追いかけましょう! あのままじゃなにをやるか分かりませんし!」

「五月雨の言う通りね、無理やり連れ戻すのは難しそうだからあのバカ共が本当にバカやらかささないように見張つとかないと」

五月雨の言葉に対して暁がそう答え、彼女が菊月に視線を送ると彼女は頷く、2組ほどメンバーを分けて白露たちを見張るメンバー、他の場所から夜空と時雨を守るメンバーを決め……2人のデートの邪魔をしようとする白露たちを全力で阻止しようと決めるのだった。

しかし、菊月は途中で鎮守府に戻る用事ができちめ、一度鎮守府に戻ったが。

*

一方鎮守府では睦月、如月、菊月、皐月、文月の睦月型の5人がリヨーガのラボへと呼び出されており、菊月は少し苛立った様子で「何の用だ？」とリヨーガに尋ねた。

「なんだ？ 菊月の奴少し機嫌悪くないか？」

「リヨーガさんのことだからきつとまだ下らないことしようとしてるんじゃないかって思ってるんじゃないかしら？」

グルマンの問いかけに如月がそう答え、小声で話していたつもりだったがリヨーガにはしっかりと2人の会話が耳に入っており「下らないとは失敬な!!」と少しだけ怒る。

「普段の行いのせいにやし〜」

「はっはっは！ なに言ってるんだい？ まるで私が問題児みたいな言い方じゃないか睦月ちゃん！」

「実際その通りだろうが」

リヨーガの発言にイラッと来たのか菊月はすかさずリヨーガの頭にアイアンクロウを喰らわせ、リヨーガは「いだだだだ!!? 離して！ 離して菊月ちゃん!!」と必死に懇願した結果ようやく離して貰い、グルマンはその様子を見てこのままリヨーガに任せていたら一向に話が進まないと思えばグルマンから今回睦月達が集められた理由を説明す

ることに。

「実はサイバーカードの新たな利用方法をリョーガと一緒に思いついてな。エックスはサイバーカードをモンスアーマーという形にしてサイバー怪獣の力を使用する。そこで私たちは考えた。エックスのモンスアーマーのような力を君たちにも使えないかと」

「うーん？　つまり、どういうこと？　僕たちジオバイザーを使えば怪獣の力は借りられるけど？」

皐月の言葉に対し、グルマンは「確かにそうだ」と頷き、続いてリョーガからの説明が入る。

「だけど、それはほんの一部の力を借りているに過ぎない。それに制限時間だつてある。そこで我々が思いついたのが君たち艦娘の艦装とサイバー怪獣の力を融合させるということだ」

「睦月型である君たちは燃費がいいこともあつて初期段階では君たちの艦装がこの計画には最適だということだ。最も怪獣の力を完全に解放できる訳ではないが……」

リョーガとグルマンの話の聞いて菊月は「成程……」と呟き、菊月は姉達に「どうする？」と尋ねると睦月達の答えは「YES」だった。

「それじゃよろしくね〜」

「睦月達。パワーアップ楽しみにやしー!!」
そう言って彼女たちは艀装をリョーガとグルマンに預けるのだった。

*

その頃、取りあえず、白露たちの見張り役は第六駆逐隊の響以外の3人と五月雨と涼風任せ、それ以外のメンバーは別の方向から時雨と夜空を守ろうとするチームに分かれることになったのだが……。

(なにしてんだろう、あの娘達……)

とすつかり夜空と時雨には既に気づかれていた。

(なに?! なにしてんの白露姉さんに海風?! そのサングラスとスナイパーライフルなに?! なになりに切ってるの姉さん達?!)

(つていうか響お前その恰好なんのつもりだあ?! しかもなんで他2人はスナイパーライフル構えてるのにお前だけ弓矢!?)

時雨と夜空は自分たちを尾行する白露達の恰好についてツツコミを入れ、時雨は「はあ」と溜め息を吐くと夜空の手をいきなり掴みあげる。

「提督、一気に逃げるよ」

「お、おう……?」

時雨と夜空は突然走りだし、それを見た白露達も当然追いかけるが時雨と夜空は路地裏に入った直後、時雨は艦装を展開して夜空を抱きかかえるとそのまま高くジャンプし、一気に建物の屋上へと飛び移ると白露達が追いかけて来ない内にそそくさと逃げ去る。

その際夜空が「あれ? 俺がお姫様抱っこされる方なの?」と少しだけ不満げな声をもらしたりしていたが。

ちなみに艦娘である時雨は元より普通の人間よりも身体能力は高いが、艦装を装着す

るとさらに身体能力はあがる。

「あれ!? 時雨と前提督どこ行った!？」

そして白露達は完全に夜空たちを見失ったのだった。

「どうやら前提督達、私たちの尾行に気づいてたみたいですね」

「そりゃ、こんな大人数で尾行してたら気づくだろうさ」

五月雨と涼風がそんな会話をしている中、白露達は「くそー! 前提督めえええええ!!」と叫んでいたとか……。

その後、無事に白露達を上手く巻いた2人はというところ……辺りに見知った顔などがないかどうかだけを確認し、2人は再び一緒に歩きだそうとするのだが……。

「やあ、お2人さん、クリスマスにデートかな?」

そんな時、サンタクロースの恰好をした老人が時雨と夜空に話しかけ、夜空と時雨はいきなり話しかけられて驚くが……。

「フフ、幸せそうにデートする君たちにプレゼントをどうぞ」

「えっ? いや、ちよつと」

半ば強制的にサンタから箱に入ったプレゼントを渡される時雨と夜空だったが、サンタはプレゼントを2人に渡すとそそくさとその場から離れ、夜空と時雨は顔を見合わせ、お互いに首を傾げるのだった。

「なんだったんだあの人？」

「さ、さあ？」

『夜空！ 夜空！』

「っ!?! ちよつ、エックスなんだよ急に!?!」

すると突然話しかけてきたエックスに少し不満げに文句を言い、時雨はそんな夜空を見て不思議そうに首を傾げて「どうかしたの？」と尋ねられてきたため、夜空は慌てて「なんでもないよ！」と答える。

『あそこにいる女性を連れたあの男……人間じゃないぞ!?!』

「えっ!?!」

そうエックスに教えられて夜空は慌ててエクステバイザーをエックスが教えてくれた男性の方に向けて解析してみると……確かに人間ではない生命体の反応が検出され、夜空は急いでその男性の元へと駆け出す。

「提督!?!」

もちろんいきなり走りだした夜空に時雨は慌てて一緒になって追いかける。

やがてエックスが先ほど言った女性を連れた男性は人気のない場所へと行くと男性は女性を地面に寝かせて顔を近づけようとしますが……その時、突然現れた夜空の蹴りが男性の顎に直撃し、男性は軽く吹き飛ばされてしまう。

「グウ……!?!」

「お前……何者だ? その人になにをしようとした!?!」

護身用としてリョーガから渡されていた光線銃「ジオブラスター」を構えると男性は立ち上がった。こちらを忌々しそうに睨み付ける。

「貴様コソ、何者ダア……? 才前ハ普通ノ人間デハナイナア……?」

すると男性の姿が紫色に輝くと身体が変化しゴキブリに酷似した怪物「インセクトアイブビースト バグバズンブルード」へと変化……それを見た夜空は外見の醜さから「スペースビーストか!?!」と驚きの声をあげた。

「このタイプのビーストは始めて見るな」

スペースビースト……宇宙から現れ、知的生命体の恐怖を餌に成長し、「攻撃」と「捕食」の感情しかないというまさに真正銘の怪物であり、夜空は即座に目の前に現れたブルードを駆除対象の危険性物として判断し、ジオブラスターから光弾を発射する。

しかしブルードがジャンプして攻撃を回避し、夜空に跳びかかって来るがそこにすかさず現れた艦装を装着した時雨が主砲でブルードを殴りつけ、ブルードを吹き飛ばした。

「提督! 大丈夫かい!?!」

「ああ……しかし、人語を話すスペースビーストとは珍しいな。しかも完全に人間

の姿に変身するなんて……」

時雨によって殴り飛ばされたブルードだったが、ブルードは即座に立ち上がって再び人間態に変身し、そのままこの場から逃げだそうとするが当然時雨も夜空もみすみすがすつもりはなかった。

「待て!!」

慌てて2人はブルードを追いかけ走りですが……即座に夜空のジオブラスターで胸を撃ち抜かれてブルードはその場に倒れこみ、夜空と時雨はブルードの元に駆け寄るが……。

突然地響きが鳴り響き地中から犬のようなスペースビースト……「フィンディッシュタイプビースト ガルベロス」が出現し、ガルベロスは時雨と夜空、青年の姿をその目に捉えると3人を踏み潰そうとこちらに向かって来たのだ。

3人は慌てて砲弾や光弾をガルベロスに浴びせながら走り出して逃げるがその途中、菊月からエクスデバイザーに緊急の連絡が入った。

『おい司令官! 私たちの尾行には気づいていただろ? それに今、暴れている犬みたいな奴も見えるだろ! 私たちに急いで指示を!』

「分かった、白露型の奴らを戦闘に廻してくれ! あいつ等もサイバーカード持つてるよな!? それ以外の奴等は民間人の避難を!! それと今俺たち追いかけてるか

らこつちにも誰か応援を寄越してくれ！」

『了解した！』

そこで一度通信を切ると夜空は時雨にサイバーカードを使うように指示し、彼女はジオデバイザーにゴモラのサイバーカードを装填するが……。

『エラー』

「えっ!? なんぞ!？」

なぜか……今まで使えていた筈のゴモラのカードが使えなくなっており、もう一度装填し直してみるがやはり「エラー」という表示が出てゴモラのカードの使用ができなかった。

ならばと思い、他のカードを取り出してジオデバイザーに装填する。

『サイバーキングジョー、ロードします』

「キングジョーデストロイ砲、発射!!」

時雨は両手に持つ主砲にエネルギーをチャージし、放つ光線「キングジョーデストロイ砲」を発射しガルベロスに直撃させるとガルベロスは大きく吹き飛ばされて地面に倒れこむ。

「グルア!!?」

そこに丁度、夕立や白露が艦装を装着して駆けつけ……他の場所からも白露型駆逐艦

達による攻撃がガルベロスに向かって降り注ぎ始める。

「夕立、白露姉さん……」

「お姉ちゃんが時雨のピンチにいつちばーんに駆けつけたよ♪」

「夕立も一緒っばい！」

時雨は白露と夕立の顔を交互に見た後、静かに頷き夜空にすぐにここから離れるように言い放つ。

「時雨……分かった、気を付けろよ」

できれば彼女の傍から離れたくはなかったが……自分が「提督」という立場を考えればここから離れるべきなのか最善の選択なのだが……。

「エックス!! ユナイトだ!!」

『よし、行くぞ!!』

エクステバイザーをXモードに変形させるとエックスのスパークドールズが出現し、リードさせて夜空はエクステバイザーを掲げ、夜空は光に包まれ「ウルトラマンエックス」へと変身する。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

「エックス……ユナイト!!」

『エックス、ユナイト』

戦闘BGM「Xの戦い」

エックスはガルベロスの目の前に現れファイティングポーズを取って構える。

『シユア!』

「ウルトラマンエックス!!」

「あれが……ウルトラマンエックス……」

エックスが現れたことに喜びの声をあげる時雨、そして始めて生で見るウルトラマンに驚きの声をあげる白露。

エックスはガルベロスに向かって駆け出し、ガルベロスは両肩の口から火球をエックスに向かって放つ。

しかし、夜空は即座にサイバークードをエクステバイザーに装填。

『サイバーベムスター、ロードします』

するとエックスの身体には「宇宙大怪獣ベムスター」のアーマー……「ベムスターアーマー」が装着される。

『サイバーベムスターアーマー、アクティブ!』

ベムスターアーマーを装着したエックスは走りながらシールドアーマーでガルベロスの火球を吸収し、そのまま一気に接近して至近距離でガルベロスの火球を撃ち返す「ベムスタースパウト」を繰り出し、ガルベロスは身体中から火花を散らし……瞬時に

アーマーを解除したエックスの蹴りを腹部に喰らって吹き飛ばされる。

「グオオ!!」

『デイヤ!』

さらに続けてエックスは跳び蹴りをガルベロスに向かって繰り出す……ガルベロスはその長い腕を振るってエックスを払い除ける。

『ウアツ!』

地面に倒れこんだエックスに向かってすかさずガルベロスの放つ火球が降り注ぎ、エックスは身体中から火花を散らしてダメージを負うが夜空は素早くエクステバイザーにサイバーカードを装填する。

『サイバーゴモラ、ロードします』

「古代怪獣ゴモラ」の力を宿した「ゴモラアーマー」をエックスは身に纏い、エックスは火球による攻撃を受けながらもゴモラアーマーの自慢の防御力のおかげで耐えて立ち上がり、そのままガルベロスの放ってきた火球を両腕の爪で弾き飛ばし、そのままガルベロスに火球を投げ返す。

「グオオ!!」

『シユア!!』

さらに高くジャンプしてエックスは右腕の爪を振りかざしてガルベロスを斬りつけ、

ダメージを与える。

「僕たちも攻撃するよ！」

「オーケー！」

「任せるっばい!!」

夕立と白露もサイバーカードをジオデバイザーに装填し、ガルベロスの攻撃を開始しようとする。

『サイバーバードン、ロードします』

『サイバーガルベロス、ロードします』

白露は「火山怪鳥バードン」の力を、夕立はガルベロスの力を宿し、時雨を含めた3人は主砲をガルベロスに向かって構えるのだが……。

その時、ガルベロスの目が赤く不気味に光ると3人の放った攻撃はなんと狙ったはずのガルベロスではなくアーマーを解除した直後のエックスの背中に直撃した。

『ウアッ!? 時雨達はなにを!?!』

「あれ!?! 確かにあいつを狙った筈なのになんでエックスにあたし達は攻撃を……」

「あつ、そう言えばガルベロスって相手に幻影見せる効果があるの忘れてたっばい!!」

「それを先に早く言っつてよ夕立!」

夕立の言葉を聞いて白露は通信越しに全員に下手に攻撃をしないように指示するが

……ダメージを受けて膝を突いたエックスに向かってガルベロスは腕を振るって殴り飛ばし、地面に倒れこんだところでガルベロスは素早くエックスの肩に噛みつく。

『ヌアアアア!?!』

「クソ、幻影を使ってあいつ等に俺達を攻撃させたのか……」

『お姉ちゃん！ 援護しないとエックスさんが……!』

五月雨が白露に通信でそう言うが……今自分たちが見ているエックスが本物であるかどうか分からない以上、下手に攻撃することができない。

そしてエックスはガルベロスを蹴りあげてどうにか自分から引き離すことに成功し、すぐさま立ち上がるが……ガルベロスはいつの間にかその場から姿を消しており、エックスは警戒しつつ辺りを見回す。

「気を付けるエックス、あいつは幻を見せる……なにが起こるか分からないぞ!」

『分かってる!』

すると突然目の前にガルベロスが現れ、腕の爪を振るってエックスの胸部を斬りつけたのだ。

『ジュア!?!』

「ガアアアアア!!」

ガルベロスの目が再び赤く輝くとガルベロスは2体、3体と分身し……計6体の分身

をガルベロスは生み出しエックスは困惑する。

『それが本物なんだ……?』

そしてガルベロス達は一斉にエックスへと襲い掛かり、エックスは真つ先に自分に向かつて来たガルベロスに拳を振るうがその拳がすり抜けてしまい、背後から迫ってきたガルベロスに爪で背中を斬りつけられてしまう。

『ウウツ!?!』

その後もエックスはガルベロスに翻弄されて攻撃を受け続けカラータイマーは激しく点滅を開始し、エックスは膝を突く。

『ジユツ……』

ガルベロスはそのままエックスに向かって分身たちと共に火球を放ち、エックスは爆発の中に姿を消してしまふ。

『ジュアアアアア!!?!』

「グアアア!!」

ガルベロスは分身を消して勝ち誇ったような雄たけびをあげるが……煙が晴れるとそこにはエックスの姿がなく、ガルベロスは慌てて周りを確認するがやはりエックスの姿はどこにもない。

そんな時である、ガルベロスの足元からグビラーマーを装着したエックスが地中か

ら現れ、エックスは右腕のドリルでガルベロスの真ん中の顔を顎から貫いたのだ。

「ギシャアア!!」

『デアアア!!』

そのままエックスはドリルをガルベロスの腹部に突き刺してから持ちあげ、ドリルを回転させて投げ飛ばしガルベロスは火花を散らして空中で爆発した。

「ギャアアアアア!!」

ガルベロスが倒され、エックスはアーマーを解除するとそのまま空へと飛び去り、ガルベロスが倒されたことで時雨達はホッと一安心するが……すぐそこに自分たちをつけていた夕立と白露がいることを思い出し、2人がガルベロスが倒されたことに喜んでいる隙に彼女はまたつけられないように素早くそこからそそくさとこっそり逃げだしたのだった。

(提督には後でジオバイザーで合流するように連絡しておこう)

そして白露と夕立が時雨がいなくなったことに気づくのはそれから数十秒後のことだった。

「全く、なんで姉さん達がこんなところに……しかも姉妹全員で。もしかして提督と出掛けるのを邪魔しに来たとか?」

時雨はプクツと小さく頬を膨らませながら不満を口にし、時雨はジオバイザーで夜

空に合流場所を伝える。

「送信完了つと……。 まあ、あの小さな敵も倒せたし一件落着かな……。 んっ？

えっ、な………に？」

時雨は少し早歩き気味に歩きだそうとしたその瞬間、背後から突然甘い匂いがしてきて彼女がその匂いを吸い込むと時雨は急激な眠気に襲われてその場に倒れそうになるが後ろにいた男性が時雨を支え、男性は時雨の顔を覗き込むとイヤらしくニヤつとした不気味な笑みを浮かべた。

「ぐっ、まさか……もう、1体……」

時雨はその言葉を発した後、彼女は目を閉じ意識を失ってしまった。

「戻ル、カ……」

「姉貴!？」

男性が時雨をどこかに連れ去ろうとしたその時、丁度江風、五月雨、海風、涼風が偶然近くを通りかかり、涼風は「お前姉貴をどうするつもりだ!？」と男性を睨み付けながら問いかけるが男性はなにも答えずにその場から時雨を抱き抱えて涼風達とは逆方向に走りだす。

「あつ、逃げちゃいます!!」

「分かつてるよ!!」

五月雨たちは男性を追いかけようとするがするとそこに数体のバグバズンブルードが現れて行く手を阻むために彼女たちに襲い掛かってきたのだ。

「てやんでえ!! 邪魔すんじゃねえ!!」

彼女たちは一斉に艦装を展開してブルードとの戦闘を開始、涼風達はなるべくブルードから距離を取って主砲から砲弾を発射しブルード達を次々に殲滅していく。

「他の人達にも時雨姉さんが連れ去られたことを教えないとー!」

海風はすぐにジオデバイザーでの通信で時雨が連れ去られたことを仲間たちに報告し、数分後、無事にブルードを殲滅することに成功したのだった。

「クッソ、邪魔しやがってこいつ等……」

「涼風!!」

そこに丁度夜空が涼風達の元へと駆けつけ、夜空は「時雨は!」と慌てて彼女がどこにいるのか尋ねると涼風は気まずそうな表情を浮かべつつも「報告通りだよ……」と答えるしかなかったのだった。

「っ、時雨……」

*

その後、一同は鎮守府へと戻り、敵のデータ収集のためブルードの死骸の1体をリョーガとグルマンに渡して調べて貰った結果、恐るべき事実が判明した。

「レジストコード、バグバズンブルードを調べてみた結果……こいつは人間の細胞と融合しているんだ。しかも複数存在する」

リヨーガの鎮守府にある研究所でリヨーガとグルマンからバグバズンブルードについてのことを夜空達と艦娘達に伝え、それを聞いて朝潮が「人間の細胞と融合してるとはどういうことですか？」と尋ねるとリヨーガとグルマンはどこか言い辛そうにするが……。

数秒後、グルマンから言葉の意味の説明が入った。

「こいつは捕食した人間に擬態する能力を持っている。最近街で発生している行方不明事件もこいつ等が原因だろう」

「つてことはまさか時雨も……」

タカトが最悪の状況を予測したが白露が「そんな訳ないじゃん!!」と彼に怒鳴り、タカトも自分が失言したことに気づいて「すまない」と謝った。

だがグルマンとリヨーガが言うには「まだ時雨は無事な筈だ」とのことであり、それを聞いて白露は「どういうこと？」と尋ねるとなんでもこのブルードの生態を調べたところ、餌となる人間を一度巣に持ち帰る習性があるそうなのだ。

「先ほど、ブルードは捕食した人間に完全に擬態できる能力があると言ったが……どうやらその捕食の方法は人間の体内にブルードの幼体を植え付け、内部から捕食するというものだ」

グルマンからの説明を受け、タカトは「なんてエグイ……」と呟く。

「どちらにしても急がないと時雨姉さんが危ないのは間違いないですね」

「提督！ 直ちに救出作戦を!!」

五月雨が夜空にそう言い、彼は無言で頷いた後、すぐさま作戦を伝える。

「リヨーガさん、ブルードを追跡するための装置は？」

「ああ、ブルードの死骸を分析して完成した。これで街のどこに奴等がいるかが分かる。それに例の艦装強化も睦月ちゃんと如月ちゃんのは完了しているよ?」

夜空はそれを聞いて「随分早いんだな……」と関心の声をあげ、リヨーガ曰く「そりや私とグルマンがいるんだから早いに決まってる」と自信満々な様子で答えた。

「よし、その中でもより多くブルードが集まるところが奴等の巣だろう。街の

方は第六と朝潮型の奴等、皐月、文月、菊月に任せる。白露型、睦月、如月は人命救助を最優先、その後敵を殲滅! お前等、あいつ等に誰に手を出したのか思い知らせてやれ!! 逆にあいつ等に恐怖を叩き込んで来い!! 艦隊Xio、出動!!」

『了解!!』

夜空のその発言を聞いて夕立は「提督さん、なんか怒ってるっぽい……?」と春雨に小声で尋ねると春雨は苦笑しつつ「そりやあ……」と答える。

「冷静そうにして見えるけど実は滅茶苦茶怒ってるんじゃない?」

「ほら、いいから早く出撃すんぞ!」

江風に急かされて春雨と夕立は素早く出撃準備を整え、現場へと急行しようとするのだが……その際、白露は出撃する前に夜空の方へと顔を向けサムズアップし……。

「提督、提督の分もあたしがあいつ等ぶん殴ってくるよ！」

「……頼んだ」

白露の言葉に夜空は頷き、それに対して白露も頷いた後、彼女たちは出撃する。

*

「ここね？ ブルードの反応が多い場所は……」

その後、白露達は街外れにある廃墟へと辿り着き、涼風、五月雨、春雨、夕立、のチムと白露、海風、江風、村雨、如月、如月のチームに分かれて行動し身をなるべく茂みなどを利用して隠れながら互いに通信を取り合いつつ様子を伺う。

「マジでここがあいつ等の隠れ家みたいだな」

涼風の言う通り、ブルードの人間態と思われる者達が複数その廃墟に出入りしており、睦月は白露に「どうする？」と問いかけると白露は少しだけ考え込むが……時間があまりないということを考えてと取る行動は一つ。

「強行突破あるのみ!!」

戦闘BGM「Xio版ワンダバBGM」

白露がそう叫ぶと同時に彼女たちは茂みから姿を現し、まずは廃墟の周りにいるブルード人間態たちを次々に主砲で撃ち抜き、突入する。

「睦月ちゃん！ リョーガさんとグルマンさんが用意してくれた新システム、早速使ってみる？」

「よーし、張り切ってまいりませよー!!」

睦月と如月はジオデバイザーを取り出し、サイバーカードを装填する。

『サイバーガルラ、ロードします』

『サイバーサラマンドラ、ロードします』

すると睦月の艦装が「超古代怪獣ガルラ」の胸部を模した形に変化し、さらに手に持つ主砲も砲口はそのままでガルラの頭部を模したシールドのような形状に変化し、睦月の服も銀色のラインが入ったものへと変化。

如月の艦装はサラマンドラの胴体部分に酷似した模様が入り、主砲がサラマンドラの頭部を模したものとなり、左手にサラマンドラの爪を模した武器が装着され、服にはグレーのラインが入った姿となった。

『サイバーガルラフュージョン、アクティブ！』

『サイバーサラマンドラフュージョン、アクティブ！』

「なんていうか……私の装備、どっかで見えたことあるわね……」

サラマンドラの顔の主砲を見つめつつ、如月はそんなことを呟くと睦月はなにかに気づいたような表情を浮かべる。

「ドラ○クローじゃない？」

「確かに似てるけど！」

そうこう駄弁っている間に彼女たちに気づいたブルードが一斉に2人に襲い掛かかり、その内の1体が睦月に跳びかかって攻撃を仕掛けるが睦月は主砲に装着されたシ-

ルドを構えると巨大なバリアファイールドが展開され、ブルードを弾き飛ばす。

「にやあああぁしいいいいい!!」

そのまま睦月はバリアファイールドを解除して一番近くにいたブルードを殴り飛ばすとブルードは一瞬で消し飛び、睦月はさらに主砲から砲弾を発射してブルード達を撃ち抜く。

「うーん?　なんか主砲の威力自体はあんまり変わってないような気がするなあ」

「多分それ、パワーと防御力重視なのよきつと」

「つて如月ちゃん後ろ!!」

睦月に言われて如月は主砲を構えて主砲から炎を纏った砲弾を発射しブルードを撃ち抜き、如月は駆け出してすれ違いざまに左腕の爪でブルード達を切り裂く。

「外にいる奴等は私たちに任せて頂戴!　白露さん達は人命救助を!!」

「了解!!」

この場を如月と睦月に任せ、白露達は建物内に侵入すると早速ブルード達が巣を守ろうと彼女たちに襲い掛かってくるが夕立が素早く飛び蹴りをブルードの一体に叩き込み、そのブルードの腕を掴みあげると背負い投げして白露の方へと投げ飛ばした。

「白露ちゃんパスっばい!」

「おわああ!!?」

思わず白露は条件反射でブルードの顔面を殴りつけて吹き飛ばし、白露は「なにすんのさ!」と夕立に怒鳴るが……。

「いや、だって白露ちゃんこいつ等ぶん殴るって言ってたから」

「だからってパスしなくていいからね!」

「いいからさっさとこいつ等ぶつ潰して捕らわれた人達救出するぞ!」

涼風に言われて白露は「分かってるわよ!」と言い放ち、彼女たちはブルード達を倒しながら進んでいくとやがて繭のようなものに身体を拘束された人々とブルードの卵らしきものを発見。

「大丈夫ですか!」

「た、助けて!! 早く!!」

「っ……」

白露はすぐに人々を救出しようとしたが周りには血のような跡が見え、卵の気持ち悪さもあり涼風や春雨は青ざめた表情を浮かべ、他の者達は怪訝な表情を浮かべるがそれよりも先にやることのあるのをすぐに思い出し、五月雨、涼風は卵を撃ち抜いて駆除。

夕立、江風、春雨はこちらに向かって来るブルードの迎撃、白露、村雨、海風は繭に捕らわれている人々を救出する。

「大丈夫ですか!」

「あ、ありがとう……」

白露、村雨、海風は囚われた人々を次々に繭から救い出していくが……時雨の姿が一向に見つからなかった。

「時雨姉さんはここにはいないのかしら?」

「涼風、五月雨、春雨はこの人達を安全な場所まで連れて行って! あたし達はまだ捕らわれてる人がいないか、時雨もいないか探してみる!」

「了解!!」

白露の指示に従って涼風、五月雨、春雨の5人は囚われていた人々を連れてその場を離れ、残りのメンバーは時雨や他に捕らわれの人々がいないかを探し始める。

その頃、その時雨はというと……。

「っ……んっ?」

彼女もまた、捕らわれていた人々と同じように繭のようなもので身体を拘束されており、時雨は目を覚まして自分の置かれている状況を把握する。

「ギシャアア……」

「っ!」

時雨はすぐ近くにブルードが数体いることに気づき、早くここから出ようと必死にもがくが繭は内側からでは全くビクともしない。

さらに周りに付着した血の跡や死臭、こちらに気づいている筈なのに襲つてこないブルード、目の前に広がる卵のようなものから彼女は自分がこれからどうなるのかなんとなくではあるがこの後、自分がどうなってしまうのか彼女は予想できてしまい、彼女は静かに唇を噛み締めた。

(……提督……)

*

その頃、鎮守府の執務室では夜空と奈々が2人でおり、夜空はジオデバイザーで白露に連絡する。

「白露、状況は？」

『外にいる奴等は如月と睦月がなんとかしてくれてるし、民間人も何人か救出した。でも時雨の姿が見当たらないし、他にまだ人がいるかもしれないって感じかな』

「そうか、気をつけろよ」

『うん、大丈夫だよ！』

そこで一度通信を切り、奈々は「行かないんですか？」と問いかけると夜空は……。「行きたいさ。けど、俺……今凄く怒ってるんだよな」

「それはまあ、冷静そうに見えますけど凄く押さえますね」

「ああ、だからこのままで戦えば多分、まともに戦えないかもしれない。スペースビーストは厄介な相手だ。だから……」

だが、そんな時のことである。

いきなり誰かの笑い声が聞こえ、夜空と奈々は慌てて声のした方へと顔を向けるとそこにはあの時、時雨と夜空にプレゼントを渡してきたサンタクローズが椅子に座っていたのだ。

奈々は怪しいこの人物にジオブラスターを素早く構え「何者ですか!?! どこから入って……」と警戒するが夜空は「やめろ」と言つて彼女に銃を降ろさせた。

「提督?」

「アンタ、あの時のサンタか? なんでこんなところに……」

夜空はあの時のサンタになぜこんなところにいるのか問いかけたが、サンタは椅子から立ち上がり「細かいことは気にするな」と笑みを浮かべながら彼の肩にポンつと手を置く。

「それよりも、確かに君の言う通り怒りに囚われては勝てるものも勝てないかもしれない。だが、怒りの気持ちをコントロールできて初めて人はより強くなれるのではないかな?」

「怒りの……気持ちコントロール……」

サンタは静かに頷き、夜空はサンタの顔を見ると彼は「分かりました」とだけ短く答え、執務室を出て行き、外に出ると周りに他に誰かいないことだけを確認しエクステイザーを取り出す。

「エックス、ユナイトだ!!」

『よし、行くぞ!!』

上部のボタンを押して側面のパーツをX字に展開したXモードに変形させるとエックスのスパークドールズが出現し、それをリードさせてエクスデバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

「エックスーローロー!!!」

『エックス、ユナイテッド!』

*

一方、時雨はというと……。

既に目の前にある卵が不気味に開き始め、中からミミズのようなブルードの幼体が這い出てくる。

「っ……っ！」

彼女は目尻に涙を溜め、必死にそこから抜け出そうとするがやはり抜け出すことができない。

「もう……ダメ、なのかな……みんな、提督……」

そしてブルードの幼体は時雨に狙いを定め……。

「僕も、ここまでか。提督、みんな……さよなら」

彼女は目を閉じ、ブルードは時雨へと飛びかかった……。

「なあに轟沈したら言いそうなセリフ言ってんだ」

「えっ？」

『私／俺たちがいる限り、そんなものは無い!!』

時雨が目を開けるとそこには……人間大の大きさの「ウルトラマンエックス」が、手でブルードの幼体を切り裂き、時雨の目の前に立っていた。

(エックス……? でも、今、提督の声が……)

エックスは光エネルギーを矢じり型にして放つ「Xスラッシュ」を周りを囲んでいるブルードに放つて瞬殺し、その後エックスは時雨を包む眉を引き千切つて彼女を抱きかかえてその場をすぐに離れるために走りだす。

その途中、時雨を探していた白露達に合流、白露達は等身大になつてエックスに啞然としたがエックスはすぐに時雨を白露に渡す。

『私の透視能力で確認したが、既にここに人はいない、早くここから出るんだ』

「え、えっと、わ、分かりました!!」

エックスに言われてすぐさま建物内から脱出する白露達、エックスは逆に残りのブルードを倒そうと考えたのだが……その時である。

建物が突然揺れ始め、まずいと感じたエックスは天井を突き破つて外へと飛び出し、一気に巨大化して大地に降り立つ。

『なんだ? どうして建物が……?』

「あれは……」

そして建物を破壊しながらその場に出現したのは……「インセクトタイプピーストバグバズングローラー」であり、さらにグローラーは建物の崩壊に巻き込まれなかったブルードの唯一の生き残りを発見し、口から触手を飛ばしてそれをブルードに突き刺

す。

「ギジャアア!!?」

するとブルードはグロージャーからエネルギーを吸入されて巨大化し、ブルードとグロージャーは同時にエックスへと襲い掛かる。

戦闘BGM「スペースビースト —Charge—」

「グアアアアア!!」

ブルードは飛び上がって急降下しながら右手の爪を振るってエックスに攻撃を仕掛け、エックスはそれを受け流してこちらに向かって来るグロージャーに廻し蹴りを喰らわせる。

『シユア!』

続いて背後からブルードが襲い掛かってくるが振り返りざまに拳をブルードの腹部に叩き込むが直後にグロージャーが口から伸ばした触手に首を絞めつけられ、エックスは苦痛の声をあげて触手を引き離そうとするが……。

その隙にブルードの爪がエックスの胸部を斬りつけ、さらにグロージャーは触手の拘束を解くと同時にエックスの背中を右手の鎌で斬りつけ、ブルードのラリアット攻撃をエックスは受けて吹き飛ばされてしまう。

『ウアッ!?!』

「こうなったらゴモラカードで……!!」

夜空はサイバーカードを取り出すが、その瞬間背後から火球による攻撃を受け、エックスは軽く吹き飛ばされてしまう。

『ジュア!!?』

「ぐつ、あいつは……!」

エックスが後ろを振り返るとそこにはガルベロスの姿があり、夜空は忌々しそうにガルベロスを睨み付ける。

「そう言えばあいつ、生命力高いんだったな」

『まさか完全に倒されてなかったのか?』

すると今度はブルードが膝を突くエックスを無理やり立ち上がらせてエックスの両腕を掴みあげて拘束し、ガルベロスは爪、グロウラーは鎌でエックスの身体を斬りつける。

『グッ、デヤア!!』

しかしどうにかブルードを払いのけ、肘打ちをブルードに叩き込むが今度はガルベロスが幻影を使用し、ガルベロス、グロウラー、ブルードが数十体いるようにエックスに見せる。

「あれエックスが危ないんじゃない……」

「でも、援護するにしてもまたガルベロスの幻影で邪魔される恐れが……」

江風や海風はエックスを援護しようかと思ったが、ガルベロスがいる以上、また幻影を使われてエックスを援護してるつもりがエックスを攻撃してる結果になる可能性があるため、彼女たちは迂闊にガルベロス達に攻撃することができなかった。

やがてスペースビースト達の攻撃に耐えきれなくなったエックスは遂にその場に倒れてしまい、ガルベロス達は勝利の雄たけびをあげる。

「エックス!!」

地面へと倒れこんだエックス……エックスはどうか立ち上がろうとするが、思うように力が出ずやはりその場に倒れこんでしまう。

「立つんだ……エックス、俺たちは……負けちゃいけない!!」

『勿論だとも……! だが、力が……』

そんな時だ、いきなり誰かの声が2人に聞こえてきたのだ。

『ウルトラマンエックス、そして西崎 夜空よ……』

『誰だ?』

するとエックスの目の前にあの時のサンタが巨大化した姿で現れ、突然のことにエックスや夜空はもちろん、白露達やビースト達も驚きの様子を見せた。

「あの時のサンタ!」

『エックス、夜空！ 挫けるな!! 立ち上がってスペースビーストを倒すのだ!』
サンタの言葉を聞き、夜空とエックスは同時に頷くと彼等は力を振り絞り立ち上がる。

「当たり前だ……!!」

『立ち上がるに……決まっている!!』

サンタはそんなエックスと夜空の姿を見て頷き、サンタは右手をかざすとそこから光の粒子を降り注ぎ点滅するエックスのカラータイマーが青へと変わる。

『あなたは、一体……』

そこでガルベロスが雄たけびをあげながらサンタへと襲い掛かって来るが、サンタはガルベロスに向かって振り返ると同時にその姿を変え、自分に向かって来たガルベロスの真ん中の顔を右ストレートで殴りつけた。

「ギンシャア!!」

挿入歌「ウルトラの奇跡」

『私の名は……ウルトラの父』

サンタは1人のウルトラマン……「宇宙警備隊大隊長 ウルトラの父」へと変わり、殴りつけられたガルベロスは大きく吹き飛ばされて地面に激突するがブルードとグロラーは怯まずにウルトラの父へと向かって行く。

ブルードは爪をウルトラの父に向かって振るうがウルトラの父は余裕でそれを回避し、背後に回り込んだグロラーが鎌を振るって攻撃を仕掛けるがウルトラの父は振り返りざまにグロラーのその腕を掴みあげ、腹部に肘打ちを叩き込む。

そこで立ち上がったガルベロスがウルトラの父に向かって火球を放つがウルトラの父は腕でそれらすべてを弾き飛ばし、弾き飛ばされた火球は全てガルベロス、グロラー、ブルードに返されビースト達は火花を散らしてダメージを負う。

『夜空、私が渡したプレゼントは覚えているか？』

「えっ、あつ！ これか!!」

夜空はあの時渡されたプレゼントをすぐに取り出して箱から出すとそこには一枚のサイバーカードが入っており、夜空はウルトラの父を見るとウルトラの父は静かに頷く。

「よし!!」

夜空はカードをエクステバイザーに装填し、そのカードの力を使うが、直後にガルベロスがそうはさせまいと目を赤く光らせて自分たちの分身を作り出す。

『ウルトラの父、ロードします』

『ウルトラアレイ!!』

エックスは鉄アレイ形の武器「ウルトラアレイ」を出現させ、右手に持ってそれを掲

げるとそこから眩い光が放たれガルベロスの目が火花を散らして破壊される。

「グアアアア?!」

挿入歌 「ウルトラマンX」

それによってガルベロスの幻影は無くなり、夜空とエックスは「今だ!!」と叫ぶ。

『「ザナデイウム光線!!」』

両腕を左側へゆつくりと振りかぶり両腕を胸の前でX字にクロスさせて発射する必殺光線「ザナデイウム光線」をガルベロスに向かって発射し、直撃を受けたガルベロスは爆発しスパークドールズにさせたため、もう復活することはない。

「怒りをコントロールしてあいつ等叩き潰すぞ!! エックス!!」

『おう!!』

「時雨!! 力を貸してくれ!!」

『駆逐艦 時雨、ロードします』

夜空は時雨のサイバーカードをエクステンダーに装填し「時雨アーマー」をエックスは装着させる。

『駆逐艦 時雨アーマー、アクティブ!』

エックスは主砲を逆手に持ち、グローラーを先ず殴りつけるがすぐさまブルードがエックスに攻撃を仕掛ける。

だがエックスはそれを回避し、主砲の持ち方を直して主砲から砲弾を発射しブルードに直撃させる。

「ギヤア!!?」

「バーストデストロイヤー!!」

エックスは主砲にエネルギーをチャージし、そこから放つエネルギー弾「バーストデストロイヤー」を放ち直撃を受けたブルードは火花を散らして爆発。

それを見て形勢不利と見たグロローラーは翼を広げて飛行し、空に逃げるが即座にウルトラの父が腕をL字に組んで放つ光線「フアザーショット」を撃ち、グロローラーに直撃、グロローラーは粉微塵に爆発した。

「ギシャアア!!?」

そして時雨アーマーを解除したエックスはウルトラの父の方へと向き直る。

『見事だった、ウルトラマンエックス、西崎 夜空』

『いえ、あなたがいなければどうなっていたことか……』

『しかし、君たちには不屈の精神がある。だからこそ、君たちが諦めない限り、君たちが負けることはないだろう』

ウルトラの父からその言葉を聞き、夜空とエックスは力強く「はい!!」と頷くのだった。

*

その後、街に散らばっていたブルード達は暁達が全て殲滅し、鎮守府に帰ると奈々、グ

ルマン、リヨーガ、タカト、妖精さん達はクリスマスパーティーの準備を完了させており、白露達を含んで盛大にパーティーをすることになった。

「パーティーっばい!! パーティーっばい!!」

「ふ、ふん! クリスマスパーティーなんかではしゃぐなんてお子様なんだから」

「一番ウキウキしてそうな暁姉さんだけには言われたくないな」

なんてことを言いながらみんなでパーティーを開始してどんちゃん騒ぎ、みんな楽しそうに過ぎすのだった。

「少し、外の風に当たってくる」

夜空はそう言ってパーティー会場の部屋から出て行き、時雨はなんとなく「僕も」と言つて夜空の後を歩いて行くように彼女も部屋を出る。

「時雨、今日は散々なクリスマスだったな」

「うん、でも……こんな風にパーティーできるのは凄く嬉しいよ? 僕はそれで十分」

「けど、お前にプレゼントとか買ってやれなかったし……」

少し申し訳なさそうにする夜空に対し、時雨は「ううん」と首を横に振つて「僕は気にしてないから」と笑みを浮かべるがやはりどうも夜空の気は晴れないらしい。

「うーん、じゃあ……また、頭、撫でてほしいなって……僕が満足するまで」

少し恥ずかしそうに頬を赤く染める時雨、そんな彼女に対し、夜空は「そんなのでいいのか？」と驚きつつもそう尋ねると時雨は顔を真っ赤にしたまま「コク」と頷いた。夜空は戸惑いながらも彼女に言われた通り、時雨の頭に手をポンと置くと優しく撫で時雨は嬉しそうに笑顔を見せる。

「提督に撫でられるの、凄く気持ちいなあ」

「そうか？」

「うん！」

夜空はしばらく時雨の頭を撫でていると不意に時雨が「ねえ、提督？」と夜空に話しかけ、夜空は「んっ？ どうした？」と返すと時雨はどこか言い辛そうにしつつ、どうにか口を開きあることを尋ねようとする。

「提督ってさ……もしかしてウルトラ……」

「……えっ？」

時雨がそこまで言いかけて夜空はまさかバレたのかと不安になったが……。

「ウルトラマンモス健康体？」

「……はあ!？」

時雨の訳の分からない質問に夜空は困惑し、時雨は苦笑して「ごめん、変なこと聞いたね!」とすぐに謝った。

一方そんな2人の様子を鎮守府の屋根から等身大となったソリに乗ったウルトラの父が見つめており、ウルトラの父は手を空へとかざし、そこから光弾のようなものを放つと空から雪が降り始めた。

「わあ、提督、雪だよ！」

「ああ、ホワイトクリスマスだな」

夜空は少しはしやぐ時雨を見てどこか満足そうに笑みを浮かべるのだった。

第8話 『弄ぶ命』

夜空の鎮守府のグルマンとリョーガが使用している研究所にて。

ここでは今、時雨と電がそれぞれ自分たちに与えられているサイバーゴモラとサイバーエレキングのカードの調整を行っており、時雨も電も近くでカードの調整の様子を伺っていた。

その30分後、グルマンとリョーガはゴモラとエレキングのカードの調整を終えてゴモラを時雨に、エレキングを電に返却した。

「グルマン博士、それで……僕のゴモラのカードはやっぱりどこか調子が悪かったんでしようか？」

『いんや、それが全くと言って良い程異常は一切無かった。ジオデバイザーにも異常は無さそうだしな。時雨、本当にゴモラのカードを使用することができなかつたのか？』

「全く異常無し」……その言葉を聞いて時雨は不満げな表情を浮かべ、試しにゴモラのカードをロードだけやってみようと思ひサイバーカードをジオデバイザーに装填するが……やはり「エラー」としか出ず、時雨は訳が分からず困惑するばかりだった。

『ふむ、サイバーカードは元になったスパークドールズ達の怪獣達と少なからずリンクしている。もしかすればゴモラは君に対してなにか不満を抱いているのではないか？』

「不満……」

しかし、時雨にそれに関して思い当たる節が無く……むしろデマーガが出現した時真つ先にゴモラを助けようとしたこともあるので嫌われるような原因はないと時雨は思うのだが……時雨は少しだけ考え込んだ後、「僕、ちよつとゴモラのところに行つて来ます！」と言つてゴモラのスパークドールズを持つて夜空の元へと駆け出しに行くのだった。

「案外、提督と仲の時雨ちゃんにゴモラが嫉妬してるのかもね」

「嫉妬つて……そんなことあるのですか？」

「まあ、この鎮守府の中で一番提督と付き合ひが長いのは時雨ちゃんじゃなくてゴモラだからねえ」

電の疑問にリョーガがそう答えるとそこでリョーガは何かを思い出したかのような表情を浮かべ、電にエレキングのカードをロードしてみるように言つてみる。

「えっ？ まさかりョーガさん、また何かいらぬことを……」

電はリョーガに対して疑いの眼差しを向けるがリョーガはいつものように「はっはっ

は！」と笑い、「そんなことしてないよ」と言うがりョーガの言うことなのでどうも信用はできなかつた。

しかし、そんなことを言われては今度はどんな機能を追加したのか気になるため電はジオデバイザーにエレキングのカードを装填する。

『サイバーエレキング、ロードします』

するとジオデバイザーから「ポンツ」と一匹の小さな怪獣のようなものが出現し、電は「はわわわわ！」と戸惑いつつもその怪獣をキャッチする。

その怪獣はどう見てもエレキングを小さくしたかのような見た目をしており、サイバーカードから出現したためか機械的ではあるがその姿は非常に愛らしい姿をしており、それを見た電は目を輝かせた。

「か、可愛いのです！ リョーガさんこれは!?!」

「いやあ、偶然にもサイバー怪獣の実体化に関することもエレキングを使って色々やってたら偶然にもそのサイズなら実体化させることに成功してね。さしずめその子の名前はサイバーリムエレキングってところかな?」

『ふむ、まだ色々調整などは必要だが……これはかなり大きな一歩だ。早速提督に知らせてやらねばな』

電は「むぎゅ〜」と「サイバーリムエレキング」を抱きしめ、リョーガは電がサイバー

リムを気に入ってくれて満足そうに笑みを浮かべた。

「リヨーガ」

そこに、タカトが現れてリヨーガに呼びかけるとリヨーガはタカトの顔を見てなにかを察したかのような様子を見せ、リヨーガはタカトに「ついて来てくれ」と言う。タカトとリヨーガは2人で地下へと続くエレベーターに乗り、地下へと移動する。

エレベーターの扉が開き、タカトはリヨーガは案内されるままついて行くとそこには3台の車と……1機の飛行機のような形をしたマシンが置かれていた。

それを見たタカトは僅かに口元に笑みを浮かべ、リヨーガの肩を少し強めに叩く。

「どうやら、出来たらしいな」

「ふふん♪ 君からの頼まれごとだ。断わる理由はないさ。最も、まだ実用段階と

までは行かないけどね」

そこにあつたのはグルマンと共同して開発した「ジオマスケツテイ」と呼ばれる怪獣と戦うために造られた戦闘メカであり、傍に置かれている3台の車、ジオアトス、ジオアラミス、ジオボルトスのいずれかと合体することで陸、空、宇宙で活動可能となるマシンである。

「しかし、幾ら君が『元』パイロットだからってこれは憲兵の仕事じゃないような気がするけどなあ」

「だが……これがあれば少しはあいつ等の……艦娘達を守ることが出来るかもしれない。艦娘達を戦わせることに後ろめたさを感じているのは……提督だけじゃないかな。幾ら現状の最大戦力が艦娘だからと言って俺は……あいつ等が戦うことを快く思っていない」

「確かにね、こういうのは本来軍人がやるべきことだろうし。それにしても、変わったねタカト」

リョーガの言葉にタカトは「んっ?」と首を傾げるとそんな彼の様子を見てリョーガはクスクスと笑い始める。

「変わった?」

「ああ、君は昔とは変わった。主に、艦娘に対する考え方がね」

その頃……執務室にいる夜空の元に訪れた時雨は早速夜空にゴモラのスパークドールズを貸して貰うように頼みこみ、特に断わる理由もないので夜空は時雨にゴモラのスパークドールズを渡すと時雨は秘書艦の仕事をする時に使う机の上にゴモラを置き、時雨は椅子に座って真正面からゴモラと見つめ合う。

「……なにしてるんだ?」

「ゴモラが僕に力を貸してくれない理由が分からなくて……だからこうやって面と向かって話しあおうと……」

「どうやって話しあうつもりなんだよ……」

夜空が呆れ気味に言い、そんな夜空に時雨は少しムスツとした表情を浮かべるが「少なくとも話しかければ何か僕に対する考えを変えてまた力を貸してくれるかもしれないから。それにジオデバイザーのガオデイクションもあるし」と答え、時雨は自分が何が問題があるのか……どうして力を貸してくれないのか、そう思い当たる節を手あたり次第にゴモラに言い聞かせ、その自分の悪い点を直すように心がけると時雨はゴモラに言うのだが……。

『解析不能』

「え、ええ!? なんで!？」

なぜかジオデバイザーの怪獣のスパークドールズの感情などを調べるために使う機能である「ガオデイクション」を使ってもゴモラは一向に時雨に対して何も教えず、時雨は訳が分からず困惑するだけだった。

「ゴモラ……どうして……」

時雨は悲しげにゴモラを見つめ、そんな彼女を見て夜空は時雨の頭をそつと撫でる。

「ゴモラはきつと、何時かお前に心を開いてくれるさ」

「そう……かな?」

「ああ、きつと……ゴモラも、俺のお前達を守りたいって気持ちは分かってくれてる筈だ

から」

時雨の表情からは元気がないが、それでも夜空の言葉を信じて彼女は「こくん」と頷くと彼女は勢いよく椅子から立ち上がるが……勢いよく立ち上がったせいかバランスを崩して後ろに倒れそうになる。

「うわ、わつと!」

「時雨!」

しかし夜空が素早く時雨の腕を掴み、自分の方へと引き寄せた為転ぶことはなく、時雨は夜空に抱きつく形となり……彼女はそれに顔を赤くしてすぐに夜空から離れた。

「わ、わわっ! ご、ごめんね提督! // // //

「俺は別に問題ないけど……」

するとそこでゴモラが密かにカタカタと動き、時雨はどうかしたのかと思いきやゴモラに手を伸ばそうとした時、ゴモラはぴょんつとその場を飛び跳ねると時雨の額に激突した。

「あいたあツ!」

「時雨!?! おい大丈夫か!?!」

案外……ゴモラが嫉妬してると言うのも本当なのかもしれない……。

それから夜空は一度執務室を出て少し小腹が空いたので食堂に向かおうとしたのだ

がその途中、菊月に追い回されている奈々の姿を発見。

「副指令貴様ああああああ!!!」

「あははははは！ まさか菊月ちゃん最近アニメにハマって来てるのは知ってましたがにコスプレ趣味にも目覚めたとは驚きですね！ しかもカードキャ○ターさくらのコスプレとはこれは永久保存版として残しておかなくては！」

「ふざけるなこのバカ副指令いいいいいい!!!」

夜空はまた奈々がなにかやらかしたのかと思いきや、呆れ顔を浮かべ、取りあえずあの2人の追いかけてこは割と日常茶番時なので放っておこうと思いきや食堂に向かつて再び歩き始めるが……その途中、村雨と朝潮と満潮と荒潮の4人がなにか話しあっているところに出くわした。

「あつ、提督！ 聞いてくださいいよ」

「んっ？ どうした村雨？」

村雨は朝潮と満潮の腕を半ば無理やり掴んで夜空の元に行くと村雨は3人を「たまにはオシヤレとかしないと」と思い、街にある服屋に連れて行こうとしたのだが荒潮は兎も角、朝潮と満潮は「そんなの任務に関係ない」と言っただけで一向に行こうとはしないのだ。「あらあら、朝潮ちゃんも満潮ちゃんも女の子なんだからたまにはオシヤレするべきだと思っただけどね」

「そうだよね荒潮ちゃん！」

「ですがそういうのは私はちよつと……苦手、というか……」

「私も、別に興味ないし」

朝潮も満潮も「そもそも任務に関係ないことだし」と言つて断わろうとしているのだが……。

「でも荒潮や村雨の言う通り、たまにはそういうのも良いじゃないか。行つて来いよ」

「はっ！ 分かりました！ 提督がそういうご命令ならばこの朝潮、その任務遂行します！」

「いや、命令じゃないんだけど……。まあ、今はそれでいいかな。みんな楽しんで来い。幸い、今日はみんなもう殆どやることなくて休日状態だしな」

朝潮は元氣よく「はい！」と敬礼して満潮の腕を掴むと村雨と荒潮と一緒に街の方に
出かけることとなつたのだった。

「つてなんで私までー!?!」

満潮の叫びが鳴り響いたが、夜空は「こういうのも大事」だと思ひ敢えて満潮は助け
ず見送つた。

「それにしても、朝潮は大丈夫だろうか……」

「朝潮がどうかしたのか？」

そんな時、偶然近くを通りかかったタカトが夜空に声をかけ、いきなり声をかけられたことに夜空は少し驚いたが……タカトに少し相談に乗って貰おうと思い、先ほど自分が思ったことをタカトに話した。

それはもし、深海凄艦との戦いが終わり、サイバー怪獣の実体化も1体や2体ではなく複数実体化させることが出来たら艦娘はもう戦わなくて済む……。

そうすれば艦娘達は普通の人間と同じ生活をする事ができるようになるかもしれない、だが朝潮のように軍人氣質な艦娘は恐らく軍に残るのではないかと思うと不安で仕方がなかったのだ。

自分たち人間の都合で生み出され、命がけの戦いに行かせて自分たち人間は安全なところにいるだけ……そんな彼女たちを1人でも永遠に戦わせるのは正直、夜空は気が引けてならない。

「だが、戦いこそが生きがいだと感じている艦娘も少なくはないぞ」

「それは分かっている、でも……それはもつともつと外の世界を見れてないからだと思うんだ。けど、やっぱりそれは難しいのかな。こんなこと言いたくないが深海凄艦がいなくなっても、怪獣達や宇宙人の脅威が無くならない限りサイバー怪獣が実体化しても彼女たちは戦い続けたいといけないんじゃないかって。それに、時々不安になつて思うんだ。本当に怪獣との共存することができるとは……ただの夢物語で終わ

るんじゃないかって……」

どことなく、暗い表情を浮かべて語る夜空の話聞き、タカトは目を閉じて静かに口を開いた。

「何を珍しく弱気なことを……提督、俺はアンタの夢を応援してる。俺だけじゃない、この鎮守府全員がアンタの夢を応援して共感してるんだ。怪獣との共存も、全員は無理だとしても艦娘達が戦わなくて済むようにすることだって何時かできるさ」

タカトはそう言つて夜空を励まし、夜空は「ありがとう」とお礼を言うがその表情は暗かった。

「知ってるか？ 数百年前までは地球が丸いなんて誰も考えもしなかった。だから初めて船乗り達が海の上で大陸を探そうとした時も誰もが不可能だ、夢物語だと言われた。他にも人が小さな飛行機で空を飛ぼうとしたり、宇宙に行こうとした時も夢物語だと言った。実現するまでは誰もが夢物語なんだ。だから、不安になることなんてない。夢物語だと言われても理想を目指して頑張ればいいさ」

タカトが笑みを浮かべながらそう言い放つと、暗くなっていた夜空の表情は少しだけ明るくなり、「ありがとう」とお礼を言うのだった。

*

一方その頃、街の方では睦月、如月、文月が今日は特に何もなかったためみんなで買い物を楽しんでおり一通り欲しい物を買って終えた睦月達は鎮守府へと戻ろうとした時のことだった。

突然、地面が揺れ始めて地中から「岩石怪獣 ネルドラント」が出現し、ネルドラントは街を歩き廻りながら建物を次々に破壊し始める。

「あれは……確か、ネルドラントね！」

それを見た如月は困惑した表情を浮かべ、そんな彼女の様子に睦月と文月も気づいた

のか「どうかしたの？」と睦月が如月に声をかける。

「いえ、ネルドラントは本来、大人しい怪獣なの。だから……どうして暴れているのが分からなくて……」

「兎に角今はそのネルドラントを食い止めないと！ 如月ちゃん！ モンスフュージョンを使うよ！」

睦月の言葉に如月は頷き、睦月と如月はサイバーガルラとサイバーサラマンドラのカードをジオデバイザーに装填し、それぞれ睦月、如月は怪獣の力を身に纏った「サイバーガルラフュージョン」「サイバーサラマンドラフュージョン」となる。

「あたしはまだモンスフュージョンはできないから2人の援護かな〜？」

文月も艤装を取り出し、睦月は文月は「お願いね！」と頼むと睦月と如月はネルドラントの元へと向かって行き、睦月はネルドラントの足元目掛けて地面を思いつきり殴りつけると地面が粉々に飛び散り、その衝撃によってネルドラントはバランスを崩して尻もちをついてしまう。

「グルラアアアアアアア!!!」

それに怒ったのかネルドラントは振りあげた腕を睦月に向かって振り降ろすが睦月は主砲から発されたバリアでネルドラントの攻撃をガードする。

「くっ……い！」

そこに如月の強化された砲弾と文月の放った砲弾がネルドランドに直撃し、少しだけ怯んだところを狙って睦月はそこから脱出し、如月達の元へと戻ってくる。

「間近で見て分かったけど……やっぱりあの怪獣、如月ちゃんの言う通りなにか……変な感じがする……」

「あつ、あれ見て!」

するとそこで文月が何かに気づいたらしく、彼女が指差す方向を睦月と如月が見ると……そこにはネルドランドの頭部になにか機械のような物を取りつけられているのが確認でき、如月は慌ててジオデバイザーを使ってネルドランドを解析してみることにした。

しかし、ネルドランドは睦月達にターゲットを絞り、睦月達に向かって攻撃を仕掛けようとしており、睦月はすぐさまバリアを展開し……それを主砲で殴りつけてバリアをネルドランドに向かって飛ばし、バリアは見事ネルドランドに激突し、ネルドランドはその場に倒れこむ。

「あく、ビックリしたあ」

「ありがとう、睦月ちゃん、おかげで解析完了したわ」

如月がジオデバイザーで解析した結果を睦月と文月に見せるとあの怪獣……ネルドランドの身体の中には幾つもの機械らしき物が組みこまれていたのだ。

「改造って……」

「そんなの怪獣さんが可哀想！」

睦月と文月はどうかして無理やり暴走させられているであろうネルドラントをどうにか大人しくさせる方法はないかと考えるが……如月が「兎に角今は街から少しでも遠ざけましょ」と言い、睦月と文月は領いてどうにかネルドラントを街から離れさせようとする。

如月、睦月、文月は主砲を構えてネルドラントの足元に砲弾を撃ち込み、後退させようとしたのだがその時、彼女たちの足元が突然爆発し……何者かが攻撃して来たのだ。

「誰!？」

そして彼女たちの目の前に現れたのは……自分たちと同じく3人の「艦娘」だったのだ。

「艦娘……?？」

しかし、その艦娘達は全員目を隠すように機械の仮面のようなものを付けられ、艦装もより機械的になっていた。

「見たところ睦月達と同じく駆逐艦の娘……だよねえ?」

すると3人の艦娘は左手に装備されていた主砲が変形して剣のような形となり、右手の主砲から砲弾を放ちながら睦月達に攻撃を仕掛けてきた。

慌てて睦月達も応戦を開始し、睦月はガルラのバリアで剣を振りかざしてきた艦娘の攻撃を防ぎ、後ろに飛び退いて砲弾を敵艦娘に放つが敵艦娘が不気味に「ニヤリ」と笑みを浮かべると剣で砲弾を全て切り裂き、一気に詰め寄って睦月に跳び蹴りを叩き込む。

「かは!?!」

「睦月ちゃん!」

如月が睦月の元に駆け寄ろうとするがまた別の敵艦娘が注意の逸れた如月に向かって殴り掛かって来るが、如月はどうにか避けて攻撃を回避し、素早く睦月の元へと駆け寄る。

「この人達……あの仮面……ネルドランドについてるものちよつと似てるわね……まさか!」

まさかとは思いつつも如月は試しにジオバイザーを敵艦娘達にかざしてみると……やはり、この艦娘達はネルドランドと同様に身体に機械を埋め込まれており、そのことが分かった如月は口元を押さえ、驚きの表情を浮かべた。

「やつぱり……この人達……!」

「改造……されてるの……!?!」

すると改造艦娘の1人が文月の腕を掴んで睦月達の元へと投げ捨て、改造艦娘達はジ

リジリと睦月達に近づく。

「サイバーフュージョンを使ってるのにここまで押されるなんて……」

このままではマズイと思う睦月、ここは一先ず撤退するべきかとも思ったがネルドランドを放つて置く訳にも行かず……ならばここは応援が来るまでもう少し持ち応えるべきだと判断し、睦月は如月と文月になんとかもう少しだけ粘ってくれるように頼みこむ。

「大丈夫だよ、言われなくてもあたしは負けないもん！」

だが……そんな時のことである。

「ウラアアアアアアア!!!」

2人の改造艦娘の頭を後ろから鷲掴みにして投げ飛ばす響と……暁と電と雷の第六の4人がその場に駆けつけ、暁と電と雷はなぜかなんとも言えない表情を浮かべていた。

と言うのも……見たところ、今の響は心なしかなにか激怒してるように見え、睦月は「響ちゃんどうかしたの?」と尋ねると暁は「はあ」と溜め息を吐きつつ響になにかあったのかを説明した。

「みんなでバット○ンV S ○パーマン見てる途中でこいつ等が現れたもんだから物凄
い怒ってるのよ」

「響お姉ちゃん、前売り券まで買ってましたから……」

「いや、確かに響の気持ちも分かるし、あたし達も少しはタイミングの悪さにムカつくけど……響姉ほどじゃ……」

「B i g g が揃ったところでどのタイミングで出てきてるんだよもおおおおおおおお!!!」

響は怒りに任せながらサイバーモモザゴンのカードをロードして超音波を主砲から放ち、改造艦娘達の動きを封じるが……そこにネルドラントが響目掛けて歩いて来たのだが……その時、突然ネルドラントは一際大きな鳴き声をあげ、同時に改造艦娘達も突然動きが止まり、急にどうしたのかと思うと……ネルドラントは口から泡を吹き出してその場に倒れてしまったのだ。

「「っ!?!」」

同時に、改造艦娘達も身体中から火花を上げ口から血を吐き出してその場に倒れてしまったのだ。

「ネルドラント……どうしたの!?!」

急いで如月がジオデバイザーで解析してみると……既に、ネルドラントは生命活動を停止しており、響も改造艦娘達に踏み寄って恐る恐る改造艦娘達に触れるとその身体は氷のように冷たく、首元に手を当てると彼女たちは既に息をしていなかった。

「彼女たちはもう……死んでるのか？」

「えっ、そ、そんな……！」

響の言葉に一同は驚き、怪獣の死体の処理は処理班に任せ……改造艦娘の遺体はリョーガやグルマン等ラボチームが回収し調査を始めることにした。

*

鎮守府のリョーガとグルマンの研究室では夜空と時雨、タカトと現場に居合わせた第六の4人と睦月、如月、文月が怪獣や改造艦娘達による死因について聞かされていた。『如月が解析した通り、あのネルドラントには身体の中に2種類のタイプの機械が幾つか埋め込まれていた』

「1つは腕力を強化するもの、もう1つは外部から遠隔操作するための物だ。しかも、これらの金属は全て地球上には存在しないものであることが判明している」

また2人の話によるとあの改造艦娘達の身体の中に埋め込まれていた機械も同様のものが使用されており、改造艦娘とネルドラントはその機械に拒否反応を起こしてショック死を起こしたのが死因であるらしく、また改造艦娘達は調べたところによると全鎮守府などのデータベースと照合した結果、既に轟沈した艦娘であることも判明したのだ。

「何者かが怪獣と艦娘を装置を強引に埋め込んで兵器に改造したということか……」

タカトがそう呟くと睦月達や暁達は「酷い……」とそれぞれに口にし、夜空は怪獣や艦娘にこんな仕打ちをした人物に拳を握りしめて静かに怒りを震わせた。

「どこの誰かは知らないが……絶対に見つけ出してぶん殴ってやる……!」

それから一時解散となり、夜空も執務室に1人戻ろうとしていると1つ、ふっと気になったことをエックスに尋ねて見ることにした。

「なあ、エックス」

『んっ？ どうかしたのか夜空？』

「エックスはさ、どうして最近になって怪獣が頻繁に出現するようになったのか知ってるか？」

『それは……私には分からない、だが怪獣が出現する原因を作ったのは、恐らく私だ』
エックスの言葉に夜空は首を傾げて「どういうことだ？」と尋ねるとエックスは夜空と出会う前、太陽系を滅ぼそうとしていた邪悪な敵を追いかけ、エックスがその敵を太陽に投げこんでしまった為にウルトラフレアを起こしてしまったことを話した。

『だから私は君達に力を貸す、それが私の果たすべき責任だ』

「ああ。 だけど、その敵を倒さなければウルトラフレアどころじゃない、地球その物が滅びていたかもしれないんだろ？」

『ああ、そうだ……しかし』

「それ以上は言わなくて良い。 今は怪獣や艦娘を改造したクソ野郎を見つけ出すのが優先だ」

その時、「クソ野郎とは失礼な奴だな」と誰かが背後から夜空に話しかけてきたのだ。

慌てて振り返るとそこには黒づくめの怪しい男が立っており、夜空は素早くジオデバイザーを怪しい男に向けて構える。

「誰だ！」

「今君が見ているのは私が君に対して発した脳波で見せた幻、つまり私はそこに居る訳ではない」

「俺に何の用がある？」

「君と話がしたい、私の指定する場所に君とついでにエックスも来て頂きたいのだ。

無論、他の者にこのことは話すなよ？」

夜空は黒づくめの男を睨み付けつつ、「場所は？」と尋ねると男は夜空に自分のいる場所を話し、男は夜空の前から姿を消すと夜空は指定された場所に向かおうとする。

『夜空、みんなに話さなくて良いのか？』

「奴は俺たちだけ来いと言った。ここは言われた通りにするべきだろう、変に刺激するような真似もするべきじゃないな」

同じ頃……鎮守府は改造艦娘のことが原因なのか、鎮守府中の艦娘達の元気がなくどんよりとしたムードになっていた。

「みんな元気がないな」

「仕方が無いさ、改造艦娘は元々は自分たちと同じ艦娘、仲間だったんだ。落ち込みも

するよ」

「いや、だが……それだけじゃないような……」

鎮守府をリョーガと一緒に歩き廻っていたタカトはみんなの様子がおかしいことに気が付き、偶然通りかかった朝潮を呼び止めて話を聞いてみることにした。

「朝潮、みんなどうしたんだ？ 改造艦娘の事がショックなのは分かるが、みんなそれだけでこんなに暗くなってる訳じゃないんだろ？」

タカトの問いかけに、朝潮はどう答えれば良いのか分からず困ったような表情を浮かべるが……すぐに彼女は口を開き、みんなの様子がおかしくなっている理由を話した。

「私、いえ……みんな思ってたんです。あの改造された艦娘達は私たちの本来あるべき姿なんじゃないかって……」

元々自分たちは艦娘は軍艦で……ただの兵器だった。

それが人の形に姿を変え、心を持ち人間に近くなった自分たちは「感情」を持つようになった。

それは憎しみも悲しみも恐怖も感じ、兵器として最も致命的なことなのではないかと……朝潮達は思ってたのだ。

なにせ世の中には艦娘達のことをただの兵器と考える人間も少なくはない、そんな人間たちもいるから朝潮達は思ってしまったのだ……「自分たちは感情を持つべきではな

く、本当にただの兵器として生まれて来た方が良かったのではないかと……」「それが自分たちの存在意義なのではないか」と……。

「朝潮……バカを言うな、お前達は人間だ。提督だつていつもそう言ってるだろ？」

「ですが、私達は……」

「なら聞こう、お前は……兵器になりたいのか？」

タカトのその言葉に対し、「それは……」と朝潮は黙り込んでしまう。

「俺もかつてお前達艦娘のことをただの兵器だと考えていた」

「えっ？」

「だがな、俺はある時……久しぶりに休日が取れて実家に帰ろうとした時に船に乗ったんだ。その時、乗っていた船に深海凄艦が襲い掛かって来てな。だがお前達と同じ

艦娘に助けられたことがあるんだ」

その時、タカトは見たのだ……必死に自分たちのことを守り、どんなに傷ついても、泣いても、死にかけても戦う彼女たちの姿を……。

その姿を見てタカトは考えたのだ、「艦娘と人間、なにが違うのだ」ということに。

「俺たちと同じように傷ついて泣いて……笑って喜んだりするお前達は、俺たち人間とどこが違うって言うんだ？ 自分の存在意義？ そんな物は他の誰かが決めることじゃない、決める権利なんかない！ 自分自身が決めることだ！ 自分がどんな存在か

なんて自分で決めれば良い。もう一度聞くぞ朝潮、お前は兵器になりたいのか？」

真剣な眼差しでタカトは肩を掴んで朝潮を見つめ、彼女に問いかけると朝潮は少しだけ悩むような表情を見せるが……すぐにタカトと同じように真剣な眼差しを向けて首を横に振ったのだ。

「いえ、私は……兵器じゃありません！ 人間です！」

「……だよな」

朝潮の言葉を聞いてタカトは笑顔となり、彼女の頭を撫でると朝潮は早速タカトの言葉をみんなにも教えると言って走り出し、そんなタカトを見てリョーガはクスクスと笑う。

「なにを笑ってるんだ」

「良いこと言うなと思ってね」

「うるさい。ってんっ？ あれは……」

その時、タカトはジオボルトスに乗って鎮守府を出て行く夜空の姿を発見し、こんな時にどこに行くのだろうかと思うタカトだったが……何か、胸騒ぎのようなものを感じ、タカトは夜空を追いかけようと思い、ジオアトスのある場所へと向かう。

「いきなりどうしたんだいタカト!？」

「リョーガ！ ジオマスケッティを何時でも出撃できるようにしておいてくれ！ もう

実用できるんだろ！」

「できるけど……全く、仕方がないなあ！」

*

それからジオボルトスに乗った夜空はとある人気のない古びた銭湯に辿り着き、ジオボルトスから降りるとジオプラスターを構えつつも銭湯の中へと入って行く。

中に入ると丁度すぐそこにあの黒ずくめの男が立つており、その隣には軽巡洋艦と重巡洋艦と思われる艦装を装備した改造艦娘が護衛のように立っていた。

「貴様あ……！」

改造艦娘を見て夜空は男に対する怒りを露わにするが男は夜空に対し「まあ、落ち着きたまえ」と言い、男は人間の姿から本来の宇宙人としての姿を現す。

「お前は……ファビラス星人か？」

『誰がファビラス星人だ！ 私の名は『ノワール星人 バイス』。どこをどう見たらファビラス星人に見えると言うんだ！』

その宇宙人、「宇宙狩人 ノワール星人 バイス」はファビラス星人と間違えられたことに怒るがすぐに冷静となり、バイスは今日は夜空に対し交渉しに来たと言うのだ。

『先ずはこれを見てくれたまえ』

するとバイスは隣に置いてあった鏡に手をかざすとそこには虫のような怪獣……「メカレーター」として改造された「薄命幼獣 イフェメラ」が眠らされており、それを見た夜空は驚きバイスを睨み付ける。

「あれは……イフェメラ！ なんてことを……！」

イフェメラはラテン語で「1日の命」を意味する言葉を名前に持つ怪獣であり、その名の通り500年に一回卵から孵化し、わずか1日で幼獣から成獣に成長して卵を産ん

で死亡する非常に短命な怪獣であり、しかもイフエメラは本来は大人しく1日の命を精一杯生きる怪獣なのだ。

そんな怪獣をメカレーターに改造したバイスに対し、さらなる怒りを抱えて今すぐにも殴り飛ばすくらいはしてやろうかと思う夜空だったが……先ほどから改造艦娘の2人が主砲の砲口をこちらに向けているため下手に動くことが出来なかった。

『君は何か一つ、勘違いをしている。ネルドラントは実験体であつたために死亡したが、本来この装置は怪獣の命を長く繋ぎ止める機能も果たしているのだよ』

「なに……？」

『我々の星では怪獣を捕獲し、都合の良いように改造を施して生きてきた資源として有効活用している。その結果は我々は様々な文化を築いて来た。しかし、我々の星の怪獣は絶滅仕掛けている、そこで怪獣が生息する星を発見した』

それが理由で地球を訪れたのかと夜空は理解し、バイスは自分の星が怪獣が絶滅仕掛けたのを反省し、怪獣を改造すると同時に怪獣の命を長く紡ぐ装置を取りつけたというのだ。

そしてその成功例がこのイフエメラであり、本来1日しか生きられないこのイフエメラは既に数日間生き続けているというのだ。

『人間は我々のように怪獣を有効利用しようとはしない、実に理解できないが……私に

取っては都合が良い。

この星は怪獣達の脅威に晒されているのだろうか？ 君たち地球人は我々のように怪獣を改造し有効活用しないのなら私が地球の怪獣を全て私に引き渡してくれれば良い。 そうすれば地球を怪獣の脅威にさらされなくなる』

「……どうして怪獣だけじゃなく、艦娘も改造したんだ？」

『艦娘、地球人が生み出したにしては実に興味深い生体兵器だ。 私はただ艦娘も怪獣のように……有効利用できると思ってたまでだ』

バイスの話を聞き、「なに？」と夜空は怪訝そうにバイスを睨み付ける。

『そこで私は艦娘達も幾つか私に引き渡してくれないかと思つてね。 無論、君たち地球人が生み出した物なのだから全部とは言わない。 どうせ代わりは幾らでもいるのだから？ なにせ彼女たちは『クローン技術』によって生み出された存在なのだから』

「お前え……!!」

それを聞いて夜空はバイスに殴り掛かろうとするが改造艦娘の2人に押さえつけられて動きを止められ、激怒する夜空に対してバイスは首を傾げる。

『なにを君はそんなに苛立つことがある？』

実はこの世界における「艦娘」とは「クローン技術」によって生み出された存在であり、その為この世界には同じ名前、同じ姿を持った艦娘が2人以上は必ず存在している

のだ。

しかし、同じ艦娘と言ってもそれぞれに性格の違いや見た目に若干の違いなどもあり、全員が全員、完全に同じ艦娘という訳ではないのだ。

だがバイスはそんなこと知ったことではなく、彼は艦娘をただの兵器としてしか見ておらず、バイスは艦娘を何人か引き渡してくれないかと夜空に頼むが……そんなことを夜空が承諾する筈もなかった。

「どうして俺と交渉しようと思った？」

『君が宇宙人と対話できる存在だったからだ』

「……フン、ならお前はバカだな」

夜空の言葉にバイスは「なに？」と首を傾げる。

「艦娘も怪獣も兵器なんかじゃない、怪獣も野生動物も原生林も……そして人間や艦娘も同じ地球に生きる生き物……地球の一部だ！ お前のようなクソ野郎に渡す奴等なんて……！人もない!!」

そう言い放ちながら夜空は改造艦娘の拘束からどうにかして擦り抜けてバイスに向かい、勢いよく拳をバイスの顔面に叩き込み、バイスは大きく吹き飛ばされて壁に激突した。

『ぐおっ!? おのれ……改造艦娘!!』

バイスは改造艦娘の2人に夜空を捕らえるように命令し、改造艦娘の2人は夜空に襲い掛かるが夜空はどうにかして改造艦娘の攻撃を回避する。

『我々の考えを理解して貰えば楽に怪獣も……それだけではなく艦娘も手に入れることが出来ると思ったのだが……』

そんな時、横からバイスに向かって光弾のような物が直撃してバイスを吹き飛ばし、夜空が光弾が飛んできた方向を見るとそこにはジオブラスターを構えたタカトと主砲を構えた時雨、朝潮、睦月、如月が立っていたのだ。

「バカな奴だな。その男は艦娘も、怪獣も大切にする男だ！ そんな話し合いに提督が乗ると思ったのか？」

タカトが呆れたような視線をバイスに向けながらそう言い放つ。

『ぐおおお……おのれえ！……このムザン星で手に入れた石でえ!!』

するとバイスはどこから石のような物を取り出し、それを自分の胸に押し込めると身体が赤く発光してバイスは鎧のような物を身に纏い巨大化する。

その際、銭湯の天井が崩れて改造艦娘は崩れた天井の下敷きになってしまい、夜空は必死に改造艦娘達を助けようとしたが時雨に抑えられる。

「ダメだよ提督！……もう……間に合わない、早くここから出ないと！」

「……………くそっ！」

一同は急いで銭湯から出ると丁度巨大化を完了させた鎧を身に纏い、「魔石超人 デビルノワール」となったバイスが待ち構えていたのだ。

それと同時に地中から改造されたイフエメラ……「イフエメラ・メカレーター」が出現し、デビルノワールとイフエメラは夜空達に襲い掛かるうとする。

「イフエメラ……」

「キユオオオオウ……！ キユオオオオウ……！」

鳴き声をあげるイフエメラの声は……どこか苦しそうに聞こえ、夜空はそんなイフエメラを見て悲しそうな表情を浮かべた。

「イフエメラ……あんな怪獣まで奴は改造したのか!？」

タカトもまたイフエメラを改造したバイスに怒りを見せ、すぐさまジオアトスに乗り込むとリョーガにエクステバイザーを使いジオマスケツティを発進させるように連絡する。

『サイバーブラックキング、ロードします』

『サイバーキングジョー、ロードします』

朝潮と時雨はブラックキングとキングジョーのサイバーカードをジオデバイザーに装填し、怪獣の力を身に纏い、また睦月と如月もモンスフュージョンを使ってパワーアップする。

『サイバーガルラフュージョン、アクティブ!』

『サイバーサラマンドラフュージョン、アクティブ!』

『ブラックヘルマグマ!!』

『キングジョーデストロイ砲!!』

『発射あ!!』

ブラックキングとキングジョーの力によって強化された光線を主砲からデビルノワールに向かって発射する時雨と朝潮だが……デビルノワールの鎧はあっさりとその攻撃を弾き飛ばしてしまったのだ。

「そんな……!」

「なら睦月と如月お願い!!」

「任せるにゃしい!」

今度は睦月が目の前に巨大なバリアを張り巡らせてそれをデビルノワールに向かって飛ばし、同時に如月もサラマンドラの顔を模した主砲から炎を発射するのだが……デビルノワールはバリアを拳を振るってそのバリアを粉々に砕き、サラマンドラの炎も直撃したにも関わらずデビルノワールは平然としていた。

「ギャオオオオウ……!」

『ジオアトス、ジョイン・トウ・ジオマスケツティ! スカイマスケツティ、コンプリー

ト』

一方でタカトはジオアトスとジオマスケツティが合体した空中で活動する戦闘機、「スカイマスケットティ」を完成させ、スカイマスケツティはイフェメラに攻撃を開始する。

「すまない……イフェメラ！ ファントン光子砲!! 発射!!」

両翼に装備したファントン光子砲から光弾をスカイマスケツティは発射し、イフェメラに直撃させる。

するとイフェメラは口から火炎弾をスカイマスケツティに放ち、スカイマスケツティはどうかしてイフェメラの火炎弾をかわし、旋回して再び光弾をイフェメラに撃ち込む。

一方で夜空はみんなから離れて人気のない場所に行き、エクステバイザーを構える。

「つ……エックス、イフェメラを助ける方法は……ないのか？」

『……すまない、私にはイフェメラを救える方法はない。だが、せめて苦しみからイフェメラを解放してやろう』

エックスの言葉に、夜空は静かに頷くエクステバイザーをXモードに変形させエックスのスパークドールズが出現し、それをリードさせる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

そして夜空はエクステデバイザーを高く掲げる。

『エックス………!!!』

『イイイイ!! シャア………!!!』

『エックス、ユナイテッド』

夜空は「ウルトラマンエックス」へと変身を完了させ、エックスは夕日をバックに大地に降り立つとエックスはファイティングポーズを取ってイフエメラに向かって駆け出す。

戦闘BGM「Xの戦い」

「ギジャアア………!」

イフエメラは向かって来るエックスに向かって火炎弾を放つがエックスは腕を振るって火炎弾を全て弾きながら接近し、イフエメラに廻し蹴りを喰らわせる。

蹴りを喰らったイフエメラは軽く吹き飛ばされ、エックスは倒れこんだイフエメラに向かって駆け出そうとするが後ろからデビルノワールがエックスに掴み掛かって押さえこみ、エックスの動きを封じてしまう。

そこで起き上がったイフエメラが火炎弾を放って動きが上手く取れないエックスに向かって放ち、エックスは火炎弾が直撃する。

『ジュア!?!』

「エックスを離せ!!」

スカイマスケッティが光弾をデビルノワールの背中に撃ち込むが鎧はことごとくスカイマスケッティや艦娘達の攻撃を跳ね返してしまう。

エックスはどうにかしてデビルノワールの拘束を振り解き、腹部に蹴りを叩き込むが負けじとデビルノワールは近距離から赤い光弾をエックスに喰らわせる。

『グッ! シュア!!』

しかしエックスもデビルノワールの顔面を殴りつけた後、腕を掴みあげて背負い投げを繰り返す。

『ギジャアア!!』

そこにイフェメラがジャンプして体当たりをエックスに喰らわせ、地面に倒れこんでしまう。

さらに立ち上がったデビルノワールは倒れこんだエックスに向かって黄色い触手のようなものを出してエックスを拘束し、イフェメラに火炎弾を撃ち込ませようとするが……。

『サイバーエレキング、ロードします』

『サイバーエレキングアーマー、アクティブ!』

エレキングのカードを使い、エックスは「エレキングアーマー」を身に纏うと同時に

触手を引き千切り、右腕のアームから電撃の鞭を出してイフェメラを拘束し、反対方向へと投げ飛ばす。

『デイ、ヤア!!』

「ギジャアア!!?」

『タカトさん! 聞こえますか!?! ジオデバイザーで解析した結果、あの鎧は胸部にある魔石の位置のみが脆いことが分かりました! 私たちでその部分の装甲をはがしますからタカトさんはそこを!』

「朝潮、了解した!」

朝潮からの通信を聞き、タカトは頷く。

朝潮達は一斉に主砲を構えてデビルノワールの胸部にある魔石に向かって攻撃を開始し……攻撃を受けた鎧はほんの少しだけ砕かれるだけだったが……魔石を露出させるには十分だった。

そしてタカトはジオデバイザーにテレスドンのカードを装填し、テレスドンの力をスカイマスケットティに宿す。

『サイバーテレスドン、ロードします』

「溶岩熱戦……発射あ!!」

スカイマスケットティからテレスドンの「溶岩熱戦」をデビルノワールの胸部にある魔

石に撃ち込み、溶岩熱戦は魔石諸共、デビルノワールを貫き、デビルノワールは身体から火花を散らして倒れ爆発した。

『ぐおおお……!?!?』

一方でエックスはイフエメラと対峙し、アームをイフエメラに向かって構える。

「エレキングの電撃なら、イフエメラに埋め込まれた機械を停止できるかもしれない」

『だがそれでもイフエメラの命は……』

「……行くぞ」

エックスと夜空は迷いを振り切り、アームからエレキングの黄色い電撃と、エックスの力が込められた青い電撃を放つ。「エレキング電撃波」をイフエメラに向かって放つ。

「エレキング電撃波!!」

イフエメラは直撃を受けるとイフエメラは身体中に電気が走り、イフエメラに埋め込まれた機械部分が全停止してイフエメラは静かに地面へと倒れこもうとする。

だが、その直後にアーマーを解除したエックスに抱きかかえられ、イフエメラは小さな鳴き声をあげると静かに目を閉じるのだった。

『っ……っ』

エックスは生命の活動を停止したイフエメラを持ちあげ、宇宙へと運ぶのだった。

*

「今回の事件は、嫌なものだったな」

翌日、執務室でタカトが夜空と今回の事件について話しあっており、夜空は確かにタカトの言う通り今回の事件は嫌なものだったと答えるが……。

「だけど、だからこそ、俺たち地球人は絶対に同じになっちゃいけないんだ。だからこ

「そ、俺は怪獣との共存を絶対に諦めない」

「ああ、応援してるぞ、提督」

タカトは笑みを浮かべて夜空の肩をポンポンと軽く叩くとタカトは執務室から出て行こうとするが……。

「ありがと」

「何がだ？」

「タカトさんのおかげで、俺は夢をもつともつと強く持てるようになった。それだけじゃない、朝潮達のことにも励ましてくれただろ？」

それに対し、タカトは「さあな」とだけ答えると部屋を出て行き、夜空はゴモラのスパークドールズを手に持ち、じつとゴモラを見つめるのだった。

*

とある森の中、そこでは一人の少女が森の中を歩いており……ここはどこなのか、どうして自分がここにいいのか分からなかったが……その少女はただ真つすぐ歩き続けた。

そんな時、「キジャアア……」という不気味な声が聞こえ、少女が慌てて振り返るとそこにはナメクジの怪物が自分に向かって襲い掛かろうとしていたのだ。

「う、うわあ!？」

少女はすぐに逃げようとするがナメクジの怪物は触手のような物を少女の足に絡ませて拘束し、少女を引きずってナメクジの怪物はその巨大な口を開き、捕食しようとしていたのだ。

(だ、ダメだ……食べられる……!)

だが……そんな時……。

『諦めるな』

そんな誰かの声が少女には確かに聞こえ……ナメクジの怪物……「プロブタイプビー
スト ペドレオン クライン」はその時に振り降ろされた巨大な「銀色の拳」によつて
殴り潰されたのだ。

突然のことに、少女は驚きつつも上の方を見上げると……そこには銀色の巨人が立っ
ており、その巨人はゆっくりと少女の方へと顔を向けた。

「……ウルトラマン……」

少女が静かにそう呟き、手を伸ばそうとしたその瞬間……目の前が突然光に包まれ、
少女の伸ばした手はいきなり現れた何かの遺跡のようなものに触れた。

*

「……………き……………。 び……………き……………。 響!!」

「んあ……………」

誰かに呼ばれ、ベッドから起き上がる響……………隣には呆れたような顔を浮かべる暁の姿があった。

「全く、何時まで寝てるのよ。もうとつくに起きる時間よ?」

「響お姉ちゃんにしては寝坊とは珍しいのです」

目の前には電と雷の姿もあり、雷は「もう、仕方ないわね」と呆れたように言いながら響のボサボサの髪を直し始める。

「響姉ったら寝癖が凄いじゃない!」

「ほら、着替え用意してるから雷に髪を直して貰ったらすぐに着替えなさい」

暁に言われ、響は「うん」と言う……………響は先ほど見た「銀色の巨人」の夢を思い出していた。

(なんだったんだろ、あれ……………)

第9話 『響—デユナミスト—』

「キュエエエエエエ!!!」

どこかの森でナメクジのような姿をした異形の怪物……「プロブタイプピースト・ペドレオン・クライン」は両腕の触手を使い、3人の少女……「暁」「雷」「電」を拘束し今にもその巨大な口を開き……彼女たちを捕食しようとしていた。

「いやああああああ!!!」

「助けてえ!!」

「助けて……助けて響いいいいいい!!!」

3人は必死に泣き叫び、暁は妹である響の名を必死に叫び……響もまた彼女たちを助けようと必死に手を伸ばしていた。

「姉さん!! 雷!! 電あ!!」

だが……その伸ばした手は突然現れた遺跡のようなものに触れ、響がその遺跡に触れると彼女はそのまま発する眩い光へと包まれた……。

その光は巨大な柱となり、その中から1人の銀色の巨人……「ウルトラマンネクサス・アンフアンズ」が現れたのだ。

戦闘BGM「ネクサス — Heroic —」

『シユア!!』

ネクサスは右手から出す光の帯「セービングシユート」を使いペドレオンに拘束された暁、雷、電を奪い取ると3人を安全な地上へと降ろし、ネクサスはペドレオンに向かって駆け出しペドレオンの腹部にエネルギーを拳に込めて放つ「アンフアンスパunch」を叩き込み、ペドレオンを殴り飛ばした。

「キユエエエエエ!!!」

だが殴り飛ばされたペドレオンはすぐさま起き上がり、右腕の触手を伸ばして接近して来たネクサスの首に巻きつけて電撃をネクサスの身体に流し込む。

『ウアツ?!』

「キユエエエエエ!!!」

さらに左手の触手を使ってネクサスを叩きつけ、ネクサスにダメージを与えるが……ネクサスは右腕の「アームドネクサス」の刃を輝かせてペドレオンの触手を切り裂き、続けざまに拳をペドレオンの胸部に叩き込んでいく。

追撃とばかりにネクサスは拳をペドレオンの顔面に叩き込もうとしたが……ペドレオンは強力な衝撃波を放ってネクサスを吹き飛ばしてしまふ。

吹き飛ばされたネクサスは地面を転がりつつも体制をどうにか立て直して立ち上が

るがペドレオンは飛行形態「フリーゲン」となってネクサスに向かって空中から体当たりを喰らわせて突き飛ばす。

『ヘアツ!?!』

突き飛ばされたネクサスは地面に倒れこみ、ペドレオンはグロースへと戻って残った左腕の触手でネクサスの首を拘束し電撃を流し込む。

『グオオ……!?!』

もう一度アームドネクサスで切り裂いてやろうと思ったネクサスだったがペドレオンはそれよりも前に拘束を解いて衝撃波を放ちネクサスを吹き飛ばすとすぐさまフリーゲンとなつて空中を吹き飛ばされているネクサスに向かって素早く体当たりし、ネクサスは地面へと背中から激突する。

『ジュア!?!』

そしてペドレオンは再びグロースへと戻り、ネクサスを嘲笑うかのように鳴き声をあげる。

『ハア……ハア……』

息を切らし、膝を突くネクサス……しかしネクサスは自分を心配そうに見守る暁達の姿を見て再び立ち上がる。

『シユア!!』

気合を入れ直したネクサスはペドレオンに向かって駆け出し、ペドレオンは左腕の触手をネクサスに伸ばすがネクサスはその触手を避けて掴みあげるとそのままフルスイングを繰り出してペドレオンを投げ飛ばす。

「キュエエエ!?!」

倒れこむペドレオンだが、ペドレオンはまたすぐに立ち上がる……だが立ち上がった直後、ネクサスの強烈な跳び蹴りが頭部に直撃し、ペドレオンは火花を散らしてダメージを受ける。

『へアッ!!』

ペドレオンは触手を振るってネクサスを攻撃するがネクサスはアームドネクサスで振るってきた触手を切り裂き、両手にエネルギーを溜めた後、両腕を十字に組んで放つ光線「クロスレイ・シュトローム」を発射。

『ハアアアア……デヤア!!』

クロスレイ・シュトロームはペドレオンに直撃し、ペドレオンは火花を散らして倒れ、爆発しネクサスはペドレオンは撃破したのだった。

『キュエエエ……!?!』

ペドレオンを撃破し、ネクサスは暁達の方を見るとネクサスの勝利に喜んでくれる彼女たちの姿が目に入り、ネクサスはほっと安堵したのだが……その直後、辺り一帯が光

へと包まれ……ネクサスは何が起こったのか分からず困惑していると……。

*

「響いいいいいいいい!!!」

「うわあ?!」

暁に響が叩き起こされるのだった。

気が付けば自分があるのは自分たち第六駆逐隊が使ってる鎮守府の部屋の1つ。

暁に叩き起こされた響は暁や、その後ろにいる雷や電の姿を見てキョトンとした表情を浮かべ……先程までのは夢だったのかと思ひ、安堵のため息を彼女は吐いた。

「なんだ、またあの夢か……」

「えっ？」

「いや、なんでもないよ姉さん。それよりどうしたんだい？」

それを聞いて暁はムスツとした表情を浮かべており、どうにもなにか起こっている様子を見せており、響はなにか暁を怒らせてしまうことをしてしまつたのだろうかと不安になり「どうして怒ってるの？」と恐る恐る聞くと……。

「もおー！ 遠征帰りの報告書出さないといけないでしょ！ なのに響つたら途中でぐっすり寝ちやうんだもん、中々起きなくて大変だつたんだからね！」

「よく言うわね、自分も半分寝てた癖に」

ニシシつと笑いながら暁にそう言う雷、それを言われて暁は「あ、暁は別に眠くなんてならないんだからね！」と反論したが雷には「はいはい」と適当にあしらわれてしまつた。

「響お姉ちゃんがお仕事中に居眠りとは珍しいのです、しかもあんなにぐっすり眠つてなんて何か良い夢でも見てたのですか？」

電が不思議そうに首を傾げて響に問いかけると響は先ほどの暁や雷、電がペドレオン

に捕食されそうになり泣き叫ぶ彼女たちの姿を思い出し、響は帽子で顔を隠すように「いや」と電に答えるのだった。

「どちらかと言えば……悪夢だよ」

それから報告書を終わらせて提督である夜空に提出した後、既に外はもう真夜中となっていたため暁たちはもうさっさと寝てしまおうと布団を敷くのだが……響はなんでも「この後臯月と副司令官と約束があるから」と言つて暁たちは不思議そうに思いつつも一同は「行つてらっしゃい」と出て行く彼女を見送るのだった。

そして夜の薄暗い食堂で……そこでは奈々と臯月がそれぞれランタンを持って響を丁度待つており、同じくランタンを持った響は2人に「お待たせ」と言つて3人はそれぞれ食堂の席に座るのだった。

ちなみに響が持つてるランタンはどう見ても「グリーンラ○タン」が持つてるランタンだったりする。

「ねーねー副司令!! ちゃんと持つて来たんだよね!」

「ええ、問題ありませんよ、ほら!」

そう言つて取り出したのは……1冊のアルバムであり、奈々はテーブルの上に置いてそれを開くとそこには第六駆逐隊が4人で気持ち良さそうに昼寝をしている姿やホラー映画を見て如月に抱きついてる睦月や文月、ラブ○イブの僕ら○今の中でのコスプ

レしてそれを発見されて顔を真っ赤にして菊月の姿などが映っている写真だった。

「はあ……もうみんな可愛すぎですよ!! 頬を撫でられて喜んでくれている夕立ちちゃんや提督に頭撫でられて嬉しそうにしてる時雨ちゃん、ホログラム相手に殺る気満々でゾクツと来ちやっただけどそれはそれで良い荒潮ちゃん!! ああもう、みんな可愛すぎて可愛すぎて死にそうです!! ふへへへへ……!」

「最後の笑いが凄く変態っぽいね副司令、憲兵さんこつちです」

「もおー!! 僕が言ったのと全然違うじゃんかー!! っていうかこれ何時撮ったの!? 僕が映ってる写真あるけどこんなの知らないよ!」

そんな皐月に対し奈々はサムズアップして「無論盗撮です」とキリつとした表情で言い放ち、皐月は「鎮守府の人間がなに盗撮なんてしてんの!?!」とツツコミを入れるが奈々は特に気にした様子もなく……。

「いや気にしようよ!?!」

「フフ、まあ、冗談はここまでにして……」

「冗談じゃないよね!! だって明らかに撮られた覚えのない写真あるもん!! 流石に入浴中とか着替え中とかないけどさ!」

「そりゃ別に私お色気シーンなんて興味ありませんもん、恥ずかしがる顔とかみんな可愛いので好きですよ!」

奈々の言葉を聞き、皐月と響は互いに顔を見合わせた後……奈々の顔を見つめると二人同時に「えっ？」と首を不思議そうに傾げた。

「てつきり私たちは奈々さんは同性愛者の変態かと思つてたよ。いや、同性愛者が変態という意味ではなく奈々さんが女の子に対して見境なしという意味で」

「ふむ、響ちゃんも皐月ちゃんも一つ勘違いしてるようなので一つ教えますが私は同じ女性を『絶対』に恋愛対象とかにしませんから。可愛い娘を愛するのは……私の趣味です!!」

すると今度は「ドヤア」とした顔でなぜか誇らしげに言い放つ奈々だが、響も皐月もあんまり興味無さそうだった。

「それよりも『アレ』持つて来てないの副司令官!!」

「あははは、大丈夫ですよ、今までののはほんの冗談……ちゃんと持つて来てますよ『ウオツカ』」

奈々はどこからか取り出したウオツカの瓶をテーブルの上に置き、皐月と響は目を輝かせて「おおー!」という感心の声をあげた。

「ハラシヨー!」

「全く、提督も菊月ちゃんもこの辺厳しいんですから。艦娘は駆逐艦でもお酒飲めるんですから飲ませれば良いのに」

「だよね、2人とも『見た目がアウトだから』っていう理由で飲んじやダメだってちよつと厳し過ぎるよね」

響が持ってきたグラス3つにウオツカを注ぐ奈々、3人はそれぞれグラスを持つと「かんぱーい！」と言つてそれぞれウオツカを飲み始める。

「しかし、よく考えたらあれだね、奈々さんがこつそり撮った写真、何気に思い出のアルバムつて感じがして良いかもしれないね」

「あー、確かにね。 あつ、この時雨のやつとかどんな時の写真なの？」

皐月が奈々の持っていたアルバムの写真を1つを指差し、奈々がそれを覗き込むとそれを見て彼女は見て「ああ」と少しニヤついた笑みを浮かべた。

その写真というのが時雨が夜空が使っている提督の帽子を被っている姿であり、奈々が言うにはこの時、時雨はキョロキョロと辺りに人がいないかを確認した後、こつそり提督の帽子を被っていたらしい。

「それで執務室にある鏡の前に立って『えへへへ……提督と同じだ』と凄く嬉しそうな顔していましたね。 これはクソ可愛いですわ」

「それは確かに可愛い」

「それなのにあの2人がまだケツコンカツコカリすらしなのか謎だね」

皐月はウオツカを飲みながらあれだけ仲が良いのにも関わらず時雨と夜空が未だに

もどかしい関係が続くことに不満を口にし、すると奈々が何かを思い出したかのような表情を浮かべると一つの小さなケースを取り出す。

それを見た皐月が「なにそれ？」と問いかけると奈々は少し困ったような表情を浮かべつつそのケースを開くとそこには「ケツコンカツコカリ」するための指輪が入っていた。

「そう言えば、私にもこれ支給されたんですよねえ……。ぶっちゃけ女の子が女の子にカツコカリとは言えケツコン指輪を渡すのは私はちよつと……」

「割と違和感ないんだからしちやえばいいじゃん、菊月なんかどう？ 最近一緒にいることが多いし」

「一緒にいるって言うより菊月に副司令が追いかけてるだけだよ」

と皐月はケツコン相手に菊月を進めてくるが奈々はやはり同じ女性に指輪を渡すのは抵抗があるらしく、夜空にでもあげようかなと思つたその時だった。

「まあ、女は追うより追われる方が好きと言うしな。今日もそういうことなんだろう？ ふ・く・し・れ・い？」

いつの間にか腕組みをして額に青筋を浮かべた菊月が滅茶苦茶良い笑顔で立っており、菊月の存在に気づいた奈々と皐月と響は大量の冷や汗を流し始める。

「あ、あははは……やあ、菊月。一緒に飲む……？」

「お前達……全員表に出ろおおおおおおお!!!」

「に、逃げろおおおおお!!!」

臯月と奈々が同時に叫ぶと3人は一斉に逃げ始め、「あつ、コラ!!」と菊月も同時に追いかける。

ちなみに響はちやつかりウオツカを瓶ごと持つて走っており、しかもそのまま瓶ごとグビグビ飲んでいたりしたが。

「ちよつと何飲んでんの響?!? 僕らの分残しておいてよ!?!」

「というよりも走りながら飲むのは危ないですよ響ちゃん!?!」

その後、結局3人とも菊月にとつ捕まった後、頭を殴られて3人はタンコブを作り、翌朝には廊下で正座させられている3人の姿があつたとか……。

*

「でっ？ なにこれ？」

それから数時間後のこと、街で下水道が詰まり水が溢れ出てしまっており、その原因というのが……「大ダコ怪獣 タガール」が下水道に詰まってしまったからというものだったのだ。

それらの通報を鎮守府が受け、第六駆逐隊と時雨、荒潮、夜空、奈々が現場に急行し、夜空は呆れたように下水道に詰まったタガールを見つめていた。

「どうやらこのタガール、本来のタガールよりも小型らしく体長は役15メートルほどですね」

「いや、そういうこと聞いてるんじゃないかってなんでこいつ下水道なんか詰まったんだよっ。」

するとそこに暁は「私、知ってるんだからね！」と胸を張ってビシッとタガールを指差すと……暁は自慢げにタガールが下水道に詰まった理由を言い放った。

「タコって狭い所入るの好きだからよ!!」

「実際は海辺に出現したザニガという怪獣に投げ飛ばされて偶然下水道にすっぽり嵌っちゃったらしいわ司令官」

「……」

暁がそう言い放った直後に雷が暁に呆れた視線を向けつつ夜空にタガールが本当に下水道にハマった理由を説明し、また電はなにかタガールの様子がおかしい事に気づき、夜空の服の袖をクイクイと引つ張る。

「どうした電?」

「あの、気のせいでしょうか……タガールさんなんだか苦しそうに見えるのですが……」
そう言われて夜空はタガールの表情を伺うと確かにタガールは「クオオ……」とどこか弱弱しく苦しそうに鳴き声をあげており、それに気づいた夜空はこれは早くタガールを出してやらないといけないかもしれないと思い、全員でタガールの足を引つ張るよう指示し、タガールを下水道から出そうとみんなで必死に引つ張る。

「それにこのままタガールが嵌ったままだと下水道の水が詰まれば大洪水が起きる可能性があるし、早くなんとかしないとね!」

「ああ、時雨の言う通り!!」

しかしみんなで幾ら必死に引つ張ろうともビクともせず、むしろ逆にこちらの体力が

削れるばかりだった。

その為夜空は何かしらの理由を付けてここからいなくなり、エックスにユナイトしてタガールを引っ張りだそうかとも考えたが……その時響が何かを閃いたような表情を浮かべる。

「こうなったら奥の手だ！」

「奥の手……?」

それから数分後……響が呼んだと思われる鉢巻を頭に巻いた中年の男性が「フッフッフ……」と笑みを浮かべながら左手の親指を立てタガールの前に現れたのだ。

「俺に獲れねえタコはねえ！」

「誰だよ!!」

「タコ獲り名人のステイプさんだよ」

「だから誰だよ!!」

夜空の疑問に響が紹介する形で説明し、それに暁が「なんでそんな人呼んだの!?!」とツッコミを入れ、そんな暁に響きは「タコ獲り名人なら下水道に嵌ったタコも取れるかと思つて」と答える。

「フッフッフ、こいつあ食いがいがありそうなタコだなあ……」

「おい響!!? この人タガール食べようとしてんだけど!?!」

そしてステイブはどこから取り出したのか巨大な鉄板焼きと巨大な串を取り出し、ステイブは今にもタガールに文字通り食い掛かりそうな勢いだった。

「これで焼いて〜！ これまで返してえ〜!!」

「焼くな返すな!! みんなあの人止めろおおおお!!」

夜空の掛け声で一同は必死にステイブを押しえつけ、ステイブは「ええい離せえ!!」と暴れまわり、夜空が「今日はキャンセルです!!」と必死に訴えるがステイブは「狙った獲物は逃がさねえつてのがハンターだ!!」と言つて一向に聞き入れようとはしなかった。

「えい♪」

「ぐほお!!?」

が、一歩前に出てきた荒潮が拳をステイブの腹部に叩き込み無理やり気絶させ、荒潮は頬に右手を当てて「あらあら〜」と呑気そうに笑みを浮かべた。

「あんまりおいたが過ぎると『めッ!』よ〜」

「……怖……」

「今の荒潮ちゃんの『めッ!』が可愛い……。 えへへへへへ」

そんな荒潮にそれぞれの感想を述べる雷と奈々だったが……その時、いつの間にかここから離れてユナイトし、下水道の中のサイズに合わせた「ウルトラマンエックス」へ

と変身した夜空が現れ、エックスは奈々の姿を見ると奈々はエックスが何を言いたいのかを理解し、奈々は一同を下水道から一旦外に出るように指示をして全員を外に出す。

『よーっし、少し我慢してくれよタガール!』

エックスはタガールの頭と足一本を掴むとそのまま力いっぱい引つ張り、徐々にだがタガールが確実に引つ張り出せていた。

「んっ……? あれ? ちよつと待てエックス、なんか酸っぱい匂いが……」

『酸っぱい匂い……? 言われてみれば確かに……んっ?』

するとエックスが足元を見るとそこには巨大な瓶に入った酢をジャバジャバとかけてるステイブの姿があり、エックスと夜空は「なにしてるのこの人!」と同時に驚きの声をあげた。

「へへへ、酢ダコも悪かねえな……」

「あの人まだ食べる気だったのかよ!!」

未だにタガールを食べる気満々のステイブだったが、タガールが足の一本をステイブの前に出すとタガールはデコピンを放つように足を振るってステイブを弾き飛ばし、弾き飛ばされたステイブはそのまま海へと「ドボン」つと落ちたのだった。

「あれ死んで……ないよな?」

『私が見た限りでは……手加減していたから恐らく……』

それから数分後、エックスは無事タガールを下水道から引つ張り出すことに成功し、海へと戻ることができたタガールは器用にもエックスに足を振ってお礼を言うように海へと返って行くのだった。

そしてユナイトを解除した夜空はみんなと合流し、「いつの間に消えてたの？」とみんなから質問されたがその辺は奈々が上手くフォローを入れてくれたためになんとか誤魔化すことに成功した。

ただ……時雨から疑いの視線を向けられていたが。

「よーっし、じゃあ折角出しタコ焼きでも買って帰るか！」

「と夜空が言い出したが無論他のメンバーからの意見は当然『タコはもう良い!!』というものだった。

それに対し夜空も苦笑いしつつ「だよな」と言ってみんなで鎮守府に帰ろうとしたその時のことである、一同が持つジオバイザーに怪獣や宇宙人の出現を知らせるアラームが鳴り響いたのは……。

「おいおい、またかよー！」

「この近くの……建物の地下駐車場だね！ みんな行くよー！」

時雨の掛け声に全員が頷くが……「できればお風呂入りたかった……」と暁だけが不満を漏らしていたりしたが……。

「姉さん我慢しなよ、それにあんまり下水道にいたからって匂わないよ?」

「勿論任務を放棄する気はさらさらないけど……レディーとしては気になるの!」

「何時まで話してんだ、行くぞ! それと奈々! 念のため一般人をその駐車場に近付けないように警察に連絡!」

夜空の呼びかけで一同は反応のあつた駐車場へと向かい、夜空は自分、時雨、奈々のチームを1階と雷、電、荒潮のチームを2階、そして暁と響のチームを地下1階にそれぞれ分かれて反応のある地下1階、1階、2階を探索するように指示を出し、一同はそれぞれを持ち場へと向かう。

「この反応……以前出現したバグバズンやガルベロスの反応に酷似していますね」

「つてことはスペースビーストか……」

夜空達のチームは1階の駐車場を搜索しており、奈々がジオデバイザーが受信した反応を確認するとそれがスペースビーストの物であることが判明し、相手がスペースビーストだと聞いた時雨は少し嫌そうな表情を浮かべていた。

「大丈夫か時雨? あいつ等には酷い目に合わされたもんな、無理するな」

「うん、大丈夫だよ提督。むしろあの時仕返しをしてやるつもりだよ!」

時雨の答えに夜空は笑みを浮かべて「その意気だ!」と軽く彼女の腕を叩き、その時奈々が等身大くらいのカエルのようなスペースビースト……「アンフィビアタイプビー

スト フログロス」が3体ほど出現し、フログロス達は外へと出ようとしていた。

「奴等を外へと出すな！ スペースビーストは容赦しなくていい！ 掃討しろ!!」

「了解!!」

戦闘BGM「ナイトレイダー —Attack—」

艦装を展開し、主砲を構えた時雨とジオブラスターを構えた奈々と夜空はフログロスの目の前へと現れ、夜空と奈々はジオブラスターから光弾を発射し、光弾は1体のフログロスに集中的に浴びせられそのフログロスは悲鳴をあげながら破裂するように爆発した。

すると残ったフログロス2体が口から火球を吐き出そうとするがそれよりも早く時雨の放った主砲による砲弾がフログロス2体の顔面に直撃し、時雨は主砲を逆手に持つとそのまま駆け出してフログロスの1体を殴りつけ……そのまま近距離から砲弾を発射してフログロスは爆発し消滅した。

「この前のお返しだよ……!!」

「グルマン博士から貰ったこれ、試すか!」

すると夜空がグルマンから貰ったというウルトラマンに酷似したアイテムを取り出し、それをジオブラスターに装着し、ジオブラスターを「ウルトラライザー・モード」へと合体させ……ウルトラマンの力をチャージして放つ光線をウルトラライザーからフロ

グロスに向かって発射。

『ウルトラマンの力を、チャージします』

「ウルトラライザー!! 発射あ!!」

それと同時にフログロスも火球を放つが火球はウルトラライザーによる光線にあつきりかき消され、光線はフログロスに直撃しフログロスは火花を散らして爆発した。

「おつとつと……流石グルマン博士だな、凄い威力だ……」

一方で電、雷、荒潮もフログロスと交戦しており、雷と荒潮がフログロス達を一つの場所に集め、そこを狙って電がサイバーエレキングのカードをジオバイザーに装填し、主砲から放つ電撃光線「エレキング電撃破」で纏めて撃破。

それと同時に暁と響も順調にフログロスを撃破しており、暁は「これなら余裕で倒せそうね!」と少しばかり余裕な態度を見せ始めた時だった。

身長10メートルほどのフログロスが響と暁の前に2体現れ、先ほどまでいたフログロスよりも巨大な敵に暁は目を丸くして啞然とした。

「ほら、姉さん余計なこと言うから……」

「なっ、私のせいだって言うの!?!」

兎に角、響と暁は主砲をフログロスに撃ちまくるが……先ほどまでのフログロス達とは違いこの巨大なフログロス2体は幾ら撃つても一向に怯む様子すら見せず、響はサイ

バーカードを使おうとしたがそれを阻止するかのようにはフログロスの1体が火球を響に向かって放ってきたのだ。

「響!」

「姉さん!」

だが、暁が響を突き飛ばし、直撃こそしなかったものの火球は暁の足元に爆発し彼女は軽く吹き飛ばされて柱に背中を強く打ち付けてしまう。

「きゃあ!」

「姉さん!!」

背中を強く打ち付けた暁は気を失ってしまい、響は暁の元へと駆け出そうとするがフログロスの1体が響の前に立ちはだかり、さらにもう1体のフログロスが口から出した触手を使い、暁を拘束して自身の口の中へと運ぼうとしていたのだ。

響はサイバーカードを今度こそ使おうとしたが……いつの間にかジオバイザーが無くなっており、気づけば響のジオバイザーは自分の前に立ちはだかるフログロスの後ろの方へと落ちていることに気が付き、響は急いで取りに行こうとしたがフログロスが火球を吐いて響を吹き飛ばしてしまう。

「うわあ!」

倒れこむ響だが、なんとか立ち上がり主砲を構え……自分の前に立つフログロスを押

し退かそうと砲弾を撃ち込むがフログロスはビクともしない。

こうしている間にも暁がもう1体のフログロスに捕食されそうになっているというのに……。

(私は……また……、大切なものを失ってしまうのか……。嫌だ……そんなの……！)

響はフログロスを睨み付け、大声で叫ぶ。

「絶対嫌だああああああああああ!!!」

その瞬間……。

『諦めるな……』

響の目の前に短剣のようなもの……「エボルトラスター」が出現すると響は迷わずそれを掴み取り……鞘を引き抜いた。

「うおおおおお!!!」

その瞬間、響は眩い光へと包まれ……「銀色の光」がフログロスの真横を通りすぎるとその光はもう1体のフログロスの元へと向かい、触手で拘束した暁を奪い返し彼女を地面へと降ろした。

そしてその光が消えると……その光の中から現れたのは響が夢の中でみたウルトラマン……、「ウルトラマンネクサス・アンフアンス」がそこに現れたのだ。

『シエア!!』

「グボオ!!」

フログロスの2体はネクサスを見るや否やすぐさま戦闘態勢に入り、火球をネクサスに撃ち込むがネクサスはそれを両腕のアームドネクサスで弾いて切り裂き、ネクサスはフログロス2体に向かって駆け出して行く。

そこに丁度夜空も現れ、夜空はネクサスの姿を見て驚きの表情を見せる。

「あのウルトラマンは……?」

『夜空! それより私達も!』

「ああ、ユナイトだ!」

『よし行くぞ!!』

エックスの言葉に、夜空は静かに頷くエクステバイザーをXモードに変形させエックスのスパークドールズが出現し、それをリードさせる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

そして夜空はエクステバイザーを高く掲げる。

「エックス—————!!!」

『イイイイ!! シャア—————!!!』

『エックス、ユナイトです』

エックスはネクサスに加勢する形で2体目のフログロスに向かってタックルを喰ら

わけて突き飛ばし、フログロスのX字を描くようにチョップを繰り出し、チョップされた跡に残った光の跡から追加攻撃でX字の衝撃波を叩き込む「Xクロスチョップ」を炸裂させる。

『Xクロスチョップ!!』

「グルウ!!」

挿入BGM「ネクサス―ENCOUNTER―ウルトラマンX Ver.」

その時、暁がうつすらとだが彼女は目を覚まし……起き上がると目の前でエックスと見たこともない自分の知らないウルトラマンがフログロスと戦っていることに気付き、暁は目を丸くして驚きを隠せなかった。

「ふ、ふえええ!? い、一体なにがどうなってるの……う?」

するとフログロスの一体が目を覚ました暁に気づき、彼女を人質にでもしようと思つたのかフログロスは口から触手を伸ばして暁を拘束しようとするがその触手をネクサスが全て掴みあげて引っこ抜くとネクサスはフログロスの腹部に蹴りを叩き込む。

『デヤア!!』

「あのウルトラマン……なんだろう。初めて見るウルトラマンなのに、何時も……一緒にいるような……」

暁はネクサスを見て何かを感じたのか、彼女はジッとネクサスとフログロスの戦いを

見つめており……するとネクサスもその視線に気づいたのかネクサスはフログロスを殴り飛ばした後、暁の方へと顔を向ける。

「……ひび……き……？」

直感からではあったがネクサスが響であることを言い当てた暁、そんな暁に対しネクサスはゆっくりと頷くと……暁は笑みを浮かべてネクサスに頷き返し、ネクサスは再びフログロスへと向かって行った。

『へアッ!!』

*

エックスとネクサスはフログロスを無事撃破することに成功した後、一同は鎮守府へと戻ったのだが……響はみんなに隠すことなく自分がウルトラマンへと変身したことを食堂にみんなを集めて打ち明け、当然響は鎮守府中から注目の的となっていた。

「響すごい！　ねえねえ！　どうやって変身するの!?!」

皐月が興味津々な様子で響に尋ねると響は戸惑いつつもエボルトラスターを取り出し、鞘を引き抜いて掲げて変身するということを説明すると皐月は「ちよつと貸して！」と言って響の手から素早くエボルトラスターを取ると鞘を引き抜こうとする。

「あ、あれ？　引き抜けないよ響!?!」

「それは多分……私にしか扱えない、からだ……思う」

響は皐月からエボルトラスターを返して貰うと今度はグルマンが興味深そうに響の持つエボルトラスターを見つめた。

『確かに、ウルトラマンに変身する地球人はウルトラマンに選ばれた者でしか変身することができないからな』

「そうなのですか？　ということとはまさかエックスも……」

グルマンのその話を聞き、ならばエックスももしかしたら地球人の誰かが変身して自分たちと一緒に戦ってくれてるのではないかと朝潮は予想し、それを聞いた夜空は内心

ギクリとしたがなんとかポーカーフェイスを作りだしてみんなが察することがないようにするのだが……夜空は気づかなかかったが時雨から疑いにも似た視線を向けられていた。

『まあ、ウルトラマンが地球人に擬態する場合もあるからそれはなんとも言えんがな』
「でも良かったじゃないか響ちゃん！ これで君もヒーローだ！ 君が好きなものと同じだね！」

響が好きなもの……それは「アメコミヒーロー」であるのだが……どうも響はあまり嬉しそうではなく、どちらかと言うとなにか……「不安」がっているような、そんな表情を浮かべていたのだ。

「響……？ どうしたの？」

そんな響の様子に気づいてか心配した暁が響に声をかけるのだが……響は「なんでもないよ、少し風に当たってくる」と言つて彼女は食堂から出て行き、雷はそんな響を見て不思議そうに首を傾げた。

「響姉のことだから……『やった！ スパイオーマンやス◯パーマンみたいなヒーローになれた!! ハラショー!』とか言いそうだと思つただけど……」

「いえ、むしろ響ちゃんみたいな娘だからこそ……突然力を持った時、戸惑うのかもしれない」

奈々が雷に対してそう言った後、彼女はチラリと夜空に視線を送ると夜空はその視線に気づき、彼は「響が少し心配だ」と言つて響の後を追いかけようとしますが、暁が「私も行くわ!」と声をあげたため、夜空は連れて行くべきか少し悩んだが……。

「私も響が心配なの……」

「だつたらあたしも行くわ!」

「私も行くのです!」

暁に続けて雷と電も声をあげ、彼女たちの真剣な眼差しを受けて夜空は「分かった」と頷き、みんなで響の後を追いかけるのだった。

そしてその外へと出て行つた響はというと……人気のない場所で右手にエボルトラスターを握りしめながらそれをジツと見つめており、どこか思いつめたような表情を浮かべていた。

「どうして……君は私を選んだんだい?」

「響」

その時、後ろから夜空が響へと声をかけ、声をかけられた響は夜空の方へと振り返り、そこには勿論、暁や雷に電もおり、夜空は響に「どうしたんだ? みんなお前の様子がおかしいって心配してたぞ」と問いかけると響は「ごめん、余計な心配させちゃつたみたいで」と苦笑しながら心配をかけたことをみんなに謝罪した。

「響、なにか悩んでるのなら相談してよ、私達姉妹なんだから」

「そうよもつとあたし達を頼ってくれて良いのよ!」

暁と雷がそれぞれ響にその声をかけ、響は笑みを浮かべて「ありがと」と言った後、自分がなにごに悩んでいるのか打ち明けるべきか少し悩んだが……やはりみんなに余計な心配をさせたくなかったため、自分がなにごに悩んでいるのか、その理由を暁達に響は話し始めた。

「大いなる力には……大いなる責任が伴う」

「……えっ?」

「ウルトラマンの力はとても強大だ。実際に変身してみても私はそれがよく分かった。だけど、だからこそ……私は不安なんだ。私はその伴った責任が果たせるのか、それが分からぬ。どれだけ強大な力を持つてるからと言っても……必ず全てを守れる訳じゃない。もしこれだけの力を持っていて誰かを、大切な人を守ることが出来なかったら……そう考えると怖くてたまらないんだ」

響はそう胸に秘めた不安を暁達に打ち明け……暁達は不安そうな顔を見せる響を心配そうに見つめていたが……すると暁が一步前へと出て響の頭にポンと手を乗せて彼女の頭を撫で始め、それに響は驚いたような表情を浮かべる。

「もう! デマーガの時のあの自信はどこ行つたの響! あなたは一人で戦ってるん

じゃないでしょ！ 私達がいる、不安なら……私達を頼れば良い！ 響が他のみんなを守るって言うなら私達があなたを守る。それが私達でしょ？」

笑顔を見せながら暁は響にそう言い放つとそれに続いて雷と電も頷く。

「そうそう、なにも響姉一人が抱え込むことないわ！」

「そうなのです、特に私達は姉妹なのですから」

「……みんな……スパシーバ」

響は照れ臭そうに帽子で自分の表情を隠すと暁は「他のみんなも心配してたわ」と言い、それを聞いて響は「それじゃみんなの元に戻ろう」と言いだし、一同はみんなの食堂へと戻って行き、夜空は響が元気を取り戻してくれたことに安心し、彼女たちが去って行くのを見送るのだった。

『君は……どうなんだ？ 夜空？』

「んっ？」

『君を戦いに駆り立てたのは私だ。 私という力を持った君は響と同じように不安など感じていないのか？』

「確かに……エックスっていう力を持ったこと、響と同じようにもし大切な人を守れなかったらって思うと怖いかもしれない。 だけど、お前のおかげで怪獣との共存って夢と向き合えてるし……彼女たちと一緒に戦うことができてる。 ずっと……あいつ等

と一緒に戦いたい、守りたいって思ってたから」

夜空は「だからエックスにその不安以上に、戦場で彼女たちの傍にいられることを感謝してる」とエックスにお礼を述べるが……エックスは「だが彼女たちは君が私となつて一緒に戦つてくれていることを知らないんだぞ」と言うが……夜空にとつてそんなことはどうでも良かった。

「俺はあいつ等に称賛されたくて戦つてるじゃない。あいつ等を守りたいから戦つてるんだ。だから俺がエックスになつて戦つてることをあいつ等が知らなくても良いんだ……」

『そうか……』

*

その翌日、「石川」と名乗る本部からの科学者が夜空の鎮守府に船で何人かの兵士を引き連れて訪れており、石川は夜空の執務室に行くとなんとその石川という人物は特に何の説明も無しに「響を引き渡せ」と言って来たのだ。

「響に何の用が？」

「惚けても無駄だ。おい」

石川は部下の兵士にタブレットのようなものを持って来させてある動画を再生させると……そこには響がエボルトラスターを引き抜き、ネクサスへと変身する姿が映っており、夜空はそれを見て目を見開いた。

「これは昨日、君達がフログロスを撃破した場所……駐車場にあった監視カメラが捉え

た映像だ」

尚、夜空がエックスに変身するところは幸い、死角となる部分でエックスに変身したところは映ってはいなかった。

「響をどうするつもりですか？」

「そんなこと決まっているだろ、研究に使うのだよ」

「研究……？」

石川曰く、「ウルトラマンの力はとても強大だ。しかもそれが艦娘の力となった、本部に連れて行き詳しく研究をした後、ウルトラマンの力を自分たち人間の新たな戦力とする」のだと語り、夜空は「バカバカしい」と言つて当然断わろうとしたのだが……。「これは本部からの命令だ。もしも逆らえば君は反逆罪として罪に問われ、君のところに所属している艦娘を全て解体処分とする」

「なっ……！！」

「相変わらず……やり口が汚いねえ……」

そんな時、執務室の扉の前に腕を組んだりヨーガとグルマンが現れ、石川はリョーガの顔を見るや否や「チツ」と忌々しそうに舌打ちした。

『お前なんぞに響を引き渡したらロクでもないことになりかねん』

「黙れ！ 貴様等こそ、最高の研究材料がすぐ傍にあると言うのに……自分たちの研究

に使うどころか庇おうとするなど……科学者としてどうかしている!」

「私達的には……君の方がよっぽどどうかしていると思うけどねぇ」

しかし石川はリョーガとグルマンの話を一切聞こうとせず、夜空に早く響を引き渡すように言うが……夜空は当然、響を研究材料なんてものに使わせるつもりは一切無い……だが、自分が犠牲になるのならまだしも艦娘達にまで被害が及ぶのはなんとしても食い止めたい。

どうすればいいのか夜空は必死に考え、そんな彼を心配そうに時雨が見つめる……。

「分かった、あなたについて行きます」

何時から話を聞いていたのか、なんと響が自ら名乗り出てきて石川について行くと言いだしたのだ。

「響?! 正気なの!？」

時雨が驚きの声をあげ、夜空も響を引き止めようとするが……。

「私のせいでみんなに迷惑をかける訳には行かない」

「だけど……!」

「選択は2つに1つだ……。私1人のせいで司令官が反逆者扱いされて……みんなが解体処分なんて絶対に嫌だ……だから……。姉さん達には心配かけないように司令官が上手く誤魔化しておいて?」

それを聞いて石川は「ニヤリ」と笑みを浮かべ、兵士に「本人の許可も得た、連れて行け」と命令すると兵士の1人が頷き、響をそのまま連れて行き、石川も自分が乗ってきた船に戻ろうとするが夜空に肩を掴まれる。

「響にもしものことがあつたら……俺はアンタを許さない」
「フン、どうぞご勝手に」

石川は夜空を鼻で笑い、そのまま自分の船へと戻り……、その後出発の時間となると夜空や時雨、響が乗った船が出て行くのをグルマンはただそれを……見送ることしかできなかつた。

一応みんなにも伝えようとは思つたのだが……もしもこの事を伝えてしまつたら誰かが感情の赴くままに行動してしまう者がいる可能性があるため、この事を夜空は敢えて伝えはしなかつた。

「つてあれ？ リョーガさんは？」

「そう言えば……」

『お、おいアレ!!』

グルマンが指差す方向を見ると……そこにはカエルの手みたいな物を両手に装着して船に張り付いているリョーガの姿があつた……。

「なにしてんだあの人!？」

「ドラ○もんの道具みたいなのつけてる!？」

夜空は慌ててジオデバイザーでリョーガに通信を行ってみると船に張り付いているリョーガは自分のジオデバイザーから通信が入ったのに気づき、片手でどうにかジオデバイザーの通信へと出る。

「なにしてんのアンタ!? なんでもそんなとこにいるの!？」

『はっはっは! 変人フリーダム舐めんなYO☆つてね?』

夜空は今すぐ戻って来いと言うが……リョーガは「無☆理」と夜空の方に凄いイイ笑顔を見ながら断わった。

『心配するな提督、響ちゃん是我的弟子だからねえ。 師匠として彼女のことはしっかりと守るよ。 じゃあ通信終わり!』

「あつ、ちよつと……切れた……」

「でも、今回ばかりはリョーガさんの自由気ままな性格が頼もしいね……」

『だな……』

だがこの時……この場にいる夜空達も……船に乗った者達も気づきはしなかった……。

雲の上から響の乗った船の方向をジッと見つめる死神のような姿をした「紫色の目」をした黒い巨人がいたことに。

その名は……「闇の巨人　ダークメフィストドライ」……。

第10話 『絶望——デイスペア——』

響が石川に連れて行かれて数時間後……一向にリョーガからの連絡はなく、夜空と時雨はグルマンの研究室で響は無事だろうか、リョーガは上手くやっているだろうかと心配していた。

「でも、リョーガさんなら強引に響を連れ戻せるかもしれないけどあの石川って人は上層部の命令だつて言つてたよね？ 強引に連れ戻すだけじゃなんの解決には……」

時雨の言う通り、幾らあの変人フリーダムでもそのくらいの重大さは分かっている筈、それに対して夜空は「きつと何か考えがあるんだろう」とリョーガが響を連れて戻ってくるのを信じ、待つことにするのだった。

「あの石川って奴には何かと黒い噂も耐えないからな。リョーガさんなら案外弱み握ってくれるかもしれない」

「でも上層部の命令って言つてたよ？ 石川一人押さえても……」

「まあ、上層部って言つても人は色々いるからな。今回石川にそんな命令を下して来たのもその『黒い噂』の関係者だろうな」

時雨は深刻そうな表情を浮かべながらにか自分たちにもできることはないのかと

思い悩んでいるとそこに「あのお、すいませーん」という声が聞こえ、研究室の扉の方を夜空と時雨が顔を向けるとそこには1人の少女……「夕張型1番艦 軽巡洋艦 夕張」がひよつこりと扉から顔を出していたのだ。

「あれ!?! お前……俺のところにいた夕張もしかして!?!」

「えっ!?! ホントに!?!」

「あつ、はい! お久しぶりです提督! 時雨ちゃん! あつ、今は前提督ですな私から見たら」

夜空の言う通りこの夕張という少女は夜空が以前勤めていた鎮守府に所属している艦娘の1人であり、夜空と時雨は久しぶりに夕張に会えたことを喜んだのだが……すぐに響のことを思い出してしまい暗い表情となつてしまい、そんな2人を見て首を傾げて夕張は「どうかしたの?」と尋ねると夜空と時雨は顔を見合わせる。

なにせまだ響が石川に連れて行かれたことを知っているのは夜空と時雨、グルマン、そしてリョーガと執務室にいた4人だけ、この事をみんなに言えば誰かが感情の赴くままに行動してしまう者がいるかもしれない、特に彼女の姉妹である暁、雷、電は。

そのためまだこの事はみんなには知らせておらず、一応響は任務だとはみんなに伝えて
いる。

「もしかして……響ちゃんのことですか?」

「えっ?! お前、なんでそのこと……!」

「先ほドリョーガって人から連絡があつたんですよ。ここの人ですよ。だから概ねの事情は理解しています。それで前提督にこのデータを渡すようにと」

「そう言いながら夕張はポケットから1つのUSBメモリを取り出しそれを夜空に渡すが……当然夜空は一体なんのデータが入ったUSBメモリなのか分からず「なんのデータが入ってるんだ?」と尋ねると夕張は口元で笑みを浮かべる。

「今回、石川に響ちゃんを拘束するよう命令を出した人物です」

「なに……!?!」

「どうやらどこかのデータにハッキングしてその人のデータを色々と調べて見てくれたみたいですよ。それと、私が来たここに来た理由はもう2つ程あります」

それを聞き夜空は「もう2つ?」と問いかけると夕張は頷き、するとそこに丁度グルマンが部屋に戻って来て夕張の姿を見るとグルマンは「おお、来たな夕張!」と嬉しそうに手を振って挨拶をする。

「はい、グルマン師匠!」

ちなみに響がりョーガの弟子なら夕張はグルマンの弟子だったりする。

それで夜空は一体どういうことかとグルマンと夕張に聞くとグルマン曰く「元々夕張は今日この鎮守府に来る予定であり、新しい艦娘アーマーを制作するつもりでそのデー

夕を作るために彼女を呼んだ」のだというのだ。

「ってことは、『夕張アーマー』を作るってこと？」

「なんか自分の名前つけられるのって恥ずかしいな……」

グルマンはその通りだと頷くが……響があんなことになってしまつてはグルマン自身今日はあまり乗り気な感じではなかった。

それを察してか夕張は「別の日にした方がいいかもね」と呟き、夜空は先ほど夕張から貰ったUSBメモリのことをグルマンに話すとグルマンは「なに!？」と声をあげてそれを受け取ると早速パソコンに差し込んでそのデータを入力するのだった。

*

一方その頃、響を乗せた船はというと……。

「別に逃げたりしないというのに……。 艦装も取りあげてこの扱いはないんじゃないかな？」

「念のためだ」

ある部屋で響は艦装とエボルトラスターを取りあげられ、さらには両手両足を縛られて拘束されており、全く身動きが取れない状態だった。

目の前には銃を持った兵士が2人、見張りとして立っており、響は恐らく部屋の外にも兵士が何名か待ち構えているだろうと予想する。

「それにしてもこうしているとアレだね。 なんか今から私薄い本的な展開になるんじゃないかとさつきから不安で仕方ないよ」

「まあ、石川博士の研究室にいたら案外そういう実験もあるかもよ？」

「成程、石川博士はロリコンなのか。 自分がそういうのしたいのか見たいのか分からないけど。 もしも近くに小学校があるなら今度会った時に誘拐しないように注意し

ないと。しかし、アレだね、私を研究つてもしかして目からビーム出したり手から刀を出したり嵐を操れるようにしてくれるのかな？」

不安を隠したいのかどうか分からないが、先ほどから響はこんな風にペラペラとお喋りを続け、流石にそれが鬱陶しくなったのか兵士の2人は顔を見合わせるとその内の1人がロープを持って来て響の口を塞ぐが……それでも響は「ふごふごふご」と言いながらも喋り続けようとしており、兵士の1人は頭を抱えて口元の拘束を止む無く外し「なんだ!」と怒鳴りあげる。

「あなた前歯の間になんか挟まってるよ? さっきからそれが気になつて気になつて……」

そう言われた兵士は近くにあつた鏡を見て確認するが、特に何か挟まっているようなものはなく、響はクスクスと笑みを浮かべる。

「冗談だよ! デ○ドプールの映画と今の状況似てたからちよつと言つてみただけ」

「このガキ……! 人をおちよくりやがって……!」

兵士は銃で響の顔を殴りつけ、彼女が口が切れて少しだけ血が出るがすぐにもう1人の兵士が響を殴った兵士を引き止め、「博士の大事な研究材料なんだ。手荒な真似はするな」と注意し、響を殴った兵士は「分かったよ」と言いながら響から離れるのだった。

「さて……そろそろ良いかな？」

「はっ？ なにが？」

「うーん、なんて言うか……いい加減私を解放しないと君達2人は痛い目に合うよ？」

「はっ？」

兵士2人は響の言っている意味が分からず、顔を見合わせて首を傾げ、次の瞬間大笑いする。

「はははは！ なに言ってるんだ！ そんな状態でお前が俺達を痛めつけられると？」

「仮に出来たとしてもこれは本部の命令だ！ もしもそんなことが出来たとして命令違反としてお前は処罰される！ あの鎮守府にいる奴等もだ！」

「そんな古典的な悪役みたいな台詞を良いんだよ、それで？ 私を解放するのかYESかNOで答えてくれるかい？」

響の質問に対し兵士は「YESな訳ないだろバカたれ」と言い放ち、響は「そうか」とだけ言う。「今から5つ数える。その間に銃を捨てて私を解放し、自分を椅子に縛りつければ見逃してあげよう」などと言いだしてきたのだ。

当然兵士2人は「はあ？」と首を傾げる。

「5、4、3、どしたあ?! 2！」

「なに言ってるんだこいつ訳分かんねえ」

「先ほども言ったが君達に逃げるチャンスをあげよう。痛い目に合いたくなければ。

後2秒! 4……どかん!」

響の言葉に兵士2人は「おお、怖い怖い」と呆れたような表情を浮かべながらそう言い、響は未だに「今度こそ本気で行くぞ」となどとまだそんなことを言っている。

「3、4……」

「黙れクソガキ! やつぱり口を……」

「54321……! アイア○マン3つて映画見た? これネタバレ」

響がそう言った次の瞬間、部屋の窓を突き破って響の腕に装着の1つが装着されるとそれを砲弾を撃って拘束具を破壊し続けて砲弾を兵士2人に撃ち込んだ。

ちなみにちゃんと実弾ではなく演習弾にしているので幸いあの兵士2人が死ぬことはないだろう、滅茶苦茶痛いのは間違いないが。

そのまま響は砲弾で完全に拘束具を上手く破壊して手足を自由にした後、続けて錨が飛んできて響をそれを掴み取ると騒ぎを聞きつけた兵士たちが部屋に入ってくるが響はすぐさま錨をブーメランのように投げつけて数人を吹き飛ばす。

「いやあ、こんなこともあろうかとマーク42みたいに艦装を改造して正解だったね」

そう言いながら響はすぐに残りの艦装も来るだろうと思っただが……一向に来ない。

「……あれ？ 残りは？」

「というのも響の艦装が置いてあった部屋の前にも何人かの見張りの兵士が立っており、先ほど最初に扉を突き破って艦装の2つが飛んで行った際に扉の前にいた2人の兵士を吹き飛ばし、兵士たちは一瞬何が起きたのか分からなかったが瞬時に他の兵士たちは扉を押さえつけて他の艦装が飛んで行かないように防いでいたのだ。

「……こんな！ ところまで！ 再現しなくて……いい!!」

一方で響は騒ぎを聞きつけた兵士たちの鬱銃弾を避けながら「アイア○マン3」と殆ど同じ状況であることに愚痴を零しながら演習弾で反撃を行っていた。

艦装が完全に装着された状態ならば深海凄艦と同様に通常兵器は死にかけてでもない限りは特殊な見えないシールドによって守られ、艦娘には通用しない。

しかし不完全な状態で装着された状態又は艦装が破損した場合は通常兵器でも最初こそ艦娘には攻撃は通用しないもののすぐにシールドの効力が切れてしまい通常兵器でも艦娘は傷つけることができる。

そのため響はなるべくシールドの効力を失わないように立ちまわりながら応戦しており、響は錨をブーメランのように投げてなるべく複数の敵を薙ぎ払いつつ、そのまま錨

で倒せない相手は演習弾で撃ち抜き、艦装を不完全に装備と言えどもやはり艦娘に普

通の人間が勝つのは難しかったらしくあつという間に兵士たちは響1人によってことごとく倒されていき、最後の1人は……。

「俺、本当はこんな仕事したくなかつたんだ！ あの石川って奴もなんか変だし」

そう言つて響に恐れをなし、銃を捨てて部屋から出て行くのだった。

「いい判断だ、悪くないよ」

それから響は部屋を出ると丁度残りの艦装が飛んできて彼女に装着され、背中の艦装の突起部分が「パカッ」と割れるとそこから鍋が飛び出して頭に被り、蓋を盾のようにして持つ。

「うん、やっぱり鍋を被ると落ち着く」

そう呟くと実はこっそりと耳につけていたインカムを響はつけており、彼女はそれを使つてある人物に連絡を取る。

「よくやったねドアダム。石川博士についての情報はどのくらい収集できたんだい？」

『久しぶりの出番で嬉しいでござーやす！ へい！ お母さん、ハッキングしてあらかたのデータは取りだせやした！ 睨んだ通り、黒ですぜ』

このように響が逃げ出しても妙に余裕だったのはあらかじめドアダムに指示して石川に係するデータなどをハッキングして、相手の弱みを握つたためである。

それから響はハッキングしたデータにはどんなものがあるのかをドアダムに説明を求め、ドアダムの話では『艦娘や捕らえた深海凄艦などを使って極秘に人体実験とも呼べる研究などしてやがりやしたぜ！』しかし、残念ながら既に彼女等もう過酷な実験のせいで……』とどこか暗そうな声で話し、響は「そうか」と彼女も悲しそうな表情を浮かべたのだった。

それはもちろん、同じ艦娘の仲間が苦しみながら死んでしまったというのものもある。

しかし響が悲しんでいるのはそれだけではない、自分の鎮守府の司令官でもある夜空、彼の理想は「深海凄艦や怪獣、宇宙人との共存」「艦娘達も深海凄艦達も戦わなくていい世界にしたい」というものもある。

彼が自分たちの鎮守府に着任し、その理想を聞いた時、その殆どの者は前提督であった光の行動もあつて「なにをバカなことを」と思ったものだ、響自身も少しだけそう思っていたのだ。

しかし共に過ごす内に夜空がどれだけ真剣で必死に自分たちや怪獣、深海凄艦などのことを考えていたのかを彼女達はやがて理解し、それを光も同じだったことを彼女達は思い出したのだ。

そもそも夜空曰くそうだったのは「光さんの受け売りも大きい」らしい。

そして響自身も今となっては問題を起こしてしまっただけとはいえ前司令官である光も、

今の司令官である夜空も信頼しているし、自分も2人が抱いた理想に共感する者の1人だ。

だからこそ、響は彼等の理想が遠のくような行いをする石川の行為が許せなかった。(さて、そろそろ脱出するかな。光さんとテツ○プールの字幕版見に行く約束してるし。吹き替え版はもう見たけど)

R指定の映画をその成りでどうやって見たんだと思うかもしれないが「私は艦娘だよ？ 実際は80歳以上だよ？ 合法ロリだよ？ なにか問題あるのかな？ あ、ロリババアって言った人は路地裏ね」とごり押しで見たらしい。

それよりも話を戻すが脱出するにしてもエボルトラスターがない。

置いて行く訳には行かないため、恐らくは石川が持っているのだろうと考え、彼の元に向かおうとするのだが……。

「お探し物はこれかな？」

後ろから声をかけられて響が振り返るとそこにはエボルトラスターをこれ見よがしに手に持ったリョーガの姿があったのだ。

*

数分前、船に乗り込むことに成功したりヨーガはなるべく兵士たちに見つからぬようにこつそりと隠れながら移動し、薄暗く人に見つかりにくそうな場所を発見するとすぐさまそこに身を隠してメガネのようなものを取り出し、それを装着。

そしてメガネにつけられた赤いボタンのようなものをカチつと押すと船の中がスキャンされ、船の中で誰がどこにいるかを把握し、それによつて響が現在絶賛大暴れ中であることを確認すると響が恐らく石川の弱みを握つたのだろうと判断した。

「それじゃ私はこの船のパソコンを使って石川に今回の命令を下した奴のデータでも調べようかな♪」

そう言いながらリョーガは再びこそそと移動しながらパソコンの置いてある部屋に辿り着き、あらかたのデータを集めた後、遠回りではあるがその方が絶対に邪魔されず自分の所属する鎮守府に渡せるように今日来る予定である夕張にこのデータを送るのだった。

しかし、幾らなんでもセキユリティ弱すぎないかと思うかもしれないが……リョーガや彼に技術力を習った響からすればあつさりと突破することなど容易なのである。

そもそも上層部のデータのセキユリティなどは一部リョーガも携わっていたので当然と言えば当然でもある。

それが終わった後、リョーガは見張りを潜り抜けて石川のいる部屋に辿り着き、部屋の前には兵士2人が見張りとして立っていたがリョーガの投げた小型爆弾で軽く吹き飛ばされ、リョーガは部屋の扉を蹴っ飛ばして石川のいる部屋に乱入したのだ。

当然、部屋の中にも兵士は3人ほどおり、石川を含めてその部屋にいた4人はいきなり部屋に乱入してきたリョーガに驚きを隠せないでいた。

「やあ、石川博士！ いやあ、はっはっは！ なんだかスパイ映画みたいで楽しかったよ！」

「貴様、どうやってこの船に入った!？」

「そんなことはどうでもいいじゃないか! 響ちゃんのエボルトラスター、君が持っているんだらう? 私に渡したまえ」

当然、石川はそれを拒み「ふざけるな! これは研究のための道具だ!」と怒鳴りあげるがリョーガは「はあ」と溜め息を吐いてやれやれといった様子で首を横に振る。

「艦娘も、ウルトラマンも研究のための道具だと本気で思っているのかい? 実に哀れな」

「哀れなのはどっちだ! これも全て世界を守るため、世のためだというのに艦娘もウルトラマンもそのための兵器に利用して何が悪い!」

「世界を守るため? 世のため? 艦娘もウルトラマンも命ある者だ。それを道具のように扱う君がなにを守れると言うんだい? どうやら君とは話すだけ無駄のようだ。」

さつさと響ちゃんの物を返せ」

リョーガを手を差し出してエボルトラスターを返すように要求するが石川はリョーガの睨み付けて「奴の手足を撃て」と兵士たちに命令し、兵士たちは銃を構えるが……。「おつとお? いいのかな? 私に手を出すと君の悪事が全て世間に晒されることになるよ? 君に命令を下した誰かさんもね?」

嫌らしい笑みを浮かべてそう宣言するリョーガ、要するに脅しである、もはやどっち

が悪物か分からない。

認めたくはないが石川自身、リヨーガが自分よりも優秀なことは理解している。

こんなこともあろうかと彼にハッキングなどされないように対策は取っていたのだがやはりリヨーガの態度からあつさりとセキュリティは突破されたことを石川は理解し、彼は悔しそうな表情を浮かべながらもリヨーガの要求通り、ポケットにしまつてあつたエボルトラスターを取り出し、それをリヨーガに投げ渡したのだった。

「毎度あり♪」

リヨーガはそれだけ言うと言響のいる場所に向かって走り去るのだった。

*

そして今、響はリョーガから返されたエボルトラスターを手に取り、彼女は笑みを浮かべて「ありがとう」と述べるのだった。

「いやはや、しかし私の計算通りに動いてくれたとはいえ幾ら石川のような奴でもヒーローが脅迫染みたことをやるとはねえ」

「バ〇トマンに比べたら優しい方だよ……」

それよりもこんなところから早いところをさっさと逃げようとリョーガに言われ、響は頷いて船の上に出てこのままりョーガを抱えて船から飛び降りようと思ったのだがその時、響のエボルトラスターが一瞬「ドクン」という音を立て、次の瞬間、突然船に何かが激突したかのような衝撃が起き、リョーガは一体なにがあったのかと思ひ先ほどと同じように船の中をスキャンする。

「船の上が炎上してる……」

「なにか……いるのか!？」

響は窓から外の様子を伺うとそこには1人の黒い巨人……紫色の目をした「闇の巨人 ダークメフィストドライ」が腕を組みながら空中に浮かんでおり、ドライは右手を掲げて黒い球体のようなものを作りだし、それを見た響は瞬時にそれをこの船に撃ち込もうとしているのを理解し、エボルトラスターを鞘から引き抜いた。

『シユア!!』

響は「ウルトラマンネクサス アンフアンス」へと変身し、船から飛び出すように現れるとそのまま両手を突き出してドライに向かって突進するように突き進み、ドライを殴り飛ばす。

『グウ………。 フン、待っていたぞ』

『黒いウルトラマン……? こんな奴がいたのか? お前、ウルトラマンの癖に船の中にいる人達を殺す気だったのか!』

『だったらどうした?』

ドライはそう言い放つと同時にネクサスに向かって拳を振るうがネクサスは両腕を交差してガードし、足を振り上げてドライに攻撃するがドライは後ろに後退して攻撃を回避した。

するとネクサスは船の方に視線を向け、こちらを見守っているリョーガに「他の人達を助けに」という仕草を見せるとすぐさまリョーガは領いてその場から走り去り、再び

ネクサスはドライに顔を向けるがその瞬間ドライの跳び蹴りを喰らい海に向かって落下するがすぐに体制を立て直す。

『悪のウルトラマンがいるとはね。ブラック○ダムみたいなもんか』

ネクサスは腕を振り、光粒子エネルギーの刃を敵に向かって放つ「パーティクル・フェザー」をドライに向かって繰り出す。ドライは右に向かって回避、しかしネクサスは両腕を交差して高速で動く「マツハムーブ」を使ってすぐさまドライに向かって接近するのだがドライはそれに即座に反応して両腕に生やした「ダブルメフィストクロー」を使いネクサスを斬りつけた。

『ウアッ!?!』

『シユア!!』

そのままドライはすれ違いざまに2つのメフィストクローでネクサスを斬りつけ、ネクサスは身体から火花を散らす。

『ぐっ!』

どうにか反撃しようとするネクサスだったがドライはなんと3体に分身した「ダークイリユージョン」を使用し、3体のドライは高速で様々な方向からネクサスを攻撃し、ネクサスは為す術なくダメージを喰らってしまう。

『ウアアアアッ!?!』

ドライは元の1人に戻ると両腕のメフィストクローを鞭状に変化させた「メフィストウィップ」を使いネクサスの首と腹部に巻き付け、そのまま電撃をネクサスへとドライは流し込む。

『デヤアアアアアア!!?!』

そのまま自分の方へと引き寄せてドロップキックをネクサスに浴びせるとネクサスはそのまま海の中へと落下してしまう。

『フン、呆気ない。これで終わりか?』

だが次の瞬間、海の中から勢いよくネクサスは飛び出し真っ直ぐドライに向かって行くがドライはそれを難なく回避する。

『そうで無ければ面白くはないな、ウルトラマン』

『黙れ!!』

『だが、こうすればもつと面白いと思わないかね?』

するとドライはなんと右手をリョーガ達の乗っている船に向けるとそのまま光弾は船に向かって発射され、それを見たネクサスは慌てて船を守るように身を挺して庇い、ドライの放った光弾が直撃する。

『これで終わりだ!!』

ドライは両腕に装着されたアームドメフィストを組みあわせて発射する強力な破壊

光線「ダークレイ・シュトローム」をネクサスに向かって放ち、対するネクサスも両腕を十時に組んで「クロスレイ・シュトローム」を発射し、2人の光線はぶつかり合うのだが……ネクサスの光線はあっさりとかき消されてしまい、ネクサスはドライの技が直撃。

『ウアアアアアアアッ?!』

ネクサスは身体中から火花を散らして海の中へと落下し、それ以降ネクサスは姿を見せなくなつてしまったのだった。

「響ちゃん……!」

既に船に乗っていた人達と一緒に救命ボツドに入つて脱出し、それなりに遠い場所まで避難していたリョーガはネクサスが海に沈んでいくのを見て悲痛な声をあげるのだった。

「ああ……貴重な研究材料が……!」

一緒に乗っていた石川がそんなことを呟くとリョーガは石川を睨み付け、彼を力いっぱい殴りつけたのだ。

「ぐはあ?!」

「今度そんな下らないことを言つてみたまえ! 口を縫い合わせて一生喋れなくしてやる!!」

*

とある海岸で……響はそこで倒れ込んで気を失っており、そこに丁度響よりも若い1人の少女が響の元へと駆け寄ってきたのだ。

「おねえちゃん！ここに誰か倒れてる！」

その少女が自分の姉を呼ぶとすぐさま彼女の姉も響の元へと駆けつけ、姉は急いで「大丈夫ですか!？」と響を抱き起こすと響はゆつくりとだが目を覚まし、辺りを見回した。

「ここは……?」

「大丈夫ですか!？」

「あ、ああ、平気だよ」

響はその場からフラつきながらもゆつくりと立ち上がり、海の方へと視線を向ける。

(朝日が出てるってことは……あれから1日は経つのか。クソ、船の人達は無事だろうか……)

響はそう推測した後、彼女はジオデバイザーがなく、艀装も壊れてしまっていることに気がつき、響は2人の姉妹の少女達の方へと振り返り「電話貸してもらえるかな？」

後、ついでに服も」と尋ね、2人の姉妹は顔を見合わせた後、笑顔で「うん!」と頷くのだった。

「はあ、ほんとにびしょ濡れだよ……。下着にまで土ついてるし。全く、か
しこいかわいい響さんが台無しだよこれじゃ」

なんて冗談を言いながら響は姉妹に連れられて彼女たちの家へと向かい、その近くま
で来るとここは海辺にある田舎であることを彼女は理解した。

それから家にたどり着いた響は自分は艦娘なので受け入れられないかもしれないと
不安になりつつもウルトラマンのことは伏せて一通りの事情を説明すると両親は快く
受け入れてもらい、響は家にあがらせて貰うことができた。

そして服を着替え終えた響は早速電話を借りて鎮守府に連絡し、迎えに来て貰おうと
思ったのだがなんと先ほどから電話が通じないらしく、しかもそれはこの家のみならず
他の家でも同様のことが起こっているようで携帯も通じないらしい。

「うむ、困ったなあ」

「まあ、電話が直るまでここにいればいいじゃないか！ いいよな別に？」

「ええ、困った時はお互い様ですもの」

あの姉妹の両親にそう言うて貰い、響は頭を下げて「スパシーバ」とお礼を述べるの
だった。

その後、父親の方は「栄介（えいすけ）」、母親の方は「心希（こころね）」という名前で
あることを教えてもらった響はなにか助けて貰ったお礼がしたいと言い、栄介と心希は

顔を見合わせた後、「じゃあ子供達の相手をお願い」と頼み、響は言われた通りにあの姉妹の遊び相手をする事になった。

「そういえば、君達の名前をまだ聞いていなかったね」

「うん！ あたしの名前は『アカツキ』って言うんだ！ 妹の名前は『リコ』だよ！」

まさか自分の姉と同じ名前だとは思わず少し驚いたような表情を浮かべ、そんな響を見てアカツキは「どうしたの？」と首を傾げて問いかけると響は少し微笑んでアカツキの頭を撫でる。

「いやなに。 私にもお姉ちゃんがいてね。 そのお姉ちゃんも君と同じ『暁』って名前なんだよ？」

アカツキとリコは「へー」と感心したような声をあげ、アカツキは「どんなお姉ちゃんなの？」と問いかけると響は……。

「そうだね。 背伸びしたがりで大人ぶっててその癖本人は否定しているけど私の下にも妹が2人いて4姉妹なんだけどね、私たち4姉妹の中では1番子供っぽくてチョロいんだ」

「結構ボロクソだね……」

思いの外響が姉のことをボロクソに言うものなのでもしかして響は姉のことが嫌い

なのかとアカツキとリコは思ったが……。

「だけど……そんなダメダメな部分が多い姉だけど、私たち姉妹は姉さんのことを『信頼』しているんだ。姉さんは何時だつて私たち姉妹の味方でいてくれる。本当は……凄く頼りになる姉なんだよ？」

雷と電が深海凄艦を匿っていた時もそうだった、暁は誰よりも真つ先にあの2人の味方でいてくれていたた。

そしてどことなく嬉しそうにそう話す響を見てアカツキとリコは顔を見合わせ「響さんお姉ちゃんが大好きなんだね！」と声を合わせて同時に言い放つと響は頬を赤くして顔を背ける。

「な、なにを言ってるんだい！ 別に嫌いじゃないけど……。そ、それより遊ぶんだろう!? なにするんだい!？」

「話を反らした!」

「反らした!」

「う、うるさいなあもう!」

その頃、あの田舎の近くの山でぎつと6人くらいの男女が山道を楽しそうに談笑しながら歩いていて。

するとその時、6人の背後から腕をぶらーんとさせた青白い肌をした1人の男性が現

れ、その男性に6人の内の1人が気づくと他のメンバーも男性の存在に気づき、全員が男性の方へと顔を向ける。

見たところ、青白い肌をした男性は見るからに顔色が悪そうで6人の中の1人が「大丈夫ですか？」と声をかけ、その男性に近づいて声をかけたその瞬間。

「グルアアアアアーーーーー！！！！」

雄叫びをあげて青白い肌の男性は6人の男女全員に襲いかかった……………。

『ドクン……………』

「んっ?」

そして響は一瞬だがエボルトラスターが反応した気がしたのでエボルトラスターを取り出す、それ以降特に反応はなく、気のせいかと思うのだった。

*

数時間後、夕暮れ時アカツキとリコの両親は買い物のため響はアカツキとリコと留守番中……なのだが突如響の持つエボルトラスターが赤い鼓動を今度は確かに、確実に放ち響は目を見開いてカーテンから外の様子を伺う。

「響さんどうしたの?」

リコがそう問いかけると響は険しい顔つきでアカツキとリコの肩をそつと掴み、「すぐに戻るからここにいてくれ」と言う。響は家を飛び出し艦じとった気配の方へと向かい駆け出す。

そして響は森の中へと辿り着くのだが……特に何かがあるかのような気配は感じない。

だが次の瞬間、何者かが背後から響に向かって飛びかかり、響はすかさず攻撃を避け

て瞬時に主砲を右腕に装着し自分に攻撃してきた男性に向かつて演習弾を撃ち込み、その男性は軽く吹き飛ばされて倒れ込み、そのまま動かなくなってしまった。

「主砲だけ修理を完了させておいて正解だったね。全く何なんだ？」

響は自分が吹き飛ばした男性の元へと駆け寄るとどうもなにか様子がおかしいことに気づき、男性の手を触ってみると男性の手は氷のように冷たく、既に脈がなく生命活動を停止しており、響は目を見開いて驚いた。

「私が撃った演習弾が原因じゃないよね……？ まさか、既に最初から死んでいたのか？」

『その通りだ』

突然後ろから聞こえてきた声に響は慌てて振り返って主砲を構えるとそこにはあの……等身大になった「ダークメフィストドライ」が立っており、気づけば周りに生気のない人間達が響を囲むように包囲していた。

「お前は……あの時の黒いウルトラマン」

『それでは呼びにくいだろう？ 俺の名はダークメフィストドライ。気軽にドライと呼んでくれ』

「そんなことはどうでもいい！ この人達に何をした!？」

響はドライを睨み付けながら自分を囲んでいる人間達に一体なにをしたのかと問い

かけるとドライは「フフ」と小さく笑う。

『こいつ等に、スペースビーストの細胞を埋め込んだだけさ。こいつ等はもう既に人間じゃない、スペースビースト……』『ビーストヒューマン』だ。ブルードの細胞を一部使つてるとはいえいやあ、苦勞したぜ？ お前に気づかれないようコソコソするのは』

「なっ、じゃあ……」

あの時一瞬エボルトラスターが反応したのは気のせいなのではなかったのかと響は思い、彼女は「ちゃんと自分が気づいていれば……！」と唇を噛み締め、響は「この人達を元に戻せ!!」と言い放つが……

『それは不可能だ。こいつ等は既に死んでいる、ビースト細胞を取り除いたとしてもこいつ等はただの死体になるだけさ』

「お、お前え!!」

ドライの言葉を聞いて響は怒りながらエボルトラスターを取り出すが……

『おっと、良いのかい？ こうしている間に生き残っている村の奴等はどんどんビーストヒューマンの餌食にされて行くぜ？ 言い忘れたが、ビーストヒューマンに殺された人間はそのままビーストヒューマンとなるんだぜ？ 勿論、お前が世話になった家にもな……』

「っ！」

それを聞いた瞬間、響はあの姉妹が脳裏に浮かび上がり、急いで彼女たちの元に戻ろうとするがそれをビーストヒューマン達が阻む。

「邪魔だああああああ!!!!」

響はエボルトラスタールを鞘から引き抜いて等身大の「ウルトラマンネクサス アンファンス」へと変身し、ビーストヒューマン達を殴り飛ばし急いで家に戻ろうとするのだがネクサスの右腕にメフィストウィップが巻き付きドライはネクサスをウィップを使って引き寄せるとそのまま空いている左腕でネクサスの腹部に拳を叩き込む。

『ウアッ?!』

殴り飛ばされたネクサスは地面を転がり倒れ込む。

そしてドライは両腕を広げるとドライの身体から黒いオーラが溢れだしドライはそのまま巨大化、ネクサスを踏み潰そうとするがネクサスはすぐさま立ち上がってどうか回避し、ネクサスも身体中から光を溢れ出させて巨大化する。

戦闘BGM「魔人降誕」

『ビーストヒューマン共、お前等は村の連中を襲え』

ドライがビーストヒューマン達に命令を下すとビーストヒューマン達は頷いて村の方へと向かおうとし、ネクサスはそれを止めようとするがドライの跳び蹴りを喰らい、

ネクサスは吹き飛ばされてしまう。

『グウ!?!』

『おいおい俺を無視するなよ。 さあ、楽しいデスゲームを始めようぜ?』

『そんなクソゲー、やってたまるか!』

ドライは左腕にもメフィストクロウを出現させ、2つのメフィストクロウを使いネクサスへと斬りかかるがネクサスはしやがみ込んでそれを回避し、アツパーカットをドライに繰り出す。ドライは後ろに後退して回避し右腕から放射する、火炎状の光弾「ダークフレイム」をネクサスに撃ち込む。

だがネクサスはそれを両腕の「アームドネクサス」で切り裂きジャンプして跳び蹴りをドライに繰り出す。ドライはネクサスの足を掴んでそのままフルスイングして投げ飛ばす。

投げ飛ばされたネクサスは空中でどうか体制を立て直し、倒れることなく地面に着地したがその直後にドライは両腕のメフィストクロウから放つより強力な光弾「ダブルハイパーメフィストショット」をネクサスに撃ち込み、ネクサスは身体中から火花を散らす。

『グウ!?!』

ネクサスは膝を突き、その隙を逃さずドライは飛び上がって勢いをつけて右腕のメ

フィストクローを突きだし、ネクサスに攻撃を仕掛けるがネクサスはメフィストクローを両手で掴み、どうにか押し返して拳を2発連続でドライの腹部に叩き込んだ。

『ヌグツ!!?』

『シエア!』

ドライが怯んだ瞬間を狙い、ネクサスは回し蹴りをドライに喰らわせる。

『お前なんか構ってる暇はないんだ!　そこを退け!!』

一方、村の方では……既にフィストヒューマン達によって村人の半分がフィストヒューマンと化しており、その様子はさながらゾンビ映画のようだった。

「うわあ!!」

ある者はフィストヒューマンに腕を捕まれ、その腕を力強く引っ張ると『ベキベキベキ!!』という音を立て、最後は『ブチイ!!』という大きな音と共に腕を引き千切られ……。

「やめて……お願いやめて!」

またある者は愛する者をフィストヒューマンに変えられ、それでも尚そのフィストヒューマンを信じた結果、喉を異様に伸びた鋭い爪で搔つ切られ自身もまたフィストヒューマンと化す。

その光景はさながら地獄絵図と呼ぶに相応しい惨状だった……。

『やめろ……やめろお!!』

その惨状を常人以上の視力で確認したネクサスはドライにやめろと言いながら殴り掛かるがドライをそれをあつさりと避ける。

『さらにゲームを盛り上げてやるよ』

『なに……!?!』

ドライが右手をあげると大地が大きく揺れ、地面が割れるとそこからクラゲに似た生物……「円盤生物 シルバールーム」「宇宙大昆虫 ダイオリウス」が出現するのだが……その姿はまさに「醜悪」と呼ぶに相応しいものになっていた。

なぜならばシルバールームの触手の1つ1つに口のようなものがつき、触手以外の場所は所々にドロドロに溶けた跡のような穴が数か所存在してシルバールームの内部分が若干見え、ダイオリウスもまるで虫の死体のような見た目になっており、ネクサスはそのような2体の怪物の姿を見て驚きを隠せないでいた。

『あれは確か……シルバールームとダイオリウス!?! なんであんな姿に……!』

『答えは簡単だ。 ビーストヒューマンと同じようにあいつ等にもビースト細胞を埋め込んだのさ』

『なっ……!?!』

するとシルバールームとダイオリウスは空中へと飛行し、ダイオリウスはその鋭く尖った足で起用に人間を串刺しにするとそのまま串刺しにした人間を口の中へと放り

込んでムシャムシャと食べ始め……。

シルバールームはその口のついた触手を使って逃げ惑う人々を次々捕らえて捕食する。

『やめろ、やめろお!!』

ネクサスはシルバールームとダイオリウスに向かって行こうとするが……ドライは右手をネクサスに向かって突き出すとそこから小さな黒い球体のようなものを出現させる。

『聞こえるか? この人間たちの悲鳴が……』

ドライがそう呟いた瞬間、ネクサスは確かに聞こえたのだ……捕食されていく人々の悲鳴が。

『うわああああ!!? 熱い熱いよお!!? 溶けぎやああああああ!!!?!?』

『いだあい!!? うぎやああああああ!!!?!?』

『だ、だずがああああああ!!?』

その声は皆、シルバールームやダイオリウスに食われた人々の声……ネクサスはそれを聞き、思わず耳を塞いでしまう。

『全部お前のせいなんだよ、お前がここに来たからこうなった』

ドライはそう言いながらハイパーメフィストショットをネクサスの背中に撃ち込み、

直撃を受けたネクサスは吹き飛ばされて地面へと倒れこんでしまう。

『さあ、いよいよクライマックスだぜ』

ドライがそう言うときさらに地面からネズミに似たスペースビースト、「フィンディツ シュタイプビースト ノスフェル」が出現し、ノスフェルはネクサスに掴み掛って立ち上らせるとノスフェルはその鋭い爪でネクサスの胸部を斬りつける。

『グッ!?!』

攻撃を受けたネクサスはノスフェルに反撃しようとするが……。

『おっと！ 攻撃はしない方がいいぜ？ こいつの額をよく見てみな』

『っ!?!』

ネクサスがドライに言われた通り、ウルトラマンとしての透視能力を使ってノスフェルの額を確認するとそこには……リコとアカツキの姿が……。

「ママあ!! パパあ!! 助けてえ!!」

「苦しいよ……!! 苦しい、誰かあ!!」

それを見てネクサスは拳を握りしめて震わせるが……人質を取られたのでは手が出せないため、ネクサスは攻撃することができなかつた。

だが……。

『お前、こいつ等を人質と勘違いしてないか?』

『なに?!?』

『こいつ等は人質なんかじゃない』

するとなんとノスフェルは捕らえている筈のアカツキとリコを解放……と言つてもアカツキとリコが放り出された場所はドライの手の平の上……。

『なにを……するつもりだ!?!』

そんなネクサスの慌てようを見てドライは楽し気に笑う。

「お姉ちゃん!」

「大丈夫……大丈夫だよ! 絶対だい z 『グチョ』」

ドライは……手の平の上の少女2人を……握りつぶしたのだ……。

虫を潰すように……。

その瞬間、ネクサスの……響は……かつて目の前で沈んでいった姉妹や仲間のことかフラツシユバツクされ、響は悲鳴にも似た声を張り上げながらドライへと向かつて行った。

『うわああああああああああああああああああああああああああああ!!!』

しかし、ドライはすぐさまその姿を消し、この場をノスフェル、シルバ、ブルーメ、ダイオリウスだけを残して消え去るのだが……ネクサスは構わずノスフェルを殴り飛ばし、ノスフェルは反撃しようと爪を振るうがネクサスはその爪を掴みあげて力づくでへ

シ降り、ノスフェルの顔面に何発も拳を叩き込む。

さらにネクサスはノスフェルを持ち上げて空中へと投げ飛ばすとそのままネクサスは両腕にエネルギーをチャージし、両腕を十字に組んで放つ「クロスレイ・シュトローム」をノスフェルに向かって発射し、高専を受けたノスフェルは爆発四散し、木っ端微塵に吹き飛ぶのだった。

『うおおおおおおお!!!』

続いてネクサスはシルバールブルーメとダイオリウスに向かって行こうとしたのだが……そこには既にシルバールブルーメやダイオリウスの姿はなく、ネクサスは……響は悔しき、悲しみ、怒り……様々な感情が入り混じった雄たけびをあげ、拳を地面に叩き付けるのだった。

『うわあああああああああああああ!!!!!!
うわあああああああああああ!!!!!!』

*

『Xクロスチヨップ!!』

それから数分後、この村の騒ぎを聞きつけ……ネクサスの目撃情報もあったことから等身大の「ウルトラマンエックス」が村へと駆けつけ、ビーストヒューマンを一通り殲滅していた。

「すぐに応援が来る筈だ、それまで粘れるかエックス？」

『ああ、しかし……ビーストと化しているとはいえ人間を倒すのは心が痛い』

「だけど、この人たちだって人を襲いたいなんて思っていない。こうするしか方法は無いんだ……」

エックスと夜空はそんな会話をしながらビーストヒューマン達を倒しており、その

後、応援の艦娘達が駆けつけてピーストヒューマン達をエックスと共に殲滅した後、変身を解除した夜空は遅れてみんなと合流し、全員で響を探すことに。

「あつー！ いたわー！」

そして暁が真つ先にフラフラとしながら歩く響を見つけ、暁は「響ー!!」と大きく手を振って呼びかけるが……。

「姉……さん……？」

その目は虚ろであり、それを見た暁は心配そうな表情を浮かべて「響、大丈夫？」と優しく声をかけると……響は眼尻に涙を溜めて暁に抱き着き泣いてしまう。

「う、うう……うわあああああ!!! 私……私が、ここに来たから！ 私の、私のせいで……！ うわあああああ!!!」

暁は突然のことに戸惑いが隠せないでいたが……今は、彼女は落ち着くまでそつと抱きしめておこうと……そう思う暁だった……。

第11話 『信頼—ヴェールヌイ—』

響があのか村を訪れてからあれから数日が経過した。

しかし、未だに響の心の傷は癒えることはなく、さらにあのドライによって握りつぶされた姉妹の両親も家にもう少して到着するということとところでピーストヒューマンに襲われ殺害されたらしく、それがより響の心に深い傷がつく結果となってしまったのだ。

そしてその響はというと部屋の隅っこでただぼーっとして座っており、あまり眠れていないのか目の下には大きな隈ができており、同じ部屋の暁や雷、電もそんな響を心配するのだが……幾ら声をかけても「うん」「そう」とくらいしか返事が返って来なかった。

「も、もう！ 響つたらちゃんと寝ないとダメよ！ 目の下の隈凄いいしちゃんと眠らないとお肌にも悪いし全然レディーじゃないわよ！」

「うん……」

一応返事こそしてはいるがどう見ても暁の話を全く聞いていない。

そこで雷は「何時までいじけてるのよ！ いつもみたいにはっちゃけてよ響姉！ あのか村のことは響姉のせいなんかじゃないんだから！」と彼女は響の肩に手を置いてそう

語りかけるのだが……響は「村……」と小さく呟いた瞬間、あの村での出来事がフラッシュバックし、突然彼女は激しく咳き込んだのだ。

「ゲホ！ ゲホ!! ゴホ!! はあはあはあ……！ ひゅー!! ひゅー!!」

「ひ、響お姉ちゃん大丈夫なのですか!？」

「村」と聞いた瞬間、響は過呼吸となり、慌てて電は響の背中を摩り……しばらくすると響はようやく落ち着きを取り戻し雷は自分が「村」と発言したせいで響が過呼吸へと陥つたのだとすぐに理解して彼女は必死に響に頭を下げて謝った。

「ごめんなさい！ 響姉！ あたしが余計なことを言ったから……」

「いや、良いんだよ雷。 励ましてくれようとしたんだろ？ だから、大丈夫……」
そう言い終わると響はまた部屋の隅っこで座り込んでしまい、また振り出しに戻ってしまい、暁達3人は互いに顔を見合わせどうやったら響を元気づけてあげられるだろうかと必死に悩んだ。

*

一方その頃……どこかの薄暗い場所で一人の男性が立っており、その後ろにはあの腕を組んで立つ等身大のドライの姿があり、男性は「はあ」と呆れたように大きな溜息を吐いた。

「結局まだお前は奴の持つ光の力を奪えてないのか？」

『まあ、そう言うな。全ては計画通り、石川がああ響とい小娘を『本部の命令』という名目で奴を鎮守府から連れ出し、海の上で俺と最初の対戦……その後奴を倒し上手く海の波をコントロールして奴をあつ村に連れて行くことができた。そして計

画通りに奴に絶望を叩き込むことができた。これで奴の光を全て奪い取り、光を闇へと変換させ我が主の復活のエネルギーとすれば……主の復活もより早まるというものだ』

ドライの言葉を聞き、男性は「主……、『ダークザギ』か」と小さく呟く。「ダークザギ」……かつてある世界で「ノア」と呼ばれるウルトラマンによつて倒された邪悪な巨人……彼らの目的はその「ダークザギ」を復活させることにある。

そもそもドライはそのザギが「もしも自分がノアに倒された場合」を考えて造られた言わば「予備」のダークメフィストであり、そのドライの起動条件は「ザギが倒された時」であり、ドライはザギが倒されると同時に起動し、ザギを復活させるために動くシステムだったのだ。

そしてその方法はノアにすぐに嗅ぎつけられないように様々な世界を移動し、様々な世界の光の戦士の「光」を奪い、それを大量に集めてそれを闇へと変換させることで以前よりも強力でより強大な「ダークザギ」を復活させようとドライは目論んでいるのだ。しかし、この世界に来てドライは大きな誤算が『2つ』起きたのだ。

1つ目は本来はネクサスではなくエックスの「光」を奪おうと考えていたのだが、エックスよりも強大な「光」を秘めた『あの』ウルトラマンが来たこと。

2つ目はとうとう自分の存在に嗅ぎつけたノアが……好都合にも弱体化したあの姿でこの世界に現れたことだ。

恐らくはエックスを守るために駆けつけたのだろう、しかし弱体化した状態でここに来てくれたのはドライにとっては嬉しい誤算だった。

そこでドライはエックスは後回しにすることにして先に弱体化しているとはいえ、奪えれば大量の「光」のエネルギーを手に入れられるあのウルトラマンにドライは目を付けたのだ。

「しかしまあ、私にまで彼等が脅しをかけてくるとはね。少々、彼等を侮っていたかもしれないねえ」

そしてこの人物こそ石川に響を本部に連れてくるように命じた人物……「阿久野（あくの）」という男性であり、貴文はドライの方へと顔を向けると1つだけ気になったことをドライに訪ねた。

「ところで、1つ気になったんだが今のデュナミストは光を失うとどうなるんだ？」

『恐らく死ぬことはないだろう。ただ、恐らくは魂が抜けたような状態、廃人になるだろうな』

「そうか、ならば約束通り用が済んだらあの駆逐艦を私に引き渡して貰えるな？」

阿久野の言葉に対してドライは無言で頷く。

『ああ、抜け殻になったあの小娘を搔つ攫つてお前に渡せば良いんだろう？ 俺とお前の関係が分からなければあいつ等の脅しも特に意味はないしな。しかし、廃人同然の奴なんて役に立つのか？ 手伝って貰った礼だ。どうせなら活きの良い艦娘を連れてきてやつてもいいが』

「研究の材料としては十分さ」

それを聞いてドライは「そうか」とだけ呟くと人間態へと姿を変え、ドライはもう一つ気になったことを阿久野へと尋ねた。

「ところで、本当にこの人間の身体を使って良かったのか？ 科学者なんだろう？ 正しい」

「構わんよ、その男よりも優秀な奴は幾らでもいるからね」

ドライは「ふーん」とだけ言い残すと彼と阿久野はそのまま一緒にその部屋から出て行くのだった。

*

その頃、響は未だに何時もの調子に戻ることはなく彼女はただ鎮守府の近くにあつた河原でただぼーつと座り込んでおり、その時……不意に誰かの足音が聞こえて振り返るとそこには彼女にとっての前提督でもある……光が笑みを浮かべて響に対し手を振っていた。

「光さん……」

「隣、良いかな？」

「構わない」

光はそう言われて「じゃ、遠慮無く」と言いながら彼女の隣に座るとポンポンと響きの頭に置き、帽子越しに優しく撫で始め響は少し照れくさそうに「なんだい？」と問いかけてくる。

「話は聞いたよ。まさか響がウルトラマンになるなんて……。だけど……みんなも言ってるけどあの事件は君のせいなんかじゃない」

「違う、あの人達は……私と関わったから……関わったそのせいで……私が殺したんだ！ 殺したも同然なんだ……！」

膝を抱えて激しく自己嫌悪しており、そんな彼女を見て光は少し困ったような表情を見せるが……。

「それなら……尚更後ろに向いたらダメじゃないか。顔をあげて前を向かないとー！」

「無理だよ……怖いんだ、前を向くのが……私を助けてくれたあの幼い姉妹が目の前で殺された時、私の脳裏に艦だった頃に仲間や……姉妹を失った時の記憶が蘇って……あの時の恐怖を思い出したんだ。もう、嫌なんだよ……もう私は……戦えない……」

「もう戦えない……それは、人類を守る戦士とも言える「艦娘」が言っ

らない言葉。

人類を守るために戦うべき艦娘が「戦えない」など、本来は絶対に言つてはならない言葉……それは響自身も分かっている。

だがそれでも……言わずにはいられなかった、「戦うのが怖い」「戦いたくない」と響は頭を抱え……その表情は恐怖で歪んでおり、彼女は目からポロポロと涙を流し始めた。

「もう私は戦うのが怖い、それで誰かを失うのが怖い、私と関わった人が死ぬのが怖い……！ だけど……それじゃ私の姉妹も仲間も守ることができない……！ 私は、私はどうしたら良いんだ！ こんなんじや私はもう戦えない、でも大切なものは守りたい！ 戦わないと守りたいものは守れないのに！！ 私は……私は……！！」

「落ち着いて？」

光は響の肩に手をかけて優しく声をかけ、彼は響に深呼吸するように言うと言は言われた通り深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

「……すまない、光さん、取り乱してしまつて」

「ううん。でもさ、響。戦うのが怖いって言うけど……みんなを守りたいって気持ちはあるんだよね？」

光の問いかけに対し、響は「こくん」つと首を縦に振つて頷いた。

「みんなを守りたいって気持ちがあるのならそれはきつと……本当はまだ諦めてないんだよ、『守るために戦う』ってことを」

「本当に、そう……なのかな？ 分からないよ、私には……戦うのが怖いっていう気持ちは本物だと思うし……」

「まだ分からなくてもそれは良いと思う。多少時間はかかるかもしれないけど何時かきつと分かるよ。ただ……響、これだけは……覚えておいて欲しい。過去は変えられないけど、未来なら……変えることができる」

光の言葉に響は顔をあげて光を見つめ……彼の言葉を繰り返すように「過去は変えられないけど、未来なら変えられる……」と呟き、光は笑みを浮かべて頷く。

「だけど、過去に起こった悲劇を変えられないなら、そんなの無意味……」
 「無意味なんかじゃない。僕は過去に、過ちを犯した。だけど、君の妹の電は僕と同じ過ちを繰り返さなかった。それは……未来を変えたってことなんじゃないかな？」

その言葉を聞き、響はそれを聞いて「確かにそうなのかもしれない」、そう感じた……。

それを聞いた響は少しかけ気持ちは晴れる気がした。

響は立ち上がると「ありがとう、光さん」とお礼を述べてそろそろ鎮守府に戻らないといけないからと光に別れを告げて鎮守府に戻ろうとした時、「おーい！」と暁や雷、電が手を振ってこちらに向かって来ていることに気がついた。

響も軽く暁達に手を振り、彼女たちが響の元に駆け寄ると響は「そんなに慌ててどうしたんだい？」と訪ねると暁達は3人は互いに顔を見合わせて響に目をつぶって手を差し出すように言い、響は首を傾げつつ言われた通りに目を閉じて両手を差し出すと暁が「はいー」と言って響の手の平に小さな何かを置いた。

「もう良いわよ響姉、目を開けても」

雷に言われて響がそつと目を開けると自分の手の平の上には鳥のような小さなキーホルダーがあり、響は「これは？」と尋ねると暁が「えっへん！」と胸を張る。

「私たち3人で作った御守りなのです！」

「どうどう？ 可愛いでしょ？」

「最近、響元気がないから……。こんなので元気になつて貰えるか分からないけど私たちに出来ることって言ったらこんなことくらいだから……。」

電、雷、暁の順でそう響に話し……。響は自分の姉妹の優しさに触れて泣きそうになるが……。それをぐつと堪えて満面の笑みを浮かべて「ありがとう、みんな

な」とお礼を言ったのだ。

数日ぶりの響の笑顔に、暁達も自然と笑みを浮かべた。

『『こんなの』なんかじゃないよ、凄く嬉しい……。』
とここでこれ、1つ気になったんだけど名前とかあるのかな?」

「一応『ガンバルクイナ』くんって名前よ!」

それを聞いて響は「そうか、良い名前だ」と響はその御守りであるガンバルクイナを大切そうに握りしめ、その様子を見ていた光も少しは元気になってくれた響を見て嬉しそうに笑みを浮かべていた。

『光さんは、カウンセラーとか向いてると思います』

「えっ? そうかな?」

同化しているメビウスにそう言われるが、光はイマイチしっくり来ていない。

するとそこで雷が光の存在に気づき、「指令かーん♪」と嬉しそうに勢い余って抱きつくが……。その勢いのせいで光は川に落っこちるのだった。

「ふいっおっ!」

最も雷は光が慌てて押し返したため一緒に川に落ちることはなかったが。

「成程、これがオチか」

「上手いこと言わなくて良い!!」

久しぶりにジョークを口にする響に暁が素早くツツコミを入れ、それを見た電はやつと響が何時もの調子に戻って来ていることが分かった。

「つて早く光さんを助けるのです！」

「うわぁーん！　ごめんなさい司令かぁん!!」

まあ、元々身体能力が異常に高いの＋メビウスと同化してさらに身体能力が向上しているので光は自力で川から戻って来たが。

一方、響の中にあつた曇りがほんの少しとはいえ、晴れたことを感じ取つたドライはとうとうと……。

『っー!』

「どうかしたのかドライ?」

貴文の問いかけに対し、ドライは「そろそろ奴の心を完全に碎かないといけない時間だな」とだけ貴文に告げてドライも人間の姿へと変わり、ドライの言葉を聞いた阿久野は嫌らしい笑みを浮かべて「それは楽しみだ」と呟くのだった。

*

その日の午後のことである……街に突如としてスペースビーストと化したダイオリウスとシルバールームが同時に出現し、ダイオリウスは積極的に逃げ惑う人々を捕食し、シルバールームはなぜか次から次へとビルやデパートなどを押しつぶすように破壊活動を行っており、2体の出現を知った夜空の鎮守府はすぐさまダイオリウスとシルバールームに対処するため出撃準備を行う。

「はあ、全くこれから暁ちゃんのモンスフュージョンのテストを行うところだったのに

空気読めない奴等だねえ……」

「そんなことはどうでもいい。俺も出撃するからスカイマスケッツィの出撃準備だ」

自分の研究所で気だるそうに喋るリヨーガに対してそう言い放つタカト、そしてリヨーガはタカトに「はいはい」と言いながらスカイマスケッツィの出撃準備に取りかかるうとするのだがその際、暁のモンスフュージョンのテストに付き合っていた響が不安そうな表情を見せていることに気づき、リヨーガは彼女の元へと駆け寄った。

（き、来た！ 怖い……怖い、けど……！ ここで、逃げたらダメだ！

姉さん達を私が守らないと！ 仇を、討たないと！ あの人達の……！）

「大丈夫かい響ちゃん？」

「えっ？ あ、ああ……平気だよ」

口では「平気」だとは言うがその肩は小刻みに震えており、リヨーガは「無理そうなら出撃はやめておくべきじゃないか？」と問いかけるが響は「みんなが出撃するのに自分だけ留守番する訳にはいかない」と返し、響は艦装を展開しようとするが……。

「響！」

するとそこに夜空が響の元へと現れ、響は「なんだい司令官？」と首を傾げると夜空は彼女に対し、待機命令を出したのだ。

「っ、司令官！ 私は……！」

「大丈夫じゃないだろ。ウルトラマンの力があると言つても今のお前じゃ足手まといになりかねない。鎮守府で待機しろ」

「だけど……！ 私は、今は……ウルトラマンなんだ！ どれだけ怖くても……私には大いなる責任があるんだ！ だから、私は行かなくちゃ……！」

そう言い放ちながらこの際、変身して飛んでいこうと思つた響はエボルトラスターを取り出し、鞘を引き抜こうとするのだが……響はエボルトラスターを、引き抜くことができなかった。

「そんな……どうして!? 私は行かないと行けないんだ！ あいつ等をぶつ倒さないといけないの!! 村の人達の敵を討たないと行けないの!! 力を……力を貸してくれウルトラマン……!!」

それでもやはり響はエボルトラスターを引き抜くことはできず、彼女は膝を突き、顔を俯かせその瞳から涙が溢れ出る。

「響……」

「響姉……」

「響お姉ちゃん……」

そんな響の元に暁、雷、電が心配そうに寄り添う。

「お前の代わりに夕張が出撃することになった。暁、雷、電は響の側にいてやつてくれ。艦隊X i o、出動!!」

『了解!』

夜空の言葉にその場にいた出撃が決まったメンバーが返事を返し、夜空は申し訳なきような表情を浮かべて響に言葉をかける。

「キツイことを言つてすまない、響。だけど俺はお前が今、まともに戦える状態だとは思えない。今、お前の中にあるのは恐怖と怒りと憎しみ、それが全面的に押し出されてる。そんなお前を戦場に出す訳にはいかない。そのせいで仲間を危険に晒すはお前自身、嫌な筈だろう?」

夜空の言葉に響は顔を俯かせたままだったが、納得してくれたらしく静かに頷くと彼女は暁達と一緒に自分たちの部屋へと戻っていくのだった。

その際、雷が「あたし達も行かなくて大丈夫?」と少し心配そうに夜空を訪ねていたが夜空は今、響の側にいるべきなのは姉妹である暁達以外に他ならないと返し、雷は「分かっちゃったわ!」と言つて暁達と一緒に自分たちの部屋へと連れて行った。

「みんな海から行つてくれ! その方が早い! メンバーはそれぞれ半分に分かれてそれぞれの旗艦を夕張と時雨にする! 相手はただでさえ厄介な奴等がスペーススปีースト化した奴等だ! 油断するな! 俺もジオポルトスで現場に向かう!!」

『了解!!』

そして自室へと戻った響達はというと……響は隅つこの方で膝を抱えて蹲り、暁達はそんな響を心配そうな表情を浮かべて見守る。

「みんな、すまないけど……しばらく1人にさせてくれないかな?」

響のその言葉に対し、暁達は顔を見合わせてどうするべきかと悩んだが……今はそういつた時間も必要だろうと思いい雷が「分かったわ」と響に答え、3人は部屋から出て行くのだった。

(私は……何をしてるんだろう……)

*

数分後、でシルバールームとダイオリウスと戦闘を繰り広げている一同はとうとうと……既にもその場には「ウルトラマンエックス」が出現して艦娘達と共にシルバールームとダイオリウスと戦っており、エックスはシルバールームの出した触手を掴みあげてフルスイングし、地面へと叩きつける。

『シューア!!』

「みんな今だ!!」

時雨の合図で艦娘達が地面に倒れ込んだシルバールームに一齐に砲弾を撃ち込むが大した効果はなく、シルバールームはすぐさま体制を整えて幾つもの触手を伸ばしてエックスに攻撃を仕掛けてくる。

『サイバールブラックキング、ロードします』

「ブラックヘルマグマ!!」

しかし朝潮がブラックキングの力を宿した炎の砲撃……「ブラックヘルマグマ」を放つてシルバーブルーメの触手を焼き尽くすが……焼き尽くされた触手はすぐさま再生し、シルバーブルーメの触手はエックスの手足を拘束し、動きを封じてしまう。

「そんな……再生した!?!」

「ちよつと! シルバーブルーメにあんな能力ない筈よ!?!」

朝潮と満潮は本来存在しないシルバーブルーメの能力を見て驚き、さらにそこからダイオリウスがエックスに向かって蜂のように針を発射し、それらがエックスに直撃してエックスの身体から火花が散る。

『ジュアアアアア!?!』

「ダイオリウスは針出したよ!?!」

さらに新たな能力を見せるダイオリウスに文月も驚きの声をあげ、そしてシルバーブルーメが一度拘束を解くと複数の触手の口から光弾、ダイオリウスは針を発射してエックスに攻撃し、夜空は素早くサイバーカードをエクステバイザーに装填する。

『サイバーベムスターアーマー、アクティブ!』

「ベムスターアーマー」を装着してベムスターのシールドでシルバーブルーメとダイオ

リウスの攻撃を吸収し一気に攻撃を跳ね返そうとするエックスだが……シルバーブルーメは触手の一本を地面に潜らせるとエックスの背後からその地面に潜らせた触手が飛び出し、そこから光弾を放ってエックスの背中を攻撃する。

『グアッ?!』

攻撃を受けてモンスアーマーが解除され、倒れ込んだエックスに向かってダイオリウスは口から蜘蛛糸のようなものを出してエックスを地面に拘束し、エックスは完全に動きを封じられてしまった。

「このままじゃエックスが……!」

「フアントン光子砲、発射!!」

スカイマスケットティが援護しようとしてダイオリウスを攻撃するがダイオリウスはあっさりとそれを回避してしまう。

「くそー!」

*

場所は戻り、鎮守府の第六駆逐隊の自室では……響は未だに膝を抱えて隅っこで座っており、彼女はポケットにしまっているエボルトラスターを取り出す。

「君はどうして私を選んだんだい？ こんな私は……ヒーローになる資格なんてない、私は……私が憧れたヒーロー達のように……なれない……」

「まさか一度心を折ってやったら……ここまで不安定な状態になるとはな。これならまだ急ぐ必要はなかったかな？」

いきなり、この鎮守府にはいない筈の人間の声が聞こえ、響は顔をあげるとそこにはいつの間にいたのか……石川が立っていた。

「石川……なんでお前がここに!?!」

響はすぐさま立ち上がってプラスチックショットを構え、警戒する。

「つまりはこういう事さ」

すると今度は石川の身体が紫色に発光すると石川は等身大の「ダークメフィストドライ」の姿へと変わり、それを見た響は驚きを隠せず目を見開いた。

「どういうことだい？ あの船の時、石川とドライはそれぞれ別々の場所に同時にいた筈じゃ……!?!」

『忘れたか？ 俺は『ダークイリジュージョン』という分身能力を持っている。しかもそれは実態を持ったものだ。つまりはそういうことさ。まあ石川の時はちよつと間抜けなキャラになつちまったが、元々だから良いだろ』

「元々……? どういうことだ!?!」

ドライが言うにはこの世界で活動するには活動しやすいように人間の身体が必要であり、丁度石川の立場的にドライは使えると考えこの石川という人間を殺し、そのまま

彼の身体を奪い取ったらしく、つまり今彼は死人の身体を使っているのだというのだ。『まあ、この人間が艦娘や深海棲艦を実験台に使って極悪非道なことをやっていたのは変わらんがな』

「お前………!」

響はドライを睨み付けてブラストショットから光弾をドライに向かつて放つが………その時、光弾が撃ち抜いたのはドライではなく………ドライはいつの間にか消え去り、場所もどこかの野原に代わっており、ドライの代わりにあのアカツキという、自分を助けてくれた少女だったのだ。

「っ!？」

「ひび、き………おねえ………ちゃん。 どう、して………!」

それだけを言い残してアカツキはブラストショットによって撃ち抜かれた胸と、口から血を流しながらその場に倒れ込み、倒れ込んだアカツキに彼女の妹であるリコが駈け寄ったのだ。

「おねえちゃああああん!!」

「そんな、どうして………あの娘達は、死んだはずじゃ………!」

「どうして………どうしてお姉ちゃんを殺したの!？」

泣きながらアカツキに寄り添いながら響を憎悪に満ちた目で睨み付けるリコ、それを

見て響はたじろく。

「ち、違う……！！ 私に殺すつもりなんて……！！」

「返してよ！ お姉ちゃんを……返して!!」

「わ、私は……」

少しずつ、後ろに下がっていく響……すると今度は唐突に現れた巨大な拳がアカツキの亡骸と共にリコを無残にも「ぐしゃり」と握り潰し、響は目の前でまたあの姉妹を潰された場面を……しかも今度は間近で……残酷な姉妹の死を目撃してしまったのだ。

響が見上げるとそこにはドライの姿があり、響は唇を噛み締めてエボルトラスターを引き抜こうとする。

「貴様あああああああ!!!」

しかし、やはりエボルトラスターを引き抜けず、響はそれに苛立ち舌打ちする。

「こいつだけはあ!! こいつだけは何がなんでもぶつ倒す!! お前だけはあ!! お前だけは絶対ゆるさなあああああい!!!」

響はネクサスに変身できないのならばと考え、艦装を展開し主砲をドライに向かって構えるが、その時響の周りの風景が変化し……元の部屋へと戻ってきたのだ。

「あつ……夢……いや、違う……」

そこへ突然誰かが彼女の髪を強引に引つ張りあげると突然その誰かに顔を殴りつけられて響はその場に倒れ込んでしまう。

「この弱虫!!」

「ぐあつ?!」 姉・・・・・・・・さん・・・・・・? 雷に、電?」

そこには冷め切つた表情を浮かべて響を見下ろす暁、雷、電の姿があり、響は訳が分からず困惑する。

「何時までもウジウジと! いい加減ウザいのよ」

「ホントそれ、流石にアンタみたいな奴に気を使うの嫌になつてきたわ」

「ね、姉さん・・・・・・・・雷、なにを・・・・・・・・?」

暁や雷の冷たい言葉が信じられず、彼女たちに手を伸ばそうとする響だが・・・・・・・・その手を電がパシッと叩き、響は電までもがそのような態度を取ることに驚きを隠せないでいた。

「分からないのですか? あなたがいると私達まであの村の人達のように無残に死ぬかもしれないんですよ?」

「そうそう。響、私達まだ死にたくないのよ。アンタがいると周りの人がみーんな死んじゃうの。だからさあ・・・・・・・・出てつてよ。ここから」

「つ・・・・・・・・! 嘘、だよね・・・・・・・・? 姉さん達がそんなこと言うわけ・・・・・・・・」

響は暁達が自分にこんな態度を取るわけがない、そんなの信じないと自分に言い聞かせた。

だがそれでも暁達の様子が変わることはない、その時……「ザシュツ！」という鈍い音が聞こえ、響が音のした方へと顔を向けるとそこには腹部を後ろからドライのメフィストクローによって貫かれた電の姿があった。

「……………えっ……………?」
「ふう……………」

「い、電あ!! ドライ貴様あああああ!!」

血を流しながら電は倒れ込み、響はドライに殴りかかろうとするがドライはすぐさま姿を消し、今度は雷の喉をメフィストクローで切り裂き、雷を溢れ出る血を右手で押さえながらもその場に倒れ込んでしまった。

「あっ……………!! げほっ!!」

「雷い!! はっ! 姉さん!!」

響はすぐに次のドライの狙いが暁だと分かり、彼女へと手を伸ばすが……………響は突然目の前に現れたドライに蹴り飛ばされてしまう。

「がはっ!?!」

壁に激突し、床へとひれ伏す響……………それでも彼女は必死にその手を暁へと伸ばした。

「姉………さん！ 逃げて………」

そして暁のその表情は恐怖に歪んでおり、ドライは暁に容赦なくメフィストクロウを振りかざし切り裂いたのだ。

「あ………がつ!？」

暁の身体から「ブシヤア!!」と勢いよく大量の血が噴水のように噴き出し、彼女は力なく倒れる。

「姉さあああああん!!! ドライ!! お前だけは、お前だけは絶対に………許さなああああああ!!!」

響は今にも噛みつきそうな喰らいの勢いでドライに駆け出そうとするのだが、その際暁が呟いた言葉で響は動きを止めた………。

「が………はっ! は、はは! なに………言っつんのよ? だから言っつたでしょ? アンタがいると周りがみーんな死ぬって………。これは全部、アンタの、せい………なの、よ………」

「っ!？」

暁はそれだけを言い残して力尽き、それを聞いた響はその場に膝を突いた。

「私の………せい? 私が………。あつ………あ、うあああああ

あああああああ!!!」

響は頭を抱えて絶叫し、それと同時に響の足から紫色の煙のようなものが徐々に彼女の身体を包み込もうと蠢く。

「つはあ………。はあ……。私は……。誰も守れない、ヒーローになんて……。なれない。力があるのに、守りたいものを守れないどころか、誰かが私のせいで死ぬくらいなら……。私自身が消えてしまえば、良い……。」

『ふむ、これだけやれば十分か』

ドライはそう言いながら指をパチンつとすると周りを薄暗い空間へと変えた。

一方、響のいる部屋の扉の前では……。そこには暁達やリョーガ、グルマンが険しい表情を浮かべて立っており、一同の視線の先には暁達、第六駆逐隊の部屋……。しかし、その中は真つ黒な霧のようなもので覆われて中が見えないようになっており、暁やリョーガは何度か部屋に入ってみようと試したのだがどうやっても誰も部屋の中に入る事ができなかったのだ。

『見たところ、特殊なエネルギーフィールドのようなものが張られているらしい。これはそう簡単に部屋へは入れそうにないな』

「そんな……。この中には響がまだいるのよ!？」

「そうだ! 暁お姉ちゃん、ジオデバイザーで連絡を!」

電はジオデバイザーを取り出して部屋の中にいるであろう響に通信を行うのだ

が……ノイズが入るばかりで響の声は全く聞こえず、結局ジオデバイザーで通信を行うことはできなかった。

「ああもう！ ややこしい！ いっそのこと砲撃でこのバリアだかなんだかよく分からないの壊せないの!？」

苛立ち気味に雷が艦装を展開して主砲を構えるがそれはやめておいた方が良くリョーガに止められる。

「例え砲撃で壊せたとしたら中の響ちゃんにまで被害が及ぶ可能性がある。迂闊に強力な攻撃を仕掛けるのは得策とは言えないね」

『だが壊せる方法があるとすれば……レベルを上げて物理で殴って無理矢理この中に入るしかないだろう！ それならば中の響が傷つく恐れは殆どない』

「科学者の癖に意外と脳筋な方法ね!？」

しかし、レベルを上げて物理で殴るといっても一体どうすれば……と雷は考え込むが、すると暁が何かを思いついたようにある物を取り出した。

それは……「サイバーカード」、つまり怪獣の力を借りてパワーアップし、このバリアのようなものを破壊すれば良いと暁は考えたのだ。

「よし、雷！ 電！ 3人でカードを使ってこのバリアをぶっ壊すわよ！」

「分かったわ！」

「なのです！」

暁、雷、電はそれぞれサイバーカードを取り出してジオデバイザーに装填し、それぞれザラガス、ネロンガ、エレキングの力をその身に宿す。

『サイバーザラガス、ロードします』

『サイバーエレキング、ロードします』

『サイバーネロンガ、ロードします』

サイバー怪獣の力を宿した3人は一斉に部屋の中のバリアを力いっぱい殴るが……バリアから電撃のようなものが放たれて3人は弾き飛ばされてしまう。

「「きやあああ!!」」

『おお!! みんな大丈夫か!!』

グルマンは弾き飛ばされた3人に駆け寄り、リョーガはこのバリアを見て「どうやらこれでも力が足りないようだ……」と流石に策が尽きたかと思うが……。

「まだよ! もう一回よ! 雷!! 電!!」

「うん!」

「はいなのです!!」

負けじと暁、雷、電は立ち上がって再びバリアを殴りつけるが……やはり3人はバリアによって弾かれてしまい、3人は背中から壁に激突する。

「ぐっ!? まだ……まだ!!」

「そうなのです! 今の響お姉ちゃんには……私達が、ついていないと……!」

それでも暁、雷、電は立ち上がってバリアを殴り……何度弾かれても何度も響を助けるため、救うため、守るために殴り続ける。

しかし、それでもバリアを破壊することはできず、制限時間も訪れてしまいサイバードの力が消えてしまった。

「だったら、別のカードで……いや、ちよつと待つてよ? そうだわ! リョーガさん! まだテストしてないだけで私、モンスフュージョン使えるわよね!」

「ああ、確かに制限時間が来てもモンスフュージョンは使えるが……実戦で使うにはまだ危険だ!」

「危険だろうがなんだろうが響が危ないかもしれないのよ!」

それでもリョーガはまだ使うには危険だと言い張るが……それでも暁は一步も引こうとしない。

「リョーガさん、私ね。最初に怪獣と戦うことになった時、響に言われたのよ。『私がおみんなを守る』って。だから私は言った、『響がおみんなを守るなら私が響を守る』って。だから!!」

暁はリョーガの制止を振り切ってサイバークードをジオデバイザーに再び装填させる。

『サイバーザラガス、ロードします』

『力を貸して!! 相棒《ザラガス》!!』

『サイバーザラガスフュージョン、アクティブ!』

すると暁の服には紫色のライン、左腕にザラガスの背中を模した主砲を装備した盾「ザラガスシールド」、右腕にザラガスの頭部を模した手甲「ザラガスホーン」が装備された「サイバーザラガスフュージョン」となり、暁はザラガスホーンを構えてバリアに突撃する準備をする。

「例えダメでもザラガスはダメージを受ける度に強くなる! これなら!!」

「だがやはり……!」

それでもリョーガは暁を止めようとするがグルマンに肩を捕まれて止められる。

「グルマン!」

『確かに危険かもしれない、だが信じようじゃないか。彼女を、彼女たちの絆というものをな』

「っ……」

グルマンにそう言われ、暁を止めるのをやめるリョーガ、そして暁は雷と電の方へと

振り返る。

「頼んだわよ、暁姉!」

「お願いなのです!」

雷と電が笑みを浮かべながら暁にそう言うのと暁も笑みを浮かべて「勿論よ!」と胸を張って言葉を返したのだった。

そして暁はザラガスホーンを構えてバリアに向かって突撃するが……やはり弾かれてしまい暁は壁に激突……。さらにそれだけではない、まだテストを行っていないため不完全だからか彼女の身体からバチバチと火花のようなものが飛び散り、雷達が心配そうに暁の名を呼ぶ。

「平気よ……これくらい!」

するとザラガスホーンが一瞬だけ発光し、先ほど暁がダメージを受けたため先ほどよりも暁の身体がザラガスの能力によって強化され、暁はもう1度バリアに向かって突撃。

「せめて……先っぼだけでも!!」

暁がそう願った瞬間、ザラガスホーンがバリアの中へとめり込み、彼女はそのまま突っ切ろうと力を込めてザラガスホーンを押し込んでバリアを砕き、暁はバリアの中へと侵入することに成功したのだ。

バリアが破られたため、雷達も中に入ろうとするがバリアはすぐに修復されてしまい、彼女たちまでバリアの中に入ることとはできなかつた。

「あーもう！ 何なのよ!!」

「後はもう、暁お姉ちゃんに頼るしかないのです……」

電の言葉に雷は静かに頷き、バリアをジッと見つめて「頼んだわよ、暁姉」と姉たちの帰りを信じて待つのだった。

*

一方、その響はというと……。

響は膝を突いて顔を俯かせたまま何もせず、ただじつとしており、その身体は徐々に闇の力に侵食されてきており、既に胸の辺りまでにその侵食が進んでいる。

『どうやら、誰かが侵入してきたようだ。んんっ？ どうやらお前の姉らしい』

当然、その場にはドライも居合わせており、暁がバリアの中に侵入してきたことも気づいていた。

そしてドライはそのことを響に伝えるが……。

『聞こえていないか。このまま放っておいても問題はないが……ただそれだけではつまらんな。今度は幻ではない、本当のお前の姉妹の死体を持って来て見せてやるよ』

ドライはそう言うのと右手をあげて「行け」とだけ言うのと小さい虫のような「何か」がどこかへと向かって飛んでいったのだ。

そして……バリアの中へと侵入することに成功した暁は薄暗く、紫色の霧のようなものを払いながら響どこにいいのかを探し回っていた。

「つていうか、なんで1つの部屋の中なのにこんなに広いのよ？ 亜空間ってやつかし

ら………? ああもう、暗いのと霧のせいで前がよく見えない………ッ!」
その時、不完全ザラガスフュージョン副作用としてまた暁の身体からバチつと火花が
散り、暁は多少とはいえ痛みを感じ顔を歪める。

だがそんなことを今は気にしている場合では無い。

一刻も早く響の安否を確認しなければならぬため、どれだけ辛くても彼女は響を見
つけるまで進むのを決してやめようとはしなかった。

(響はもつと痛くて………辛くて、苦しくて、悲しい想いをしたのよ! この程度
の痛み、屁でもないわ!!)

その時だ、突然………暁に向かって何かが飛んで来たのは。

暁は「わっ!」と驚きながらもそれを両腕で掴み取り、彼女は「一体何なのよ!」と
苛立ちながら掴み取ったものを見ると………。

「キジャアア!」

バスケットボールくらいのあるイナゴのようなスペースビースト、「インセクトタイ
プビースト ビーセクタ」だったのだ。

「ピイイイイイヤアアアアアアアアアア!!!?」

ビーセクタを間近で見た暁は思わず大声で!悲鳴をあげながらビーセクタを高く投げ
飛ばし、彼女は「ぜえ、ぜえ………」と肩で息をする。

てその衝撃で一気に身体に纏わり付いたビーセクタを焼き尽くす。

「やったわー！」

しかしなんと生き残ったビーセクタが全合体、「カイザードビシ」にも酷似しているが赤みのあつた部分が黒くなり、両腕も鎌となった巨大なビーセクタ……。「インセクトタイプピースト キングビーセクタ」となり、キングビーセクタは腹部の口からインナーマウスを出してメビウスに攻撃するがメビウスはそれを避けてインナーマウスを掴みあげてスイングし、遠くへと投げ飛ばす。

そしてメビウスが暁の方へと振り返るとある方向を指差す。

「メビウス…….? あっ! もしかして向こうに響が!？」

その暁の問いかけにメビウスは頷き、暁は「分かったわ! ありがどうメビウス!」と言い残してメビウスが教えてくれた方向へと暁は走り出した。

『さて…….こつちも!』

挿入歌 「ウルトラマンメビウス」

立ち上がったキングビーセクタは今度は両腕を伸ばしてすれ違いざまに両腕の鎌でメビウスの身体を斬りつけ、メビウスは身体から火花を散らして倒れ込むが…….すぐさま立ち上がり、メビウスはジャンプしてキングビーセクタに跳び蹴りを喰らわせる。

「グギャアア!!」

負けじとキンググビーセクタはメビウスに掴みかかるがメビウスは膝蹴りを叩き込み、さらにチョップをキンググビーセクタに食らわせる。

だがキンググビーセクタはメビウスから離れようとはせず、両腕を鎌からグビーセクタの顔へと変化させ、メビウスの両腕に噛みつく。

『ウアアアア!!?』

そしてキンググビーセクタはメビウスの腕を離すとそのまま体当たりで突き飛ばし、両膝にある目と両腕のグビーセクタの口から破壊光弾を発射し、それらがメビウスに直撃する。

『グウウウ!!?』

しかしメビウスはそれを耐え抜き、立ち上がると炎の紋章をその身に宿した「バーニングブレイブ」へと強化し、キンググビーセクタに向かって駆け出し、キンググビーセクタはこちらに向かって来るメビウスに向かって光弾を放つがメビウスは意にも返さずただ真つ直ぐキンググビーセクタに向かい強烈な拳がキンググビーセクタの顔面に叩き込まれる。

『シユア!!』

「ギジャア!!?」

「姉……さん……? なんで……だつてさつき、雷や電も、殺されて……」

「勝手に殺さないでよ! それに電や雷もまだちゃんと生きてるわ!!」

そう言つて暁は響の頭にチョップを叩き込み、響は「あう!？」と小さく悲鳴をあげる。「だつてさつき、ドライにみんな、私のせいで殺されて……。あの姉妹も、村の人もみんな……私と関わった人がみんな死んで……!!」

頭を抱えて怯えるように震える響、そんな彼女の姿を見て暁は優しく彼女を抱きしめた。

「大丈夫よ。アレは……あなたのせいなんかじゃないわ。むしろ響のせいだつて言う奴がいるのならそいつはバカでアホな間抜けよ!」

「だけど、私は……!」

響が何か言おうとした時、暁は人差し指を響の唇に押し当てて黙らせる。

「それでも、響は自分のせいだつて言うなら戦つて弱い自分と向き合いなさい。今、分かったわ。きつとあのウルトラマンが力を貸してくれなかったのはあなたが弱い自分と闘い向き合おうとせず、逃げようとしたから」

「それは……」

暁にそう言われて響は「確かにそうかもしれない」と感じた。

実際、戦うことに恐怖を覚えていたのは光に打ち明けた通り事実だ。

「けど、姉さん……。私はそれだけじゃない、あいつ等が……ドライ達が憎くて憎くて仕方がないんだ……！ あいつ等を叩きつぶさないと気が済まない……！ そんな感情も、私にはあるんだ！ こんな感情のまま戦っちゃダメだつて分かつてるのに……！」

今にも泣き出しそうな響を睨さらに強く……けれども優しく抱きしめる。

「響、怖くても憎くても悲しくても……そんな感情を持つて戦つても私は良いと思う。だつて響にはもつと大きな想いがあるもの。私は知つてる、それがあから……響は戦えるんだつて」

「恐怖や憎しみなんかよりも……大きな想い……？」

響の問いかけに暁は「そうよ」と小さく頷く。

「私は……姉妹や、仲間を……関わつた人達みんなを守りたい……でも私は!! 守れなかった!! あの村を……大いなる力があつたのに!! だから……結局なれないんだよ、ヒーローになんて……私は……」
「それでも立ち止まっちゃいけない、だからこそ前に進むしかないじゃない! それか……大いなる責任なんじゃないの……? 『責任というのは【誰がやつたんだ?】と訊かれた時、そこから逃げ出さないこと』なんじゃ、ないの……?」

「っ！ その言葉……！」

暁の最後の方で言った言葉、その言葉には聞き覚えがあった。

それは響の好きな蜘蛛の力を持った赤と青のヒーローの叔母がそのヒーローに対して言った言葉、当然……響はこの言葉を知っていた。

「響、忘れたの？」

暁にそう言われて「えっ？」と首を傾げる響。

『誰でもヒーローになれる。特別なことをしなくても……。傷ついた少年の肩に上着をかけて、世界の終わりじゃないと励ませばいい』この言葉、響なら誰が言ったか分かるんじゃないか？

「それは……」

「そしてこれは私の、私自身からの言葉。よく聞いてね？」

響は無言のまま頷く、暁は少しだけ息を吸う。

「諦めるな」

たったそれだけ、それだけの言葉……だが、その言葉だけで響は救われた気がした。

なぜだかは分からない、だけどそれでもそう思えて仕方がなかったのだ。

「響はヒーローになれる、なんとたって……私の妹だもん！」

胸を張って満面の笑みを見せる暁、それを見た響は……

「なれる、かな……。私も」

「なれるに決まってる。信頼してるから、私……響のこと。ううん、私だけ

じゃない、雷も電もみんなも」

「ははっ……私もだ、姉さんも雷も電も……みんなも、私は信頼してるよ」

そしてその時……響が御守りとしてポケットにしまってた持っていたガンバルクイナくんが眩い光を放ち始めたのだ。

その光は響に纏わり付いていた闇を吹き飛ばし、その光は周りを包んでいた闇も……まとめて弾き飛ばしたのだ。

「っ!? これは……?」

光が収まるとそこには何時もの部屋……のだが、1つだけ何時もと違う光景があつた。

「ひ、響……それ……」

「えっ?」

暁が自分を指差し、何事かと思い自分の身体を見てみると……服装が何時もと違つていたので。

「これはまさか……?」

そう、その姿は響の「改二」とも言える姿……「ヴェールヌイ」だったので。

「ヴェールヌイになった……?」

とそこへ響……ヴェールヌイと暁が戻つて来たことに気づいた雷と電は部屋へと慌てて入り、2人は暁とヴェールヌイに同時に飛びつくように抱きついたので。

「響姉!! 暁姉!!」

「お姉ちゃん達戻つて良かったのですうー!!」

「おわ!!」

2人に抱きつかれてヴェールヌイも暁もその場に倒れ込み、抱きつかれた2人は雷と電の顔を見ると余程心配してくれていたのか今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「心配をかけてすまない、もう大丈夫だ」

「ホントに？」

「ああ」

ヴェールヌイが優しく雷と電の頭を撫で、彼女らに對して微笑みを向けると雷と電は顔を見合わせヴェールヌイの様子からどうやら彼女が立ち直ったことが分かった。

「そう言えば……響お姉ちゃんその姿……」

「ああ、ヴェールヌイになった。でも別に呼び方は今までと変えなくて良いよ？」

「っていうかそれよりも！今の響ならもう大丈夫だろうし、私達も出撃しなくちゃ！」

そこで思い出したように暁がそう言い放ち、響は暁の言葉に頷いて立ち上がり、全員で出撃しようとするのだが……

「うぐっ!？」

突然、暁の身体から「バチバチ」という音が聞こえ……ザラガスフュージョンも流石に限界が来たのか、ザラガスフュージョンが強制的に解除されて彼女の元の姿に戻り、倒れ込みそうになるがそれをヴェールヌイ達が支えた。

「暁ちゃん、やはりこれ以上の戦闘は無理だ。今はゆっくり休め」

「でも……!？」

「大丈夫だよ、姉さん。姉さんは十分戦ってくれた。だから、今度は私達が！」

そしてエックス達は……ビーストとしての新たな能力を授かったダイオリウスとシルバーブルームの猛攻に苦戦しており、エックスは「時雨アーマー」を装着して両手に持つ主砲から砲弾をダイオリウスとシルバーブルームに放とうとするが……。地面に触手を潜らせていたシルバーブルームがエックスの両腕を拘束して動きを封じ、ダイオリウスが針を発射してエックスを攻撃、針は時雨アーマーを破壊しエックスは大ダメージを受ける。

『グウウウ!!?』

「もう……あいつ等厄介な能力使ってムカつくわね!」

夕張は悪態をつきながらエックスを援護するためエックスを拘束しているシルバーブルームの触手を時雨や村雨と一緒に砲撃で攻撃し、シルバーブルームは拘束を解くが……その時、夕張達の後ろからシルバーブルームが地面に潜らせていた別の触手が現れ、夕張達に襲いかかる。

「危ない!!」

夕張、時雨、村雨はすぐさま反撃しようとするが主砲を構えるが……その時、触手は別方向から放たれた砲撃によって弾かれ、触手は地面の中へと戻っていった。

「今は……」

時雨が砲弾が飛んできた場所に視線を移すと……そこには雷、電……

そしてヴェールヌイが主砲を構えて立っていたのだ。

「響！ 雷！ 電!!」

「つて響ちゃん、その姿は………?」

村雨がヴェールヌイの姿を見て首を傾げ、ヴェールヌイはサムズアップして「改二」とヴェールヌイになったよ」と彼女たちに教えた。

「待たせたね、もう………私は大丈夫だから」

そう言いながらヴェールヌイはエポルトラストアを取り出し、それを鞘から引き抜いて掲げると彼女は光へと包まれ、彼女は銀色の巨人……「ウルトラマンネクサス アンフアンス」へと変身したのだ。

ネクサスは現れると同時に空中を飛んでいたダイオリウスに跳び蹴りを喰らわせてたたき落とし、さらに両腕のアームドネクサスから放つ光刃「パーティクル・フェザー」をシルバールブルーメに喰らわせる。

「グギヤア!」

ネクサスはエックスの元へと駆け寄ると右手を差し出し、そこから光の粒子のようなものを出してエックスのカラータイマーに注ぐとエックスの赤く点滅していたカラータイマーが青に戻り、ネクサスはエネルギーを分け与えたのだ。

「響………はは、もう大丈夫みたいだな!」

『行くぞ夜空！　ここからが反撃だ！』

「ああ!!」

エックスは立ち上がるとネクサスと共に並び立つ。

そこへ、地面を突き破って「フィンディツシュタイプビースト　ノスフェル」と「闇の巨人　ダークメフェイスドライ」が出現し、ドライは怒りに震えたように拳を握りしめる。

『よくも．．．よくもお!!　貴様だけは絶対に許さん!!　何がなんでも貴様の光を奪い取ってやる!!』

『私もお前だけは絶対に許さない！　懺悔の用意はできているか!!』

挿入歌「ウルトラマンX」

そしてエックスとネクサスはシルバールーム、ダイオリウス、ノスフェル、ドライへと向かって駆け出し、エックスはジャンプして空中にいるダイオリウスの顔面に拳を叩き込むとダイオリウスは地面に落下する。

すると今度はエックスが地面に着地した瞬間を狙ってノスフェルが背後から爪を振りかざして来るがエックスは振り返りざまにその爪を掴み、腹部に蹴りを叩き込む。

『シユア!!』

「グル!？」

一方でネクサスは触手で攻撃してくるシルバーブルーメの触手をアームドネクサスで切り裂くが……斬つても斬つてもシルバーブルーメの触手がすぐに再生……いい加減しつこく感じたネクサスは一瞬の隙を突いて両腕を交差して高速で動く「マツハムーブ」を使いシルバーブルーメに一気に接近する。

そしてその勢いを利用した「アンフアンスパンチ」をシルバーブルーメに叩き込んで殴り飛ばし、ネクサスは高くジャンプすると右足を発光させてドリルのように回転しながら放つ急降下キック「スピニングクラッシュキック」をシルバーブルーメに叩き込んだ。

するとシルバーブルーメの本体の部分にヒビが入り、シルバーブルーメは苦しむ様子を見せる。

どうやらそこを再生する様子がないことを考えると再生するにも限度というものがあるらしい。

『デア!!』

そこにドライがメフィストクローでネクサスを攻撃を仕掛けるがネクサスはそれを回避すると同時にドライの胸部に肘打ちを叩き込む。

『グウー！ ハア!!』

ドライは左腕のメフィストクローをメフィストウィップに変化させてそれをネクサ

スに振るうがネクサスはそれを掴みあげ、そのまま勢いよく引つ張ってドライを引き寄せるとそのままドライの顔面に拳を叩き込む。

『シエア!!』

さらにネクサスの頭上を飛び越えてエックスが跳び蹴りをドライに叩き込み、ネクサスは後ろから迫ってきていたノスフェルに回し蹴りを喰らわせ、アームドネクサスでノスフェルの両手の爪を切り落とすとノスフェルの口を掴みあげて無理矢理開けさせ……電達に視線を送る。

「そこを攻撃しろってこと?」

「よし! みんなやるよ!」

夕張、雷、電が主砲を構えると一斉に砲弾をノスフェルの口の中に発射し、砲弾はノスフェルの弱点でもある口の中に命中……。これでノスフェルの持つ再生能力が消え去り、ネクサスは蹴りを叩き込んでノスフェルを引き離す。

『後は私達でやる』

そして……。ネクサスが右拳を胸の前にかざし、それを振り下ろすとネクサスの姿が変わり……。白い姿……。「ジュネツスホワイト」へと姿を変えたのだ。

『夕張!』

それと同時にグルマンから夕張に対して連絡が入り、夕張が通信に出ると「どうしましたグルマン博士？」と問いかける。

『お前のカードが出来た！ 今すぐエックスに送るんだ！』

『もう出来たんですか!? 分かりました！ エックス、受け取って!!』

夕張は転送された自分のサイバーカードを自分が持つジオバイザーを使い、カードをエックスへと送り、夜空は新たに送られたカードを受け取る。

『新しい艦娘のカードか！ よし、行くぞエックス！』

『ああ！』

夜空は受け取った夕張のカードをエクステバイザーに装填させる。

『軽巡洋艦 夕張、ロードします』

するとエックスの身体に夕張の艦装を模したアーマーが装着され、両手には時雨の時は「持つ」タイプの主砲だったのに対し、夕張のは「両腕に装着」するタイプの主砲が装備された「夕張アーマー」をエックスは纏ったのだ。

『軽巡洋艦 夕張アーマー、アクティブ!』

それからネクサスは右拳を掲げるとそこから光が放たれ、黄金の光が滝のようなものが降り注がれ・・・戦闘用不連続時空間「メタフィールド」が展開され、その場からシルバーストーム、ダイオリウス、ドライ、ノスフェル、エックス、ネクサスがそ

の場から消え去ったのだ。

「消えた……?」

そしてメタフィールドの中ではエックスとネクサスがドライ達を激しくぶつかり合っており、ドライはネクサス達に有利とも言えるこの空間を塗り潰そうとネクサスのメタフィールドを無効化する暗黒時空間「ダークフィールド」を展開しようとメフィストクローを地面に突き刺すが……。

『無駄だ!』

ネクサスが右手を一降りするとそこから眩い光が放たれて逆にダークフィールドの展開が無効化されてしまったのだ。

『バカな! ふん、だが幾ら貴様等に有利な空間でも4対2、貴様等に勝ち目はない!!』

『2人だけじゃない……』

『なに?』

ネクサスは右手を自分の胸に当てて高らかに叫ぶ。

『私達の心は……共にある!!』

挿入歌「飛び立てない私にあなたが翼をくれた」

ドライとノスフェルは共にネクサスに向かって行き、ドライは右手のメフィストクローでネクサスを斬りつけるのだが……ドライのメフィストクローは「バキイ

!!』という音を立てながら砕け散ってしまった。

『なんだと!?!』

そこに今度はノスフェルがネクサスに掴みかかってネクサスの肩を噛みついて来るのだが………今度はノスフェルの歯が「バキ!」と折れ、ノスフェルは悲鳴をあげ、ネクサスは何発もの拳をノスフェルに叩き込む。

『シエアアアアッ!!』

「グアアアアッ!!?」

ならばと思いいドライは左腕のメフィストクローを鞭状に変化させてネクサスの首に巻き付けて締め上げ、流石にこれは効いたのかネクサスは苦痛そうな声をあげるが………そこにエックスが放った砲弾がメフィストウィップを焼き尽くし、ネクサスは首に巻き付いたメフィストウィップを投げ捨てる。

『貴様あ!!』

ドライは怒りに震えてネクサスに向かって跳び蹴りを繰り返してネクサスに喰らわせるがネクサスはビクともせずドライの足を掴みあげるとそのまま地面に叩き伏せ、拳をドライに振りかざそうとするがノスフェルの突進を喰らってネクサスは吹き飛ばされてしまう。

立ち上がったドライは巨大な闇の球を造り射出する。闇の玉は小さな小弾に分裂し、

敵目がけて降り注ぐ「ダークレイクラスター」を放つがネクサスは頭上に円状のシールド「サークルシールド」を展開して攻撃を防ぎ切り、さらにそのサークルシールドを右手に持つとそれをノスフェルに向かって放つ「サークルシールドスロー」を繰り出し、シールドによってノスフェルは切り裂かれ、ノスフェルは火花を散らして爆発した。

『シエアアアアア!!?!?』

「ギジャアアアアアアア!!?!?」

またシルバーブルームとダイオリウスと戦うエックスは………。

シルバーブルームはまた触手を幾つか地面に潜らせてエックスに攻撃を仕掛けるが………エックスはまるで出てくる場所が分かるように触手が出てきた瞬間に主砲を放ち、触手を撃ち抜く。

「最強の対潜攻撃力を持つ夕張の力だからな、地面に潜っても意味ないんだよ!」

だがそこにダイオリウスが針を発射して来るが………エックスはその全てを主砲で撃ち落とし、そのままダイオリウスに砲弾を喰らわせ、さらにはシルバーブルームのヒビの入った部分を狙い、本体に砲弾を喰らわせると………シルバーブルームの身体から火花が散る。

そのままシルバーブルームは火花をあげながら爆発したのだが………今度はダイオリウスが体当たりを仕掛け、エックスはダイオリウスの体当たりを受け止め………

零距离からの砲撃を喰らわせてダイオリウスを吹き飛ばす。

そしてエックスは全主砲にエネルギーをチャージし……それらを一齐に発射する。「フルスロットルブラスト」をダイオリウスに喰らわせる。

「フルスロットルブラスト!!」

「ギユアアアアアア!!」

フルスロットルブラストを喰らったダイオリウスは空中で爆発四散した。

そしてネクススはドライが振るってきた左腕のメフィストクローを掴み、それをへし折ると強烈な拳を叩き込んで殴り飛ばす。

『グウ!? ハアアア!!』

ドライはメフィストクローから放つより強力な「ハイパーメフィストショット」を発射するがネクススはそれらを右腕のアームドネクスサスで受け止め……それを2倍の威力にして跳ね返す。「ネオスピルレイ・ジェネレード」を繰り出しドライに喰らわせ、ドライは身体から火花を散らす。

『成程、その姿……防衛力に優れてるのか……ならば強力な一撃を喰らわせてやる!!』

ドライは「ダークイリリジョン」を使って3人に分身すると右腕にエネルギーを溜め込み、発射する強力な破壊光線「ダークレイ・シュトローム」を3人のドライがネク

サスに向かって放つ。

そこにエックスが駆けつけ、ネクサスと領き合うとエックスは再び「フルスロットルブラスト」を発射し、ネクサスは右手を掲げるとそこから巨大なエネルギーシールドを作り出し、それをドライ達に向かって放つ「シールドレイ・シュトローム」を繰り出す。「フルスロットルブラスト!!」

『ハアアア、シユア!!』

ネクサスとエックスの技がドライの技が激しくぶつかり合うが……すぐにネクサスとエックスの技が押し返し、それらがドライを包み込み、ドライは身体中から火花を散らす。

『ぐあああああああああ!!?!?!?!?!?』

申し訳……ありま、せん……ザ……

激しく火花を散らしながらドライは倒れ、爆発した。

*

「響！」

戦いが終わり、夜空が彼女の元へと駆け寄ると彼女はジツと自分の持つエボルトラス
ターを見つめていた。

「響、お前……その姿……」

「もう飽きてきたな、その反応」

響が苦笑しながら夜空にそう返すと……エボルトラスターが突然消滅し、夜空はエボルトラスターが消滅したことに驚いた。

「消滅した……?」

「いや、受け継がれたんだ……」

「受け継がれた?」

夜空の問いかけにヴェールヌイは静かに頷く。

「光は絆だ。誰かに受け継がれ、再び輝く……」

「光は、絆……」

「それと、司令官……君に1つだけあのウルトラマンからの伝言だ」

ヴェールヌイにそう言われ、首を傾げる夜空。

「『諦めるな』。君にそう言ってくれて……。どうしてもこの言葉を伝えて欲

しかったのか、何の意味があるのか、私には分からない。でも私は、この言葉に救われた。きつと、近い未来に必要なことなのかもしれないね……」

「……『諦めるな』、かつ……。そう言えば、あのウルトラマン、なん

て名前だったんだろうな……?」

するとヴェールヌイは口元に笑みを浮かべ……。あのウルトラマンの名前を口

にした。

「絆・・・・・ネクサス」

「ウルトラマン・・・・ネクサス・・・・」

ED 「どこまでも響くハラシヨ」

阿久野についてはまた別エピソードで。

第12話 『悪夢』

どこかの宇宙……そこでは口の中に目があるという不気味な外見を持ち、肩には口のついた2本の首のようなものがある魔獣……「化石魔獣 ガーゴルゴン」が「光輝く巨人」……エックスと同じ、「ウルトラマン」と宇宙空間で激しい激闘を繰り広げていた。

『シューア!!』

巨人はガーゴルゴンに勢いよく突っ込んで拳をガーゴルゴンの胸部へと叩き込み、ガーゴルゴンは小さな悲鳴のような声をあげるが負けじと両肩の口から稲妻状の破壊光線を巨人に向かって発射し、光線は見事に巨人へと直撃してしまう。

『グウ!?!』

火花を散らしながら吹き飛ばされる巨人だが、巨人はどうか体制を立て直してガーゴルゴンへと向かって行き、ガーゴルゴンは破壊光線を放って巨人を近づかせまいと攻撃するが巨人は飛行しながらどうかガーゴルゴンの攻撃を回避していき、一度空中で止まると両腕を突き出して光線を発射……ガーゴルゴンの破壊光線とぶつかり合い相殺させ爆発が起きる。

その際、ガーゴルゴンと巨人の間に白い煙幕のようなものが出来上がり煙幕はすぐに晴れたのだが……巨人の姿はそこにはなくガーゴルゴンは辺りを見回す。

『ダアアアアア!!』

すると上空からガーゴルゴンに向かって巨人が急降下キックを繰り出し、ガーゴルゴンは頭部を蹴りつけられて近くにあった小惑星に落下し叩き落とされる。

しかしガーゴルゴンも落下しながらも破壊光線を巨人へと向かって放っており、それを喰らった巨人もダメージを受けて同じようにガーゴルゴンと同じ小惑星へと落下してしまう。

『へアツ!? グウ……!』

なんとかすぐに起き上がるとうする巨人だったが先に起き上がっていたガーゴルゴンの蹴りつけられて吹き飛ばされてしまい、巨人は地面を転がる。

「ギシヤアアア!!」

『へアツ!!』

そのままガーゴルゴンはすぐさま巨人の元へと行くと巨人の首を左手で掴みあげて右手の爪で巨人を斬りつけ……巨人は軽く吹き飛ばされるがその瞬間に右手から巨人は光弾を放ってガーゴルゴンに反撃、ガーゴルゴンは多少たじろいたものの大したダメージは受けていなかった。

さらに巨人のカラータイマーは点滅を始め、エネルギーも既に尽きようとしていた。

『ハアアア．．．．．シユアアアアアアアアアア』

『グルルル!! ギャアアアアアオオオオオオオオオオ!!!!!!』

そして巨人はなんとか立ち上がり．．．．．最後の力を振り絞って右腕を突き出して必殺の一撃を放ち．．．．．それに対しガーゴルゴンも中央の口を開きその中にある目から相手を石化させる光線を発射し．．．．．2人の技がぶつかり合った時．．．．．辺りは眩い光へと包まれるのだった．．．．．。

*

一方、地球では……そこでは「ウルトラマンエックス」がハッキリとは見えない「ナニカ」と戦っており、エックスはその敵に向かって駆け出して行くのだが……エックスの身体は敵の放った攻撃によって激しく火花を散らし始める。

『グアアアア!!?』

膝を突くエックスだが……それでもどうにか立ち上がり敵へと尚挑もうと前へと進む……。

だがエックスはさらなる敵の激しい攻撃を幾つも幾つも受け……遂に力尽き、赤く点滅していたカラータイマーは点滅を止め、目から光は消えエックスはその場へと力なく倒れ込んだのだ。

しかしそれだけでは終わらなかった、倒れ込み動けなくなったエックスに向かって敵は尚も攻撃を続けたのだ。

それをただ……啞然と見ているしかなかった少女……。「時雨」は必死に叫んだ。

「……………夢か」

それが彼女……………白露型2番艦の時雨の第一声がそれだった。

つまり、夢オチである。

だが、時雨はあの夢を思い出して何かが引つかかるらしく険しい表情を浮かべており、彼女は希に見る史実での夢のことを思い出していた。

艦娘は希に自分達が艦だった頃……史実だった頃の記憶を夢を見て思い返す時があり、それはただの夢ではなくもつと別の……実際にその時の出来事をまた体験しているような感覚だった。

そして今回見た時雨のあの夢……あの夢もまさしくそれに近い感覚でまるで……自分が今体験しているような……リアルな夢……。

先ほど見た夢を思い返しどこか胸騒ぎを感じた時雨は急いで着替え、まだ時間帯ならまだ部屋にいるだろうと考えすぐに夜空のいる部屋へと向かった。

「提督!!」

ノックも無しに勢いよく部屋の扉を開けるとそこには……着替え中で下着姿の夜空がいた。

「……………」

しばらくの間思考停止する2人だが……時雨は顔を真っ赤にして「ボンッ!」と頭から湯気を出して顔を真っ赤に染めた後にすぐに我に返り「し、失礼しました!!」と言つて扉を素早く閉じた。

それから数分後……一通り着替え終えた夜空がひよつこりと部屋から顔を出すと向かい側にまだちよつとだけ顔が赤い時雨が体育座りしており、夜空と時雨は互い

に顔を見合わせると少しだけ気まずそうな雰囲気……。

「時雨、お前……ノックくらいしろよ」

「ご、ごめんね？　ちよつと、提督が心配になつて……」

時雨の言葉を疑問に思つた夜空は首を傾げ「心配になつたつてどういうことだ？」と彼女に聞こうとしたのだがそれよりも早く時雨が自分の方へと駆け寄つて服の裾を握りしめる。

「提督、どこも……身体が悪かつたりしないよね？」

「あ、ああ、無いけど……いきなりどうしたんだ？」

「ほんとに？　どこも悪くない？　少しも？」

不安げな表情を見せる時雨に夜空は笑顔を見せて優しく彼女の頭を優しく撫で、「少し落ち着け」と声をかけた後、時雨はこくんつと小さく頷いた。

取りあえずこのままというのもあれなので一旦時雨を部屋に入れた後、彼女から一通りの説明を受けるのだった。

「それで胸騒ぎがした……つと？」

「うん。でも、やつぱり夢は夢だったのかな」

説明を受けた夜空は顎に手を当ててしばらく考え込んだ後、もしかすればそれがただの夢ではないのかもしれないと思つた。

現に時雨もそう思ったからここに来て訳で……しかも「過去のことを夢に見る」のと同じ感覚だということだからやはり「ただの夢」だとまだ決めつけるのは早いだらう。

特に気になるのは今まで見ていたのが「過去の出来事」だったのに対し、時雨の話の内容からして恐らくその夢は「未来の出来事」ではないかと推測されるが……。(エックスの敗北……そして、俺が死ぬ……ただの夢じゃないのだとしたら、俺もエックスも……)

「ご、ごめんね？ やっぱりきつとただの夢だよ。感覚が似てるって言っても予知夢なんて見たことないもの……。自分が死ぬなんて言われたら不安だよ……」

夜空が少し不安そうな顔を浮かべていることに気づいたのか時雨は慌てて誤り、「やっぱりただの夢だよきつと」と自分にも言い聞かせるように夜空に言う彼女だったが……夜空はそんな彼女に笑みを浮かべて「大丈夫」と声をかけた。

「仮にそれが本当に予知夢で近い未来に起こりうることだとしても……未来は変えられる。1人では変えることができなくても……お前等と一緒になら、きつと良い未来を作れるさ」

「……うん。 そうだ、 そうだよねみんながいる」

夜空は時雨の頭を撫でながらそう言い放つと時雨は先ほどまで不安だった表情が笑

顔へと変るのだが……その時、時雨はつい「ふあ……」と小さく欠伸をしてしまい慌てて口元を押さえる。

「そう言えば、俺達今日早起きだな……俺は目が完全に覚めたから起きたけど、時雨は部屋に戻ってもう一回寝るか？」

「うん、そうするよ……」

時雨はそう言つて立ち上がり、自分の部屋へと戻……らずにそのまま「こてんつ」と夜空の膝の上に自分の頭を置いて眠り始めたのだ。

「お、おい!? なんで俺の膝の上で……!?!」

「……ここがいいんだ。ダメ……かな?」

上目遣いで……ウルツとした瞳で見つめながら夜空の膝の上でお願いしてくる時雨に夜空は若干頬を赤く染めつつも右手で頭を抱えた後、「分かったよ」と彼女がそこで寝ることを承諾したのだった。

「ありがと、提督」

「全く……」

と言いつつも心なしかどこか嬉しそうな顔を浮かべている夜空であった。

*

今日はサイバーゴモラの実体化テストを行うため、夜空はグルマンやリョーガ、もしもの時のために護衛として朝潮、時雨、ヴェールヌイ、夕立、満潮、菊月を引き連れて以前にも実験のために使った山奥へと訪れており、一通りの準備を行った後、サイバーゴモラの実体化テストを行っていた。

「司令官！ 準備が完了しました！」

朝潮の言葉に夜空は頷いて頭にサイバーゴモラを実体化させるための装置を取り付け、エクステバイザーを取り出してサイバーゴモラのカードを装填する。

最も……ゴモラは未だに時雨に力を貸すことを拒否しているようで、そんな状態でこの実験が上手くいくかどうかと言えば上手くいかない可能性が高く、満潮や朝潮なども他のサイバー怪獣で実験した方が良いのではないだろうかという意見も出たのだが……。

夜空としてはやはりどうしても最初の成功例はゴモラにしたいという気持ちがあり、夜空はサイバーゴモラ以外を使う気はせず、何よりも一番自分の気持ちに伝えてくれるとすればゴモラしかないだろうということでゴモラ以外を使うことはせず、今日もゴモラを使って実験を行っていたのだ。

「よし、じゃあテストを始めるぞ！」

『サイバーゴモラ、ロードします』

26回目のサイバーゴモラとのシンクロ実験を開始し、徐々にサイバーゴモラは実体化を始め……数秒後には実態をサイバーゴモラが出現し、後はそれを長時間意地するだけなのだが……。

「よし行けるぞ！ 頑張れゴモラ！」

だが、サイバーゴモラは敢えなく消滅してしまい……結局今回も失敗に終わってしまったのだ。

「また、ダメか……」

それから夜空はグルマンとリヨーガの元へと行き、どこが悪かったのかを一緒に調べ始める。

『以前よりも遙かにサイバー怪獣を実体化させるシステムは確立されている筈なのが……やはりどこかシステムに欠陥があるのだろうか……』

「私が見る限りではシステムは完璧だと思うんだがねえ……。計算ではこれで完全に実体化できる筈なんだが……」

「後一歩つてところか……」

夜空は机の上にあったゴモラのスパークドールズを見つめ、そつとそれと掴み取ると今のゴモラの気持ちを知りたかったのか夜空はゴモラの感情を知るため、エクステバイザーにゴモラのSDをリードさせて感情を解析するのだが……。

『ゴモラ、解析中……解析不能』

「やっぱり……ゴモラ、なんで俺にまで心を閉じてしまったんだ、ゴモラ……！」

夜空は不安そうな表情で……ゴモラの今の気持ちを知らうと何度かエクステ

バイザーで解析しようとするが幾らやっても「解析不能」としかかず、やがて満潮から「いい加減にしなさいよ！」と怒鳴られたことで夜空は我に返り、解析するのを諦めた。「つたく、無理にゴモラの気持ちを聞き出そうとしても逆効果に決まってるでしょ？先ずはゴモラの気持ちを引き出すんじゃないや無くて理解しようとするところから始めたらどうなのよ？」

「そう、だな……すまない満潮……。はあ、こいつとは小さい頃から一緒にいて……ゴモラのことなら誰よりも知ってるつもりなんだけだな……。」

最近じゃ全く分からない、ゴモラがなにを考えているのか……。」

夜空はゴモラのスパークドールズを見つめながらそう呟くと……。」

「そうですね、確かに、司令官は誰よりもゴモラと一緒にいた時間は長かった筈です……。」。ゴモラのことならなんでも知ってる、そんな気持ちなんだと思います。だけど、身近な存在だからって何でも知ってるとは限らないと思います。例えば家族の間柄だとしても、知らないことって割と多いものだと思いますよ？」

「朝潮……。なにも言い返せないな……。」。つてことはお前の言ってることがきつと正しいんだらうな……。」

苦笑いしながら……。されどもどこか落ち込んだ様子を見せる夜空に、時雨はなにか声をかけようと思いい彼の背中に手を添えた。

「ゴモラが心を閉ざしてシヨックなのは提督だけじゃないよ、僕もさ……」
 からみんなで見つけよう？　ゴモラの本当の気持ち……」

「……ああ、みんなありがとう」

するとそこでヴェールヌイが「暗い雰囲気は終わりにしてお腹が空いたからお昼にしよう」と言いだし、なぜか彼女は背中に装着していた艤装を外して下ろす。

「響……？　なんで艤装を外してるんだ？」

疑問に思った菊月がヴェールヌイに問いかけると、ヴェールヌイは艤装の先をパカッと開けて手を突っ込むと……串に刺したおでんが出てきた……。

「なんでだあああああ!!!」

「流石に山は冷えるからね!!!」

「そういう問題じゃないだろ!!　なんで艤装の中におでんが入ってるんだ!」

「心配ない、みんなの分もあるよ」

「響、私は卵欲しいっばい」

「話を聞けええええええ!!!　あと夕立なに食べ始めてるんだあ!」

今日も今日とて割とやりたい放題なヴェールヌイとツツコミが冴え渡る菊月に、夜空達は思わず苦笑いしてしまうのだった……。

*

以前、夜空の鎮守府にも訪れたことがある「白露型5番艦 春雨」と「白露型9番艦
その頃……夜空と時雨が以前着任していた鎮守府に所属している艦娘で……

江風改二、「夕張型1番艦 夕張」そして「吹雪型1番艦 吹雪改二」と「川内型1番艦 川内改二」「長良型2番艦 五十鈴改二」が遠征任務を終えて鎮守府へと帰投している時のことだった。

「はあ………深海棲艦ももう殆どいないから遠征任務ばかりなのは分かっていたけどさあ………最近、全然夜戦しなくなってつまらないー!! 演習でも良いから夜戦がしたいよ夜戦ンー!!」

「江風も同感だよ川内先輩!! 江風も夜戦がしたいー!!? 夜戦だ夜戦ー!!」
 「うっさいわねこの夜戦バカコンビ!? ちよつと誰か黙らせてくれない!」

「夜戦夜戦」とうるさい川内と江風に頭を抱えながら誰かなんとかしてくれと願い五十鈴………そんな彼女の願いを叶えるように………夕張が川内と江風に近づくと………。

「夜戦夜戦ー!! 夜戦がしたいー!!」

「………(無言の腹パン)」

「ぐほお!」

あんまりにもうるさいので無言の腹パンを決め込む夕張だった。

「ちよつと!? 大丈夫ですか2人とも!? 夕張さん、ちよつとやりすぎなんじゃ………」

「いや、よくやったわ夕張。一応まだ任務中なんだから騒ぐのは帰ってからにきなさい」

い。 でないとまた夕張にダイレクトアタック（物理）させるわよ？」

「は、はい、すいませんでしたー……」

吹雪が今のはちよつと……と言うが旗艦である五十鈴がじきじきに許可を出し、流石にもう夕張の無言の腹パンという名のダイレクトアタック（物理）を喰らいたくないので川内と江風は静かに黙っていようと思うのだった。

「んっ……？ 五十鈴さん！ あれ、なんででしょうか……？」
「えっ？」

その時……春雨がなにかに気づき、五十鈴は彼女の指差す方へと顔を向けるとそこには海の中から「巨大な鉄のような塊」が出現し……やがてそれは巨大な「船」のような形をした「スクラップ幽霊船 バラックシップ」が出現したのだ。

「あれは……船……？」

「潜水艦でもないのになんで船が海の中から現れるのよ……」

するとその時、突然……五十鈴達は自分の意思とは関係なく、自分たちの身体がバラックシップに引き寄せられ始め、五十鈴達は突然のことに驚き、慌ててバラックシップから全速力で逃げようとするのだが……バラックシップが発生させる磁力があまりにも強力で彼女たちの機装がその磁力に引き寄せられ、バラックシップは同時に彼女たちを引き寄せようとしていたのだ。

「おいこのままじゃアイツに引き寄せられちつまうぞ!!?」

「これは……強力な磁力で引つ張られてる!？」

そして夕張は即座に自分たちを引き寄せているものが磁力であることを理解し、艀装をすぐに外そうと思つたのだが……海の上を走るために足に装着されている物も艀装であるため、それだけ難を逃れることはできないと思ひ彼女はならばと考え、リョーガから支給されたジオデバイザーとサイバーカードを取り出し、ジオデバイザーにサイバーカードを装填。

『サイバーアントラー、ロードします』

「これなら行けるはず!!」

磁力を発生させることができる「磁力怪獣 アントラー」の力を使い、バラックシツプの発生させている磁力と似た磁力を発生させ、「磁石の同じ極同士はくつつかない」という法則を利用して一同はすぐさまその海域から脱出するのだった。

*

数日後……夜空の鎮守府の執務室にて……。

「共同作戦……ですか？」

夜空の鎮守府に上層部の1人である……あのドライと裏でコソコソと動いていた「阿久野」が夜空の元を訪れており、彼は夜空が以前勤めていた鎮守府と共同してバラックシップの対処に当たって欲しいというのだ。

「でも、そんな大きな磁石の塊みたいな船が動き回るなんて信じられませんね……」

「ああ、だが調査の結果その船は15年前にマゼラン海峡付近を航行中に氷山に激突し

て沈没した『クイーンズ号』であることが判明した。既に怪物マシンと化したクイーンズ号による被害も相次いでいる、早急に対処が必要なのだ」

阿久野の言うには「クイーンズ号」はかつては最新鋭のコンピュータ制御によって無人で動くことが可能の船であり、沈没前にプログラミングされていた通りに従って自身に積み込まれた荷物を日本に届ける為にアメリカの沿岸から東京湾を目指して航行していたのだがコンピュータにも予測できていなかった氷山に激突し、確かに沈没した筈だったのだが……。

クイーンズ号は海底に眠る無限の鉄資源を利用して自己再生を遂げて復活した廃船や沈没船の塊となり、自身が沈没してしまった原因となった氷山に「2度と負けない」身体を15年かけて作り上げたというのだ。

「しかし、どうして駆逐艦しかないウチの鎮守府を……?」

「うむ、それなんだが……どういふ訳かこのクイーンズ号、いや、レジストコード『バラックシップ』はこの鎮守府の近くにある街に向かって来ているようだ。

24時間後には到着するだろう、ここは君たちの管轄だが……バラックシップは艦娘にとって相性は最悪。人手は多い方が良いだろう。出来ればもう少し人手を用意できれば良かったんだが……中々都合が悪い人達が多いようですね、すまないな」

阿久野は申し訳なきように夜空に謝罪した後、夜空は「いえ、ありがとうございます」と言った後、バラックシップをどう対処するかを考え始めていた。

確かに、艦娘にとってバラックシップほど相性の悪い相手はいないだろう、迂闊に近づけばバラックシップの餌食になるだけ……かといってこのまま手を打たない訳にはいかない。

「相手側もそろそろこちらに到着予定だ。私もまだ残った仕事もあるからここで退散させて貰うが……よろしく頼むよ。連絡してくれれば援軍も送ろう」

「はい、ありがとうございます」

阿久野はそれだけを言い残すと彼は執務室を後にし、夜空は「じゃあ前に所属していた艦娘達と会えるかもしれないのか……」少しだけ、彼女たちと再会できる時を楽しみにするのだった。

それから数分後……鎮守府の出入り口で夜空と時雨、奈々の3人は相手側の到着を待っていた。

無論、奈々に至っては「どんな可愛い娘が来るのか楽しみ」という理由だったりするのだが。

そして……

「……はあ、今日も不幸だわ…….」と黙っていた時期が私にもありました」

「まさか山城と扶桑が来るとは思わなかったよ……っでどうしたの？ あれ？
なんで光さんも一緒!？」

到着したのはなぜか「扶桑型1番艦 扶桑」と「扶桑型2番艦 山城」となぜかボロボロの状態の光……。夜空と時雨は「一体なにがあつたんだ」と光を心配していたが、奈々はなにが起きていたのか理解しているらしく「あー、またですか」と苦笑いしながらそう呟いていた。

ちなみにこの山城は以前登場した人物と同一人物であり、夜空が前いた鎮守府に移動して来たらしい。

「いえ、実はウチの提督達と途中まで一緒だったんですけど……。ちよつと目を離したらみんなどこかに行っていて……」

「つまりはぐれたと?」

携帯電話などでみんなと連絡すれば良かったのだが……。なぜかこんな時に限って扶桑のも山城の携帯も故障を起こし、道に迷ってしまい……。「今日も不幸だわ……。」なんて山城が呟いていた時、偶然通りかかった光が困ってる2人を見て声をかけてここまで連れて来てくれたのだという。

ただ……。ここまで来る道中、光は眠っていた犬の尻尾を思いつきり踏んづけてしまったらしく、犬に追い回されるわ、その先にあつた木にぶつかって蜂の巣が落ち

てきて蜂に追いかけて回されるわ、蜂と犬を上手く巻いて扶桑達の元に戻って来たと思ったらバイクに乗った男に財布をすられてその表紙に溝に片足を突っ込んでしまいが泥だらけになるわ、扶桑と山城が財布を盗んだ相手を取り押さえてはくれたが今度はどこから飛んで来た野球ボールが顔面に当たるわと……扶桑と山城の話の聞こえとここまでするまでにこれら以外にも散々な目に合いながらも光は彼女たちをここまでするまで案内してきたらしいのだ。

「いやあ、なんか……今日に限って凄く運が悪いみたいで……」

「おかしい……何時もだったらこういうのは私の役目の筈……」

「それを言うなら『私達』だと思っただけ……」

「いえ、不幸なのは私だけで十分です姉様……」

山城が頭を抱えて「なにかおかしい」と考え込んでいると、奈々が手をあげて「それ多分吸収してるんだと思いますよ」と言ってきたのだ。

当然、「吸収してる」と言われてもなんのことがさっぱり分からず、山城が首を傾げていると奈々が説明を始める。

「こう言っちゃ失礼ですが山城さん達って不幸体質じゃないですか？」

「ええ、まあ……自覚はしてるわね」

「光も不幸体質なんです」

「うん、だからなんだと？」という視線を送る山城に対し、奈々は「最後まで聞いてください」と返し、話の続きを行う。

「恐らくですけど……お2人分の不幸も光の不幸體質を全部吸い取っちゃってるんじゃないですかねー？」

「えええー！ なにそれ！ 訳分かんないんだけど……」

「要するに光の不幸體質はお2人を上回るってことですよ。光っておみくじなんか引くと絶対『大凶』以上の『超大凶』『大大大凶』とか出るくらいですし」

「なにそれ!? そんなおみくじが出るとこあるの!? 私でも大凶以上とか出たことないわ!!」

しかもこれ、どこの神社でやっても絶対大凶を遙かに上回る凶が光は出るというのだからその辺の運も全く無い、中にはテレビでやってた占いをたまたま見てたら「今日死にます」とか言われたらこともあるらしく、死にはしなかったが本当にその日は死ぬ想いをしたことがあるらしい。

「もう不幸ってレベルじゃないと思うのだけれども……」

「なんていうか……呪いとか受けてない？ お祓いとかして貰ったら……」

「して貰ったことあるけど全く効果なかったんです、どこ行っても」

「巢でこの不幸体質なの!!」

そして当の本人は笑いながら「流石幼なじみはよく分かつてるねー」なんて感心しており、あんまり気にしている様子がなく光曰く「もう慣れた」らしい。

「それ慣れたらダメなやつよ!」

「でもまあ、悪人でもない他の誰かが不幸になるよりマシだし……」

なんて光は言いだし、正直山城は「なんなんだこの人は」と思わずにいられなかった。

「なんだか……申し訳なくなってますねー」

「でもそこが良いんだよ。光は天使だからな!」

頬に手を当てて光に対して申し訳ないなどと言っている扶桑の後ろに突然ニユッと出てきた1人の男性……突然出てきた男性に対し、奈々と光以外は驚きの声をあげ、山城に至っては思わずその人物に対して思いっきり腹パンしてしまった。

「姉様の後ろに立つなこの不審者ア!!」

「ぐはあ!!」

「山城それ不審者じゃなくてウチの提督よ!!」

「あつ……」

そこにいた不審者……ではなく山城と扶桑が所属している鎮守府……つまりは夜空の前の鎮守府の現在の提督……名を「風上かざかみ 龍夜りゆう

や」が殴られたお腹を押さえて蹲っていた。

「久しぶり……兄さん、大丈夫？ あと天使とか言うのやめてくれる？ 恥ずかしいから」

「はは、相変わらずですね、龍夜さん……」

光と夜空がそう言った後、山城は交互に光と龍夜を見た後……。

「えっ、兄さんって……あなた龍夜提督の弟さんだったの!？」

「そうだよ山城さん。 っていうか、2人は兄さんの鎮守府のところの艦娘だったんだね。 えっと、それで兄さんの後ろにいるのは……」

光が龍夜の後ろの方に視線を送ると恐らく今回のバラックシップ対策に参加してくれるであろう艦娘達……。「吹雪改二」と「夕張」、「春雨」「大鳳型空母 一番艦 大鳳」が立っており、吹雪は「またか……」という表情を浮かべて頭を抱えていた。

「提督、ブラコンなのは良いですが程ほどにしてくださいね」

「分かってるよ、光とゆつくり過ごすのはまた後にすべきなのは。 俺、この戦いが終わったら光と遊びに行くんだ……。 そして光を写真に収める。 あっ、奈々も来るか?」

「ご無沙汰しています、龍夜さん。 是非ともご同行いたしますとも!!」

「つてなに死亡フラグみたいなた台詞言ってますか提督?! さっさと行きますよ!!」

吹雪に言われ、扶桑と山城は「心配おかけして申し訳ありません」と謝罪だけをすました後、一同は会議室へと行く。

「あつ、タイムリングを逃しましたが……お久しぶりです、夜空提督」

「おう、久しぶりだな吹雪。他のみんなも」

夜空は歩きながら他のメンバーに済ませるのだった。

「どうせですから、光さんもどうぞ。色々と感想なども聞きたいですし」

「感想? まあ、そうだね。お言葉に甘えようかな、久しぶりにみんなにも会いたいし」

夜空の誘いを受けて光も承諾し、一同は移動、バラックシップに対抗する艦娘として龍夜が連れてきた旗艦を吹雪とした、春雨、夕張、大鳳、山城、扶桑と夜空側の艦娘である時雨を旗艦とした、満潮、睦月、如月、ヴェールヌイ、夕立をメンバーに行うことが決まり、夜空と龍夜は一通り2人で話し合って立てた作戦を一同に説明する。

「取りあえず、全艦娘の艀装や全員のデバイザーをバラックシップの磁力に引き寄せられたり、電波妨害されないようにリョーガさんとグルマン博士に改造し、終わり次第全員出撃して貰う。ただその艀装の改造なんだが……磁力でバラックシップに引き寄せられるかられないようにするかは任意で決めることができる」

「えっと、磁力で引き寄せられないようにするなら別に任意で決める必要ってないんじゃない………」

春雨が手を上げて説明を行っていた夜空に質問すると、夜空は「相手はかなりの巨体を誇り、さらに武装も豊富で真正面から行つては危険であるため、先ずはワザとバラツクシップに引き寄せられ、内部に侵入する」のだと彼は話し、その後……バラツクシップの頭脳とも言えるコンピューターを見つけ出し、それを破壊して欲しいというのだ。

ただし、大鳳は念のために外で待機し艦載機を飛ばして脱出してきた艦娘達にバラツクシップが攻撃してきた場合、彼女たちの援護を行うように説明を行う。

さらにこの度、リョーガとグルマンがなんと新たなジオマスケツティの開発に成功したため、夜空とタカトがスカイマスケツティに搭乗して同行することになったのだというのだ。

「つてアンタ、パイロットの免許持ってたの？」

満潮の疑問に対し夜空は「持つてるよ、たまにリョーガさんとここでシュミレーション訓練も行つてたから操縦もバッチリ」とサムズアップして答える。

「でもどうして提督がワザワザ同行してくるの？」

「俺とタカトさんしかスカイマスケツティ操縦できないからだよ。それに念には念を

入れておきたいし、その方が指示が出しやすいかもしれないからな」

睦月の質問に夜空がそう答えた後、一通りの説明を終え……「これから一緒に作戦を行うのだから」という理由で交流会をしておくようにとだけ夜空は一同に伝えた後、取りあえずは解散となるのだった。

「えへへ、山城や扶桑と一緒に出撃できるのは嬉しいな。それにウチには満潮もいるし」

「そうねえ、ここに朝雲や山雲や最上も入れれば良かったのだけど……それが少し残念ね」

時雨は「西村艦隊」に所属していたメンバーで作戦ができることを嬉しそうに扶桑達に話しており、満潮はそんな時雨に「全く、遊びに行くんじや無いのよ?」と呆れた視線を向けるが、彼女は「それでも嬉しいものは嬉しい」と返した。

「さて……それではお待ちかねのショータイム! 龍夜さんとこの艦娘達を早速愛でに行きますか!! 先ずは春雨ちゃんから!!」

「ふえ!? なんて私からなんですか!?!」

両手を広げてジリジリと春雨に詰め寄る奈々……その姿は完全に変質者のそれである。

「春雨って名前だけに最初に味見しようかと……という訳でレッツラゴー!」

「………(無言の腹パン)
「ぐはっ!」

が、颯爽と奈々と春雨の間に菊月は割って入り、奈々に腹パンを喰らわせて吹っ飛ばしたのだった。

そのまま吹っ飛ばされて菊月はヴェールヌイに視線を送り、ヴェールヌイは「やれやれ」と言いながら腕に装着した機械から糸のようなものを出して奈々を拘束しておいた。

「えっ!? ちょ、響ちゃんなにそれ!」

「ウエ○シューター」

「作っただですか!」

それからわーわー喚く奈々は放置した後、菊月は春雨に「大丈夫か?」と声をかけると春雨は戸惑いつつも「は、はい」と頷き、夕張はヴェールヌイの作ったウエ○シューターを見て感心していた。

その光景を見ていた睦月はボソツと「響ちゃんは色んな物ポンポン出してくるから凄いですねー」なんて苦笑しながら呟き、その言葉に吹雪は「色んな物?」と首を傾げながら尋ねると……睦月が今までヴェールヌイが作成してきた武器について一通りの説明を行う。

「えっとね、先つちよに小型爆弾付けた弓矢使ったり、艀装が飛んで来たり、艀装からおでん出したり、アイア○マンみたいなアーマー作ったり、特殊な金属でできた鍋の蓋投げてきたり」

「後、夕立の艀装も改造してくれたっばい」

そう言いながら夕立は自分の主砲のみの艀装を取り出して変形させて両端から斧が出現……見た目はさながらリュウ○ンドーのザンリュ○ジンっばい見た目である。

「途中からなんかおかしなの混じってない……?」

吹雪の言い分はごもつとも、小型爆弾をつけた弓矢や艀装が飛んでくるのはまだ良いとして……それが以降が明らかにおかしなものばかりで吹雪は啞然とした表情でヴェールヌイの方を見ると……彼女は頭に鍋を被ってなぜか「どうだ? 凄いだろう?」みたいな感じでドヤつとした顔を浮かべていた。

するとヴェールヌイは吹雪達を見てなにか気づいたことがあったらしく、彼女たちの元へと行くと吹雪と夕立と睦月をそれぞれ眺める。

「な、なにかなヴェールヌイちゃん?」

「いやなに、1つ気づいたことがあってね……」

そしてヴェールヌイは彼女の肩に手を置き……

「フュージョンジャック、フュージョンジャック、フロート」

なぜこのような台詞を言ったのかというところ……吹雪と夕立は改二なのに、睦月は改二ではなく無印のまま……それで「睦月」という名前……つまり、そういうことである。

「んにゃあ!!」

そして睦月の猫パンチがヴェールヌイの鼻つ柱にクリティカルヒット、「げふ!」という悲鳴をあげて殴られた鼻を押さえつける。

「今のは響ちゃんが悪いわね」

「いや、私も悪いとは思ったんだけど言わずにいらなかったんだよ……」

如月が「あらあら」と言った感じでその光景を眺め、そして彼女の言った台詞にヴェールヌイがそう返したのだった。

「それで……どうですかね? 見た感じ、俺ってちゃんと出てます? 鎮守府の先輩提督のお2人にその辺のことを聞いてもらいたくて……」

一方光と夜空、龍夜は同じ椅子に座って夜空は光から任されたこの鎮守府で自分はちゃんとやれているかと、光と龍夜に少し不安そうな表情を浮かべながら尋ね、光はみんなの様子を見ながら彼は「うん」と笑顔で頷いたのだ。

「作戦会議を見て……みんな、君のことを信頼してるっていうのはよく伝わっ

て来てるもの。それにちやんと出来てなかったのは僕の方だよ、みんなの信頼を……一度は裏切ってしまったんだから……」

そんな暗い雰囲気で落ち込んだ様子を見せる光に、夜空は「昔、深海棲艦を助けてその深海棲艦に裏切られ、みんなを危険に晒してしまった」という話を思い出したが……夜空は光の肩にそつと手を置き……。

「ウチの連中は……いえ、あなたの所の人達は、何時までも根に持つてそんなネチネチしてるような奴等じゃありませんよ？」

「そうよ、アンタも何時まで気にしてんのよ？ 何時までもナヨナヨと後悔して……。それに……よく考えたら、誰がその深海棲艦を見つけたとしてもきつと同じことしただろうし、結果は一緒よ。だから気にすることなんかないわ」

夜空と、話を聞いていた満潮がそう光に言い放ち、光は頬をかきながら「ありがとう」と照れ臭そうに言うのだった。

「短い間だったかもしれないけど、ここにいるのはお前が育て上げた連中だ。誰かが傷ついていたら、誰にだってきつと手を差し伸べる連中だと思うぞ、この話を聞く限りじゃな」

「兄さん……、ありがとう、みんな……」

光は嬉しそうに笑みを浮かべた後、一度席を立ち上がるうとしたのだが……。そ

ここでお茶を淹れた電がお客様用にと持ってきたのだが……途中で足を滑らせてしまい、「はにゃあああ!!?」という声をあげながら熱いお茶を足を滑らせて全部光に吹っ掛けたのだった。

「うあつちやああああああ!!!?」

「はわ!!? ご、ごめんなさいごめん!!?」

少し火傷してしまった程度で済んだが、電は何度も光に頭を下げて謝罪するのだった。

*

そして出撃1時間前、夜空は会議室から出た先にある外に出て特になにも考えず、じつと海を見つめていると……不意にエックスが夜空に声をかけてきたのだ。

『なにを考えているんだ?』

「んっ? 別になにも考えてないかな。強いて言えば、作戦が成功して欲しいってことくらいか」

夜空の返答に対してエックスはなにも言わなかったが……夜空はエックスはなにか言いたげであることに気づき、「逆にエックスはなに考えてるんだ?」と問いかけるとエックスは……今朝、時雨が言っていた「夢」についてのことを夜空に話し出した。

『私が調べたところ、艦娘は希に予知夢を見る者が少のだが……存在するらしい』
「時雨が見た夢もそうだと?」

『可能性は否定できないだろう? 艦娘の見る夢は普通の夢とは違う。君が時雨にも

言った『未来は変えられる』というのは私自身も同じ考えだ。だが……』

エックスはそこで言葉を詰まらせ、夜空は「だが……なんだよ？」と尋ねるとエックスは「この際だ、ハッキリ言うぞ」とだけ答え、言葉の続きを彼へと話す。

『私達は、何時死ぬか分からない場所にいる。だからこそ、君は早く時雨に自分の想いを伝えるべきだ。何時も惚けているが、君が他の娘と一緒にいる時と時雨と一緒にいる時では心拍数がかなり違うぞ。地球人の言葉では確か……いわゆる『デレる』というやつだな』

「お前からデレるなんて言葉を聞くとは思わなかったよ」

『しかも夜空、君の場合時雨と一緒にいる時は常時デレてる状態で好感度MAXだな。時雨に膝枕とかをよくしているが君の心臓音が凄いぞ。このデバイスの中にいなくても聞こえてくるレベルで……。何時も平然としているのは実はポーカーフェイスなんだろ？ 無自覚のフリをしているが本当は自分の気持ちに気づいてるんじゃないのか？ まだあるぞ……』

何時までもクドクドとエックスに凶星を突かれて夜空は顔を赤くして流石にこれ以上放っておけばエックスがなにを言い出すか分からないため、「もう分かった!! 分かりました!!」と観念し、夜空は時雨のことを異性として好意を持っていることを告白した。

エックスは「なぜ5年も一緒にいて未だに告白すらしてないんだ？」と問いかけると、夜空は少し困ったような表情を浮かべる。

「だってさ、時雨だけに限った話じゃないけど、あいつ等にはもつと……広い世界を見せてやりたいからさ。その中にはきつと、俺よりもずつと時雨に相応しい奴がいるかもしれないだろ？ だから……告白するのは、ちよつと怖くてな……」

それに俺自身、あいつに釣り合えるかどうか……」

『ふむ、要するに自分に自信が無い訳か……。だが、普段の君たちを見ているとどう考えても釣り合ってるようにしか思えないがな……』

だがそれでも、自分が想いを伝えるならばやはり彼女がもつと外の世界を見てらだと言い張り、例えその結果彼女が自分以外に好意を寄せる人物が出来たとしてもそれでも構わないと……好きな人が幸せになることが一番大切だと夜空はエックスに言い放ったのだ。

『私はそうだとは思わないがな、恋愛というのは早い者勝ちだと思うぞ？』

「お前なんなんだ、恋愛のスペシャリストかなんかか？」

『いや、ネットにあつた恋愛小説を参考に見ただけだが？ 恋愛以外の場合も多いが……暇な時によくネット小説読んでるんだ』

エクステバイザーを通してなにやってんだよと言いたくなる夜空だったが、それより

もエックスが「それで時雨のことだが………」と話を戻そうとする。

だが、その時鎮守府内で館内放送が流れ……作戦開始まで20分となり、作戦に参加するメンバーは直ちに会議室に再び集まり、もう1度作戦内容を確認した後、一同は出撃する準備をするようにという報告が流れ夜空は「話はまた後でな」とだけ言つてすぐさま会議室へと駆け出すのだった。

*

そして作戦内容を改めて確認した後、夜空達は出撃準備をすることとなり、夜空は留守中の鎮守府のことを龍夜と奈々に任せ、自分はもう1機のスカイマスケツティへと向かおうとするのだが……途中、時雨に呼び止められる。

「時雨? どうした……?」

「……その、やつぱり……提督も、一緒に来るんだよね?」

やはり、今朝見た夢が原因で夜空のことが心配なのだろう、そんな彼女の気持ちを察してか夜空の彼女の頭をそつと撫でると「心配ない」と優しく、声をかけたのだ。

「お前の頭を撫でるのは、気分が良い」

「んっ……僕も、提督に撫でられるのは好き」

「だから……大丈夫」

「……うん!」

夜空が力強くそう言うと同じように時雨も力強く頷き、夜空はタカトと共にスカイマスケツティで時雨達と共に出撃した。

やがてバラックシップが出現するであろう海域に到着し、時雨達は後はバラックシッ

プが現れるのを待つだけだと思い、バラックシップが現れるまでその場で待機することになったのだが……予想よりも早くバラックシップが海中から艦娘達の艦装に反応し、出現……目論み通り時雨達はバラックシップに磁力によつて引き寄せられる。

当然、スカイマスケットは既にバラックシップによる磁力を受けないよう改造を施されているのでなんともないが……。

ただ……磁力に引つ張られるその際、時雨は夜空の乗っているスカイマスケットを見上げ、コックピットからこちらへと顔を除かしている夜空に笑みを浮かべて小さく手を振り、夜空も少し照れ臭そうにしつつ、手は振らなかつたが右手をあげて返事を返した。

『任務中にイチヤつくとは余裕があるな提督』

タカトからそんな悪態をつかれて夜空は「すいません、でもイチヤついてません」と反論したが、タカトは「嘘つけ」とだけ吐き出して一度通信を切り、後は時雨達が上手くやってくれるよう願うのだった……。

一方で時雨が夜空に向かって手を振ったことに気づいた山城はニヤニヤとした笑みを浮かべて……扶桑はあらあらといった感じで微笑ましそうに時雨へと視線を向け、2人の視線に気づいた時雨は「ど、どうしたの？」と尋ねると……。

「しらばっくれても無駄よ。随分とそちらの提督と仲が良いみたいね？ なに？ もしかして提督と……」

「えっ……別にそんな……！」

「少なくともウチの司令官と一番仲が良いのは時雨で間違いないわよ」

まさかの満潮からの援護射撃に時雨は驚き、そして少しずつだが……顔をだんだんと赤くなっていく。

「私達の鎮守府にいた頃からそうよね？」

「そう言えば、時雨は前の鎮守府にいた頃から司令官に膝枕して貰ってるのかい？」

「あら、ということとは未だに提督にして貰ってるのね？ ホントに仲が良いわねえ……」

ヴェールヌイと扶桑の言葉に時雨は茹で蛸のように顔を真っ赤っかにし、「ふしゅ〜」という音を立てながら頭から湯気を出し「なんで2人ともそんなこと知ってるのさ！」と怒り出すが……両手で顔を隠してみんなに見られないようにしているので怖くもなんともない。

尚、その様子を見ていた時雨の妹である春雨は「時雨姉さんはもう彼氏持ちで羨ましいですねえ……」なんて微笑んでいたが……時雨は「まだ彼氏じゃないよ！」と強く返すが……『まだ』ってことはその内……？」と扶桑

が悪戯っ子のような笑顔で尋ねると時雨はまた顔を真っ赤にして「うう〜」と唸りながら両手で顔を覆い隠した。

取りあえず、一同はどうかバラックシップの内部に侵入し、バラックシップの磁場の影響を受けないようにした後、確実にバラックシップの機能を停止させるため、この船を動かしているメインコンピュータを探し出して破壊しようと内部を一同は歩き回る。

「随分と前に沈んでた割に、中は意外と綺麗ですね」

「もしかしてまだ誰かが使っていたりして〜？」

吹雪の言葉に、睦月がそう言うのと彼女の言葉に反応した春雨が肩を一瞬ビクリと振るわせた後、「怖いこと言わないでください〜」と涙目ながら訴える。

するとその時、こちらに向かって真っ直ぐ電線のコードが幾つも現れて彼女たちを拘束しようとしてくるが……すぐさまそれに反応した時雨達はそれらを回避し、時雨と夕立、吹雪、夕張が砲撃してコードを焼き尽くし……またバラックシップがコードを使って攻撃してこないことを確認すると、一同は再び先へと進む。

「リョーガさんやグルマン博士の話だと、そろそろ目的の場所に着く筈なんだけど……」

時雨はリョーガやグルマンに渡された地図を見ながら曲がり角を曲がると……

そこで彼女たちは……とんでもない物を目撃した。

それは……幾つもの生体カプセルのようなものに入れられた……深海棲艦達だったのだ……。

「深海……棲艦？　なんでこんなところに……しかも、カプセルに入れられて……」

如月がもつともな疑問を口にする彼女の言葉を聞いていた夜空がデバイザーを通して「深海棲艦がいるのか？」と問いかけてきたのだ。

勿論、グルマンとリョーガ（ヴェールヌイと夕張も手伝った）がデバイザーを改造してくれたおかげでバラックシップの発する電波に妨害される心配はない。

そして如月は今、自分たちが見ている光景を夜空に話し……先ほど睦月が冗談のつもりで言っていた「誰かいるかもしれない」というのは案外、本当なのかもしれない……。

第13話 『エックス、消滅』

前回、バラックシップの内部へと侵入した時雨、満潮、睦月、如月、ヴェールヌイ、夕立、春雨、夕張、山城、扶桑の11人はバラックシップの内部を捜索中、深海棲艦が入られたカプセルを発見し……さらによく見ればそれらの深海棲艦達には腕や足が無かったりするものもあり、明らかに身体を破損してしまっていた。

そんな傷ついた状態の深海棲艦がなぜこんな場所にいるのか時雨達は疑問に思いメイコンピューターの破壊は優先するとしてさらにこのバラックシップについて調べべきかどうか悩んだ時雨は吹雪に話しかけようとした時……何者かが時雨達に向かって攻撃を行い、彼女たちの足下に火花が走る。

「誰!?!」

時雨達が一斉に攻撃をされた方向を向いてそれぞれがその方向に武器を構えてその先にいた相手を見るとそこにいたのは艦娘の駆逐艦2人と深海棲艦の駆逐艦である「イ級」らしき個体が2体こちらに武器を構えてゆつくりと歩いて来ているのが目に入った。

「艦娘と………深海棲艦!?! なんてこんなところに………!?!」

「いや、違う……あれは……」

山城は生体カプセルに入った深海棲艦は兎も角、なぜこんなところに自分達とは別の艦娘が……それもなぜ深海棲艦と一緒にいるのか、なぜ自分達に攻撃して来るのか訳が分からず驚くが……時雨達、夜空の鎮守府のメンバーは深海棲艦は初めてではあるがその艦娘の姿には見覚えがあった。

それは以前、「ノワール星人バイス」が轟沈した艦娘を回収、改造手術を行って造り出して生み出した「改造艦娘」だったのだ。

またイ級の方は手足が生えて人型に近い「怪人」と呼ぶに相応しい姿となっており、こちらでも改造艦娘と同じく……言うなれば「改造深海棲艦」となっており、今回の黒幕はまたノワール星人なのかと思ったが……それを考えるよりも早く改造艦娘と改造イ級の合計4人は時雨達に向かって駆け出し、襲いかかってきたのだ。

「ギイイイイ!!!」

改造艦娘の1人が山城に攻撃を定めると右手から3本の爪のようなものが出現し、左手は刀に変化し山城に向かって右手の爪を振りかざすが山城はどうか後退して回避するのだが……改造艦娘はすぐさま山城に接近して左手の刀を下から上へと振るい、山城はまたもどうにかバックステップで回避しようとするが……背中の艀装の主砲の1つが切り裂かれて破壊されてしまい、それによって山城がバランスを崩

した直後を狙って改造艦娘が攻撃を仕掛けようとするが……。
「ウル○アリンみたいな武器使ってるんじゃないよ……!」

ヴェールヌイがその改造艦娘を蹴り飛ばし、続けざまに主砲を改造艦娘に向かってピクリとも動かなくなるまで何発も撃ち込む。

「ちよ、ちよつと! ヴェールヌイ!! 彼女は私達と同じ艦娘なのよ!」

山城のその言葉を聞いてヴェールヌイは先ほどから改造艦娘に反撃しなかったのかを理解し、通りで先ほどから相手の攻撃を躲してばかりで防戦一方だったのが分かった。

「残念だが、彼女たちはもう……死んでいるんだ……!」

「死んでるって……!」

「そう、彼女たちはある異星人の手によって身体の殆どを機械化され生ける屍にされるんだ。彼女たちを元に戻す手段もない、戻したとしても……だから、せめて……!」

そこまで言えばもう誰でも理解は可能だろう、つまり……改造された彼女たちのことを思えば倒すことが一番であり、山城もそれは理解することはできた……出来たのだが……やはり、だからと言って深海棲艦なら兎も角、いきなり自分達と同じ艦娘を倒せなどと言われてもそう簡単には普通はできないだろう。

「まさか改造艦娘や……改造された深海棲艦が出る予想外だったよ。でも山城達はこの船の詮索を続行して！こいつ等の相手は僕たちがする！響は山城達と一緒にメインコンピュータを破壊して！」

時雨のその指示を受けて山城達は領き、この場には時雨を始めとした睦月、如月が残り他のメンバーはメインコンピュータのある場所へと向かい、如月と睦月はサラマンドラとガララの力を使ってモンスフュージョンし、改造艦娘と改造イ級相手に戦いを挑むのだった。

*

そしてヴェールヌイ達はメインコンピュータのある部屋を発見してその扉を蹴破り中へと突入するとそこにはメインコンピュータらしきものが確かに存在していた

のだが……それ以外にも……部屋の中央に置かれた椅子に誰かが座っていたのだ。

「誰ですか!?!」

もしや又もや改造艦娘や改造深海棲艦なのではないだろうかと吹雪達は考えたが……そこにいたのは蛇のような顔をした人型の宇宙人であり、その宇宙人は椅子から立ち上がると両手を大げさに広げて「待っていたよ」と言葉を発したのだ。

『私の名は『スネーク星人 ネイル』。君たちが来てくれたことを歓迎し……』『そんなことはどうでもいい!!』……えっ?』

「ネイル」と名乗った宇宙人の言葉をヴェールヌイは遮り、彼女はただ「あの改造艦娘達を操ってるのは君かい?」と問いかけるとネイルは多少戸惑いつつも「まあ、そうだが?」と答える。

「だからそれに関して今から話そうとおm……ぐばああああ!!!」

とその時、ヴェールヌイは夕立は互いに顔を見合わせて頷いた後、彼女達2人は同時にジャンプしてネイルを蹴り飛ばし、さらにヴェールヌイと夕立は主砲を倒れ込んだネイルに向かってガンガン砲弾を撃ち始めたのだ。

「ちよつとお!!? いきなりなにやってるんですかあ!?!」

なぜかいきなり先制攻撃する夕立とヴェールヌイに驚きの声をあげる春雨、そんな彼

女に対してヴェールヌイは「えっ？ なにか問題ある？」みたいな表情を浮かべており、「なんでいきなり攻撃したんですか!？」と春雨が怒鳴るが……。

「改造艦娘達を使ってるってことは悪者としか思えないし、私達にも彼女たちを使って攻撃を加えてきたからね。こんな奴の話を聞く必要はない」

「そもそもこういう奴はきつと『世界の半分をくれてやろう』とか『君たちにとつても悪くない話だと思いがね?』とか言つて結局断られるっていうテンプレ野郎に違いないっほい」

「だから無駄に抵抗されるより先にボコつとやつて拘束させて貰う」

それを見ていた吹雪は夜空にあの2人を止めてくれるよう通信で頼み、それを受けた夜空は「あんまりやり過ぎるな」と注意したところでヴェールヌイと夕立はネイルに対しての攻撃をやめ、さっさとバラックシップのメインコンピュータを破壊してネイルを拘束し鎮守府に戻って事情聴衆しようと思ったのだが……突如、ネイルの背中がビシッとヒビが入ると背中が割れて中から無傷の状態のネイルが飛び出し、脱皮したのだ。

『オイオイオイ!!!』 なんだ私のこの扱いはあ!?! 一応本作オリジナルの宇宙人だぞ?!? あんなちよつと大物つぽい感じで登場したのになんだこの扱いは!!?』

「メタいですね!?! つていうか脱皮した!?!」

「蛇だからかしら?」

吹雪と扶桑が順に喋り、ネイルは指をパチンつと鳴らすとブラックシップの電線のコードが一斉に吹雪達へと襲いかかり、一同は反撃しようとするが前回とは比べものにならない量で来ているため彼女たちは手足を拘束されて動きを封じられてしまったのだ。

『さて、これでゆつくりと話が出来そうだな……』

『おい夕立!? 響!? どうした大丈夫か!?』

夕立やヴェールヌイの通信機から彼女たちを心配する夜空の声が聞こえ、ネイルは夕立から通信機を奪い取って「心配するな、今はまだなにもしないさ」と伝えた後、ネイルは夜空や彼女たちに対して話し始める。

『先ずはなぜ、私が改造艦娘や改造深海棲艦を操れるのかを話そう。それは私こそが、ノワール星人達にメカレーター技術を提供した張本人だからだ』

『なに……?!』

ネイルが言うには生物を改造し、宇宙でその改造した生物兵器を売りさばいたり技術を提供したりしている商売をやっていたそうで今回は新たに生物を改造するための実験材料を手に入れるために地球へと訪れたのだというのだ。

また以前バイスに提供していたというメカレーター怪獣や艦娘達は他の異星人達に

本格的に売りさばくためのオリエンテーションでもあったらしく、ウルトラマンエックス等に敗北したとはいえメカレーターや改造艦娘は見事に宇宙では高評価を受けたうえで今回、メカレーター怪獣や改造艦娘、さらには改造深海棲艦の販売を本格的に乗り出すことにしたというのだ。

そしてヴェールヌイは今のネイルの話聞いて先ほどカプセルに入れられていた深海棲艦達は恐らく改造するために入れられていたのであるとういうことを理解した。

「そんなことが……許されるとでも思ってるんですか?! 私達艦娘は……!!」

『兵器じゃない……! とでも? 兵器だよ、君たちは……! 兵器以外のなんだと言うんだね!? 軍艦の力を受け継いで生まれた兵器……そして深海棲艦共と同じ、化け物なんだよ……!! そんな君たちを、今よりも使える強力な兵器にしてやろうと言うんだ! 今よりも強くなれるんだよ? むしろ感謝して欲しいくらいだね!』

吹雪が睨み付けながらネイルに言うが……ネイルは彼女の言葉を遮って両腕を広げていけしやあしやあとそんな言葉を述べ、彼女たちはそんなネイルに苛立ちを積もらせる。

『それに西崎 夜空! 君の理想は怪獣や深海棲艦の共存と聞く! 私ならばこの技術

で怪獣や深海棲艦を改造してしまえば奴等は大人しくなり、君の理想も実現可能となるんだよ？ どうだい？ 悪くない話ではないかな？ それなりの金額を払えばさらにはこの改造技術を地球人側に提供してやつても良いぞ？」

『以前バイスの野郎にも言ったが……俺がそんな話に乗ると思っているのか？』
かなりの怒気が含まれた声で通信機からそんな夜空の言葉が発せられたが、ネイルは「あつそ」とだけ答えると曰く「念のために聞いてやつただけだ」と言い放ち、そんな態度余計に一同をイラつかせる。

『さて、時間稼ぎもそろそろ良いだろう……』

「時間稼ぎ……？」

ヴェールヌイがネイルの言った「時間稼ぎ」とは一体どういう意味なのかと尋ねるとネイルは「フフ……」と不気味に笑い、1つのリモコンを取り出してボタンを押すと空中にある映像が映し出され、そこには世界各地の海にバラックシップのような船が出現しており、周囲には改造艦娘や改造深海棲艦が出現しており、この映像を見た彼女たちは「一体どうなってるんだ……」と驚愕した。

『私の技術を持つてすればバラックシップを量産することなど容易い。しかも全てのバラックシップには艦娘や深海棲艦と同じように通常兵器では倒すことはできないようにしてあるし、その上あの中には改造艦娘や改造深海棲艦が今尚自動的に造られてい

る。言っておくがこれは取引ではない、脅迫だ！ 地球上にいる全ての艦娘、怪獣、深海棲艦を超越すよう私はこれから要求しに行く』

「ちよつと待て。 さつき時間稼ぎと言っていたけど……なぜそんなことをする必要があるんだい？ 他にも気になる点はある。 私達の鎮守府の管轄内で動き回って……まるで誘き出したようで……どうしてそんな……」

ヴェールヌイの疑問に対し、ネイルは夜空が今の会話を聞いているであろう通信機を一度だけチラつと見たあと、彼女達に答える。

『それは……君たちの鎮守府が1番厄介だからね。 なるべく戦力を分散させてやりたかったのさ』

「自分達の鎮守府が1番厄介……？」とヴェールヌイ達は頭に疑問符を浮かべて首を傾げる。

それはそうだろう、サイバー怪獣の技術を最初に取り込んだとはいえ、それは他の鎮守府にも提供されている技術だ。

それを除けば自分達の鎮守府は駆逐艦ばかりで他の普通の鎮守府と比べたら戦力差はかなり激しい筈、今回他の鎮守府から応援が来てくれたとはいえヴェールヌイ達はネイルの言葉をイマイチ理解することができなかった。

（まあ、理解はできんだろうな。 本当にここへと誘い出したかったのは君たちでは無

く……ウルトラマンエックスの方だ！　そして今、お前達の鎮守府では調べたところによればウルトラマンメビウスが1人いるらしいが……『奴』を出せばウルトラマン1人くらい倒せるだろう。そしてエックス、貴様はここで葬つてやろう！！)

ネイルがそう宣言すると彼はヴェールヌイ達に向かつて顔を向け「喜べ！　君たちもこれから改造艦娘としてより強力な兵器に生まれ変わらせてやろう！」と言い放ち、ネイルは春雨を指差し、先ずは彼女から改造すると言い出したのだ。

ネイルの言葉を聞き「ひっ！」と目尻に涙を溜め小さく悲鳴をあげる春雨、ネイルは今彼女達を拘束しているものとは別のバラックシップの電線コードを呼び出し、その先にはナイフやメス、ノコギリといったものが装着されており春雨や他のみんなも同時にそれらが艦娘や深海棲艦を改造するものであろうことが理解できた。

それによつて一同は……特に最初に改造されると宣言された春雨は恐怖し必死に両手両足の拘束を解こうともがくが……手術用の電線コードは徐々に春雨へと近づいていく。

「嫌！　助けて!!　誰かぁ……!!」

「春雨!!」

『泣く必要なんてないのだよ？　私はただ、君をより強い存在にしてあげるだけだから

ね。大丈夫、痛いのは一瞬だけさ………!!」

そして手術用の電線コードが一斉に春雨へと襲いかかろうとしたその時………!!
『Xクロスチョップ!!』

天井を突き破り、春雨へと襲いかかろうとしていた右手にエネルギーを溜めてX字を描くように「Xクロスチョップ」を電線コードに繰り出しながら等身大となった「ウルトラマンエックス」が現れて破壊し、さらに素早くネイルに接近してネイルを思いつきり殴り飛ばした後、光エネルギーを矢じり型にして放つ「Xスラッシュ」で春雨達を拘束している電線コードを切り裂いて破壊する。

「ウルトラマンエックス………!!」

「あれが………」

ヴェールヌイはエックスの登場に喜び、吹雪達は初めて生で見るエックスの姿に驚いていた。

尚、夜空はエックスへと変身する前にスカイマスケッティを自動操縦に切り替えている。

『彼女達に、近づくな………!!』

『どうせならば彼女達も改造艦娘にしてやりたかったとこだが………まあいいだろう、目的は果たした。今頃貴様達の鎮守府は壊滅の危機に瀕しているだろうから

ねえ………」

『なに?』

ネイルはそんな言葉だけを残してその場から消え去り、エックスは「待て!!」とネイルを追いかけようとしたがバラックシップの電線コードが襲ってきてエックスの追跡を妨害し、そこで山城が「今はメインコンピュータを破壊するのが先よ!!」と一同に指示を出し彼女達は主砲から砲弾を放って一斉にメインコンピュータに向かって放ち破壊に成功する。

「これでこいつはもう動けない筈よ………」

しかし、それでもバラックシップがそれですぐに完全停止する訳ではなく、バラックシップは残された力を振り絞り、電線コードを使ってエックスや艦娘達に襲いかかってくるのだ。

『こいつが完全に破壊されるのも時間の問題だ、君たちは早く脱出を!』

「でも、エックスさんは?」

『君たちが逃げる時間を稼ぐ! 鎮守府にいる君たちの仲間が心配だ、早く行け!!』

エックスは襲いかかってくる電線コードを弾きながら先にヴェールヌイ達をバラックシップから脱出させ、途中で合流した時雨達を含めて全員無事にバラックシップから脱出に成功する。

「エックスさんは……大丈夫でしょうか……?」

春雨がエックスの身を心配するが、そんな彼女の不安を和らげるように時雨が春雨の肩に手を置き「大丈夫だよ」と伝える。

「これまで一緒に戦ってきたんだ、僕たちには分かるよ。きつと大丈夫、それより今は鎮守府に連絡を……!」

だが、その時バラックシップは尚も敵を殲滅しようと主砲を彼女達へと向け、攻撃する準備を始め……時雨達もそれぞれ主砲を構えて反撃しようとするのだが……そこにバラックシップの内部を突き破って巨大化したエックスが現れる。

「さっさと機能停止させるには……いつだ!」

そう言いながら夜空はエクステバイザーに「サイバーエレキング」のカードを装填し、エックスは「エレキングアーマー」をその身に纏う。

『サイバーエレキング、ロードします。サイバーエレキングアーマー、アクティブ!』
そのままエックスは必殺の「エレキング電撃波」を放とうとするが……バラックシップは先にエックスを始末べきだと判断したのか主砲を全てエックスへと向け、砲弾を一斉掃射し、幾つかの砲弾がエックスに直撃してしまう。

『グオオッ!!?』

だがそこで大鳳があらかじめ出していた艦載機がバラックシップの主砲に向けて攻

撃を行い、幾つかの主砲を破壊することに成功、大鳳が「今です!!」という言葉を合図にエックスは頷き、右腕に装着された砲身から放つ電撃光線「エレキング電撃波」をバラックシップに向かって放ち、バラックシップは電撃を浴びて完全に機能を停止した後……爆発して海の底へと沈んでいくのだった。

「早く鎮守府に戻らないと……!」

『ああ!』

しかしこのまま飛んでいく訳にも行かないのでエックスは一度夜空の姿に戻ってスカイマスケツティのコックピットへと戻り、夜空は一同にすぐに鎮守府に戻るよう指示を出す。

*

時は少し遡り……夜空達が出撃してしばらく経った後、鎮守府中で警報が鳴り響き、一体何事かと鎮守府で待機していた艦娘や奈々達は驚き、すぐに慌てた様子のリョーガから鎮守府中に空中から突如この鎮守府へと向かって急接近する謎の物体が出現したとの報告を受け、それを聞いた菊月はリョーガに迎撃は出来ないのかとジオデバイザーで通信を入れるが……。

『いやダメだ！ 間に合わない!! 今すぐみんな避難を……!!』

だが、既にその謎の物体は空を見上げれば目で見える程にまで迫ってきており、とても避難が間に合うとは思えなかったのだが……。

「メビウス!!」

そこで光が左腕に「メビウスブレス」を出現させて左腕を突き上げるとそこから光が溢れ出し、彼は「ウルトラマンメビウス」へと変身し、メビウスブレスのエネルギールを開放して両手を十字に組んでから放つ必殺光線「メビウムシユート」を落下物に向かつて放つ。

『ハアアア、シユア!!』

しかし、その物体は勢いが多少無くなっただけでこのまま行けば間違いなく鎮守府に落下し、みんなもタダではすまない。

そのためメビウスはさらにメビウムシユートの威力をあげ、メビウムシユートを喰らい続けた物体は完全に消滅こそしなかったものの爆発し、鎮守府から大きく逸れて森の方へと落下し……メビウスはあの物体がなんだったのか飛行して確認しに行く……そこには巨大な隕石が落ちており、周りにはクレーターができあがってしまっていた。

『隕石………?』

『いえ、これはただの隕石じゃありません!!』

すると隕石が突如パツクリと割れると勢いよく口の中に目があるという不気味な外見を持ち、両肩には口をついた2本の首のようなものがある「化石魔獣ガーゴルゴン」が飛び出し、メビウスの胸部をその「長く尖った爪」のある右腕で斬りつけたのだ。

『ウアツ!!』

攻撃を喰らったメビウスは地上へと落下し、ガーゴルゴンは地上へと落下したメビウスを勢いよく空中から急降下して踏みつける。

『グウウ!!』

そしてそこにいたのは確かに……前回、ある「光の巨人」と戦ったガーゴル

ゴンであったが……その外見は大きく変化していた。

胸部には機械で出来た装甲に、右腕も機械化されて長く尖った爪を持ち、同じく左腕も機械化されその腕は剣のような形となっており、ガーゴルゴンはネイルによって改造……強化された姿「ガーゴルゴン・メカレーター」となっていたのだ。

メビウスはガーゴルゴンの足を退かそうとするが、ガーゴルゴンは踏みつけたメビウスに向かって青白い稲妻の破壊光線を撃ち込んでダメージを与え、一度足を退かすと立ち上がろうとするメビウスを力強く蹴り上げて吹き飛ばす。

『グッ!?!』

どうにか立ち上がったメビウスだがガーゴルゴンは即座に口のついた両肩の2つの触手を伸ばしてメビウスを攻撃しようとする。

それに対しメビウスはメビウスブレスから光の剣「メビウムブレード」を出してそれを振るって触手を切り裂こうとするが2本の触手の口から機械の剣が出現し、右の触手がメビウスの振るったメビウムブレードを弾き、左の触手が口から生えた剣でメビウスの腹部を切り裂き、斬られたメビウスの腹部からは光が溢れ出す。

『グウウウ!!?』

そして一度剣を口の中に仕舞うとガーゴルゴンの触手は今度はメビウスの両腕に噛みつき、電撃をメビウスの身体に流し込む。

『シユアアアアアア!!?!?!?!』

「みんな聞こえるか!! サイバー怪獣の力を使ってメビウスを援護するんだ!! 最初から全力で攻撃しろ! 奴はそれくらいやって攻撃しないとダメだ!」

鎮守府に残っていた龍夜の指示に従い、同じく鎮守府に残っていた暁、雷、電、朝潮、荒潮、文月、菊月、皐月、村雨がメビウスを援護するために出撃し、龍夜の言う通りガーゴルゴンは今までの相手とは明らかに格が違うため、彼の指示に従って全員サイバー怪獣のカードをジオデバイザーに装填させる。

『サイバーザラガス、ロードします』

『サイバーネロンガ、ロードします』

『サイバーエレキング、ロードします』

『サイバーブラックキング、ロードします』

『サイバーキングバモス、ロードします』

『サイバーグビラ、ロードします』

『サイバーアントラー、ロードします』

『サイバーレイロンス、ロードします』

『サイバーベロクロン、ロードします』

「全員……一斉掃射!!」

菊月のその言葉を合図に彼女達はそれぞれのサイバー怪獣の力が込められたエネルギー弾をガーゴルゴンに向かって放つが……ガーゴルゴンは前方にバリアを張り巡らせて全ての攻撃を防ぎ、ガーゴルゴンは触手をメビウスから離して菊月達に向かつて両肩の触手から電撃光線を発射……一気に彼女達を吹き飛ばす。

『うわああああああ!!』

「なら……これならどう!？」

どうにか立ち上がった暁は再度ジオデバイザーにサイバーザラガスのサイバーカードを装填し、モンスフュージョンして「ザラガスフュージョン」となり、武器のザラガスホーンを取り出してザラガスホーンをガーゴルゴンに向かって突き出すとそこから光線が放たれ、それに合わせて朝潮のサイバーブラックキングの「ブラックヘルマグマ」と電のサイバーエレキングの「エレキング電撃波」が放たれ、3人の光線が合わさって合体光線となりガーゴルゴンに向かって行くが……ガーゴルゴンは再びバリアを張り巡らせて攻撃を防いでしまう。

だが次の瞬間、ガーゴルゴンの背中が爆発し、一体何事かと思つて後ろを振り返るとそこには主砲を構えた村雨と菊月、文月が立っており、ガーゴルゴンは彼女達を睨み付ける。

「フフ、どうやら後ろにはバリアは張れないみたいね……!」

「今だよ〜！ 暁〜！ みんな〜!!」

ガーゴルゴンがこちらを向いてくれたおかげで結果的にガーゴルゴンが暁達に背中を見せる形となり、暁達は先ほど防がれた合体光線を再び放つと見事にガーゴルゴンに直撃し、それに苛立ったガーゴルゴンは暁達をまずは倒そうと考えるが……。

『セアアアアアア!!』

「バーニングブレイブ」となったメビウスのきりもみ回転して炎を起こしながら相手に跳び蹴りを叩きこむ「メビウスピンキック」をガーゴルゴンへと繰り出し、ガーゴルゴンはバリアで防ぐが……しばらく耐えたもののすぐにバリアは破壊されメビウスの蹴りを喰らいガーゴルゴンは吹き飛ばされる。

『よし〜！ 行けるぞ〜！ このままメビウスと連帯してその怪獣を倒すんだ!!』

『了解!!』

サイバー怪獣の力が使える時間もそろそろ限界のため、ここで一気に勝負を決めようとメビウスと艦娘達は一斉攻撃しようと考えるのだが……ガーゴルゴンは両肩の触手から光弾のようなものを空中に向かって放ち、菊月達は「なんだ……?」と首を傾げていると光弾は幾つもの光弾へと散り散りとなり、一斉にメビウスではなく……菊月達へと向かって降り注いで行ったのだ。

『っ……!!』

それを見たメビウスは彼女達を彼女達の前へと立ち、両手を広げて全ての光弾を菊月達を守るためにその身に受け……メビウスは大ダメージを負ってしまう。

『ウアアアアアッ!!!』

「メビウス!!」

既にメビウスのカラータイマーも激しく点滅しており、メビウスはその場に膝を突き、倒れると同時にその姿をうつすらと消えていなくなってしまったのだ……。

「メビウスウウウウウ!!!」

誰かがメビウスの名を悲痛な声で大きく叫び、それと同時にサイバー怪獣の力による時間制限も来てしまい、しばらくはサイバー怪獣の力は使えなくなってしまったためもう打つ手が無くなってしまったのだ。

「まだよ、まだ諦めるには早いわ……! サイバーザラガスの力が残ってる!! 艦娘の力だつて……!!」

そう言い放ちながら暁はザラガスホーンをガーゴルゴンに向け、彼女の言葉を聞いた菊月達もまた彼女の言う通りだと思い暁と共に一斉にガーゴルゴンに攻撃を仕掛けるが……やはりガーゴルゴンはノーガードで攻撃を幾ら喰らってもほぼノーダメージであり、ガーゴルゴンがそろそろ暁達に反撃しようとしたその時……。

丁度夜空とタカトの乗ったスカイマスケットティが戻り、2機のスカイマスケットティは

フアントン光子砲でガーゴルゴンを攻撃して気を引き、さらにそこへ時雨達もまた暁達と合流したのだ。

「遅れてごめん!! 大丈夫暁!」

「え、ええ……」。全く、時雨達帰って来るのが遅いわよ……」

不満を口にしつつも暁は「ありがと、お礼はちゃんとと言えるし!」と時雨達が駆けつけてくれたことに感謝し、「間に合って良かった」と時雨が呟いて彼女がガーゴルゴンを見上げると彼女はガーゴルゴンの姿を見上げるや否や目を見開き、固まってしまう。

「あ……アイツは……」

「時雨?」

「そ、そんな……だってアレは……夢じゃ……」

ガーゴルゴンを見て時雨は肩を震わせ、どこか怯えた様子の時雨に暁は首を傾げる。

「時雨!! どうしたの!」

暁が声を荒げて時雨の名前を呼んだところで彼女はハッと我に返り、未だに戸惑っている様子はあるものの「な、なんでもない……平気」と返しながら一応の冷静さは取り戻し、そこで時雨達は龍夜の艦隊と共闘して一斉にガーゴルゴンに攻撃を開始する。

(あの怪獣はエックスを倒した怪獣に夢に見た奴とそっくりだ。でも、アレは……)

夢だ！ あんなこと……絶対不起こつたりしない……起こさせない！！

「グアアアアアアアア！！！」

夜空の乗ったスカイマスケットティがガーゴルゴンにファントン光子砲を撃ち込んでいるとガーゴルゴンは素早い動きで一瞬で夜空の目の前へと移動し、スカイマスケットティを掴み取るとガーゴルゴンはそれを勢いよく地面へと投げつける。

「提督！！」

「クソオ！！ エックス！！ ユナイトだ！！」

『よし行くぞ！！』

夜空は取り出したエクステバイザーをXモードに変形させるとそこからエックスのスパークドールズが出現し、それをリードさせてエクステバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

「エックスーーーーー！！！！」

『イイイイ！！ シャアーーーーー！！！！』

そして夜空は「ウルトラマンエックス」へと変身を完了させ、エックスは大地へと降り立つ。

『エックス、ユナイテッド！』

エックスは夜空が乗っていたスカイマスケットティを掴んでゆつくりと地面に降ろし

た後、ファイティングポーズを取った後、そのままガーゴルゴンに向かって駆け出しに行き、ガーゴルゴンに向かってエックスは何発も拳を叩き込むが．．．．．ガーゴルゴンには全く効いておらず、ガーゴルゴンは右腕の爪を振り上げてエックスを斬りつける。

『又アアア!!?』

さらにガーゴルゴンはエックスの首を右手を掴みあげた後、左手の剣をエックスの腹部に突き刺そうとするが．．．．．そこにモンスフュージョンした睦月と如月が左手の剣に、扶桑と山城の砲撃がエックスの首を掴んでいる右腕に直撃しガーゴルゴンは手を離してしまい直後にエックスの放った蹴りを腹部に受けて少しだけたじろく。

「ゴモラー！ 頼む．．．．．今だけは力を貸してくれ!!」

『サイバーゴモラ、ロードします。サイバーゴモラアーマー、アクティブ!』

夜空がそう言いながらエクステバイザーにエックスのカードを装填するとエックスの身体に「ゴモラアーマー」が装着され、エックスは両腕に装着されたサイバーゴモラの爪をガーゴルゴンに向かって振りかざすがガーゴルゴンは前方にバリアを張り巡らせて攻撃を防いでしまう。

「だったらこのままゴモラ振動波で．．．．!!」

夜空はこのまま必殺の「ゴモラ振動波」でバリアを砕こうと考えるが、ガーゴルゴン

はバリアを解除すると同時に両肩の口から電撃光線を吐きだしてそれをエックスに直撃させ……ゴモラアーマーは粉々に砕け散ってしまったのだ。

『グアアアアア!!?』

「ぐううう!!?」ゴモラアーマーが……!! それなら!!」

夜空はさらにサイバーエレキングのカードを使い、エックスは「エレキングアーマー」を身に纏い、砲身から電撃の鞭を放ってガーゴルゴンの身体を拘束するが……ガーゴルゴンはそれを力尽くで引きちぎり、素早くエックスに詰め寄ると左手の剣でエックスを斬りつけ、エレキングアーマーまでも破壊してしまう。

『ジュアアアアア!!?』

吹き飛ばされ、倒れ込むエックスに向かってガーゴルゴンは触手の口から電撃光線を放つが……エックスは即座に「ベムスターアーマー」を装着し、光線を吸収してそれを跳ね返す「ベムスターアウト」を繰り出す。ガーゴルゴンはバリアを張って攻撃を防ぎ、両肩の触手を伸ばしてエックスのアーマーを装着していない腕の部分や足に噛みつき、自分の元へと引き寄せると両腕を振るってエックスの身体を斬りつける。

『グウウウ!!?』

「グフウウウウ……!!」

まるで笑い声のように不気味な鳴き声を発するガーゴルゴンは、エックスはそのまま

放り投げるのだが……エックスはどうかバランスよく地面に着地すると今度は「グビラアーマー」を装着し、右腕に装着されたドリルを回転させながらガールゴロンに突っ込んでいく。

『デアアアアアアア!!!』

それに対してガールゴロンは右手の爪が変形してドリル状へと変化し、それを回転させてグビラアーマーのドリルとぶつかり合い……。結果グビラアーマーのドリルはあつさりと砕け散ってしまい、それを見たエックスはすぐさまガールゴロンから離れる。

『クソッ！ こいつ……。モンスアーマーが全然効かないぞ!!』

「なら今度は艦娘の力を借りる!!」

夜空は今度は夕張のカードを使い「夕張アーマー」をエックスは装着し、背中に装着された艦装の主砲と両手に装着された主砲をガールゴロンに向けて一斉掃射するので……。やはりガールゴロンはそれをバリアを張って防いでしまう。

「そうするのは読めてる!!」

エックスはジャンプしてガールゴロンの真上を飛び越えてガールゴロンの後ろに回り込んだ後、素早く振り返って必殺の「フルスロットルブラスト」を撃ち込もうとするが……。それよりも早くガールゴロンの2つの触手が伸びて来てエックスの身体

に噛みついて電撃を流し、エックスは身体中から火花を散らしてダメージを受けてしま
う。

『グアアアアア!!?!』

膝を突いたエックスに向かってガーゴルゴンはすかさず蹴りを叩き込み、エックスは
蹴り飛ばされて倒れ込む。

『グウ……!!?!』

「こうなったら……こいつで勝負だ!!」

夜空が「サイバーゼットン」のカードであり、それをエクステバイザーに装填してエッ
クスは「宇宙恐竜ゼットン」の力が込められたモンスマー、「ゼットンアーマー」を
身に纏う。

『サイバーゼットン、ロードします。サイバーゼットンアーマー、アクティブ!』

ガーゴルゴンはエックスに向かって電撃光線を放つがそれに対してエックスはゼッ
トンの「波状光線」を放って相殺した後、テレポートしてガーゴルゴンの背後に回り込
み、波状光線をガーゴルゴンの背中に撃ち込む。

「グルウ!?!」

ガーゴルゴンはすぐに反撃しようと振り返るがエックスはテレポートしてすぐにそ
の場からいなくなり、ガーゴルゴンの真上に現れるとそのまま急降下でゼットンア

マーの腕でガーゴルゴンの頭部にチョップを叩き込み、ガーゴルゴンは思わずフラついてしまう。

「グウ………!!」

ガーゴルゴンは触手を使ってエックスに攻撃を仕掛けるがエックスは「ゼットンシャッター」というバリアで攻撃を防いだ後、高速回転し相手に突撃する。「ゼットントルネード」をガーゴルゴンに向かって繰り出す。

「ゼットントルネード!!」

ガーゴルゴンはさすがバリアを展開するが……それはすぐに打ち砕かれてしまいガーゴルゴンは大ダメージを受けてしまう。

「ギシャアア!!?」

『流石はゼットンだな、押ししている！これなら行けるぞ!』

「ああ!!」

このまま一気に押し切ろうとしたその時……空から何か……黒いエネルギーのようなものが突如降り注いできたのだ。

『夜空！空からなにか来る!?!』

「なに!?!」

その黒いエネルギーはガーゴルゴンとエックスの両者に降り注ぐとエックスは吹き

飛ばされ……逆にガーゴルゴンは背中に突起物のようなものが新しく生え、口の中にあつた目は赤く染まった姿へと変わり、ただでさえ改造によって強化されているガーゴルゴンはそのエネルギーによってさらに強化されてしまったのだ。

それだけではなく、先ほどのエネルギーを浴びたせいでエックスもゼットンアーマーが強制解除されてしまったのだ。

「こうなったらザナディウム光線で一気に決めるぞー！」

『ああ、分かった!!』

どうにか立ち上がったエックスは両腕を左側へゆくりと振りかぶり、両腕を胸の前でX字にクロスさせて放つ「ザナディウム光線」をガーゴルゴンへと放つ。

『「ザナディウム光線!!」』

しかし、ガーゴルゴンは今度はバリアすら張らずに真正面からそれを受け止め……あつさりと耐えきって見せたのだ。

『なに……?!』

「ザナディウム光線が全く効かない!？」

するとガーゴルゴンは突然エックスの目の前から消え去るとエックスの背後に瞬間移動で現れて左手の剣で切り裂いた後、触手がエックスへと噛みつき……先ほどと同じあの黒いエネルギーをエックスへと流し込む。

裂いて墜落させた後、時雨達に向かつて電撃光線を放って彼女達に撃ち込んで彼女達を大きく吹き飛ばしたのだ。

「クソ!! こっこだまでか……!!」

タカトはスカイマスケットティから脱出し、時雨達も幸い大きな怪我をしたものはいなかったが……地面に大きく身体を打ちつけてしまったせいで立ち上がれない者も多く、さらには先ほどの攻撃のせいで暁、睦月、如月のモンスフュージョンも解除されてしまったのだ。

「くっ……うう……」

それでもどうにか立ち上がろうとする時雨だが……身体に痛みが走って上手く立ち上がることができなかった。

『ぐう、あのエネルギーのせいで奴が強化されただけでなく……私達自身を弱体化させてしまった……! あの未知のエネルギーに侵され、身体が分解されている……!』

「そんな……どうすれば!!」

「時雨アーマー」を装着し、エックスはどうにかガーゴルゴンに反撃しようとするが……攻撃は全て防がれ、逆に自分達はガーゴルゴンに攻撃を受けまくってしまいう上に攻撃される度にあのエネルギーを身体に入れられどんどん弱体化されてしま

い、エックスが言うにはこのままではユナイトを解除しなければ自分も夜空も身体が消滅してしまうというのだ。

膝を突き、カラータイマーが激しく点滅し始め……それを見たガールゴンはエックスにトドメを刺そうと中央の顔にある口が開き、その中にある目から放つ「石化光線」をエックスへと撃ち込み……エックスに直撃させる。

『シユアアアアアアア!!!!』

「エックス……!!!!」

石化光線を受けたエックスは足から徐々に石化していき、エックスは「このままではマズい!」とユナイトを強制解除して夜空の命だけでもエックスは助けようとするが……当然、夜空はそれを拒否する。

「そんなのダメだ!! そんなことをしたらエックスだけが……!!」

『もう、時間がない……!! それに、彼女達には……特に、時雨には君が必要だ! さらばだ、夜空……! こいつを倒して……時雨と上手くやってくれよ……』

「なにバカなこと言ってるんだ!! やめろ、やめろエックス……!!」

しかし、そんな夜空の叫びも空しくエックスはユナイトを強制解除させて夜空と分離し、分離した夜空はエックスによって人気のない方へと飛ばされて彼は地面に倒れ込

む。

「かはあ………!!」

そして……エックスは完全に石化してしまう寸前に咄嗟に放った「Xスラッシュ」をガーゴルゴンに放ち、ガーゴルゴンの口の中の目に直撃するとガーゴルゴンは悲鳴をあげ、それと同時にエックスは完全に石化してしまい、その際にガーゴルゴンは両肩の触手から電撃光線を吐きだしてエックスに直撃させると……石化したエックスは粉々に砕け散り、さらに砕け散った破片はあのエネルギーの影響か全て消滅してしまつたのだ。

「なっ………エックス………!!!!」

『ガーゴルゴン、もう十分だ。戻ってこい!』

ネイルの指示を受け、ガーゴルゴンは言われた通り赤い球体のようなものに包まれるとガーゴルゴンはそのままその場から姿を消したのだった。

第14話 『新たな力』

その後、ガーゴルゴンが撤退し森で倒れていた夜空と光を時雨達は発見、光はポロポロの状態で見えられ、口からは血を流しており、夜空は大きな怪我こそ無かったものの気を失っていて今は2人とも医務室で寝かされていた。

「光い………なんでお前あんなところにいたんだよ！ このバカ!!」
「心配かけてごめん、兄さん………」

龍夜は目尻に涙を浮かべながら勝手にあんなところに行った光に説教をしており、時雨達もまた夜空を心配して彼の眠るベッドの周りに集まっていた。

『どうやら戦いに巻き込まれたのを提督はエックスに助けられたらしいな……』
「うう、死なないでくださいしいかーん!!」

「くつ、司令官の仇は必ず取ってやる……!!」

そんなことを言いながらわんわん泣く朝潮とヴェールヌイだったが「勝手に殺すな!!」と満潮に怒られ、リョーガからも「命に別状もないから先ず死ぬことはないしね」と苦笑しながらそう言っていると突然、ドタドタと誰かが走ってくる音が聞こえ………
「た、大変よー!!」と叫びながら夕張が医務室のドアを蹴破って破壊しながら入ってくる

る。

尚、破壊されたドアは光に向かって一直線に飛んでいき、ドアは光に見事直撃し吹き飛ばされた光は床に倒れ込んで気を失ってしまった。

「ぎゃあああああ!!!? 光いいいいいい!!!」

『医務室のドアを壊すな夕張いいいいいい!!!』

「夕張いい!! お前よくも光をおおおおお!!!」

「す、すいませーん!! 師匠に提督ー!? で、でも今は兎に角テレビ! テレビ付けてください!」

取りあえず気を失った光はリョーガとグルマンに任せるとして夕張に言われた通り医務室のテレビをつけるとそこにはガーゴルゴンと戦い、倒されてしまうメビウスとエックスの姿が映っており、エックスが倒されたシーンがテレビで流された後、場面が変わり今度は自分の宇宙船に乗っていると思われるネイルの姿がそこに映し出されたのだ。

『地球の諸君よ、ご覧になって頂けたかな? ウルトラマンを圧倒し、倒した我が最強兵器ガーゴルゴン・メカレーターの力を。しかし勘違いしないでくれたまえよ。君たち地球人に先ほどの映像を見せたが……私はガーゴルゴンを使って地球侵略をしたいという訳では無い。ただ君たちに色々とお願ひしたいことがあるだけだ』

テレビの中に映るネイルが言うには「私は怪獣や深海棲艦を機械兵士にするための実験材料として持ち出す許可と全ての艦娘と艦娘を生み出すためのシステムが欲しい」と言い出したのだ。

『この話は君たち人類にとつて悪くはない話だ。何せ私が深海棲艦と怪獣を全て地球から持ち出してやろうと言うんだからね。人類の脅威を私が完全に消し去つてやろうと言うのだよ、そうなれば艦娘がいる必要もなくなるし、存在する意義もないだろう。』

だが私ならばそんな君たちも有効活用させてあげられる』

その放送を時雨達は「なにが有効活用だ」とネイルの言葉に怒りを感じるが……そんな彼女達の心情などお構いなしにネイルは延々と喋り続ける。

『今から24時間地球からの返事を待とう。しかし忘れないでくれたまえ、もし私の望む回答が来なかった場合、海で待機させている私の兵器達が一齐に攻撃を仕掛けることになるだろう。ちなみに、あのガーゴルゴン・メカレーターは宇宙で何者かと戦いポロポロになっていたのを回収、強化した個体なのだが……改造する前にも奴は幾つかの星を滅ぼしている。そして改造された後も実用実験として1つの惑星を滅ぼし、そこから私の兵器開発のための開発資金を調達している』

後半部分は少しどころなく自慢げに喋るネイルだが、ネイルもそれに気づいたのか「すまない、少し自慢話のようになってしまったね。全く、私の才能は恐ろしい」と謝

罪(?)し、話を戻す。

『忘れないでくれたまえ、私にはそんなガーゴルゴンがついていることをね。だが、君たちからの返答が私が望むものだった場合、お礼としてそれ相応のものを支払えば私の兵器を君たちに地球防衛の兵器として提供しよう。サイバー怪獣などよりもよっぽど実用的だぞ? では、いい返事を待っている』

ネイルはそれだけを言い残すとテレビ画面が映り変わり、普通の番組が放送され始めた。

『これは随分とマズいことになってしまったようだな……』
『バイスの時とは違い、艦娘も全員渡せと言ってきたからな』

「随分と規模がデカくなったものだ」とタカトは悪態をつくように言い放ち、村雨が「私達、どうなっちゃうんでしょう……」と不安げな表情を浮かべ、菊月は提督である夜空が目を覚まさない今、自分達はどうすれば良いのか分からず、取りあえずは副司令である奈々に意見を聞いてみようと呼び、彼女の方を見てみると……奈々の表情を見た菊月は思わず固まってしまふ。

「怪獣も、深海棲艦も、艦娘を全て渡せ……? ふざけたこと抜かしますね、例え上層部がそれを命令してこようと私達は……少なくとも私は絶対に誰一人としてあんな爬虫虫類野郎には渡しはしませんよ。命を冒読する……あんな奴

に……!!」

今の彼女は……普段のあの艦娘にセクハラまがいのこととしてはふざけた態度からは想像ができないほど怒りに満ちた表情を浮かべており、それは菊月が思わずビビってしまうほどのものであり、菊月はネイルの行う悪行に彼女がどれだけの怒りを浮かべているのかを感じ取った。

「副司令、苛立つのは分かるが……」

「ああ、そうだな。先ずはこれからのことについてみんなで話し合おう」

菊月と龍夜の提案で一同はこれからのことについて話し合うために作戦会議室へと向かうこととなり、光もなにか役に立てることがあるかもしれないと行こうとしたが龍夜や他のメンバーに無理矢理寝かしつけられてしまう。

「お前は今は安静にしてジツとしてろ！ でないと手足を縛り上げてでも寝かしつけるからな！」

「……はい」

龍夜のその言葉で光は大人しくなり、時雨もまた自分も会議室へと向かおうとしたのだがそれを扶桑と山城に止められる。

「扶桑、山城……」

「時雨、あなたは今はあなたの提督の側にいてあげて？」

「でも……!」

「あなたの顔を見れば分かるわ。提督の側にいたいって顔してるわ」

扶桑と山城にそう言われ、彼女達に続くように満潮も「提督が目を覚ました時、時雨が目の前にいたらきつと提督は安心してくれる筈よ」と言われるが、それに対し時雨はどこか自信なさげな様子で「そ、そうかな……?」と首を傾げる。

「兎に角、あなたはここで待機してなさい。用があれば呼ぶから」

山城のその言葉を受けて時雨は戸惑いつつも領き、みんなが医務室から出て行くのを確認した後、時雨は夜空の眠るベッドの近くにある椅子に座る。

そんな彼女の様子を見てかグルマンとリョーガも「何かあつたら呼んでくれ」とだけ言い残して部屋を出て行き、光も空気を呼んだのか「ジュースを買いに行くくらいなら良いよね?」とグルマンとリョーガの許可を貰い3人も部屋から出て行くのだった。

「全く、みんななんでそんな気を使ったような……。でも、提督……。本当に、無事で良かった……」

時雨はベッドで眠る夜空の手を両手でギュツと握りしめながら安堵の溜め息を吐く。

「それにしても、あの時見た夢の光景……」

エックスがガーゴルゴンに倒されてしまい、結局、あの夢は正夢となつてしまったのかと時雨は思ったが……あの時の違いと大きな点が1つあったのだ。

それは「夜空が無事」だということ。

あの時見た夢はエックスがガーゴルゴンに倒された後、その直後に「エックスが夜空の姿になったような」形で血まみれで大怪我をした夜空が自分の前に現れるという内容だったのだが……エックスが助けてくれたおかげなのか、夢とは違いそこまで大きな怪我をしていなかった。

そして時雨は昨日見た夢の「エックスが夜空の姿になったような」光景を思い出したのを機に、彼女は今までの夜空とエックスの行動を思い返してみると「もしかして夜空がエックスなのではないのだろうか？」という予想が思い浮かぶのだが……彼女はずぐにその考えをかき消した。

（例え、そうだとしても提督は提督だ……。僕たちのことを自分の持てる力全てで守ろうとしてくれる……）

夜空は……。昔、幼い頃に両親と一緒にピクニックへ行つたときの夢を見ていた。

その時、空には大きな虹がかかっており、両親に「ねえ、知ってる？　虹って高いところから見ると丸く見えるんだ！」と嬉しそうに話し、両親から「夜空は勉強熱心で偉いね」と頭を撫でられながら褒められるといった……。幸せそうな光景。

『じゃあこれは知ってる夜空？　虹の根っこには幸せなものや大切なものが埋まつてる

と言われているの!』

母がそう言い、夜空は母に「大切なものって?」と興味津々な様子で母に尋ねると……両親は「それはね……」と答える前に両親は夜空の目の前から消えてしまったのだ。

その時、薄らと今まで眠っていた夜空の目がゆっくりと開き、目を覚ました夜空は辺りを見回した後、自分の手を握りしめている時雨に気づき、夜空は「時雨?」と彼女の名を呟く。

「良かった、目を覚ましたんだね提督……」

時雨はホツとした表情を浮かべ、夜空は時雨が自分の手を握りしめていることに気づき、時雨も夜空の視線からそのことに気づき、2人は顔を赤くしてパツと手を思わず離してしまう。

「それにしても、さっきの夢……」

「夢……?」

小さく呟いたつもりだったが、時雨の耳には夜空の呟きが聞こえたらしく、彼女は小首を傾げる。

「ああ、昔……俺が両親と一緒にピクニックに行った時の夢だよ。その時、綺麗な虹が出て……母さんがその虹の根っこには大切なものが埋まつて……そんな話」

「ふーん、なんだか……楽しそうだね……」

「うん、ホントに……楽しかった……。 つてそうだ！ エックス!! 時雨!! 今すぐグルマン博士かりヨーガさんをここに呼んで俺とデバイザーを繋げるんだ!」

とそこで夜空はエックスが自分からユナイトを解除した時のことを思い出し、突然の出来事に時雨は「えっ? えっ? なに? どういうこと!?!」と慌てふためく。

「エックスは多分、電腦世界にいると思うんだ。 早くエックスのデータを回収しないと……!」

「と、兎に角分かったよ! グルマン博士とリヨーガさんを呼んでくる!!」

それから時雨はグルマンとリヨーガの2人を連れて来ると夜空は2人に一通りの説明を行い、説明を受けたグルマンとリヨーガは彼の説明を理解して夜空は部屋を移動しサイバー怪獣を実体化させる際にも私用した「デバイザー」を頭に装着し、デバイザーの転送システムを使い電腦世界へと入り、丁度今、エックスのデータを探しに行こうとしていたのだ。

しかし電腦世界を歩き来するのは非常に危険な行為であり、下手をすれば二度と戻ってこれない可能性も……。

「提督、それなら僕が……!」

「ありがとう、時雨……。 でも、お前はみんなと一緒に残っておいてくれ。 いざという時、少しでも戦力が多い方が良いからな」

夜空は時雨にここで待つてよう指示するが……やはり時雨は不安でたまらなく、夜空はそんな彼女の頭をそつと撫でようとしたのだが……その手を弾くようにどこからかゴモラのスパークドールズが「びよんっ」と飛び出して夜空の手を弾いたのだ。

「痛っ!？」ゴモラ……?」

ゴモラは夜空の手に取まると小刻みにカタカタと震え、夜空は今まで心を閉ざしていたと思われたゴモラが自分に何かを言おうとしているのだと思い、ジオデバイザーを取り出してゴモラの感情を解析する。

『ゴモラ、解析中……解析完了』

ゴモラの感情を解析した結果、ジオデバイザーの画面に「恐怖、不安」といったものが表示され、夜空はゴモラも自分のことを心配しているんだということを理解した。

「ゴモラも、心配してくれてるのか……。でも、大丈夫。俺は絶対に戻ってくるよ。」

ゴモラ、時雨……お前達と約束する」

それでも時雨は心配そうな表情を浮かべ、ゴモラは心配そうに小さな鳴き声をあげるが……夜空は笑みを浮かべ、右手で時雨の頭を撫で……左手でゴモラの小さな手を握る。

「時雨、俺……お前の頭を撫でるの好きだからさ……。だから、大丈夫……。また撫でに来るよ。ゴモラも、俺はまだお前とちゃんと会えてない。だから、お前にまた

会いに来る」

「うん、分かったよ……提督」

先ほどの不安そうな顔と違い、今は彼女は笑みを浮かべ……「戻ってきてね？」と夜空と約束し、夜空は頷くとゴモラを時雨に渡した後、ベッドに寝てグルマンとリョーガに「やっつけてください」と彼は2人に頼み込み……それに頷いたリョーガとグルマンはスイツチを押しして夜空を電脳世界へと飛ばしたのだった。

（もう誰も消えさせない！ 仲間は失わせない、絶対にエックスを助けて戻って来る！）
その想いを夜空は胸に、彼は自分の意識を電脳世界へと飛ばすのだった。

*

一方、ネイルの所持している宇宙船では……そこには何らかの方法で縮小されたメカ

レーター怪獣や改造艦娘、深海棲艦などがカプセルに入れられて大量に棚に置かれており、その内のガーゴルゴンの入ったカプセルをネイルは興味深そうに見つめる。

『ふむ、あの降り注いだエネルギーが何なのかは分からないが実に興味深い。私に取っては嬉しい誤算だった』

一時はあの黒いエネルギーで強化されたガーゴルゴンは自分の指示を受けるかどうか不安だったが、特に不審な点は見受けられず、逆にガーゴルゴンが浴びたこのエネルギーを解析して自分の造り出した兵器達に運用できそうだとどこか嬉しそうにしていた。

するとそこでネイルは自分を睨み付けるガーゴルゴンの視線に気づき、「なんだその目は？」と苛立ったようにガーゴルゴンにそう問いかける。

『貴様……私をこのような侮辱を味わせてタダで住むと思うなよ……?』

『フン、偉そうに……。誰が君の命を救ってやったと思ってるんだ？ それだけじゃない！ 君は他の怪獣では為し得なかったメカレーター化が100%適合し、より強力な存在へと進化したんだ！ しかも他の怪獣と違うのはそれだけではない！ 君は他の怪獣達とは逆に、メカレーター化してより強い生命体へと進化したんだ！ 私には感謝して欲しいくらいだね！』

『確かに、以前よりも強い肉体を私は得た。しかし、代わりに私はこの機械に埋め込ま

れた装置のせいで貴様の操り人形となった！ 貧弱な宇宙人が……！ 覚えていろ、いずれ貴様にこの私を弄んだ報いを受けさせてやる!!」

怒りに満ちた視線をガールゴンはネイルに浴びせながらそう強く、憎しみの籠もった声で言い放つが……bネイルはそれを鼻で笑い、「せいぜい頑張りたまえ」と一蹴した後、ネイルは怪獣兵器などが置いてあるこの部屋から出て行こうとしたその時……。

『そうだ、1つ言い忘れていたが……あの光の巨人、エックスと言ったか？ 奴はまだ死んでいないぞ？』

『なに……？』

『最も、完全に消えるのも時間の問題だが……』

ガールゴンのその言葉を聞いてネイルは「そうか、奴は電腦世界に……」と夜空と同様、今エックスがいるであろう場所に気づき、夜空達がエックスを助け出すかもしれないと考える。

『それならば私自ら電腦世界へと向かい、エックスにトドメを刺したいところだが……流石に電腦世界に行くのはリスクが高すぎる……。兎に角、今は私は軍法会議に行かなければならない。それにエックスのデータは散り散りとなっている筈だ。エックスを助けようとして電腦世界に閉じ込められるのがオチだ。いざとなれば修復を完了させ次第またお前に行かせよう。他の怪獣共は商品だから傷つけられたくない

からな』

そしてネイルはそれだけを言い残し、部屋を出ると同時にその姿を変え……「阿久野」という地球人の姿となったのだ。

「だが、エックスが復活する可能性を徹底的に叩きつぶし、あの鎮守府の奴等に絶望を味合わせてやるのも面白いかもな……。そうすれば抵抗もなくなるだろうしな……。」

そう言う阿久野はジオデバイザーに酷似したデバイスを取り出し、それに1枚のサイバーカードを装填させた後、阿久野は地球へと戻るのだった。

地球へと戻った阿久野は軍法会議に出席し、当然会議の内容はネイルの出した要求についてである。

中には「艦娘だつて生きている！ あんな奴に渡せる筈が無い!!」という者や「だが深海棲艦や怪獣といった地球上の脅威を完全に取り除いてくれていると言っているんだ」と意見を出すものとそれぞれ意見が別れるが……圧倒的に意見が多かったのはやはり地球のことを考え、「艦娘、深海棲艦、怪獣を全てネイルに引き渡す」というものだった。

勿論、阿久野は「そもそも艦娘は我々人類のために戦う存在、ならばその身を捧げて貰っても構わないでしょう」と意見し、ネイルへの要求に応えるように促したりしていた。

*

また電腦世界へと意識を飛ばされた夜空はエックスのデータを探し、彷徨っていた。

「データが膨大で見つからない……！ エックス！ いるなら返事してくれ!!」

しかし、右を見ても左を見てもどこを見てもエックスのデータと思われるものは全く見つからない。

さらにその時、夜空の右手がデータの塊のような状態となつてしまい、それを見た夜空はもう時間がないことに焦りを感じる。

(いや、ダメだ焦るな……！ 落ち着いてもつとよく探すんだ……！)

夜空は自分に言い聞かせ、気を取り直して再びエックスのデータを探し始めるが

……。

その時、丁度夜空の目の前に突然1つの虹が現れたのだ。

「なんだ!? どうしてこんなところに虹が……!?」

電脳世界でなぜ虹のようなものが出現したのか理解できなかった夜空だが……彼は先ほど見た夢の内容、母が言った「虹の根っこには大切なものが埋まってる」という言葉を思い出し、彼は「もしかして……」と思い虹の根っこを目指して進み出す。

だが……それを妨害するかの様に夜空の目の前に1人の黒いウルトラマンが立ち
はだかつたのだ。

『フツハハハ!!』

「なんだ!? 黒い……ウルトラマン!?」

その黒いウルトラマンの名は……光の国で唯一悪の道へと走った最凶最悪のウルトラマン、「ウルトラマンベリアル」

ただし、その見た目はメカニカルな外見をしており、このベリアルはベリアルでもサイバーカードで造られた「サイバーウルトラマンベリアル」である。

実は先ほどネイルがジオバイザーに酷似したデバイスに装填したカードはネイルがベリアルデータのデータと地球のサイバーカードの技術を元に造られたこのサイバーウルトラマンベリアルであり、ネイルはこのサイバーベリアルを使ってエックスの復活を妨

害しようとしていたのだ。

尚、サイバー怪獣がまだ実体化していないのにここでこのように実体化するのはおかしいのではないかと思うかもしれないがよく考えてほしい。

そもそもサイバー怪獣の異名は「電脳怪獣」……電脳世界で実体化できない方がむしろおかしいと言えるため、「電脳ウルトラマン」とも言えるサイバーベリアルがこの世界で実体化できても不思議ではないのだ。

そしてサイバーベリアルは鋭く伸ばした両手の爪を夜空に向かって振りかざし、夜空はどうか避けることに成功したがサイバーベリアルは攻撃の手を緩めようとせず、すぐさま左手を振るって夜空をはたき落とそうとする。

『ウルトラマンの力を、チャージします』

咄嗟に「ウルトラライザー」を取り出した夜空はウルトラライザーによる光線をサイバーベリアル左手に放ってサイバーベリアルの手を弾き、どうにか虹の根っこまで辿り着こうとする。

しかし当然ながらそれをサイバーベリアルは妨害し、夜空はサイバーベリアルを睨み付け「邪魔だ!!」と怒鳴りあげた。

一方で現実世界でも電脳世界と同様に夜空の身体が徐々にデータの塊へと変換させられており、時雨は「提督!」と心配そうに声をあげた。

「ダメだ！ このままじゃ……！」

時雨が夜空の手を強く握りしめ、彼女は必死に夜空が帰って来てくれることを願うが……その願いとは裏腹に夜空の身体はどんどんデータへと化していき、時雨は目尻に涙を溜める。

「うう……くう、嫌だ……。早く戻って来てよ、提督……。夜空……！」

時雨が悲痛な声でそう叫んだその時……。

『私が、力を貸そう』

そんな声が聞こえ、時雨、リヨーガ、グルマンの3人は一斉に声のした方へと振り返るとそこには等身大となっている1人のウルトラマンが立つており、リヨーガがジオブラスターを思わず構えてしまったが……グルマンに「銃を下ろせ！」とすぐに止められた。

『リヨーガ、彼は敵ではない』

「確かに、ウルトラマンみたいだけど……」

『あなたは……』

グルマンはどうやらそのウルトラマンのことを知っているらしく、そのウルトラマンはグルマンに対して頷くと彼は自分の名を名乗る。

『私は宇宙警備隊長、『ゾファイー』』

君たちのことは大隊長……ウルトラの父から伺っている。今、彼のいる電脳世界では何者かが彼の行く手を阻んでいる。だから私の力で君を電脳世界へと送ろう。

私も一応はついては行くが、私も電脳世界で活動できるのにも限度がある。なので私は彼を阻んでいる敵を食い止め、その間に君は彼と共にエックスを救うんだ』

「分かりました。お願いしますー!」

時雨は迷うことなくすぐにそう決断し、リョーガやグルマンは「大丈夫か?」と心配したが彼女に迷いはない。

だが、その時時雨が持っていたゴモラのスパークドールズがカタカタと動き、彼女はゴモラも夜空を助けに行きたがっているのを察し、ゾフィーにゴモラもついていつて貰えるかと尋ねるとゾフィーは「ならば電脳世界でサイバーゴモラのカードをロードさせればサイバー怪獣として実体化可能な筈だ」と説明され、時雨は「行くよゴモラ」とゴモラに声をかけた後、ゾフィーに「やってください」と頼むのだった。

『うむ、では行くぞー!』

次の瞬間、ゾフィーと時雨はその場から消え去り、その場にはリョーガとグルマンだけが取り残されるのだった。

そして再び電脳世界……夜空はウルトラライザーから光線を放つてどうにかサイバーリアルと応戦していたがウルトラライザーのエネルギーも底がつかない、それを見

たサイバーベリアルがチャンスだと言わんばかりに腕を夜空に向かって強く振りかざすのだが……。

『シユア!!』

そこにゾフィーが跳び蹴りをサイバーベリアルに繰り出すと同時に現れ、一度夜空の姿を確認した後、ゾフィーはサイバーベリアルに向かって駆け出して行く。

挿入歌「ウルトラマンゾフィー」

『サイバーゴモラ、ロードします』

さらに電脳世界で実体化することに成功した「電脳怪獣 サイバーゴモラ」が出現し、サイバーゴモラはサイバーベリアルにタックルを繰り出し、続けざまにゾフィーがサイバーベリアルを殴りつけた後、回し蹴りを喰らわせる。

「ゴモラ……!?! それに、新しい……ウルトラマン?」

「提督!」

サイバーゴモラとゾフィーの出現に夜空が驚いていると後ろから聞き覚えのある声が聞こえ、振り返るとそこには思った通り時雨が姿があり、夜空は「時雨!?!」なんてここに!?!」とまたまた驚きの声をあげる。

「提督を、助けにきたに決まってるじゃないか! それよりもエックスのデータを!!」

「あ、ああ、そうだな! あの虹の根っこにもしかしたら……」

夜空が電腦世界で現れた虹の先を指差し、時雨はそれに頷いて2人は手を繋いで虹の根っこへと進みだし、サイバーベリアルはそれを遮ろうとするが当然、ゾフィーとサイバーゴモラがそれを阻む。

サイバーベリアルは「邪魔だ」と言わんばかりに腕から三日月状の斬撃を衝撃波のように放つ「サイバーベリアルリッパ」をゾフィーとサイバーゴモラへと放ち、サイバーゴモラは両手から発生させるバリアで攻撃を防ぎ、ゾフィーは高くジャンプしてサイバーベリアルに拳を叩き込もうとするがサイバーベリアルは両手を交差して攻撃を防ぐ。

サイバーベリアルはそのままゾフィーを押し返すとゾフィーの腹部に蹴りを叩き込むが……直後にサイバーゴモラの振るった尻尾による打撃を受けて軽く吹き飛ばされ、そこを狙いゾフィーは両手の先を合わせて発射する稲妻状の光線「Z光線」をサイバーベリアルに放つがサイバーベリアルはそれを爪を振るってかき消し、同時に爪から斬撃をゾフィーとサイバーゴモラに飛ばす。

『シユア!!?』

『グアアアア!!?』

ゾフィーとサイバーゴモラはそれらの直撃を受けてダメージを負うがゾフィーとサイバーゴモラは負けじとサイバーベリアルに向かって行く。

『まさかデータとはいえ相手がベリアルとは……だが、命ある者は常に前に進む。サイバーゴモラと違い、ただのデータの塊でしかないベリアルの昨日までのデータなど!!』

また一方で時雨が1つだけ主砲を展開し、後ろの方向へと向けて砲弾を発射して一気に加速して進み、一気に虹の根つこの元へと辿り着くことに成功……そして夜空がその手を伸ばすと……夜空はその手に「なにか」を掴み取ったのだ。

そして……虹の根つこから1つの虹色の短剣……「エクストラッガー」が出現し、それと同時にバラバラとなっていたエックスのデータが次々と夜空のジオデバイザーに集まり始める。

「エックス……」

エックスのデータが全て集まり、ジオデバイザーが「エクステバイザー」へと変わり、エクステバイザーから眩い光が放たれるとその光はサイバーベリアルを吹き飛ばし、ゾフィーも「やったようだな!」と頷き、一同はその光に導かれるように現実の世界へと戻ったのだ。

*

「っ!! エックス!!」

現実の世界へと戻って来た夜空はガバツと起き上がってデバイザーを見てみるとジ
オデバイザーは再びエクステバイザーへと戻っており、その中にはちゃんと復活した
エックスも存在していた。

『夜空……どうやら今度は君に助けられたようだな……』

「全く心配したんだぞ……。 ってあ……」

エックスが無事に助かったようで夜空はホッと一安心したのだが……。

「えっ? えっ? ちょっと待っててくれたまえ……。 なんて提督のデバイスの中に

エックスがいるんだ!？」

『そうか、そういうことか! エックス、君はずっと提督のデバイスの中にいたんだな

!』

夜空はすっかり周りにリョーガやグルマン、時雨がいたことを忘れており、リョーガはエクステバイザーの中にエックスがいることに驚いていたが対照的にグルマンは色々と察したらしく、グルマンは夜空が今までずっとエックスに変身して時雨達と共に戦って来たのだと時雨やリョーガに説明したのだが……時雨の耳には全くグルマンの話が入って来ていなかった。

代わりに彼女は目尻に涙を溜め……夜空へと抱きついたのだ。

「提督！」

「うお……！ し、時雨……」

「良かった。ちゃんと帰って来れて……本当に……」

そんな彼女に対し夜空も時雨を抱きしめ返し……右手で彼女の頭を優しく撫でた。

「僕、薄々分かってたんだ……。提督がエックスじゃないかって……。いつも、僕たちを助けてくれてたんだね……」

「俺やエックスだって何回もお前達に助けられたよ……。今回だって……」

『恋人が戻ってきて嬉しい気持ちは分かるが……そろそろいいかな？』

とそこで同じく現実世界へと戻って来たゾフィーが夜空と時雨に声をかけ、2人はゾフィーの言葉に「恋人？」と首を傾げると時雨と夜空はお互いに抱きしめ合っていることに気づき、2人は顔を赤くして慌てて離れる。

『先ずは私は君たちには謝らなければならぬことがある』

「謝らないといけないこと……?」

『そうだ。あのガーゴルゴンという怪物は数々の星を滅ぼしてきた恐ろしい怪物だ。

私は任務でそのガーゴルゴンを追いつこの世界の宇宙へと辿り着いた……。しかし

……』

この宇宙でガーゴルゴンを見つけ、ガーゴルゴンと戦闘に突入するまでは良かったのだが……その中で互いの光線がぶつかり合い爆発し、その爆発によって双方に多大なダメージが入り、ゾフィーはしばらくの間行動不能となり、ガーゴルゴンも同様に行動不能状態へとなったのだが……。

そんな状態のガーゴルゴンをネイルが宇宙で偶然発見し、メカレーターへと改造手術を行ったのだというのだ。

『私があの時、しっかりとガーゴルゴンを倒していれば……! これは私の落ち度だ。

そのせいで君たちには多大な迷惑をかけてしまい、本当に申し訳ない……』

そう言いながらゾフィーは頭を下げ、夜空達に謝罪するが夜空は慌てて「頭をあげてください!」とゾフィーに言葉を返す。

「それに、どっちにしてもガーゴルゴンはいずれはこの地球に来ていたかもしれないんです。どの道そんな奴を放っておく訳にもいかない……」

『ああ、そうだな。せめてもの償いとして私も全力で君たちに力を貸そう。それともう一つ。エックス、夜空、君たちには色々教えなければならぬことがある……。』

君たちは阿久野という人物を知っているな?』

「知ってるもなにも……上層部の人ですよ? 今回のバラックシップの件を教えてくださいたのも……」

『その阿久野という人物こそ、今回の事件の主犯であるスネーク星人 ネイルなのだ』

それをゾフィーから聞いた時、夜空と時雨は顔を見合わせて信じられないといった表情を浮かべており、たった数回しか会ったことはないが彼がそんな悪い人間には2人には見えなかった。

だが逆にリョーガやグルマンは「成程……」とどこか納得した様子を見せており、というのもリョーガもグルマンも阿久野が裏で色々怪しいことをしているという噂話を多少なりとも聞いたことがあるからである。

「もしかして……石川に命令を出してた奴のデータは船と一緒に沈んで文字通り水の泡になったが……。響ちゃんを連れてくるように言ってたのはそいつかもしれないね。」

ゾフィーの言っていることが正しければ辻褄もあいそうだ」

リョーガが以前、響が石川に連れて行かれそうになったのを思いだし、グルマンは「普段は愛想よくして周りからもそれなりに慕われているから……てつきりそんな彼を嫌

う誰かが流した噂だろうとは思っていたが……」と語る。
『しかし、例えば彼が本当にそのネイルという宇宙人だったとしても証拠がないぞ?』

とそこで鎮守府の警報が再び大きく鳴り響き、そこへ朝潮と菊月が慌てた様子で医務室へと入って来た。

「た、大変です司令官!!」

「つてなんかウルトラマンみたいなのがいるんだが!」

「今はそんなことどうでも良いんです!! どうか司令官目を覚ましたんですね良かった!」

そんな朝潮の言葉に菊月は「いやよくないだろ!」とツツコムが朝潮は気にせず夜空の元へと駆け寄り、再びガーゴルゴンが空からこの鎮守府に向かってこの鎮守府に向かって接近していることを報告した。

「司令官! どうかご命令を……!」

「……分かった! 艦娘全員鎮守府の外に待機し、空から来るガーゴルゴンを迎撃し、なんとしてでもこの鎮守府を守るんだ!! 早くみんなに伝えて来てくれ!」

「了解!!」

朝潮、菊月、時雨は夜空の指示に敬礼して言われた通り指示に従いみんなの元へと向

かい、夜空も起き上がってみんなの元へと行こうとするのだが……。

「っ!？」

突然、不意に頭痛を感じた夜空は思わず頭を押しえてしまい、グルマンとリョーガが「どうした!？」と心配そうに声をかけるが、それをゾフィーが止める。

『これは恐らく……』

すると突然夜空の頭の中で様々なイメージが沸き、夜空はその頭の中で浮かんだイメージの中には目の前で両親が自分にゴモラを託し、いなくなってしまう光景や……初めてウルトラマンエックスへと変身した時の光景、時雨がバグバズンに捕まり助けに行き、戦闘に突入して3対1という不利な状況となりピンチに陥ってしまった時の光景など……そんなイメージ映像が突然夜空の頭の中で流れ……映像が途切れると夜空の頭痛は治り彼はゴモラのスパークドールズを取り出す。

「今のは……お前が見せたのか？ ゴモラ……?」

今のイメージ映像……これを夜空は恐らく先ほど電脳世界でゴモラがサイバーゴモラとして実体化した際にゴモラはその影響で自分の脳になんらかの信号を送り、自分に何かを伝えようとしているのだと思った夜空は「もしかして……」と思いゴモラに話しかけた。

「今のはゴモラ、お前の記憶……なんだな？ お前が俺と繋がるのを拒んでいたのは、俺

を心配したから……」

またゴモラはイメージ映像として見せてはいなかったが時雨に力を貸さなかったのも彼女達艦娘が彼を危険な戦場へと立たせることに繋がるからであり、夜空もそのことについては先ほどの映像を見てそのことを察し夜空はゴモラに笑みを向けて語りかける。

「ありがとう、ゴモラ。でも、俺がやらなくちやもつと大勢の命が失われてしまう。

俺がここに居るのも俺の意思だ。それに俺は仲間だつて守りたい。俺は絶対に大丈夫だから、だから頼む……俺にも彼女達にも力を貸してくれ……！」

頭を下げてそう懇願する夜空の姿を見たゴモラは夜空の言葉に返事をするように鳴き声をあげ、夜空はエクステバイザーを使わずともそのゴモラの声の意味を理解し、「ありがとう」とゴモラにお礼を述べるのだった。

「よし、行こう！」

*

時雨、朝潮、夕立、村雨、満潮、睦月、如月、皐月、山城、扶桑、暁、ヴェールヌイ、雷、電、荒潮、村雨、文月、菊月、春雨、夕張、吹雪、大鳳はガーゴルゴンの迎撃をするため一度鎮守府の外に出てガーゴルゴンの迎撃準備をする。

また夜空達は念のために鎮守府から出て少し離れた場所まで彼女達の戦いを見守ることとなり、夜空も現場で指揮を執ろうとしたのだが……龍夜に「さつきまで寝込んでたんだから俺に任せて大人しくしてろ」と言われたため、指揮を外されてしまったが……むしろ夜空的にはエックスに変身するためには都合良かった。

またゾフィーはバラックシップと改造艦娘、改造深海棲艦を止めてくるということで別行動を取り、やがて先ほどと同じようにガーゴルゴンが鎮守府に向かって落下してくるのが見えると一同は龍夜の指示を受けて主砲を構える。

「まだ全員サイバー怪獣の力は使うな！　なんとしてでも鎮守府から軌道を逸らすんだ!!　総員……攻撃開始い!!」

龍夜の指示を受け、艦娘達は一齐に主砲から砲弾を発射して攻撃を開始した。

しかし時雨達は幾ら砲弾を撃つてもガーゴルゴンの勢いは止まらず、龍夜は夕張と大

鳳にサイバー怪獣のカードを使うように指示し、夕張は「サイバーキングジョー」、大鳳は「サイバーバードン」のカードをそれぞれジオバイザーに装填させる。

『サイバーキングジョー、ロードします』

『サイバーバードン、ロードします』

夕張は主砲にサイバーキングジョーのエネルギーを集約し、一気にそれを放出させる。ビーム砲「キングジョーデストロイ砲」を、大鳳はサイバーバードンの力をその身に宿しボウガンを構えてそこから巨大な火の鳥を模した炎が放たれる「バードン・フェニックス・アタック」を2人は繰り出し、それらがガーゴルゴンに直撃すると見事に軌道が逸れて鎮守府とは別方向へと落下したのだが……ガーゴルゴンはすぐに起き上がり、鎮守府を襲撃しようとする。

「させないわよ！ 大鳳！ もう一度行くわよ!!」

「はー!!」

夕張と大鳳は再び「キングジョーデストロイ砲」と「バードン・フェニックス・アタック」をガーゴルゴンに放つがガーゴルゴンは前方にバリアを張り巡らせて攻撃を防いでしまう。

そしてガーゴルゴンは狙いを艦娘達へと定め、両肩の触手の口から電撃光線を彼女達に向かって放つがガルラフュージョンとなった睦月が周囲にバリアを張り巡らせて攻

撃を防ぐのだが……あまりの強い衝撃に睦月は吹き飛ばされてしまいそれを如月が慌てて受け止める。

「睦月ちゃん!? 大丈夫!？」

「う、うん、ありがとう如月ちゃん……」

「暁ちゃん、睦月ちゃん、如月ちゃん、夕張さん、大鳳さんは前方からガーゴルゴンを攻撃して奴の注意を引きつけて！ 残りのメンバーはガーゴルゴンのバリアを張れない背後を狙うわよ！」

扶桑の指示に従い、暁と如月は「サラガスフュージョン」と「サラマンドラフュージョン」となり、強化された砲弾をガーゴルゴンに発射し、夕張と大鳳はキンググジョーデストロイ砲とバードン・フェニックス・アタックでガーゴルゴンを攻撃しなるべくガーゴルゴンの注意を引きつける。

そして満潮はサイバークビラのカードをジオバイザーにロードさせると主砲がドリルへと変わり、それを前に突き出すとドリル状のビームがガーゴルゴンへと放たれ、続いて山城と扶桑も主砲から砲弾を発射してガーゴルゴンの背中を攻撃し……ガーゴルゴンはたじろく。

「グアアアアアアア!!!」

するとガーゴルゴンは雄叫びをあげて満潮達に電撃光線を放ち、満潮、山城、扶桑は

大きく吹き飛ばされてしまう。

「「きやあああああ!!!」」

「あつ……!! エックス、ユナイトだ!! みんなを助けるぞ!!」

『よし、今度こそ奴を倒すぞ!!』

既に人気のない場所へと行き、その光景を見た夜空はエクステバイザーを取り出し、そこからエックスのスパークドールズが出現してそれを掴み取ってエクステバイザーにリードさせた後、夜空はエクステバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

「エックス……!!!」

『エックス、ユナイトッド!』

『イイツサアアア——ッ!!』

すると夜空は「ウルトラマンエックス」へと変身し、エックスは吹き飛ばされた扶桑、山城、満潮を両手で受け止めゆっくりと地上に降ろした後、エックスはファイティングポーズを取ってガールゴンと対峙する。

『夜空……この感じ……』

「ああ、今までのユナイトと何か違う……。前よりもエックスを近くに感じる……!」

『どうやら、君が私を救ってくれたおかげらしいな……』

「いや、俺だけじゃ無いよ……。ゾフィーや、時雨やゴモラがいたからこそエックスを救うことが出来たんだ……」

夜空はエックスにそう言った後、サイバーゴモラのサイバーカードを取り出し、エクステバイザーにそれを装填する。

『サイバーゴモラ、ロードします』

「ゴモラ……一緒に戦うぞ！」

サイバーゴモラのスパークドールズがエクステバイザーから出現し、夜空はそれを掴み取るとエクステバイザーにリードさせる。

『リアライズ！』

そしてエックスの隣に青い姿に巨大な爪を持った怪獣……。 「電脳怪獣 サイバーゴモラ」が実体化して出現し、夜空はサイバーゴモラと繋がることに成功したのだ。

「時雨！ お前も力を貸してくれ！」

さらに夜空は時雨のサイバーカードをエクステバイザーに装填させるとエックスは「時雨アーマー」を装着し、エックスとサイバーゴモラは2体でガールゴングに同時に挑みかかり、また時雨達はサイバーゴモラが実体化したことに驚いていた。

「サイバーゴモラの実体化に成功したの……!?!」

「司令官さんがどこかで実体化させたのでしょうか……?」

雷と電がそれぞれ疑問に思ったことを口にしたが時雨に「今はそれを気にしてる場合じゃないよ!!」と言われたため、時雨からエックスとサイバーゴモラを援護するように指示され、2人は一齐にガーゴルゴンへと攻撃を開始した。

戦闘BGM「Xの戦い」

『シユア!!』

エックスは主砲から砲弾を発射しながらガーゴルゴンへと駆け出し、ガーゴルゴンは前方にバリアを張り巡らせて攻撃を防いだ後、即座に胸部を開いて大量のミサイルをエックスに向かって放つがそれをサイバーゴモラが両手から発生させるバリアで防ぐ。

するとエックスはサイバーゴモラの背中を駆け上がって高くジャンプして主砲を逆手に持ち、ガーゴルゴンへと一気に接近してガーゴルゴンを殴りつけ、ガーゴルゴンは負けじと左手の剣を振るうがエックスは即座に後ろへと後退して避け、それと入れ替わるようにサイバーゴモラの振るった尻尾が頭部に直撃し、ガーゴルゴンはフラつく。

「今だ!!」ゴモラ、僕にも力を貸してくれ!」

時雨はゴモラのサイバーカードにそう頼んだ後、ジオデバイザーにカードを装填させると『サイバーゴモラ、ロードします』という音声で鳴り響き、彼女は再びゴモラの力を使用できるようになり、同時に雷と電がサイバーネロンガとサイバーエレキングのカードを使い強化された砲弾を発射してそれが見事にガーゴルゴンの左手の剣に直撃

し粉々に砕け散ったのだ。

「やったのです!!」

「ふふーん! 雷様の力を見たかしら♪」

「いつけー!! エックススーリーー!!!」

「ゴモラーリーー!!!」

時雨の言葉にエックスは頷き、サイバーゴモラはガッツポーズをすると一気に勝負を決めようと攻撃を仕掛けるのだが……その時、突如として1つの宇宙船が現れガールゴンを援護するようにエックスとサイバーゴモラに向かって光線を放って来たのだ。

さらにその宇宙船から飛び出すように巨大化した「スネーク星人 ネイル」が出現し、ネイルは怒り狂ったように叫び声をあげる。

『貴様等ア……!! まさか本当にエックスを復活させるとは……!! どうやら私の詰めが甘かったらしい……!! やはり徹底的に潰さないといけないらしいなア!!』

ネイルはそう叫びながらガールゴロンと共にエックスとサイバーゴモラへと挑みかかろうとしたその時のことである。

「ドスツ!」という鈍い音が聞こえ、ネイルが自身の腹部を見るとそこには背中からガールゴンの剣が貫通しており、ネイルは口から血を吐き出しガールゴンを睨み付ける。

そしてその光景にエックスや時雨達も驚きの様子を見せていた。

『き、貴様ア……!? なぜえ……!?』

『どうやら、あのエネルギーは私に植え付けた貴様の作った制御装置を破壊してくれたらしい。しかし、またあの制御装置を植え付けられたら厄介だったからな。隙をずっと伺っていたのさ。よくもミジンコのような生物がこの私を弄んでくれたな。』

今度は貴様が私の飼い犬となる番だ……!』

ガーゴルゴンがそう言い放つとガーゴルゴンは剣からあの黒いエネルギーをネイルへと注ぎ込み、それにネイルは悲痛な声をあげる。

『ぐあああああああ!!』

そしてガーゴルゴンが剣を引き抜くとネイルの腹部の傷は回復し、あの黒いエネルギーを流し込まれたネイルは目は赤くなり、身体も筋肉質なものへと変化し全体的に黒くなった「ダークネイル」へと変貌したのだ。

『グルアアアアア!!』

『これで今度は貴様が飼い犬だ……! やれ!!』

ネイルはガーゴルゴンの言葉に領き、サイバーゴモラへと向かっていき、ガーゴルゴンは右手の爪を変形させてドリルにしてエックスに攻撃し、エックスは主砲を交差して防ぐもののそのドリルによって2つの主砲は破壊されてしまう。

『グウ……!?』

一方でネイルは回し蹴りでサイバーゴモラの蹴りつけ、俊敏な動きでサイバーゴモラを翻弄し様々な方向から打撃による攻撃を加えた後、刀のような武器を取り出してサイバーゴモラの背中を斬りつける。

『ギシャアアア!!?!』

サイバーゴモラは負けじと腕を振るうがネイルはそれを回避し、腕から光弾を放ち、それがサイバーゴモラに直撃してサイバーゴモラはエックスの方まで思わず後退してしまい、エックスとサイバーゴモラが一カ所に集まったところを狙いガールゴンの電撃光線とネイルの連射して放つ光弾がエックスとサイバーゴモラを襲う。

『サイバーテレスドン、ロードします』

「溶岩熱線、発射あ!!」

だがそこに「サイバーテレスドン」のカードをロードさせたタカトの乗ったスカイマスケツティが現れ、強力な熱戦をネイルとガールゴンに発射し、ガールゴンは寸前のところでバリアは張れたもののネイルには直撃してしまい、ネイルは大きく吹き飛ばされてしまう。

『ぐああああ!!!?』

ガールゴンはバリアを解除した後、再びエックスとサイバーゴモラを睨み付けると中央の口を開いてその不気味な目を出現させるが……エックスは光エネルギーを矢じ

り型にして放つ「Xスラッシュ」をガーゴルゴンの目に直撃させ……ガーゴルゴンは苦痛に満ちた声をあげるのだが……攻撃された目はすぐさま再生してしまいあのエックスを石化させた光線を放とうとする。

『まずい！ あの黒いエネルギーの影響か……再生能力が早まつてる……！』
「さつきやった時はそんなこと無かつたのに……！」

『あのエネルギーのせいで奴の力も徐々に上がってきているんだろう……！』

エックスの説明に夜空は納得したが……。「でも、新しい力を得たのはお前だけじゃ無い!!」と言い放ち、突如夜空の目の前に1つのスパークドールズが現れ、それをエクスデバイザーにリードさせると電脳世界で手に入れたあの「エクスラッガー」が今度はお出する。

『ウルトラマンエックス、パワーアップ!』

夜空はそれをエクスラッガーを掴み取ると側面にある虹色のスライドパネルをなぞってトリガーを引き、夜空はX字に斬るような動作を行う。

『行くぞ!! エクシード!! エックス!!!』

するとエックスは銀色のボディには虹色のラインが走った姿「ウルトラマンエクシードX」へと強化変身し、ガーゴルゴンはあのエックスを消滅させた黒いエネルギーを含めた石化光線をエックスに向かって放つがエックスは右手にエクスラッガーでそれを

真つ二つに切り裂いてしまったのだ。

『シユアアアアア!!!』

「グウウ!？」

戦闘BGM「エクシードXのテーマ」

ガーゴルゴンはエックスが自分の光線を切り裂いたことに驚くがエックスは構わずガーゴルゴンに向かって駈け出して行き、ガーゴルゴンはあの黒いエネルギーを込めたミサイルや電撃光線を放つ。

だがエックスはそれらを全てエクストラッガーで切り裂き、一気にガーゴルゴンに近づき攻撃されると思ったガーゴルゴンはバリアを張り巡らせるがエックスは素早くガーゴルゴンの背後に回り込んで横一線にエクストラッガーを振るって斬りつける。

「ギシヤアアアア!!!」

さらにエックスは手を緩めずにエクストラッガーで何度も連続でガーゴルゴンの背中を斬りつけた後、後ろ回し蹴りを繰り返してガーゴルゴンを蹴り飛ばす。

『デヤアアアア!!!?』

「グルウウウ!!!」

ガーゴルゴンは反撃しようと振り返って右手のドリルを回転させてエックスを攻撃しようとするが左手を振るってガーゴルゴンの右手を弾き、エックスは今度は縦一線に

ガーゴルゴンを切り裂き、ガーゴルゴンは身体から火花を散らす。

『凄いな……。ただ力がパワーアップしただけじゃない、夜空……。君は剣道でもやってたのか?』

「んっ? ああ……。何時か剣を使うアーマーが来るんじゃないかと思つて時雨や夕立に特訓付き合つて貰つてたんだ。天龍とか木曾つていう艦娘刀持つてるからさ

……」

『ああ、そう言えば確かやっていたな、忘れていた』

一方でサイバーゴモラはネイルと戦闘を繰り返しており、ネイルは相変わらず俊敏な動きでサイバーゴモラを翻弄するが……。ネイルがサイバーゴモラの背後に回り込んだ瞬間、扶桑、山城がサイバーカードをジオバイザーに装填させネイルに攻撃を行う。

「扶桑!! 山城!! 今だ!!」

「了解!!」

『サイバーレッドギラス、ロードします』

『サイバーブラックギラス、ロードします』

龍夜の指示を受け、「双子怪獣 レッドギラス」と「ブラックギラス」の力を扶桑と山城はその身に宿し、主砲を構えて同時に発射すると強烈な竜巻が発生して敵を竜巻の中に拘束する『ギラススピントルネード』を繰り出し、ネイルは竜巻の中へと拘束される。

『グアアアアア?!』

「吹雪!!」

「はい!!」

『サイバースノーゴン、ロードします』

山城の声に応えるように今度は吹雪がジオバイザーにカードを装填し、「雪女怪獣スノーゴン」の力をその身に宿した吹雪は主砲を構え、そこから強力な冷気を放つ「スノーゴンブリザード」を発射しネイルを凍り付かせる。

『グウウウ……!!』

「ギシャアアアアア!!!」

凍り付いたネイルをサイバーゴモラを腕を振るって力いっぱい殴りつけ、その際にネイルの動きを止めていた氷も砕けはしたもののかなりのダメージを与えることに成功した。

ネイルはそれでも尚立ち上がろうとするが直後にサイバーゴモラに殴りつけられ、さらに連続で尻尾攻撃を2回連続で頭部に受けた後、その巨大な爪でネイルは身体を斬りつけられる。

『ぐあああああ!!!? ぐっ……!』

ネイルは脱皮して今まで喰らったダメージを無くし、一気に体力を回復して逆転を狙

おうとするが村雨、菊月、文月、皐月の放った砲弾が足下に直撃してバランスを崩し、膝を突いてしまう。

『っ……!!?』

「今だゴモラ!! サイバー超振動波だ!!」

「グアアアアア!!」

夜空の指示を受けてサイバーゴモラはエネルギーを両腕のクローと角に集め、敵に高速で接近し、ゼロ距離で振動波を浴びせる。「サイバー超振動波」をネイルへと繰り出し……ネイルは身体中から火花を散らした後、サイバーゴモラに空中へと投げ飛ばされ……最後の最後に一瞬だけ自我を取り戻したネイルは断末魔をあげながら脱皮する間もなく爆発四散したのだった。

『この私が……こんな結末をおおおお!!?』

またエックスはガーゴルゴン胸部に連続で拳を叩き込んでミサイル発射口を叩きつぶした後、エクストラッガーで何度も斬りつける。

「ゴモラ!! ガーゴルゴンにサイバー超振動波だ!!」

「ギシャアアア!!」

再び夜空の指示を受けたサイバーゴモラは両腕のクローと角に再びエネルギーを集めてガーゴルゴンへと突っ込み「サイバー超振動波」を浴びせてガーゴルゴンを吹き飛

ばし、続けて時雨がゴモラの力を使った光線……「ゴモラ振動波」をガーゴルゴンに撃ち込む。

「ゴモラ振動波!!」

サイバーゴモラと時雨の攻撃を受けてガーゴルゴンは身体中から火花をあげ、最後に夜空がエクストラツガーを額にかざしてスライドパネルを上から下になぞり、エックスも彼のスライドタッチに合わせて額をなぞってから強力な光線を放つ「エクストラツガーショット」を放つ。

『「エクストラツガーショット!!!」』

ガーゴルゴンはエクストラツガーショットを防ごうとバリアを張り巡らせるがエクストラツガーショットはガーゴルゴンのバリアを瞬く間に砕き、ガーゴルゴンに直撃すると遂にガーゴルゴンは倒れ爆発するのだった。

「グルアアアアアアアアアア!!!」

ガーゴルゴンとネイルが倒されたことで一同は「やったああああああ!!!」と歓声をあげ……また一方エックス達がガーゴルゴンとネイルと戦っている頃、ゾフィーはとうとう……。

ゾフィーは「ウルトラコンバーター」というアイテムを使いエネルギーを回復させた後、「ウルトラセパレーション」という技を使って5人に分身しバラックシップや改造艦

娘、改造深海棲艦のいる場所へと向かった。

『ふむ、どうやらあのバラックシップから特殊な電波を発せられ、改造艦娘や改造深海棲艦達を操っているようだ……。正直、有り難い。改造され、既に亡くなっているとはいえ、彼女達を攻撃するのはやはり……』

そこまで言いかけるとゾフィーは右手を前方に伸ばして発射する必殺光線「M87光線」をバラックシップや改造艦娘、改造深海棲艦の攻撃を避けながら発射し、ゾフィーの光線がバラックシップを貫くとバラックシップは爆発し……。同時に改造艦娘や改造深海棲艦の機能も停止し……。彼女達は海の上で次々と倒れて行くのだった。

『せめて……。安らかに眠ってくれ……。』

同じように分身したゾフィーも同様にバラックシップを順調に倒し、再び1人に戻った後、エックス達の元へと戻りバラックシップを倒して改造艦娘や改造深海棲艦が機能を停止したことを報告した。

『安心しろ、バラックシップは倒した』

『ありがとうございます、力を貸して頂き』

『いや、ガーゴルゴンを逃がしたのは私のミスだ。むしろ君たちにガーゴルゴンを任せる形となつてしまった……。本来ならば私が相手をするべきだったのだが……。』

そんなゾフィーに対し夜空は「気にしないでください」と語りかける。

「病み上がりの状態ではあのガーゴルゴンを相手にするのはキツかったですでしょうし……。むしろバラックシップ達を止めてくれたこと、感謝してます。これで彼女達もゆっくりと眠れるでしょう……」

『うむ。それと阿久野のことだが……ネイルが倒された今、調べれば奴が裏でなにをしていたか、ネイルに繋がる証拠も出てくるだろう。では、また私の助けが必要な時は呼んでくれ。いつでも力を貸そう』

ゾフィーのその言葉にエックス領き、ゾフィーはそれだけを言い残すと空を飛んで去って行き、姿が見えなくなるとエックスも空中へと飛び立って姿を消し……夜空の姿へと戻るのだった。

*

その後、ゾフィーの助言通りリヨーガやグルマンが阿久野を調べるとゾフィーの言う通り次々と阿久野がネイルと繋がる証拠が見つかり、裏で非合法な実験などを行っていたことも判明、阿久野の姿もネイルが倒されて以降行方不明となったことから彼の正体がネイルであったことは確実だった。

また一方で鎮守府では今回の事件に大きく関わった者として夜空は大量の書類仕事をすることとなっており、その量は基本的に仕事の早いと言われる夜空ですら嘆くレベルだった。

「はあ、なんでこんなに書類仕事が……」

「あはは……。僕も手伝うから頑張つて?」

時雨にそう言われて夜空は「お願いします……」と頭を下げて頼み、2人はせつせと書類仕事を行うのだが……そこで夜空は1つ気になったことを時雨に尋ねた。

「なあ、時雨」

「んっ? なんだい提督?」

「俺がエックスとユナイトして戦ってたことについて……なにも言わないんだな……」

その夜空の言葉を受けて時雨はなにか思い出したように「あっ……」と呟き、どうやら彼女はそのことをスツカリ忘れていたらしい。

「あの時は、提督が無事に帰って来てくれたことがあまりにも嬉しかったから……でも、そうだね。提督がエックスだっていうことを隠してたのは……僕たちのためなんでしょう？」

「お見通しか……」

「それでもそこそこ長い付き合いだしね？」

時雨のその言葉に夜空は「確かに毎日一緒にいればそうか」と苦笑し、それに釣られて時雨も思わず笑ってしまう。

「提督が隠してたのは……エックスである自分を他の宇宙人が狙って来るかもしれないから……なんでしょ？ もしも提督が僕たちに最初から自分がエックスだってみんなに明かしていたらそのせいでみんなにも被害が及ぶかもしれない。だから、隠してたんだよね……？」

「ホント、お見通しか……。 ああ、一応グルマン博士やリョーガさんにも黙っておくように釘刺しといたけど……時雨も……みんなには黙っておいてくれるか？」

「うん、提督の気持ちも……分からはないから。提督がみんなを守りたい気持ち

は分かっているつもりだからね、僕は……」

夜空は「ありがとう」と時雨にお礼を言った後、少し休憩しようと言い、時雨もそれを承諾し休憩するために置かれたソファに座り込む。

それから夜空は紅茶を2人分淹れてテーブルの上に置いた後、時雨の隣に座って2人で紅茶を飲み始める。

一通り紅茶を飲み終わると時雨はそつと夜空の方へと寄り添い、いきなり時雨が自分の手を握りしめて突然のことに夜空は戸惑ったが彼は特に抵抗することなく、受け入れた。

「どうしたんだ……?」

「心配……したんだよ? ゾフィーが来なかったら……提督は……!」

「……ごめんな、約束したのに……結局お前等に助けられて……約束を破りそうになって……。情けない……」

夜空は申し訳なさそうに時雨に謝り、時雨は夜空と顔を見合わせると……彼女の瞳からジワアつと涙が溢れ出し夜空に抱きつく。

「提督が電腦世界に閉じ込められそうになったとき、本当に怖かったんだよ! 僕の前から提督が消えるんじゃないかって……! だから……だから提督、お願いだよ、僕の前から絶対に消えたりしないで!! 提督が……夜空がいなくなったら僕は……」

「っ…………。泣くなよ…………」

泣き出してしまふ時雨を見て夜空は暗い表情を浮かべ、時雨の涙を指で拭う。

「約束するよ。今度こそ、絶対に…………。だから、泣くな…………」

「うん、約束…………だよ…………」

夜空はそつと時雨の頬に優しく触れ、時雨は夜空は互いに真つ直ぐ見つめ合い…………。2人はそつと互いの顔を近づかせ…………唇を重ね合わせるのだった…………。

「っ…………。えへへ、思わず…………キス、しちゃったね…………？」

恥ずかしそうに…………けれども嬉しそうにする時雨、それに対し夜空も恥ずかしそうにしつつも思わず口元に笑みを浮かべそうになるがそれを時雨に見せないように彼は慌てて手で口元を隠す。

「そう、だな…………」

「フフツ…………。アハハハハ！」

「っ、ハハハ！」

時雨はそんな夜空を見て思わず笑ってしまい、夜空もそれに釣られるように笑ってしまふのだった。

『2人とも、私がいること忘れてるだろ……』

そしてエクステバイザーから「誰かコーヒーくれ!!」と嘆くエックスであった。

第2部

第15話 『人間怪獣侵略作戦』

「はあく、やっと終わったあく」

「お疲れ様、珍しく書類の提出日ギリギリだったね？」

ガーゴルゴンとネイルとの死闘から数日が経過し、夜空は前回の事件の書類を丁度今片付けたところであり、ぐったりとした様子で夜空が机に突っ伏していると時雨が後ろから抱きついて来たのだ。

「……なにしてんだ？」

「えへへ、疲れた提督へのご褒美だよ♪」

時雨は嬉しそうに夜空の背中に頬ずりしており、また抱きつかれている夜空も満更でも無さそうな顔を浮かべていた。

「ところで時雨……なんでまた提督呼びに戻ってるんだ？」

「えっ？ いや、その……それはちよつと……本名で呼ぶのはまだ少し慣れなくて……」

とは言うもののあの時、執務室で口づけして以降夜空と時雨の仲もグツと縮まっており、遂には夜空は時雨がケツコン可能なレベルになったために指輪を彼女に送ってケツ

コンカツコカリも済ませたのだ。

そして彼女の左手の薬指にはケツコンカツコカリをした証でもある指輪がはめられていた。

その時、「ぐうぐ」という音が鳴り、それを聞いた時雨はその音がすぐに夜空のお腹の音であることを理解し、お腹の音を聞かれた夜空は恥ずかしそうにしていた。

夜空のそんな姿を見た時雨はクスクスと思わず笑ってしまう。

「笑うなよ……！」

「ぐめんぐめん」

時雨は夜空のお腹が鳴ったのを笑ったことを謝罪するのだが、その直後自分のお腹からも「ぐうぐ」という音が聞こえ、彼女は思わず自分のお腹を押さえて顔を赤らめる。

そんな様子の時雨を見た夜空は先ほどの時雨と同じように思わずクスクスと笑うのだった。

「も、もう！ 提督こそ笑わないでよ！」

「悪い、もうお昼頃だし……そろそろ食堂にでも行くか？」

夜空がそう尋ねると時雨は「ちよつと待って！」と慌てた様子で引き止め、自分が使っている机の引き出しを開ける。

するとそこから一つの包みを取り出し、見た感じでは包みの中には何かが入っている

ようだった。

「そ、その……!」

時雨は頬を赤くしつつ何かを言おうとし、夜空はそんな時雨に首を傾げる。

「えつと、あの……ねつ。 提督に……お弁当、作ってきたんだ? 良かったら……食べて、くれない……かな?」

耳まで真つ赤にした時雨は上目遣いでそう夜空に尋ねると夜空も時雨と同じくらい……口元を押さえ耳まで真つ赤にし、彼は「こくん」と頷いて時雨は嬉しそうに笑みを見せる。

「でも、ここ書類ばつかで散らかってるから……食べる場所は食堂にすべき……かな?」
「う、うん、そうだね……!」

ということとで夜空は時雨と一緒に食堂で彼女の作った手作り弁当を食べることとなり、執務室を2人は出るようになったのだが……執務室から出るや否や、時雨はそつと夜空の手を握りしめ……突然のことに夜空は驚く。

「手、繋いじゃ……ダメ……?」

「い、いや……ダメじゃ、ない……」

夜空がそう答えると時雨はまた嬉しそうな顔を浮かべ、握る手を強めて2人は食堂へと向かうのだった。

さて……食堂へと到着し、時雨の作って来てくれた手作り弁当を食べ始めたまでは良かったのだが……。

先ほどからどうも周りから視線を感じていた。

「さっきからみんなで見てるんだよ？」

特に如月や荒潮などの2人はニヤニヤした笑みを浮かべており、夜空は少し不満そうに如月や荒潮に問いかけると荒潮は「別に〜？」とニヤついた笑みを崩さずそう返し、如月はそつと時雨に近づくとこつそりと彼女に耳打ちする。

「それで時雨ちゃんも提督と『C』まで行ったの〜？」

「なっ……!!? ききききき、如月なにを!!? そそそそ、そんなことしてる訳ないじゃないか
!」

如月の言葉に顔を真っ赤にして首を横にブンブンと振って否定する時雨に如月はクスクスと笑みを浮かべる。

「あらあら、初々しくて良いわね〜」

荒潮はからかうように時雨と夜空にそう言うと2人は顔を真っ赤にしてしまう。

ちなみにそんな風に弄られて顔を真っ赤にしている時雨の様子を奈々はこつそりとスマホのカメラでパシャパシャ撮影したりしていた。

「恥ずかしがってる時雨さん可愛すぎ! これは永久保存確定!!」

「アンタの場合何時も永久保存だろ」

そう奈々に冷ややかにツツコミを入れるのは菊月である。

「あれ？ 副司令の奇行止めないの菊月ちゃん？」

「まあ、これくらいなら特に問題はないだろう……。 つていうか奇行云々はアンタも

言えた義理じゃないだろ」

「失敬な!! 私のが奇行だと言うんだね!」

菊月のツツコミにプンブンとした様子で怒るのはこの鎮守府でも1、2位を争うほどの変人「戦国 リョーガ」である。

今現在彼はなぜかサッカーボールくらいの大きさのチョコを2つ制作しており、エプロンと帽子を着用したリョーガはチョコ2つを「コトン」つと置くと「ふうー」と一仕事終えたように額の汗を拭った。

「よーし、後はこの間に棒を立ててつと……」

それを聞いた瞬間菊月は艤装を展開して演習弾でリョーガの作ったチョコを粉碎した。

「あああああああ!!!? コンテストに出そうと思つてたチョコがああ!!! 私力作があああ

!!!」

「どこが力作だあああああ!!!? つていうかアンタは食堂でなに卑猥なもの作ろうとし

てんだあああああ!!!?

菊月のツツコミを受け、リヨーガは「卑猥なもの？」となんのことがイマイチ分かっていないようで首を傾げる。

「何を想像したか知らないけど……これはアレだよほら、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だよ。これであのチョコの彫刻的なコンテストで優勝狙うんだよ」

「狙えるかあああああ!!!? 即刻ビリだろこんなの!! しかもアームストロング2回言っただぞ!」

するとそこへ「リヨーガさくん、あたしのできたよ」という何時もの脳トロボイスでリヨーガの名前を呼びながらとて可愛らしく歩いてくるのは菊月の姉でもある文月なのだが……。

その両手にはチョコレートで出来た細長い棒のようなものを持っており……それを見た瞬間菊月は閃光の如く速さでリヨーガに腹パンを叩きこむ。

「ふふうふう!!!」

「アンタはウチの姉に……しかもピュアな文月姉さんに何作らせてんだア!!!」

「あいたたた…… だからこれアレだって、これネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だって……。多分菊月ちゃんが想像してるのとは違う

から」

リョーガはフラフラっとしながらもなんとか立ち上がって文月からチョコを受け取ると予備として作っていたボール状のチョコ2つを取り出し、それを左右に置いて中央に棒状のチョコを立てようとする。

「オイだからやめ……」

「なんだ？ 騒々しい」

そこに丁度タカトが現れ、菊月がタカトが現れたことに内心ホツとし、タカトも何かリョーガに言つて欲しいと思うのだが……。

「なんだ、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲じゃないか、完成度高ーなオイ」

「ええええええええ!!?!? あるのか!?! タカトさんが知ってるつてことはホントにあるの!?!」

「江戸城の天守閣を吹き飛ばし、江戸を開国させたと言われる決戦兵器だ。艦娘ならみんなこういう兵器知ってると思つたんだが?」

タカトの言葉に菊月は「知るかああああ!!?!」と怒鳴り、そんな菊月の様子を見た如月が「まあまあ、落ち着いて? あんまり怒りすぎると血圧あがるわよ?」と彼女を落ち着かせる。

とそこでリョーガの作ったチョコに如月も気づきく。

「あら、これってネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲じゃない。完成度高ーなオイ」

「いや如月姉さんも知ってるのか!! しかもなんで後半ちよつと口調変わったんだ!!」

菊月は「はあ……」と頭を抱えながら溜め息を吐きく。

「つていうか、リョーガさん、アンタはグルマン博士とあの黒い稲妻のエネルギーについて調べてたんじゃ無いのか?」

菊月がそう問いかけるとそれに対し、リョーガは「ふう……」と首を横に振りながら小さく溜め息を吐く。

「それが全くよく分からないんだよねえ……」

「分からない?」

「ああ」

リョーガ曰く、あの黒いエネルギーは「ダークサンダーエナジー」と名付けられ、そのエネルギーがより強い生命力を持つ者に降り注ぐこと、それを受けた怪獣などは恐らくではあるが強力な力を得て凶暴化すること……。

そしてそれが宇宙から飛来してくるエネルギーであることしか現状では判明できておらず、ダークサンダーエナジーの実態は未だに掴めないでいたのだ。

「一体宇宙のどこから来るのか、何時どんなタイミングで来るのか全く分からない……」

八方塞がりって訳さ。だから気分転換にこんなことしてるって訳だよ」

「気分転換でおかしなもの作るな……」

「お菓子なだけに？」

「やかましい!!」

とそこへ騒ぎを聞きつけたグルマンがまたリョーガが何かやらかしたのかと呆れた様子で見っていた。

*

それから数日後……久しぶりにリョーガは夜空から3日間休暇を貰うこととなり、今は街を歩きながらなにか面白いことでもないかと考えながら歩いているところであった。

（うーん、休暇つて言つても特にやること無いんだよねえ。私つて仕事が趣味みたいな人間だから……）

ただ作るものは普段はおかしなものばかりなのでそれでちゃんと仕事していると見えるのかどうかは微妙なところである。

その時のことだ、リョーガが歩いているとフツと一人の少女を抱えて歩いている男性が目にとまり、その少女の履いていた赤い靴が地面に落ちたのを目撃。

リョーガは慌ててそれを拾って少女に返そうとしたのだが……既にそこには誰もいなかった。

「あれ？ おつかしいなあ〜？」

リョーガは確かにそこにいた筈なのにも関わらず、辺り一面を見渡してもやはり先ほどの少女の姿は見当たらなかった。

彼はジツと赤い靴を見つめると靴の中に「マリ」と書かれており、それを見てリョーガは昔のことを思い出していた。

それはリヨーガが科学者になるよりもずっと前……まだ小さかった頃、一緒によく遊んでいた友人の「マリ」という少女がいた。

その少女は何時も赤い靴を履いており、リヨーガはそのマリという少女ととても仲が良かったのだが……。

ある日、マリはある男性に抱きかかえられてどこかへと行ってしまい、リヨーガはそれ以来マリとはもう何年も会っていないかったのだ。

今思えばその男性はとても怪しく思えたのだが……マリが何も騒がず大人しく連れて行かれたことやリヨーガ自身連れて行かれるマリを助けようとした記憶もないため、記憶が少し曖昧になっているだけできつと身内の人が連れて行ったのだろうと考える。

（いや、だけどそれでもやはり何かがおかしい気がする……。あれは本当にマリちゃんの内内だったのか？　だがそうじゃないとしたらなぜ私は止めなかった？　子供だからよく分かっていなかった？　そんなことは……）

昔のことを思い出し、色々と考えを巡らせるリヨーガ。

その時、少しだけ立ちくらんでしまい、リヨーガは少し疲れているのかもしれない。思った彼は今日のところは帰ることにして今住んでいるアパートへと帰宅するのだ。た。

ちなみに、リヨーガはアパートから鎮守府通っていたりする。

そしてその日は特に何かをする訳でもなく、普通に夜に食事をして風呂に入って寝て一日を終わるといふ普通の生活を送ることになったリヨーガだったが……。

早朝、突然誰かがインターホンが鳴り響き、リヨーガは「ふあく！」と欠伸をしながら玄関を開けるとそこには綺麗な顔立ちをした美人の部類の女性が立っていたのだ。

「えーつと、どちら様かな？」

「リヨーガくん！ 私！ 覚えてない？」

女性にそう言われてリヨーガは目をゴシゴシつと擦って再び女性の顔を見てみるとその顔にはどこが見覚えがあり、ジツと見つめているとそれが自分の幼馴染みであるマリであることに気づいたのだ。

「まさか……マリちゃん？ ホントに!? 今までどこにいたんだい!? 急にいなくなるからビックリしたじゃないか!!」

「ごめんなさい、海外に行つてたもんだから中々連絡できなくて……。積もる話もあるし、外で話さない？」

マリにそう言われてリヨーガは頷く。

「すぐに着替えてくるから待つてて！」

リヨーガはそう言つてすぐに私服へと着替えて出ると彼はマリと一緒に談笑しながら外を歩くこととなった。

「おや？ おやおやあ〜？」

「あらあらあ〜？」

「お前等なにやつてるんだ……？ んっ？ アレは……リョーガさんと……誰だ？」

するとそこへ丁度外へ出かけていた荒潮と村雨、菊月がたまたま偶然通りかかって男女仲良く話し込んでいるリョーガを発見。

それを見た荒潮と村雨はニヤニヤした笑みを浮かべる。

「お前達、なにか良からぬことを考えているな……？」

そんな荒潮と村雨の2人に呆れた視線を送りつつ菊月は頭を抱えた。

「提督と時雨の仲が一気に縮まったと思ったらまさかりョーガさんまで春が来てたなんてね〜？」

「いや、まだそういう仲だと決めつけるのは早いだろう、村雨？」

「ここはあの2人の関係を確かめるためにも尾行すべきよ!!」

そんな意見を荒潮が出し、それに村雨も異議無しと言うことで、リョーガ達を尾行することになったのだが菊月は「2人で勝手にやつてくれ」と先に鎮守府へと帰ろうとする。

しかし村雨と荒潮に肩をガツチリと掴まれて引き止められる。

「おいコラ離せ!!」

ジタバタ暴れる菊月だが村雨と荒潮は決して逃がそうとはしなかった。

「ダメよく？ 菊月ちゃんも一緒じゃないと？」

「そうよ！ 楽しく尾行しましょう！ それに私達2人だと何やらかすか分からないからストッパーも必要だし!!」

「それ自分で言うのか!？」

しかし、村雨の言う通りこんな調子の2人を放っておいては何をやらかすか分からないのも事実、不安なので結局一緒について行くことになったのだった。

(菊月ちゃん達をストーキング……見守っていたらまさかこんな面白い場面に出くわすとは……仕事サボって正解でしたね！)

ちなみに何時も通り奈々も菊月達にこっそりついて来たりしていた。

そして場面はリョーガとマリに戻り……。

「それにしても聞いたわ、あのリョーガくんが政府に所属する科学者だなんて……。今ではあの艦娘っていう人達がいる鎮守府で働いてるんでしょ？」

「まあ、科学者になるのは昔からの夢だったからね。それにウチの上司の提督は怪獣や深海棲艦とも出来れば仲良くなるうなんて面白い人だしね」

それを聞いたマリはそんなこと可能なのだろうかと尋ねるがリョーガは自分自身は怪獣や深海棲艦との共存自体にはあんまり興味はないからと答える。

「だが実現できれば面白いと思うよ。私は面白いことが大好きだからね!」
「フフ、そういうところは変わってないのね」

一方リョーガとマリの様子を電信柱に隠れながら伺っていた村雨達はというと……。
「うーん、流石にこの距離じゃ何言ってるか分からないわねえ……」

「任させて村雨ちゃん、私が読唇術であの2人が何を話しているか当てて見るわ」

荒潮がそんなことを言い出して菊月はそんなことできるのかと疑問に思うが荒潮は自信満々に自分の胸を叩き、しばらく2人の様子を伺う。

「それでなんて言ってるの!？」

村雨がワクワクした様子で荒潮に尋ねると……。

「リョーガさんは『ぐへへ、お嬢さん今日何色のパンツ履いてるの?』って言ってるわ!」
「嘘吐け!! リョーガさんは変人だけどそんな変態じゃないぞ! 後ろでストーキングしてる奴はやりかねんが!!」

視点をリョーガのマリに戻し、2人はとある公園の中に入り込むことになり、今はその公園の湖の側を歩いている。

「みんな変わってしまったわね」

突然、不意にマリがそんなことを呟き、それを聞いたリョーガは首を傾げた。

「おかしなマリちゃんだね、さつきは私のことを変わらないって言った癖に」

「変わったのは私の方かもしれないわね」

どこか儂げな様子でそんなことを言うマリにリョーガはそんなことはないと言を横に振り、彼女の右の肩を優しく掴んで笑みを浮かべる。

「君だつて何も変わつちやいないさ。まつ、君が美人になつたつて意味では変わったことになるのかもしれないけど……。でも、久しぶりに会つても中身は私の知つてる君のままだよ」

「ふふ、ありがとう……リョーガくん」

そこでリョーガは何時まで日本にいられるのか尋ねると彼女はなんでもそんなに長く日本に滞在するつもりはないようで5日後にはまた海外に行かなければならぬらしく、それを聞いたリョーガは「そうだ!」と何かを思いついたように彼女にあることを提案した。

「マリちゃん、良ければ明後日私が働いてるところを見にこないかい? 少し興味があ
るみたいだつたし、どうかな?」

「えつ……でも……」

リョーガの突然の提案にマリは戸惑うが……。

「君には私が働いてるところを見て欲しいんだよ! 凄いものいっぱい作つてるんだよ

!!」

リヨーガはまるで子供のようになら語り、そんなリヨーガを見てマリはクスリと笑みを浮かべる。

「それじゃお願いしようかしら」

そしてマリもリヨーガの提案を承諾したのだ。

「良かった……。私も休日は明日までだからね。少しでも君と……。その、長く……。いたいからさ……」

頬を少しだけ赤くして照れ臭そうにするリヨーガにマリも釣られたようにほんのりと頬を赤くして笑顔を見せ、そんな風に赤くなった2人は互いの顔を見て思わず笑ってしまう。

それから2人は街中を周ってデートを楽しみ、夕暮れに彼女をタクシーまで送って別れた後、リヨーガはそのままだこカウキウキした様子で自宅のアパートに帰るのだった。

また2人の様子を一日中を見ていた菊月達は……。

「あんなリヨーガさん始めてみたわ」

「初々しいっていうのかしら？ 良いわねえ〜」

村雨と荒潮がキヤーキヤー騒いでおり、その横で「やれやれ」と村雨と荒潮の2人の様子を見て呆れた表情の菊月がいた。

（しかし、リョーガさんと一緒にいるあの女性……。何か、違和感というか、なぜか嫌な予感がする。最近あんなことがあったばかりだ、外れてくれれば良いが……。）
菊月はマリの姿を見ながらそう思うのだった。

*

その後……タクシーから降りたマリは人気のない場所へと行き、周りに人がいないことを確認すると手鏡のようなものを持っていた鞆から取り出す。

「ただいま計画の第2段階を終了いたしました。 応答願います」

鏡に向かって話しかけるとその鏡に脳髓が肥大化したような不気味な頭部を持った宇宙人……「凶悪宇宙人 ドルズ星人ドミス」が映り出したのだ。

『よくやった！ 明明後日の15時、貴様は自動的に怪獣へと変身する！ その前にあの男のいる鎮守府をあの男と艦娘、さらにウルトラマンエックス、そして奴等のサイバー怪獣の技術を抹消し、そして奴等を爆弾で爆破し、粉々にするのだ！』

「分かりました、ドルズ帝国のため必ず使命を遂行してみせます」

『任せたぞ。これ以上地球の防衛力を強化させる訳にはいかん！ 少なくともサイバー怪獣の技術だけでも必ず破壊するのだ!!』

ドミスの目的……それは別の宇宙で同族が地球上にドルズ帝国を築こうとしたようにこの地球でドルズ帝国を築き上あげること。

なのだがそれはあくまでドルズ全体の目的であり、ドミスの任務は「サイバー怪獣」技術の破壊であり、サイバー怪獣の実体化が本格的に始動すれば地球の防衛力は強化され、ドルズ帝国建築の妨げになるのは間違いないと思い、そのためにドミスはサイバー怪獣の技術を破壊を目的として地球に訪れたのである。

幸い、ドミスに取ってはまだサイバー怪獣が実体化する技術は未だに成功例がサイバーゴモラしかおらず、他の鎮守府にも提供されていないため、サイバー怪獣のデータはあの鎮守府しか今はまだ持っている。

なので今の内にデータを抹消し、さらにリョーガ……運が良ければエックスや艦娘ごと爆弾で吹き飛ばして始末すれば自分達ドルズ星人に刃向かう脅威はほぼ取り除かれ

たも同然なのだ。

『それでは任せたぞ!』

「ハッ、お任せください……」

それからドミスとの通信を切ったマリだったが……その表情はどこか申し訳無さそうな、辛そうな、悲しそうな表情を浮かべていた。

「ごめんなさい……! リョーガくん……! 命令に背けば、私は……!」

*

それから翌日はリョーガとマリは一緒に遊びに出かけ、また次の日にはリョーガは約束通り自分の働いているところを見て貰おうとマリを鎮守府へと連れて行くこととなったのだが……。

それには先ず、念のために身体を検査する必要があつた為、リョーガは彼女を検査して異常無しと判断し、夜空やタカトからも許可を貰つて鎮守府へと案内することになったのだつた。

『フフ、かつての同族のようなへまは踏まんよ。 奴も私と同じように人間の女を怪獣に改造したが身体を機械にしたせいで電波が発せられ、怪しまれたが……この女の場合には違う。 この女は改造ではなく怪獣と同化させているが……肉体の構造自体は変化がないように見せかけているからな』

尚、ドミスはマリの目を通して宇宙船で彼女の様子を伺つており、ドミスは身体検査という関門をクリアしたことで勝利を確信。

マリに「後はサイバー怪獣のデータが保存されている場所を見つけ、コンピュータウイルスを植え付けて爆弾をセットしろ」と指示を出す。

マリは「了解」と小声で返事をするとその時丁度、トイレに行っていたリョーガは「ごめんごめん！」と謝りながら戻つて来てマリは笑みを浮かべて「良いのよ」と返し、早

速リヨーガに鎮守府内を案内して貰うことになるのだった。

「ねえ、リヨーガくん。私、あのサイバー怪獣っていうやつに興味があるんだけど……その研究とか見せて貰っても良いかしら？」

「勿論大歓迎さ！……ここでの私のメインの仕事はそれだからね！ 紹介しないなんてとんでもない!!」

リヨーガは嬉しそうにマリの手を引いて自分の研究室へと向かい……そんな彼の様子を見ていたタカトと夜空は2人を微笑ましく見守っていた。

「あんな嬉しそうなリヨーガ、初めてみたかもな」

「やっぱり好きなんですかね？ あの女性の人」

夜空の問いかけにタカトは「さあな」と首を傾げた後、夜空の肩にポンつとタカトは手を乗せる。

「そもそも誰かを好きになる気持ちには提督の方が詳しいんじゃないか？ 俺はまだ恋愛もしたことないからな」

そして自分の研究室へとマリを連れてきたリヨーガは自分のノートパソコンを起動させて早速自分のサイバー怪獣達のデータをマリに見せ始めるのだった。

「これがサイバーベムスター、宇宙大怪獣ベムスターのデータを使ったサイバー怪獣でこれが宇宙怪獣エレキングのデータを使ったサイバーエレキング。ちなみにサイ

バーエレキングは不完全とはいえ実体化できるんだ」

「そうなの？」

「ああ、今呼ぶよ。 リム!! いるかい？」

リョーガがそう呼びかけるとどこからともなく実体化した小さなエレキング……「サイバーリムエレキング」が2人の目の前に現れる。

「可愛い！」

マリはそう言つてサイバーリムを抱きかかえ、サイバーリム「キュイキュイ」は鳴き声をあげる。

尚、その様子を又もや村雨や荒潮さらに雷とヴェールヌイ、そして4人に半ば無理矢理連れられた菊月がこつそりとドアを開いて様子を伺つていたのだった。

「成程、荒潮達が話していた通り、リョーガさんと中々いい雰囲気みたいね？」

「私も彼氏頑張つて作つてみようかな……」

リョーガとマリの様子を見たせいか突然そんなことを言い出すヴェールヌイに雷は驚いた視線を向ける。

「響からそんな言葉が出るとは思わなかったわ」

「できればス〇イーブ・ロジャー・スみたいなのが良いいけど……そんな人中々いないか……」

「その辺は何時もの響っぽくて安心したわ」

するとマリは扉から覗いている艦娘達にも気づかれないようにマリはそつと指先から小さな電撃のようなものをリョーガのパソコンに放つ。

それによって彼女はコンピュータウイルスを植え付けることに成功し……セキユリティを突破さえすればサイバー怪獣のデータも消せるはずであり、爆弾も鎮守府のそこから仕掛けることに成功。

後は時間が来るのを待てば良いだけだと判断したのだが……。

彼女は気づかかれていないかと思つたようだがその様子をバツチリとヴェールヌイと菊月は目撃しており、彼女等2人は勢いよく扉を開けて部屋に入る。

「アンタ、今なにをしたんだ？」

それを見てリョーガはマリを後ろへと下がらせて「一体どうしたんだい？」と少し驚きの声をあげる。

「今、その人の手から電気のようなものがパソコンに向かって放たれたんだ。今のは一体なんだ？ そのパソコンになにかしたのか？」

「静電気って訳ではないだろう？ リョーガさん、念のためにそのパソコンを調べてみてくださいませんか？」

するとマリはノートパソコンを素早く奪い取ってリョーガや菊月達を押し退かし、彼

女はリョーガの「マリちゃん!!」と呼びかける声にも反応せず研究室の外へと脱出して逃げ出す。

それをヴェールヌイと菊月、そして荒潮と村雨、雷もすぐさま彼女を追いかける。

「響! 本当にあの人がリョーガさんのパソコンに何かしたの!」

「恐らく、何をしたかは分からないけどパソコンを奪い去るってことはあのパソコンに何かを植え付けたのかもしれない」

雷の質問にヴェールヌイはそう答える。

「植え付けたってなにを?」

村雨が疑問に思ったことを問いかけるとそれには菊月が答えた。

「あのパソコンにはサイバー怪獣のデータが入ってる……。彼女の目的はそれかもしれない、データを奪い去るか消去するか……。あまりそう思いたくはないが」

「それなら何がなんでもとっ捕まええないといけないわね」

「問題ない、手はある」

そう言いながらヴェールヌイはいつの間にか展開していた背中中の艤装についている盾のようなものを取り外す。

そしてそのの上に乗るとなんとその盾から車輪が出てきて彼女はそれをスケボーのように乗りこなし、スケボーは自動的に走って一気に自分達の前を逃げるマリへと追

ついていく。

「コ○ンだ!! なんかこれコ○ンで見たことある!!」

それを見て「またおかしな発明したのか」と雷が呆れるのだが……ヴェールヌイはすぐさまマリに追いつき……はしたのだがそのままマリの横を通り過ぎてしまい勢い余って彼女は「ドガアアアアアアーン!!!」という大きな音を立てて壁に激突してしまうのだ。

「「ひ、響イイイイイイ!!!」」

「あら、大変……!」

だが……彼女が壁に激突した際に艤装の一部がマリの方へと吹っ飛んできてそれは彼女の額に激突し、マリは「フギヤ!」と悲鳴をあげてその場に倒れ込んだのだ。

「ふ、フフ……上手く行った。計算通りだ」

とそこでドヤつとした顔をしたヴェールヌイがサムズアップするのだが……。

「嘘つけ、鼻血出てるぞ」

見事にヴェールヌイはボロボロで菊月からポケットティッシュを貸して貰って鼻血を拭くのだった。

そこへ騒ぎを聞きつけた夜空、時雨、タカト、グルマンが駆けつけ……さらに遅れてリョーガもやってくるのだが……リョーガは倒れているマリを見て慌てて彼女の元へと駆け寄る。

「マリちゃん!? 大丈夫かい!? みんな酷いじゃないか! よってたかってマリちゃんを追いかけ回すなんて……!」

リョーガはマリを追いかけたヴェールヌイ達4人を睨み付けるが……先ほど駆けつけてきた夜空達はイマイチ状況が理解できず、夜空は菊月に説明を求め、彼女は先ほどあつた出来事を夜空に説明した。

「何かの見間違えてことは?」

夜空が尋ねるがそれに対し菊月は「見間違えならパソコンを持って逃げる必要はない」と返し、ヴェールヌイは奪い返したパソコンを開いてグルマンと一緒に確認する。

『「どうやら菊月達の言ってることは本当らしいな! サイバー怪獣のデータが消されようとしている!」』

グルマンはすぐさまサイバー怪獣のデータを消そうとしているコンピュータウイルスをどうにかしようとし、それを知った夜空は「止むを得ないな」と時雨達に指示を出してマリを拘束しようとするが……それをリョーガが庇う。

「違う、彼女がこんなことをする筈がない!」

「リョーガくん……!」

既に彼女がパソコンを持って逃げたこと自体がウイルスを仕掛けた張本人である証拠だというのに……それにも関わらずリョーガは彼女を庇うように立ち、それにマリは

驚いたような表情を見せる。

「私は彼女を信じる！」

「ならなぜパソコンを持って逃げたんだ？」

タカトの疑問に対しリョーガは一瞬口ごもってしまいが……。

「きつとなにか事情があるんだ！ それに菊月ちゃん達が見たのだって何かの見間違えじゃないのか!？」

そうリョーガは反論するもののヴェールヌイと菊月はそれを首を横に振って否定する。

「いや、確かに見た」

「すまないがリョーガさん……私もだ。少なくとももう一度彼女を検査する必要はある筈だ」

「そんな筈無い!! 彼女は何の問題も無かった! だから、これは何かの間違いだ!!」
そんなリョーガの肩にタカトを手を乗せて落ち着かせようとする。

「取りあえず落ち着け。冷静になれ」

「私は冷静だよ、タカト!!」

しかしリョーガはそんなタカトの手を払いのけてしまう。

「いや、冷静じゃ無い。リョーガ、何時ものお前らしくないぞー!」

「大切な幼馴染みを信じて何が悪いんだ！」

そんな口論をする2人の間に夜空が割って入り、「2人とも落ち着いてください！」とタカトとリヨーガの2人を止め、夜空はリヨーガと向き合う。

「リヨーガさん、俺も彼女は信じない。 菊月達の言うことが嘘だとは思わないし、彼女達を信じたいからだ」

夜空のその発言にリヨーガは彼を睨み付けるのだが……。

「でも俺は、彼女を信じるリヨーガさんも信じる。 だから拘束はしないことにした。

ただ、もう1度念のために検査は受けてもらうけどな」

リヨーガの肩を軽く叩く。

「何も無ければ残った時間でデートでも楽しめば良い」

そう夜空は笑みを浮かべ、それを聞いたリヨーガは「提督……！」と嬉しそうな表情を浮かべ、「ありがとう……」と頭を下げるのだった。

「正し、もう1度検査して何か異常があった場合、申し訳ないが拘束はさせて貰う」

「分かった。 マリちゃんも、それで良いかな？ きつとどうせ何もありませんよ」

例え何かあったとしても私が絶対になんとかする、私が君を守るよ」

リヨーガは力強くマリに対してそう言い放ち、それに対しマリは今にも泣き出しそうな顔を浮かべる。

「どうしてそこまでしてくれるの？ どうしてそこまで私を信じてくれるの？」

マリがリョーガに尋ねると彼は照れ臭そうな顔を見せ、ボソッと彼女の耳元に何かを呟いた。

「好きな人を信じよう、守ろうとするのは当然だろう？」

「リョーガくん……！」

それに対しマリはどうとうその場で泣き崩れてしまい、いきなり泣き出すリョーガは戸惑う。

「ご、ごめん！ 何か悪いことしちゃったかな?！」

リョーガ慌てて謝罪するが……マリを首を横に振り、「ごめんなさい！ ごめんなさい！」とただただ謝罪の言葉を述べた。

「彼女達の言っていることは本当なの！ 私が連れて行かれたのは外国じゃないの！

ドルズ星だったのよ！ ドルズ星人の命令で私はサイバー怪獣のデータの破壊、そしてこの鎮守府を爆弾で吹き飛ばすよう命令してきたのよ！ 爆弾を仕掛けた場所はこの紙に書かれているわ、早く爆弾を……！」

マリはあらかじめドミスから受け取っていた爆弾設置ポイントが書かれた紙をポケットから取り出して夜空に渡し、夜空は彼女の言っていることが本当なのかどうかまだ完全には分からないが時雨達に爆弾を探すように指示を出す。

「一体なにを言ってるんだいマリちゃん!？」

「本当のことなの……! 私ほドルズ星人の地球攻撃用兵器にされてしまったの! 時間が来れば私は怪獣へと変身して自分の意思ではどうにも止められなくなってしまう……だからお願い! その前に私を殺して!!」

「い、嫌だ……そんなの嘘だ!! 君を殺せる筈がないじゃないか!」

しかしそんなリヨーガの叫びも空しく、彼女は服の腕の部分を破るとそこには鱗のようなものがあり、それを見たリヨーガや夜空は驚きの表情を浮かべ、リヨーガは膝を突いて頭を抱える。

「嘘だ……! 嘘だ!!」

「お願い、リヨーガくん……今の内に、私を……!! リヨーガくんが出来ないのなら、提督さんが……!」

マリにそう懇願され、戸惑いつつもジオブラスターを取り出して構える夜空だが……その引き金を彼はどうしても引くことができなかつたのだ。

「すみません、でも! きつとりヨーガさんがあなたを治してくれる筈です!」

「そんな時間無いわ!! うう……!」

とうとう鱗は彼女の顔にも表れ始め、それは間も無く彼女が怪獣に変身してしまうことを意味しており、マリはここでの被害を押さえるために逃げるようにその場から走り

出し、夜空とリョーガはすぐに彼女の後を追いかける。

鎮守府を出てなるべく人のいない場所へと行こうとするマリだったが……。

彼女の身体にはどんどん鱗が生え始め、彼女は苦しそうな呻き声をあげていき……やがて倒れ込んで身体が完全に鱗に包まれると彼女は赤い靴を履いた「うろこ怪獣 メモール」へと変身し、巨大化して遂には暴れ始めてしまう。

「ギシャアアアアア!!!」

そしてマリを追いかけて、メモールへと変身するところを目撃したりリョーガと夜空は啞然とし、リョーガは「そんな……」とその場に膝を突き、「クソオ!!」と拳を地面へと叩きつける。

「っ……!! エックス、ユナイトだ!!」

『ああ、やむを得ない……!!』

夜空はエックスデバイザーを取り出し、部のボタンを押し側面のパーツをX字に展開したXモードに変形させるとエックスのスパークドールズが出現し、リードさせた後、夜空はエックスデバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

「エックス……!!!」

『エックス、ユナイトド!!!』

『イイイツサアアア——ッ!!』

そして夜空の身体がX字の光へと包まれ、そこから夜空が変身した「ウルトラマンエックス」が飛び出し、大地に降りたってメモールの目の前に現れる。

戦闘BGM「Xの戦い」

『シユア!!』

エックスはメモールに向かって駆け出し、メモールは向かってきたエックスに右腕を振るって攻撃するがエックスはしやがみ込んで回避し、拳をメモールの腹部に2発叩き込む。

それによって後退するメモールにエックスはさらに追撃しようと跳び蹴りを繰り出す。

しかしメモールはその長い尻尾を振るって空中に飛んだエックスをはたき落とし、倒れ込んだエックスに向かって何度も尻尾を振るって叩きつける。

『グッ……!! デヤア!!』

しかしエックスは一瞬の隙を突いてメモールの尻尾を両手で掴み取り、立ち上がるとそのままフルスイングして投げ飛ばす。

倒れ込んだメモールに背中から馬乗りとなつてエックスはチョップやパンチをメモールの背中に喰らわせるが……メモールは尻尾でエックスの首を締め上げてエック

スを投げ飛ばす。

立ち上がったメモールは口から火炎を放ち、それがエックスに直撃してエックスは身体から火花を散らす。

『ウアツ!?!』

「グルアアアアア!!」

エックスが火炎によってダメージを受けたところにメモールは素早く体当たりを繰り出し、エックスを突き飛ばす。

だがエックスは突き飛ばされながらも光エネルギーを矢じり型にして放つ「Xスラッシュ」をメモールに向かって放ち、Xスラッシュはメモールの口に直撃する。

「キジャアア!!」

そしてエックスはどうか地面に着地すると地面を拳で叩いて勢いをつけてメモールに向かって駆け出すのだが……。

その時、突然空が曇り……空からあの黒いエネルギー……「ダークサンダーエナジー」がメモールに降り注ごうとしていたのだ。

「ダークサンダーエナジー!?!」

『こんな時に……!?!』

だが危険を即座に察知したメモールはどうかそれ回避、しかし……。

ダークサンダーエナジーは地面へと直撃……すると地中に眠っていたスパークドールズ……「エリ巻恐竜 ジラーズ」がダークサンダーエナジーを浴びたことにより強化され、目が赤くなった状態で実体化し、地面を突き破って出現したのだ。

「ゴアアアアア!!」

ジラーズの登場にメモールとエックスは驚く様子を見せるがジラーズはエックスの姿を見るや否やいきなりエックスに向かって駆け出し、体当たりを繰り返して来るのだが……エックスはそれをどうにか両手で掴んで受け止める。

しかしジラーズは全身から放つ衝撃波状による攻撃を繰り返してエックスを吹き飛ばし、ジラーズはさらに背ビレを青白く光らせてから口から強化された熱線を空中に吹き飛ばされたエックスに放つ。

夜空は即座に熱線を防ごうと「サイバーベムスター」のカードをエクステバイザーに装填させ、エックスは「ベムスターアーマー」を身に纏う。

『ベムスターアーマー、アクティブ!』

エックスはベムスターの盾でジラーズの攻撃を吸収しようとするのだが……盾はエネルギーを吸収しきれずあっさりと破壊されてエックスに直撃し、エックスは火花を散らしながら地面へと倒れ込んだ。

『シユアア!!?』

ベムスターアーマーは強制解除され、そこに倒れ込んだエックスに向かってメモールは口から火炎を発射して攻撃。

するとメモールの存在に気づいたジラーズはメモールにまで敵意を向け、ジラーズはメモールに向かって強化熱線を発射し、直撃を受けてしまう。

「キジャアアア!!!」

そのままジラーズは怯んだメモールの顔に向かって尻尾を振るって叩きつけ、うつ伏せになったメモールを蹴り上げる。

「グルアアアア!!!」

するとメモールは右手から赤い霧を発射しジラーズの視界を奪い、霧が晴れた頃にはメモールはジラーズの目の前から消えており、ジラーズは辺り一面を見回して警戒する。

そしてメモールはこっそりとジラーズの背後にこっそり近づいて後ろから攻撃を仕掛けようとするのだが……。

ジラーズの背中から無数の紫色の細長い光線が発射され、その光線はメモールとエックスに直撃。

さらにジラーズは光線を一度止めると振り返ってメモールに向かって口から放つ熱線と尻尾の先から放つ光線を同時に発射し、メモールはそれらを喰らって膝を突いてし

「まさか!」

夜空が別の場所に視線を映すとそこにはリョーガがジオバイザーを手に持って立っており、それを見てすぐさまエックスと夜空は彼がサイバーゴモラを起動させたことを理解した。

そしてメモールもそれに気づいたのかジツと彼の姿をメモールは見つめる。

「言っただろ? マリちゃん。 例え何かあったとしても私が絶対になんとかする、私が君を守るよって……。 だから、頼む!! 元のマリちゃんに戻ってくれ!! 自分の意思を!! 自分自身の意思を取り戻してくれ!! お願いだ!!」

「グウウウ……」

リョーガは自分の心からの叫びをメモール……。否、マリに向かって言い放ち……。そんな彼の言葉を聞いたメモールは突如としてなぜか大人しくなったのだ。

「私が必ず守る、私とみんなで作った……。サイバーゴモラと一緒に! 君を!!」

するとそこへ爆弾を全て見つけ、爆弾を解除することに成功した時雨達が駆けつけてリョーガと合流。

菊月はすぐさまあのパソコンに仕掛けていたデータも何もせずともあらかじめパソコンに入っていたリョーガとグルマンが開発したウイルスワクチンがウイルスを消し去ってくれたおかげでデータも失われずに済んだことを報告し、それを聞いてリョーガ

はホッと一安心する。

「安心してる場合じゃないよ!! 早く怪獣をどうにかしないと!!」

臆月がそう菊月に言い、菊月は頷いて怪獣達に攻撃を仕掛けようとするのだが……それにリョーガが待ったをかける。

「待ってくれ!! あの赤い靴を履いた怪獣はマリちゃんの変身した怪獣なんだ!! けど……彼女は僕の声を聞いて大人しくなった。もしかしたら自分の意思を今、取り戻そうとしているのかもしれない……」

それを聞いて菊月はメモールを見ると……確かに先ほどから大人しく……、ただジツとリョーガを見つめているだけだった。

「分かった。攻撃はしない。だがまた暴れ出せば攻撃を開始する」

「ありがとう……菊月ちゃん」

「私は彼女を信じる訳じゃない、ただ仲間の言うことを信じるだけだ」

そう不敵な笑みを浮かべ、菊月が言い放った後、彼女は全員にジラーズにのみ攻撃をするように指示し、リョーガもサイバーゴモラを動かし、立ち上がったエックスと共にジラーズに向かって行く。

挿入歌「ウルトラマンX」

ジラーズはサイバーゴモラとエックスを近づけさせまいと全身から放つ衝撃波状を

繰り出すが……。

サイバーゴモラは両腕からバリアを発生させてエックスを後ろに下がらせて衝撃波状から守り、攻撃が止んだ直後にエックスはサイバーゴモラの頭上を飛び越えてジラスの顔面に拳を叩き込む。

『イー!! シェア!!』

ジラスはエックスを睨み付けて尻尾を振るうがエックスはしゃがみ込んで攻撃を回避し、そこにサイバーゴモラのパンチがジラスに炸裂し、続けてざまにエックスの跳び蹴りが繰り出される。

『ギシャアアア!!』

ジラスが怯んだところにサイバーゴモラは身体を前に回転させて尻尾浴びせ攻撃をジラスに喰らわせ、怯むジラスだが……ジラスは負けじと背ビレを発光させ、熱線を放とうとするが……。

「みんな!! ジラスの口、又は背ビレを二手に別れて攻撃するんだ!!」
『了解!!』

リョーガの指示を受け、朝潮、荒潮、満潮、文月、睦月はサイバー怪獣エネルギーをチャージした光線を主砲から発射してジラスの背中に直撃。

それと同時に時雨、村雨、夕立、如月、菊月、皐月もサイバー怪獣のエネルギーをチャ―

ジシした光線を発射してジラーズの口の中に直撃させることに成功。

攻撃を受けたジラーズは悲鳴をあげ、そこで睦月と如月はモンسفュージョンしてサイバーガルラフュージョンとサラマンドラフュージョンとなり、菊月は2人に自分を持ち上げて投げ飛ばしてくれるよう頼む。

「よーっし！ いっきますよー!!」

「行つてきなさい菊月ちゃん!!」

「ああ!!」

睦月と如月は菊月に言われた通り彼女を持ち上げて投げ飛ばし……「サイバーアントラー」の力を使い、菊月の主砲が巨大なハサミの形となり、ジラーズと目線が合うところまで行くとそのままそのハサミでジラーズを殴りつける。

「選別だ、持って行け」

「グギヤアア!!」

そして夜空が目の前にエクシードXのスパークドールズを出現させるとそれを掴み取ってエクステバイザーにリードさせると「エクストラッガー」が出現し、夜空はそれを手取る。

『ウルトラマンエックス、パワーアップ』

エクストラッガーを手を取った夜空は側面にある虹色のスライドパネルをなぞってト

リガーを引き、X字に斬るような動作を行う。

『行くぞ!! エクシード!! エックス!!!』

するとエックスは銀色のボディには虹色のラインが走った姿「ウルトラマンエクシードX」へと強化変身を完了させる。

戦闘BGM「エクシードXのテーマ」

「グルアアアアア!!」

ジラーズは今度は尻尾をエックスに向けて放つが……エックスはエクストラッガーを振るってそれを真つ二つに切り裂き、素早く接近するとすれ違いざまにエクストラッガーでジラーズを斬りつける。

「グルアアアア!!」

ならばと思いジラーズは今度は衝撃波状を繰り出すがエックスは空中へと飛んで攻撃を回避。

空中へと逃げたエックスを見てジラーズは前屈みとなって背中から無数の光線を空中に向かつて放つが……エックスはそれら全てをエクストラッガーで弾き、急降下キックをジラーズに叩きこむ。

『シューア!!』

夜空はエクストラッガーのスライドタッチを3回行い、ブーストスイッチを押しエクス

ラッガーを構えたエックスが、そのまま敵の前後を往復しながら繰り出してダークサンダーエナジーの力を無効化して城下する突進斬り……「エクシードエクスラッシュ」をエックスはジラースへと炸裂させる。

『「エクシードエクスラッシュ!!」』

「グオオオオ!!」

そして通常形態へと戻ると同時に両腕を左側へゆつくりと振りかぶり両腕を胸の前でX字にクロスさせて放つ必殺光線……「ザナデイウム光線」を発射。

『「ザナデイウム光線!!」』

ザナデイウム光線は見事ジラースへと直撃し……直撃を受けたジラースは倒れて爆発、スパークドールズへと戻るのだった。

一方で宇宙船から高見の見物を決め込んでいたドミスはというと……。

『「ええい!! メモールは何をやっているのだ!! 命令に従わないのなら……!!」』

場所を戻し……今まで大人しくしていたメモールの頭に突然電撃のようなものが走り、メモールは頭を抱えて苦しみだしたのだ。

「マリちゃん!?!」

それを見てエックスはすぐさまメモールの元へと駆け寄るのだが……メモールは駆け寄ってきたエックスを突き飛ばし、また暴れ出してしまうのだ。

「ギシャアアアア!!」

「マリちゃん……!! やめろ、やめてくれ!!」

エックスもメモールを必死に押さえつけるが……メモールが大人しくなる様子は無い。

『もう彼女を元に戻す方法は……!!』

エックスもメモールを助ける方法はないのかと諦めかけたのだが……その時、夜空は1つだけ、彼女を救えるかもしれない方法を思いついたのだ。

「そうだ……! エクスラッガーなら……!!」

また宇宙船で戦いの様子を見ていたドミスは「何をしても無駄だ!!」と力強く言い放つのだが……その時、宇宙船が突然大きく揺れ始めたのだ。

『な、何事だ!!』

『大変です!! 敵襲です!!』

『何イ!?!』

外のモニターを映すとそこには宇宙船を攻撃する「ジオアラミス」という車両とジオマスケツティが合体したタカトが操縦する「スペースマスケツティ」がドミスの宇宙船を攻撃していたのだ。

それを見てドミスは反撃しようと宇宙船から光線を発射するが……スペースマス

ケッティはそれらを回避する。

『もう諦めろ、ドルズ星人!!』

『むっ!? 貴様は……!?!』

さらにそこへ「ウルトラマンメビウス」も現れ、メビウスは今すぐ地球侵略を諦めて自分達の星に帰るように訴えるのだが……。

『フン!! 誰が諦めるか!! こうなればメモールを自爆させ、エックス諸共消し去って……!』

『残念だが、それは無理だ。エックスのおかげで……彼女もメモールも死ぬことはない!』

『なに!? どういうことだ!!』

メビウスが言うにはエックスはエクストラツガーの力を使って怪獣とダークサンダーエナジーを分離させたようにメモールに使用することでメモールとマリを分離させることに成功。

さらにエックスのザナディウム光線によってメモールはスパークドールズへと変わり、自爆機能を作動させたとしてもスパークドールズになっている以上は恐らくは起動しないだろうというのだ。

それを聞いて最後の悪あがきすら通じず、頭に血が上るドミス。

『おのれえ!! 今回は大人しく引き下がってやるが地球侵略はこれで諦めはしないぞ!!
また地球の人間を怪獣にしてくれる!!』

負け惜しみを言って逃げようとするドミスだったが……そんなことを聞いてはメビウスもタカトも逃がす訳にはいかない。

『サイバーキングジョー、ロードします』

「リョーガと……アイツの大切な者を傷つけた報いを受けろ!! 行くぞ、メビウス!!」

タカトの言葉にメビウスは頷き、スペースマスケットティからはサイバーキングジョーのエネルギーを宿した光線「キングジョーデストロイ砲」を。

メビウスはメビウスブレスのエネルギーを開放し、両手を十字に組んで放つ必殺光線「メビウムシユート」を同時に発射し……逃げようとするドミスの宇宙船に直撃し……宇宙船は木っ端微塵に吹き飛んだのだった。

『ぐああああああああ!!!!』

*

それから数日後……、メモールと無事に分離させることに成功したマリは意識を失い、病院に運ばれたものの命に別状はなく、医者によればしばらくすれば完全に体力を回復して退院できるだろうとのことだったのだ

「んっ……」

とある病院の病室、そこで今まで眠っているマリが目を覚ますと……丁度リヨーガが花束を持って病室に現れたのだ。

「おはよう、具合はどうだい?」

「んっ……平気よ」

それを聞いてリヨーガは安心し、花束を棚に置いて椅子に座るとリヨーガは「ごめん……」と頭を下げて謝罪し……マリはその言葉の意味が理解できず「どうして謝るの?」と首を傾げる。

「僕がなんとかするって言ったのに……結局なんとかしたのはエックスだった。私は……何もできなかつた」

「ううん。あの時のリョーガくんの言葉、私に届いてたよ。あの時、私は人間の心を少し取り戻すことが出来たんだ。だから、私は怪物と分離することが出来たんだと思う。助けてくれたのはエックスだけじゃない、リョーガくんや……リョーガくんの仲間達のおかげ。私を助けてくれて、ありがとう……」

そう微笑みを向け、涙ぐみながらお礼を述べるマリに、リョーガも自然と笑みを浮かべるのだった。

「マリちゃん……」

第16話 『艦娘、遭難!? 前編』

(皆さんこんにちわ。 睦月型5番艦の皐月です。 えー、今現在僕と荒潮、朝潮と妹の菊月と一緒になんですが……僕たち今……、無人島に遭難してます)

なぜこんなことになったのか……それは数日前のことである。

皐月、朝潮、荒潮、菊月の4人は提督である夜空から久しぶりに資材を調達するため遠征任務を任せられることとなり、無事任務を完了させて帰投しようとする海の上を走っていた時だった。

「いやあ、最近では怪獣や侵略者の宇宙人とはつか戦ってたから、なんか久しぶりだね、こういう任務」

「怪獣や宇宙人との戦いを比べると、確かに今となつてはかなり楽ね」

皐月と荒潮がそんな会話をしているのだが、旗艦を任せられ、先陣を切つて走っていた朝潮はそんな2人の会話に対して「ダメよ」と注意する。

「どんな些細で簡単な任務でも、心がけてやらないといけないわ。司令官は私達のことを信じて命令してくださってるんだから、どんな任務も軽い気持ちでなんて考えたらいけないわよ」

そんな風に朝潮は荒潮と皐月に注意し、荒潮は「あらあら、朝潮ちゃんは真面目ね〜」なんて言いながら笑みを浮かべ、皐月もムスつとしながらも「分かっているよ〜」と膨れっ面を浮かべながら朝潮の言葉に頷くのだった。

「相変わらず真面目だな、朝潮は」

「あら、菊月さんだつてそうじゃない？ 何時も副司令やリョーガさんの相手ご苦労様！〜」

朝潮のその言葉に菊月は苦笑する。

「そう思うのならあの2人の相手今度からお前が引き受けてくれても良いんだぞ？」

「遠慮するわ。それは菊月さんの特権だもの」

「誰がいるかこんな特権！」

朝潮の言葉に菊月はツツコミを入れるのだが……その時。

突如として先陣を切つて走っていた朝潮の背中に装着された艀装が火花を散らし、それと同調するかのように菊月、皐月、荒潮の艀装が火花を上げ始めたのだ。

「な、なに!?!」

「艀装が急に壊れたぞ?!」

さらに続くように今度は彼女達の足部に装着された艀装もバチバチと火花を上げ始め、故障し始めてしまい、彼女達は慌てふためく。

「ちゃんとメンテナランスはした筈なのに……!!」

「朝潮!! 菊月!! どこかに上陸出来そうな島とかないの!？」

近くに島か何かあれば艦装が壊れて「溺れる」という自体だけは避けられるかもしれないと考えた皐月は朝潮と菊月にそう尋ねるのだが、この辺りに島らしきものなんて一切無いらしく、このまま艦装が壊れてしまえば大変なことになることは間違いない。

「どうすれば……!!」

「っ！ 朝潮ちゃん、アレを見て!!」

その時、荒潮が何かに気づいたのかある方向を指差し、他のメンバーも荒潮の指の差す方向を見るとそこには巨大な霧のようなものが発生しており、その霧はすぐに晴れるのだが……霧が晴れるとなんとその中から1つ巨大な島が出現したのだ。

「島……!？」

「そんな！ この辺りに島なんて無いはずなのに……!」

「そんなのどうでも良いよ!! 急いであの島に行こう！ 急いで行けば海水浴しなくて済みそうだ!!」

皐月の言う通り、今は兎に角あの島に行くしか方法が無いため、一同は艦装が完全に壊れてしまう前にその島へと向かうことに。

……したのだが、後もう少しで陸というところで艦装が完全に壊れてしまい、4人は

仲良く海の中に「バシャン！」と沈んでしまうのだった。

幸い、陸近くだったので「溺れる……」なんてことはなく、4人は壊れた艦装を引つ張つて無事に島に上陸することが出来たのだった。

「はあ、全く……とんだ災難だったね……」

「取りあえず、ジオデバイザーで鎮守府に連絡入れてどうにか迎えに来て貰いましょう。防水仕様で助かったわ、これ」

荒潮はそう言いながらジオデバイザーを取り出して鎮守府に連絡を入れようとするのだが……画面にはただノイズしか走らず、鎮守府と通信を行うことができなかった。

それから荒潮は数回ほど通信を試みたものの鎮守府からの返事もなく、他のメンバー達もそれぞれジオデバイザーを使って通信を試みてみたのだが、やはり全員画面にノイズが走るだけで何も起こることは無かった。

「もう!!…なんで通信できないの!?!」

「……………これは恐らく予想なんだけど、もしかしたらこの島から特殊な電波が発せられて……それでジオデバイザーが使えないんじゃないかしら?」

朝潮は何となくではあるが、そんな予想を立て……それを聞いて菊月も「それは一理あるかもしれないな」と呟く。

「実際、艦装が壊れ始めたのと、この島が現れたのはほぼ同時。その可能性は大きいだろう」

「いや、でも今重要なのはそんなことじゃないよ!! これからどうするのさ、僕たち？」

艦装やジオデバイザーがその電磁波のせいで使えないんじや、救難信号も送れない!!」

皐月の言う通り、荒潮も確認して見たが、艦装はジオデバイザーを始めとした電子機器は全て使用不可能となっており、鎮守府に向けて救難信号も送ることが出来なかったのだ。

それに皐月はどうするかと考えるのだが……。

「グオオオオオオオン!!!」

突如、大きな獣のような声が聞こえ、朝潮達は急いで近くにあった岩場に隠れる。

するとそこへ「ドスンドスン!!」と大きな足音を立てながら銀色の身体の怪獣、「剛力怪獣 シルバゴン」が出現し、それと同時に恐竜に酷似した怪獣「凶暴竜 ロックイーター」が出現した。

「アレは……シルバゴンとロックイーター!?!」

そして2体は互いに視線が合うや否やいきなり戦いを始める。

「グルアアアアア!!!」

ロックイーターは飛び上がってジャンプキックを繰り返すのだが、シルバゴンは両手

でロックイーターの両足を掴みあげて地面に叩きつける。

「グルア!!」

シルバゴンはそのまま倒れ込んだロックイーターを蹴り上げ、ロックイーターは吹き飛ばされて地面に倒れ込むのだが、すぐに起き上がり、反撃しようとシルバゴンに向かつて駆け出す。

そのままロックイーターは勢いをつけてシルバゴンに体当たりを繰り返し、シルバゴンはそれを喰らって後退する。

さらにロックイーターは続けざまにシルバゴンに体当たりを繰り返そうとするのだが、シルバゴンに両手で受け止められ、がっしりと捕まえられてしまうのだが……。

ロックイーターは暴れてどうにかシルバゴンの両手を振り払い、シルバゴンの右肩にその巨大な口を開けてガブリと噛みつく。

「ギシャアアア!!!」

悲鳴をあげるシルバゴンだが、シルバゴンはロックイーターの腹部に何度も膝蹴りを叩きこんで引き離す。

引き離れたロックイーターに対してシルバゴンはすぐさま拳で顔を殴りつけ、さらにもう一発拳を振るうがロックイーターはそれを避けて尻尾を振るい、シルバゴンの顔に叩きつけて反撃。

それによって多少よろめくシルバゴンだったが、大したダメージは無くシルバゴンはロックイーターをまた殴りつけようとするのだが……。

その時、シルバゴンを振るおうとした拳に蜘蛛の糸のようなものが絡みつき、後ろに引つ張られた為、シルバゴンは後方に倒れ込んでしまう。

「見て！ 朝潮ちゃん!! また新しい怪獣……! アレは、バンピーラ!!」
「ピギユア!! ピギユア!!」

荒潮の言う通り、そこに現れた新たな怪獣は「アースロポッドタイプピースト バンピーラ」であり、バンピーラは口から吐いた糸でシルバゴンの腕を拘束していたのだ。

「ピギユア!!」

バンピーラは口から糸を切り離して再び口から糸を吐いてシルバゴンを繭にしてやろうとするのだが、すぐに起き上がったシルバゴンはバンピーラの糸を振り払いながら接近し、勢いをつけてタツクルを喰らわせる。

「ピギユア!!」

するとその隙を狙ってロックイーターが背後からシルバゴンに噛みつきこうとするのだが、シルバゴンはそれに気づいて振り返りざまに拳をロックイーターの鼻っぴしに叩きこむ。

「グルウ!!」

再びシルバゴンはバンピーラに攻撃を加えようとバンピーラの方向を向くのだが、それと同時にシルバゴンの目に糸が貼り付き、シルバゴンは視界を封じられてしまう。

元々シルバゴンは視力悪いので視界を封じるといいうのもおかしい気はするが、バンピーラがそんなことを知ってる筈もなく。

そしてバンピーラは腕を振るってシルバゴンを殴り飛ばし、ロックイーターに掴みかかるのだが、ロックイーターはバンピーラの腕を振り払って左腕に噛みつき、「メキメキメキ!!」と嫌な音を立てる。

「ピギヤアアア!!?」

バンピーラは必死にロックイーターを引き離そうと右腕を伸ばしてロックイーターの頭を殴りつけるが、ロックイーターは構わずそのままバンピーラの腕を「ブチィ!!」つと千切り取ったのだ。

「ピギヤアアア!!!」

とそこへバンピーラの糸を目元から取り外したシルバゴンが再び参戦し、こうしてシルバゴン、ロックイーター、バンピーラの三つ巴の戦いはさらに激しさを増していく。「流石にそろそろ危ない気がして来たぞ」

「菊月さんの言う通りね。みんな、怪獣達に気づかれないようにそつとこの場を離れましょう。 艦装は仕方がないから置いて行くしかないわ。 ただ見たところ、主砲だ

けはまだ使えそうだからそれだけ持って行きましょう。それと艦装の中に入れておいた貴重品も」

朝潮の提案に一同は頷き、朝潮、菊月、荒潮、皐月の4人はシルバゴン達に気づかれないようにそつとその場を離れるのだった。

*

その後、朝潮達は怪獣達からなるべく離れる為に歩き続け……途中、1つの洞窟のような場所を発見。

朝潮はそこで救助が来るまでここを拠点としようとみんなに提案し、特に反対する理由も無く、雨風も凌げるだろうということや洞窟の中もそれなりに広かったので一同もそれに賛同。

「きつと司令官達が私達を見つけてくれる筈よ！ それまでどうかここでもしばらくは暮らすしかないわ。 どうにかみんなでしっかりと生き残って帰りましょう！」

「そうだね、取りあえず先ずは……食料の問題かな？」

「そうね、それぞれ役割分担しましょうか。 ただみんな、怪獣達にだけは気をつけてね？」

という訳で、朝潮は臯月と荒潮には焚き火を起こす為に使えそうな木などを集めて貰うこと、又は果物などがあればそれを取ってくるように指示。

さらに朝潮は菊月と一緒に海の中で魚を捕ってくるると臯月達に伝え、彼女達は怪獣達との遭遇に気をつけてそれぞれ二手に別れて行動することとなったのだった。

「とはいえ……。 魚を捕るにしても竿や槍も無いしな、どうする？ それにこのまま海の中に入るのも……」

そして魚を捕る為に海岸まで来た朝潮と菊月だったが、菊月はどうやって魚を捕まえようかと腕を組んで悩んでいると隣に立つ朝潮は「こういう時は……！」と呟いて辺りを見渡す。

すると彼女は何かを発見してそれをヒョイツと拾い上げるのだが……それは先端が尖った太めの木の枝であり、それを見て菊月は「まさかそれで魚を捕まえる気か？」とジトツとした視線を朝潮に向ける。

「そうよ、これでも魚を捕まえることはできるわ」

「そう簡単に行けるとは思えな……」

だが、菊月が言葉を言い終わる前になんと朝潮はその場で服を脱ぎ捨て下着姿となり、菊月はそれを見て驚き、顔を真っ赤にする。

「ちよつ、お前!!? なにしてるんだ!!?」

「海に入らないといけないんだから服は脱ぐでしょ? 菊月さんは待つて貰つても良いから」

「そ、それはそうだが……!」

それから朝潮は溺れないように準備運動をした後にすかさず彼女は海の中へと飛び込んで行くのだった。

「……本当に大丈夫なのか? っていうか私は何をすれば良いんだ……」

菊月は自分も朝潮と同じように手頃な先が尖った木の枝でも見つけて一緒に行くべきかと思ひ、辺りを見渡そうとするのだが……次の瞬間、なんと数秒前に海に潜った朝潮がもう出てきたのだ。

しかも木の枝には魚が一気に3匹も貫かれており、それを見た菊月は啞然としていた。

「うおっ!!? 早いな……。 ってこの短時間で3匹も仕留めたのか!」

「ええ、そうよ？ それじゃ菊月さん私もう1回行ってくるから待ってて！」

朝潮はそれだけ言うとうと魚を菊月に渡してからもう1度海の中へと潜って行くのだった。

「やったわ!! タコ捕ったわ!!」

「はあ!?!」

しかも今度は海に潜って10秒もしない内にタコを木で突き刺して捕まえ、菊月はその朝潮の高いサバイバル技術にただただ驚くしかなかった。

「朝潮、なんだお前のその高いサバイバル技術は……?」

「フフ、実は響さんと一緒によくこういうところ来るのよ。流石に怪獣はいなかった

けど」

「はっ?」

なんでも朝潮が言うにはヴェールヌイは休日などで夜空に許可を取ってこういった(流石に怪獣はいないが)無人島に来てはよくサバイバル生活をしているらしく、それを聞いた朝潮も自分もやってみたいと思いい、よくヴェールヌイと一緒に無人島生活をしているのだという。

「成程、休日中はあんまりお前達2人を見かけない理由が分かったよ。でもなんでヴェールヌイは休日中にそんなところに来てるんだ?」

「とある海外ドラマの影響だそうで……」

「何となく理解した。アイツは色々と影響しやすい性格だから……」

だが、そのおかげで今こうして朝潮はそこで身につけた技術を生かしている訳なので菊月は「響に感謝だな……」と小さく呟くのだった。

「取りあえず、私だけ何もしない訳にはいかないな? 朝潮、私にもやり方教えてくれ」

「分かったわ! ここはそんなに寒くもないし、菊月さんにもやりやすでしょう」

*

同じ頃、木の枝などをかき集めていた皐月と荒潮はというと……。

「それじゃ先ずは木の枝を集めましょう……! つとその前に、この辺松ぼっくり落ちてるからそれを先に拾いましょう。傘が開いているのをなるべく多めに」

「えっ、なんで松ぼっくり?」

荒潮の言葉に皐月が首を傾げると荒潮はどこか「フフン」と胸を張って自慢げにその理由を話し始める。

「松ぼっくりはマッチ一本で火がつくのよ。傘が開いているものは乾燥していてよく燃えるらしいわ」

そんな彼女の説明に皐月は「ほうほう」と興味深そうに頷くのだが……「マッチ一本で火がつく」と言ってもその肝心のマッチが無いのでは意味がないのではないだろうか考えるのだが……。

「そこは問題ないわよ。怪獣達から逃げる途中、こんなこともあろうかと艤装に収納しておいたマッチも持って来てたから♪ どうか濡れてはいなかったしね♪」

ニコニコとした笑顔で荒潮はポケットから皐月に見せつけるようにマッチを取り出し、それに対して皐月は「おお」と感心の声をあげた。

「木の枝なんかも乾燥しているのが良いわね」

「なんで荒潮そんなに焚き火に詳しいの? どこでやり方を習った?」

「ゆ〇キャンを読んだのよ。菊月ちゃんに勧められて。アニメも観たわ」

という訳で荒潮と皐月は早速松ぼっくりを探すところから始めようとするのだが……。

その時のことである。

突如として木の上に大きなワカメのようにぶら下がっていた植物……「吸血植物 スフラン」が枝を集めていた荒潮と皐月の身体に背後から纏わり付いて拘束してきたのだ。

「うわわ!!? なんだこれ?!?」

「くっ……! これって、まさか吸血植物って言われてるスフラン!?!」

スフランは「吸血植物」の異名の通り獲物を締め潰して漏れてきた血を吸う植物であり、荒潮と皐月の身体を締め上げ、2人は必死にどうにかスフランから逃れようともがくののだが……スフランの力は強く、中々振りほどくことができなかつたのだ。

「うああああ!!?!?」だ、ダメだ……!! 振りほどけない!!」

「このままじゃ……身体が、つぶ……され……!!?!?」

身体を強く締め付けられて苦痛に満ちた表情を浮かべる荒潮と皐月。

そんな時だ。

「バモォー!!」

林の中から飛び出すように等身大の怪獣……「変貌怪獣 キングバモス」が出現し、荒潮と皐月は「こんな時に怪獣が……!!」とこれ以上ない災難を痛感するが……。

キングバモスは2人の予想に反してなんと荒潮を拘束していたスフランを両手で掴

むとそれを思いつきり真つ二つに引き裂き、同じように臯月を拘束していたスフランを
引き裂いて助け出したのだ。

さらにキングバモス再び荒潮と臯月を襲おうと迫ってきた別のスフラン達も腕を振
るつて弾き飛ばし、キングバモスは2人を担いで急いでその場から走り去るのだった。

「この子……私達を助けてくれたの？」

「みたい……だね……？」

*

その頃、鎮守府はというと……。

「電ちゃん、ちよつと壁の方に来て貰いますか？」

「はい？　なんですか副司令さん？」

執務室で奈々が電を呼び出しており、彼女を壁側に立たせるとそのまま壁をドンッと叩き、奈々は電に対していわゆる「壁ドン」というやつをなぜか行っていた。

尚、奈々が壁を叩いた際に電はそれに思わず「ビクツ！」と肩を震わし、彼女は自分が何か奈々に対してやらかしてしまったのかと不安になり、ビクビクつと震えながら目尻に涙を浮かべる。

「あ、あの……副司令さん、わ、私は何か副司令さんに何かしてしまったのでしょうか……？」

（やべえ、涙目の電ちゃん超クソ可愛い……！ でも今して欲しい反応はこういうのじゃないんですよね）

奈々は思わずニヤつきそうになるのを堪えて彼女は「ごめんね」と笑顔で謝って電から離れる。

「電ちゃんもしかして壁ドンって知らないんですかね？ こういうことされて顔を真っ赤にして慌てふためく電ちゃんが見たかったんですけど……」

「思っていることが思いつきり口に出てるぞ？ あと、それをワザワザ執務室でやる必要があるのか？」

執務室には当然、夜空と時雨もおり、夜空は呆れたように、時雨は苦笑しながらその一部始終を見ており、夜空は電に謝罪してから彼女にもう執務室を出て行って良いと言

うと電は戸惑いながらも「は、はい！」と返事をして部屋を出て行くのだった。

「それとそんなことしてる暇があるなら仕事しろ奈々」

「……前から思っていたんですが、私の方が部下とはいえ光と比べるとなんで私にはため口な上に呼び捨てなんですすかね提督？ いえ、別に気にしてはいませんが……」

「普段の行いのせいだと思う」

奈々の疑問に対して夜空と時雨がそう同時に答え、それに奈々は「アツハツハツハ!!」と笑って誤魔化する。

するとそこへ執務室にリョーガとグルマンが慌てた様子で入って来た。

『大変だ提督!! 遠征に出ていた菊月ちゃん達と連絡を取ることができない!!』

「なに？ 通信の故障ってことは？」

「全員の通信機にかい？ 先ずはそれはない、ちゃんと彼女達が出かける前にしっかりとメンテナンスは私とグルマンで行っている」

そして何よりも艦娘達の艦装には彼女達がどこにいても分かるようにGPSに近い機能などもついてるので海の上にとの辺りにいるかも分かるようになっていたのだが……その反応すら無くなっているようで最速彼女達は何かのトラブルに巻き込まれている可能性が高いとリョーガとグルマンは語る。

「でも、その確証はあるの？」

『ああ、ここに来る前に衛生カメラで菊月ちゃん達の反応が消えた辺りの場所を見てみたのだが……これを見てくれ』

そう言つてグルマンが取り出したのは衛生カメラで撮られた2枚の写真なのだが……。

1枚目は何もない海だけが広がる写真、そして2枚目は巨大な島のようなものが映つた写真であり、夜空、時雨、奈々の3人はそれをジツと見つめる。

「これつてもしかして両方同じ場所の写真？」

『その通りだ時雨！ 1枚目は昨日までの写真で2枚目は今日の写真……つまり、この場所に突如としてこの巨大な島が今日いきなり現れたということだ！』

グルマンのその話を聞いて夜空は「そんなバカな……！」と当然ながら驚く。

『だが、恐らく菊月ちゃん達が消えたのはこの辺りで間違いないだろう』

「それに提督、驚くのも無理はないが……私も噂に聞いたことがある。50年に一度、海のどこかで現れるという伝説の島……『サブジエクト・ファントム』、又の名を……」

*

「多々良島？」

「ええ、さつき思い出したんだけど……確か50年に一度出現していると言われている伝説の島、そこには複数の巨大な獣などが生息していると言われている。この島の特徴と一致するわ」

そして場所はサブジェクト・ファントム……菊月達のいる多々良島へと戻り、魚を一通り集めた菊月と朝潮は怪獣達から逃げる際に艀装から取り出しておいた服に着替えて洞窟の方へと戻りながらそんな会話をしていた。

「しかも多々良島はほんの数日経つと消えてしまいうらしくて……。この島を目指してやってきた科学者や探検家なんかも何人か行方不明になっているなんて話も聞くわ。多分、島が消えてしまうせいね」

「つていうことは、私達もこの島に取り残される可能性が……？」

「そうね、だからなるべく急いでこの島を脱出すべきかもしれないわ」

夜空達が助けに来てくれる可能性はあるが、もしものことを考えて自分達も脱出する方法を考えておくべきだろうと朝潮は考え、食事を済ませたらすぐにみんなで筏などを

作って島から脱出しなければならぬと彼女は思い、その為にも2人は急いで皐月と荒潮に戻ろうとするのだが……。

その時、朝潮と菊月はなにか「見えない壁」のようなものにぶつかってしまい、その際に2人は鼻を打ってしまったのか、2人とも鼻を押さえて「痛っ!？」と声をあげて尻餅をついてしまう。

「な、なんだ!?! これ!?!」

菊月はなんとか立ち上がって先ほどと同じ場所に恐る恐る手を伸ばすと確かにそこには何か「見えない壁」のようなものが張り巡らされていたのだ。

「止むを得ないわ、主砲で壁を破壊しましょう」

朝潮の言葉に菊月は頷いて主砲を構え、2人で同時に砲弾を見えない壁に打ち込むのだが……壁はビクともしておらず、2人はそれを見て驚きの表情を浮かべる。

「そんな……! 傷1つつかないなんて!」

さらにそこへ、軽い地響きが起こると2人の背後から巨大な「ミミズ」のようなものが出現し、ミミズは素早い動きで菊月の身体を拘束すると地中に引きずり込もうと引つ張っていく。

「おわあ!?!」

「菊月さん!?!」

朝潮は慌てて引きずり込まれそうになる菊月の腕を掴み、彼女が引きずり込まれないように必死に抵抗するのだがミミズの力は強く、このままでは2人とも地中へと飲み込まれてしまう。

「離せ朝潮!! このままじゃお前まで……!!」

「そんなド定番な台詞入りませんよ菊月さん!! それに、みんなが無事に帰ると約束しました!! だから!!」

朝潮は主砲を構えてどうにか巨大ミミズに狙いを定め、引き金を引くと見事巨大ミミズに直撃。

巨大ミミズはその攻撃によって菊月の拘束を解き、痛がった様子で地中の中へと戻って行った。

それを見て朝潮はホツと安堵し、すぐさま倒れ込んだ菊月に手を差し伸べる。

「ああ、すまない……。助かったよ朝潮……」

菊月は朝潮のその手を掴んで立ち上がるのだが……直後、先ほどよりも巨大な地響きが起こり……。2人から少し離れた位置。

そこから1本角に二股に分かれた巨大な爪の間からムチのような触手が生えている両腕が特徴的な怪獣……。『バリヤー怪獣 ガギ』が出現し、朝潮と菊月はガギの手から生えている触手を見てそれが先ほどの巨大ミミズの正体であるとすぐに理解した。

「ギシャアアア!!!」

ガギは朝潮と菊月に狙いを定め、右腕を触手を振るって2人に攻撃する。

「うおっ……!!? ぐあっ!!?」

「くっ……!!?」

どうにかガギの攻撃を避けた2人だったが……菊月は先ほどの攻撃で振るわれた触手が足に掠り、その際に彼女は足に怪我を負ってしまう。

「菊月さん!!」

朝潮はすぐに菊月の元に駆け寄り、朝潮は主砲をガギに向かって構える。

「朝潮……お前だけでも……!!」

菊月は足を怪我してしまった自分がいでは足手纏いにしかならないとでも思ったのか、朝潮だけでも逃げるように言おうとするのだが……当然、そんなことを朝潮がする筈も無かった。

「あんまりテンプレ台詞ばかり言っていると無言の腹パン叩き込みますよ!」

だが、そうこうしている内にガギはより正確に朝潮と菊月に狙いを定めようとして2人に近づいており、それを見た朝潮は菊月を両腕で抱きかかえて持ち上げてその場から逃げようとする。

「お、おい!?!」

それに少し顔を赤くする菊月だが、朝潮は兎に角今はガギから逃れようと走り出す。

そしてそれを見てガギも2人を追いかけようとするのだが、その時……「グニィ」つと何か柔らかいものを踏んでしまい、ガギは首を傾げつつ自分の足下を見てみると……。

そこには地中に身体を半分埋まらせていた「地底怪獣 マグラー」が眠っていたのだったのだ。

しかし、マグラーはガギに踏みつけられたことで目を覚まし、それに激怒したマグラーは未だに自分を踏んづけているガギを起き上がって押し退かす。

「グルアアアア!!!」

「ギシャアアア!!!」

起き上がったマグラーはガギに向かって突進し、ガギはそれを正面から受け止める。

「グルルル!!」

そのままガギはその巨大な手を振るって自分に掴みかかっているマグラーの背中を叩きつけ、少し蹲ったところにガギはマグラーに膝蹴りを叩きこむ。

「グアア!!?」

倒れ込むマグラーだったが、マグラーはすぐに起き上がり、再びガギに向かって突進攻撃を行う。

しかし、ガギは両手の触手を素早く振るってマグラーの顔を叩きつけ、それによってフラついたマグラーに向かってガギは角から光線を発射してマグラーに直撃させる。

「グワオオオオオ!!」?

マグラーは吹き飛ばされ、身体から火花を散らして仰向けに倒れ込む。

バタバタと手足を動かしてどうにか体勢を整えようとするマグラーだったが、ガギはそうなる前にトドメを刺そうと一気にマグラーに接近。

触手をしまい、両手を爪だけにするとガギはその爪をマグラーの身体に突き刺し、マグラーは身体は大きく身体を震わせた後、大量の血を流して大きな叫び声をあげたあと、目を閉じて絶命したのだった。

「グギャアアアア!!!」

勝利の雄叫びをあげるガギだが……。

ガギはすぐに本来の目的を思い出し、辺りを見回して朝潮と菊月の2人を探し始める。

「オイ、あいつ……私達を探してるぞ……?」

そして菊月と朝潮はというと草むらの中に隠れてガギに見つからないように身を潜めており、ガギの様子をそこからこっそりと伺っていた。

「……あの壁さえ潜り抜ける方法があれば……」

とそこへ……。

「んっ? おい、朝潮……なんだあれ?」

「へっ?」

菊月が何かに気づいたらしく、ある方向を指差すとそこには等身大の赤い怪獣がこちらに向かって歩いて来ており、2人は互いに顔を見合わせて首を傾げる。

「……怪獣?」

「ピイ………ピイ………!」

その怪獣は「友好珍獣 ピグモン」と呼ばれる怪獣で壁の外側にいるピグモンは菊月と朝潮の方を指して歩いて来ているのだが……ガギの張ったバリアに「ゴン!」つぶつかってしまい、倒れ込んでしまう。

「ああ!? 倒れちゃいました……!」

「あの怪獣……なにをしよう?」

だが、その時ガギがピグモンの存在に気づき、ガギはピグモンを不思議そうに見つめながら徐々に接近してくる。

「はっ!?! あの怪獣にこのままでは気づかれています!」

「だが、今下手に動けば……!」

すると又もや巨大な地響きが鳴り、菊月は呆れたような表情を浮かべながら「お次は

なんだ……?」と眩くと地中からサンシヨウウオに酷似した怪獣……「両棲怪獣 サラマドン」が出現し、サラマドンはガギの前に立ち塞がる。

さらにサラマドンが出現した穴からムササビのような皮膜状の翼を持った怪獣……

「飛膜怪獣 パラグララー」が出現し、サラマドンの隣に降り立った。

「グルアアアアアア!!!」

ガギはそんな2体を見るや否や角から光線を放ち、パラグララーは翼を広げて飛行して回避し、サラマドンも素早く光線を避ける。

そしてパラグララーはそのまま飛行しながらガギに体当たりを繰り返し出し、ガギは倒れ込む。

そこに追い打ちをかけようとサラマドンがガギに向かって突進してくるが、ガギはすぐに起き上がってこちらに向かって来るサラマドンを蹴り飛ばす。

「グギアアアア!!!」

「キシヤアアアア!!!」

しかし今度は空中からパラグララーが急降下キックをガギに叩き込み、それに怯んだところを狙って起き上がったサラマドンが背中の棘を飛ばして攻撃。

それに対してガギは触手を振るって振り払おうとするが全て弾くことはできず、いくつかは身体に棘が刺さり、ガギは悲鳴をあげる。

「アギヤアアアア!!?!」

さらにサラマドンは勢いをつけてガギに向かって飛び込むようにジャンプし、ガギの胸部に頭突きを喰らわせ、それに続いてサラマドンもガギの頭部に向かって空中からのドロップキックを叩きこみ、2体の攻撃を受けたガギは地面に倒れて目を閉じ、気絶するのだった。

「ギシャアアアア……!?!」

そして菊月と朝潮もまたピグモンの誘導でサラマドン達が来た穴を通ってガギのバリアの外へと抜け出すことに成功。

それを確認したパラグラーとサラマドンも同じようにその穴を通ってガギのバリアから脱出するのだった。

「ピィー!」

「ありがとう、私達を助けてくれたのね?」

朝潮は笑みを浮かべながらピグモンの手を握ってお礼を述べ、それに対してピグモンも嬉しそうに鳴き声をあげる。

「そう……。あなた、ピグモンって言うのね!」

「んっ? 朝潮、そいつの言葉……分かるのか?」

菊月の疑問に対し、朝潮は「ええ」と答える。

なんでも彼女が言うにはピグモンの手を握るとピグモンの考えていることが分かるらしく、菊月も試しに握ってみたら本当にピグモンの考えていることが分かり、意思疎通を行うことができたのだ。

「この子達もあなたのお友達なのね？」

朝潮は上を見上げるとそこにはこちらを見下ろすサラマドンとパラグラーがおり、菊月はそれに冷や汗を流しつつ「凄い光景だな……」と呟くのだった。

「ピィー!!」

ピグモンはサラマドンとパラグラーに手を振るってお礼を言うような仕草を見せた後、サラマドンとパラグラーは頷いてどこかへと去って行き、ピグモンは朝潮と菊月の腕を掴んで2人をどこかに連れて行くこうとする。

「おわっ!!? ぴ、ピグモン……!!?」

「おい急にどうしたんだ!! 私達に、なにか見せたいものがあるのか!?!」

服の上から腕を掴まれている為、ピグモンが何を考えているかは分からないが取りあえず2人は既にピグモンに敵意がないことは分かっているので一旦菊月の傷の手当てを済ませて2人はピグモンについて行くことにするのだった。

*

「おいしい、一体僕たちをどこに連れて行くんだよ〜!」

同じ頃、皐月と荒潮は未だにキンググバモスに抱えられており、皐月は未だに降ろしてくれないキンググバモスに不満を口にするがキンググバモスは「あともう少しだから」とでも言うように「バモバモ!」と鳴く。

その時、皐月達の頭上を突如巨大な鳥の怪獣……「火山怪鳥 バードン」が空を羽ばたいて通り過ぎ、その際にバードンが起こした少し強烈なソニックムーブによってキンググバモス、皐月、荒潮は軽く吹き飛ばされてしまう。

「バモオ〜!!?」

「うわあ!?! なになに!?!」

「アレは……バードンね。でも何か様子がおかしいわ……?」

すると今度は皐月達の頭上を巨大な岩石が通過し、その岩石は空を飛んでいるバードンに激突。

それによってバードンは墜落してしまっただった。

「今度は岩が飛んで来たんだけど!？」

「ギャオオオオオオオ!!！」

そこへ今度はバードンとはまた別の怪獣の鳴き声が聞こえ、声のした方を見るとそこには黄色い身体の怪獣……「どくろ怪獣 レッドキング」が現れ、レッドキングは足下にあつた岩石を拾いあげるとそれをバードンへと投げつける。

対するバードンは身体を蹲らせるのだが、結局岩石はバードンに激突し、バードンを吹き飛ばしたのだ。

「キユエエエ!!!」

攻撃を受け、フラつきながらもどうにか空へと飛び立とうとするバードンだが、レッドキングは逃がすまいと素早くバードンの翼を掴みあげてこちらへと振り向かせると顔を殴りつける。

さらにレッドキングは口から幾つもの小さな岩石を吐きだし、バードンに攻撃を加え、バードンは悲痛に満ちた鳴き声をあげる。

「地球最強怪獣って言われてるバードンがあんなに押されてるなんて……!」

「というより、バードンはどうして反撃しないのかしら……う？」

だが、バードンに取つての最悪の事態はまだ終わらなかった。

なんとそこに新たに虫のような怪獣……「変異昆虫 シルドロン」が歩いてやつてきたのだ。

「ギシャアアアア!!!」

シルドロンは見るからにバードンに対してなぜか敵意を剥き出しにしており、身の危険を感じたバードンは即座に口から炎を吐いて先手攻撃を繰り出すが……。

シルドロンは額の緑の水晶体を点滅させることで敵の攻撃を予知して硬度の高い鍔状の両腕でそれを防いでしまう。

「ギシャアアアア!!!」

そのままシルドロンはバードンに近づき、腕を振るってバードンを殴りつける。

「キュエエ!!?」

さらにそれに続くようにレッドキングもバードンの膝に蹴りを叩き込み、レッドキングとシルドロンはバードンを袋叩きにするのだった。

「アイツ等……!! よつてたかつて……!!」

バードンを袋叩きにするレッドキングとシルドロンを見て皐月は怒り、彼女はキングバモスの腕を強引に振り払って主砲を構えてレッドキング達の方へと駆け出していく。

「皐月ちゃん!! もう、困った娘ね!」

「バモオ〜!」

それを見て荒潮はキングバモスの腕を退かして皐月を追いかけようとするが……。

その際、荒潮はキングバモスも皐月を心配そうにしているのに気づき、彼女はキングバモスを頭を撫でながら笑みを浮かべて「大丈夫よ」と呟く。

「危ないからあなたはここにいてね?」

荒潮はキングバモスにそれだけを言つて彼女は主砲を構えて皐月を追いかけて行き、荒潮はすぐにレッドキングとシルドロンに向かつて主砲から砲弾を放っている皐月の姿を発見する。

「皐月ちゃん!!」

「荒潮!」

「もう! 勝手にどこかに行かれたら心配するじゃない!!」

荒潮はそう言つて皐月を注意し、それに対して皐月は申し訳無きように「ご、ごめん」と謝るのだった。

「でも気持ちは分かるわ。あの2体の怪獣を私達の方に誘導してバードンから引き離しましょう?」

荒潮の言葉に皐月は「うん!!」と力強く頷き、2人は主砲を構えて砲弾をレッドキン

グの頭目がけて集中砲火を行う。

するとレッドキングは先ほどまではそれほど気にしていなかったが、人数が増えた為か彼女達の攻撃が少しばかり鬱陶しく思い、レッドキングは雄叫びを上げて皐月と荒潮の方へと歩いて来る。

「よし!! レッドキングは反応した!!」

「あつちの虫は私が誘導するわ!!」

そう言つてレッドキングは皐月に任せ、荒潮はシルドロンの方へと向かい、彼女はレッドキングと同じようにシルドロンの頭に集中砲火を行う。

それに対してシルドロンも同じように荒潮を鬱陶しく思つたのか、シルドロンは腕を振り下ろして荒潮に攻撃を仕掛ける。

それを彼女はどうか躲したのだが、シルドロンは攻撃の手を緩めず、素早くまた腕を振り下ろして来る。

「きゃあ!」

さらにそれと同時にレッドキングも皐月に口から岩石を放とうとし、皐月も荒潮もこれで一貫の終わりかと思つたその時……!

「うわあ!」

レッドキングとシルドロンの2体を1つの光の球体が激突して吹き飛ばしたのだ。

その光の中から飛び出すように「ウルトラマンメビウス」が現れたのだ。

戦闘BGM「メビウス！」

「メビウス……!!」

メビウスは臯月と荒潮に向かって頷くと2人はそれを見て嬉しそうに頷く。

『セアツ!!』

メビウスはファイティングポーズを取り、レッドキング、シルドロンと対峙する。

「ギシャアアアア!!!」

レッドキングはドラミングをして雄叫びを上げ、メビウスに向かって駈け出して行くがメビウスはこちらに向かって来るレッドキングに巴投げを繰り出して投げ飛ばす。

そのままメビウスは素早く起き上がってジャンプし、跳び蹴りをシルドロンに繰り出す……シルドロンはその攻撃も予め予知し、両腕でメビウスの蹴りを防ぐ。

『ハアアアアア!!!』

しかし、メビウスは身体をそのままきりもみ回転して炎を起こす「メビウスピンキック」を繰り出すとするがシルドロンはそれも予知していたのか、きりもみ回転される前に腕を振るってメビウスを押し返す。

『クツ……!』

地面に着地するメビウスだが、そこを狙ってレッドキングが羽交い締めにし、レッド

キングはシルドロンに攻撃するように指示を出す仕草を見せ、それにシルドロンは頷く。

「キュエエ!!!」

シルドロンは身動きの取れないメビウスに腕のハサミを振るって斬りつけようとするが、メビウスは両足を振り上げて近づくシルドロンに両足蹴りを叩き込む。

さらにそのままメビウスはレッドキングの腕を振りほどき、逆にレッドキングの左腕を掴んで背負い投げを繰り返す。

「キシヤアアア!!!」

そしてメビウスはレッドキングやシルドロンから距離を取り、必殺の「メビュームシュート」を放とうとするのだが……。

起き上がったシルドロンは前に出て「どこからでも来い!!」と言うように自分の胸を叩いて挑発。

それを見てメビウスは先ほどシルドロンが攻撃を防いだことを思い出し、攻撃の手段を切り替えることに。

戦闘BGM「メビウスの勝利」

メビウスはメビウスブレスを輝かせると身体に炎の模様が描かれた強化形態「バーニングブレイブ」となり、メビウスブレスから発生した炎のエネルギーを胸の部分に集中

その頃、鎮守府では……。

夜空は朝潮達の救助チームのメンバーを時雨、満潮、睦月、如月、夕立、暁を選択。さらに彼女等の持つ6人のジオデバイザーはリョーガとグルマンが多々良島の電磁波の影響に受けないように改良し、それが完了次第、彼女達は朝潮達の救出作戦を行うことになったのだった。

そして夜空は現在、リョーガとグルマンの研究所に訪れており、夜空も自分のエクスデバイザーを電磁波を受けないように改良してくれと頼んでいるところだった。

「俺のデバイスもあの島の放つ電磁波の影響を受けるかもしれない。そうなければいざという時にエックスに変身できないし、例え変身できたとしても全力を出せないかもしれない、だから俺の改良をお願いします」

『ふむ、分かった！ 私とリョーガでやっても全員のデバイスの改良は2時間はかかってしまうぞ?』

グルマンのその問いかけに、夜空は力強く答える。

「1時間でお願います!」

そんな夜空の返答を聞いてリョーガとグルマンは顔を見合わせ、「アハハハ!!」と笑い出す。

「ああ、私達に任せませえ! なんとたって私達はてっんさい!! だからね!」

『うむ！ 任せろ!!』

『人間が出術を受ける時の気持ちってこういうのなんだろうな……』

しかし、改良を加えられる本人（？）とも言えるエックスに取ってはある意味では身体を機械で弄くられるようなもので……その為、彼には少なからず不安があった。

『大丈夫だエックス！ 私達を誰だと思ってるんだ？』

「そうそう、大丈夫大丈夫！ ちょっととチクリとするだけだから！」

『なんか逆に余計に不安になって来た……』

夜空はそんなエックスに対して「すまん」と謝罪するが、朝潮達を助ける為なのでエックスも「彼女達を救うためには止を得ない」と答え、覚悟を決める。

『男は度胸と言うしな。 やってくれ！ リョーガ博士、グルマン博士!!』

エックスのその言葉にリョーガとグルマンは力強く頷くのだった。

第17話 『艦娘、遭難!? 後編』

戦闘BGM「邪悪の接近」

多々良島の中央部辺り……そこではレッドキング、バンピーラ、ロックイーター、チャンドラー、バードンが集結していたのだが……。

バードンは前回の戦いのダメージから身体を弱らせており、そんな弱ったバードンに向かってレッドキングは足下にあつた岩石を持ち上げてバードンに向かって投げ飛ばす。

だが、それをメビウス・バーニングブレイブは両手で掴みあげて岩石をレッドキングに向かって投げ返し、岩石はレッドキングの頭に激突し吹き飛ばされる。

『シエア!!』

「グルアアアアア!!」

すると今度は足に糸を絡ませたままのチャンドラーがバンピーラを引きずりながら飛行し、そのまま引きずったバンピーラをメビウスに激突させようとする。

しかし、メビウスはメビウスブレスから放つ光刃「メビュームスラッシュ」で糸を切り裂いた為に、バンピーラは地面に転がり、チャンドラーはそれによってバランスを崩

して岩山に激突し、地面に倒れ込む。

『セアツ!!』

「ギシャアアアア!!!!」

今度はロックイーターがその巨大な口を開けてメビウスに襲いかかるが、メビウスはロックイーターの口を掴みあげて横腹に強烈な蹴りを叩きこんで引き離す。

『タアア!!』

そのままメビウスは駆け出してドロップキックをロックイーターに喰らわせ、ロックイーターを吹き飛ばすのだが……今度は背後からチャンドラーが体当たりを喰らわせてメビウスを突き飛ばし、メビウスは前のめりに倒れ込んでしまう。

『グウウ?!?』

そこへ復活し、立ち上がったレッドキングはまた岩石を持ち上げて倒れ込んでいるメビウスに投げつけようとするのだが……レッドキングの右腕にバンピーラが口から吐いた糸が絡まり、動きを一時封じられたところにチャンドラーの急降下キックがレッドキングの顔面に叩きこまれる。

しかし、レッドキングはその攻撃をなんとか踏ん張って耐え、チャンドラーの足を左手で掴むとそのままチャンドラーをバンピーラに向かって投げ飛ばし、激突した2体は吹き飛ばされ倒れる。

を指差すとバードンはメビウスが自分をここから逃がそうとしてくれていることに気づき、頷いて空へと飛び去って行く。

それを見送ったメビウスは既にエネルギーの限界に近い為に、一度光の姿へと戻るのだった。

「はあ………。思ったより、楽じゃないな。取りあえず、朝潮達を探そう」

光は夜空に頼まれ、先行して朝潮達を探しに来ていたのだ。

ここに来た理由は取りあえず追々考えるなり誤魔化すとして光は一人、そう呟くと朝潮達を探すために森の中を歩き始める。

しかし……光が歩き始めようとした矢先、辺り一面が泥まみれだったせいで彼はそれによってツルツと足を滑らせてしまう。

「えっ………」

それによって彼は崖から落っこちてしまい、すぐそこにあつた川の中へと飛び込む形になってしまう。

「うわああああ!!!?」

「ドボン!!」つと大きな音を立てて川の中へと飛び込むことになった光はそのまま勢いよく海まで流されるのだった。

*

バードンが無事、レッドキング達から逃げ切れ、怪獣達が内輪揉めを始めた為、皐月と荒潮はその間にキングバモスに再び抱きかかえられてある洞窟へと連れて来られており、目的地に到着するとキングバモスは2人を降ろして洞窟の方を指差し、泣き声をあげて2人に何かを訴える。

「バモバモ!!」

「この中に何かがあるの?」

「バモ!」

荒潮の言葉にキングバモスは頷き、皐月は荒潮に「どうする?」と尋ねると荒潮は腕を組んで少しだけ考え込む。

「まあ、多分大丈夫じゃないかしら? この子は悪い子には見えないもの」

荒潮はキングバモスの頭を撫でながら皐月にこの洞窟の中に入ってみようとするの

だが、その時……彼女等2人に向けて「おーい!!」と聞き覚えのある声が聞こえ、荒潮と皐月が声のした方を見るとそこにはピグモンに腕を引かれた菊月と朝潮がやってきたのだ。

尚、菊月は先ほど怪我をした為、朝潮が自分の服の腕部分を破ってそれを包帯代わりに彼女の足に巻いていた。

「菊月!! 朝潮!! 無事だったんだね!」

「ああ、私は少し怪我してしまっただがな。 皐月姉さん達も無事で良かった。 ところで、姉さん達はなんでここに?」

菊月が疑問に思ったことを尋ねると皐月はキングバモスにここまで連れて来られたことを説明し、それを聞いて菊月も皐月達とほぼ同じ理由でピグモンにここに連れて来られたことを話す。

「ピイ!! ピーピー!」

「バモオ〜!」

またピグモンとキングバモスは仲が良さそうに何かを話しているかのような仕草を見せ、それを見て朝潮は「きつとこの子達はお友達なんでしょうね」と予測し、彼女はピグモンとの意思の疎通を行うため、ピグモンの手を握りしめる。

「あなた達が私達に見せたいもの、この中にあるのね?」

「ピピイー！」

ピグモンは朝潮の言葉に頷き、彼女等はキンググバモスとピグモンに案内されて洞窟の中へと足を踏み入れ……。しばわく歩いて行くとそこには……。

「うぎぎぎぎぎぎ!! うぎやあああああ!!! いでえええええええええ!!!」

「ブチブチブチイ!!」と大きな音を立てながら自分の尻尾を自分で引き千切つてるレ級がいた。

尚、千切つた尻尾からは当然ながら大量に血が吹き出て壁が真っ赤に染まっていた。

「「ぎやあああああ!!! 何事おおおおお!!!」」

そのあまりにもグロい光景に菊月、朝潮、皐月は身体を震わせ、顔を青ざめさせて驚きの声をあげ、また荒潮は頬に手を添えて「あらあら……。凄い光景ね」と小さく呟くのだった。

*

一方………。

朝潮達の救出作戦の準備を完了させ、夜空はこんな時の為に鎮守府にあらかじめ用意してあったリョーガとグルマンによって島の電磁波を受けないモーターボートに乗り、時雨、満潮、睦月、暁、如月、夕立と共に多々良島に向かっていた。

「つていうか、司令官アンタ大丈夫なの？ 司令官なんだし鎮守府で待機しておいた方が………」

「いや、大丈夫だ。俺も朝潮達を助けたいんだ。みんなの足は引つ張らない」

満潮の言葉に夜空はそう返し、そんな彼に対し満潮は「それじゃ怪我だけはしないでよ」と伝え、夜空は苦笑しながら頷く。

「島が見えてきた!! みんな!! あの島には何かがあるか分からないから気をつけてね!

リョーガさんやグルマン博士の話じゃあの島は怪獣がウヨウヨいるらしいから!」

本日の旗艦である時雨の指示に一同は「はい!!」と頷き、あともう少しで島に到着しようとしたその時だった。

一同の持つているジオデバイザーから危険信号が鳴り響き、時雨は一同に一度立ち止まるように指示。

そして時雨や夜空がジオデバイザーが確認すると、何か巨大な反応が海の中からこち

らに向かつて迫ってきており、時雨と夜空は冷や汗を流しながら「まさか……」と顔を見合わせる。

「下から怪獣が来るぞ!! 気をつけろ!!」

次の瞬間、大きな津波を立ててタコに酷似した怪獣、「タコ怪獣 ダロン」が海中から出現。

「ウオオオオオオオオン!!!!」

「わあああああ!!!? 怪獣だよー!!!?」

夜空はモーターボートを上手く操縦し、他の艦娘達もなんとか津波に飲み込まれずに済んだのだが、ダロンはこちらを睨み付けて明らか敵意をぶつけ、身体の触手を使って時雨達を叩きつけようとする。

「みんな散開して!!」

時雨の指示によって一同は散開してなんとかダロンの攻撃を回避。

「……ステイブさん呼んでくれば良かったわね」

「ステイブって誰よ!?!」

「ほらあの……タガールの時の……」

暁と満潮がそんなやり取りをしていると如月から「話してる暇ないわよー!?!?!」と大きな声が聞こえ、気づけば自分達に向かつてダロンの触手が振り下ろされていることに

気づき、2人は「わあああああ!!?!」と悲鳴をあげながら主砲を構えてダロンに向かって砲撃。

それによつてダロンの触手の一部の先端部分が焼き千切れ、それに怒つたダロンは今度は別の触手が満潮と暁へと襲いかかり、満潮はそれをなんとか回避できたものの暁はダロンの触手に拘束され捕まってしまう。

「きゃああ!!?! なんかねっちよりして気持ち悪い!!」

「……………暁ちゃんつて憲兵沙汰に定評あるわよね」

「如月ちゃん何言つてるっばい!!」

苦笑いしながらそんなことを呟く如月に、夕立がすかさずツツコミを入れ、また触手に捕まった暁は夜空の放つたウルトラライザーによる光線が触手を撃ち抜いた為に拘束が解かれ解放される。

「みんな!! 奴の頭部に攻撃を集中砲火させるんだ!!」

『了解!!』

夜空の指示に時雨、満潮、睦月、如月、夕立、暁は主砲を、夜空はウルトラライザーを構えて光線を放ち、ダロンは攻撃に耐えつつなんとか反撃しようとするのだが……………。

一同の攻撃の手が緩まなかつた為にダロンは反撃することができず、やがてダロンは逃げるように海の中へと帰って行くのだった。

「はあ、なんとか追い返したぞよ……いきなりこれとかこの先が思いやられるにやしいく……」

睦月はこの先のことを考えると鬱な気分になってしまいが、すぐに妹である皐月や菊月、仲間を救うためにもここで挫ける訳にはいかないと気持ちを入れ替え、一同は改めて多々良島へと向かおうとするのだが、そこでまた一つ問題が発生した。

「アレは……まさか、ダークサンダーエナジーか!？」

それは突如として多々良島上空に大きな暗雲が現れ、多くの怪物が住む島だからか……そこから黒い稲妻「ダークサンダーエナジー」が5つも多々良島に向かって放たれ、夜空達は青ざめた顔を浮かべるが……。

ダークサンダーエナジーは島に降り注ぐ直前にまるで何かのバリアのようなものに阻まれてかき消され、その後も幾つものダークサンダーエナジーが降り注ぐが、一向にダークサンダーエナジーは島に到達せずバリアのようなもにかき消されてしまう。

「一体なにが……」

時雨はなぜダークサンダーエナジーが途中で消え去ってしまうのか疑問に思い、島の様子を見ていた夜空がそれに対して一つの仮説を立てた。

「恐らく、だが……あの島が発する電磁波、あれがもしかしたらダークサンダーエナジーを遮る役目をしているのかもしれない……」

「成程……」。電子機器が普通じや使えないから厄介な島だと思つてたけど、ダークサンダーエナジーが怪獣達に降り注がないのは有り難いね」

「ああ。少し安心できるな。よし、島に向かうぞ!!」

そうして夜空達は今度こそ朝潮達を救うべく、多々良島へと向かうのだった。

*

同じ頃、多々良島の中央部分辺りにて……。

そこだけはなぜか辺り一面が雪で覆われており、そこではゴリラのような怪獣「冷凍怪獣 ギガス」と両手に鎌を持ち、背中に翼の生えた怪獣、「彗星怪獣ドラコ」……さらには茶色い身体を持つ「地底怪獣 テレスドン」、そしてレッドキングの四つ巴で争い合っていた。

「グルアアアアア!!」

ドラコは両手の鎌を振るってギガスの胸部を斬りつけ、テレスドンはレッドキングに掴みかかり、レッドキングは掴みかかってきたテレスドンをドラコに向かつて投げ飛ばし、2体は激突して倒れ込む。

「ギシャアア!! ギシャア!!」

レッドキングはドラミングをしながら倒れ込んだドラコの身体を押しさえつけて顔を殴りつけ、またギガスは倒れたテレスドンの上に馬乗りになって拳を叩き込む。

ドラコはなんとか起き上がってレッドキングを押し退かし、分が少し悪いと考え出直そうと空を飛び去ろうとするのだが、レッドキングは逃げようとするドラコの足を素早く掴みあげて地面に叩きつける。

「グルアアアア!!」

「ギシャアアアア!!」

そのままレッドキングはドラコの羽をむしり取り、近くにあつた自身の手の平に丁度収まるくらいの岩を掴んでドラコの頭を殴りまくる。

「グアアア!!?! グアアア!!?!」

またギガスをどうにか押し退かしたテレスドンは地中に素早く潜って身を隠し、ギガスはテレスドンが逃げたのかと思ひ、自分もドラコかレッドキングに戦いを挑もうとするのだが……。

次の瞬間、地中からテレスドンが勢いよく飛び出し、すれ違いざまに爪を振るってギガスの腕を切りつけ、ギガスは悲鳴をあげる。

「グルアアアア!!」

「ゴホオ!？」

さらにテレスドンは再び地中の中へと潜り、先ほどと同じように地中から勢いよく飛び出してギガスに体当たりを喰らわせて吹き飛ばし、テレスドンは地中へと潜る。

ギガスはテレスドンの攻撃によって膝を突き、テレスドンはギガスが弱ったところを狙ってトドメの一撃を刺そうとギガスの背後から飛び出して攻撃を仕掛けるのだが……。

それに気づいたギガスは振り返りざまに口から冷凍ガスを放ち、テレスドンの身体をみるみる凍らせて、完全に身体が凍ったテレスドンは地面に落下し、ギガスは凍り付いたテレスドンの頭を踏み潰して倒してしまふのだった。

「ゴオオオホオオオオ!!!!」

ギガスは勝利の雄叫びをあげ、調子に乗ってレッドキングとドラコの方へと戦いを挑もうと駆け出し、ギガスはレッドキングにラリアットを喰らわせようとするのだが、ギガスに気づいたレッドキングは逆にギガスにラリアットを喰らわせてダウンさせる。

「グホオ!!？」

そこからレッドキングは倒れたギガスを何度も足で踏みつけ、レッドキングは倒れているギガスを無理矢理立ち上がらせるとそのまま何度もギガスの腹部を殴りつけ、最後に近距離からのドロップキックを叩きこまれる。

「グオオオ!!?」

「ギシヤアアアア!!!」

ここまでボコられたせいでギガスは「ダメだあ……!! レッドキングは強い……!!」
！」とも思ったのかギガスはフラつきながらも一目散にその場から逃げ去り、レッドキングはギガスを追いかけようとするが……。

背後から起き上がったドラコがレッドキングに向かって鎌を振るおうとしたのだが、レッドキングはそれをひらりと躲し、ドラコの顔を殴りつける。

それにドラコが怯んでいる間にレッドキングは岩山の一部を抉りだし、巨大な岩をドラコの頭に向かって投げつけてぶつけるとドラコはそれによって失神し、倒れてしまうのだった。

「ギシヤアアアア!!!」

今度はレッドキングが勝利の雄叫びをあげるのだが、まだ戦い足りないレッドキングは先ほどのギガスを探そうとその場を立ち去るのだった。

「グルル……!!」

*

そして場所は菊月達のいる洞窟の中へと戻り、レ級が引き千切った尻尾の傷口は彼女自身の再生能力が高いからかすぐに塞がったのだが、それでも余程痛かったのか彼女はお尻を摩りながら涙目で「ああ、痛かった」と呟く。

そんな彼女は菊月達の存在に気づかず、焚き火をせつせと起こして先ほど自分が引き千切った尻尾を焚き火にかざして丸焼きにし、丁度良い具合に焼け終わるとレ級はそのままこんがり焼けた自分の尻尾にかじり付いた。

「レ級……」

菊月、臯月、朝潮はその光景を唾然とした表情で見しており、あまりのカオスな光景に彼女等は思考が一時停止してしまい、菊月はいつものようにツツコミをすることも忘れてしまっていた。

「あら、美味しそうに食べてるわねえ？ 私にもお裾分けしてくださいさる？」

しかし、この中で唯一物怖じしない人物が一人……それが荒潮である。

「おう！ 少しだけなら別に良いぞ」

それに対してレ級も快く自分の尻尾の肉を千切って荒潮に渡すのだが、そこでレ級は

「んっ?」とあることに気づき、声をあげる。

「な、なんだお前は——!!?!」

「いや、お前の方がなんなんだあ!!?!」

そこでようやく正気に戻った菊月と皐月がレ級に対してツツコミを入れ、朝潮は慌てて荒潮から「こんなもの食べちゃダメよ!?!」と肉を取り上げる。

こんなところで深海棲艦と遭遇するとは思ってもみなかつた菊月達は一度は慌てふためきそうになるが、なんとか冷静になり、彼女等は唯一使うことのできる艦装の一部の主砲を構えてレ級を警戒するが……。

そこにキングバマスとピグモンがレ級を庇うように両者の間に割って入り、2体は「喧嘩しないで!!」とでも言うように首をブンブン横に振り、レ級も両手をあげて「私君たちと戦うつもりはないよ」と自分には戦う意思がないことを伝える。

「……………そう簡単には信用できないな」

「ひどいなあ、元は私も君らと同じ艦娘だつてのに」

レ級のその言葉に菊月と皐月は怪訝な顔を浮かべ「どういうこと?」と彼女に問いかける。

「君らも噂くらい聞いたことあるだろ? 深海棲艦は沈んだ艦娘が生まれ代わつた

姿……………そしてまた艦娘は沈んだ深海棲艦が生まれ代わつた姿……………。

それは全部本当のこと、つまり私も元艦娘ってことだよ。ドロップした艦娘とかまきにそうだよ。まあ、私はなんの艦娘だったかなんて覚えてないけどね」

「えっ、それマジなの……?」

「マジもマジ、マジ○ンジャーだよ?」

皐月の質問にレ級はそう答え、菊月は「なんで深海棲艦がマジ○ンジャー知ってんだよ」と思わずにいられなかったが菊月はまだレ級の言葉を信用することはできなかった。

「ならなんで深海棲艦は人間を襲う? しかも海だけじゃなく地上を攻撃したという記録もあるぞ? 同じ艦娘だったのならなんで……」

「ふーんむ、まあ、先ずは順番ずつ説明していった方が早いね」

レ級はそう言つて菊月の疑問に答えるためにも先ずは深海棲艦と艦娘が人類の前に現れ始めたところから説明をします。

先ず、かつて海に沈んだ軍艦達に「マイナスエネルギー」と呼ばれるエネルギーが偶発的に注入されたことで深海棲艦達が誕生。

その最初の深海棲艦達はおのれの意思を持たず、ただ破壊衝動や本能の赴くままに行動を起こし、世界中に散らばって暴れ回っていた。

しかし、中にはほんの少数ではあるが己の意思を強く持った深海棲艦も現れ、そう

いった深海棲艦が同じ深海棲艦を倒すことで倒された深海棲艦は生まれ代わり、艦娘が誕生したようだ。

生み出された艦娘は当然深海棲艦と戦うことになり、やがて深海棲艦と戦う深海棲艦は戦いを全て艦娘に任せて姿を消したというのだ。

この辺りの理屈はレ級自身もよく分かっていないのだが、こうして艦娘と深海棲艦が戦うみんなもよく知る構図が生まれたらしい。

「それで艦娘とかを研究したことで人類自らが艦娘を人工的に作り出す方法を発見。

『建造』ってシステムが作られた訳」

「ふむ……それは分かったが、その意思を持った深海棲艦というのはあまり目撃例がないのだが、その理由はあるのか？」

「一応ね、深海棲艦は地上じゃ悪者だかんね。悪い深海棲艦と間違われて攻撃されないために私等みたいになしつかりと意思を持った深海棲艦は基本隠れて大人しくしてるんだ」

また、レ級が言うには中には意思を持ちながらも破壊衝動などに素直に従って暴れる深海棲艦もいるのだと彼女は一同に説明した。

「1つ疑問なのだけど、元艦娘の深海棲艦は自分が艦娘だつてことは覚えていないものなのかしら？」

「基本はね。隠れて大人しくしている深海棲艦は大体覚えてはいるけど他は覚えてる奴はいない。つまり、分かりやすく纏めると深海棲艦は3つのジャンルにカテゴライズされる。『意思を持ちながらも悪意を持つ者』『ただただ本能と破壊衝動に従う者』

『自分が元艦娘だということだけを覚えていて大人しくしている者』って感じに」

レ級の説明を聞き、朝潮、菊月、荒潮は「なるほど」と納得するが、皐月はイマイチ話についていけず、ちんぷんかんぷんだった。

「ところで……その、レ級さんはなんでこんなところに？」

「多分、君らと似たような理由だよ。隠れてるって言ってもずっとそうしていると窮屈だからね、だから気分転換にさ……」

そこまでレ級の言葉を聞き、朝潮は「ああ、艦装を装備して海の上を散歩でもしたいんだらうな」と予想するのだが……

「海の上でパルクールみたいなこととして遊んだら面白いだろうなと思つて海に出てたら失敗して大きな津波に飲み込まれちゃって気づいたらここいたんだよね」

「パルクール!?!」

予想を裏切る解答に朝潮は驚くが、そんな彼女をレ級は無視して菊月達に「どうよ？ちよつとは信用してくれた？」と尋ねるが荒潮以外はあまり納得したような顔を見せず、そんな彼女等の反応にレ級は頭を抱える。

「まだ信用してくれないか……」

「出来れば私も信用したいさ。だが、それで痛い目にもあったからな。慎重に行か

せて貰うしかないの……」

菊月がそこまで言いかけた時、突然彼女のお腹が「ぐうぐ」と鳴り響き、菊月は自分のお腹を押さえて顔を真っ赤にする。

「まっ、取りあえず話はここまでにしてそろそろ私達も何か食べましょう？ 菊月ちゃん？ あなた達が捕ってきた魚があるんでしょ？ 私達はちよつと邪魔が入って食料

集められなかったけど……」

「あ、ああ、そうだな」

荒潮に言われて菊月は朝潮と一緒に捕ってきた魚を用意し、またピグモンとキングバモスは洞窟の奥に置いてあった島の果物や菊月の手当をするための薬草などを朝潮達の元へと持って来るのだった。

*

その頃、島に到着した夜空達はというと……。

夜空は到着した場所に満潮と暁を待機させ、朝潮達がこの辺りに来るかもしれないということを予想し、彼女等に定期的に主砲を上空に向けて撃つことで居場所を知らせるように指示。

そして暁、満潮の待機組以外のメンバーは搜索隊として森の中へと行くことになり、森の中に入る準備ができた夜空達は早速出発する。

「朝潮姉達をちゃんと見つけ出しなさいよ司令官!!」

「勿論だ。満潮も、朝潮達が合図に気づいたら温かく迎えてやれよ?」

「勿論よ」

ツンツとした態度は崩さないものの、満潮は夜空の言葉にそう答えた後、「早く行きなさい!」と言われ、夜空達は森の中へと入っていく。

ちなみに、夜空達も歩きながらではあるが満潮達と同様に定期的に主砲を上空に撃つことで朝潮達に自分達の位置を知らせながら彼女達を探すというスタイルをこちらは取ることになっている。

それから森の中へと入って1時間ほど経ち、岩山を登っていたその時……。

「グオオオオオン!!」と大きな怪獣の鳴き声のようなものが聞こえ、夜空は時雨立ち止まらせ、双眼鏡を持って声のした方を見るとそこには青の怪獣「青色発泡怪獣 アボラス」と赤の怪獣「赤色火炎怪獣 バニラ」が互いに激突しあつて戦つていたのだ。

「グルアアアアア!!!」

「ギシャアアアア!!!」

バニラは腕を振るつてアボラスを殴りまくるが、アボラスはなんとか攻撃に耐えて口から溶解液をバニラに吐き出す。

それをバニラは慌てて回避し、今度はバニラが口から炎を吐くのだが、アボラスはそれが直撃しているにも関わらず真つ直ぐバニラに向かつて突進を繰り返す。

「グルアアア!!!?」

それによつて後退して怯んだバニラに対して再びアボラスは突進するのだが、バニラはアボラスを両手で受け止め、そのまま地面に向かつて投げ飛ばし、倒れ込ませる。

倒れ込んだアボラスにバニラはダイブして攻撃しようとするのだが、アボラスはそれを回避し、バニラは地面に激突。

「グアアアアア!!!」

「グルアアアア!!!」

起き上がったアボラスとバニラは互いに溶解液と火炎を吐きだし、ぶつかり合つて中

央で爆発。

その後、アボラスとバナラは再び互いに取っ組み合いを始め、戦いを続ける。

そしてその光景を見ていた時雨は夜空に「どうするの？」と首を傾げて尋ねる。

「幸い、こちらには気づいていないんだ。今はアイツ等に気づかれず、そつとここから離れよう。だが、いざという時の為にサイバーゴモラを呼び出せるようにはしておく」

夜空はエクステバイザーに何時でもサイバーゴモラを呼び出せるようにして一同はその場から急いで離れようとするのだが……その時、空中からチャンドラーが出現し、チャンドラーは突然バナラと戦うアボラスに空中からの蹴りを叩き込み、アボラスは倒れ込んでしまう。

「グアアアアアアア!!」

突然の割り込みと自分への攻撃、それに怒ったアボラスは雄叫びをあげてチャンドラーに向かって行くのだが、チャンドラーは空中に高く飛んでアボラスの突進を回避。

その隙を突き、そこでバナラが口から火炎をアボラスに吐き、アボラスは身体を炎で多少焼かれてしまいがなんとかそこから抜けだし、アボラスはバナラに向かって駆け出し、勢いよくバナラの頭を殴りつける。

「グアアアアア!!」

それによって軽く吹き飛ばされ、倒れ込むバニラ。

さらにはそこを狙い空中からチャンドラーがバニラの腹部を蹴りつけ、バニラに反撃される前に再び空中へと飛び立とうとするのだが、そうはさせまいとバニラはチャンドラーの足を掴む。

「グル!!?!」

そこへアボラスは溶解液をバニラとチャンドラーを2体同時に倒そうと吐き出すのだが、起き上がったバニラはチャンドラーを盾にしてしまう。

「グアアアアア!!?!」

チャンドラーはアボラスの溶解液によってドロドロに溶かされてしまい、バニラはチャンドラーを押し飛ばしてアボラスに激突させるとそのままバニラは火炎を放ってチャンドラーに直撃させ、攻撃を受けたチャンドラーは爆発四散。

「ギシヤアアアアアア!!?!」

「グラアアアア!!?!」

チャンドラーは爆発し、さらに爆発に巻き込まれ、アボラスもダメージを受けて膝を突き、その間にバニラが容赦なく火炎をアボラスに向かって放つ。

「グウウウウウウウウウウ!!?!」

どうにか耐え、立ち上がろうとするアボラスだったが中々立ち上がることができず、

バナラの火炎攻撃をただただ受け続けるしかなく、やがてアボラスは黒焦げになってしまいその場に倒れ込んでピクリとも動かなくなってしまうのだった。

「グリアアアアアア!!!」

そして、戦いに勝ち残ったバナラは勝利の雄叫びをあげるのだった。

*

洞窟にて。

「そう言えば、レ級さんはいつからここに？　この島は確か数十年に一度しか現れない多々良島の筈なのですが、あなたの外見からどうもそこまでの年月が経っているように見えないのですが……?」

朝潮は多々良島は数十年に一度現れると言われている島だというのに、レ級の着ている服などを見るとそこまで汚れている様子がなかった為、彼女はレ級にそんな質問を投げかけた。

「うーん、半年前くらいかなあ？　私も多々良島のこととは知ってたけど、数十年に一度つて言っても私が聞いた話じゃほんの一瞬か、数分間は島はみんなの前に現れる的なこと

を聞いたなあ」

次に、皐月が「島が消えてる時ってどんな感じなの？」と問いかけるとレ級曰く、島の周りの景色などは全く変わらない為、いつ島が異空間に消えているのか、現実世界に現れているのか全く分からないらしいのだ。

「なあ、レ級？ 今日みたいに長時間現実世界に島が現れた時、いつでも脱出できるように筏とかを作ったりとかしていなかったのか？」

「あつ……」

今度は菊月がレ級に対して質問するのだが、その菊月の言葉に「その発送はなかった」とでも言いたげな表情を浮かべるレ級。

それを見て菊月は「おいマジか……」と頭を抱えるのだった。

「で、ですがきつと司令官達が私達を助けに来てくれる筈です!! 兎に角、それまで今はみんなで力を合わせましょう!! レ級さんも!!」

朝潮は慌てて一同に対してそう言うのだが、その時……突然ピグモンとキングバモスが何かを察知したかのように無き声をあげて騒ぎ始め、朝潮は「どうしたんですか!?!」とすぐさまピグモンの手を握ってピグモンの意思を感じ取る。

「えっ!?! 皆さん!! 早く洞窟から逃げて……!!」

朝潮がそこまで言いかけた時、突然洞窟の中が大きく揺れ始める。

「な、なんだなんだ?!?!」

それは先ほどレッドキング達と戦っていたギガスであり、ギガスはあのあと、追いかけて来たレッドキングにボコボコにされ、その苛立ちを朝潮達のいる洞窟の山にぶつけて八つ当たりしていたのだ。

「ゴオオオオオ!!!」

「おい!! このままじゃ洞窟が崩れるのも時間の問題だぞ!!」

レ級はみんな急いで外に出るように指示し、朝潮達はレ級に言われた通り洞窟から抜け出し、一同はギガスから離れる為に走り出す。

そんな彼女達の存在に気づいたギガスは雄叫びをあげながら朝潮達に追いかけて始め、それを見て皐月は「なんで僕達を追いかけてくるんだよー!!」と嘆くように叫ぶのだった。

「皆さん!! あの怪獣の足を撃ちましょう!! それで少しでも動きを鈍らせれば……!!」

朝潮が一同にそう指示を出し、朝潮と皐月、荒潮、菊月は主砲を構えて砲弾をギガスの足に向かって発射。

攻撃を受けたギガスはバランスを崩して膝を突き、その間に朝潮達は逃げようとするのだがギガスは口から冷凍ガスを吐いて氷の壁を彼女達の前方に作り、朝潮達は思わず

立ち止まってしまおう。

「なっ!!」

そして彼女等が立ち止まったところを狙い、ギガスはその巨大な手を振るって朝潮達に攻撃し、直撃こそ避けたものの一同は大きく吹き飛ばされます。

『わあああああ!!!!』

菊月はそのまま崖の方へと放り出されてしまい、崖の下に真つ逆さまに落ちそうになる菊月の手を、朝潮が右手で掴むことに見事成功……するのだが、彼女の右腕には先ほど吹き飛ばされた衝撃で木の枝が深々と突き刺さっており、血をにじませながらも朝潮は必死に菊月を必死に引つ張り上げようとする。

「朝潮……その腕!!」

「うっ……ぐっ、大したこと、ありません……!!」

「あるだろ!! 私のことの良い!! 手を離せ!! 足を怪我した時と良い、私は足手纏いだ!! これ以上、迷惑をかける訳には……」

菊月は今すぐに自分の手を離すように言うのだが……朝潮は首を横に振って当然拒否。

「これは命令だ!! 離せ朝潮!!」

「ぐう……! 命令を守るとしても大切なことです。でも、みんなで帰る

と約束したじゃないですか!! 私、が今果たすべき任務は……みんな、で帰ること!! だから、この手は死んでも離しはしません!!」

また朝潮達を助けに行こうと彼女達の元に皐月達は向かおうとするのだが、それを妨害するようにギガスを腕を振るって攻撃を仕掛け、皐月達はどうにかそれを飛び退いて避ける。

「くそ邪魔すんなこのゴリラ!!」

「バモオ……!!」

するとそんなギガスの行為に怒ったのか、キングバモスが激しく鳴き声をあげはじめ、キングバモスの身体が突如として巨大化。

「バモオ……!!」

大人しそうな顔立ちをしていたキングバモスは凶悪な顔つきとなり、キングバモスは鳴き声をあげながらギガスにドロップキックを喰らわせてギガスを朝潮達から引き離す。

「バモちゃん……!!」

巨大化したキングバモスにレ級は驚きの声をあげ、キングバモスは攻撃を受けて倒れ込んだギガスに馬乗りとなって顔を殴りつける。

「グルウ!!」

それに反撃しようと口から冷凍ガスを放とうとするギガスだったが、キングバモスは右手でギガスの口が開かないように押さえ込み、左腕の爪に電気エネルギーを集めてギガスの胸部を何度も何度も斬りつけまくる。

「グアアアアアアアア!!」

「ギシャアア!!? ギシャアア!!?」

なんとか逃れようとするギガスだったが、キングバモスは決して攻撃の手を緩めず、ギガスが動かなくなるまで攻撃を続け……やがてギガスが倒されるとキングバモスは立ち上がり、その牙を今度は朝潮達に向ける。

「お、おいバモちゃん……!!? なんかヤバいぞ!! 早くそいつ等助けて逃げるぞ!!」

レ級はキングバモスの様子がおかしいことにいち早く気づき、皐月、荒潮、レ級、ピグモンの3人と1匹は急いで菊月の腕を引っ張り、彼女を引き上げようとする。

「グオオオオ……!!」

しかし、キングバモスは朝潮達が菊月を引っ張り上げるのを待つてはくれない。

するとその時、空から「飛膜怪獣 パラグラー」とギガスの作った氷を砕いて「両棲怪獣 サラマドン」が出現し、2体の姿を見たピグモンは「助けて!!」とでも言うように無き声をあげ、それを聞いたパラグラーとサラマドンはキングバモスに立ち向かって

いく。

「グルアアアア!!!」

「キシヤアアア!!!」

「グアアアアア!!!」

パラグララーは空中へと跳び上がり、サラマドンは背中中の棘をキングバモスに飛ばして攻撃するが、キングバモスは両腕の爪でそれらを全て弾き飛ばし、急降下キックを繰り出して来たパラグララーも両手で受け止める。

そのままキングバモスはフルスイングしてパラグララーをサラマドンの方へと投げ飛ばし、激突した2体はその場に倒れ込んでしまう。

「グルウ!!?」

さらにキングバモスは右手を掲げて電気エネルギーを爪に集め、立ち上がったパラグララーとサラマドンにすれ違いざまに爪で切り裂き、2体は身体から火花を散らし、大ダメージを受ける。

「ギシヤアア.....!?!」

「グル.....!?!」

そしてパラグララーとサラマドンがキングバモスの相手をしている間に朝潮達は菊月を引っ張り上げること成功。

また荒潮は朝潮の腕の枝を引き抜き、持っていた布で朝潮の腕に縛るように巻き付けて出血を塞ぐ。

「それにしても、バモちゃんだっけ? どうしてあんな急に凶暴になったんだ?」

「バモちゃんにとつちや、君らはもう友達なんだよ。その友達を傷つけられて……バモちゃんは怒りで我を忘れたんだ……」

臯月の疑問に答えるようにレ級がそう語り、ピグモンはキングバモスに大人しくするように必死に何かを訴えかけるように鳴き声をあげるがキングバモスは大人しくはならず、サラマドンの顎を蹴り上げた後、素早い動きでパラグラを殴りつけていた。

「グアアアアオオオオ!!!」

さらにそこへ………キングバモス達の戦いの臭いに釣られるかのようにまた新たな怪獣達………「プラスチック怪獣 ゴキネズラ」に「爆弾怪獣 ゴーストロン」「凶暴怪獣 アーストロン」、そしてレッドキングにシルバゴンも現れ………怪獣達の大バトルが開催された。

「ヤバイ!! 早くここから離れないと!!」

朝潮達は急いでこの場から逃げようとするのだが………しかし、彼女等の前に立ち塞がるように「バリヤー怪獣 ガギ」が出現。

「げえ!? またアイツか!!」

最も、ガギはレッドキング達のように戦いの雰囲気を感じ取った訳では無く、タダ単に逃した獲物をまた捕えに來ただけである為、レッドキング達のことには無視してガギは腕の触手を朝潮達に振りかざす。

『わああああ!!?』

それに一同は目を瞑るのだが……その時、ガギの触手が突然爆発。

『えっ……!!?』

そのことに一同は驚き、当たりを見回すとそこには時雨達が主砲を構えて立っている姿が確認でき、時雨達は朝潮達の元に急いで駆けつける。

「みんな大丈夫!？」

「つてその人つて深海棲艦!? なんでここに!？」

睦月はレ級がいることに驚愕した表情を浮かべ、朝潮と菊月は苦笑しながら「大丈夫」と2人に答える。

「私はこいつに助けて貰った。信用できる」

「おっ? きくりん遂に私にデレたな」

「デレてない!! つていうかきくりんつて私か!? 変なあだ名つけるな!!」

「兎に角、みんな無事で良かった。すぐにここから離れるぞ……つて言いたいところだが……」

夜空は朝潮の手に肩を起きながら、今すぐにもこの島から離脱したいのだが……自分達に眼中にない怪獣達は兎も角、ガギは通らせまいと道を塞いでおり、さらにガギは獲物を逃がさない為に角からドーム状のバリアを張ろうとするのだが……。

その時、そこへ上空から炎が放たれ、ガギの顔を燃やし角が爆発してしまったのだ。

「ギシャアア!!?」

「クエエエエ!!」

そこに現れたのはあの時、皐月達が助けようとした「火山怪鳥 バードン」であり、バードンは空中を飛びながら体当たりでガギを突き飛ばす。

「あれってあの時のバードン!？」

「今、私達を助けてくれたの……?」

そしてバードンは地上へと降り立ち、皐月達に振り返ると以前助けて貰ったお礼か「早く行け」とでも言うように首を振る動作を見せ、皐月はそれを見て頷き「ありがとう!」と手を振ってお礼を言いながら一同はそこから走り出す。

「時雨、俺もここに残ってサイバーゴモラで足止めをする!! 先に行つていてくれ!!」

「何言ってるっばい提督さん!! 提督さんも早く……!!」

それを聞いて夕立や朝潮達は驚き、「提督も一緒に逃げよう!!」と言うのだが……時雨は「分かった」と頷き、当然そんな彼女の言葉に一同はさらに驚く。

「時雨ちゃん!? 提督さんを置いて行くなんて……」

「大丈夫、提督を信じて……。それにゴモラだつてついてる」

「でも……!」

それでも渋る一同だったが、自分達の存在に気づいたゴーストロンが時雨達に向かって来ており、夜空は「早く行け!!」と強く言い放ち、朝潮達は渋々承知してその場から走り出す。

「必ず帰ってきてくださいね!! 私達には、司令官が必要なんですから!!」

去り際に朝潮がそう言い放ち、夜空は無言でサムズアップした後、エクステバイザーを構える。

「俺が必要……ねっ。慕われてる感じがしてちよつと嬉しいね」

『みんな行つたようだな、ようやく出番だ! 行くぞ夜空!!』

「ああ、ユナイトだ!!」

夜空はエクステバイザーを取り出し、部のボタンを押し側面のパーツをX字に展開したXモードに変形させるとエクソスのスパークドールズが出現し、リードさせた後、夜空はエクステバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエクソスと、ユナイトします』

「エクソス……!!!」

『エックス、ユナイテッド!』

『イイツサアアア——ッ!!』

そして夜空の身体がX字の光へと包まれ、そこから夜空が変身した「ウルトラマンエックス」が飛び出し、エックスは時雨達を追いかけようとするゴーストロンに両腕両足を開き、X字の姿勢からエネルギーを集中した右脚で飛び蹴りを繰り返す「Xクロスキック」をゴーストロンに叩きこんで蹴り飛ばす。

『Xクロスキック!!』

「ゴモラ、お前も頼むぞ!」

また夜空はサイバーゴモラのサイバーカードを取り出し、エクステバイザーにそれを装填する。

『サイバーゴモラ、ロードします』

そしてサイバーゴモラのスパークドールズがエクステバイザーから出現し、夜空はそれを掴み取るとエクステバイザーにリードさせる。

『リアライズ!』

それにより、エックスの隣に「電腦怪獣 サイバーゴモラ」が出現し、続けてエックスの元に1つの光がやってきてそれは「ウルトラマンメビウス」となって大地へと降り立つ。

「光さん……!! どこ行ってたんですか!! 朝潮達のこと頼んだのに!!」
『ご、ごめん! ちよつと気絶して漂流してた……』

メビウスは夜空に両手を合わせて謝罪し、理由を聞いて夜空は「はっ?」となるが「まあいいか」と割り切る。

そこへキングバモスによって投げ飛ばされたパラグラーとサラマドンがエックス達の元へと転がりながら倒れ込み、エックスとメビウスは2体の元に駆け寄る。

『大丈夫か!』

エックスがパラグラーとサラマドンにそう尋ね、2体は「まだまだ!!」とでも言うように頷いて立ち上がり、またバードンもエックス達の元へと駆けつける。

『バードン! どうやら、無事出産できたらしいね。君も、力を貸してくれるの?』
メビウスと同化している光がバードンに尋ねるとバードンは頷く。

そしてエックス、メビウス、サイバーゴモラ、バードン、パラグラー、サラマドンの6体は並び立ち、レッドキング、キングバモス、シルバゴン、ゴーストロン、アースロン、ゴキネズラ、ガギ、バナラの8体へと立ち向かう。

挿入歌「ウルトラマンX」

サイバーゴモラはレッドキングへと向かって行き、腕を振るって殴りかかるがレッドキングはそれを受け止め、足を振り上げて蹴りつけ、サイバーゴモラは後退。

そこからレッドキングは口から岩石をサイバーゴモラに放つが、サイバーゴモラは両腕からバリアを発生させて防ぎ、バリアを解除すると同時に身体を回転させて尻尾をレッドキングの頭に叩きつける。

「グアアアア!!!」

「ギシャアア!!!」

そこへゴキネズラがプラスチック糸を吐き出してサイバーゴモラの身体に絡ませ、動きを封じ、その隙にゴキネズラは体当たりを繰り返そうとするが……パワーに優れるサイバーゴモラは力尽くで糸を引き千切り、突進して来たゴキネズラを腕を振るって殴り飛ばす。

「ガアアア!!!」

「キシヤアアア!!!」

次に、レッドキングは岩石を持ち上げてサイバーゴモラに投げ飛ばすがサイバーゴモラは爪を振るって岩石を破壊。

だが、そこにすかさずレッドキングのドロップキックがサイバーゴモラに炸裂し、さらにはサイバーゴモラの肩にゴキネズラが噛みつき、サイバーゴモラの動きを鈍らせる。

「グウウウ!!!」

「ギシャアアアア!!」

動きの鈍ったサイバーゴモラにレッドキングは拳を何発も叩き込むが、サイバーゴモラはなんとかゴキネズラを振り払い、レッドキングの放った拳を左腕で受け止めると右腕の爪でレッドキングを斬りつけて自分から引き離す。

「グアアアア!!」

キングバモスはエックスに電気エネルギーを集めた爪で攻撃を仕掛けるが、エックスはそれを受け止め、背後から襲いかかってきたバニラを蹴りつけて引き離す。

『シユア!!』

そのままエックスはキングバモスに膝蹴りを繰り返し、引き離すが……そこ
にバニラの放った火炎が襲いかかる。

『サイバーベムスターアーマー、アクティブ!』

しかし、それを「ベムスターアーマー」を装着したエックスはベムスターのシールド
で火炎を吸収して跳ね返す。

バニラはそれをなんとか避けるがそこにキングバモスの放ったドロップキックが炸
裂し、エックスは軽く吹き飛ばされてしまう。

さらにキングバモスはエネルギーを集めた爪ですれ違いざまにエックスを斬りつけ、
アーマーに傷が入り、エックスは膝を突く。

「グアアオオオオ!!!」

『くっ! だがまだまだ行くぞ!!』

またサラマドンはアーストロン、パラグラはゴーストロンと戦闘を繰り広げており、ゴーストロンは口から放つ炎「ファイヤーマグマ」をサラマドンに繰り出すが……サラマドンは素早く動いて炎を避けながらゴーストロンに接近。

尻尾を振るってゴーストロンの足を叩き、それによって痛がるゴーストロンにすかさず尻尾から棘を発射し、ゴーストロンの胸部に突き刺さる。

「ガアアア!!」

しかし、ゴーストロンはすぐに棘を引き抜いてサラマドンを蹴り上げ、仰向けにさせるとゴーストロンはサラマドンを踏みつける。

そのままファイヤーマグマでトドメを刺そうとするゴーストロンだが、そこへパラグラが投げ飛ばしたアーストロンが激突。

「ギンシャア!?!」

それによってゴーストロンをサラマドンから引き離し、パラグラは飛行しながらフラックアーストロンとゴーストロンにラリアットで吹き飛ばす。

「ガアアア!!?!」

さらに旋回してパラグラは起き上がったアーストロンとゴーストロンに再び攻撃

を仕掛けるが、ゴーストロンとアーストロンはそれを避けて回避し、すれ違いざまにパラグララーの尻尾をアーストロンは掴みあげ、フルスイングして投げ飛ばす。

「グラアアア!!!」

「キシヤアア!!!」

パラグララーは岩山に激突し、サラマドンの近くに倒れ込み、アーストロンとゴーストロンは同時に口から光線……。「マグマ光線」と「ファイヤーマグマ」を放つが2体はなんとか立ち上がってギリギリで攻撃を避け、サラマドンが棘を放ってアーストロンの角を破壊。

「グルウウ!!!?」

角を失ったアーストロンは急激に弱体化し、膝を突き、それをゴーストロンが心配するが……。その隙にパラグララーは一気に詰め寄り、2体を纏めて殴り飛ばす。

「グアアアア!!!」

「キシヤアア!!!」

メビウスはシルバゴンと取っ組み合いをしており、シルバゴンは強烈な頭突きをメビウスに喰らわせ、メビウスは苦痛の声をあげてシルバゴンから離れて頭を抑える。

『ウアツ……!!?』

さらにそこからシルバゴンの強烈な拳がメビウスの腹部に叩き込まれようとする

が………メビウスはそれを受け止め、逆にシルバゴンの顔面を殴りつける。

しかし、シルバゴンは全く意に返さずメビウスの腕を掴みあげ、腕を「ブンツ！」と振り上げて投げ飛ばし、メビウスは地面に激突。

『セアツ………!?!』

なんとか起き上がり、シルバゴンへと振り返って駆け出すメビウス。

それをシルバゴンは返り討ちにしようとする拳を振るうのだが、メビウスは「バーニングブレイブ」へと強化変身しながら拳を受け止め、先ほどよりも強力なパンチをメビウスはシルバゴンの顔面に炸裂させ、シルバゴンは顔を押しさえながら大きく後退する。

「ギシャアアアア!!!」

『セアツ!!』

メビウスは左の拳から電撃を発生させ、至近距離でパンチを放つ「ライトニングカウンター・ゼロ」をシルバゴンに向かって駆け出し、炸裂させ………命中後に解き放ったエネルギーで大爆発が起きシルバゴンは大きく吹き飛ばされるが………シルバゴンはフラつきながらもどうにか立ち上がる。

『これを耐えるのか………』

「グアアアアア!!!」

さらに、シルバゴンは大ダメージを受けたにも関わらずすぐにメビウスに立ち向かっ

て行き、メビウスとシルバゴンは再び取っ組み合いとなる。

またバードンはガギと戦闘を行っており、バードンは翼を振るってガギを何度も殴りつけ、ガギはなんとか反撃しようとするが、バードンの攻撃の手が緩むことはなく……。

ならばと思いガギは後ろ歩きでバードンから逃げるように離れて距離をあけると腕の残った触手の一本をバードンの身体に巻いて拘束するのだが……バードンは口から炎を吐いてガギの触手を焼き払い、拘束も即座に解ける。

「グルウウ……!!」

「クエエエエ!!」

ガギは千切れた触手をしまい、バードンに向かって駆け出し、巨大な爪を振るうがバードンはそれを翼を翻すようにして受け流し、逆にバードンがガギを殴りつける。

そこからさらにバードンは今度は逃がさないように両腕を素早く振るってガギを殴りまくり、やがてガギは気を失い、その場に倒れ込むのだった。

「グアア……アア……」

そしてユナイトしている夜空は目の前にエクシードXのスパークドールズを出現させるとそれを掴み取ってエクステバイザーにリードさせると「エクストラッガー」が出現し、夜空はそれを取る。

「グアアアア!!!」

しかし、そこへキングバモスがエックスに襲いかかるが……エックスはそれをバツクステップのようにしてキングバモスの攻撃を躲す。

「エックス!! 確かこの怪獣は……本来大人しい怪獣の筈だ!! だから!!」
『分かった!!』

夜空の言葉にエックスは頷き、エックスは右手から怪獣の心を鎮静化させる浄化光線「ピュリファイウエーブ」をキングバモスに向かって放ち……。それを受けたキングバモスは大人しくなり、やがて元の小さな姿へと戻るのだった。

「ば、バモオ……?」

*

その後は夜空と光でスパークドールズの怪獣達を回収し、リョーガとグルマンから島

皐月はそう考え、ピグモンとキングバモスがこの島に残る理由を理解したのだった。

「分かったよ、でも、きつとまた会いに行くからね!!」

「色々大変だったけど、楽しかったわ」

「世話になった」

「ありがとう、ピグモン達!!」

「またな〜!!」

皐月、荒潮、菊月、朝潮、レ級がそれぞれピグモン達に別れを告げた後、艦装が壊れてしまっている5人はモーターボートに夜空と時雨と一緒に乗り込み、一同は島から脱出するのだった。

「……………あれ? 時雨、お前艦装壊れてないのになんでボートの方乗ってるんだ?」

「んっ? 提督の隣にいたいからじゃダメかな?」

時雨が首を傾げながらそんなことを言い、それを受けて夜空はなんだか気恥ずかしくなつてそつぽを向く。

「ねえ、提督? 大丈夫だった?」

「……………何がだよ?」

「あの島はまさに怪獣島、怪獣がどれだけ危険な存在か……………改めて分かったんじゃないかなつて……………」

それでも、提督は自分の夢に……………」

「自信がなくなったりしてないかって？　してないさ、むしろ俄然やる気が出てきたよ。確かにあの島は凶暴な怪獣が多かった……。でも、それだけじゃない奴等がいたのも確かだからな。これくらいじゃ俺はへこたれない」

夜空は時雨にそう言い放つて笑いながら彼女の頭を撫で、時雨は自然と笑みを浮かべるのだった。

「ところで私は元いたところまで送って貰えるんですかね？」

「心配しなくても、ちゃんと送って行く。助けてくれたお礼だ」

「ありがときくりん〜♪」

「きくりん言うな!!　あと抱きつくな!!」

また菊月とレ級はそんな会話を行っていたのだった。

数日後。

菊月や朝潮が2人で話ながら鎮守府の外を歩いていると……。

「みんなー!!　遊びに来たよー!!」

レ級が鎮守府に「遊びに来た」と言いながら訪れ、菊月や朝潮の目の前に現れる。

そんな彼女に菊月は頭を抱えて「はあ」と溜め息を吐き出す。

「そんな気軽に来られても困るんだがな。自分がどういう立場か分かってるのか？

下手したら事情を何も知らない奴に攻撃されるかもしれないんだぞ？」

「分かっているよ。 これでも警戒しながらここに来たし！ それに今日はリョーガって人からお呼ばれして来たんだよ？」

レ級のその言葉を受け、「リョーガさんから？」と首を傾げる朝潮と菊月。

「なんでも私がいつでも気軽にここに来れるように私の正体を知ってる人以外は私を深海棲艦だと認識できない『認識阻害システム』とかいうのくれるらしいんだよね。 それでそれを受け取る代わりに深海棲艦のデータを取らせて欲しいって言われてね……」

レ級からの説明を受け、朝潮はリョーガが「深海棲艦のサイバーカードは少し作りづらい」みたいな話を聞いたので成程と彼女は納得。

「つまり、そのシステムを使えばレ級さんは気軽にこれからはこっちに来れるってことですわね！」

「そういうことだとね。 悪用されないように私にしか使えないようにしてくれてるみたいだし、なんか良いね。 自分専用って感じがして」

そしてレ級は「それじゃまた！」と言ってリョーガのいるところへと向かい、歩き去って行くのだった。

「また賑やかになりそうですね菊月さん!!」

「……でもなんだか私の苦労が増えた気がするんだが……」 胃薬買った

「の方が良いだろうか？」

第18話 『宇宙からの監視者』

本日、とある山奥にて。

夜空達の所属する鎮守府では今日、これまでのサイバーゴモラのデータを元に、遂にゴモラ実体化の本格的な実験が行われようとしているところだった。

周りにはゴモラが実体化した時、ダークサンダーエナジーが降り注いでも大丈夫なようにバリア装置を置き、さらにはタカトが搭乗したスカイマスケットティが上空で待機。

そして時雨、睦月、満潮、朝潮、電、暁の6名が艀装を装着した状態でこの実験に立ち会っているところだった。

「しかし、遂に本格的なスパークドールズの実体化実験か」

『我々の鎮守府の1番の仕事はこういったものだったことはタカトもよく知っている筈だろう？ 今更怖じ気づいたかい？ 君も提督の夢を応援していたのに』

スカイマスケットティのコックピットの中でボヤクタカトに対し、通信機からリョーガのそんな言葉が聞こえ、それにタカトは「それでもやはり思うところはあるさ」と答える。

「怪獣と共存することは望ましいことだ。

だがそれでも不安はあるだろう？

実際、

これは危険な実験だ」

『危険を伴わない進化はないぞ？ 理想があるなら先ず始めの一步を踏み出さないと、その理想は一生来ない。 違うかね？』

さらにそこへグルマンの言葉を聞き、口ごもるタカト。

グルマンの言う通り、何もしなければ始まらないのだ。

「タカトさんの気持ちも分かります。 俺は怪獣との共存を実現させたい、その理想の為にみんなを巻き込んだ。 本当にこんな危険なことに付き合わせて、申し訳ないと思います」

地上にいる夜空はタカトやグルマン達の話聞いて申し訳無さそうな顔を浮かべ、目の前にいる時雨達に艦娘達にも「すまない」と頭を下げて謝罪した。

だが、そんな夜空に時雨達はキョトンとした顔を浮かべて互いに顔を見合わせ、一同はそんな夜空に苦笑した。

「司令官さん、顔をあげて欲しいのです！」

そこで電が夜空に顔をあげるように言い、彼女に言われた通り夜空が顔をあげるとそこには呆れた表情を浮かべた時雨達の姿があり、時雨はポンつと彼の肩に手を置く。

「いつも言ってるじゃないか、僕達みんな、任務とか部下とか関係なく提督の理想に共感したから君の傍にいるんだって」

「私も争いは苦手なのです。だから司令官さんの夢はとても素敵なものだと思おうのです。きつと、いえ絶対他のみんなも時雨さんと同じように、そんな気持ちなんだと思うのです」

微笑みを浮かべながら時雨と電が夜空にそう語りかけ、夜空が他のメンバーに顔を向けると「その通り」と言いたげな様子の睦月、暁、雷、満潮。

「むしろ今更そんな風に謝つても遅いのよ、うざつたい!! ここまで来たんだから最後まで付き合わせなさい!!」

その直後に満潮はムスツとした表情になって一差し指を夜空の胸に突きつけ、それに夜空は少し困惑しながらも苦笑いで「ああ、分かったよ」と頷くのだった。

「じゃあ、お言葉に甘えて……みんな最後まで付き合わせてやる!!」
「うん、最後まで付き合うよ、提督」

*

そして迎えた実験本番。

『我々のラボにできることは全てやった！ 地上にできる最大の配慮もなされている』
「ダークサンダーエナジーを防ぐ為のエナジーシールドの準備も全て完了している。
空や地表もカバーするからゴモラも逃げたりすることはない」

グルマンとリョーガからの説明を受け、夜空は頷き、一同はゴモラ実体化実験を開始する。

ゴモラが実体化することのできる時間はグルマン曰く3分らしく、短い時間ではあるが、何が起こるかは分からない。

「・・・・・・・・・・」

その為、司令官である夜空はいざという時にはゴモラに対して非情な決断をしなければならぬ。

もし、ゴモラが暴れるようなことがあれば・・・・・・・・ゴモラは駆除対象として退治する指令を自分がいかに伝えなければならぬ。

そんな夜空の不安そうな表情に気づいた時雨はそつと夜空の背中に手を添える。

「提督・・・・・・・・・・」

「時雨・・・・・・・・・・」

「大丈夫、ゴモラは暴れたりしない。ゴモラは提督のこと、大好きだから」

笑みを浮かべてそう伝える時雨に夜空も笑みを浮かべ、夜空はゴモラのスパークドールズを取り出す。

「お前もいつまでもこのままは嫌だもんな、ゴモラ。俺はお前を信じるぞ」

「僕も信じてる。ねっ？ ゴモラ？」

夜空と時雨はそうゴモラに語りかけ、夜空はX字に描かれた装置の中央にカプセルを設置。

夜空はそこから離れるとグルマンとリョーガはゴモラを実体化させる為の「リアライズビーム」の照射スイッチを押し、それぞれの場所に設置された機械からビームがゴモラに向かって放たれる。

すると徐々にゴモラのSDが巨大化していく。

「うむ、今のところ順調だ。このまま行けば間違いなくゴモラは……」

「ゴモラ……!!」

夜空と時雨はゴモラの名を呟き、あとゴモラの完全な実体化が完了するまであと5秒が迫る。

「カウントダウン、5、4、3、2、1……0!!」

リョーガのカウントダウンが終わると同時にゴモラが完全な実体化を終え、「古代怪獣 ゴモラ」はそのことを喜ぶかのように雄叫びをあげるのだった。

「ギシャアアアア!!!」

『いよーし!! 完全な実体化に成功したぞ!!』

それに対し、夜空は嬉しそうに笑って彼はすぐさまゴモラの元へと駆け寄り、それに慌ててすぐさま護衛として時雨と暁、電が彼を追いかける。

「ちよつと司令官!! いきなり走り出さないでよ!!」

「まあ、気持ちちは分かるけどね。誰よりもこの日を楽しみにしてたんだから」

ゴモラが実体化して、夜空はきつとも立つてもいられなかつたんだらうと時雨は苦笑し、そして夜空がゴモラの元に駆け寄ると夜空はゴモラの名前を叫ぶ。

「ゴモラ!! 俺だよ、分かるか?」

「グルルル……」

ゴモラは夜空を見下ろすと彼の言葉に反応して頷き、追いついて来た時雨達はゴモラが夜空の言葉を理解してるのを見て少し驚いた様子を見せる。

「ゴモラさん、司令官さんの言葉が分かるのです?」

「……みただね」

「ゴモラ!! 取りあえず、座つてごらん?」

夜空の言葉を聞き、ゴモラは言われた通りその場に座り込む。

「クウウウン……!」

座り込んだゴモラは犬のような甘えた声を出し、嬉しそうに尻尾を振る。

その光景を見て満潮は「子犬みたい………」と呟き、またそんな仕草をするゴモラに女性陣からは「可愛い!!」と感想を述べられる。

「ゴモラってこんな可愛かったの………」

「カッコイイ怪物だとは思ってましたけど可愛さもあるのですね!」

時雨や電もそんなゴモラにどこことなく和み、暁も「これなら全然危険ないわね?」と警戒を解く。

『つて提督!! 和んでいる場合ではないぞ!! 意思疎通の実験を続けるんだ!!』

グルマンにそう言われ、頷く夜空。

「ゴモラ!! 手をあげてごらん? こうやって!!」

夜空は両手を広げてゴモラに見本を見せ、ゴモラは夜空に言われた通り、自分も両手を広げる。

それを見て他のメンバーは完全にゴモラと夜空の気持ち繋がっていることを理解し、それを最初こそこの実験に不安を感じていたタカトも小声で「やったな」と呟くのがあった。

そしてゴモラは夜空に顔を近づけ、夜空はゴモラの鼻の先の角を優しく撫でる。

「グオオオ………」

続けて時雨もまたゴモラの角を撫で、彼女はゴモラに微笑みながらサムズアップし、それにゴモラもまたサムズアップを返す。

その光景に夜空と時雨は互いに顔を見合わせ、微笑むのだった。それと時を同じくして、その光景を宇宙から眺めている者がいた。

大型類人猿のような外見をした「人工生命M1号」がただ黙ってジツと……その光景を。

*

実験場の山……。

僅かな時間でゴモラと楽しげに接する夜空と時雨。

そんな2人と一匹の短い時間を、プチ壊すかのようにな……周りに設置された警報が鳴り響く。

「えっ!? なに!? どうしたの!? まさか……!!」

その警報に一同は驚き、それに満潮が嫌な予感を感じ、グルマンに何事かと尋ねると……。

『実験場上空に、ダークサンダーエナジーが出現するぞ!!?』

それはやはり、彼女の予想通り……。ダークサンダーエナジーだったのだ。

ダークサンダーエナジーはゴモラ目がけて降り注ごうとするのだが、エナジーシールドによってダークサンダーエナジーはゴモラに直撃せずに阻まれる。

それを見てほつと胸を撫で下ろす一同。

「凄いわね、このシールド……。」

暁がシールドの強度に驚いているとそれを聞いて開発者であるリョーガとグルマンはどこか誇らしげ。

特にリョーガは凄いドヤ顔してくるので少しウザいと思う暁だった。

だが、ダークサンダーエナジーは一度阻まれただけでは収まらず、次々と第2、第3、第4のダークサンダーエナジーが降り注ぎ、それを見て一同は再び不安にかられる。

「だ、大丈夫よね? リョーガさんとグルマン博士の共同設計なんだし!!」

「いや……。だが、こんなに早く連続で降り注ぐなんて予想外だ!! どこまで耐えられるか……。」

暁はリョーガとグルマンが設計したのならきつと大丈夫だろうと考えるが、流石に今

この状況はリョーガやグルマンにとっても完全に予想外だったらしく、リョーガやグルマンも少し不安げな表情を浮かべていた。

それを見て暁は青ざめ、他のメンバーも次第に顔色が悪くなっていく。

「残り16秒!! 頼む、耐えてくれ!!」

リョーガは表示された残り時間を見てエナジーシールドが耐えてくれるのを願うが……その願いも空しく、とうとうダークサンダーエナジーの威力に耐えきれず装置は破壊。

ダークサンダーエナジーはそのままシールドを突き破ってあと5秒というところでゴモラに降り注ぎ、一同はその際に発生した風圧に軽く吹き飛ばされてしまう。

「っ、ゴモラ!!」

そして、ダークサンダーエナジーを浴びたゴモラは黒いオーラを纏い、それが弾け飛ぶと……ゴモラは禍々しい姿に皮膚が鎧のようになった「EXゴモラ」へと変わってしまった。

「……っ、クソ!! ゴモラを実験場から出す訳にはいかない!! 艦娘各自、ゴモラの足止めをするんだ!!」

『了解!!』

「グルマン博士、リョーガさんはゴモラを出さないようエナジーシールドの復旧作業を

!!

『分かった!!』

夜空の指示を受け、時雨、睦月、満潮、朝潮、電、暁は主砲を構えて一斉に砲弾を実験場から出ようとするEXゴモラの足元に向かって発射。

待機していたスカイマスケットティも光弾をEXゴモラの周囲に撃ち込んで動きを封じようとする。

しかし、EXゴモラは物ともせず、尻尾を振るって時雨達に攻撃。

「散開!!」

時雨の指示で全員散開してEXゴモラの攻撃を避けるのだが、EXゴモラは即座に全身から放つ光線「EX超振動波」を時雨に向かって発射。

「時雨さん!!」

『サイバーベムスター、ロードします』

しかし、それをすぐさま電と暁が時雨の元に駆けつけ、電がサイバーベムスターカードをジオデバイザーに装填し、巨大なベムスターのシールドを発生させて攻撃を吸収させる。

だが、ダークサンダーエナジーの力によって強化された攻撃はベムスターのバリアも砕くほど高く、シールドは徐々にヒビ割れていく。

『サイバーキングジョー、ロードします』

そこで暁がバリアが砕かれる前にサイバーキングジョーのカードをジオデバイザーに装填し、キングジョーの力を宿した強力な光線「キングジョーデストロイ砲」を主砲からEXゴモラに向かって発射する。

「キングジョーデストロイ砲!!」

「グルアアアア!!」

暁の攻撃の直撃を受け、EXゴモラの攻撃が止まると同時にEXゴモラは後退り、躓いて後ろから倒れ込む。

「うっ、ごめんなさい……ゴモラさん……」

そんなEXゴモラに電は申し訳なさそうに謝るが、そんな彼女の肩に時雨がそつと手を乗せる。

「きつとゴモラも許してくれるよ。それに、電と暁のおかげで助かった」

「時雨さん……」

「あつ、ゴモラが逃げる!!」

するとEXゴモラは地中を掘って逃走しようとし、それを見た夜空はいても立つてもいられず、EXゴモラに向かって駆け出す。

「提督!! どこに……!!」

リョーガが呼び止める声も聞かず、夜空は巻き起こった煙の中へと姿を消し、そこでエクステバイザーを取り出し、奈々に連絡を取る。

「奈々、聞こえるか？」

『ええ、こちらでも状況は把握しています』

「俺とエックスでどうにかゴモラを止める!!」だが、もしもの時は「……………」

夜空がそこまで言うとな奈々は通信越しに「皆まで言わなくて良いです」と返す。

『ですが、本当に良いんですか……………?』

「……………頼む」

『……………分かりました』

唇を噛み締めつつ、夜空は奈々との通信を終えてエクステバイザーを構える。

「エックス、ユナイトだ!!」

『よし、最悪の事態だけは防ぐぞ!! 行くぞ夜空!!』

エクステバイザーの上部のボタンを押し側面のパーツをX字に展開したXモードに変形させるとエックスのスパークドールズが出現、それをリードさせた後、夜空はエックスデバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

「エックス……………!!!」

『エックス、ユナイテッド!』

『イイツサアアア——ツ!!』

「ウルトラマンエックス」へと変身した夜空は地中に消えたEXゴモラを追いかける。

*

やがてEXゴモラは市街地に出現し、それと同時にエックスもEXゴモラの目の前に現れる。

「グルアアアアア!!!」

『っ……!!』

EXゴモラは戸惑いを見せるエックスに容赦なく突進を繰り返し、エックスは両手でどうにか突進を受け止める。

『グウウ……!!』

「ゴモラ落ちてけ!! 落ちて着くんのだ!!」

EXゴモラは通常時よりも巨大化した右手を振るってエックスの脇腹を叩きつけて振り払い、EX超振動波をエックスに向かって放つ。

『エレキングアーマー、アクティブ!』

「エレキング電撃波!!」

しかし、即座にエックスはエレキングアーマーを纏い、右手に装着された銃から放つ電撃光線「エレキング電撃波」を放ってEX超振動波を相殺。

「エックス!! 電撃でゴモラを痺れさせて一度動きを封じさせよう!!」

『よし!!』

「ゴモラ、ちよつと痛いかもだけど、我慢してくれよ!!」

エックスはもう一度エレキングの電撃をEXゴモラに放とうと銃を構えるのだが、EXゴモラの伸ばした尻尾が右腕に絡みつき、EXゴモラは尻尾を大きく振るってエックスを吹き飛ばす。

「ギシヤアアアアアア!!」

『デユアアアア!!』

さらに倒れ込んだエックスに向かってEX超振動波をEXゴモラは放ち、直撃を受けたエックスは苦痛の声をあげながら身体中から火花を散らして大ダメージを受け、エレキングアーマーも強制的に解除されてしまう。

『グウウウウウ……!!?』

また一方、奈々は暁と電、睦月に市民の避難誘導の指示、スカイマスケツティと時雨、満潮、朝潮にエックスの援護を指示し、スカイマスケツティはEXゴモラに光弾を撃ち込んでエックスを援護する。

「グルアアアア!!!」

「提督め、一体どこに行つたんだ……。ゴモラと戦うのが嫌で逃げた……。なんてことはあの提督に限つてないだろうが……」

タカトはエックスを援護しつつ、どこかに行つた夜空にボソつと愚痴を呟いていたが、今は兎に角EXゴモラの対処が先だとすぐに頭の中の考えを切り替え、戦闘に集中する。

『夜空、ゴモラを説得するのは無理だ!!』

「クソ!! 仕方がない、ザナディウム光線を使おう……」

夜空はやむを得なくゴモラに対し、ザナディウム光線を使うしかないと判断し、それにエックスも頷くのだが……。その時……。

『それがお前の望む共存か?』

「……えっ?」

不意に誰かの声が聞こえ……。EXゴモラがエックスに殴りかかろうとしたそ

の瞬間……。

突如としてエックスがその場から消え去り、それに時雨達は驚きの表情を浮かべる。

(つ……提督、エックス……!?)

「エックスが消えた!?!」

*

気がつけば、エックスはいつの間にか別の場所に移させられており、彼と、彼とユナイトしている夜空は今、薄暗い空間に立つテーブルの上にある三角フラスコの中に閉じ込められていたのだ。

『なんだ? こゝは……?』

するとエックスは背後に気配を感じ、「誰だ!?!」と言いながら後ろを振り返るとそこには宇宙からスパークドールズの実験を眺めていたM1号の姿があり、見たところ、どうやらエックスはM1号の力によって縮小されているようだった。

『私はM1号……。かつて科学の力によって作られ、宇宙に捨てられた人工生

命………』

「人工生命………?」

『夜空、今はこいつを相手にしている暇はない!! 先ずはフラスコを破壊するぞ!!』

エックスの言葉に夜空は頷き、火力の高いサイバーゼットンカードをエクステイザーに装填するのだが……デバイザーは何も反応せず、それに夜空とエックスは困惑する。

「反応しない!?!」

『どういうことだ!!?!』

『ここではそのようなものは通用しない』

どうやらこのM1号が作ったと思われる空間ではサイバーカードの力は使えないらしく、ならばと思いエックスはフラスコを破壊しようと攻撃するのだが……壊れる気配はない。

『ゴモラはやつと自分の身体を取り戻したのだ。なのに、なぜ自由を奪う?』

M1号はそう言いながら空中に浮かび上がると目の前に巨大なモニターを映し出し、そこではEXゴモラが暴れている光景が映し出されていた。

*

その頃、地上では……。

「スカイマスケットティと艦娘の皆さんはゴモラを威嚇攻撃!! これ以上ゴモラが進行しないようにしてください!!」

『了解!!』

奈々の指示を受け、市民の避難も完了した時雨達と応援に駆けつけた艦娘達、スカイマスケットティはEXゴモラに威嚇攻撃を繰り返す、なんとかEXゴモラの足を止めようとする。

「グルアアアアア!!!」

しかし、EXゴモラは時雨達の攻撃など意に返さず、進行を続ける。

*

場所は戻り、夜空は暴れるEXゴモラに必死に落ち着くように呼びかけていた。

「ゴモラ!! 落ち着くんだ!! 頼む、落ち着いてくれ!! おい!! 俺達を早く地上に戻してくれ!!」

夜空はそう言つてM1号に懇願するが……。

『戻つてどうする? ゴモラを退治するのか?』

「違う、守るんだ!!」

『フフ、守る?』

M1号は夜空の発言に呆れたような笑みを浮かべる。

『ゴモラは怪獣だぞ? こんな姿を見ても、まだ本気で共存できると思つているのか?』
「これは本当のゴモラじゃない!! ゴモラはダークサンダーエナジーで誰かに操られて……!!」

そこで夜空はハツとなり、もしかして今こんなことをしているM1号こそが、ダークサンダーエナジーを使い怪獣達を操っている黒幕なのでは無いかと考えた。

「もしかして、お前がダークサンダーエナジーで……!?!」

『フン、人間らしい考え方だな。自分達に都合が悪いことが起こると誰かが悪意を持つてやっていると考える。自分達が何時も、そうしているから……。私はそのようなことはしない!』

M1号はそう言つて夜空の考えを首を横に振つて否定した。

*

同じ頃、EXゴモラはEX超振動波を放つて街を破壊し、火の海にして未だにEXゴモラは止まる気配を見せなかった。

「いい加減止まりなさいよ!!」

『サイバーバキシム、ロードします』

満潮はジオデバイザーにサイバーカードを装填させ、「二角超獣 バキシム」の力を宿し、主砲を構えて砲弾を放つとそれは巨大なミサイルへと形を変え、EXゴモラの足に直撃。

「グルアアアアア!!!」

それを受けて膝を突くEXゴモラだが、EXゴモラはすぐに立ち上がつて尻尾を満潮に向かつて振るう。

「くっ!？」

なんとか後方に素早く下がって回避する満潮。

そのままEXゴモラは満潮に背を向けてどこかへと歩き出す。

「あの先は確か……」

また鎮守府に設置されたモニターからこの様子を見ていた奈々はこのままEXゴモラが止まらず、進めば数分もしない内にまだ避難が完了していないエリアに到達することになり、放っておけば甚大な被害が出ることを予想。

その為、彼女は顔を俯かせて少しの迷いが生じるが……。

奈々はすぐに決断し、顔をあげて唇を噛み締める。

「っ……ごめんなさい。ゴモラ、提督。みんなに命じます!! これ以上のゴモラの進行は許してはいけません!! ゴモラの……っ!! ゴモラの……、駆除を命じます!!」

奈々は艦娘達にそう指示を伝え、それを受けて多数の者が動揺し迷いを見せる。

「っ……」

その命令を受け、時雨は絶句したかのような顔を浮かべ、思わず思考が停止してしまい、その場に立ち尽くしてしまう。

また別の場所にいる睦月と朝潮は……。

「そんな……ゴモラは、サイバーゴモラになってエックスと同じように何回も睦月達のことを助けてくれたのに……」

「つ……でも、命令に従わない訳にはいきません……!! 人命も、かかってます……!!」

動揺する睦月に対し、一緒にいた朝潮は苦い顔を浮かべながらもやむを得ず主砲を構えてEXゴモラに対して攻撃を仕掛ける。

「朝潮ちゃん……」

それを見た睦月も悲しげな目を浮かべつつ、主砲を構えて朝潮と共に主砲から砲弾を発射し、EXゴモラを攻撃する。

*

『これが人間だ。都合が悪くなれば平気で排除する!』

M1号は艦娘達から攻撃を受けるゴモラの姿をエックスと夜空に見せつけ、M1号はエックスの方へと振り返るとハッキリと断言する。

『思い知れ!! 他者と共存できぬものは滅び行くだけだ!!』

*

またスカイマスケットティに乗るタカトもEXゴモラを倒す為にジオデバイザーに「サイバーテレスドン」のサイバーカードを装填し、朝潮は「サイバーブラックキング」の力を使ったエネルギー光線を満潮の放つサイバーバキシムのエネルギー光線と共に発射する。

『サイバーテレスドン、ロードします』

『サイバーブラックキング、ロードします』

『サイバーバキシム、ロードします』

「許せ………ゴモラ!!」

スカイマスケットティ、朝潮、満潮から放たれる光線の直撃をEXゴモラは受け、EXゴモラは身体から火花をあげて地面に倒れ込む。

「っ………!! ゴモラ!!」

「時雨!! 副司令、時雨がゴモラの前に………!?!」

しかし、ゴモラが倒れるのを見た瞬間、時雨はそこでようやくやく我に返り、彼女はゴモラに向かって駈け出したのだ。

「時雨……!!」

その光景は夜空達からも見えており、時雨はゴモラの目の前にまで飛び出し、落ち着くようにEXゴモラに言い聞かせる。

「ゴモラ落ち着いて!! 僕だ、時雨だ!! 分かるだろ!？」

「グルアアアア!!」

しかし、EXゴモラはまるで時雨の言葉を聞かず、立ち上がるとそのまま腕を振り下ろして彼女に攻撃を仕掛けて来たのだ。

「わああ!!?」

軽く吹き飛ばされ倒れ込む時雨だが、彼女はすぐに立ち上がり……EXゴモラの前に立ち塞がって両手を広げる。

「ゴモラ! 僕達は君の敵じゃない!! お願いだよ、僕の声聞いて!!」

目尻に涙を浮かべ、悲痛な声をあげる時雨。

『なんだこの茶番は?』

M1号はその光景を見て鼻で笑うが、夜空も時雨と同じようにゴモラに必死に呼びかけていた。

「ゴモラ!! 時雨の声を聞いてくれ!! 分かるだろ!! 彼女は時雨だ!! 頼む……!!」

だが、2人のその叫びは届かずEXゴモラは今度は足を振り上げて時雨を踏み潰そうとする。

なんとかギリギリ回避する時雨だが、風圧によって軽く吹き飛ばされ彼女は地面を転がる。

「うつ……く。ゴモラ、僕は……君を殺したくない!! 覚えてるだろ? 一緒に、夜空とエックスを助けに行った時のこと!! それだけじゃない、君は他にも色々なことで僕達を助けてくれたよね? それなのに……僕らはまだ何も君にお返し出来てない!!」

それから時雨は尚も叫び続ける。

「なのに……なのに……!! あんな訳分かんない黒い稲妻のせい……こんなことになるなんて絶対に嫌だ!! ゴモラだって、僕と同じ気持ちだろう!!」

泣きながら、彼女は必死にEXゴモラへと心からの言葉を叫ぶが……EXゴモラはEX超振動波を放つ体勢に入っており、それを見て彼女はギョツと目を瞑る。

だが、その時……?

「グルアアアアアアア!!」

「えっ!？」

突然、EXゴモラが攻撃を中断し……頭を抑えて苦しみだし、時雨やそれをモニターから見ている夜空は何が起こったのか訳が分からず困惑していた。

すると、時雨の目の前に、サイバゴモラのカードがいきなり飛び出した。

「えっ……!？」

思わずそれを手に取る時雨。

彼女はそのカードを手に取った瞬間、カードを通してゴモラの気持ちを時雨は感じ取った。

「そっか……。君も、自分を止めたいんだね」

時雨はジオバイザーを取り出すとバイザーにサイバゴモラのカードを装填させる。

『サイバゴモラ、ロードします』

するとジオバイザーからサイバゴモラのスパークドールズが出現し、彼女はそれを手に取ってバイザーを使いリードさせる。

『リアライズ!!』

そして時雨によって「電腦怪獣 サイバゴモラ」が実体化して出現し、サイバゴモラは雄叫びをあげて自分自身を止める為……EXゴモラへと駆け出していく。

「グアアアアアア!!」

『あれは……まさか……!! なんとという無茶なことを!!』

その光景を研究に使われた場所からモニターを通して見ていたグルマンとリョーガは唖然とした表情を浮かべていた。

「サイバーゴモラはゴモラの分身……つまり、理論上ゴモラが実体化している状態でもサイバーゴモラを呼び出すことは出来るが……」

『しかし、そんな状態でサイバーゴモラを召喚すれば呼び出した者の肉体へのダメージも大きい筈……!! ましてや本体がダークサンダーエナジーを浴びた状態となれば……!!』

リョーガとグルマンの言う通り、サイバーゴモラを呼び出した時雨はその瞬間から急激な疲労感を感じており、著しく彼女は体力を消耗していた。

「はあ、はあ……。苦しい……。でも、ゴモラはもつと苦しいんだよね……。止めよう、君自身を!!」

挿入歌「Unite　く君とつながるために」

「時雨の奴、なんていう無茶してくれてんだ……!!」

それを見ていた夜空は拳を強く握りしめる。

サイバーゴモラはEXゴモラにタックルを喰らわせ、フラつくが即座に反撃するよう

に尻尾をサイバーゴモラに繰り出すが……サイバーゴモラは尻尾を右腕にワザと絡ませて腕を引っ張ってフルスイングし、EXゴモラを投げ飛ばす。

「グルアアアアアア!!!」

「ガアアアア!!!」

倒れ込むEXゴモラ、サイバーゴモラはすぐさまEXゴモラの動きを封じようと駆け

出すのだが……。

「うがあああ!!!」

時雨の身体に火花が走り、それと連動するようにサイバーゴモラも身体から火花を散らして膝を突く。

「グルアアアアア!!!」

その隙を突いてEXゴモラは身体を丸めて高速回転でサイバーゴモラに体当たりを繰り出し、サイバーゴモラを突き飛ばす。

「くあああ!!!」

それを受けて時雨も吹き飛ばされ、EXゴモラはEX超振動波を放とうとするが……。

「グアアアアア!!!」

サイバーゴモラが吠えるとEXゴモラは突然頭を抑えて苦しみだし、その間に立ち上

がったサイバーゴモラと時雨。

そのままサイバーゴモラはドロップキックをEXゴモラに喰らわせる。

「今、サイバーゴモラが吠えたらあっちのゴモラ苦しまなかった？」

「サイバーゴモラはゴモラの残っている理性……。それが呼びかけた為に、一瞬動きが鈍ったのかもしれない」

満潮が呟いた疑問に、ヴェールヌイがそう答える。

「うっぐ……!! なんとかダークサンダーエナジーをゴモラから切り離さない
と……!!」

頭を抑えながら、時雨はなんとかダークサンダーエナジーを切り離せないかと彼女は考える。

「グオオオオ!!」

「えっ……!!? このままサイバー超振動波で自分をスパークドールズに戻す？
ダメだ!! それじゃ君がずっと苦しんだまま……!!」

サイバーゴモラをリアライズしたことによってゴモラと繋がった時雨はゴモラの考
えていることが分かり、サイバーゴモラはEXゴモラの状態のままゴモラをスパーク
ドールズに戻そうと考えるのだが……当然、それではダメだと時雨は訴える。

「グルルル……!!」

「僕は諦めない!! 絶対に君を助け……あがつ!!?」

その時、時雨は頭痛と肉体への痛みが同時に襲いかかり、彼女は両膝を突く。

それを見てEXゴモラの攻撃を受けながらも時雨の身を案じたサイバーゴモラは先ほどの自分の提案を実行すべきだと訴えるが……彼女は絶対にそれを許しはしなかった。

「うう……諦めない、絶対に……諦めて……たまるかああああああ!!!」

身体への痛みを必死に堪え、立ち上がって叫ぶ時雨。

それを受け、サイバーゴモラはEXゴモラを押し返し尻尾を振るって攻撃し、EXゴモラを引き離す。

そして……そんな互いに互いを思いやる2人の心が……新たな力を呼び起こした。

『駆逐艦 時雨、サイバーゴモラ、ロードします』

ジオデバイザーからそんな音声か鳴り響くとなんとサイバーゴモラの身体に主砲が肩についていること以外エックスと全く同じ時雨アーマーが装着されたのだ。

『サイバーゴモラ・時雨アーマー、ユナイテッド!!』

「電脳怪獣 サイバーゴモラ・時雨アーマー……それが、サイバーゴモラの新

「グルルル……!!?」

それはゴモラと時雨の心が深く繋がったことにより、ダークサンダーエナジーの力が弱まったからであり、その隙を見逃さずサイバーゴモラは両手にエネルギーを溜めてEXゴモラに接近し、ゼロ距離で放つ光線「バーストサイバー超振動波」を炸裂させる。

「バーストサイバー超振動波!!」

「グルアアアアアア!!」

すると、サイバーゴモラの攻撃を受けたEXゴモラは……自身身体からダークサンダーエナジーが切り離され、元のゴモラの姿へと戻る。

「よか……った……」

サイバーゴモラのこの形態は、通常時では出来なかつたダークサンダーエナジーを切り離す力がある。

その為、EXゴモラは元の姿に戻ることができたのだ。

そしてゴモラが、元に戻ったのを見届けると……時雨はそこで遂に力尽き、彼女は倒れ込むと同時にサイバーゴモラも姿を消すのだった。

*

「時雨……!!」

『…………』

M1号はその光景をジッと眺め、信じられない物でも見たような視線をモニターに向けていた。

また、夜空は爪が食い込むほど拳を力強く握りしめ…………目に浮かぶ涙を腕で拭き取ってM1号の方へと顔を向ける。

「M1号、お前の言うことも確かに正しいのかもしれない。でもお前は1つ見落とし、てることがある!! 怪獣が暴れば人に被害が及ぶ…………。そうなれば人は怪獣を攻撃し排除しようとする。お前は一生人間と怪獣は争い続ける…………。そう言いたいのか?」

『…………それは…………』

「互いが傷つかない為にも、俺達は怪獣と仲良くなれる世界を目指したいんだ。時雨とゴモラのあの姿を見ても、本当にその可能性が1%もないとお前は言い切れるのか!!?」

夜空の言葉に、M1号は特に何も言葉を返さず…………ただ黙ってM1号は指を

「パチン」つと鳴らすとエックスを元いた場所へと転送し、戻したのだ。

*

『グッ………!? 戻って………来たのか?』

「グルルル………」

M1号によってエックスは元いた場所へと戻され、目の前には倒れ込んでいる時雨を心配そうに見つめている元に戻ったゴモラの姿があり、ゴモラはエックスの存在に気づいて視線をエックスに向ける。

「クオオオオン」

「ゴモラ………」

ゴモラはまるで、「自分を撃つてくれ」とでも言うように両手を広げ、無防備な状態を晒し、それを受けてエックスは頷き、夜空は苦悶に満ちた顔を浮かべながらも、ザナディウム光線を発射する態勢に入る。

『「ザナディウム………!!」』

しかし、次の瞬間……ゴモラは赤い光に包まれ、エックスは光線を撃つのを中断し動きを止める。

『「っ!?!」』

するとゴモラはスパークドールズへと戻り、地面へとゆっくり落ちていく。

「ゴモラ……?」

同じ頃、モニターでその光景を見ていたグルマンとリョーガは壊れたタイマーに視線を映すと……タイマーは未だに5秒で止まったままだった。

『共存か、破壊か……。お前達の未来を、私は監視する。私はカモメ……。』
空高く飛翔し、思考し続ける。私はカモメ……。』

そして、M1号は最後にテレパシーのようなものを使ってエックスと夜空にそう言葉を残すと、M1号は宇宙空間を再び漂い続けるのだった。

*

「う………んっ?」 提督………?」

「おはようさん、時雨? 随分お前に無茶させてしまったな………」

目を覚ますと、夜空が自分を抱きかかえて歩いていることに時雨は気づき、彼女はすぐにあのあとゴモラがどうなったのか慌てて夜空に尋ねる。

「そうだ!! 提督!! ゴモラは!!? ゴモラはどうなったの!!?」

「スパークドールズに、戻ったよ。 どうしてスパークドールズに戻ったのか、その理由は分からないけど」

暗い顔を浮かべながら、そう語る夜空に時雨は「そっか」と呟いてそつと彼の頬に手を添える。

「夜空」

「んっ?」

「大丈夫だよ」

時雨がそう言いながら微笑むと、夜空は「ありがとう」とだけ言葉を返し、2人はみんなの元へと………ゴモラと一緒に、帰るのだった。

*

それから、鎮守府に戻った夜空と時雨は研究室で2人はカプセルに入ったゴモラのS
Dを見つめていた。

「いつか、また会おう」

「今度は、もっと一緒に……」

夜空と時雨の2人はゴモラにそう話しかけるのだった。

第19話 『虚無』

鎮守府のとある建物の屋上にて。

ここでは宇宙からの電波などを広う為の装置……。

夜空の母が開発した「宇宙電波受信機」と呼ばれるものを設置し、木製のリクライニングチェアを置いてそこに座り込もうとした時。

『今日もまた、宇宙の声を聞くのか?』

エックスがそんなことを尋ね、夜空は苦笑しながら彼の問いかけに「ああ」と答える。「俺の父さんと母さんは、宇宙に吸い込まれるように消えていったように見えた。だから2人は、宇宙のどこかにいるんじゃないかって思ってた。これを使えば……もしかしたら2人の声を拾うことができるかもしれない。まつ、まだ一度も成功したことはないんだけどさ!」

『……今日は、拾えると良いな。君のご両親の声を』

夜空は一瞬悲しげな顔を浮かべながら「そうだな」と頷き、チェアに寝そべって星をジッと眺める。

そんな時、突然夜空の顔に何かが覆い被さり、彼は「うぶっ!」と小さな悲鳴をあげ

て慌てて覆い被さった何かを引き剥がすとそれは毛布だった。

不思議に思った夜空は後ろを振り返るとそこにはこちらに笑みを浮かべた時雨が立っており、夜空は「時雨？」と首を傾げる。

「こんなところで寝てると、最近は暖かいとはいえ風邪引いちやうよ？」

「すまん、ありがとう」

すると突然、時雨は強引に夜空の隣に座り込み、それに夜空は戸惑いを見せる。

「お、おい時雨!」

「僕も、宇宙の声って言うの聞きたいんだ。ダメ……かな？」

不安げな表情でそう尋ねる時雨に、夜空は「ダメだ」なんて断れる筈もないし、断る理由もないので「分かった」と頷き、一緒にチェアの上に寝そべる。

むしろ夜空自身、彼女が傍にいてくれるなら嬉しいので全く問題ない。

(あつ、これは私は邪魔なパターンだな? データの奥の方に行っていよう)

エックスはなんとなく空気を呼んでエクスデバイザーの画面から消え去り、それを見た時雨は即座にエックスが空気を呼んで退散してくれたのだと理解し、思わず笑ってしまふ。

「どうかしたか時雨?」

「ううん、なんでもない」

時雨は毛布を自分と夜空にかけ、彼女は夜空に抱きつきながら星空を見上げる。

「なあ、時雨」

「なあに提督？」

不意に、夜空は時雨の名を呼び、彼女は首を傾げる。

「何時も、ありがとな。俺の傍にいてくれて……」

「どうしたの急に？」

「いや、なんだか急に言いたくなってる」

「なにそれ、変な提督だなあ……フフ」

そんな会話をする夜空と時雨はお互いに笑い合い、夜空は時雨の肩に手を回し、ギョツと抱き寄せた。

「父さんと母さんに、お前のこと紹介したいよ」

「僕も会いたい。夜空のお父さんとお母さんに」

夜空はジツと時雨は見つめ、それに彼女は顔を赤く染める。

そのまま夜空は時雨の額に自分の唇を押し当て、それをされた時雨はさらに顔を真っ赤に染める。

「時雨、愛してる」

「僕もだよ、夜空を愛してる」

そのまま2人は一緒に星を眺め……いつの間にか、2人は深い眠りに入っていた。

*

翌朝、早朝。

『夜空……オイ夜空!! 起きろ!!』

突然エックスの声に起こされた夜空と時雨は慌ててチエアから起き上がって立ち上がり、夜空は「怪獣!?! 宇宙人か!?!」と慌て、時雨もまた慌てて艀装を展開し主砲を構える。

「現場は!?! すぐに急行を!!」

「よし、今回の出撃メンバーを……!」

『おい2人とも落ち着け!! そうじゃない、宇宙電波受信機が何かの反応をキャッチしたんだ』

エックスに言われ、夜空は宇宙電波受信機のダイヤルを操作し、音量を大きくして受信機がキャッチしたと思われる電波を聞く。

「えっ? これただのノイズじゃないの?」

「いや、これはただのノイズじゃないし、普通の宇宙電波でもない」

『解析してみたらどうだ?』

エックスの言葉に夜空は「そうだな」と頷いてエクステバイザーをしまい、受信機を持って時雨と共に研究所へと向かい、そこで受信機がキャッチした電波の解析をする為、受信機を解析装置に繋げる。

『解析にはしばらく時間がかかりそうだ』

するとその時、突然鎮守府内の警報が鳴り響き、館内放送でダークサンダーエナジーを浴びた怪物が実体化し、出現したことが報告される。

「こんな時に! よし、行くぞ時雨!!」

「うん!!」

夜空は鎮守府中にいる艦娘に出撃命令を出し、タカトはスカイマスケットティで出撃、艦娘達もそれぞれ艀装を展開して現場へと急行、夜空も現場で指揮を執ることになった

のだった。

*

「グルアアアアア!!!!」

街に現れたのは以前出現したデマーガの別個体なのだが、ダークサンダーエナジーを浴びた影響で凶暴そうな面構えになっており、両肩からは長大な刃の様なものが伸び、両腕にも鋭利な刃物のような部位が追加された「熔鉄怪獣 ツルギデマーガ」が暴れていたのだ。

早速駆けつけたスカイマスケットティから放たれる光弾を放って攻撃。

「フアントン光子砲、発射!!」

「グアアアアアア!!!」

しかし、ツルギデマーガには全く効いておらず、口から「熔鉄光線」をスカイマスケットィへと放つ。

「うわっ!?!」

なんとかスカイマスケットィ。

そこへ艦娘達も駆けつけ、ツルギデマーガへと攻撃を開始する。

『サイバーザラガス、ロードします』

『サイバーガルラ、ロードします』

『サイバーサラマンドラ、ロードします』

暁、睦月、如月はそれぞれのサイバーカードを使ってモンスフュージョンとなり、睦月は暁と如月を後ろに下がらせてツルギデマーガがこちらに向かつて放つて来た光線を睦月がガルラの力の宿ったバリアを張り巡らせて防ぐ。

「ぐううううう!!!?」

なんとかツルギデマーガの攻撃を耐えきる睦月。

「今だよ2人とも!!」

攻撃を受け止め切った睦月の言葉を受けて暁と如月は頷き、如月はサラマンドラの顔を模した主砲を構えて炎を纏った砲弾を、暁はザラガスのエネルギーの宿った光弾をそ

れぞれツルギデマーガの顔に撃ち込む。

「ガアアアアアア!!?!」

流星に顔に撃ち込まれればそれなりのダメージが入ったのか、ツルギデマーガはフラついて膝を突くのだが……。

「グルアアアアアア!!?!」

ツルギデマーガはそれに怒り、暁達に襲いかかる。

「あら、怒らせちゃったかしら?」

「どう見てもそうでしょ?!」

暁と如月は慌てて光弾を放つのだが、ツルギデマーガは両腕の刃で受け止め、それをかき消し彼女等に向かって走ってくる。

『エックス、ユナイテッド!』

だが、それを突如として出現した「ウルトラマンエックス」の跳び蹴りをツルギデマーガは受けて吹き飛ばされる。

「エックス!!」

『シユア!!』

戦闘BGM「熱い戦い」

エックスはツルギデマーガへと向かって駆け出し、それにツルギデマーガは口から光

線を吐き出すが………エックスは即座に「ゼットンアーマー」を装着し、瞬間移動。

背後に回り込んだエックスは「ゼットン火炎弾」という火球をツルギデマーガに放つのだが、ツルギデマーガは振り返りざまに腕の刃で火球を切り裂いて防ぐ。

「ガアアアア!!!!」

そのままツルギデマーガはエックスに向かって刃を振りかざし、エックスは再び瞬間移動してツルギデマーガの背後に回り込むのだが………。

ツルギデマーガはそれを先読みし、エックスが出現すると同時に後ろに振り返って光線を発射し、エックスに直撃させる。

『グアアアア!!!!?』

地面に落下し、ゼットンアーマーが解除されたエックスに向かってツルギデマーガは素早く蹴りを叩き込んで蹴り飛ばし、エックスは地面を転がる。

「グアアアアア!!!!」

「みんな!! あのだまーガの顔に砲撃を集中させて!! エックスを助けるの!!」

村雨の指示に従い、艦娘達は一齐に主砲を構えてツルギデマーガの顔に向けて砲弾による集中砲火を浴びせ、それにツルギデマーガが怯んだ隙にエックスは立ち上がり、空中へと浮かび上がる。

「グウウウ!!?」

『今だ!! アタッカー………X!!』

両腕、両足をX字に開いて全身から放つX字の火炎「アタッカーX」とエックスはツルギデマーガに放つのだが、ツルギデマーガは腕の刃でアタッカーXを弾き飛ばし、口から放った光線でエックスを撃ち落としてしまう。

『ウウウウ!!?』

そこで落下して来たエックスに向かってツルギデマーガはすかさず光線を吐き出すのだが………。

『エクシード!! エックス!!!』

戦闘BGM「エクシードXのテーマ」

エックスは「エクシードX」へと強化変身し、短剣「エクストラッガー」を構えてツルギデマーガの光線を真つ二つに切り裂きながらツルギデマーガの方へと真つ直ぐ向かって駆け出す。

『シエア!!』

そのままエックスはすれ違いざまにエクストラッガーでツルギデマーガを切り裂き、よろめく。

だが、ツルギデマーガはすぐに反撃しようとする腕の刃で攻撃を繰り返すのだが、エック

スはエクストラッガーでツルギデマーガの繰り出す攻撃を全て弾き飛ばし、逆にツルギデマーガの胸部に何発も拳を叩き込む。

「グルウウウウ!!!」

『シユア!!』

最後に膝蹴りを叩きこんだ後、夜空はエクストラッガーのスライドタッチを3回行い、ブーストスイッチを押しエクストラッガーを構えたエックスがそのまま敵の前後を往復しながら繰り出してダークサンダーエナジーの力を無効化して城下する突進斬り……
「エクシードエクストラッシュ」をツルギデマーガへと炸裂させる。

『「エクシード!! エクストラッシュ!!」』

「グルルル!」

それによってツルギデマーガはデマーガへと戻り、そしてエックスは通常形態へと戻って両腕を左側へゆっくりと振りかぶり両腕を胸の前でX字にクロスさせて放つ必殺光線……「ザナディウム光線」を発射。

『「ザナディウム光線?!!」』

「グルアアアアア!!」

最後にザナディウム光線を受けたデマーガは倒れ爆発し、スパークドールズへと変化して地面に落下するのだった。

「やったわ!!」

「今回も、エックスに助けられたわね」

エックスが勝利し、喜んでいる村雨の肩をポンッと手を置く満潮。

「それじゃ、取りあえずスパークドールズを回収して帰投しよう」

そして時雨の指示を受け、一同は撤収作業を行うのだった。

*

鎮守府へと夜空達が戻ると突然、グルマンとリョーガが何やら慌てた様子で夜空の元へと「ぜえ、ぜえ!」と息を切らしながら駆け寄って来たのだ。

「ちよつと、2人とも落ち着け! 何かあったのか?」

「はあ、はあ……提督!! 提督が出撃前にやっていた宇宙電波の解析完了してるよ!!」

『急いで来てくれ!! 私達が口で説明するより直接聞いて貰った方が良いだろう!! 提

督に取ってはかなり衝撃のある出来事だから、心しておけよ!』

リヨীগとグルマンにそう言われて夜空は2人に力強く引つ張られ、研究所へと向かうのだった。

「一体なにがあつたんでしよう?」

「実は昨日……」

朝潮がグルマンとリヨীগの様子を見て首を傾げ、それに答えるように時雨は昨夜、夜空が宇宙電波受信機を使っていたこと、今朝受信機に謎の電波が届いたことを話し、グルマンとリヨীগの台詞から恐らく電波の解析が完了したのだろうと時雨は一同に説明する。

「………んっ? 時雨は昨日から今朝にかけて司令官と一緒にいたのかい?」

「えっ? うん、そうだけど……」

「ほお〜」

なぜか時雨の言葉を聞いてニヤニヤし始めるヴェールヌイ。

そんなヴェールヌイに時雨は思わず困惑し「な、なに?」と尋ねるとヴェールヌイはニヤニヤした顔のまま彼女の肩に手を置き……。

「夕べはお楽しみでしたね」

「なっ!?!」

不意打ち気味にヴェールヌイからそんなことを言われ、顔を真っ赤にする時雨。

それを聞いて時雨ほどではないが顔を赤くするメンバーがチラホラ現れ、暁、睦月、文月、夕立などはなんのことも分からず逆にヴェールヌイの言葉に首を傾げていた。

「ちよつ、響!!? 僕達まだそこまで行つてないから……!!」

「そうなのかい? てつきり君たちの場合やることヤツつてるのかと思つて……」
「おい誰かこのバカ止めろ!!」

どんどん爆発発言して行くヴェールヌイにいても経つてもいられず、菊月が彼女の口を塞ぎ、菊月に呼ばれた皐月と一緒にヴェールヌイはズルズルとその場から引き離されるのだった。

「つく!? もう響つてばなんてこと言うんだよお!!」

茹でタコのように赤くなった顔を覆い隠し、うづくまる時雨。

そんな彼女の頭を村雨と夕立が「よしよし」と優しく撫でる。

最も夕立はこの状況をよく分かっている気がするわ。

「最近響姉のフリーダムっぷりが強くなってる気がするわ」

「勘弁してくれ。 奈々さんやリョーガさんと比べればまだマシだったのに、ヴェール

ヌイまで同レベルになったら手がつけらん」

雷のそんな呟きをいつの間にか戻つて来ていた菊月が聞いており、彼女は頭を抱えて

大きな溜息を吐くのだった。

「えーっ？　でもきくりんフリーダムズの躰係なんだから今更1人くらい……」
 するとその時、そんなことを言い出す皐月の胸倉を菊月は強く掴みあげ、物凄い形相をしながら皐月を睨み付ける。

「誰が躰係だ。あときくりん言うなゴラ……!!」

「ちよっ、怖い怖い!!　鬼の形相みたいになってるから!!?　分かったよごめんって!!?」

皐月の必死の謝罪を受け、菊月は「分かれば良い」と言つて皐月を離す。

「我が妹ながら恐ろしい娘だよ、菊月……はは」

一方、研究所。

そこでグルマンとリョーガが聞かせたかったもの……それは……。

『……ザザ……夜空……ザザ……夜空……お

母さんの声が聞こえますか?』

「母さん!!?」

受信機がキャッチした電波の正体……それは夜空の母親から送られて来たメツ

セージだったのだ。

「母さん!!?　母さん聞こえる!!?」

『落ち着け提督!　これは数分前に録音した音声だ。　今もこちらの声が届くように

色々と試しているが……まだ……」

グルマンからの説明を受け、夜空は深呼吸して落ち着きを取り戻す。

「どうやら、提督の考えていたことはあながち間違いないのかもしれない」

「……もう一度、母さん、もしくは父さんと連絡が取れるよう試せることは全部試そう」

夜空の言葉にリョーガとグルマンは力強く頷き、そこから夜空達はもう一度夜空の両親と連絡を取り合うべく、様々な方法を試すことになるのだった。

*

それから、一週間が経過し……。

夜空と時雨はジオボルトスでかつて夜空の両親と研究所が消え去った場所を訪れており、夜空はもしかしたらここでなら両親の声を拾うことができるのではないかと最近様々な装置を持って訪れていたのだ。

「お母さんの声、本当にここから発信されたの？」

「恐らく、ここは時空の特異点なんだろう。だからウルトラフレアの時も、ここだけ別の時空に飛ばされた」

「時空の、特異点……?」

時雨の言葉に夜空は頷く。

「そうだ。母さんは、ずっと宇宙の電波の中には未来から飛んで来た『物』があるって研究してたんだ」

「それって……未来予知……みたいなの？」

「まあ、似たようなものだ。化石の発掘のように、断片を見つけてはそれを解析して欲しい。それに父さんはこの場所で何か大昔の遺物を発見しその場所に宇宙電波の研究所を建てた。俺はその遺物と、未来からの電波には何か関係があるんじゃないかと思ってる」

夜空の解説を受け、時雨は「成程」と頷き、夜空はエクステバイザーを装置に繋げてもう一度両親との会話を試みる。

「母さん、父さん、俺だよ。聞こえる？」

「提督、あんまり無茶しないで……最近ロクに寝てないでしょ？」

時雨は心配そうに夜空の肩に手を置き、少し休憩すべきだと提案するのだが……
夜空はそれを聞かず両親への呼びかけを続ける。

「もう!! 提督!! 提督である君があんまり無茶して倒れたりでもしたらどうするの!! 君の両親もそんなことを望んでない筈だよ!? 僕達のリーダーなんだから健康管理もしつかりして!!」

ムスつと頬を膨らませた時雨に怒られ、夜空は目を丸くし、そんな夜空を見てエツクスは「フフツ……」と思わず笑ってしまった。

「そう、だな……。 すまん。 少し寝るよ」

夜空は時雨に謝罪しながらジオボルトスへと戻り、少しの間眠ることにするのだった。

*

「ダークサンダーエナジーがだんだん地球に近づいて来ている?」

「ああ、未だに発生源は特定できてはいないが……18日前は彗星、3日前は金星周辺にダークサンダーエナジーらしきエネルギーを感じした」

その頃、リョーガとタカトは「空間エネルギー測定器」と呼ばれる最新装置を搭載し

た新たに開発されたスペースマスケットティに変形しているジオマスケットティ3号機に乗って宇宙に出ており、彼等はダークサンダーエナジーの発生源を突き止める為の調査に出かけていたのだった。

尚、この空間エネルギー測定器というのはこれを使えば空間エネルギー量の変化を測定することでダークサンダーエナジーの発生源を見つけることができる装置なのだ。

そして彼等はエネルギーの発生源を突き止める為、今現在最後にエネルギーが確認された金星周辺に向かって飛行していた。

やがて金星周辺に辿り着くとエネルギー量の数値のチェックを開始し、念のためにスペースマスケットティに搭載されたカメラを使い、自分達の見ているものを鎮守府にも映像として届ける。

そしてその映像は鎮守府の会議室に届けられ、そこでは奈々、グルマンを始めとした殆どの艦娘メンバー達が集まっていた。

「意外と殆どの娘達が集まりましたね」

「そりや、僕達もダークサンダーエナジーの正体は気になるからね。興味はあるよ」

奈々の呟きに皐月がそう答え……そして今、タカトが丁度測定器を起動させ空間エネルギー量を計る。

「空間エネルギー量は3だな」

「フフン、タカト。冗談よしてくれたまえ。空間エネルギー量は絶対に5以下にはならないんだよ?」

リョーガからの返答にタカトは首を傾げ、もう一度エネルギー量を確認する。

「おい、エネルギー量が2になったぞ?」

「だからそんな筈は……. なってる……. !?」

リョーガもエネルギー量を確認すると確かに測定器には「2」と書かれており、リョーガは自分の目を疑った。

やがて測定器の数値は「0」となり、流星のリョーガも焦りを隠せず冷や汗を流す。

「ちよつと、これは嫌な予感がするねえ…….」

すると彼等の目の前に突如紫色に輝く球体が出現し、タカトは急いで鎮守府に連絡を入れる。

「こちらスペースマスケット!! 正体不明の発光体を発見した!!」

「空間エネルギー量が0なんて……. ありえん」

リョーガがそこまで言いかけた時、スペースマスケットからの映像が途切れ通信が強制終了された。

そしてそれをモニターから見ていた奈々はすぐさまリョーガ達に連絡を取ろうと呼びかけるのだが……. 彼等からの応答はない。

「リヨーガさん!!? タカトさん!! 返事をしてください!! 2人とも!!」
 「ど、どうすれば……」

この自体に一体どうすれば良いのか分からず困惑する一同。

「落ち着いてください!! 先ずは提督に誰か連絡をして呼び戻してください!! グルマン博士! 先ほどの発光体が何か分かりますか?」

奈々は艦娘達に指示を飛ばし、グルマンに先ほどの発光体について何か分かることがあるかどうかを尋ねると「ふむ」と呟き、彼女の問いに答える。

『恐らく我々が探していたものはあの発光体で間違いないだろう。先ほどリヨーガは空間エネルギー量が0だと言っていた。つまり、ダークサンダーエナジーの発生源は存在しないものだったんだ』

「存在しないものって……リヨーガさん達の目の前にあった発光体は……?」

グルマンの言葉に首を傾げ、荒潮がどういふことなのか尋ねるとグルマン曰く、空間エネルギー量が0ということはスペースマスケットティの前には何も存在していなく、あの発光体は言うなれば「虚無」とも言えるもの。

情報のないものを無理に視覚化したのがあの発光体なのだ。

「なんて不可思議な存在……いや、存在しないでしたっけ」

グルマンの話を聞き、奈々は静かにそう呟く。

「兎に角、あの発光体とスペースマスケットティの行方を最優先で追わなければ!! 各国の軍にも連絡して協力の要請を!!」

*

しかし、奈々が一同に指示を出している間にあの発光体は既に地球へと侵入しており、発光体はアメリカ、ネバダにあるスパークドールズ研究所の上に落下してきた。

『フェツフェツフェツフェ．．．．．!』

不気味な笑いのような声をあげながら、発光体が研究所に激突するとその衝撃で半径1キロが消し飛び、発光体はそこにあつたスパークドールズを全て吸収し、人型の姿「虚空怪獣 グリーザ第二形態」へと変貌した。

『フェツフェツフェ．．．．．!』

グリーザはゆらゆらと不気味に揺れながら空中へと飛び上がり、飛行してその場を立ち去るのだった。

*

そのことはすぐに鎮守府やジオボルトスで帰還中の夜空達のところにも映像が送られ、時雨はその姿に不気味さを感じずにはいられなかった。

「なんか、凄く不気味……」

『あれは……グリーザだ!!』

またそれを見たエックスはその怪物、グリーザの名を口にし、夜空は「何か知ってるのか?」とエックスに問いかける。

『ああ、よく知ってる。このことは私が直接鎮守府の全員に話す!!』

「えっ、そんなことできるのか!?!」

『デバイザーに宿ってるんだからできるさ』

そしてエックスは宣言通り、鎮守府の全員のジオデバイザーに通信を開始し、一同はすぐさまジオデバイザーを取り出してエックスからの連絡を受ける。

「エックス!？」

まさかのエックスからの直電に菊月をはじめ驚きを隠せない一同。

『私はウルトラマンエックス。みんな、艦隊のみんな、聞いてくれ。先ほどネバダの研究所を襲ったのは……グリーザだ。グリーザは星の生態エネルギーを狙い全てを無へと変換する。つまり、生き物を消し去るんだ。奴は今までも3つの生命豊かな星を滅ぼした』

そしてエックスはそんなグリーザを追いかけてこの太陽系にまで追いかけて来たのだというのだ。

地球を狙うグリーザをエックスは太陽に突き落とすことでようやく倒すことが出来たらし。

それが丁度5年前……ウルトラフレアの起きた日である。

『成程、それがウルトラフレアの原因か』

『奴は生体エネルギーが強い者から消して行く。地球の場合は……怪獣』
エックスの言葉を聞き、なぜグリーザがネバダの研究所を狙ったのか奈々はすぐに理解した。

それはネバダは世界最大のスパークドールズが保管されてある場所であり、2番目はスパークドールズの研究なども主な活動している……この鎮守府である。

「そして最後は……全ての命を吸い取るってことね……」

村雨もまたそのことを理解し、エックス曰くグリーザは今までの怪獣達とは格が違うとのこと。

『恐らく、この地球で一番の強敵だったガーゴルゴン・メカレーターですらあっさりと上回るほどに』

それを聞き、あれほど苦労したガーゴルゴン・メカレーターすら上回るという言葉にグリーザに一同に緊張の色が走る。

*

「他の鎮守府にも応援を頼もう。付近の住民への避難を促せ!! 鎮守府内の非戦闘員は全員待避!! グルマン博士はエナジーシールドを最大出力で鎮守府を防御!!」

エクスデバイザーから夜空は即座に指示を一同へと飛ばし、艦娘達も出撃してグリーザへの迎撃を迎えるように言い放つ。

『了解!!』

「それと、これは最重要命令だ。全員、死ぬな……!! 俺もすぐに戻る!!」
デバイザーから夜空は艦娘達にそう指示を出し、それを受け、彼女達は「了解!!」と
頷き、敬礼。

『最大出力じゃ足りん!! エナジーシールドを強化させる!!』
『私も、スカイマスケットィで出撃します!!』

グルマンと奈々がそう返事を返し、夜空は「任せた」と言つて通信を終了し、急いで
夜空と時雨は鎮守府へと戻るのだった。

「……副司令ってパイロットの免許あつたんだ」
「あつたんだよ、実は」

*

それから数分後。

『副司令、準備が整つた!! エナジーシールドを起動させる!!』

「了解、みんな……そろそろお客さんが来ますよ」

全ての準備を完了し、強化型の「ハイパーエナジーシールド」を鎮守府全体に張り巡
らせ、艦娘達はグリーザの出現場所を予測し囲めるようにして待機。

「……………」

「電、大丈夫?」

待機中、雷と一緒にペアを組んでいる電が僅かに振るえるのに気づき、彼女はそつと電の手を握りしめる。

「だ、大丈夫なのです雷お姉ちゃん! 怖いですけど…………でも、今までだって勝つてこれたのです!! だから今回も……………」

「そうね。エックスも力を貸してくれる。止めるわよ、あのグリーザって怪獣を」

「はい!」

するとそこへ……………」

『フエツフエツフェ……………!』

グリーザが遂に鎮守府へと姿を現し、グリーザは空からそのまま一直線に鎮守府に降り立とうとしていた。

そこに丁度夜空達も帰還し、ジオボルトスを一度停車させて夜空は車から降りる。

「時雨!! お前はサイバーゴモラを呼び出して他の奴等と一緒にグリーザの迎撃に当たってくれ!! 俺はエックスとユナイトして奴と戦う!」

「分かった!! 提督……………無事に帰ってきてね?」

心配そうな顔を浮かべる時雨に、夜空は笑みを浮かべながら、彼女の頭をそつと撫で

る。

「………あぁ！」

そして夜空は鎮守府の方へと向かって駆け出し、エクステバイザーを取り出してXモードに変形させる。

「行くぞエックス!! ユナイトだ!!」

『あぁ!!』

「エックスー……!!!」

夜空は「ウルトラマンエックス」へと変身し、エックスはグリーザに向かって飛行。

さらにそこへ………。

「メビウス!!」

光が変身した「ウルトラマンメビウス」も現れ、エックスの隣を並んで飛行する。

「光さん!! メビウス!! 来てくれたんですか!」

『エックスの通信はこっちにも届いてたからね。 あいつを倒すよ!!』

「はい!!」

そのままエックスは「エクシードX」、メビウスは「バーニングブレイブ」へと強化変身し、エックスとメビウスは空中でグリーザの激しく激突する。

メビウスはグリーザの後ろに回り込んで蹴りを喰らわせ、そこにエックスが掴みかか

り、グリーザを投げ飛ばして地上へと叩き落とそうとする。

しかし、グリーザはがつつりとエックスの身体を掴みあげ、離さず、やがて2体纏めて地上へと落下。

それによってエックスはグリーザから引き離され、倒れ込んでいるグリーザに向かってメビウスがきりもみ回転しながら炎を纏ったキック、「バーニングメビウスピンキック」を放つのだが……グリーザはすぐに立ち上がり、目から放つ「グリーザビーム」をメビウスに喰らわせて撃墜する。

『シエア!!?』

「光さん!!」

地上に落下し、膝を突くメビウスの元へと駆け寄るエックス。

「ゴモラ、僕達も行くよ!!」

また時雨も艤装を展開し、ジオデバイザーにサイバーゴモラのスパークドールズをリードさせ、「電脳怪獣 サイバーゴモラ」を実体化させる。

『リアライズ!』

さらに時雨がリードした為、サイバーゴモラに時雨アーマーが装着され、エックス、メビウスの隣にサイバーゴモラが並び立ち、上空に奈々の乗ったスカイマスケットイが現れる。

『サイバーガルラ』

『サイバーサラマンドラ』

『サイバーザラガス』

『『ロードします』』

また暁、睦月、如月はそれぞれモンスフュージョンを使い自身の能力を強化させる。

『「行くぞおおおおお!!!」』

光、夜空、奈々、時雨が!そう叫ぶのを合図にエックス達による一斉攻撃がグリーザに開始される。

『フェツフェツフェ! アツハツハツハ!!』

先ず最初に艦娘達とスカイマスケットティによる一斉射撃がグリーザに放たれるのだが、弾丸は全て弾かれ、次にエックスが殴りかかるがグリーザはそれをゆらりと躲し、回し蹴りを喰らわせる。

『グウ?!』

『セア!!』

続いてメビウスが拳をグリーザに叩き込んだがグリーザは全く怯む様子を見せず、ならばと思いきメビウスはグリーザに掴みかかって動きを封じる。

そこで背後に回り込んだサイバーゴモラが爪を振りかざし、グリーザの背中を攻撃を

しようとしたがいつの間にかグリーザはその場から消えており、爪はメビウスを斬りつけてしまう。

『グウウ!!』

するとグリーザはサイバーゴモラの目の前に突然現れて腕を振るいサイバーゴモラを叩きつける。

「グルウウウ!!」

後退するサイバーゴモラだが、サイバーゴモラは両肩の主砲をグリーザに向かって発射し、それと同時にサイバーブラックキング、サイバーモモザゴンのカードを使った朝潮とヴェールヌイがそれぞれ炎を纏った弾丸と超音波光線を連続でグリーザに向かって発射。

『サイバーブラックキング、ロードします』

『サイバーモモザゴン、ロードします』

「喰らえ!!」

しかし、グリーザはサイバーゴモラの砲撃、彼女等の弾丸と超音波光線の直撃を受けて尚何事も無かったかのようにエックス達と戦闘を続行しており、その様子はまるで彼女等の攻撃を受けてることすら気づいていないようだった。

「なんて奴なんですか……!! 私達の攻撃がまるで効いてない!!」

それに朝潮は驚き、ならば集中砲火ならばどうかと夕立、荒潮、モンズフュージョンした暁が一斉に攻撃を行う。

先ず、夕立と荒潮はそれぞれサイバーガルベロス、サイバレーイキュバスのカードを使いその力を宿した火炎光線、冷凍ガスを主砲から同時に発射し、暁はザラガスの角を模したエネルギー弾をグリーザに向かって発射する。

しかし、3人の攻撃はグリーザが一瞬姿を消した為に躲かれ、その先にいたエックスに直撃し、エックスは大きく吹き飛ばされて地面に倒れ込む。

『ウアアアアアアア!!?!』

『バーストサイバー!!超振動波!!』

両手にエネルギーを溜めてサイバーゴモラはグリーザに接近し、両肩の主砲と同時にゼロ距離で放つ光線「バーストサイバー超振動波」を炸裂させる。

「グルアアアアアア!!!!」

『ヒツハツハツハ!!』

だがやはりグリーザには如何なる攻撃も通じず、膝蹴りを喰らわせてサイバーゴモラを引き離し、サイバーゴモラの背中を踏み台にしてジャンプ。

そこへ同じくジャンプして拳を放って来たメビウスには胸部から放つ「グリーザダークライトニング」を炸裂させ、メビウスは身体中から火花を散らし大ダメージを受ける。

るのだが……：艦装自体がグリーザの音色に耐えられなくなり、完全に破壊され……：他の者達もまた次々に艦装が完全に破壊されていく。

「クソ!! 艦装が……」

グリーザは再びグリーザビームを辺り一帯に撒き散らすように放ち、それらの光線が中破状態の文月、夕立、村雨に降り注ぐとする。

「まずいわ!!」

「グルアアアア!!!」

だが、それをサイバーゴモラが庇うように立ち塞がったことで光線は彼女達に直撃はせず……：けれどもサイバーゴモラはその攻撃で遂に実体化を保つことができず、消滅。

「ゴモラ……」

「ありがとう、ゴモラ」

村雨はサイバーゴモラに感謝し、自分達も艦装が中破している為、なんとか体勢を整えようと先ずはどこかに隠れようとする。

一方、菊月は「こうなれば直接魚雷でも投げてやる!!」と言い出して艦装から取り出し、手に持った魚雷をグリーザに向かって投げつける。

「いや魚雷って普通そういう使い方しないから!？」

とツツコミつつも皐月ももうそれくらいしか攻撃方法がない為彼女もまた魚雷をグリーザに投げつけるのだが……グリーザの放つ光線にかき消され、その光線は真つ直ぐに彼女達に迫る。

「ヤバッ……!!」

「菊月ちゃん!! 皐月ちゃん!!」

だがそれをスカイマスケットティが庇い、彼女等の代わりにスカイマスケットティが光線を受け止めたのだ。

「副司令……!!?」

無論、スカイマスケットティはグリーザの光線に耐えられる筈もなく……空中で爆発。

奈々が脱出した様子はなく……それを見た菊月と皐月は顔を青くし、彼女等は……膝を突くのだった。

「そんな……副司令嘘でしょ……?」

「お、おい……副司令……応答しろ。副司令……!!」

菊月はジオデバイザーで奈々に通信を試みるが……当然、彼女からの返事はなく。

「副司令、おい!! いつものおふざけだろ? 返事をしてくれ!! いつもみたいに、ウザ

い絡み方してくれよ副司令!!!」

ポロポロと、涙を流しながら必死に奈々への通信を行う菊月だが……やはり彼女からの応答はなく、菊月は力が抜けたようにその場に膝を突いたのだった。

「副司令……ぐう、うう……。私は、私は……あなたがいないと……うう……」

そしてその光景を見ていたエックス、メビウスもまた絶句し……特にメビウスは……光は頭に血が上がり、彼は立ち上がって奈々の名を叫ぶ。

『奈々……奈々ああああああ!!!』

メビウスは拳を強く握りしめ、全身を炎をに包まれ、グリーザに向かって突進する。

だが、グリーザはそれをあっさりと流れるように躲し、メビウスの背後に回り込む。が……即座にメビウスも振り返りざまにグリーザの腕を掴みあげる。

『捕まえた!! お前だけは……許さなああああ!!!』

さらにメビウスはグリーザにしがみつき、相手と一緒に自爆する「バーニングメビウムダイナマイト」を炸裂させ……メビウスはグリーザ共々爆発。

「光さん!!」

その後メビウスはメビウスブレスの力により身体を再生させる。

最も、この技はメビウス自身にもかなりの負担を与えるため、メビウスは膝を突

き……既に立つことすらできないでいた。

『はあ、はあ、はあ……。やった……のか?』

辺りを見回しても、グリーザの姿は見えず……遂にグリーザを倒すことが出来たのかとメビウスがそう思った瞬間……!

『アツハツハ!! フェツフェツフェ!!』

まるで、死んでしまった奈々や……その死に怒ったメビウス、悲しんだ菊月達を嘲笑うかのように……グリーザが突然メビウスの目の前に現れたのだ。

『ぐう……ごめん、奈々……』

グリーザは胸部から放つ「グリーザダークライトニング」を近距離でメビウスに撃ち込み、直撃を受けたメビウスは大きく吹き飛ばされ……姿を消し、光の姿に戻るのだった。

「ぐう、がはあ……!」

元の姿に戻った光が血を吐きながら地面に倒れ込み、もうまともに戦えるのはエックスのみとなってしまった。

既にカラータイマーも激しく点滅しており、活動限界も迫っていた。

『夜空、君と一緒に戦えて良かった』

「これが最後までいい言うな。今できること、やるべきことがある!! それに集中す

れば良いんだ!! 時雨との約束を破る訳にもいかないしな。それに何より……仲間の仇を討つんだ!!」

『そうだな。君は本当に強いな……』

「エックスのおかげさ。行くぞ!! 弔い合戦だ!!」

夜空のその言葉にエックスは「ああ!!」と力強く答え、エクストラッガーを取り出しグリーザに向かって駆け出す。

『エクストラッガー!!』

夜空はエクストラッガーのスライドタッチ3回とブーストスイッチを押し、エクストラッガーを構えたエックスが、そのまま敵にすれ違いざまに繰り出す「エクシードエクストラッシュ」をグリーザに炸裂させる。

だが、グリーザはそれすら前方にバリアのようなものを張り巡らせて防ぎ、「分解吸収光線グリーザアブソープション」という技でエックスすらグリーザを取り込もうとする。

「うおおおおお!!!」

やがて、エックスはグリーザに取り込まれ……。それを見た時雨は、目を見開き……。夜空の名を叫ぶ。

「っ、まさかそんな……。夜空あああああ!!!」

また、時雨のすぐ傍には満潮、朝潮が立っており、時雨の叫びを聞き、彼女等は驚きの表情を浮かべる。

「まさか司令官が……エックス？」

「時雨、アンタ……」

『フェツフェツフェ、アツハツハツハ……!』

エックスを取り込んだグリーザ。

しかし、次の瞬間……グリーザの様子が一変し、突如身体から火花が散る。

「えっ!? なに!? なにが起こってるの!」

その光景に暁は困惑し、グリーザは突然爆発……

それはエックスが内部からグリーザを攻撃した為に起こった出来事であり、ここに来てようやくグリーザを倒すことが出来たのだ。

そしてその衝撃により……飛んで来たエックスのカラータイマーが地面へと突き刺さったのだ。

「夜空……? 嘘……だよ? 夜空あ! 夜空あああああ!!!」

悲痛な顔を浮かべながら、時雨はエックスのカラータイマーの元へと駆け寄り、朝潮と満潮もまた彼女を追いかけて彼女を追いかけるのだった。

最終話 『未来へのユナイト』

メビウス・バーニングブレイブ、サイバーゴモラ・時雨アーマーを完封して倒し、エクシードXをも圧倒し、エックスの全てを懸けて放たれた渾身のエクシードエクストラッシュすらも相殺し分解、吸収してしまいが、同時に体内からのエックスの攻撃を受け、エックス諸共グリーザは爆発四散した。

その際、爆発によって吹き飛ばされたエックスのカラータイマーが時雨の目の前に落下し、それが地面に突き刺さる。

それを見た時雨は目尻に涙を浮かべ……夜空の名前を叫んだ。

「夜空あああああ!!!」

時雨はすぐにエックスのカラータイマーの元へと駆け寄り、彼女の叫びを近くで聞いていた朝潮、満潮は驚愕した顔を浮かべていた。

「提督が……ウルトラマンエックス?」

「そんな、嘘……」

満潮も朝潮も信じられないといった顔を浮かべており、エックスのカラータイマーの元へと駆け寄って来た時雨は恐る恐るカラータイマーに触れる。

「夜空………」

すると、カラータイマーから心臓の音のようなものが聞こえ、時雨は必死に夜空の名前を呼んで訴えかける。

「心臓の……音？ 夜空!! 生きてるの!? 僕の声が聞こえる!!? ねえ、夜空!!」

時雨は必死に夜空の名前を呼ぶのだが、カラータイマーからは心臓の心拍音以外にも聞こえてこず、そんな彼女を朝潮と満潮が落ち着かせるように声をかける。

「時雨さん! 落ち着いてください!」

「そうよ! 先ずどういふことなのか説明して! 提督が……エックスだったの?」

真剣な表情を浮かべてそう尋ねる満潮に、時雨は一度息を大きく吸った後、一気に息を吐き出し……満潮の質問に静かに頷く。

「この際だから、みんなに話すよ。もう誤魔化しきれないだろうし……」

時雨はジオデバイザーを取り出して全員に通信をかけ、全員が彼女の通信に出ると時雨はもう一度深呼吸して一同に夜空がエックスであったことを説明する。

「司令官さんが……エックスさん?」

「響、アンタは知ってたの? 同じウルトラマンだった訳だし」

少しの間とはいえ、一度ウルトラマンになったことのあるヴェールヌイに暁は夜空が

エックスだったのを知っていたのかと尋ねるとヴェールヌイは「いや」と首を横に振り否定する。

「だが、以前から知っている人物のような感覚はあった。あの時感じた感覚はそういうことだったのか」

「だけど、司令官はもう……」

雷はエックスがもう死んでしまったと思っただけで、彼女は顔を俯かせるのが……即座にジオデバイザーから「夜空はまだ死んでない!!」と時雨の声が入り、時雨はジオデバイザーをカラータイマーの前にかざし、そこから聞こえて来る心拍音を聞かせる。

「エックスも、夜空もまだ生きてる!!」

それを同じく、通信を聞いていたグルマンが「ふむ」と顎を手に乗せて以前夜空を電脳空間に送り込んだ時のことを思い出し、その時のシステム応用なら……と彼は時雨に提案する。

『あの時の装置を使い、誰かをエックスの中に送り込めば夜空を救い出せるかもしれない!! だが、理論上はかなり危険な行為だ。リスクは高い』

「……グルマン博士、僕が行きます!!」

グルマンの話聞き、時雨は即座に決断するのだが……それを「ちよつと待つ

て！」と満潮が引き止める。

心配そうな顔を浮かべる満潮に時雨は笑みを浮かべ、「大丈夫！」と言い放つ。

「僕は経験者だ。きつと今回も上手く行く」

「でも……！ もつと良い方法が……」

「ありがたい、満潮、心配してくれて。でも時間がないかもしれないし、僕がやらない

といけないんだ。僕がやりたいんだ。約束する、必ず夜空とエックスを連れて帰る

から」

時雨のその言葉を聞いても未だに納得できないといった様子の満潮だったが……

時雨のこういうところは本当に頑固だということは承知しているので彼女は時雨を引

き止めるのをやめ、満潮は時雨の背中を軽く叩く。

「帰って来なかったら承知しないわよ」

「お気をつけて時雨さん！」

「うん！」

*

その後、時雨は研究所にて。

時雨は頭に夜空が以前電脳空間に行く時に使用した「デバイザー」を頭に装着し、ベッドに寝かしてグルマンとその手伝いで来たヴェールヌイ、電が全ての準備を整え……何時でも時雨をエックスのカラータイマーの中へ転送する準備が整った。

『このアルファX波が限界値を超えたら命の危機だ。もしそうなりそうになったら私が強制解除を行う。良いな?』

グルマンの説明を受け、時雨はゆっくりと首を縦に振って頷く。

「司令官さんとエックスさんを、どうか助けてあげてください、時雨さん」

「うん、任せて」

電はギュツと時雨の手を握りしめて彼女と、夜空、エックスの無事を祈り、またヴェールヌイも時雨の肩に手を置いて「頼んだよ」と声をかける。

「君たちがケツコンカツコガチして、子供を授かって、家庭を持つまでの過程を私は見たいんでね」

「ちよっ、前回から響はなにとんでもないこと言ってるのさ!? 恥ずかしいよ……」

「最近気づいたが君は弄りがいがあるね」

顔を赤くする時雨に対し、ニヤニヤとした笑みを浮かべるヴェールヌイ、そんな2人を見て電は思わず苦笑してしまう。

「じゃっ、そろそろ行くね?」

『よし! では転送開始!!』

そしてグルマンは装置を起動させ、時雨の意識をエックスのカラータイマーの中へと転送し……。

気づけば彼女は、エックスとユナイトした時に、いつも夜空がいた空間へと飛ばされたのだった。

「……が、エックスの中……? 夜空!! 夜空どこ!? いたら返事して!! 夜空ー!!」

*

同じ頃、夜空は薄暗い空間にただ一人立っており、彼はエクスデバイザーを取り出し

てエックスに呼びかけようとするのだが……エクスデバイザーは元のジオデバイザーに戻っており、それでも夜空は何度もエックスに呼びかける。

「エックス？ おい、エックス!!」

しかし、エックスからの返事はなく……。

「っ!？」

その時、彼は不意に後ろから誰かの気配を感じ振り返るといつの間にか、辺りはどこかの研究室のような場所に変わっていたのだ。

夜空はその光景に戸惑い、訳が分からず困惑してしまう。

「今度はなんだよ?」

すると、今度は夜空の目の前に自分の母親が現れ、母はビデオカメラを設置して研究の記録を録画しているようだった。

「母さん!!? なんで……ねえ、母さん!!」

夜空は母に声をかけるのだが、聞こえていないのか母は自分の存在に気づいておらず、夜空は母の肩に触れようと手を伸ばすのだが……その手はすり抜けてしまふ。

「私の研究では5年後の地球には生命が発する電波が無かった。全ての生き物が消滅していると思えませんでした! しかし、これを手に入れて以来微かに、未来の音

を受信できたんです!!」

そう言いながら母が取り出したのはエクストラッガーに非常に酷似した虹色に光る石像であり、それを見て夜空は目を見開き驚きの声をあげた。

「あれは、エクストラッガー!? それに、もしかしてここはあの日の……夜?」

そこで夜空は状況から察するに、ここにいる母親は本当にそこにいる訳では無く、過去に撮った映像を再生するように……両親が消えた光景が今、リアルに再生されているだけなのだと理解した。

「やはりこれは、未来に影響しています。そして……」

「何してるんだ!?!」

「父さん!?!」

そこへ丁度、あの時……母を助けに行った父親が今この場所へと現れ、父は今すぐ母に外に出て逃げるように言うのだが……

「これを見て!! 今日になって光り出したの! 未来の音が、今までで一番ハッキリと聞こえた!!」

興奮した様子でそう語る母に父は「一体なにが聞こえたんだ?」と尋ねると母は父の顔を見て笑いかけながら答える。

「あれはきつと、夜空の声……!」

「父さん!! 母さん!!」

「父さあああん!! 母さあああん!!!」

その時、外から5年前の夜空の両親を呼ぶ声が聞こえ、やがて2人はあの日の夜のようになつていく。

「この光が、希望……………」

「父さん、母さん!!」

夜空は過去の映像だと分かっている、思わずその手を必死に伸ばし、2人を行かすまいとするが……………やはり手は2人をすり抜けてしまい、両親はその場から消え去ってしまうのだった。

「……………」

*

その頃、現実の世界では……………。

『フェツフェツ!!』

エックスと相打ちになってようやく倒されたと思われていたグリーザ第2形態が突如として再生を始め、復活。

それを見ていた艦娘達はエックスと夜空が命を欠けてまで倒したと思われていたグリーザがあつさりとして復活したことに驚愕し、絶望感にうちひしがれる。

「そんな……嘘でしょ……。あれだけやって、まだ倒されていなかったっほい？」

夕立ですらグリーザの復活に青ざめ、エックス、メビウス、サイバーゴモラが力を貸してくれても倒せなかった奴が自分達だけで倒せる筈がないと……荒潮や菊月など殆どの者が半ば諦め状態で膝を突いており、もはや彼女等には戦う気力すら無かったのだ。

だが、そんな中……僅かに、この絶望的な状況でも諦めない者がいた。

「諦めるな!! グルマン博士!! ハイパーエナジーシールドの起動をお願いします!! 艦装が壊れた者は予備を使い!! 入渠を完了させた者、艦装が壊れていない者は地下通路を使って外に出てきてすぐに戦闘用意!! グリーザの迎撃に当たるんだ!! もう一度言う、みんな……諦めるな!! それをやるには、まだ早い!!」

そこで立ち上がったのはヴェールヌイだったのだ。

彼女は全員にそう呼びかけを行い、そんな彼女に同調するようにヴェールヌイの左右

にそれぞれ暁、電、雷が集まる。

「中々カツコよく決めるじゃない、響？ 凄くレディーっぽいわ！」

「別に……」。姉さんが以前私にやってくれたことを私も真似ただけさ」

「せめて、司令官が戻って来るまで時間稼ぎくらいはしないとね！」

「はい！ 第六駆逐隊、アッセンブル！ ですよね？ 響ちゃん？」

暁、ヴェールヌイ、雷、電の順でそれぞれがそう喋り、ヴェールヌイは電の言葉に「ああ」と頷くと暁はザラガスフュージョンを使い、ヴェールヌイ達もそれぞれ艦装を構える。

またヴェールヌイの指示に従いグルマンはハイパーエナジーシールドを即座に起動させ、暁達は一斉に砲撃をグリーザに開始する。

「そうだな、響の言う通りだ！」

「まだ諦めるには全然早いにゃしい!!」

そして先ほどのヴェールヌイの言葉を受けて、菊月や睦月……他の艦娘達も立ち上がり、再びグリーザと交戦を開始する。

『フェツフェツフェ!!』

彼女達の砲撃はグリーザに直撃するのだが、グリーザは相変わらず大したダメージを受けておらず、まるで意に返していないようだった。

しかし、そこで文月が「あれえ？」と何かに気づき、首を傾げ……それに臯月が「どうしたの？」と尋ねる。

「うんつとねく。なんか、グリーザ……攻撃が当たるようになってない？」
「えっ？ あっ!! ホントだ!!」

文月の言うように、グリーザは確かにダメージこそ大して受けてはいないのだが……今まで弾かれたりすり抜けられていた自分達の攻撃が先ほどと違いちゃんと「直撃」しており、そのことに臯月は訳が分からず頭に疑問符を浮かべる。

それはあの時、エックスが繰り出したエクシードエクストラッシュをグリーザが受けた際、グリーザが「エクストラッガー」を吸収してしまったが故だったのだ。

エクストラッガーには「思いを形にする力」がある。

エクストラッガーのその力によってグリーザは「無」ではなく、「存在」するものとなり、攻撃がしつかりと「当たる」ようになったのだ。

「なんで攻撃が当たるようになったのか分かんないけど、チャンスだ!! みんな聞いて!!」

そして臯月は攻撃が当たるようになったのならばまだ勝ち目はあるかもしれないと思いきオデバイザーの通信機能を使ってそのことをみんなに話そうとするのだが……。

グリーザは二重螺旋光線「グリーザダブルヘリックス」とい光線を鎮守府の研究所に向かつて放ち、ハイパーエナジーシールドは1度目はなんとか耐え抜くのだが……グリーザは続けざまに同じ光線をもう1度発射。

それにダークサンダーエナジーの力も込められていた為、その影響で研究所に保管してあったスパークドールズ達がカタカタと揺れ始める。

「こうなったら!! お願ひ、力を貸してゴモラ!!」

『サイバーゴモラ、ロードします』

そこで村雨がサイバーゴモラのカードをジオデバイザーに装填させるとジオデバイザーからサイバーゴモラのスパークドールズが出現し、彼女はサイバーゴモラをリードさせて実体化させる。

『リアライズ!』

そして村雨は「電腦怪獣 サイバーゴモラ」を実体化させ、彼女はサイバーゴモラに向かつて叫ぶ。

「ゴモラ!! 提督がピンチなの!! 力を貸して!!」

サイバーゴモラは村雨の言葉に「こくん」と頷き、サイバーゴモラは雄叫びをあげながらグリーザに向かつて立ち向かう。

「グルアアアアア!!!」

「みんな!! ゴモラを援護だ!!」

『了解!!』

菊月が一同にサイバーゴモラの援護を命じ、グリーザに砲撃を開始する中……不意に菊月は背後から気配を感じ、主砲を構えて振り返るとそこには……。

「よっ! なんかも大変なことになってんなあ!」

そこには傷だらけの光に肩を貸しているレ級の姿があった。

「レ級?! お前、なんでここに?! それに光さん?! どうしたんですかその怪我?!」

「いやあー、なんかお前等のご遊びに来た道中でこいつ倒れてる上にえらいことなつててビックリこいたよ」

「菊月………僕も戦うよ」

光はレ級から離れると彼は自分もグリーザに立ち向かおうとメビウスブレスを出現させようとするのだが……。

それをメビウスに止められる。

『光さん!! これ以上変身して戦ったら、僕は兎も角あなたの身体が持ちません!!』

「かもね。メビウス、それでも僕は………奈々を殺したあいつを絶対に倒さないといけないんだ。これ以上、誰も犠牲にしない為に! 仲間を守りたいんだよ!!」

「お、おい、あいつなに一人でブツブツ言ってるんだ? 怪我のせいでなんか変な幻覚でも

見てんじゃねーの？」

メビウスとの会話は他の人物には聞こえないため、不審な目を向けるレ級だが……菊月にはとてもそんな風には見えぬ、彼女はレ級に「黙ってる」と言つて光の様子をもう少しだけ伺う。

「僕自身はどうなつても良い!! 僕が死にかけたら……メビウスは僕と分離してくれ。これが僕にとって最後の戦いになるなら……。最後の僕の我儘を、聞いてほしい」

『光さん……分かりました。でも、光さんを死なせはしません!!』

メビウスは光の覚悟を感じ取り、光はメビウスの言葉に頷くと彼は左腕を構えてそこから「メビウスブレス」を出現させる。

「あれは……メビウスと同じ……。じゃあ、光さんが……メビウス？」

「今まで黙つていてごめんね？ 菊月」

光は申し訳無さそうに菊月に謝ると彼は左腕を掲げ、「ウルトラマンメビウス」へと変身する。

「メビウス!!」

メビウスとなった光はすぐさまグリーザにサイバーゴモラと共に戦いを挑み、立ち向

かう。

*

同じ頃、時雨は必死に夜空の名を叫びながら彼の姿を探すのだが……幾ら呼んでも、探しても返事もなく姿も見えず、彼女はどうすれば良いのか……分か
らず頭を抱えてしまう。

「夜空、どこなの……？　お願いだよ、返事してよ……」
顔を俯かせ、暗い表情を浮かべる時雨。

そんな時、彼女の目の前に1筋の光が現れ……彼女はその光の元まで歩いて
行くとそこにあつたのは「エクストラッガー」だったのだ。

「これは……」

時雨はエクストラッガーを手に取り、それをジッと見つめる。

また、一方で夜空はというと……彼は時雨がいる場所とは違う薄暗い場所を

途方もなく歩きながらエックスを探していたのだが……。

エックスの姿は見えず……。

また彼は徐々に自分の身体が薄くなっていくのに気づき、身体から力が抜けていくのを感じた。

「エックス？ どこにいるんだ……？ うっ……」

夜空はそのまま倒れ込み、既にまともに動くことができないでいた。

「……時雨……」

*

『セア!!』

「ギシャアアアアア!!!」

サイバーゴモラ、メビウスが同時に拳を叩き込むのだが……グリーザは全く

ダメージを受けておらず、両手を振るってその爪でサイバーゴモラとメビウスを斬りつける。

『ウア!?!』

「グル!?! ガアアアアア!?!」

サイバーゴモラは身体を回転させて尻尾をグリーザに叩きこむのだが、やはりグリーザには攻撃が当たるようになったと言えどダメージを与えることができず、グリーザはサイバーゴモラに掴みかかると膝蹴りをサイバーゴモラに叩きこんだ後、回し蹴りを喰らわせる。

『フェッフフェッフエ!! アツハツハツハ!!』

『シユア!!』

メビウスブレスから出した光の剣「メビウムブレード」をメビウスがグリーザに向かって振りかざし、グリーザを何度も斬りつけるのだが、グリーザはノーガードでそれらを全て受け斬り、もう一度メビウスはブレードを振るって斬りかかって来るとグリーザはそれを右手で掴みあげる。

『フェッフフェッフエ!!』

そのままグリーザは左手でブレードを叩き折り、目から放つ「グリーザビーム」を放って直撃させ、メビウスを吹き飛ばす。

『ウアアアアア!!!?』

地面を転がり、倒れ込むメビウス。

だが、それでもメビウスはフラつきながらもなんとか立ち上がり、バーニングブレイブへと強化変身。

そしてメビウスは炎のエネルギーを胸の部分に集中させて、巨大な火球を敵に放つ「メビュームバースト」をグリーザに向かって発射。

『ハアアアア、セアアアア!!!』

メビュームバーストは見事グリーザに直撃し、爆発したのだが……。

爆発の炎が張れると膝を突いているだけで未だに健在のグリーザの姿があり、それにメビウスは驚いた様子を見せる。

立ち上がったグリーザはメビウスに反撃しようとするのだが、そうはさせまいとサイバーゴモラが突進攻撃を背後から繰り出し、攻撃を受けるのだがグリーザは多少よろめく程度で振り返りざまに腕を振るってサイバーゴモラを殴り飛ばす。

『サイバーレイロンス、ロードします』

『サイバーブラックキング、ロードします』

そこへメビウスとサイバーゴモラを援護するためサイバー怪獣のエネルギーを込めた光線を放つ皐月と朝潮。

光線はグリーザに直撃するが、やはりグリーザに大したダメージを与えることができず、グリーザはサイバゴモラに掴みかかって持ち上げるとそのままメビウスの方へと放り投げる。

「グアアアアアア!!!」

『シエアアアア!!!』

メビウスとサイバゴモラの2体は倒れ込み、それでも尚メビウスもサイバゴモラも立ち上がるのだが……グリーザは胸部から放つ「グリーザダークライトニング」をサイバゴモラとメビウスに放つ。

それをサイバゴモラはメビウスを押し退かして鎮守府を守るようにして立ち塞がり、攻撃を受け……サイバゴモラは消滅。

「グルル……ギシャアアア!!!」

『ゴモラ!!』

グリーザの光線はそのままサイバゴモラが身を挺して守ろうとしたのも空しく真つ直ぐ鎮守府に向かい、張つてあつたハイパーエナジーシールドはその攻撃を受けて遂に耐えきれず破壊されてしまう。

『マズい!! 時雨をここから連れ出さなければ!!』

流石にこのままではマズいと思つたのか念のために護衛として待機させていた満潮

に時雨を連れ出すように命じ、それを受けて「了解！」と敬礼する満潮。

「でも、グルマン博士は……！！」

『私はここでスパークドールズ達を守る!! 早く連れて行け!! 良いか!? 時雨を守
r』

だが、その直後にグリーザの放った光線がグルマンを飲み込み、それを見た満潮は目を見開き悲痛の声をあげた。

「グルマン博士!! そんな……そんな……!! ぐっ……」

その光景に啞然とする満潮……だが、彼女はすぐにグルマンから最後に頼まれたことを思い出し、彼女は高ぶる感情をグッと抑え込んで時雨を外へと運び出すのだった。

満潮と時雨が脱出する頃には、既に研究室が殆ど破壊され……さらにはグリーザの放った光線の影響により、凶暴化したEXゴモラやツルギデマーガが出現。

「グルアアアア!!!」

「ギシャアアア!!!」

そしてグリーザは巨大な白い手のようなものを出現させ、次々に実体化した怪獣達やまだスパークドールズのままの怪獣達を一気に取り込んでいき、最後にはEXゴモラをも吸収してしまうのだった。

『アツハツハツハ!! ヒツハツハツハ!!』

するとグリーンザの姿に変化が起き、「思いを形にする力」を持つエクストラッガーを取り込んでしまったことが原因でグリーンザには「取り込んだものを無に変換する」能力がなくなり、吸収したスパークドールズは無に変換させることが出来ず体の中にため込んでしまう。

その結果……グリーンザは新たな姿へと変化したのだ。

体中に突起物を備えた荘厳な魔人の様な姿……「第三形態」へとグリーンザは変貌。

『フエツフエツフエツフエ!!』

グリーンザは徐々に満潮や時雨……エックスのカラータイマーのある場所へと近づき、満潮は時雨を守るように主砲を構える。

「時雨にも、司令官にも……アンタに手は出させない!!」

「勿論だ!! 司令官、時雨、エックス……これ以上奪わせはしない!!」

そこへ菊月を始めとして暁、ヴェールヌイ、電、雷、暁、朝潮、荒潮、満潮、睦月、如月、文月、菊月、皐月、村雨、夕立、レ級が駆けつける。

「ここから先は、絶対に行かせないっぽい!!」

「虚無だかなんだか分からないけど、悪い子にはお仕置きよく〜!」

「私もきくりん達には借りもあるし、手伝ったちやうよく!」

夕立、荒潮、レ級が先陣を切って主砲を構え砲撃をグリーザに繰り出し、他のメンバー同様にグリーザをこれ以上近づけさせないよう……せめて時雨が夜空とエックスを連れ戻すまでの時間を稼げるように砲弾を彼女達はグリーザに向かって撃ち続ける。

「怪獣達、私達に力を貸して!!」

朝潮その言葉を合図に、一同はサイバー怪獣のカードをジオデバイザーにリードしてサイバー怪獣のエネルギーを宿した光線を一齐にグリーザに放つ。

だが、直撃こそしているもののグリーザにやはり大したダメージは与えられず、一同は歯がゆい表情を浮かべる。

そこへメビウスが跳び蹴りをグリーザに繰り出して来たのだがグリーザは腕を振るってメビウスを払いのけ、ついでに吸収した「宇宙恐竜 ゼットン」の能力、「一丁度の火球」をメビウスに喰らわせる。

『ゼットーン!?!』

『ウグアアアア!!!』

続けてグリーザは「宇宙恐獣 Xサバカ」の能力である右腕から発射する小型爆弾

「小Xサバカ」を発射し、メビウスの身体に貼り付けて爆発させる。

『ウアアアアアア!!!!?』

攻撃を受け、メビウスはその場に倒れ込んでしまう。

『ぐっ……!! もう一度バーニングメビウムダイナマイトが使えれば……!!』

弱っている状態で無ければグリーザが実体化している今、バーニングメビウムダイナマイトで倒せるかもしれないのにとメビウスは考え、メビウスは悔しそうに地面を殴る。

*

そして、時雨はというと……。

彼女はエクストラッガーを手に持ったまま、きつとどこかにいるであろう夜空に必死に呼びかけていた。

「夜空…… 僕の声、聞こえてる? 夜空はいつも、僕や……みんなのこと、守つ

てくれてたよね? エックスが来てからは一緒に戦ってくれたりもした!! だから、今

度は僕が……夜空を助けたい!!」

時雨は目尻に涙を浮かべながら……エクストラッガーを胸に抱きながら必死に夜空に呼びかけ、さらに言葉が続ける。

「だから、どうか……返事をして欲しい!! だって、夜空にはまだやり残したところあるでしょ? 怪獣達と共に生きる未来を作りたいんじゃないの!? 僕は……僕は君と一緒にその夢を追いかけて!! どんな夢も、未来がないと叶わないんだよ! 今立ち向かわないと、未来なんて来ないんだよ!!」

そんな彼女の声が僅かに届いたのか……別の場所で倒れていた夜空の身体がピクリと動く。

「……時雨」

一方で現実世界で満潮とヴェールヌイが時雨の限界値が近いことに気づき、強制的に装置を止めようとするのだが……。

「マズい!! 時雨も限界だ!! 急いで止めないと!!」
「分かったわ!!」

ヴェールヌイに言われ、装置を止めようとする満潮だったが……それを拒むかのように……時雨が満潮の腕を掴んで引き止める。

「時雨!」

そして時雨は泣き出しそうになるのを堪えながら、彼女は夜空に訴え続ける。

「また一緒に、クリスマスにデートしようよ!! また夜空の為にお弁当も作ってくる!!
また一緒に星空を見上げたい!! また僕や夜空、みんなと色んなことをしたい!!
また夜空に僕の頭を撫でて欲しい!! また君やゴモラと一緒に過ごしたい!!
ま
た
・
・
・
・
・
・
ま
た
・
・
・
・
!!」

彼女は唇を噛み締め、両手を強く握りしめ……最後に一言、夜空に向かって叫ぶ。

それと同時に、夜空もまた重い身体を起き上がらせようと上半身をなんとか起こす。
「一緒に無茶な夢を追いかけよう!! だから帰って来て!! 夜空あ!!」

その瞬間、時雨の持っていたエクステバイザーが眩い光を放つ。

「しぐ、れ……………しぐれ……………時雨!!!」

「っ!? 夜空……………?」

不意に自分の名を呼ぶ夜空の声が聞こえ、突然目の前に虹色の光の柱が彼女の前に現れるとその中から夜空が姿を現したのだ。

それと同時に、エックスのカラータイマーに僅かに光が……………。

*

現実世界では……グリーザを時雨やエックスのカラータイマーに近づけさせまいと艦娘達の応戦が未だに続いていたのだが……。

グリーザは彼女達の放つ光線のエネルギーを全て吸収。

さらにグリーザは巨大な光弾を放つ為のエネルギーをチャージ。

「そんな……攻撃が吸収された!?!」

「攻撃が当たるとなっても……これじゃ……!」

如月と皐月が弱音を吐き、メビウスも身体へのダメージが深刻でもはや立ち上がることにすら困難。

殆どのメンバーが今度こそ本当にダメなのかと諦めかけたその時……。

「攻撃の手を緩めちや、ダメですよ皆さん!!」

『ウルトラマンの力を、チャージします』

戦闘BGM「Xの戦い」

ウルトライザーによる光線がグリーザのチャージ中の光弾に直撃し、それに一同が振り替えるとそこにはポロポロで頭から血を流しながらも、ウルトライザーを構えて笑み

を浮かべていた奈々の姿があつたのだ。

「副………司令………!?」

それに菊月は目を見開き………さらにそこへ………。

「俺達を忘れるなあ!!」

「マスケツティ、リジエクト!!」

行方不明となつていたタカトとリヨーガの乗っていたスペースマスケツティがグリーザに光弾を撃ち込みながら地球へと帰還し、ジオアラミスとジオマスケツティを分離させ、分離したジオマスケツティはグリーザのチャージ中の光弾に直撃し、光弾を打ち消すことに成功。

「あくあ、勿体ない………」

「着陸するぞ、リヨーガ」

ジオアラミスとタカトは着陸させ、ウルトラライザーを構えて2人はみんなの元へと駆けつける。

「ちよつと、3人共どこ行つてたのさ〜!?」

睦月が頬を膨らませながらタカト、リヨーガ、奈々の3人に文句を言い、リヨーガは照れ臭そうにしながら「すまない」と謝罪する。

「あの後、気づいたら月の裏側で迷子になっていてね〜」

「私は爆発の衝撃で脱出装置が誤作動でも起こしたのか、物凄い勢いで吹っ飛ばされましてね。今まで木の枝に引つかかかって気絶してたんです。いやー、あの爆発で生きてるって私運良すぎですねー」

つまり、あの時奈々が脱出してないように見えたのは「物凄い勢いで見えなかった」からであり、奈々は「アハハハ」と呑気に笑っていると顔を俯かせた菊月から無言の腹パンを喰らわせられる。

「ぐふっ!？」

「なに呑気に……!! 呑気に笑ってる!! 私がどれだけ……どれだけ……!!」

身体を震わせながら……次の瞬間には菊月は奈々に抱きつき、それに奈々は一瞬戸惑ったものの彼女は笑みを浮かべながら菊月を抱きしめて頭を撫でる。

「私が鎮守府の可愛い娘達残して死ぬ訳ないじゃないですか! 特に……菊月ちゃんを置いては行きませんよ?」

「……このクソ野郎……!」

「えっ、この状況で罵声?」

目尻に涙を溜めて顔を赤くしつつ、その顔を見られまいと菊月はそそくさと奈々から離れると彼女は再びグリーザの方へと顔を向ける。

「アンタ等、イチャつくのは後にしてみんなで司令官達を守り抜くわよ!! きつとあともう少しの筈!!」

「誰もイチャついてなんかいないが、了解した!」

満潮の言葉に菊月が頷き、一同は再びグリーザに攻撃を開始する。

『奈々……生きて……たんだ。良かった、良かった……ホントに!!』

『彼女達が頑張ってるのに……、僕達が立ち上がらない訳には、行きませんよね、光さん!!』

『ああ!!』

そしてメビウスも再び立ち上がり、艦娘達と共にグリーザへと立ち向かう。

*

また、夜空は時雨は……。

「時雨……」

「夜空・・・・・・・・」

時雨は泣き出しそんな顔を見せながらも、彼女は笑みを浮かべつつ、夜空に抱きつき・・・・・・・・夜空もまた彼女を強く抱きしめた。

「ごめんな。また、約束破りそうになった」

「別に良いよ。だって、君がどこかに行つてしまいそうになったら・・・・・・・・僕が、絶対見つけ出すから、連れ戻すから」

「ありがとう。俺を見つけてくれて。時雨の想いが、俺を呼び戻してくれたんだ」

その時、夜空のジオデバイザーが金色に光輝き、それを夜空が手に取る。

「そうか、エックスもずっとここにいてる！俺の想いと共に!! エックスと共に過ごして来た記憶が、育んで来た絆が全て俺の中に刻まれてる!!」

「夜空・・・・・・・・」

時雨は静かに夜空の名を呼び、彼は時雨に対して頷くとそこで時雨の意識が現実世界へと戻され、彼女は素早く起き上がってベッドから降りてエックスのカラータイマーを見つめる。

「時雨!!? 帰つて来たの!? 司令官は・・・・・・・・!」

「暁・・・・・・・・ 夜空は・・・・・・・・ エックスは、帰つて来るよ!!」

そして夜空はジオデバイザーに・・・・・・・・ エックスに向かって呼びかけ続ける。

「エックス、帰って来てくれ!! もう一度、もう一度繋がろう!! 俺とユナイトしてくれ!!」

すると、夜空の持つジオバイザーが光輝き……金色の「エクステバイザー」へと変化したのだ。

「エックス!!」

『夜空!! 君たちの記憶が、想いの強さが……私を蘇らせてくれたんだ!! ありがとう!!』

それに夜空は笑みを浮かべ、頷く。

「行こう、エックス!!」

『ああ、行こう夜空!!』

『ユナイトだ!!』

エクステバイザーの上部のボタンを押し側面のパーツをX字に展開したXモードに変形させるとエックスのスパークドールズが出現、それをリードさせた後、夜空はエックスデバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

「エックスーーーーー!!!」

『エックス、ユナイトッ!!!』

『イイツサアアア——ッ!!』

*

夜空は「ウルトラマンエックス」へと変身し、復活。

エックスは大地へと降り立ち、それを見て時雨はエックスに向かってサムズアップ。

それにエックスは頷きながらサムズアップを返し、メビウスの元まで行く右手をかざしてメビウスにエネルギーを分け与える。

「まだやれますよね? 光さん!! メビウス!!」

『夜空……お帰り』

『勿論だよ、エックス!!』

またエックスが復活する光景を見てリョーガは一言ほそりと呟く。

「やはり、愛の力っていうのどんなに強力な武器よりも強力だね」

夜空はエクストラッガーを取り出し、エックスは「エクシードX」へと強化変身。

『エクストラッガー!!』

メビウス、エックスの2人はグリーザを挟み込むようにしてグリーザに攻撃を仕掛けるのだが……。ダークサンダーエナジーの影響を受けたジラーズの能力「体内放射」を使い、2人のウルトラマンを吹き飛ばす。

『ウア!!?』

それでもなんとか攻撃を仕掛けようとエックスはジャンプしてエクストラッガーをグリーザに振り落とすのだが……。

『キユイイイ!!』

グリーザは「エレキング」の電撃を放って撃墜し、倒れ込んだエックスに向かってグリーザが迫ってくるがそこへメビウスが割って入り、グリーザに何度も拳を叩き込む。

だが、グリーザはそれをもせず腕を振るってメビウスを殴り飛ばし、立ち上がったエックスの振るったエクストラッガーも片腕で受け止めた後、押し返して両手をエックスに突きつけてゴモラの「超振動波」を放ち、エックスを吹き飛ばす。

『デュアアアア!!』

『今のは……!!……ゴモラの超振動波!』

『それだけじゃない、他の怪獣達の技を……。奴は使っている……。!』

グリーザはエックスに向かって駆け出し、それに対抗するようにエックスもまたエッ

スラッガーを構えながら繰り出す突進斬り「エクシードエクスラッシュ」を繰り出す。
 『エクシードエクスラッシュ!!』

だが、グリーザはそれを両腕を振るってあっさりと跳ね返し、エックスは岩山に激突し、エクスラッガーも手から離れて地面に突き刺さる。

さらにゼットン[?]の火球をグリーザは倒れ込んだエックスに向かって次々に撃ち込む。

『ウグアアアア!!』

「皆さん!! エックスの援護を!!」

そこで奈々が指示を出し、一斉にグリーザに攻撃を加えるのだが……グリーザはエレキングの電撃を放ち、奈々達を吹き飛ばす。

『きゃああああ!!』

即座にグリーザは倒れ込んだエックスに向かって掴みかかり、「暗殺怪獣 グラール」の能力を使ってエックスのエネルギーを吸収。

『ウグアア!!』

そのエネルギー[?]を利用し、黄金の熱線を零距离でグリーザはエックスに撃ち込む。

『デヤアアア!!』

続けざまにグリーザは何発もゴモラの超振動波をエックスに放ち、メビウスはエックスを助けようとグリーザに掴みかかるのだが……グリーザは背中から熱線を発

射しメビウスにダメージを与えながら引き離す。

『グウウウ!!?』

「光さん!! メビウス……!! ゴモラ、そこにいるんだろ? 俺の声が聞こえる

だろ!」

夜空はグリーザの攻撃を受けながらも、グリーザの中にいると思われるゴモラに呼びかける。

「この地球で、共に生きるんだ!! 思い出してくれ!!」

「夜空が……ゴモラに呼びかけてる……」

また、時雨は夜空がゴモラに呼びかけていることを不意に感じ取り彼女もまたゴモラに必死に声をあげ呼びかける。

「ゴモラ!! 夜空の声を聞いて!! 抗うんだ!! グリーザなんか、負けるな!!」

*

その時のことである。

突然、グリーザの足下が爆発したのだ。

それによってグリーザのバランスを崩し、その隙を狙ってエックスはグリーザから離れることに成功。

「へへっ、弁慶の泣き所ってね!!」

それはいつの間にかグリーザのすぐ傍まで接近していたレ級による砲撃であり、菊月は「あいついつの間にあんなどころに……」と驚いていた。

またエックスがグリーザから離れると同時にメビウスが地面に突き刺さったエクストラッガーを手に取り、レ級の攻撃によってフラついたグリーザの一瞬の隙を突き、エクストラッガーをグリーザの胸部に突き刺したのだ。

『セアアアア!!!!』

それによる効果か……、ゴモラの声が……夜空の耳に届いた。

「ギシャアアアアア!!!!」

「ゴモラ!!」

『応えているんだ。君の、夜空の声!!』

するとエクストラッガーがグリーザの中に取り込まれ、エックスが通常形態に戻ると突然グリーザの様子がおかしくなり、身体から無数の光が溢れ出たのだ。

『なんだ!?!』

その光はグリーザによって取り込まれたスパークドールズの怪獣達であり、怪獣達はエックスのカラータイマーの中へと入っていく。

『これは……怪獣達、私に力を貸してくれるのか!?!』

「みんな……」

そしてそれを見て何が起こっているのか……察したりヨーガは丁度こちらに戻って来たレ級にあることを尋ねる。

「レ級くん、少し尋ねたいのだが……前に君に頼んでいたもの用意してくれていいかな?」

「んっ? ああ、あるよ!! アンタに渡されてたデバイスに私や私の仲間の深海棲艦の一部のデータ……ちゃんと入れといた!! まあ、一部『信用できない!』って拒否ってる奴もいたけどね」

「少しでもあるなら十分だ!! そのデータを全てエックスに転送するんだ!! まだ実戦段階ではないが……今ならデータだけでもエックスの力になる筈だ!!」

リョーガの言っている意味は分からないが……レ級は首を傾げながらも言われた通り、預かっていたジオデバイザーを取り出してデータをエックスに転送。

またリョーガも……全ての「艦娘」のデータをエックスへと転送する。

「これは……怪獣だけじゃない、艦娘や深海棲艦の力も……!! みんな、

一緒にユナイトだ!!」

怪獣、艦娘、深海棲艦、その幾つものサイバーカードが、エクステバイザーに次々に装填され、エックスにゴモラーマーの胴体、右肩にレ級の尻尾に装着された主砲、エレキングアーマーの左肩、さらに左腕にはベムスターアーマーの盾、左手にグビラアーマーのドリル、右手にはゼットンアーマーの腕、両肩の上に時雨アーマーの主砲、背中には夕張アーマーの艀装が次々と装着された姿へと変わったのだ。

最後に、エックスは右手にエクストラッガーを持ち、エックスと夜空の2人は叫ぶ。

『「アルティメットハイブリットアーマー!! アクティブ!!!」』

怪獣、艦娘、深海棲艦……それらの力を全て合わせた究極の姿……「ウルトラマンエックス アルティメットハイブリットアーマー」がここに誕生した。

挿入歌「Unite く君とつながるためにく」

『後は、任せたよ』

それだけを言うとメビウスはその場から消え去り、その言葉にエックスと夜空は頷く。

『メビウス……!』

「ああ、任せてくれ!!」

グリーザは目から放つグリーザビーム、頭部からの渦巻状光線グリーザボルテック

ス、二重螺旋型光線グリーザダブルヘリッククス、胸部から発射する黒い稲妻グリーザ
ダークライトニングを一斉にエックスに向かつて発射するが……。

エックスは全てベムスターの盾で吸収し、そのままそっくり光線を撃ち返し、グリー
ザは自分の技が全て直撃し、大きく後退する。

それでもなんとか反撃しようとするグリーザは殴りかかるのだが、ゼットンの腕で拳を受
け止められ、エックスはグビラのドリルを回転させてグリーザの身体に突き刺す。

『シエア!!』

『フェツフェツフェ!!』

さらにそのままエックスはゴモラの爪でグリーザを切り裂くと時雨、夕張、レ級の主
砲から砲弾を何発も発射して攻撃し、グリーザは身体から火花を散らす。

『アヤアアアア!!』

エックスはすれ違いざまにエクストラッガーでグリーザを斬りつけ、グリーザはすぐに
振り返ってエックスに反撃しようとするグリーザビームを放つがエックスの胸部に吸収さ
れ、ゼットンの波状光線を発射してグリーザに直撃させ、ダメージを与える。

『アツハツハツハ!! アツハツハツハ……!!』

そこからエックスはエレキングアーマー肩から電撃の鞭を出してグリーザを拘束し、
身体を横に高速回転させながらフルスイングして投げ飛ばす。

『ヒハハハハ!! ヒハハハハ!!』

それを受けてグリーザは地面へと倒れ込み、なんとか立ち上がるが……。

「行くぞみんな!!」

そしてエックスは最後の一撃を放つ為、両腕を左側へいったん振りかぶってから胸部から放つ最大の必殺光線を……エックスは放つ。

『デヤアアアア……!!』

『ハイパーウルティメイト!!! ザナデイウム!!!』

「ハイパーウルティメイトザナデイウム」がグリーザに直撃し、グリーザは笑い声のようになく気味な声をあげながら……倒れ、大爆発したのだった。

『アハ、アハハハハ!! ハハハハハハハ!!』

遂にグリーザを今度こそ完全に倒し、エックスはアーマーを解除。

それを見て時雨達は「やったあああああ!!!」と大喜びしてはしゃぐ。

「……ゴモラ」

夜空はゴモラのスパークドールズを見つめ、また周りにいる怪獣達や艦娘、深海棲艦のサイバーカードを見つめる。

『やったな、夜空!』

「ああ、みんな、ありがとう!! 艦娘も、深海棲艦も、怪獣も……」

「よく頑張ったわね、夜空！」

「えっ？」

その時、夜空の目の前に……突然自分の両親が姿を現したのだ。

「良い仲間を持ったな」

「これからも、仲間を大切にするのよ」

両親のその言葉に、夜空は笑みを浮かべて頷くのだった。

「……勿論だよ、父さん、母さん」

*

その後……。

『ぶはあく!!』

半壊した鎮守府の瓦礫の中からグルマンが瓦礫を押し退かして飛び出し、「死ぬかと思つた〜!!」と咳き込みながら鎮守府の外に出てきたのだ。

「グルマン博士!?!」

そのことにヴェールヌイや満潮が驚くが……そこでグルマンが彼は夜空がこ

ちらに向かつて歩いて来ていることに気づく。

『おお!! 提督、無事だったか!?!』

「いや、グルマン博士こそ無事だったのか!?!」

ヴェールヌイと満潮はグルマンの元へと駆け寄り、また他のメンバーは夜空の存在に気づくと一同は彼の周りに急いで集まる。

「夜空………」

特に時雨は誰よりも早く、真つ先に夜空の元に駆け寄り、夜空はうつすらと笑いながら彼女の頭を撫でる。

「んっ………」

「時雨………みんな、ありがとう。みんなのおかげで………」

夜空がそこまで言いかけた時、ヴェールヌイが夜空の手に持っていたエクステルバイザーを取り上げる。

「いやはや、まさかエックスが司令官のデバイスの中にいたとは………私も少しの間とはいえウルトラマンだったのに気づかなかったよ」

すると今度はタカトがデバイザーをヴェールヌイから取り……。

「はっ? いや、ちよつと待てどういうことだ!?! なぜエックスが………」

「そう言えばタカトは知らなかったね」

「んっ？ お前は知ってたのかりョーガ!?」

タカトとリョーガはそんな会話を繰り返して、すると今度は村雨がエクステバイザーをタカトから取ってエックスに話しかける。

「ねえエックス、次は私とユナイトしましょ♪」

『是非とも!!』

「オイコラ」

夜空は村雨からデバイザーを奪い返し、一同に落ち着くように指示する。

「みんなには後で最初からちゃんと説明する!! 取りあえずまずは……鎮守府の損害の確認と、後片付けだ!!」

「えっ、今から!? 少し休もうよ」

夜空のその言葉を聞いて皐月はその場に座り込むが、そんな皐月を文月と如月、レ級が立ち上からせる。

「文句は言わないでやりましょ？ 皐月ちゃん？」

「そうよ、こういうのは早い方が良いんだから！」

「そうそう、私も手伝うからさ」

また、そんな彼等の光景を遠目から光が眺めており、みんながまだまだ元気そうなどころを確認すると身体の痛みを堪えながら、その場を立ち去ろうとする。

「光!!」

だが、そこへ光を奈々が呼び止めたのだ。

「そんな身体で、どこにも行かせませんからね? 傷の手当てくらいはさせてください

よ!! 光も、頑張っていたみたいですし」

「……. それじゃ、お言葉に甘えようかな?」

「素直でよろしい」

光は少し考え込んだ後、奈々の言葉に甘えることにし、彼女に腕を掴まれて引つ張られるのだった。

「ちよつ、痛い痛い痛い!! 強く引つ張りすぎ!?!」

そして一同が鎮守府の後片付けを始める中、途中で夜空は一度立ち止まりエックスに声をかける。

「エックス、最高のユナイトだったな!」

『ああ!!』

するとそこへ時雨が「夜空!」と彼の名前を呼びながら駆け寄り、そつと夜空の手を彼女は指を絡めるようにして繋ぐ。

「夜空、大好きだよ!!」

「俺もだ、時雨」

満面の笑顔の時雨に釣られるように、夜空も満面の笑みを浮かべ、2人は手を繋いだまま鎮守府へと歩いて行く。

『2人とも、空を見てみろ』

そこでエックスが2人に声をかけ、夜空と時雨が空を見上げるとそこには太陽の周りを囲むように、虹がかかっていたのだった。

「雨が止んだって……ことかな？」

「だね！」

劇場版

パート1 『地獄の復活』

宇宙には、1つの伝説がある。

全ての始まり、光の巨人……。

彼は、宇宙のバランスを保つため様々な世界で戦い続けている。

『この地球でも、神話や伝説が光の巨人について語っているのだ!!』

ここは「西崎 夜空」という青年が提督を務める鎮守府。

そこにある研究所にてグルマンはりョーガとヴェールヌイに光の巨人の伝説について話すのだが……。2人は作業中でグルマンの話を全く聞いておらず、それにグルマンは「おい！」と怒鳴る。

『ちゃんと話を聞かんか!』

「その話もう耳にタコができるくらい聞いたよ。それより見てよこれ、私が開発した新型VRシステム。これと特殊な手袋やブーツを装着すると本当にゲームの世界に入ったような感覚になって、しかも自分の好きなアニメや漫画、特撮、ゲームのキャラクターに変身できるんだ。面白い玩具だろう?」

グルマンの話に呆れた表情を浮かべたりヨーガは、そんなことよりも「自分の発明したこれ凄いだろう」とでも言うようにドヤ顔をしながらその新型VRシステムをグルマンやヴェールヌイに見せびらかす。

『どうかそれレディ・プ○イヤーだろ!!?』

「私はスパイダーマンかスーパーマンになりたいなあ……つてそうではなく、ちゃんと仕事してくださいリヨーガさん」

ヴェールヌイに注意され、「え〜!」とふて腐れるリヨーガ。

『それよりも私の話を聞け!! 確かに私のこの話は何回もした。だが、始まりの巨人……』『ウルトラマン』を召喚する『ベーターカプセル』を完成させた……』
「というのは初耳だろうか?」

「えっ!?」

それを聞いてリヨーガとヴェールヌイは驚いた表情を浮かべ、グルマンは右手に持ったスティック状のアイテム、「ベーターカプセル」をこれ見よがしに2人に見せつけた。
「いつの間になつたんだグルマン……」

『何時も遊んでばかりいるお前とは違うのだよ、リヨーガ!』

グルマンの言い草に若干ムスツとなるリヨーガだが、それよりもグルマンの作ったベーターカプセルで本当にウルトラマンを呼び出せるのかどうかの方が気になるため、

彼は早くグルマンに性能を試してみてくれと頼む。

『焦るな焦るな！ では行くぞ？ 私が幼い頃に見た光の巨人はこうして……！』

デユワ!!』

グルマンはそう言い放ちながらベーターカプセルを掲げ、するとベーターカプセルが眩い光を放つ。

そして次の瞬間……ベーターカプセルは爆発し、一同はそれによつて黒焦げになつてしまつていた。

「ゲホゲホ!! ぶはははは!! 大見得切つた割には大失敗じゃないかグルマン!! ハッハッハ!!」

「ケホケホ!! 博士、どうやら、まだまだ改良が必要みたいだね……」

*

『かんぱーい!!』

鎮守府の会議室では出張でオーストラリアの怪獣共生区から帰つてきた夜空。

守府のメンバーはそれを祝ったちよつとしたプチパーティーを開いており、夜空は自分の為にパーティーを開いてくれた時雨達に感謝の言葉を述べる。

「みんなありがとう。嬉しいよ」

「うん！ でも、出来れば僕も一緒に行きたかったんだけどなあ」

時雨は夜空と一緒にオーストラリアに行けなかったことを残念がり、悲しそうな顔を浮かべていると夜空は彼女の頭を撫でて「ごめんな？」と謝罪する。

「今回は俺一人で行かないとダメみたいだったんだ。すまなかつたな、しばらく一緒にいられなくて……」

「ううん、夢の為だもん。謝ることなんてないよ、提督」

そんな夜空に時雨は優しく微笑みかけ、そんな2人に対してニヤニヤした顔の村雨が2人の元にやってくる。

「とか言ってるけど時雨姉さんったらホントに寂しそうだったんですよ提督？ しかも姉さんったら提督の予備の業務用の服を抱きしめて寝てたり……だからこれからは不在だった分たつぷりと時雨と幸せな時間を過ごしてあげてくださいいね？」

「ちよ、ちよつと村雨!?! な、なに言ってるのさ!?!」

村雨の言葉に時雨は顔を真っ赤にし、チラリと横にいる夜空に目を向けると彼は口元を押さえて同じように顔を赤くし、「そうなの?」とでも言うような視線を向けており、

それに時雨はさらに顔を真っ赤にし、耐えきれなくなったのかその場から逃げるようにデスクの上にあるお菓子を取って来る。

「あ、あうう、ぼ、僕ちよつと遠くの方にあるお菓子取ってくるね!!」

「あつ、時雨! おい、村雨、あんまり時雨をからかうなよ」

夜空はそう言いながら呆れた視線を村雨に向け、それに対して村雨は「ごめんなさい」と苦笑しながら謝る。

「というか、なんでワザワザ会議室でパーティー開いてんだ!? 作戦デスクの上でものを食べたらいけないだろ!」

するとそこで菊月が会議室でお菓子を食べることに意を唱えてきたのだが、そんな彼女を皐月が「良いじゃん別に!」と肩をポンポンと叩く。

「良くない!! 緊急事態の時とか……」

「菊月、良いんだよ。みんな俺の為に用意してくれた訳だし、俺が許可する。今日だけ許してくれないか?」

そんな菊月に夜空がそう頼み込み、菊月は不満な顔を浮かべていたが、提督である夜空の頼みならば仕方がないと思つたのか彼女は渋々承諾するのだった。

『……ところで、時雨。照れ隠しなのは知らないが、君は先ほどからクッキーをパクパク食べているな? そのクッキーに含まれる糖質は48%、脂肪は18グラム

だ。そんなに食べていると太っ……」

夜空の腰に装着されたエクステバイザーからエククスがそんなことをクツキーを食べている時雨に言ってくるのと彼女は頬を膨らませてエクステバイザーを取り上げ、デスクの上に俯せに置く。

『お、おい！ 何も見えない!! 表にしてくれ時雨!!? ちょっと、夜空も助けてくれ!!』

「今のはエククスが悪い」

その時、突如警報アラームが鳴り響き、夜空はすぐにエクステバイザーを手に取って何があつたのかを調べる。

調べてみると「婆羅慈村」と呼ばれる場所で異常な電磁波が発生したという通報があり、夜空はその村の名前に聞き覚えがあつた為、どんなところだったかを思い出す。

「確かここには、縄文以前の古代遺跡があつた筈……確か、婆羅慈遺跡っていう……」

「数日前に崖崩れで謎のピラミッドが発見されたってニュースでやっていたわね」

雷もまたその場所を聞いて数日前にやっていたニュースの内容を思い出していた。

「場所もウチの担当地域だし、念のため調査を行った方が良さそうだな。時雨、如月、

荒潮、菊月、夕立、響は俺と一緒に現場で調査を行って貰う。奈々はもしもの為、み

んなで鎮守府で待機しててくれ」

夜空はすぐさま一同に指示を出し、それに一同は「了解!!」と返事をする。と早速出撃の準備に取りかかり、夜空達は現場へと向かうのだった。

*

その後、彼等は遺跡へと辿り着き、夜空はエクステバイザーを構えて異常がないかを調べ、時雨達は周囲を警戒しながら進む。

「やっぱり、あのピラミッドが異常の中心っぽいな」

『ああ。それになにか、ここには特別な力が充満しているようだ。夜空も感じるか?』

エックスの問いかけに、夜空は「ああ」と頷くが、時雨達にはよく分からなかったらしい。

「僕達は特に……」。 やっぱりそれって夜空とエックスがユナイトできるからか

な？」

「恐らくはな」

夜空達はそのま前に進むかとするのだが……その時、突如足下から「踏んじやダメだ!!」という声が聞こえ、見るとそこには一人の男性がおり、彼は手で何かを守るかのように押さえているようだった。

すると青年はそこに落ちていた破片のようなものを拾いあげ、興奮した様子で夜空にそれを見せる。

「見てくれよこれ!! 何かの石像かも!!」

「……いや、これは蚊取り線香のブタの破片ですね……」

しかし、よく見ればそれは石像などではなく、蚊取り線香のブタの破片であり、夜空がそれを伝えると男性は「ええ!?!」と驚いた顔をして破片をジッと見つめると……。

確かにそれは蚊取り線香のブタの破片であり、男性は残念そうな顔を浮かべる。

「ホントだ……! 新しい古代の遺物かもって期待したんだけどな……」

「父さーん!!」

そこへ、青年を「父さん」と呼ぶ中学生くらいの一人の少年が青年の元に「何してんの?」と駆け寄り、青年の手に持っている線香の破片を見て少年は呆れたような溜め息を吐く。

「父さん、もしかしてまたその辺に落ちてたゴミを古代の遺跡か何かだと勘違いしたの？　一応考古学者なんだからもつとよく見てちゃんと確認しなよ」

少年に注意され、青年は「あはは、面目ない」と苦笑しながら頭を下げ、謝罪し、夜空と時雨は顔を見合わせて首を傾げる。

「あの、あなたは？」

「あつ、すいません。　鎮守府の人達ですよね？　僕の名前は『マドカ・ヒカル』。　大
学で考古学者……を、一応やっております。　異常電波の通報をしたのも、僕
です」

その男性「マドカ・ヒカル」は苦笑いしながら自己紹介を終えると彼等に自分が鎮守府に通報を入れた人物であることを説明。

「それとこの子は『マドカ・アムイ』、僕の息子でたまに助手としても色々と手伝って貰ってるんです」

ヒカルは「アムイ」と呼ばれた少年の肩に両手を置いて夜空達に紹介し、アムイも「よろしくお願いします！」と元気よく頭を下げる。

「鎮守府で提督をやっている西崎　夜空です。　ヒカルさん、早速詳しい話を聞かせて欲しいんですが……」

夜空がヒカルに事情を聞こうとしたその時、別の場所から何やら誰かが騒いでいる声

が聞こえ、声のした方向を見るとテレビの撮影をしているものと思われる人達があり、それを見て何か嫌な予感を感じたヒカルは彼等の元へと駆け出し、それに夜空達もついていく。

「さあ皆さん!! あなたの目は、あなたの身体を離れて、『カルロス黒崎』と共にこの不思議な時間の中に入って行くのです!! 開け、ゴマア!!」

そこにいたのは自称トレジャーハンターでwebTVタレントにして、インターネットTV放送会社『カルロスコミユニケーションズ』の経営者であると同時に放送局『カルロスタワー』のオーナーである大富豪「カルロス黒崎」という男性がカメラの前でそう叫びながらあるスイッチを取り出し、ボタンを押すと遺跡の壁が爆発。

「ちよつと!! 黒崎さん!! あなた遺跡で爆薬を使うなんて何考えてるんですか!?!」

ヒカルは爆薬を使って遺跡に穴を開けた黒崎に怒り、彼を睨み付けるのだが……黒崎はそれに気付かず悪びれた様子も一切ない。

「やあやあ! マドカさん!! それにそこにいるのは? 鎮守府の人達か!! いやはや、オムレツを食べたきや、卵を割らないとねえ? 冒険も同じだよ! 残念だけど、話している暇はないんだ。よし行くぞ!!」

「ちよつと!!……ちよつと!!……ちよつと!!」

黒崎はヒカルの話など一切聞こうとせず、開けた遺跡の穴から遺跡の中に入ろうとス

タツフと一緒に進むのだが……そんな彼にイラついたのか懐に回り込んだ菊月が一発……。

「……………」

『ドゴオ!!』の無言の腹パンを喰らわせた。

「うぐおつ……………!!? い、良いパンチ持つてるね君……………」

「遺跡は卵じゃないぞ。遺跡というのはもつと慎重に調べて行くもんだと思うが?」

そんな菊月の腕を「ちよつと!」と時雨が引つ張り、一般人に手を挙げたのはマズいのではないかと時雨は菊月に言い、それに菊月「あつ……………」とやってしまったという顔を浮かべるが……………。

撮影スタツフは顔を背けて知らん振りしており、カメラにも撮られていなかったらしく、そのことから黒崎はあんまり人望のない人物なんだな……………ということが分かった。

「でももうやってしまったものは仕方がないし! 後は進むしかないでしょ!!」

黒崎もあんまり気にしていないようだったが、開き直って再び遺跡の中へと進もうとし、ヒカルは止めようとするのだが……………その時、地響きが鳴り響き……………突如地面から大型肉食恐竜のような外見をした「時空飛来怪獣 ジョーモノイド」が出現。

BGM 「大怪獣の咆哮」

「グルアアアアアアア!!!!」

「か、か、か………怪獣だー………!!!!?」

ジョーモノイドの出現に驚き、我先にと逃げ出す黒崎。

そんな黒崎を追いかけるようにスタツフ達も一目散に逃げ出す。

「ガアアアアア!!!!」

するとジョーモノイドは黒崎達を追いかけ始め、彼等に牙を向ける。

「わ、わあああ!!?! 助けてえ〜!!」

「時雨、如月、夕立、響は怪獣の足止めをしろ!! 荒潮と菊月はみんなの避難誘導を!!」

ヒカルさんもついて来てください!」

夜空の指示に艦娘達は「了解!!」と返事を返し、時雨、如月、夕立、ヴェールヌイはジョーモノイドの方へと向かって行き、夜空、菊月、荒潮、ヒカルは黒崎達の元へと駆け出し、彼等を安全な場所に避難させようとする。

時雨は2門の主砲を構えてジョーモノイドの足下に砲弾を何発も撃ち込み、それによつてジョーモノイドの動きが僅かに止まる。

「夕立!!」

「ぽおおおい!!」

『サイバーガルベロス、ロードします』

サイバーガルベロスのカードを使い、夕立は構えた主砲から強力な火炎を発射、それに対してジョーモノイドも口から火炎を吐き出し、相殺。

「相殺されたっばい!?!」

そのままジョーモノイドは時雨達を無視して黒崎を再び追いかけて始め、ヴェールヌイは「おい!! 無視するな!!」と主砲でジョーモノイドに砲弾を撃ち込みながら声をあげる。

しかし、それでもジョーモノイドは時雨達を無視して黒崎達を追いかけてようとする。

「あの怪物、攻撃してくる私達を無視してまでなんであの変なおじさんを追いかけてようとしてるっばい?」

「もしかしてあの遺跡を爆破されて怒ってる………とか?」

夕立はなぜ攻撃してくる自分達よりも黒崎達を追いかけようとしているのかが分からず、首を傾げ、如月がもしかして遺跡を爆破したせいかと考えるが………それを考えるより今はジョーモノイドを足止めするのが先決である。

『サイバーモモザゴン、ロードします』

「モモザゴンウェーブ!!」

ヴェールヌイはサイバーモモザゴンのカードをジオデバイザーに装填し、主砲から超

音波を放ってジョーモノイドに浴びせるとジョーモノイドは悲鳴をあげて苦しみだし、それに怒ってジョーモノイドはヴェールヌイの方に顔を向けて口から炎を吐き出す。

「うわあ!!」

直撃こそ避けたものの、爆風によってヴェールヌイは吹き飛ばされ、地面に倒れ込んでしまう。

「響!!」

「私は、平気だ!! それよりも怪獣を!!」

時雨がヴェールヌイの元に駆け寄ろうとするが、ヴェールヌイはそう言い放ち、それに時雨は頷いてジョーモノイドに振り返って立ち向かう。

『サイバーサラマンドラ、ロードします』

『サイバーサラマンドラフュージョン、アクティブ!』

そこで如月がサイバーサラマンドラのカードを使ってモンスフュージョンし、彼女は跳び上がった左手の爪の武器「サラマンドラクロー」でジョーモノイドの顔を斬りつけようとするのだが、ジョーモノイドは右腕を挙げて振るい、如月を叩き落とす。

「きやあ!?!」

「如月ちゃん!!」

吹き飛ばされた如月を夕立がキャッチするのだが、そこを狙ってジョーモノイドが炎

を吐き出し、攻撃を仕掛けて来る。

「わ、わああ!!?」

慌てて夕立は如月を掲げてその場から離れ、なんとか躲す。

『時雨!!』

「提督…….?」

そこへ、時雨に夜空からジオデバイザーから通信が入り、彼女は「どうしたの?」と尋ねる。

『さつき、リョーガさんとグルマン博士から連絡が入つてな。時雨がモンスフュージョンする為のサイバーカードのチューンナップが終わつたらしい! もうじきそつちに転送される筈だ! それを使え!!』

すると、確かに夜空の言う通りすぐに1枚のサイバーカードが時雨のジオデバイザーに転送され、彼女はそれを受け取る。

「僕とモンスフュージョンするなら、やっぱり君だよね。ゴモラ、行くよ!!」
『サイバーゴモラ、ロードします』

時雨はそう言い放つとジオデバイザーにサイバーカードを装填し、彼女の身体を青い光が包み込み、光が収まると……。

彼女の姿は服が黒から青いものに変化しており、両肩から飛び出すように2門の主砲

が装着され、両腕にはサイバーゴモラの腕型の武器が装備されており、髪に青いメッシュが入り、時雨の瞳の色も黄色くなった姿、「ゴモラフュージョン」へと変わったのだ。

『サイバーゴモラフュージョン、アクティブ!』

「サイバーゴモラフュージョン!!」

時雨は両肩の主砲からゴモラのエネルギーの宿った強力な砲弾をジョーモノイドの前足に放ち、直撃を受けたジョーモノイドはバランスを崩して倒れ込む。

その隙に如月、ヴェールヌイ、夕立が一斉に主砲を構えて砲撃を行い、ジョーモノイドは身体中から火花を挙げ、悲鳴をあげる。

「グウウウ!!? グルアアアアア!!」

だが、それに怒ったジョーモノイドは炎を如月達に放ち、彼女等は散開して攻撃を回避。

「グアアアアア!!」

ジョーモノイドはさらに時雨に向かって駆け出して行き、右腕を挙げて彼女を叩き潰すように腕を振るうのだが……時雨は両腕の武器「ゴモラクロウ」を交差して受け止める。

「ぐっ……!! 流石ゴモラ……!! パワーが凄いや……!!」

時雨はそのまま力いっぱい両腕を振るってジョーモノイドを押し返し、顔にヴェー

ルヌイと夕立から集中砲火を浴びせられる。

「ガアアアアア!!!」

「時雨ちゃん!!! 私と同時攻撃で!!」

「うん!!」

如月は主砲にエネルギーを溜めて放つ強力な火炎「サラマンドラ高熱火炎」を放ち、また時雨も腕のゴモラクローと両肩の主砲のエネルギーを集め、一気に相手に向かって放出する「ゴモラ振動波」を如月の攻撃と同時に発射。

「サラマンドラ!! 高熱火炎!!」

「ゴモラ振動波!!」

2人の攻撃を同時に喰らい、直撃を受けたジヨームノイドは身体から火花を散らして倒れ込み、爆発して倒されスパークドールズとなるのだった。

「グルアアアアアア!!!」

*

「やあやあやあ!! 艦娘の皆さん、怪獣を退治してくれてありがとう! おかげで番組を中断しなくて済んだよ!!」

ジョーモノイドを倒して間も無くすると、笑いながら黒崎や撮影スタッフ達が戻って来て彼はあんな目にあつたばかりだと言うのに再び遺跡の中へと入ろうとしていたのだ。

尚、スタッフ一同は不満そうな顔をしていたので、恐らく無理矢理黒崎に連れられて来たのだろう。

「ちよつと、黒崎さん!! 待ってください!! この土地には、地獄が眠ってるって伝えられてるんです!! もつと慎重にして……」

それを追いかけて来たヒカルが止めようとするのだが、彼はヒカルの言葉など耳に貸さず、スタッフ達と一緒に遺跡の中へと入っていく。

「怪獣に追われたっていうのに元気ねあの人」

そんな黒崎に流石の荒潮は呆れた表情を浮かべ、このままだとまた何かやらかしそうだと感じた夜空は合流した荒潮と菊月を引き連れて時雨達と共にヒカルやアムイと共に黒崎を追いかけるのだった。

*

遺跡に入り、黒崎達が少し進んだ先の場所。

そこで黒崎達は目を見開き、黒崎は「おおく!!」とそこで発見した「物」に歓喜の声をあげた。

「これは、ウルトラマンの石像?!?! 凄い!! 大発見じゃないか!!」

そこにあつたのは、上半身のみが地面から飛び出ている状態の1体のウルトラマンの石像があつたのだ。

「・・・・・・・・あれは、ティガ・・・・・・・・」

ヒカルはその石像を見て「ティガ」と呟き、そのティガの石像をどこか懐かしそうに見つめる。

「この姿、古文書で見た通りだ。古の巨人、ティガの像・・・・・・・・」

「ティガ・・・・・・・・へえ。なんかエックスよりカッコイイね!!」

『なに!? 私だつてカツコいいだろ!』

アムイがティガの像を見ながら「エックスよりもカツコイイ」と評するとエックスが自分だつて負けてないと張り合おうとし、すぐさま夜空から止められる。

「張り合おうとするなよエックス! あと、自分でカツコイイ言うな。それよりも、エックスはティガのことを知っているのか?」

『ぐう……』。しかしティガか。うーんむ。いや、知らない。だが太古の

昔、地球を訪れた仲間かもしれない』

その時、ヒカルの目に1つの小さな石版が映り、彼は石版に近づいてそれをよく見てみると石版には何やら文字らしきものが書き込まれていた。

その下には青い石のようなものがこつんと置かれていた。

「これはもしかして古代文字ですか?」

「ええ、そのようです」

朝潮がヒカルに尋ねると彼は頷き、石版の文字を読み始める。

『壁石によりて天の光、地の光は結ばれん』、壁石……恐らくそれは、あそこに置いてある青い石のことだと思えます」

ヒカルは夜空達にそう説明し、時雨が「他には何が書いてあるんですか?」と尋ねるとヒカルはさらに石版の文字を読んでいく。

「『結びの光が蘇りし時、闇は闇に帰り足り．．．．．結びの光を持つ者に、この石を託さん．．．．．』」

「結びの光を持つ者つて．．．．．なんだ？」

するとそこへ黒崎が現れ、彼は笑みを浮かべながら青い石を手にとろうとする。

「『この石を託さん』、つまり、私にこの石を託すということだ!!」

「ちよ、ちよつと待つて黒崎さん!! この石は容易に動かしちゃいけないものかもしれないんだ!!」

「この土地は我が社が買収した!! つまり、ここものは全て私のものなんだよ!? 君に止める権利はなあくい!!」

ヒカルは咄嗟に黒崎が青い石を取ろうとするのを阻止しようとしたのだが、黒崎はこの土地は自分が買収したという事実を盾にし、それにヒカルは思わず動きを止めてしまふ。

「あいつの土手っ腹にさつきより強烈なの入れてやろうかな」

額に青筋を浮かべながら拳を握りしめる菊月、そんな彼女を朝潮と時雨が慌てて押さえつける。

「だから相手は一般人なんですよ菊月さん!!?」

「そうだよ! 気持ちちは分かるけど!」

そうこうしている間に黒崎はバツと石を手に取り、夜空達は念のために身構えるが……。

特に何も起こることはなく、黒崎は「ほくら見ろ！」とドヤ顔で言い放ち、そのドヤ顔には夜空達も若干イラツとせずにはいられなかった。

「別になんともないじゃ……」

その時のことだ。

「グウウウアアアア……!!」

何かの野獣のような声が聞こえ、遺跡全体が揺れ始める。

「全員外に待避しろ!! 待避……!!!」

即座に夜空は急いで全員外に出た方が良くと判断し、全員に外に出るように指示。

「私はトレジャーハンター、危険で無ければ意味がないよ! このカルロス黒崎は……」

「後にするつばい!!」

まだ喋っている途中で夕立が黒崎の首根っこを掴んで他のメンバーと一緒に遺跡の外に向かつて駆け出し、外に出ると夕立は黒崎を投げ捨てて戦闘態勢に入る。

「おわっ!! アイタタタ……。ちよつと、投げ捨てるなんて酷いじゃないか!

はあ、まあいいさ。お宝は手に入った!! 後は皆さんよろしく!!」

黒崎はそう言い残し、他のスタッフと共にそそくさとその場から立ち去って行くのだった。

「あつ、コラ待て!!」

そんな黒崎等を追いかけようとする菊月だったが、その時……遺跡が崩れ、多数の剣山状の背びれが生えた細身の体躯、前に向いて曲がった刃状の二本角と三対の複眼にその後ろにも点々と並ぶ無数の目を備えた頭部、そして棍棒のような形状になっている右腕「ゴージェグズ」が特徴となっている1体の怪獣……。

「闇魔獣 ザイゴージェグ」が出現したのだ。

「ギィアアアアアア……!!!」

『夜空、アイツから何かヤバい感じがする!!』

「ああ、時雨達もさっきの怪獣との戦いで消耗してるし……先ずはヒカルさん達の安全を優先するぞ!!」

夜空は時雨達に指示を出して先ずはヒカルを安全なところまで案内し、その間に夜空はエクステバイザーから鎮守府に連絡を入れて応援を要請。

しかし、その途中ヒカルがつまずいて転んでしまい、それを見た時雨達は急いでヒカルの元へと駆け出す。

「ヒカルさん!!」

「父さん!!」

「いったあ〜!」

その時、ザイゴッグがすぐ目の前にまでこちらに向かって迫ってきており、夜空は時雨達に自分がかんとかするのでその間にヒカルの避難をするように促す。

「あいつは俺がなんとかするから、時雨達はヒカルさん達を連れて避難するんだ!!」

「分かったよ、気をつけて提督!」

時雨は夜空の指示に頷いてヒカルとアムイを連れてその場から離れ、夜空はウルトライザーを取り出してザイゴッグにウルトラマンのエネルギーがチャージされた光線を撃ち込む。

『ウルトラマンの力を、チャージします』

「こつちだ怪獣!!」

「グルルルル……!! ゲハハハ!!」

しかし、ザイゴッグに光線は通じておらず、けれどもザイゴッグは夜空の存在を鬱陶しく感じ、尻尾を振るって夜空を叩きのめそうとする。

「エックス、ユナイトだ!!」

『よし、行くぞ!!』

エクステバイザーの上部のボタンを押し側面のパーツをX字に展開したXモードに

変形させるとエックスのスパークドールズが出現、それをリードさせた後、夜空はエックスデバイザーを掲げる。

『ウルトラマンエックスと、ユナイトします』

「エックスーーーーー!!!」

『エックス、ユナイトッド!!!』

『イイイツサアアアア——ッ!!!』

それによつて夜空は「ウルトラマンエックス」へと変身し、ザイゴークの尻尾を弾くと同時にジャンプしてザイゴークの頭部に跳び蹴りを繰り出すのだが……ザイゴークは棍棒のような形状になっている右腕「ゴークレグジス」を振るつてエックスを弾き飛ばし、岩山に激突して倒れ込む。

『ウアアア!!!』

「グアアアアア!!! ガハハハ!!!」

なんとか立ち上がったエックスはザイゴークに向かって駆け出して行き、ザイゴークの胸部に何発も拳を叩き込むのだが……ザイゴークは意に返さずゴークレグジスを振るつてエックスを殴り飛ばす。

『グアアア!!!』

「エックス!! こいつ強いぞ!! エクシードXだ!!」

『分かった!!』

エックスは夜空の言葉に頷くとエックスは「ウルトラマンエクシードX」へと強化変身し、右手に「エクストラッガー」を持ち構える。

『エクストラッガー!!』

エックスはザイゴークにすれ違いざまにエクストラッガーを振るって胸部を斬りつけ、さらに振り返りざまにエクストラッガーを振るってザイゴークの背中に斬りかかろうとするのだが……その時、振るわれたザイゴークの尻尾がエックスの身体に直撃し、エックスは吹き飛ばされて地面を転がってしまう。

『シエア!!?』

すぐさま立ち上がろうとするエックスだったが、そうはさせまいと駆け出して来たザイゴークがエックスの身体を蹴り上げて空中に浮かばせ、さらに空中に浮かんだところを上からゴークグレグジスで殴り、再びエックスを地面に叩きつける。

『デヤアアアア!!?』

『ゲハハハハ!!』

また地面に倒れ込んだところでザイゴークは今度はエックスは真つ直ぐ飛んでいくように蹴り飛ばし、エックスは岩山に背中から激突。

『又アアア!!?』

フラつきながらもどうにか立ち上がるエックス。

「エックス!! 一か八か、こうなったら一気に決めるぞ!!」

『ああ!!』

夜空はスライドタッチ3回とブーストスイッチを押すとエクストラッガーを構えたエックスが、そのまま敵の前後を往復しながら繰り出す突進斬り「エクシードエクスラッシュ」をザイゴグに向かって繰り出す。

『エクシード!! エクスラッシュ!!』

それに対してザイゴグは口から放つ血の池地獄のように真赤な破壊光線「ブラディフラッディング」を放ち、エックスの技と激しくぶつかるのだが……エックスの技はあっさり打ち砕かれてザイゴグの光線にエックスは飲み込まれ、身体中から火花を散らしながら吹き飛ばされてしまう。

『ウアアアア!!』

そのままエックスはエクシードから通常形態に戻った後、ユナイトが強制解除されてエクステバイザーと夜空は地面に放り出されてしまったのだ。

『夜空あー!!』

「ぐあっ?!」

夜空は地面に倒れ込み、エクステバイザーもザイゴグの攻撃の影響か……赤

く腐敗し、落下。

それを見た夜空は急いでエクステバイザーを手に取り、エックスに呼びかける。

「エックス!!? エックス!! 返事をしてくれエックス!! おい!!」

しかし、エクステバイザーの画面は真つ暗でエックスの姿が映っておらず、必死に話しかけてもまるで返事がなかった。

「提督!!」

そこへマドカ親子を避難させた時雨達が駆けつけ、彼女等はザイゴグに主砲を構えるが……ザイゴグは口から「ブラディフラツディング」を地面に放つて自分の周囲に赤い湖のようなものを作り出すとザイゴグはその中へと消えて行き……さらにその際、ザイゴグは地面の中に消える時に自身の背中の棘の2本を射出、それらが地面に突き刺さると棘は変化し、2体の怪獣へと変貌したのだ。

1体は以前朝潮達が遭遇した「シルバゴン」に酷似しているが、赤い血管のようなものが浮き出ており、角も赤くなった「閻魔分身獣 ゴグシルバゴン」。

もう1体は両腕に鎌が生えて羽が生え、ゴグシルバゴン同様血管のようなものが浮かび出た白目の怪獣、「閻魔分身獣 ゴグドラコ」が出現。

「あの怪獣、棘からまた別の怪獣を呼び出せるっぽい!?!」

「だとしたら、棘何本あるんだよ! あんの黒崎とか言うアホ、とんでもないもの呼び出

してくれたな!!」

夕立はザイゴークの能力を目の辺りにして驚愕し、またそのことで菊月はザイゴークを目覚めさせた元凶であろう黒崎にさらなる怒りを募らせる。

そしてザイゴークはこの場をゴークシルバゴンとゴークドラコに任せて地面の中に消えて行き、ゴークシルバゴン、ゴークドラコは夜空とエックスを確実に始末する為に、2人に狙いを定める。

「提督を狙ってるみたいよ、あいつ等!!」

「なら、サイバーゴモラに提督が逃げるまでの時間稼ぎを……!!」

時雨がジオデバイザーを取り出してサイバーゴモラを呼び出そうとしたその時のことである。

『シエア!!』

突然、空に丸い穴が開き、そこから赤と青の身体に銀色のプロテクター、頭部に2本のブーメランのようなものを装着した巨人……「ウルトラマンゼロ」が出現すると同時にゴークシルバゴンを蹴り飛ばしたのだ。

挿入歌 「すすめ! ウルトラマンゼロ」

「ギシャアアア!!!?」

「グルアアアア!!!」

「ゴーグシルバゴンを蹴り飛ばしたことで隣にいたゴーグドラコも一緒に吹き飛ばされ、地面に転がる2体。

『何やら邪悪な気配を感じて来て見れば……。よお、お前等！ 大丈夫か？』
ゼロは地面に着地し、夜空達に声をかけ、夜空達は新たなウルトラマンの登場に驚いて唾然。

「見たことのない……ウルトラマン？」

『お前がこの世界のウルトラマンみたいだな。 ゆっくりと話をしたいところだが……今はこいつ等だ』

ゼロが夜空の姿を見つめながらそう呟くと彼は立ち上がって来たゴーグドラコとゴーグシルバゴンに向かってファイティングポーズを取りながら駆け出して行く。

それに対して先陣を切ってゴーグシルバゴンもゼロに向かって駆け出し、ゼロの放った拳を頭をしゃがめて回避し、同時に自身の拳をゼロの腹部に叩き込む。

『ぐおっ!? シェア!!』

ゴーグシルバゴンの攻撃に多少怯むもゼロはすぐさま回し蹴りを繰り出してゴーグシルバゴンの頭部を蹴りつけ、押し退かして今度はゴーグドラコに向かって行く。

「グルアアアア!!!!」

ゴーグドラコはゼロがギリギリまで自分に接近して来ると両腕の鎌の刃を鋭く長く

伸ばし、鎌を振るってゼロの胸部を斬りつける。

『なに!?　ぐあつ!?』

それによつて後退するゼロをゴッグシルバゴンが後ろから羽交い締めにし、ゴッグドラコが刃を振るって来ようとするが、ゼロは両足を振り上げてゴッグドラコを蹴り上げ、さらにゴッグシルバゴンに肘打ちを喰らわせてどうにかゴッグシルバゴンの拘束から逃れる。

「ガアアアア!!!」

ゴッグシルバゴンは角から赤い破壊光線をゼロに向かって放つが、左腕を伸ばした後、腕をL字に組んで放つ必殺光線「ワイドゼロショット」をゴッグシルバゴンに放ち、ゴッグシルバゴンの放つ光線を相殺。

『ワイドゼロショット!!』

そこへ空中を飛行するゴッグドラコが口から火球を放ち、ゼロに攻撃を行ってくる。

『グウウ!!?　この!!』

ゼロはゴッグドラコを撃ち落とそうとするのだが、その隙を突いて角を巨大化させ、突進して来たゴッグシルバゴンの攻撃を受け、ゼロは突き飛ばされてしまう。

『グウウ!!?　2対1とはいえ、中々やるじゃねえか・・・』

「グルアアア!!!」

そこへ背後から飛行してゼロに迫って来たゴードラコの鋭く長い鎌がゼロに襲いかかろうとするのだが……。

『リアライズ!!』

「ギシャアアアア!!」

突如、「電脳怪獣サイバーゴモラ」が実体化してゴードラコの目の前に出現し、サイバーゴモラは右腕を振るってゴードラコを叩き落としたのだ。

「っ!? グルアアアア!!」

『っ!? なんだ!? こいつ、ゴモラか……?』

ゼロはサイバーゴモラの出現に驚き、サイバーゴモラを実体化させた時雨はサイバーゴモラにゴードラコと戦うように指示し、自分も艀装を構えてゴードラコとの戦闘に加わる。

「荒潮は僕と一緒に!! 他のみんなはあのウルトラマンを援護して!!」

『了解!!』

時雨の指示に従い、菊月は時雨と共にサイバーゴモラを、夕立、如月、荒潮、ヴェールヌイはゼロの援護へと向かう。

「あの怪獣の翼を狙うよ!!」

「了解だ!!」

「ゴモラ!! 怪獣を押しさえつけて!!」

時雨の言葉にサイバーゴモラが頷くとサイバーゴモラはゴードラコに向かって駆け出して行き、掴みかかろうとするのだがゴードラコは空中へと飛行して回避。

『サイバーゴモラ・時雨アーマー、ユナイテッド!!』

だが、サイバーゴモラは「時雨アーマー」を装着し、両肩の主砲から砲弾を発射してゴードラコを撃ち落とし、倒れ込んだところを押さえ込んで立ち上がらせ、時雨達に向かって背中を向けさせる。

「今だ!!」

時雨と菊月は同時に主砲から砲弾を放ち、ゴードラコの背中を攻撃……それによってゴードラコの翼が破壊され、これによりゴードラコは飛行できなくなつた。

「ギシャアアア!!」

そこからさらにサイバーゴモラはゴードラコを殴り飛ばし、フラつくゴードラコ。

「グアア!!? グルルル!!」

それに怒ったゴードラコは両腕の鎌を構えてサイバーゴモラに向かって行こうとするのだが……。

『ストロングコロナゼロ!!』

「グアアアアア!!!」

ゴッグシルバゴンは角を巨大化させてゼロへと突進を繰り返し出し、それに対し、ゼロは正面から両手でゴッグシルバゴンの角を掴みあげて受け止める。

『ウオツ?!』

しかし、ゴッグシルバゴンの突進力は強く、ゼロは徐々にゴッグシルバゴンのパワーに押され初めてしまう。

『サイバーアントラー、ロードします』

「みんな一斉に………ってえー!!」

そこへ菊月が「サイバーアントラー」のカードをジオバイザーに装填し、ハサミ型のエネルギー弾をゴッグシルバゴンの角に向かって発射。

それに続いてヴェールヌイ、夕立、如月が主砲から砲弾を放ち、ゴッグシルバゴンの顔面に集中砲火。

「グルアアアア!!!」

それらの攻撃を受けてフラつくゴッグシルバゴン。

その隙を突き、ゼロは炎を纏ったパンチを何発もゴッグシルバゴンに叩きこんでいき、最後にゴッグシルバゴンの背後に回り込むと後ろからゴッグシルバゴンに掴みかか

り、相手を回転させながら空中へと放り投げる。「ウルトラハリケーン」を繰り出す。

『ウルトラハリケーン!!』

そのままゼロは空中に放り出されたゴーグシルバゴンに向かって右拳から発射する炎柱状の光線「ガルネイドバスター」を発射し、直撃を受けたゴーグシルバゴンは空中で火花をあげながら爆発するのだった。

『ガルネイドオ!! バスター!!』

「ギシャアアアアアアアア!!!」

*

その後、怪獣達を倒したゼロは夜空達の元まで歩いてくるとゼロは両腕を交差してみるみると縮んでいき、やがて一人の青年の姿へと変わる。

「あの、あなたは?」

夜空が戸惑いつつ、ゼロに変身していた青年にそう問いかけると青年は口元に笑みを

浮かべ、鼻を親指で弾くような動作をしながら自分の名を名乗る。

「俺はゼロ、ウルトラマンゼロ。この姿の時の名は『モロボシ・ラン』だ」

「ウルトラマン……ゼロ、あの、あなたはなぜここに？」

ウルトラマンゼロこと「モロボシ・ラン」が名前を夜空達に告げると今度は菊月が見たところ、メビウスやゾフィーのように別の世界からやってきたゼロが何故この世界にやってきたのか問いかけると、ラン曰く、「この世界から強い邪悪な気配を感じ取った」からとのこと。

それを聞き、ランの言う「この世界から感じた強い邪悪な気配」というのは恐らくあの「ザイゴウグ」という怪獣のことであろうことはすぐに菊月達は理解することができた。

「兎に角、ヒカルさんやランさんにも詳しい話を聞きたいので一度俺達の拠点である鎮守府に来て頂けますか？ エクスデバイザーの腐敗も早く止めないといけないし……」

夜空は不安そうな顔を浮かべながら今は何も映っていないエクスデバイザーの真っ暗な画面を見つめ、今は先ず兎に角一刻も早く鎮守府に戻りたいのでランやヒカル達は鎮守府に招くことにしたのだが……。

「成程。この世界のごときはゾフィー隊長やウルトラの父から聞いている。それに、メ

ビウスもいるらしいしな。その機械の中にこの世界のウルトラマンがいるんだろ？

ちよつと貸してみ」

「えつ、ちよつと!!」

ランは強引に奪い取るように夜空からひよいつとエクステバイザーを取り上げ、彼は両手でエクステバイザーを握りしめ、目を瞑ると彼の両手から光が発し、エクステバイザーの腐敗した部分の半分ほどが無くなり、画面にエクソスの姿が映し出させる。

『おわつちい?!』

「エクソス!!」

「エクソス直つたっばい!」

エクステバイザーをある程度修復したランは夜空にデバイザーを手渡し、完全に直つた訳では無いが大丈夫そうなエクソスの姿を見て夜空や時雨達はほつと安堵の表情を浮かべるのだった。

「俺の力でも、その機械を直せるのはこれが限界だ。それをやった奴は相当とんでもない野郎なんだろうな」

「でも、エクソスが無事で良かったです！ エクソス、大丈夫だったか？」

『ああ、なんとかな。だが現状では夜空とユナイトすることはできない。それに、腐食が止まった訳では無い。このまま浸食が進めばアウトだ』

ランのおかげでデバイザーの腐敗した部分が多少直りはしたものの、今はユナイトもできない上にこのまま腐敗が進めば自分の命も危うくなると語るエックス。

「そんな怖いこと言うなよエックス！ きつとなんとかなる!!」

「そうよ。 こんなピンチ、何度も乗り越えて来たじゃ無い！ きつと今度も……！」

そう語るエックスに励ましの言葉を送る夜空と如月。

「兎に角、さっきも言ったが今は早く鎮守府に戻ろう。 ザイゴークの情報も欲しいし。

ランさんもそれで良いですか？」

「構わねえよ。 元々そのつもりだ」

*

その後、夜空達は鎮守府に一度、マドカ親子とランを連れて戻ることになり、夜空は鎮守府のラボでデバイザーが直せないかとリョーガとグルマンに預けた後、夜空もヒカ

ルの話を聞いた後にデバイザーの修復の手伝いをしにすぐに戻って来るとエックスに伝えるのだが………。

『いや、君には他にやるべきことがある筈だ。　今のは私には何もできない』

「だけど、エックス!!」

『君はここの提督だ。　君にできることをやるんだ』

またリョーガやグルマンも「ここは我々に任せておけ!!」と胸をドンつと叩き、それもあつて夜空はエックスのことが心配だったが、エックスに「提督としての務めを果たせ」と言われたことで、夜空は領き、提督としての使命を全うするため、今はそちらの方に集中することを決めるのだった。

「分かったー。　行つてくるよ、エックス!!」

それからリョーガとグルマンの手伝いをしに行つたヴェールヌイを除いて鎮守府の全艦娘を招集してヒカルからザイゴッグの話聞くことに。

尚、ランが奈々の姿を見た時はギョツとした顔を浮かべていたりしたが。

さらには夜空以外のウルトラマンに変身する人物に初めて会つた為、艦娘達から非常に興味深そうに見つめられていたりもした。

だが、今はそれらのことを気にしている場合ではないので、夜空はヒカルからザイゴッグについてのことを優先させる。

「このままでは、大変なことになってしまいます!! あの怪獣の名は、『閻魔獣 ザイゴグ』。太古の地球は地面が燃え上がり、海が煮えたぎる地獄でした。それがザイゴグの世界です。ですがそこへ光の巨人が降臨し……」

「ザイゴグを地底深くに封印した……ということですか？」
奈々がヒカルに尋ねると、彼は頷く。

「光の巨人って……ウルトラマン？ エックスとは別の？」

また村雨がふつと気になったことを手をあげて質問するとヒカルは「恐らく」と彼女の問いかけに答える。

「可能性として高いのはピラミッド内部にあったあの石像のウルトラマン、ティガでしょう。でも、ザイゴグの封印は、解かれてしまいました」

重苦しそうな表情を見せながら、ヒカルは握り拳を作る。

「ザイゴグが復活してしまったのは、僕が黒崎さんを止められなかったからだ……」
「それは……!!」

「いや、どう考えてもあの黒崎のせいだろう。触らぬ神に祟り無しって言葉知らないのか。あれならまだ副司令やリョーガさんの方がマシだぞ」

夜空が「それは違います！」と言うよりも先に菊月がそう言い放ち、黒崎のことを知らない他の者達は一齐に「あの2人の方がマシ……？」といった視線を奈々に

向ける。

「えっ、なんでみんな私の方見るんですか？ ああ、でも大勢の美少女見られるって言うのも……!!」

（えっ、なにこの人……）

奈々のその発言を聞いてヒカルはどん引きしており、またランに関しては……。
（奈々の奴はどこにいても変わんねえな）

と呆れを通りこして苦笑していた。

「兎に角、今は対ザイゴグ作戦の立案を急ぎましょう！ 引き続き、情報提供などもお願いできますかヒカルさん？」

「はい、勿論です!!」

夜空の言葉にヒカルは力強く頷き、夜空は他にも何かザイゴグに関する情報はないかと尋ね、それを受けてヒカルは遺跡の碑文に書かれていた内容を夜空達に語り出す。

「碧石によりて、天の光 地の光は結ばれ、結びの光が蘇りし時、闇は闇に還りたり……。恐らく、これがザイゴグを封印するためのヒントだと思えます！」

「なんで昔の人ってこう、訳の分かんない言い方するのかしらね」

ヒカルの語った碑文の内容を聞いた暁はその意味が全く分からず、頭を両手で抱えて「うーん」と唸る。

「頭抱えて悩んでる暁ちゃん可愛い．．．．!!」

またその様子を見てうつとりした顔をする奈々だった。

「．．．．．（無言の腹パン）」

「い」はあ．．．．．!!」

そしてそんな奈々に無言の腹パンを喰らわせる菊月。

「今どんな状況か分かってんのか」

*

また、ラボではグルマンとリヨーガはある特殊なカプセルに入れてなんとかエクステバイザーの腐敗の浸食そのものを止めることには成功し、一先ずは安心できる状況となった。

しかし、腐敗を完全に解くことはできず、今は腐敗した部分をどうすれば取り除くことができるかの方法をリヨーガとグルマンは探っていたのだった。

またアムイはというと、彼はヴェールヌイに連れられて研究所を案内されていたの

だ。

「ここがこの鎮守府のラボだよ。　ここでは怪獣のスパークドールズの研究なんかしていたりするんだ」

「おお〜」

ヴェールヌイにラボを案内され、アムイは感心の声をあげながら興味深そうに周りを見つめる。

「それでこちらにいるのがこの研究員のリヨーガさんと、フアントン星人のグルマン博士だ」

続いてヴェールヌイはグルマンとリヨーガを紹介し、リヨーガは普通に笑みを浮かべて頭をペコリと下げて挨拶し、グルマンもアムイに挨拶をしようと笑顔を浮かべてアムイの方に顔を向けるのだが……。

『ニカ〜!!』

「………ツ!!!?」

その光景にアムイは声も出ない程に驚いて啞然とし、それを見てグルマンの迫力ある顔にアムイが驚いたのだと気付いたヴェールヌイはそんなグルマンに「ダメじゃないか」と注意する。

「ダメじゃないかグルマン博士、驚かしたら。　ただでさえ迫力ある顔をしているんだ

から」

「迫力あるって言うか面白い顔してるよねえ、グルマン博士」

『誰が迫力ある顔だ!! 誰が面白い顔だオイ!! これでもファントン星ではイケメンの部類なんだぞ!!』

ヴェールヌイとリョーガの言葉にグルマンはそう反論するが、「自分でイケメン言うな」と双方からツツコミを入れられ、シヨボーンつとするグルマン。

「まあ、怖がる必要はないよ少年。グルマン博士は普通に良い人だからね」

そう言いながらヴェールヌイはアムイの頭をポンポンつと微笑みを向けながら軽く撫で、そんなヴェールヌイの行為に気恥ずかしくなったのか少し顔を赤くするアムイ。

「こ、子供扱いしないでよ。 同い歳くらいでしょ、僕達………」

「ふむ、それはすまない」

実年齢がよく分からないところがあるので、実際はどっちが年下か年上かは分からないのだが、それを言うともた面倒くさいのでヴェールヌイは素直に謝罪。

「それよりもグルマン、例の画像を出すよ」

『それよりもって………』

リョーガは未だに落ち込んだ様子を見せるグルマンに構わず、エクステバイザーの腐敗の浸食をせめて止める方法やザイゴークを止めるヒントが無いかと思ひ、ティガの石

像の画像をパソコンの画面に映し、一同はその画像を覗き込む。

『ふむ、これがピラミッドに埋もれていた石像か』

「ウルトラマンティガって言うらしいよ。結構イケメンだね」

『成程、興味深い』

顎に手を乗せて興味深そうにティガの石像の画像を見つめるグルマン。

そんなグルマンの様子を見てリョーガはもしかしてウルトラマンカードにティガのカードを加えようとしているのではないかと思ひ、尋ねてみるとどうやらグルマンは「その通りだとも!!」と自信満々に応える。

『それにあの噂に名高いウルトラマンゼロのカードも作るつもりだぞー!』

「まあ、あつた方が色々と都合が良いのは確かだしね」

するとリョーガが「あつ」と不意に何かを思い出したかのような声をあげ、彼は意気揚々とウルトラマンのサイバーカードを実体化させるとカードをアムイに手渡し、それをアムイは興味深そうに目を輝かせて見つめる。

「折角来てくれたんだし、君が好きそうなものを特別なものを見せてあげよう、ウルトラマンのカードだ」

「お、おおう凄い! 色んなウルトラマンのカードだ!」

そんな風に目を輝かせて受け取ったカードを見つめているアムイの姿を見たヴェー

ルヌイはパソコンの画面にあるスイッチを押し、空中に今まで夜空達が出会ってきたウルトラマン達の姿を映し出す。

「メビウス、ギンガ、ビクトリー、ウルトラの父、ネクサス、ゾフィー。どのカードも私達の宝物だよ。見たことは内緒にしてくれたまえよ。バレたらタカトに怒られるからね」

「ほう、誰に怒られるって?」

「っ!!!」

リョーガの背後にいつの間にかタカトが立っており、タカトは「リョーガああああああ!!!」と叫びながらリョーガに叩固めを繰り返して出し、リョーガは悲鳴をあげる。

「ちよつ、まつ、タカト……!! ぎゃあああああ!!!」

「お前は何を一般人に簡単にウルトラマンのサイバードを渡してるんだオイ!!!」

「ご、ごめ……. ああああああ!!!」

アムイはその光景にどん引きし、そんな彼にヴェールヌイは「気にするな、何時ものことだ」と言つてリョーガとタカトの光景から目を逸らさせる。

「ちなみに君はこの中だと誰が一番カッコイイと思う? やっぱりネクサス? ネクサスだよ、そうだよ、ネクサスカッコいいよね!!!」

ヴェールヌイはアムイに先ほど紹介したウルトラマンの中で誰が一番カッコイイか

を尋ね、その上で彼女は物凄くアムイにネクサスを推して来るもので……そんなグイグイ来る彼女にアムイはまたもや引いていた。

「ネクサスだよね!!」 ネクサスが一番カッコいいよね!!」

『おい落ち着け響。 すまないな、この鎮守府は変人が多くてな』

見れば分かります……という言葉を飲み込んでアムイは「い、いえ、お気になさらず……」と返し、アムイは話題を変えた方が良くもしいれないと考え、ヴェールヌイ達が自分達の宝物を見せてくれたので、今度は自分が宝物を見せようと背負っていたリュックから様々な石のようなものを取り出して机に乗せて一同に見せる。

「そ、それじゃ今度は僕の宝物見せますよ!! えっと、これが昔地球に来た宇宙船の部品で、これがインカ帝国の宝石に……」

全部ガラクタじゃね……?」

と言いかけそうになったヴェールヌイとリョーガだったが、流星にそんな夢を壊すようなこと言つてはダメだとグツと堪える2人。

だが、次に取り出したスティック状の石を見た瞬間、グルマンは目を見開いた。

「多分、これは古代のトンカチかな?」

『んっ? これは、ちよつと借りて良いか?』

「あつ、はい、どうぞ?」

グルマンはアムイから許可を貰ってそのステイック状の石、古代のトンカチと呼ばれたものを手に取り、ジツと興味深そうに見つめるのだった。

*

その頃、カルロス黒崎の会社ビル、カルロスコミュニケーションズ本社ビルでは………。

黒崎は早速バラージ遺跡で青い石を手に入れたことを生放送で発表していることだった。

「もはや地球上には未知の領域などないという皆さん!! あなたがたは間違っている!! 奇跡は、この現代でもあります! このカルロス黒崎が超古代の遺跡から命がけで発掘した美しき神秘をご覧ください!!」

黒崎の周りにはドレスを着た女性達が立っており、女性達は興味津々に布に隠れたそ

の宝に興味津々といった様子を見せる。

「さあ、皆様ご注目!! 行くよ行くよ、それ!!」

黒崎はそう言いながら布を取って投げ捨てるとそこから遺跡で取った青い石が現れるのだが、先ほどまで興奮気味だった女性達の顔は一気に冷めた表情となる。

「……………微妙」

「なにが微妙だ!! このロマンが、分からないのか?!?」

*

一方、鎮守府ではザイゴークの居場所を探知することに成功し、ザイゴークはどこかに向かっているようでそれを受けてヒカルは恐らく、ザイゴークは碧い石の元に向かっているのだらうと予測する。

「碧い石さえ破壊すれば、ザイゴークを止められるものは無くなる」

「確かに、碧い石を動かしたことでザイゴークは目覚めた。あの石が再びザイゴーク

を封じる鍵になる可能性は大きいよね」

ヒカルの言葉を聞いて時雨もあの碧い石がザイゴークを倒す大きな鍵になることはほぼ間違いないだろうと予想。

「碧い石は今、カルロスコミュニケーションズのエリアT2にあるみたいだよ。生放送で自慢してる」

そこで皐月が起動させたタブレットで黒崎が放送しているチャンネルを見つけ、碧い石の場所を夜空達に教えたと今度は奈々がザイゴークが本社ビルまでに到着する時間を調べ、ザイゴークがタワーに到着する時間は役1時間ほどのことだった。

「時間が無いな。すぐに作戦を開始する!! 時雨、睦月、如月、暁、菊月は大至急碧い石を回収!! 残りのメンバーはザイゴーク迎撃に当たれ!! 俺とタカトさんはスカイマスケツティ、ランドマスケツティで出る!!」

『了解!!!』

「僕も!! 本社ビルの方に!」

夜空は時雨達に指示を出した後、ヒカルはそう言って碧い石を回収するために時雨達の後をついて行く。

「俺も手伝うぜ。俺がもう少し早く来てりゃ、シャイニングスタードライブでなんとかできたのに……」

ランもまた夜空達の作戦の手伝いを申し出、夜空は「お願いします」と力強く頷く。尚、ランの言う「シャイニングスタードライブ」とはゼロの形態の1つ、「シャイニングウルトラマンゼロ」の体力の大幅な消耗と引き替えに周囲の時間を巻き戻す能力なのだが……。

あの場にザイゴグがいない以上、その能力をゼロが使ってもザイゴグが封印された状態には戻ったりはしない。

それはスタードライブの範囲内に対象となるものがないなければならないからだ。

しかも封印されていた場所から既にもうかなりの距離を離れていた以上、ザイゴグ自身にスタードライブを使ったとしてもあの遺跡の傍にいないければ意味がない。

つまり、スタードライブのザイゴグを封印された状態に巻き戻す為にはザイゴグがああ遺跡の傍にいないなければならないことが絶対条件なのだ。

その能力を使えば、エクステバイザーも元に戻るかも知れないが、ザイゴグがまだ野放しになっている以上体力の消耗の激しいシャイニングの力は迂闊に使うことはできない。

精々、デバイザーの応急処置で直せるくらいなのが精一杯であり、そのことに関してもランも申し訳無さそうにするのだが……。

「良いんですよ、ランさん。 奈々はここに残って指示を頼む」

「了解!!」

そして奈々は鎮守府からの指示を出す係となり、ヴェールヌイを呼び戻して残った艦娘メンバー達も早速出撃。

タカトは何時ものようにスカイマスケットティで出撃し、夜空は「ジオボルトス」という黄色いトラックに乗ってジオマスケットティの2号機と合体し、ジオマスケットティは戦車形態「ランドマスケットティ」に変形し、出撃するのだった

「ジオアトス、ジョイントウジオマスケットティ!!」

「ジオボルトス、ジョイントウジオマスケットティ!!」

『スカイマスケットティ&ランドマスケットティ、コンプリート』

パート2 『蘇れ! ウルトラマン』

スカイマスケットティは避難勧告を一般市民達に出して避難誘導を行い、ランドマスケットティは指定ポイントに到着。

市民公園を完全封鎖してここを防衛線とし、またザイゴークの動きを封じる為、ヴェールヌイを筆頭にした何名かがエナジーシールドを配備。

「避難は完了した。響、そっちはどうだ?」

「こちらもセット完了だよ。いつでもチェックインできる」

「サイバーゴモラの起動も準備完了!!」

手伝いをしていた雷がヴェールヌイにサムズアップしながらジオデバイザーを構え、サイバーゴモラのスパークドールズを手に、いつでもサイバーゴモラをリアライズできることを報告。

*

一方………。

「ちあゝず!」

『ちあゝず!!』

その頃、黒崎はパーティーを開いている最中であり、黒崎はパーティーに参加している人々から拍手を浴び、「ありがとう、ありがとう」とお礼を言いながら笑みを浮かべる。「どうだ私の番組は? ヒット数の記録更新か?」

「いえ、残念ですが動物ほのぼのチャンネルに負けてます」

秘書の女性に視聴率のことを尋ねる黒崎だったが、女性が言うには動物のチャンネルに負けているらしく、それに「はっ?」と口を開けて黒崎は目を見開く。

すると、後ろを何気なく振り返って見ると女性達が丁度そのチャンネルをタブレッドで視聴しているところであり、その動画に映ってる柴犬の姿に女性達は「可愛い〜!」と声を揃えてほっこりするのだった。

「なんで柴犬なんかにも負けるんだ!! ロマンはどこいった!? 嘆かわしい〜!!」
「嘆かわしいのはあなただよ」

するとそこへ、ヒカルや時雨達が黒崎の前に現れ、ヒカル達の姿を見て「おや?」と首を傾げる黒崎。

「取りあえず、先ずはみんなを避難させよう。皆さん、避難指示が出ています!! すぐに退避してください!!」

「怪獣!? ハハハ、私はあなた達艦娘を信頼しています。海で猛威を振るっていた深海棲艦のその殆どを駆逐し、尚且つ今も怪獣と戦い続けてくれているあなた達をね。だから今回も、怪獣が来るなら、さっさとやつつけてくださいよ」

黒崎がそう言い放つと周りにいる人々も「そうだそうだ!!」という声があがり、時雨達は苦い表情を浮かべる。

「そんなさっさとなんて簡単に言わないでください!! ザイゴークはただの怪獣じゃないし、彼女達を信用してない訳じゃ無いけど、もしものことを考えてください!!」

『・・・・・・・・つ』

早く怪獣を倒せと言うあまりに自分勝手なことを発言する黒崎達に、苛立ったヒカルは彼等にそう言い放って怒鳴りあげ、それに対して彼の言い分に思うところがあつたのか、それとも単に彼の迫力に負けてしまったのか、周囲の人々は先ほどと違って黙り込んでしまうのだった。

*

その頃、夜空達はザイゴーク迎撃の準備を完全に済ませ、第1防衛戦でザイゴークが来るのを待ち構えていた。

「司令官、ザイゴーク接近確認したよ！ 雷、サイバーゴモラ起動の準備を!!」

ヴェールヌイが地底にいるザイゴークを確認すると、雷はサイバーゴモラの起動させ、「電脳怪獣 サイバーゴモラ」を実体化させる。

『リアライズ!』

「グルアアアアアアア!!!」

「お願いね!! ゴモラ!!」

雷がサイバーゴモラにそう言うのとサイバーゴモラは「任せろ」とでも言うようにガツツポーズをして見せ、サイバーゴモラは指定の場所まで移動し、両腕の爪を地面に突き立てる。

「コンタクトまで、残り5・・・4、3、2、1!!」

「サイバー超振動波!!」

ヴェールヌイの数えていたカウントダウンが0になると同時に雷はサイバーゴモラ

に指示を送り、サイバーゴモラはエネルギーを両腕の爪と角に集め、そのエネルギーを地面に流し込み、地底のザイゴークに直撃させると地面が真っ赤に染まり、その中からザイゴークが出現したのだ。

「俺も行くぜ!!」

ザイゴークが出現したのを確認すると、ランは自身の左腕についた銀色の「ウルティメイトブレスレット」から「ウルトラゼロアイ」というメガネ型のアイテムを取り出し、目に装着させる。

「デュア!!」

するとランの身体は光に包まれて巨大化し、その中から「ウルトラマンゼロ」が現れ、サイバーゴモラの隣に立つ。

「奴の表皮はボースアインシュタイン凝縮してるから、みんな!! ザイゴークの目を狙うんだ!!」

「ボー……アイ……なんて?」

「要するに兎にも角にも目を狙えば良いのよね!!」

皐月がヴェールヌイの指示に困惑するが、村雨は要するに目を狙えば良いと彼女に説明し、それに納得した皐月は他の艦娘達と共に主砲を構える。

「私と電さんがザイゴークの目に攻撃を撃ち込みます。 皆さんはザイゴークの気を逸

らしてください!!」

『了解!!』

朝潮の指示を受けて艦娘達やスカイマスケットイ、ランドマスケットイは砲弾をザイゴークに打ち込んで攻撃を行い、それを鬱陶しく思ったザイゴークは破壊光線「ブラディフラツディング」を艦娘達に放とうとするが……。

『させるかよっ!! ウルトラゼロキック!!』

そうはさせまいと右足に炎を宿したゼロの跳び蹴り、「ウルトラゼロキック」がザイゴークの頭部に叩きこまれ、ゼロがザイゴークから離れると同時にサイバーゴモラの振った尻尾がザイゴークに繰り出される。

だが、ザイゴークはそれを左腕で受け止め、脇に挟むとそのままサイバーゴモラをジャイアントスイングしてゼロに向かって放り投げ、2人は激突し、共に倒れ込んでしまふ。

「グルアアアア!!?!」

『ヌアアア!!?』

「フアントンレールキャノン、発射あ!!」

しかし、その時ランドマスケットイから放たれた「フアントンレールキャノン」という光弾がザイゴークの右目近くに直撃し、それによって怯むザイゴーク。

「今なのです!!」

『サイバーブラックキング、ロードします』

『サイバーエレキング、ロードします』

『ブラックヘルマグマ!!』

「エレキング電撃波!!」なのです!!」

朝潮と電はそれぞれブラックキング、エレキングのサイバーカードをジオデバイザーに装填し、みんなが作ってくれたザイゴグの隙を突き、主砲から強烈な炎と電撃をザイゴグの両目に向かって放つ。

「ガアアアアアア!!」

それによってさらに怯んだザイゴグの隙を突き、電の所持しているのは別のサイバーエレキングのカードをヴェールヌイはジオデバイザーに装填し、エナジーシールドからエレキングの力を宿した電撃が放たれ、電撃はバリアとなつてザイゴグを閉じ込める。

「改良して強化したエナジーシールドだ。ちよつとやさつとじゃ破れないよ」

自信満々に胸を張つてヴェールヌイはそう言うのだが、通信でそれを聞いていた満潮は「フラグ立てんなあ!!」と怒鳴り気味にツツコム。

『今だ!!』

ゼロは頭部の2本のブーメラン、「ゼロスラッガー」を両手に取ってカラータイマーの左右に装着するとそこから放つ強力必殺光線「ゼロツインシユート」をザイゴークに向かって放つ。

『ゼロツインシユート!!』

「ゲハハハハハ!!!」

しかし、ザイゴークは口から放つ「ブラディフラツディング」と胸部を開いて放つ火炎弾「ヘルズレリーフ」を同時に発射し、バリアを突き破るとそのままゼロの放った光線とぶつかり合い、ゼロツインシユートを押し返して行き、ギリギリのところまでゼロはなんとか光線を躲す。

『あぶねえ!』

ザイゴークは胸部を素早く閉じてそこからさらに間髪入れず、ザイゴークの背中 of 巨大な棘が2本、それぞれサイバーゴモラ、ゼロに向かって飛ぶと内1本の棘はサイバーゴモラの身体を貫き、サイバーゴモラは消滅。

『ぐっ!?!』

ゼロは間一髪避けたもののゼロは右肩を掠ってしまい、僅かにダメージを受け、右肩を押さえる。

『っ!?!』

そしてザイゴグから放たれた棘が地面に突き刺さると棘は姿を変え、2体の怪獣へと姿を形成し、1体は筋肉質な怪獣で「閻魔分身獣 ゴグファイヤーゴルザ」、もう1体はアリジゴクのような姿の「閻魔分身獣 ゴグアントラー」が出現。

「怪獣が新しく2体……!」

『チツ、こうなつたら!! ウルティメイトゼロ!!』

それを見たゼロは左腕のウルティメイトブレスレットを輝かせ、銀色の鎧、「ウルティメイトイージス」を身に纏い、強化形態「ウルティメイトゼロ」へと姿を変える。

ゴグファイヤーゴルザとアントラーは2体同時にエナジーシールドに向かって光線を放つのだが、そうはさせまいとゼロが右腕に装着された剣「ウルティメイトゼロソード」を振るって弾く。

『今の内に体勢を!!』

ゼロがヴェールヌイ達にもう1度エナジーシールドを使ってザイゴグの動きを封じるように言うのだが、直後にザイゴグの振るった腕の棍棒「ゴグレグジス」による強烈な打撃を背中に諸に受けてしまい、衝撃で片膝を突くゼロ。

その隙を見逃さず、今度こそゴグファイヤーゴルザとゴグアントラーは同時に光線を放ち、エナジーシールドを破壊。

「エナジーシールドが! でも、ザイゴグを倒せば、他の2体の怪獣も消える筈だ!!」

ゼロ、あの2体は俺達が相手をするからその間にザイゴークを!!」
『了解!』

夜空の指示を受け、ゼロは立ち上がってザイゴークへと向かって行き、夜空は艦娘の半分をゼロの援護、もう半分をゴークファイヤーゴルザとゴークアントラーの迎撃に向かわせる。

『シエア!!』

ゼロはゼロソードをザイゴークに向かって振るうのだが、ザイゴークは右腕でそれをガードすると左腕のゴークレグジスでゼロの胸部を殴りつける。

『ぐっ! デヤアア!!』

負けじとゼロは後ろ回し蹴りを繰り返すのだが、ザイゴークはそんなゼロの足を掴んで持ち上げ、地面に叩きつける。

『ヌアアア!!?』

「ゲハハハハ!!!」

倒れ込んだゼロをザイゴークは蹴り上げ、さらにゴークレグジスでゼロを殴りつけようとするのだが、ゼロは身体を転がして回避し、立ち上がる。

『シエア!!』

ゼロはザイゴークに向かって駆け出し、ザイゴークは向かって来たゼロにブラディフ

ラッディングを放つが、ゼロはゼロソードで光線を真つ二つに切り裂きながら突き進み、すれ違いざまにザイゴグをゼロソードで斬りつける。

「グウウウ!!!」

さらに即座にゼロはザイゴグの方へと振り返り、そのままザイゴグの背中をゼロは斬りつけ、ザイゴグの棘のほんの数本を破壊することに成功。

『へっ、どんなもんだ!!』

一方でザイゴグの元に向かおうとするゴグファイヤーゴルザとゴグアントラーの足止めを行う為、それぞれ艦娘達、スカイマスケッティ、ランドマスケッティが2体の怪獣に攻撃を仕掛けていた。

「ガアアアア!!!」

ゴグファイヤーゴルザは頭部から放つ光線「強化超音波光線」を地上にいる艦娘達に向かって放つが、それを満潮がサイバーベムスターのカードをジオバイザーに装填し、「宇宙大怪獣 ベムスター」の腹部を模したエネルギーバリアを展開。

『サイバーベムスター、ロードします』

「ぐっ………跳ね返しなさい!! ベムスタースパウト!!」

そのまま吸収したゴグファイヤーゴルザの光線をゴグファイヤーゴルザに満潮は撃ち返すのだが、ゴグファイヤーゴルザは再び強化超音波光線を放って跳ね返って

きた光線を相殺。

『サイバーレッドキング、ロードします』

ゴーグファイヤーゴルザが満潮の反射した攻撃に気を取られている隙に夕立がゴーグファイヤーゴルザの背後に回り込み、サイバーレッドキングのカードをジオデバイザーに装填し、彼女は巨大な拳の形をしたエネルギー弾、「レッドキング徹甲弾」を放つ。

「レッドキング徹甲弾!!」

それを受けて怯むゴーグファイヤーゴルザだが、ゴーグファイヤーゴルザは顔だけを夕立に振り向かせて彼女を睨み付け、そのまま尻尾を振るって彼女を叩きつけようとする。

「ヤバっ………!!」

「夕立!!」

しかし、それをランドマスケッティが放つ光弾、フアントンレールキャノンで弾かれ、夕立はほっと胸を撫で下ろす。

「助かったっぽい、ありがとう、提督さん!」

またゴーグアントラーは背中の中のを翼を広げて空中に飛び立ち、それをスカイマスケッティが追いかける。

「クソ!! アリジゴクなのかクワガタなのかハッキリしろ!!」

スカイマスケッティは空中にいるゴッグアントラーに向かってフアントン光子砲とミサイルを次々撃ち込んで行くがゴッグアントラーは素早い動きでそれらを次々と避け、地上にいる艦娘達もなんとかゴッグアントラーを撃ち落とそうとするが……。

やはりゴッグアントラーの動きは素早く、上手く攻撃を当てることができなかつた。

「キュイイイイ!!!」

さらにゴッグアントラーは地上にいる艦娘達にも光線を吐き出し、攻撃を受けて悲鳴をあげる彼女達。

「アイツになんか有効なサイバーカードってないの!? 文月!! なんかない!」

「えっ?! えつとく、ええつとおく!」

皐月がゴッグアントラーに対して有効そうなサイバーカードが無いかと文月に尋ねると、彼女は複数のサイバーカードを取り出して何か無いかと探す。

そうこうしている間にゴッグアントラーは先行してカルロスタワーに向かおうとし、その時に皐月達に後ろを見せた為、その一瞬の隙を突いて文月は目を瞑りながら「じゃあこれで!」と適当にサイバーカードを抜き取り、ジオデバイザーに装填。

「いや、適当なんだけど!? 大丈夫!」

『サイバーアントラー、ロードします』

文月は主砲を構えて引き金を引くとそこからアントラーの角を模したエネルギー弾

を発射し、ゴッグアントラーの腹部辺りに命中し、ゴッグアントラーは火花を散らして地上に落下。

「キュイイイイ!!!?」

「おお! やった!! アントラーにはアントラーの力つてね!!」

そしてゼロはゼロソードでザイゴッグを斬りつけ、同時にザイゴッグも腕の棍棒でゼロを殴りつけて互いに怯むが、即座にザイゴッグは口から放つ真赤な破壊光線「ブラディフラツディング」をゼロに放ち、ゼロはそれを慌ててゼロソードで受け止めて光線を防ぐ。

『ぐうう………!!?』

だが、ザイゴッグはさらに光線の威力を強め、ゼロは耐えきれずにザイゴッグの光線の直撃を受けて吹き飛ばされてしまう。

『ぐあああああ!!!』

すかさず、ザイゴッグは胸部の部分を開き、そこから2本の触手を伸ばしてゼロの右腕と首を拘束し、動きを封じるとザイゴッグはゼロからエネルギーを吸収し始める。

『ぐあああああ!!! こいつ、俺のエネルギーを………!!?』

「まずい! 誰かゼロの援護を!! あの触手を攻撃しろ!!」

「了解!!」

夜空の指示により、ヴェールヌイと雷がサイバーカードを取り出すのだが……
 そうはさせまいと、ゴッグファイヤーゴルザの放った強化超音波光線が2人に向かつて
 放たれ、それに気付いた2人はすぐさまどうにか躲したものの、その時地面に光線が直
 撃した衝撃で2人は吹き飛ばされてしまう。

「わああああ!!!」

やがてエネルギーを吸収され続けたゼロはエネルギーの消耗により、身に纏っていた
 ウルティメイトイージスが強制的に解除され、ゼロのカラータイマーが激しく点滅す
 る。

『力が……出ねえ……!!』

「ゲハハハハ!!!」

そしてザイゴッグはゼロの拘束を解くとそのまま破壊光線、「ブラディフラツティン
 グ」をゼロに直撃させるとゼロは大量の火花を身体中から散らしながら大きく吹き飛ば
 され、そのまま姿を消してしまうのだった。

『ぐあああああ!!!』

「ランさん!!」

吹き飛ばされたゼロはランの姿に戻り、彼は地面に倒れ込んでしまう。

「ぐう、うう……」
 なんて野郎だ!! んっ?」

フラつきながらもなんとか立ち上がるランだが、その時、彼は左腕に何か違和感を感じ、自身の装着したブレスレットを見てみるとそれは夜空のエクステバイザーと同じように赤く錆び付いて腐敗していたのだ。

「アイツ、俺のブレスレットまで!! クソ、これじゃ変身ができねえ……!!」

*

なんとかザイゴグ達を足止めしようとする夜空達だったが、ザイゴグ達の猛攻に一同は押され気味であり、やがてザイゴグ達はカルロスタワーのほぼ目の前まで進行し、タワーからザイゴグ達の姿を見た人々はパニックになり、逃げ惑う。

その際、黒崎は逃げようとするカメラマンから「逃げるなら自分が撮る!!」と言ってカメラを奪い取り、外の様子を映そうとする。

それと同じ頃、鎮守府のラボではアムイがカルロスタワーの生放送を動画で見ていると、ヒカルが姿が映ったのが見え、彼はザイゴグがタワーに近づいていることもあり、

ヒカルを助けに行こうとするが、それをリョーガに引き止められる。

「待ちたまえ! 君はどこに行くつもりなんだい?」

「でも、父さんを僕が助けないと!! しっかりしてるように見えて気の抜けたところがあるし心配なんだ!!」

リョーガがアムイの腕を掴んで引き止めるのだが、それでもアムイは必死にヒカルの元に向かおうとする。

だが当然、黙ってそのまま子供をあんな危険な場所に送るなどできる筈が無いリョーガも、必死にアムイを引き止め、腕を離そうとはしなかった。

「離してよ!! 僕が、父さんを……家族を助けないと!!」

アムイが言い放ったその時……

グルマンが預かっていた先ほどアムイの言っていたトンカチの化石が輝きだしたのだ。

『むっ? これは……!!』

それと同時に、カルロスタワーの碧い石も光輝き、黒崎はカメラを石に向ける。

『おおく! なんか知らんが光っている!! そうこなくちゃ!! これが、神秘の光だ』

『お願いだよ、父さんのところに行かせて!! お願い!!』

アムイは必死にリョーガに頭を下げて頼み、そんなアムイの意思に共鳴するかのよう

に、アムイの持っていた化石がさらに眩い光を放つ。

『博士、この光は……まるであのアムイという少年の想いに反応しているようだ』
『うむ、実際その通りなのだろう』

『テイガの碑文の通り、碧い石が、天と地の光をユナイトさせるとすれば、恐らく……』
すると、今度はエクステバイザーも化石や碧い石のように突如として輝きだし、グルマンがそのことを指摘すると、エックスは少し考え込んだ様子を見せる。

『この光は……誰か、私を夜空の元に連れて行ってくれ！』

「だが、君の修理はまだ……」

『いや、エックスの言う通り、彼とアムイくんをみんなの元に連れて行ってくれないか
リヨーガ？』

グルマンからもエックスとアムイをみんなのところに連れて行ってくれと頼まれ、
リヨーガはどうすべきか少しばかり考えたが……。

少なくともここでジツとしては何も始まらないと思ったりリヨーガは力強く頷き、
彼は準備を済ませてスペースマスケットで発進する。

*

場所は戻り、カルロスタワーでは……。

カメラで外の様子を撮っている途中で部屋に飾っていた碧い石以外の遺跡のコレクションなどが振動によって落下して傷ついて行くのを黒崎は嘆いていたりしたが……。

その時、碧い石もテーブルから床に落下し、それをすかさず菊月が掴み取ったのだが……その腕を秘書の女性が掴みあげ、碧い石を奪い返そうとする。

「おい!! この状況で……!!」

菊月は無理矢理秘書の腕を振り払ってこの場を去ろうとするのだが、秘書に肩を掴まれてしまい、その時に手から石が滑って再び床に落ち、ヒカルの足下まで転がってしま

う。
「あっ!」

ヒカルは慌ててそれを拾いあげ、黒崎はそれを見ると「拾ってくれてありがとう!!」とお礼を述べながら手を差し出す。

「ヒカルさん!! 行って!!」

「は、はい!!」

時雨に言われてヒカルはすぐにその場を走り去って行き、それを受けて黒崎は「待て泥棒!!」と言いながらヒカルを追いかける。

「お前が言うな!!」

菊月はなんとか秘書の腕を振り払い、時雨達は黒崎を行かせまいと彼の前に立ち塞がる。

「そ、そこを退け!! 邪魔をするな!!」

「まだ分からないんですか!?! あの怪物を止めるには、あの石が必要なんです!!」

「そそそそ、そんなの知るかあ!! そんな証拠どこにもないだろ!! あれは私の物だあ!!」

如月が黒崎にザイゴッグを止める為にもあの碧い石が必要なのだと説明するが、黒崎は聞く耳を持たず、無理矢理にでもヒカルを追いかけようとするが……艦娘、それも艤装を展開している彼女達に力で敵う筈もなく、黒崎達は時雨達に強制的に引き止められるのだった。

*

『操縦下手だな、リョーガさん』

「当たり前だろ!! 私は戦闘担当じゃないんだ!!」

同時刻、スペースマスクетティで出撃したりョーガだったが、あまり操縦に慣れていないせいでエックスから苦言を言われてしまっていた。

「だからナビを頼むよエックス」

『1キロメートル先を左折、目的地周辺です』

(このナビ普通に欲しいな)

やがてザイゴークの姿が見えるとランドマスクетティに襲いかかろうとするザイゴークに向かってフアントニックレーザーというレーザー光線でザイゴークを攻撃し、ジオマスクетティと分離してジオアラミスになるとそのまま地上に着陸。

ランドマスクетティの元まで行くとジオアラミスからエクステバイザーを持ってリョーガとアムイは降り、夜空の元へと急ぐ。

それを見て「なにやってんだ!」と驚いた夜空はすぐにランドマスクетティから降りてリョーガ達の元へと合流。

「リョーガさん!! なんて前戦に!! しかもアムイくんまで連れて・・・!!」

「色々事情があるんだよ。それよりほれ、エックス!!」

リョーガはそう言いながらエクステバイザーを夜空に返し、夜空は心配そうにデバイザーを見つめながら「エックス、大丈夫か？」とエックスを心配する。

「なんとかな。だがまだユナイトは無理だ。しかし、あの碧い石……きつとあれが再びユナイトする為の鍵になる。夜空、君も碧い石の元に行くんだ！」

「だけど……ランドマスケットティもこのまま置いておく訳には……」

夜空はそう言いながらランドマスケットティの方へと顔を向けると……そこには操縦席でドヤ顔決めながら「ここは任せろ」とでも言いたげな顔を浮かべ、サムズアツプする奈々の姿があつた。

「なんでいんの!!?」

「細かいことは良いんですよ。タイミングバッチでしょ? 指揮は私に任せて提督は

石の元に!! アムイクんはもう行きましたよ!」

「えっ!」

奈々に教えられて先ほどまですぐ傍にいた筈のアムイがいなことに気づき、やむなく夜空はエックスや奈々の言うように碧い石の元へと向かうこととなり、リョーガも再びジオアラミスに乗り込んでジオマスケットティと合体し、スペースマスケットティとなつてザイゴークへと立ち向かうことに。

そして夜空はアムイを探してカルロスタワーの中に入り、アムイの名を叫んでどこか

にいないか彼を探して辺り見回す。

『あの子の持つているオーパーツの波動は碧い石とシンクロしている!』

「闇を闇に還す力、ザイゴークを封印する力って訳か……」

『ああ、急ごう、夜空!!』

エックスの言葉に頷くと、夜空は急いでアムイと碧い石を探しに上の階へと階段を使い上り始めるのだった。

*

また先駆けてカルロスタワー内部に向かって行ったアムイはとくと、階段を上つて上の階へと向かう途中であり、彼は必死に父であるヒカルの姿を探し回っていた。

「父さーろーん!! おつちよこつちよいの父さーろーん!!」

すると、そんなアムイの目の前に……突如……。

全身が黒いが、身体中に赤い血管のようなものが浮き出た1人の怪人が彼の目の前にぬらり」と現れたのだ。

『あの碧い石、あれに酷似した気配を感じてきてみれば……』

「っ!!? な、なに……!!? 誰!？」

突然目の前に現れたのは、「悪質宇宙人 メフィラス星人」に酷似した怪人、「閻魔分身怪人 ゴーグメフィラス」であり、その名の通り、ゴーグメフィラスはザイゴークが呼び出した怪人である。

実はザイゴークがゴーグファイヤーゴルザとゴーグアントラーを呼びだす為に放った棘の中にはもう2本、かなり小さめの棘があり、それが先行してカルロスタワーに向かって放たれ、その内の1本がこのゴーグメフィラスへと変貌したものだ。

『君の持つているその光、我が主にとつて邪魔なものなのだ。その光をこちらに渡せば、君に危害は加えないと約束しよう』

しかし、そう言われてもアムイにはなんのことだがサツパリ分からなかったが……よくよく考えてみてアムイはもしかして……と背負っていたリユックからあの化石を取り出す。

「もしかして……これ?」

『それだよ、少年。 私はザイゴーク様の配下の中では紳士的な方だね。 暴力は嫌い

なのだ。 どうだね、この私にたった一言『この化石をあなたにあげます』と言ってくれないかね?』

ゴッグメフィラスは彼なりにそう丁寧にアムイに化石を渡すように要求するのだが、アムイはゴッグメフィラスの言うことなど信用できないし、何よりも胡散臭いし、自分一人助かったところで意味なんてないと考え、アムイは首を横に振って断る。

「嫌に決まってるだろバーク!!」

『そうだろうねえ。 どうせそんな解答が来るだろうと思いましたがよ。 ならば暴力は嫌いですが仕方ありません、無理矢理にでも……』

ゴッグメフィラスはアムイに今にも襲いかかろうとするのだが、その時、アムイの背後から1つの光弾がゴッグメフィラスに向かって放たれ、ゴッグメフィラスはそれを腕で弾いて防ぐ。

『むっ?』

「アムイクン!! って、あれは……メフィラス星人!?!」

そこへジオブラスターを構えた夜空が駆けつけ、さらにゴッグメフィラスの真横から突如現れた時雨の蹴りが繰り出され、ゴッグメフィラスは後ろに後退することで躲す。

「時雨!!」

「提督、こいつは僕に任せて!! アムイクンのお父さんのところに!! 他のみんなも向

かってる!!」

他の艦娘達がヒカルの元に向かったなら「じゃあなんでお前こっち来たの?」と首を傾げる夜空だったが、時雨は口元で薄らと笑みを浮かべてその疑問に応える。

「提督のピンチを察知したって言ったら、信じる?」

「こんな時に何言ってるんだ!! ははっ、単純にみんなとはぐれただけだろ?」

「どうだろうね。 まっ、取りあえず、こいつは僕が相手をするから、今の内に!!」

時雨の言葉に夜空は頷き、アムイと一緒にヒカルを探しに行き、そんな2人をゴージェグメフィラスが追いかけてよとするが、当然時雨が立ち塞がる。

「通させはしないよ!!」

時雨はジオデバイザーを取り出し、サイバーゴモラのカードを装填すると彼女は「ゴモラフュージョン」へと強化変身し、両腕の武器、「ゴモラクロー」を構える。

「行くよ、ゴモラ!!」

時雨はゴージェグメフィラスに向かって駆け出し、クローを振るうが、ゴージェグメフィラスは時雨の攻撃をことごとく躲し、右腕から赤黒いエネルギーソードを形成し、時雨の繰り出して来る右腕のクローによる攻撃を受け止める。

『邪魔をするな!!』

ゴージェグメフィラスは時雨を押し返し、左腕を突き出して光弾を放つが、時雨はクロー

を盾に見立てて光弾を防ぎつつ、両肩の主砲から砲弾をゴッグメフィラスに向けて発射。

だが、ゴッグメフィラスはそれをエネルギーソードで切り裂く。

*

その頃、時雨達の通せんぼをなんとか振り切った黒崎はとうとうと……。。
流石にこのままビルに居るのはヤバイと感じ始めた為、自分も避難しようとする非常階段を降りていたのだが……。。

ふつと視界の隅に碧い石が床に転がっているのが見え、黒崎はそれを初々とした声をあげながら碧い石を急いで拾いあげる。

「お、おおう!! 運命の石よ、ついに我が手に戻ったかく!! んっ?」

「ぐう……うう……うう……!!」

その時、黒崎は瓦礫の柱に挟まっているヒカルの姿を発見。

「おっ？ なにやってんのヒカルさん？」

「見たら分かるでしょ、挟まって動けないんです！」

「ふ〜ん。取りあえず、石、返して貰いますよ？」

黒崎はそう言い残すと、碧い石を持ってその場を立ち去ろうとするのだが……。彼は数歩進んでから不意に立ち止まり、もがき苦しむヒカルの姿を見ると黒崎は「やれやれ」とでも言いたげな様子でヒカルに一時的に碧い石を渡す。

「ちよつとこれ持つといて。今、助けますからね」

そう言うとき黒崎はヒカルを挟んでいる瓦礫の柱に手をかけ、必死に持ち上げようとする。

「なんだ、黒崎さん結構良いところあるんですね」

「このまま自分だけ逃げてあなたが死んだりしたら、寝覚めが悪いだけですよ！」

黒崎はそんな風に悪ぶりながらもなんとか柱を持ち上げようとするのだが……。その時、彼の腰が「ぐぎっ！」と嫌な音を立てる。

「なんですか今の音……」

「いや、ちよつと……腰が……」

「トレジャーハンター名乗ってる割に身体脆いですね!？」

トレジャーハンターを自称する割に身体脆すぎないかとヒカルが思っていると、そこに……。

『見つけたぞ、碧い石……!!』

そこへ尖った頭部が特徴的で「悪質宇宙人 レギュラン星人」に酷似し、ゴッグメフィラス同様赤い血管のようなものが浮き出た怪人、「閻魔分身怪人 ゴッグレギュラン」が突如として現れたのだ。

このゴッグレギュランもまた、ゴッグメフィラス同様にザイゴッグによって放たれた小さな2つの棘の内の1つから生み出された個体である。

そしてゴッグレギュランはなぜか風車を持った通常のレギュラン星人のソフビ人形を持っており、ゴッグレギュランはヒカル達に碧い石を渡すように要求するのだが……。

『さあ、その碧い石をこの世の嫌われ者と名高いこの俺に……!!』

『う(づ)い(づ)い!! こ、腰があく!!?』

『うう、重い……!!』

しかし、ゴッグレギュランの言葉は黒崎は腰を痛めてるせいでそれどころではなく、ヒカルも柱をなんとか押し退かそうとすることに必死で2人ともゴッグレギュランの存在にはまるで気付いていなかった。

『オイ!! 無視すんな!!』

「わあ!?! わああなんだ!?! 怪物〜!?!」

『うるさい!! 兎に角その石を……!!』

次の瞬間、ゴーグレギュランにその場に駆けつけた睦月達の砲撃が直撃し、睦月達と合流した夜空とヒカル、黒崎を探していた彼の秘書もその場に駆けつけたのだ。

『ぐあああ!?! 人が喋ってる途中で撃つ奴があるかあ!?!』

「あのレギュラン星人みたいな奴等は私達が足止めするわ!」

「その間にヒカルさんを助けるぞよ〜!」

暁と睦月は夜空達にそう言うって彼女等はゴーグレギュランに向かって行き、彼女達がゴーグレギュランと交戦している間に夜空やアムイ、秘書はヒカルを助けようとする。

「父さん!!」

「アムイ!! なんで来たんだ!?!」

「来るに決まってるだろ!! 父さんがピンチなんだよ!! 大好きな家族のピンチに駆けつけないなんてこと、僕にできる筈がないだろ!! 逆のような立場だとしても、父さんは僕のこと助けに来るだろ!?! だから、僕も!!」

「っ………アムイ………」

ヒカルはこんな危険な場所に来たアムイのことを叱るが、アムイのその叫びを聞いて

彼は圧巻され、思わず黙り込んでしまう。

*

睦月、如月、暁、菊月はゴージェグレギュランを夜空達から引き離し、ゴージェグレギュランと彼女達は戦闘を繰り広げる。

ゴージェグレギュランは右腕を肉体変化させて回転鋸のついた腕に変化させると、鋸を回転させて睦月と如月に向かって斬りかかる。

それを2人は身体を地面に転がすことで回避し、暁が主砲を構えて砲弾をゴージェグレギュランに撃ち込み、ゴージェグレギュランは回転鋸で切り裂いて砲弾を切り裂く。

『ええい!! 邪魔をしやがって!!』

ゴージェグレギュランは左手から相手を拘束するための捕獲光線を放ち、暁を拘束するのだが……真横から菊月の跳び蹴りが繰り出され、暁の拘束が解ける。

「助かったわ、菊月!」

「ああ」

だが、その時……。

タワー周辺にいたザイゴークがまだ配下であるゴークレギュランとゴークメフィラスがいるにも関わらず、腕のゴークレグジスでビルを攻撃してきたのだ。

「ゲハハハハ!!!」

「ひゃああ!!?! ちよつと、まだビルに仲間がいるのにザイゴーク攻撃してきてない!」

しかし、ゴークレギュランはそんな状況にも関わらず、尚も暁達との戦闘を続行し、回転鋸を容赦なく振るって攻撃してくる。

『我等に命という概念はない。それに、ザイゴーク様が健在である限り我々はあの棘から何度でも蘇ることができるのでよ。ザイゴーク様がここに辿り着く前に、石を回収できなかつた時点で我々の役目は終わった。ならば後の役目は、道連れにしても貴様等、邪魔者を消すこと!!』

ゴークレギュランはそう言い放ちながら再び暁達に襲いかかり、如月はゴークレギュランは自分達ごとザイゴークの攻撃で建物の下敷きになっても構わないという考えから、どうにかしてゴークレギュランを外に誘導しようとこつそりと菊月達に耳打ちする。

「だが、司令官が……。」

「そうね、菊月ちゃんは提督達の元に行つて提督達を手伝つて!」

「分かった」

菊月は如月の言葉に頷き、彼女は夜空達の元へと戻るために駆け出す。

『オイ、どこに……!! まあいいか、どうせ貴様等に勝ち目などない!!』

*

一方で夜空達は必死にヒカルを柱を押し退かそうとするのだが、柱はかなりの重さのようでも中々動かすことができず、その時ザイゴークの攻撃が再びビルに襲いかかって来たのだ。

外ではスカイマスケツティ、ランドマスケツティ、スペースマスケツティ、艦娘達の攻撃が行われていたが、一同攻撃はことごとくザイゴークにはまともに通用しない。

「倒せなくても良い!! 司令官達が石を回収するまで、せめて足止めができれば……!!」

満潮がそう言いながらなんとかこつちに意識を向けさせようとするのだが、ザイゴウグは中々振り向かない。

「皆さん、ありがとうございませす。僕はもう良いから、みんな早く逃げて!! アムイも、早く逃げるんだ!!」

タワー内部にいるヒカルは自分を助けようとしてくれる夜空達に感謝の言葉を述べ、自分を置いて逃げるように言うのだが、アムイは「そんなことできる筈ないだろ!!」と聞く耳を持たなかった。

「良いから逃げるんだアムイ!!」

「父さんは僕に何時も諦めるなつて言つてるじゃないか!! 正しいことをやれつて!!」

僕はその、正しいと思つたことをやるんだ!! 僕は絶対に父さんを置いて逃げたりしない!! 父さんを、家族を、僕が守るんだああああ!!」

アムイは力強くそう言い放つと、彼は子供とは思えないほどの怪力を発揮し、柱をなんとたつた1人で持ち上げたのだ。

「人間舐めたらあかんでええええええええ!!!!」

「はえっ!? なんで関西弁!?!」

丁度そこに戻つて来た菊月がアムイの怪力と台詞に驚いている間に、アムイは柱を投げ捨てる。

柱から抜け出たヒカルはなんとか立ち上がり、アムイのリュックから何やら光っていることに気付く。

「アムイ、それは………」

アムイもそれに気づき、リュックの中にあつた例の化石を取り出すと、化石にヒビが入っていき、砕けるとそれはスティック状の金色のアイテム、「スパークレンス」へと変化したのだ。

さらにはヒカルが持つていた碧い石と、エクステバイザーも輝き出す。

「まさか、これが結びの光………?」

すると、その時、またもザイゴグによるビルへの攻撃が繰り返され、その衝撃によってヒカルとアムイの目の前にあつた壁が崩れて2人に降り注ぐとするのだが……。

「うおおおおお!!!」

アムイは咄嗟にスパークレンスを掲げ、先端部分が展開するとアムイは眩い光へと包まれ、崩れた壁を押し退かして赤と紫のカラーリングが施されたボディに、胸部に金色のプロテクターのある光の巨人……。「ウルトラマンティガ マルチタイプ」がビルから飛び出すように現れ、そのまま真っ直ぐザイゴグを勢いよく殴り飛ばしたのだ。

次の瞬間、エクステバイザーも腐敗が無くなり、エクステバイザーの使用が可能と

なった。

『夜空!! 行けるぞ!! ユナイトだ!!』

「よし、行くぞエックス!!」

夜空もまたエクスデバイザーを構え、上部スイッチを押すと眩い光に包まれ、夜空は「ウルトラマンエックス」へと変身する。

『イイツサアアア——ッ!!』

『エックス、ユナイテッド!』

エックスもまた現れると同時にザイゴークを蹴り飛ばしてザイゴークをビルから突き放し、そのまま地面に着地。

「アムイクン?」

夜空はティガに変身したアムイの姿をジッと見つめ、エックスもまたティガの姿を見て何かを理解したかのような反応を見せる。

『そうか、そういうことだったんだ! 人が人を想い、繋がりが合おうとする心、それが天と地とを繋ぐ光なんだ! その光とユナイトするからこそ、私達は光の巨人と呼ばれて
いるんだ』

「成程な……」

その時、ヒカルが手に持っていた碧い石がまた眩い光を放つと、それが宙に浮かび、ヒ

カル達の前で人の姿へと変化し、1人の男性が現れる。

「なっ、なっ……ひ、人になったあ!!?」

このことに黒崎は目をまん丸にして驚き、ヒカル達もそのことに衝撃を受け、驚いた表情を浮かべる。

「あ、あなたは……?」

「私の名は、ハヤタ・シン。又の名を……」

菊月に問われ、ヒカル達の方に顔を振り向かせながら「ハヤタ・シン」と名乗ったその男性は、スティック状のアイテム、「ベーターカプセル」を取り出すと彼をそれを掲げ、赤いボタンを押す。

「ウルトラマン」

するとハヤタは赤い光の球体に包まれ、その球体がエックスとティガの間まで行くと球体はさらに眩い光を放ち、その中から現れたのは銀色のボディに、赤いラインのある光の巨人……。

『お、おおく! 来たぞ、われらの……!!』

それをラボでモニターで観ていたグルマンは歓喜の声をあげ、同時にエックスのインナースペース内の夜空も、その巨人の名を呟く。

「ウルトラマン……」

原点にして頂点、全ては彼から始まった……始まりの巨人、その名は……
「ウルトラマン」

「ゲハハハハハ!!!」

ザイゴークは3人のウルトラマンを睨み付け、そんなザイゴークの元にゴークファイヤーゴルザとゴークアントラーが集結し、エックスとウルトラマンは立っている位置を入れ替えると、エックス、ティガ、ウルトラマンはファイティングポーズを構える。

「総員に告ぎます!! 3人のウルトラマンと連携し、怪獣達を撃滅してください!!」
『了解!!!』

奈々の指示に従い、艦娘達やタカト、リョーガが返事を返し、エックス達がザイゴーク達に立ち向かって行くと、艦娘達もまた、ザイゴーク達に向かって攻撃を開始する。

エックスはザイゴーク、ティガはゴークアントラー、ウルトラマンはゴークファイヤーゴルザと激突し、エックスはザイゴークの頭部を掴んで押さえ込むと満潮と村雨の砲弾がザイゴークの目元付近に直撃。

『シエア!!』

それによって怯んだところをエックスは後ろ回し蹴りでザイゴークの胸部を蹴りつけるが、すぐさまザイゴークはゴークレグジスでエックスを殴りつけて反撃。

「ガハハハハ!!!」

『へアツ!!』

そこへザイゴグに後ろから飛びかかり、押さえつけるウルトラマン。

『グルアアア!!』

ゴグファイヤーゴルザがそんなウルトラマンに対し、背後から強化超音波光線を放つがそれを割って入って来たティガがゴグファイヤーゴルザの顔面を殴りつけて阻止。

またティガに向かって突進して攻撃を仕掛けるゴグアントラーをティガはゴグアントラーの角を掴んで受け止め、そこにスカイマスケットティとスペースマスケットティから放たれた光弾が撃ち込まれる。

『チャツ!!』

そのままゴグアントラーに膝蹴りを喰らわせて引き離し、続けざまにウルトラマンがゴグアントラーにヤクザキックを喰らわせる。

『シヨワツ!!』

『キュイイイ!!!』

エックスはゴグファイヤーゴルザの胸部に拳を何発か叩き込んだ後、後ろに回り込んでいたザイゴグにすぐさま振り返って掴みかかり、そこに駆けつけたティガと同時に拳をザイゴグに叩きこむ。

『イイイサー!!』

『チャア!!』

だが、直後にゴークファイヤーゴルザの振るつて来た尻尾による攻撃を背中に受け、片膝を突くティガ。

ゴークファイヤーゴルザはすかさず膝を突いたティガに向かって頭部から放つ強化超音波光線を発射するのだが、ティガは素早く両腕を額の前でクロスさせ、勢いよく両腕を振り下ろすと紫色の姿、「スカイタイプ」にチェンジし、空中に飛び上がって素早い動きでゴークファイヤーゴルザの攻撃を躲す。

*

一方で時雨はゴークメフィラスとの戦闘中、偶然もゴークレギュランと戦う暁達と合流し、一同は協力してなんとかゴークメフィラスとゴークレギュランの2体をビルの外に追い出すことに成功。

だが、当然外に追い出してそれでお終いなんてことはなく、そのまま一同は戦闘を続行。

時雨はゴッグメフィラスに両腕のゴモラクローを突き立てて突進を繰り出すが、ゴッグメフィラスはエネルギーソードを振るってエネルギー刃を飛ばして攻撃。

時雨はどうかそれをごモラクローで弾くも、動きを止めてしまい、その隙を突き、ゴッグメフィラスは右腕からの破壊光線を発射。

なんとか時雨は両腕のクローを盾にして防ぐものの、ゴッグメフィラスは目にも止まらぬ速さで時雨の懐に飛び込み、エネルギーソードを振るおうとする。

「しまっ!!?」

「俺を忘れてんじゃねえ!!」

だが、そこにランの放った跳び蹴りがゴッグメフィラスに繰り出され、攻撃をゴッグメフィラスは苦悶の声をあげながら地面を転がる。

「俺はまだ再変身できねえが……、こつちを手伝うくらいはできるぜ?」

「ランさん……。サポート、感謝します!」

時雨は軽くランに頭を下げた礼を述べると、ランと時雨は2人でゴッグメフィラスに駆け出して行く。

『チツ、1人増えたところで……それもウルトラマンに変身できない者など!!』

ゴッグメフィラスは左腕から光弾を時雨とランに向かって連続発射し、2人は左右に分かれて攻撃を回避し、ランは素早くジャンプして一気にゴッグメフィラスとの距離を詰め、掴みかかる。

「セアア!!」

ゴッグメフィラスに膝蹴りを叩き込み、怯んだところにさらに後ろ回し蹴りを喰らわせるラン。

「退いてランさん!!」

時雨の言葉に従い、ランが素早くその場から離れると両肩の主砲から彼女は砲弾を放つ。

しかし、ゴッグメフィラスはそれをエネルギーソードで切り裂いてしまう。

「なんて野郎だ……!!」

また暁、如月、睦月はゴッグレギュランとの戦闘を繰り広げており、3人はゴッグレギュランを三方向に囲んで主砲から砲弾を放つ。

だが、ゴッグレギュランは高くその場から飛び上がり、暁達の放った砲弾は互いに激突し合って相殺されてしまう。

空中に浮かび上がったゴッグレギュランはそのまま両腕から破壊光線を雨降らせるかのように暁達に放つ。

「きゃああああ!!!?」

「わああああ!!!? この!! 降りてこおーい!!」

それに怒った睦月は足部に装着された艦装から魚雷を取り出して手に持ち、それをゴージェレギュランに向かって投げつけ、直撃を受けると魚雷が爆発。

『うおおお!!』

地上に落下したところを暁達はすかさず一斉射撃を行うのだが、素早く立ち上がったゴージェレギュランは右腕の回転鋸を振るって砲弾を切り裂く。

『調子に乗るんじゃねえ!!』

ゴージェレギュランは睦月に向かって駆け出し、腕の回転鋸を振るって攻撃を仕掛ける。

「ひゃあああ!!!?」

しかし、睦月はそれに驚いて頭をかがめたことで攻撃を回避。

そこに暁と如月がタツクルをゴージェレギュランにタツクルを喰らわせる。

『うおつと……!! 貴様等あ!!』

*

ゴーグアントラーは羽根を広げ、空中へと飛び立ち、それを追うようにウルトラマンも飛び上がってスカイマスケッティやスペースマスケッティと共にゴーグアントラーを追いかける。

スカイマスケッティはフアントン光子砲、スカイマスケッティはフアントニックレーザーをゴーグアントラーに撃ち込もうとするのだが、ゴーグアントラーはやはり素早く、中々直撃させることができなかった。

「あのクワガタさんの動きを一瞬でも止められたら良いんだけど〜」

「あら、アリジゴクじゃないの?」

「どっちでも良いっばい!」

文月と荒潮の言葉に対して珍しくツツコミを入れる夕立。

そんな彼女はサイバーガルベロスのカードを取り出して、ジオデバイザーに装填。

『サイバーガルベロス、ロードします』

「一か八か………ガルベロスイリュージョン!!」

夕立はゴーグアントラーの進行方向に向かって砲弾を発射すると、突如としてゴーグアントラーの目の前に巨大な岩山が出現。

それに驚いたゴッグアントラーは一瞬動きを止めてしまう。

『へアツ!!』

その隙を見逃さず、ウルトラマンは高速スピンをを行いながら発射したリング状の光の鎖で相手を拘束する「キャッチリング」を繰り出し、アントラーを拘束し、身動きが取れなくなったゴッグアントラーは地上に落下。

それと同じく、ウルトラマンも地上に降り立ち、ゴッグアントラーに近づくのだが……ゴッグアントラーはなんとキャッチリングを無理矢理引き千切って立ち上がり、口から光弾を何発も吐き出してそれをウルトラマンに直撃させる。

『ウアアアツ!!?』

攻撃を受けたウルトラマンは倒れこみ、ゴッグアントラーは再び空に飛び立とうと翼を広げる。

「また空に逃げるつもりか!? そうはさせない!!」

タカトはジオデバイザーにサイバーゼットンのカードを装填し、そのリミッターを解除させる。

『サイバーゼットン、ロードします』

「サイバーカード、リミッター解除!!」

『リミッター、解除します』

そのことについてリョーガは慌てて通信でタカトを止めに入る。

『やめるんだタカト!! 危険すぎる!! それもゼットンの力なんて……!!』

「奴の頑丈な身体にダメージを与えるには、これしかない!! ゼットントルネード!!!」

スカイマスケットティは期待を横に拘束回転させて巨大な竜巻を作り出し、それをゴングアントラーに浴びせる。「ゼットントルネード」を繰り返して竜巻はゴングアントラーを飲み込み、空中に浮かび上がらせてそのまま勢いよく地面に叩きつける。

「キュイイイイイ!!!」

その際、無茶な動きをしたせいでスカイマスケットティは全身から火花を散らし、墜落。

「今だぁー……!!! 奴の翼を狙えええええええ!!!」

タカトの叫びを受け、リョーガはそれに応えるようにジオバイザーに「サイバーベムラー」のカードを装填させる。

『サイバーベムラー、ロードします』

それと同時に、朝潮、荒潮もジオバイザーにサイバーブラックキングとサイバーレイキュバスのカードを装填させる。

『サイバーブラックキング、ロードします』

『サイバーレイキュバス、ロードします』

『ブラックヘルマグマ!!』

「レイキュバスシザーズ!!」

朝潮は主砲から強力な炎を、荒潮はハサミ型のエネルギー刃をゴッグアントラーの背中に撃ち込み、スペースマスケットティモ「宇宙怪獣 ベムラー」の力を宿した青白い光線を放ち、ゴッグアントラーの両方の翼を破壊。

「キュイイイイイイ!!!」

翼を破壊されたことで、怒りの矛先を朝潮達に向けるゴッグアントラーだったが……即座にウルトラマンがゴッグアントラーに掴みかかり、腹部に膝蹴りを喰らわせる。

『へアッ!!』

戦闘BGM「勝利」

ウルトラマンの膝蹴りに怯むゴッグアントラーだが、すぐさま近距離から口から吐き出す光弾を撃ち込もうとするのだが、素早くウルトラマンはゴッグアントラーの角を掴んで顔を無理矢理上に向けさせ、光弾は空中に撃ち込まれただけで不発に終わる。

そのままウルトラマンはゴッグアントラーを突き放すとゴッグアントラーの胸部に強烈なチョップを叩き込み、蹲るゴッグアントラー。

『シユア!!』

ウルトラマンはすかさずゴッグアントラーの右腕を掴みあげると背負い投げを繰り

出し、ゴーグアントラーは背中を強く打ち付ける。

「キュイイイイイイ!!!!?」

追い打ちをかけようとするウルトラマンだが、ゴーグアントラーは光弾をウルトラマンの顔目がけて発射し、それに思わず飛び退き、躲すウルトラマン。

『っ!!』

「キュイイイイイ!!!!」

立ち上がったゴーグアントラーはウルトラマンの身体をその自慢の顔のハサミで拘束し、力強くそのハサミでウルトラマンを締め上げる。

『オアアア!!!』

だが、ウルトラマンは両手で「ガシツ!」とゴーグアントラーのハサミを掴みあげる
と、そのまま無理矢理引つpegがすようにしてハサミを破壊。

『シヨア!!』

「キュイイイイイ!!!!?」

拘束から解放され、ウルトラマンはゴーグアントラーを蹴り上げて自分から引き離す。

それでもゴーグアントラーは光弾をウルトラマンに撃ち込むが、ウルトラマンは両手を胸の前に水平に構えた後、挙げた右手を振り下ろして投げる光の鋸「八つ裂き光輪」を

マルチに比べてパワーで劣るスカイタイプとは言え、勢いをつけた蹴りを頭部に受けてはゴッグファイヤーゴルザも脳が大きく揺れ、フラついてしまう。

「私達も続けえー!!」

ティガの援護に廻った菊月がそう叫ぶと、彼女は「剛力怪獣 シルバゴン」のサイバークードを装填し、村雨もまた「ミサイル超獣 ベロクロン」のサイバークードをジオデバイザーに装填する。

「シルバゴンパワーアタック!!」

「ベロクロンミサイル!!」

菊月はシルバゴンの角を横したエネルギー弾「シルバゴンパワーアタック」、村雨は主砲から砲弾の代わりにミサイルを放つ「ベロクロンミサイル」をゴッグファイヤーゴルザに撃ち込む。

「グルアアアアアア!!!!」

ゴッグファイヤーゴルザに攻撃が直撃し、それによってよろめくゴッグファイヤーゴルザに向かってティガは再び空中から勢いをつけた跳び蹴りをゴッグファイヤーゴルザに叩きこむ。

「ガアアアアアア!!!!?」

ゴッグファイヤーゴルザが地面に倒れ込んだところをティガはさらに空中から急降

下キックを繰り出すのだが……突如、ゴッグファイヤーゴルザは身体を球体に変化させて地面を転がることで回避。

さらに素早く元の姿に戻ると振り返りざまに着地したティガの背中に向かって強化超音波光線を撃ち込み、ティガは背中から火花を散らす。

『ウアアアア!!?』

片膝を突いたところをゴッグファイヤーゴルザは容赦なく尻尾を振るってティガを攻撃し、攻撃を受けたティガはビルに激突。

そのままゴッグファイヤーゴルザは再び球体に変化して何度もティガに激突し、タイプチェンジする余裕を与えない。

「こっちも最後の手段と行きますか!」

そう言うのと奈々は「バリヤー怪獣 ガギ」のサイバーカードを取り出してジオデバイザーに装填。

『サイバーガギ、ロードします』

「サイバーカード、リミッター解除!!」

『リミッター、解除します』

するとランドマスケットティの主砲部分から一つの光弾が放たれてそれが鞭状となり、球体状態のゴッグファイヤーゴルザを拘束し、動きを封じたところですかさずガギの爪

を横した強力な光弾を次々ゴーグファイヤーゴルザに喰らわせる。

「グルアアアアアアア!!」

それによってゴーグファイヤーゴルザは大きく吹き飛ばされ、満潮、臯月、雷の3人はそれぞれサイバーバキシム、サイバーレイキュバス、サイバーネロンガという怪獣達のカードをデバイザーに装填し、それらの怪獣の力を宿した砲撃を放って元の状態に戻ったゴーグファイヤーゴルザの頭部を集中攻撃し、流石に集中攻撃には耐えきれず、頭部の突起部分が破壊される。

「グルアアアアアア!!」

「ふふん、これであの光線も撃てないでしょ!」

その間にティガは両腕を交差して額を一瞬輝かせ、両腕を振り下ろすと力に優れた赤い姿「パワータイプ」にチェンジ。

『チャア!!』

ティガはゴーグファイヤーゴルザに向かって駆け出すと、ゴーグファイヤーゴルザの胸部に何発も重い拳の一撃を叩きこんでいき、頭を両手で押さえつけるとゴーグファイヤーゴルザの顎に膝蹴りを喰らわせる。

『ハアア!!』

「ガアアアアアア!!?!」

パート3 『夜の空、繋がる光』

同じ頃、時雨、ランはゴーグメフィラスに2人同時に殴りかかったが、ゴーグメフィラスは2人の攻撃を軽く受け流して2人から距離を取ると2人の足下にエネルギー刃を飛ばす。

それを時雨はゴモラクローで防いだが、続けざまにゴーグメフィラスの放った破壊光線には耐えきれず、後ろにいたランを巻き込んで2人は吹き飛ばされてしまう。

「うわあああ!!?」

「わあああ!!?」

またゴーグレギュランは暁の首を左手で締め上げ、彼女を助けようとした如月と睦月に向かって来た2人に右腕を元の状態に戻し、光弾を放ち、直撃こそしなかったが2人の足下が爆発し、2人は軽く吹き飛ばされ、地面に倒れ込む。

「きゃあああ!!?」

『フーン!』

「うっぐ……ひゃあ!!?」

ゴーグレギュランはそのまま暁を睦月や如月のいる方向へと投げ飛ばし、暁も地面を

転がりながら睦月達の元まで倒れ込んでしまふ。

『思ったよりも楽しめましたよ。 ですがもう終わりです』

『年貢の納め時つてやつだな。 もう諦めろ、すぐに楽にしてやる』

ゴグメフィラスは倒れる時雨達に向かってエネルギーソードを突きつけ、ゴグレギュランと共にトドメを刺そうと近づく。

「まだだ………！ まだだよ、僕等はまだ………戦える!! 他のみんなが、ウルトラマンが!! 提督が………夜空がまだ諦めずに戦ってるんだ。 起き上がるんだみんな!! まだ眠る時間じゃない!!」

フラつきながらも、それでも拳を握りしめ、なんとか立ち上がる時雨。

そんな彼女に同意するように暁達も立ち上がる。

「そうね、私達にはまだ切り札があるわ」

「うん、一緒に戦ってくれる、力を貸してくれる仲間がいるよ!!」

「頼むわよ、相棒………!!」

如月、睦月、暁の順で3人がそう言い放つと、彼女等3人はそれぞれ一枚のサイバーカードを取り出し、それをジオデバイザーに装填する。

『サイバーサラマンドラ、ロードします』

『サイバーガルラ、ロードします』

『サイバーザラガス、ロードします』

睦月の艦装が「超古代怪獣ガルラ」の胸部を模した形に変化し、さらに手に持つ主砲も砲口はそのままでガルラの頭部を模したシールドのような形状「ガルラシールド」に変化し、睦月の服も銀色のラインが入った「ガルラフュージョン」へと変化。

如月の艦装はサラマンドラの胴体部分に酷似した模様が入り、主砲がサラマンドラの頭部を模したものとなり、左手にサラマンドラの爪を模した武器「サラマンドラクロウ」が装着され、服にはグレーのラインが入った姿となった「サラマンドラフュージョン」となる。

暁の服には紫色のライン、左腕にザラガスの背中を模した主砲を装備した盾「ザラガスシールド」、右腕にザラガスの頭部を模した手甲「ザラガスホーン」が装備された「サイバーザラガスフュージョン」となり、暁はザラガスホーンを構えてバリアに突撃する準備をする。

『サイバーサラマンドラフュージョン、アクティブ！』

『サイバーガルラフュージョン、アクティブ！』

『サイバーザラガスフュージョン、アクティブ！』

それと同時に、時雨の耳にゴモラの鳴き声が聞こえた。

「えっ、ゴモラ……？　そうか、分かったよ」

ゴモラの鳴き声に応えるかのように、時雨は静かに頷くと彼女はサイバーゴモラのカードが装填されたままの状態でジオバイザーの上部スイッチを押す。

すると、エクステバイザー同様にジオバイザーが変形し、Xモードにさせると、そこから青い光が放たれ、時雨の姿が変化する。

『駆逐艦時雨、サイバーゴモラ、ロードします』

左腕に装着されたゴモラクローが変化し、「EXゴモラ」の腹部を思わせる盾に変化し、さらに鋭い槍状のものが盾の先に装備され、右腕のゴモラクローがより鋭利なものに変化した姿……「EXゴモラフュージョン」に時雨は変わったのだ。

『EXゴモラフュージョン、ユナイテッド!!』

時雨のこの姿、これはサイバーゴモラが時雨アーマーを装着する時の応用であり、その逆パターンと言える形態。

通常のモンスフュージョンとは違う、完全にゴモラと力を融合させた時雨の究極形態である。

「えっ、なんで時雨……姿が変わったの?」

「説明はあと、今はアイツ等だよ!」

当然ながら、暁はなぜ既にモンスフュージョンしている時雨の姿まで変わったのか分からず、首を傾げる。

『成程、まだまだ楽しませてくれるということですか。ならばこちらもパワーアップと行きましようか』

そう言うのとゴーグメフィラスは自身に赤い鎧のようなものを装着し、「アーマードゴーグメフィラス」へと変化。

それを見てゴーグレギュランは「えっ」と驚いた声をあげる。

『えっ、なにそれ俺知らない……。ズルいぞ!! お前だけそんなの!!』

何かゴーグレギュランはゴーグメフィラスに文句を言っているが、ゴーグメフィラスは無視して鎧と共に右腕に装着された新たな赤黒い剣、「ゴーグメフィラスブレード」を構えて時雨に向かい駆け出す。

挿入歌「海色」

ゴーグメフィラスに文句を垂れつつも、ゴーグレギュランはランに向かって何度も右腕を肉体変化させた回転鋸で攻撃を繰り出す。ランはそれらの攻撃を全て躲し、的確にゴーグレギュランの身体に自身の拳を叩き込んで行く。

『ぐうう!!? クソ、なんで当たらねえ!!?』

「攻撃がおざなり過ぎるんだよ、お前は!!」

そのまま後ろ回し蹴りを繰り出し、大きく後退するゴーグレギュランだが、ゴーグレギュランは右手を振るって回転鋸をランに向かって飛ばして来る。

だが、それを暁がザラガスホーンで受け止め、それによってザラガスホーンの甲羅のような部分が剥がれ、防御力がアップ。

そのまま暁はジャンプして一気にゴージェグユランに詰め寄るが、すかさずゴージェグユランは暁が攻撃してくる前に左手から光弾を撃ち込むが、暁はそれも素早くザラガスホーンで防ぐ。

それによって再びザラガスの「攻撃を受ければ受けるほど強くなる」という力が発動し、ザラガスホーンから大量の針が出現し、その針はゴージェグユランを攻撃し、ゴージェグユランは身体中から火花を散らし吹き飛ばす。

『ぐああああ!!?』

「へっへっへーん!! レディーは頭脳ブレイだつてできるんだから!!」

そこへ今度は睦月と如月のガルラシールドとサラマンドラクローによって2人同時に殴りつけられ、ゴージェグユランは蹲る。

「観念するしいー!!」

『誰がするかあ!! 4人がかりだからって舐めんじゃねえ!!』

ゴージェグユランは暁達4人の頭上に向かって左手から光弾を放つと、光弾は分裂してそこから雨のように小さな光弾が降り注ぐ。

しかし、それを睦月はガルラシールドから発生させる巨大なエネルギーでみんなを攻

撃から守る。

「ありがとう、睦月ちゃん!!」

その間に如月はサラマンドラクローから火炎を放ち、ゴージェギュランの全身を燃や
す。

『あつつうううううう?!?!?!』

それによってゴージェギュランはダメージを動け、動きが鈍くなったところで睦月、
如月、暁は3人同時にサイバー怪獣の力を宿した主砲から一気にエネルギーを光線とし
て放出する。「トリプルサイバーバースト」を繰り出す。

「トリプルサイバーバースト!!!」

『ぐあああああああ!!! この俺が、この程度の奴等にいいいいいい!!!』

直撃を受けたゴージェギュランは火花を散らして倒れ、爆発するのだった。

一方、ゴージェフィラスはゴージェフィラスブレードを振るい、同時に時雨は右手の
ゴモラクローを振るって互いの武器をぶつけ合わせる。

しかし、素早く繰り出されて時雨の膝蹴りが叩きこまれ、続けざまに後ろ回し蹴りを
ゴージェフィラスに炸裂させる。

『ぐおおお?!?!』

それによって大きく怯むゴージェフィラスだが、なんとか左腕を突き出して放つ光弾

「ダークネスレイ」を発射するが、時雨はそれをゴモラクローで弾き飛ばし、左手に装備された盾の先端にある槍状の部分を鞭状に変化させた「ゴモラウィップ」を伸ばしてゴッグメフィラスの身体を拘束する。

『むぐつ!!』

「うおおおおお!!!!」

そのまま時雨は鞭を大きく振り回してジャイアントスイングを繰り出し、勢いよくゴッグメフィラスを地面に叩きつける。

『ガハアア!!!!』

その際に拘束が解かれ、地面を転がるゴッグメフィラスに時雨はすかさず詰めより、槍状に戻した「テイルスピア」で攻撃を仕掛けるが、ゴッグメフィラスは左腕にエネルギーソードを発生させてそれをなんとか防ぎ、右手のゴッグメフィラスブレードを時雨に突き立てようとするが……。

時雨はゴモラクローで受け止め、一度ゴッグメフィラスから離れる。

『まさか、ここまでのパワーを発揮するとは……ならばこれならどうです!!?』

ゴッグメフィラスはゴッグメフィラスブレードとエネルギーソードをX字に振るって放つ斬撃を時雨に飛ばすが、時雨はテイルスピアを突き出して正面からその斬撃を打ち砕き、そのまま真っ直ぐ突き進んでゴッグメフィラスの胸部に直撃させ、ゴッグメ

フィラスは大きく空中へと吹き飛ばされる。

「テイルスピーアー?!」

『ぬあああああ!!!』

「行くよ、ゴモラ!!!」

そして時雨は空中にいるゴグメフィラスに向かって両肩の主砲からエネルギーをチャージして放つ超強力光線「EXバーストデストロイヤー」を放つ。

「EX!! バーストデストロイヤー!!!」

時雨の放った光線は空中にいるゴグメフィラスに直撃し、ゴグメフィラスは身体中から火花を散らして爆発。

『うぐあああああ!!!?』 見事………です………!! うぐあああああ!!!?』

*

戦闘BGM「Xの戦い」

ザイゴークは背中中の小さな棘を複数エックスに飛ばして攻撃して来るが、エックスはそれを手刀で切り裂き、ザイゴークに詰めよって拳を2連続叩き込む。

『イイーサアア!!』

しかし、エックスの攻撃などまるで意に返さないとばかりにザイゴークはゴークレグジスでエックスを殴りつける。

『ウアア!!?』

「ガツハツハツハ!!!」

ザイゴークは片膝を突くエックスに向かって足を振り上げて蹴り飛ばし、吹き飛ばすエックスだが、咄嗟に光エネルギーを矢じり型にして2連続で放つ「Xダブルスラッシュ」を撃ち込むが、やはりザイゴークにはあまり効かない。

「こうなったら、一気にザナディウム光線で勝負だ!!」

『よし!!』

両腕を左側へいったん振りかぶってから胸の前でX字にクロスさせて放つ必殺光線、「ザナディウム光線」をエックスはザイゴークに向かって放ち、同時にザイゴークも胸部を開いてから放つ火炎弾「ヘルズレリーフ」を放ち、互いの光線が激しくぶつかり合う。

『ザナディウム光線!!!!!!』

「ガハハハハ!!!」

徐々にエックスの方が押され始めるが……。

『「負けるかああああ!!!」』

気合いを入れたエックスと夜空の叫びに応えるかのようにザナデイウム光線の威力が上がり、ザイゴークの光線を押し返してザナデイウム光線はザイゴークに直撃し、ザイゴークは爆発……? ……煙に包まれるのだった。

「グギャアアアアア!!!」

エックスは遂に、ザイゴークに勝利することができ、そんなエックスの元にマルチに戻ったティガとウルトラマンが駆け寄る。

だが、その直後……煙の中から触手のようなものが飛び出してティガとウルトラマンの首に巻き付いて拘束。

『ジュア!!?』

『ウアアツ!!?』

「ガハハハハ!!!」

さらに煙の中から未だに健在なザイゴークが姿を見せ、ザイゴークはウルトラマンとティガの光のエネルギーを吸収し始めた。

「まずい!! あれは俺の時と同じ……!!」

その戦いを見ていたランがウルトラマンとティガからエネルギーを吸い取っていることに気付き、ランはエックスに早く触手を2人から剥がすように叫び、エックスは言われた通り、2人に絡まる触手を剥がそうとするのだが……。

「ガハハハハ……!!」

ザイゴークは背中から7本の巨大な棘を出現させ、射出……その内の1つはエックスに直撃してエックスを吹き飛ばし、彼は大ダメージを受けて倒れ込んでしまった。

『ウアアアアア!!?!』

同時に、エックスのカラータイマーが点滅を始める。

そのままザイゴークの放った棘は中国、スイス、エジプト、アルゼンチン、イタリヤ、アメリカ、オーストラリアに向かう。

そのことをグルマンから通信で聞かされた奈々はすぐさま各国の軍隊にすぐさま対応するようにジオデバイザーを使って通信。

やがて、棘はそれぞれの場所に辿り着くとツルギデマーガに酷似した「闇魔分身獣ツルギデマーガ」が出現。

「「「「「グルアアアアアアアアアア!!!!」」」」」

「えっ、世界中に怪獣が……!!?!」

そのことをヒカル達の元へと行き、そこでデバイザーからの通信で世界中に怪獣が散らばったことを知った時雨達も、その事実には驚愕し、唾然とする。

「このままじゃ、世界中が怪獣地獄に……」

時雨達は、ウルトラマン達を援護したいところだったが、既にみんな大破、もしくは大破寸前の中破状態であり、まともな攻撃をできる者はいないも同然だった。

サイバーゴモラを呼び出そうにも、ザイゴークとの戦闘と時雨とEXゴモラフュージョンになった際の影響で力を大きく消耗している為、既にEXゴモラフュージョンは解除され、その上サイバーゴモラを呼び出せる状態ではなかった。

ジオマスケツティ3機も内2機はリミッター解除をしたせいでダメージが大きく、もう動くことはできず、スペースマスケツティもあの触手を切断できるほどの攻撃エネルギーも残っていないかった。

エックスも身体へのダメージが大きく、中々動くことが出来ずにいた。

「もう打つ手が……何か他にできることは……」

時雨がまだ自分達にできることがある筈だと考える中、そこへ黒崎が前に飛び出し、エックス達に向かって声援を送ったのだ。

「頑張れ……頑張れウルトラマン!!!」

「そうだ、行け提督!!!」

「エックス立ってくれ!! 無言の腹パン喰らわせるぞ!!」

黒崎に続き、タカトや菊月も声援を送り始め、やがて他のみんなも一斉にエックス達に声援を送る。

「えっ、普通こういうの僕からじゃないの? まあ、そこは良いか。 そうだよ、夜空!!!」

エックス!! 頑張つて!!!」

「ティガ………アムイ、諦めるな!!」

「そうだ諦めるな!! 希望だけが、絶望と闘う光になるんだ!! そして人と人が繋がる力が………」

ヒカルの言葉に同意するように言い放つ黒崎だが、直後に菊月から無言の腹パンを喰らわされてダウンする。

「げほっ………」

「全部アンタのせいだろ、反省しろ」

「頑張れ、エックス、夜空!! 僕達は、信じてる………君たちの勝利を、ウルトラマンの勝利を!!」

『ウルトラマン………!!!』

そして、一同が一斉にウルトラマン達の名を叫ぶと………。

鎮守府のラボにあった2枚のカードが輝き出し、グルマンの周りを飛び回る。

『お、おおう、これは……時雨!! 新カード完成だ!! 転送する!! デュワツ!!』
グルマンから時雨に2枚のカード……ウルトラマンとティガのサイバーカードが送られ、それを受け取った時雨はそのデータをエックスと夜空に送る。

「これは、ウルトラマンとティガの……。エックス、夜空!! これを受け取って!!」

時雨はすぐさま新たなサイバーカードを夜空のエクステイザーに転送し、インナースペース内で夜空の目の前にティガとウルトラマンのカードが現れる。

「ありがとう、時雨、みんな!!」

夜空は2枚のカードをデバイザーに装填すると、エクステイザーからベーターカプセルとスパークレンズに酷似したアイテム、「エクスベーターカプセル」と「エクスパークレンズ」が出現。

「これが、ティガとウルトラマンの力!!」

『そしてこの星の持つ希望の力だ!!』

夜空はエクスベーターカプセルとエクスパークレンズを手に取ると、その2つを合体させ、「ベータースパーク」にさせる。

すると、エックスの左肩にティガの胸部を模した鎧が装着され、右肩にはウルトラマンの胸部を模した鎧が装着され、エクシードXになると同時に胴体部分には黄金の鎧が

それぞれ装着された姿……。

エックスは黄金の鎧を纏った最強の形態、「ウルトラマンエクシードX ベータスパークアーマー」となったのだ。

『「ベータスパークソード!!!」』

ベータスパークにも似た剣、「ベータスパークソード」を右手に持ち、エックスがそれを振りかざすとザイゴグの触手2つをエックスは一気に切断され、ティガとウルトラマンが解放される。

「ガハアアア!!!」

「人が人を、この星を想う心……それが、天と地の光を繋ぐ結びの光って……ことなんだね」

そんなベータスパークアーマーの鎧を纏ったエックスの姿を見て、時雨は微笑みながら呟く。

挿入歌「ウルトラマンX」

すると、鎮守府のラボにあったメビウス、ギンガ、ビクトリー、ゾフィー、ウルトラの父、ネクススのカードが光輝き、どこかへと飛んでいく。

『お、おお!! 良いぞ行け、行けえ!!』

その際、ランの装着していたウルティメイトブレストも一瞬眩い光を放つと、錆びて

いた部分が消え、元の状態に戻る。

「ブレスレットが……！！」

それだけではない、ヴェールヌイの元に一枚の輝くサイバーカード……ネクサスのカードがやって来て、彼女は戸惑いつつもそのカードを手に取ると、カードは「エボルトラスタール」に変化。

「そうか、君と私も、繋がっているってことだね、ネクサス」

彼女はそう呟いた後、暁、雷、電の方へと振り返る。

「行ってきます」

「「いってらっしゃい!!」」

ヴェールヌイはエボルトラスタールを鞘から引き抜き、それを掲げると光に包まれ、「ウルトラマンネクサス アンフアンス」に変身し、そのまま白い姿の「ジュネツスホワイ ト」に変化。

「俺も行くぜ!! デュア!!」

ランもまたウルトラゼロアイを取り出し、目に装着すると彼は「ウルトラマンゼロ」に変身し、ネクサスと共に世界各地で暴れるツルギデマーガの対処に向かうのだった。

中国で暴れるツルギデマーガにはゼロが駆けつけ、右足から炎の跳び蹴りを繰り出す「ウルトラゼロキック」を炸裂させる。

『俺達のビッグバン、見せてやるぜ!!』

ツルギデマーガはゼロに向かって駆け出し、両腕の刃でゼロを攻撃するが、ゼロはバク転をして攻撃を躲し、額のビームランプから放つ「エメリウムスラッシュ」という光線でツルギデマーガの両腕の刃を破壊。

『エメリウムスラッシュ!!』

さらにゼロは青い姿、「ルナミラクルゼロ」へと姿を変える。

『ルナミラクルゼロ!』

『グルアアア!!』

そんなゼロに対し、ツルギデマーガは口から発射する「熔鉄光線」を放つが、超スピードで光線を躲し、ツルギデマーガに詰め寄ると右掌を相手に当てて衝撃波を放つ「レボリウムスマッシュ」を繰り出し、ツルギデマーガを吹き飛ばす。

『レボリウムスマッシュ!!』

『グアア!!』

そこから吹き飛ばされたツルギデマーガに向かい、ゼロは光のゼロスラッガーを作り、それを無数に分裂させて相手を斬りつける「ミラクルゼロスラッガー」でツルギデマーガの身体を切り刻む。

『ミラクルゼロスラッガー!!』

「ガアアアア!!?」

エジプトではネクサスがツルギデマーガと戦闘を繰り広げ、熔鉄光線を口から吐き出すが、ネクサスは「サークルシールド」というバリアで攻撃を防ぐ。

『守ってみせる、みんなを!!』 ヒーローとして、ウルトラマンとして!!』

スイスではウルトラの父が地上に降り立ち、ゆつくりとツルギデマーガに向かって歩いて来る。

それにツルギデマーガはウルトラの父から感じる闘気に一瞬怖じ気づきそうになるが、ツルギデマーガはウルトラの父に向かって突っ込む。

しかし、ウルトラの父はツルギデマーガの突進を難なく躲し、逆に突進して来た際に強烈な拳をツルギデマーガの腹部に叩き込み、ツルギデマーガは片膝を突く。

「グルル……!!?」

『どうやら、以前会った時よりも頼もしくなったようだな、エックス、夜空』

オーストラリアではメビウスが光の剣、「メビウムブレード」を構えてツルギデマーガの振るう刃と激しく斬り合いを演じており、メビウスはツルギデマーガの刃を押し返して膝蹴りを喰らわせる。

『遅くなってごめん!! ちよつと立て込んで……でも、その分ここから頑張るよ!!』

イタリアではゾフィーが駆けつけ、ツルギデマーガの繰り出す攻撃を全て躲し、すれ違いざまに手刀で相手を斬りつける「ウルトラ霞切り」を繰り出し、ツルギデマーガにダメージを与える。

『エックス、夜空、こちらは我々に任せろ!』

アメリカではビクトリーが現れ、足から放つ矢じり型の光弾「ビクトリウムスラッシュ」をツルギデマーガに次々炸裂させる。

『特に言うことなし!!』

オイ。

『しようがねえだろ!! 大体言いたいこともうみんな言ったし!!』

そしてアルゼンチンではギンガがツルギデマーガと戦い、ギンガはツルギデマーガの頭を掴みあげるとそのまま背負い投げを繰り出す。

『そっちは頼んだぜ、エックス、夜空!!』

ゼロ、ネクスス、メビウス、ウルトラの父、ゾフィー、ギンガ、ビクトリーが各国の軍隊や艦娘達とも共闘し、ツルギデマーガ達と戦う。

その光景をジオバイザーを通して見た皐月は歓喜の声をあげる。

「10人のウルトラマンが、この世界を守る為に……戦ってくれてるんだね、なんか感激……!」

「ガアアアア?!!」

「いけえええええええええ!!!」 エックス!! 提督!!」

「頑張れええええええええ!!!」

みんなの応援を受け、エックスはザイゴークの背後に回り込んで背中 of 棘の幾つかをベータスパークソードで切り裂いて破壊する。

「ガアアアアアア!!!」

それにザイゴークは怒りの声をあげて振り返りざまに胸部から放つ火炎弾「ヘルズレリープ」を放つが、エックスの元にやって来たティガが両腕を腰の位置まで引き前方で交差させた後、左右に大きく広げて光を変換した破壊エネルギーを集約し、L字型に腕を組んで放つ必殺光線「ゼペリオン光線」を発射。

同じように、エックスの元にやってきたウルトラマンも両腕を十時に組んで放つ必殺光線「スペシウム光線」が放たれ、ウルトラマンとティガの同時光線はザイゴークの光線を相殺し、間に爆発が起きる。

『へアッ!!』

そしてエックス、ティガ、ウルトラマンは空中に飛び立ち、ティガとウルトラマンがエックスの前で身体をクロスさせると光のエネルギーとなってエックスと一体化。

エックスの全身が一瞬黄金に輝くと、エックスの背中から巨大な光の翼が出現。

「これは……」

「ウルトラマンとティガの、力の結晶だ!!」

そこから複数の光が放たれ、世界各地で戦うウルトラマン達の元に降り注ぐ。

『来た来たあ!! フルパワー充電だ!! みんな、一気に行くぜ!!』

通常形態に戻ったゼロがそう言い放つと、ゼロを始めゾフィー、メビウス、ウルトラの父、ネクサス、ギンガ、ビクトリーはそれぞれの必殺光線「ワイドゼロショット」「M87光線」「ファザーショット」「シールドレイ・シュトローム」「メビウムシュート」「ギンガクロスシュート」「ビクトリウムシュート」をツルギデマーガ達に放ち、直撃を受けたツルギデマーガ達は爆発して消滅するのだった。

『エックス、夜空！ 最短で最速で真っ直ぐ一直線に、行っちゃえ!!』

ツルギデマーガを倒し終えたギンガの言葉に地面に降り立ったエックスは頷く。

そんなエックスに、ザイゴークも最後の勝負を仕掛けようと胸部により強力なエネルギーをチャージし、胸部から放つ「ヘルズレリーブ」と口から放つ「ブラディフラッシュング」を同時発射。

『来るぞ、夜空!!』

「ああ、行くぞエックス!!」

夜空とエックスはベータスパークソードを変形させて弓矢型の「ベータスパークア

ロー」に変形させると、エネルギーをチャージする。

だが、その間にザイゴークの放った攻撃がエックスに直撃し、一同は目を見開くが……エックスは依然としてその場に全くの無傷で立っており、エックスはベータスパークアローから放つ巨大な光の矢「ベータスパークアロー」をザイゴークに向かって炸裂させる。

『ベータスパークアロー!!!』

エックスの放った一撃は、ザイゴークに直撃し……そのまま胸部を貫き、ザイゴークは身体中から火花を散らして倒れ爆発四散。

今度こそ、エックスはザイゴークに勝利することが出来たのだった。

『やったあああああああ!!!』

エックスの大勝利に、時雨達は飛び上がってその勝利を喜び合う。

エックスはアーマーを解除して通常形態に戻り、ティガとウルトラマンも再び実体化して姿を現す。

そこへ丁度、ゼロ、ゾフィー、メビウス、ウルトラの父、ネクサス、ギンガ、ビクトリーが駆けつけ、エックス達3人の前に降り立った。

『みんな、ありがとう』

『君たちの希望の光が、俺達をここへ呼んだんだ』

礼を述べるエックスに対し、そう応えるギンガ。

『あんまり役に立てなくて、悪かったな』

「そんな……ゼロ、あなたがいたからエックスは助かったし、ザイゴークをみんなと一緒に足止めしてくれたから、碧い石は無事だったんです。時雨達とも、一緒に戦ってくれた」

謝罪をするゼロに対し、夜空はゼロがいたから助かったことは沢山あると感謝の言葉を述べる。

『そうか。 凄いい奴等だぜ、お前等は』

ゼロはエックスの胸部を軽く叩く。

『しかし、この地球にウルトラマンが来ていたのも、驚いたぜ』

ゼロは視線をウルトラマンに移し、ウルトラの父やゾフィー、メビウスもそれに反応するかのよう仕草を見せていた。

『まっ、そろそろ俺達は行くよ。 いつかまた会おうぜ』

ゼロがエックスの方に向き直ってそう言うのと、彼とメビウス、ゾフィー、ウルトラの父、ギンガ、ビクトリーは空へと飛び立って去って行くのだった。

その場に残ったティガとネクサスは光に包まれて人間の姿へと戻り、ヴェールヌイが手に持っていたエポルトラスターは光となって消え去ってしまう。

「協力、感謝する、ネクサス……」

夜空もまた、エックスとユナイトを解除して地上へと降り立つのだった。

「アムイ!!」

「父さん……」

変身を解いたアムイの元に、ヒカルが駆けつけ、2人はお互いに抱きしめ合うのだった。

「家族つて、いいもんだな」

そんな2人の様子を見て、笑みを浮かべる夜空。

その時、夜空はユナイトを解除したにも関わらず、未だに実体化して存在し続けるエックスの姿に気付く。

夜空はエクステバイザーを取り出すと、エクステバイザーはジオデバイザーに戻っており、そんな夜空の元に時雨達が駆け寄る。

「エックス、これは……」

『夜空、しばらくみんなとはさよならだ』

そんなエックスの言葉に、夜空は「どういうことだ?」と尋ねる。

『君たちの希望の力で、私は本来の肉体を取り戻すことができた』

「それじゃ……」

『私は、自分の任務に戻らなければならない』

すると、ウルトラマンがエックスの肩に手を置き、「先に行っているぞ」とでも言うような仕草を見せると、ウルトラマンは空に向かって飛び立つのだった。

「エックス、任務つてなんのこと？」

『時雨、我々の任務は宇宙のバランスを保つことだ。どこかでバランスが乱れればこの地球にも影響が現れる』

時雨の質問にエックスはそう答える。

「エックス……」

そんなエックスを寂しそうな視線で見つめる夜空。

『傍にいらなくても、姿は見えなくても、私達はユナイトし続けている。そのことだけは……』

「忘れないよ、絶対に!! エックスも忘れないでくれ、俺や時雨、ウチの鎮守府の連中は……みんな家族だつてこと。その中にはエックス、君も含まれてる。好きな時に、いつでも帰って来いよ!」

『ああ、再びこの地球に危機が訪れる時、私は必ず帰つて来る。約束しよう』

夜空の言葉にエックスは頷き、エックスと別れると分かった文月は思わず泣き出ししてしまう。

「うわあくん!! 寂しいよ、エックスう……」

「泣くな泣くな! ありがと、エックス!!」

「一緒に戦えて、まあ良かったわよ」

泣き出す文月を臯月が宥め、ツンデレっぽいことを言う満潮。

「エックス、君と共に戦い友情を分かち合えたことは、俺達の誇りだ。ありがとう!!」

『こちらこそ、ありがとう。君たちの家族になれたことを、私は誇りに思う』

「必ずまた会おう、エックス!!」

最後に、夜空とエックスがそんな会話をすると、エックスは空に飛び立とうとするのだが……ピタッと止まる。

『あつ、そうだ』

「んっ? どうしたのエックス?」

それを疑問に思い、時雨が首を傾げてどうしたのかとエックスに尋ねる。

『夜空、時雨、君たちの式には呼んでくれよ。あと、2人に子供が出来たら顔を拝みに

来るぞ!』

「ぶっ!!」

最後の最後に爆弾を残してエックスはそのまま空へと飛び立ち、そのせいで顔を真っ赤にする夜空と時雨。

「おいコラ!! なに最後にとんでもないこと言って……!!」
「もう、エックスつてば……」

そんな2人をニヤニヤとした視線で見つめる時雨と夜空以外のみんな。

そんな一同に「お前等ニヤニヤすんな!!」と顔を赤くしながら夜空は怒るのだった。

*

「僕、父さんを守れたかな」

また、アムイはヒカルを……家族を守ることができたかなと尋ね、そんなアムイの頭をわしゃわしゃと撫でてヒカルは力強く頷く。

「ああ、ありがとう、助けてくれて」

「さあ、夜が明けたぞ。今日のスケジュールは？」

そこへ黒崎が秘書に今日のスケジュールを尋ね、秘書は南太平洋ゲゾル島で呪いのダイヤモンドを発掘することだと聞かされ、黒崎は「実にロマンがあるな」とうんうんと頷く。

「ヒカルさんもご一緒しませんか？」

「アンタ全然懲りないな」

そんな黒崎に、当然呆れた顔を浮かべるヒカルとアムイ。

「常に前向きな人間だと言ってください！ それで、どうですか？ ご一緒します？」

「いえ、いい加減家に帰らないと、妻に怒られそうなので」

「そうですか、では失敬」

そう言い残すと、黒崎は秘書と共にその場から立ち去って行くのだった。

*

それから数日後、どこか一同はしんみりした雰囲気です。会議室の作戦デスクの上でまたお菓子を広げてみんなで食べており、それを見た菊月は一瞬注意しようかと思つたが……。

流星に今回ばかりは良いかと思ひ、彼女は何も言わず、机の上にあるお菓子を手に取つて口の中に頬張る。

「なんかエックスいないと寂しいね」

夜空の隣でお菓子を食べた時雨はそう小さく呟いた瞬間……。

『そのスイーツに含まれる糖分は全体の54%。栄養のバランスを考えた食事が、美容の秘訣だ』

その時、机の上に置いてあった夜空のジオバイザーが変化してエクステバイザーになると、画面にエックスの姿が映し出される。

「エックス!？」

「宇宙の彼方に行ったんじゃないのか!？」

『ケンタウルス星近辺で『デザストロ』という怪獣がワームホールに逃げ込み、地球に向かっていている!』

どうやら、地球に向かって来た怪獣「デザストロ」のことを伝える為に、エックスはこんなに早く地球に戻って来たらしい。

「だから戻って戻って来るの早すぎだろ!! 司令官は確かにいつでも帰って来いって言うだけ!!」

『相変わらずツツコミが冴えてるなあ、菊月』

「そこを褒められても嬉しくない!!」

その時、鎮守府の警報が鳴り響き、早速エクステバイザーで何が起こったのかを夜空

が確認すると、巨大なエネルギー体が地球に迫って来ていることが判明した。

地球に到達する時間は約13分後で、この付近に出現する可能性が高かった。

「地球の危機って割とすぐ来るね」

「意外と仲良くできる奴かもよ。行くぞみんな、艦隊X i o、出動!!」

『了解!!!』

夜空はみんなに号令をかけ、迎撃準備をするように指示。

「俺達も行くぞ、エックス!!」

『おう!! 行くぞ夜空!!』

『ユナイトだ!!!』

ED 「U n i t e 君とつながるために」

神田明神という名前の神社にて。

そこでは階段の隅っこの方に腰かけ、カレーパンを頬張る青年の姿があつた。

「おっ兄ちゃん♪」

そんな青年の元に、茶髪でサイドテールが特徴で、太陽のような笑顔を浮かべる一人の少女……。「高坂 穂乃果」が後ろから青年……。「高坂 紅葉」に抱き

ついて来たのだ。

「うおっ!? オイ!! 危ないだろ穂乃果!! 危うくカレーパン零すところだったろ!」

「あつ、ごめんね……」

紅葉に怒られ、しょんぼりとした顔を浮かべる穂乃果。

「そこまでしょんぼりした顔しなくても……」

紅葉はそんな穂乃果の頭をわしやわしやと撫で、それをすることで「えへへ」と笑顔になつて機嫌を直す穂乃果。

しかし……そんな時……

空中に突如として魔法陣のようなものが出現し、そこから銀色の機械竜とも言える姿をしたロボット……「奇機械怪竜 ギャラクトロン」が出現したのだ。

「つ……あれは……」

「ギャラクトロン……!!」

ギャラクトロンの姿を見て、怯えた様子を見せる穂乃果。

そんな穂乃果を安心させるかのように、彼女の肩に手を置く紅葉。

「大丈夫だ。行つてくる」

「お兄ちゃん……うん」

紅葉はそう言うと、彼はギャラクトロンに向かって駆け出し、「オーブリング」という

アイテムを取り出す。

「ウルトラマンさん!!」

『ウルトラマン!』

そこからさらに一枚のカードを取り出してオーブリングにリードして読み込ませる。

「ティガさん!!」

『ウルトラマンティガ!』

続けてもう一枚のカードをオーブリングに読み込ませる紅葉。

「光の力、お借りします!!」

『フュージョンアツプ!! ウルトラマンオーブ! スペシウムゼペリオン!!』

オーブリングを掲げた紅葉は光に包まれ、ウルトラマンとティガの力を融合させた光の巨人……。「ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン」へと変身し、ギヤラクトロンの前に降り立つのだった。

『俺の名はオーブ!! 闇を照らして、悪を討つ!!』

U l t r a m a n X w i l l r e t u r n
(ウルトラマンエックスは帰ってくる)

*